

山 梨 県 大 月 市
岩殿山総合学術調査報告書

岩殿山の総合研究

—県史跡岩殿城跡、旧円通寺跡及び岩殿山の自然—

1998

山梨県大月市教育委員会
岩殿山総合学術調査会

岩殿山の総合研究

—県史跡岩殿城跡、旧円通寺跡及び岩殿山の自然—

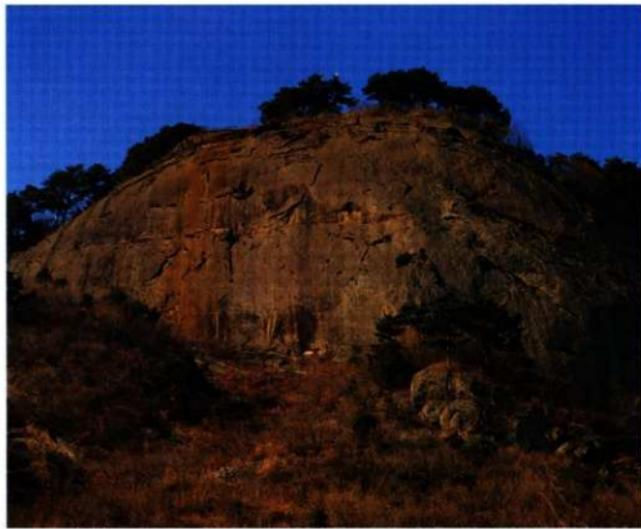
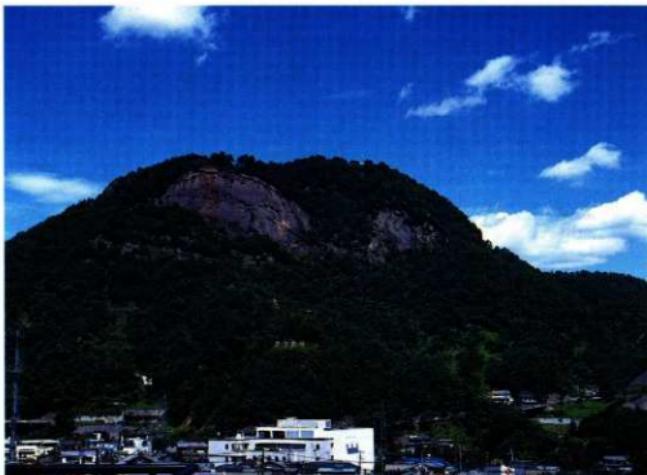
1998

山梨県大月市教育委員会
岩殿山総合学術調査会



浅野文庫所蔵『諸国古城之図』「甲斐 郡内」
(広島市立中央図書館浅野文庫所蔵)

口絵 2



岩綾山全景

図絵 3



岩殿山全景（中央上の地域）

口絵 4

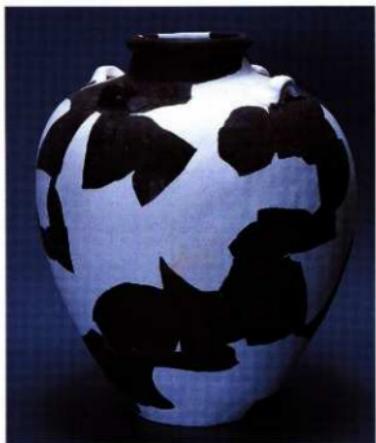


旧円通寺三重塔 推定復原図



旧円通寺大般若經奥書

図6



岩殿城跡出土遺物

刊 行 の 辞

大月市長 西 室 覚

岩殿山についての「総合学術調査」の結果が、このようななかたちで発刊されるようになったことは、誠に大きなよろこびであります。

三年間にわたって研究調査にあたられた委員各位、および、この研究調査にご協力いただいた多くの皆様に、心から感謝と敬意を申し上げます。

岩殿山は、私どもの大月市においては、国指定の名勝「猿橋」や重要文化財「星野家住宅」などとともに、大切な文化財の一つであります。

この山は、麓にあった修験道の円通寺や中世の小山田氏および武田氏の山城などに因連して、古くから歴史に登場していた山であります。また、地理的には、武藏や相模と甲斐とを結ぶ交通路に沿い、同時に富士山あるいは御殿場、東海地方への道と秩父方面への分岐点にあたる交通の要衝であって、その景観は、古来よりこの近くを行き交う人々から注目されてきました。特にここ数年は、市内にある他の山々とともに、都市圏からの、自然を愛するたくさんの日帰り登山客を迎えていたりであります。

今回、山梨県からの岩殿山の史跡指定を契機に、歴史や自然を総合しての学術調査が計画され、このような報告書が出来ましたことは、学术的にはもちろん、私ども大月市民にとりましても、喜ばしい限りであります。

私は、先人が残してくれた歴史や文化、美しい自然への一層の理解と愛着というものは、本市の日指す「自然と共生する環境調和都市」の創造に、なくてはならぬ、とても大事なものであると考えております。

今後、国際化と情報化が進めば進むほど、こうしたことの重要性はますます高まるものと思っています。自分がよって立つ文化の理解なしには、国際化、情報化の進んだ社会において、根無し草となって自己を見失う危険があります。また、21世紀の重要な課題として、異なる文化の相互理解や寛容があげられていますが、自分たちの歴史や文化、また身近な自然への理解と愛着なしには、他の異なる文化への理解も寛容も期待できないと思われます。

今回の調査研究には、大月市や山梨県の地域文化や自然への理解を深め、文化面での地域づくりを前進させるものとして、大きな意義を感じています。この報告書が、今後各方面で広く活用されることを心から願い、発刊に寄せることばとさせていただきます。

平成10年3月

はじめに

岩殿山総合学術調査会
会長 清雲俊元

平成7年10月に岩殿山総合学術調査会が発足し、各分野の先生方の調査、研究が精力的に進められ、このたび、その成果を報告書にまとめることができた。

これまで岩殿山、岩殿城といえば、戦国期に郡内を領した小山田氏の本城としての見方が通説とされてきたが、この城の実体は山城であり発掘調査も行ったが遺構は狹小な山上のことと、城の築城の時期や築城者についても詳らかでない。一般にいわれてきた小山田氏の本城としての位置づけも具体的史料が皆無で伝承に終わる。むしろ天正9年(1581)3月20日の武田家印判状(大野家文書)に「岩殿令在城」とあり、武田氏が國中の諸士に当城の在番ならびに普請役にあたらせている史料から武田氏の支配下にあった城郭で、東方の相模、武藏に対しての国境防備の城ではなかったか、今回の総合調査によってその性格付けができるよう思う。

また、岩殿山の歴史を概観する中で、最も重要なのは円通寺をめぐる宗教的聖地としての岩殿山である。永正17年(1520)の棟札によれば、大同元年(806)の建立であり、全盛期には三重塔、七社権現、常楽院、大坊、觀音堂、不動堂などの伽藍が配された古刹であった。現在真蔵院に遺されている数々の文化財から往古が偲ばれ、一つには平安末期から室町期にかけての熊野信仰の郡内における拠点であり、もう一つは天台系修験、本山派の郡内における中心的寺院であったことである。近世に入り本末制度が確立する中で、常楽院、大坊が七社権現の別当となり、また郡内地方の山伏支配頭となつた。しかしここから往古から続いてきた熊野信仰が衰退し、翌護院を中心とする本末関係を結び、岩殿の信仰形態も大きく変わっていった。

更に江戸末期から明治初頭にかけて廢仏毀釈運動が起り、明治元年に出された神仏分離令と明治5年の修驗廃止の布告によって岩殿山の宗教形態は、当時すでに真言宗であった真蔵院を除いて全て消滅したのである。

こうした岩殿山の歴史を辿るだけでも容易ではないが、そうした宗教的聖地が、戦国期に武田氏、小山田氏の城郭として、どのようにかかわったのか、性格付けに各分野の先生方が大変に苦慮された。

最後に、この報告書作成にいたるまで、ご指導、ご協力を賜わった関係機関各位の方々、並びにお忙しい中をご寄稿いただきました先生方に厚く謝意を表したい。

例　　言

- 1、本書は、山梨県大月市駒岡町に所在する県史跡岩殿城跡及び旧円通寺並びに岩殿山の自然に関する総合学術調査報告書である。
- 2、学術調査は、平成7年（1995）度から平成9年度の3ヶ年をかけて実施した。調査は、大月市教育委員会から委託をうけた「岩殿山総合学術調査会（会長・清雲俊元）」が行い、考古学、城郭史、文献史学、民俗学、建築史、都市史、仏教彌刻史、地球科学、植物学、動物学等の各分野から検討を重ねた。
- 3、本書は、第1編を序編、第2編を岩殿城の研究編、第3編を旧円通寺の研究編、第4編を岩殿山の地形・地質、植物分布、動物生態等の自然編、第5編を総括、および別編資料編の6部構成とし、各調査員が執筆した。文責を明らかにするために、執筆者名を明記した。なお、用語等について、極力統一につとめたが、執筆者が多数に及ぶために、一部調整されない点もある。また、出土遺物中、近世および近・現代陶磁器に関しては森本伊知郎氏に鑑定及び執筆を依頼した。
- 4、総合学術調査にあたっては、次の調査及び業務を以下の機関に委託した。
 - 岩殿山全体測量　（株）シン技術コンサル
 - 年代測定　（財）九州環境管理協会
 - 炭化穀実同定　（株）パレオ・ラボ
- 5、本書の編集は、主として宮澤富美恵氏が担当し、出土遺構及び遺物の実測作業等については大月市教育委員会と帝京大学山梨文化財研究所で行った。
- 6、本総合学術調査に関わった各種資料類、図面等は、大月市教育委員会で保管している。
- 7、本総合学術調査の実施にあたっては、大月市教育委員会をはじめ、多くの方々及び関係機関のご指導、ご協力を賜った。ここにご芳名を記し、謝意を表する（順不同・敬称略）。
 - 小俣晴信　笠井　昇　口野道男　清水芳之　内藤好文　中村和夫　藤澤良祐　北条明直　北条にぎみ
 - 森本伊知郎
 - 山梨県教育委員会　山梨県埋蔵文化財センター　全福寺　帝京大学山梨文化財研究所
 - （発掘調査参加者）
 - （東京大学学生）
 - 秋葉多聞　筒田朋孝　深町友宏　松尾聰子
 - （都留文科大学学生）
 - 吉柳　恒　奥田文乃　落合豪史　梶谷泰子　神林啓介　上屋　未　内藤千愛　船場昌子　山崎泰徳
（一般）
 - 加藤良三　宮野　昭　佐藤友紀　幡野力也　藤本　聰　井上久子　奥野久代　小田桐秀子　川井しげみ
 - 権藤みどり　佐藤洋美　杉本洋子　須藤由美子　藤本しおり　丸山尚子

目 次

図 絵

刊行の辞

はじめに

例言

第1編 序編

第1章 調査に至る経緯	3
第2章 調査経過	4

第2編 岩殿城の研究

第1章 岩殿城の研究略史	9
第1節 小山田氏要害説	9
第2節 武田氏築城・經營説の提起	10
第3節 岩殿城研究の深化	11
第2章 岩殿城の歴史環境	13
第3章 岩殿城の純張	15
第4章 岩殿城の考古学調査	19
第1節 試掘調査の日程と方法	19
第2節 出上遺物	26
第3節 試掘調査から得られた成果と課題	31
第4節 その他の調査	35
第5章 岩殿山麓の集落空間構成に関する研究	41
第1節 集落の分布と特徴	41
第2節 集落空間構成の復原的考察	44
第3節 試掘調査の成果	77
第6章 岩殿城の伝説・伝承	81
第7章 岩殿城周辺の城郭	83
第8章 岩殿城研究の考察	93

第3編 旧円通寺の研究

第1章 旧円通寺の立地と歴史環境	97
第2章 旧円通寺の歴史	100
第3章 旧円通寺研究略史	109
第4章 旧円通寺の考古学調査	113
第1節 三重塔跡	113
第2節 新宮洞窟	119
第5章 旧円通寺の諸建築	124
第6章 旧円通寺の彫刻	141

第7章 新宮洞穴	145
第8章 旧円通寺藏大般若經	151
第1節 経典の概要	151
第2節 円通寺への寄進とその後の伝来	151
第3節 智感版大般若經について	153
第4節 崇永版大般若經について	154
第9章 旧円通寺研究の考察	157
 第4編 岩殿山の自然	
第1章 岩殿山の地形・地質	161
第1節 岩殿山の地形・地質的位置	161
第2節 岩殿山の地形・地質	168
第3節 岩殿山周辺の自然遺産と自然災害	172
第2章 岩殿山の植物	187
第1節 植物相の概要	187
第2節 植物分布の構成要因	189
第3節 登山道に沿って見られる植物	198
第4節 植生	204
第5節 注目すべき植物	206
第6節 植物目録	212
第3章 岩殿山の動物	241
第1節 獣類	241
第2節 鳥類	246
第3節 両生類	256
第4節 は虫類	257
第5節 見虫類	258
第5編 岩殿山研究の総括	263
 別編 資料編	
第1章 岩殿山にかかる文献資料	320(3)
第1節 近世・近代の地誌に見える七社権現・岩殿城	320(3)
第2節 紀行・日記に見る岩殿山	316(7)
第3節 「甲陽軍鑑」など文献資料の記す岩殿城	314(9)
第4節 文書資料に見る山内・山麓の宗教施設	311(12)
第5節 文献に見る「岩殿市」	307(16)
第2章 旧円通寺藏大般若經刊記・墨書き一覧	305(18)

挿 図 目 次

第1図	岩殿城柵張図（山頂地点）	16
第2図	各施設番号図	17
第3図	山頂部試掘調査位置図	20
第4図	第1調査区実測図	21
第5図	第2調査区実測図	22
第6図	第3・4調査区実測図・遺物分布図	24
第7図	岩殿城跡出土遺物（1）	28
第8図	岩殿城跡出土遺物（2）	29
第9図	岩殿城跡出土遺物（3）	30
第10図	池構築変遷模式図	32
第11図	第4調査区遺構変遷模式図	33
第12図	その他の発掘調査実施位置図	35
第13図	丸山完掘実測図	37
第14図	A地点完掘状況	38
第15図	山頂・防災無線中継局舎改良予定地実測図	39
第16図	岩殿山周辺の集落	42
第17図	岩殿山周辺の小字名と近世の幹線道路	42
第18図	往還の雁行部分	43
第19図	短冊形地割と前庭をもつ主屋配置	43
第20図	往還から奥に引いた宅地構成	43
第21図	往還からの引込み路と南側からのアプローチ	43
第22図	岩殿城の「大手先」と強瀬村	43
第23図	強瀬の地割形態	45
第24図	明治3年（1870）「甲州都留郡内領強瀬村上・下組惣絵図面」	47
第25図	強瀬の小字名	49
第26図	西山（丸山）にみられる「元奥衛門郭趾」の付箋	51
第27図	上組・下組の区分（集落部分）	51
第28図	明治4年（1871）「都留郡強瀬村上組下組原敷取調査絵図」	52
第29図	古屋敷の分布	52
第30図	新屋敷の分布	52
第31図	寛文期の屋敷形態（下組）	55
第32図	寛文期の敷地構成と地割形態	55
第33図	岩殿の地割形態	57
第34図	常楽院の石垣	57
第35図	主屋を南面させた農家型配置	57
第36図	明治初期の宅地分布（夏地地区）	57
第37図	「宅地」および「宅地畠成」の分布	59
第38図	「畠宅地」の分布	59

第 39 図	岩殿山境内絵図	61
第 40 図	寺領・境内(除地) 絵図	62
第 41 図	新居敷絵図	62
第 42 図	宝永 2 年(1705) 岩殿村絵図	63
第 43 図	延享 2 年(1745) 岩殿村絵図	64
第 44 図	年未詳岩殿村絵図	65
第 45 図	年未詳岩殿村絵図	66
第 46 図	武田氏印判状	69
第 47 図	御所平試掘調査位置図	77
第 48 図	御所平試掘トレンチ実測図 集石平面図・遺物分布図・土層断面図	78
第 49 図	御所周辺地形復元図	79
第 50 図	御所平出土鉄製品	80
第 51 図	千古の歴史を秘めて立つ鬼の杖	81
第 52 図	岩殿城周辺の城郭	84
第 53 図	駒宮砦	85
第 54 図	駒橋御前山	86
第 55 図	猿橋の城山	86
第 56 図	斧澤御前山	86
第 57 図	綱之上御前山	86
第 58 図	牧野砦	87
第 59 図	四方津御前山	87
第 60 図	柄穴御前	88
第 61 図	鶴島御前山	88
第 62 図	長峰砦	89
第 63 図	大倉砦	89
第 64 図	花咲鎌撞堂	90
第 65 図	旧円通寺跡遠景	97
第 66 図	周辺遺跡位置図	97
第 67 図	岩殿山古絵図	113
第 68 図	試掘調査地及び塔跡推定地	113
第 69 図	南側トレンチ	114
第 70 図	東側トレンチ	114
第 71 図	トレンチ平面図及び土層断面図	115
第 72 図	旧円通寺二重塔跡出土銭貨	118
第 73 図	旧円通寺三重塔跡出土金屬製品等	119
第 74 図	新宮洞窟調査位置図及び洞窟実測図	120
第 75 図	新宮洞窟調査区平面図	121
第 76 図	洞窟形成過程模式図	122
第 77 図	『甲斐名所図会』中、「岩殿山 大月橋 桂川」の図	125
第 78 図	岩殿山境内絵図	126

第 79 図	明治初期頃と推定される絵図残欠	127
第 80 図	宝永 2 年 (1705) 絵図	128
第 81 図	宝永 2 年絵図中、三重塔、観音堂部分	128
第 82 図	延享 2 年 (1745) 絵図	128
第 83 図	延享 2 年絵図中、三重塔、観音堂部分	128
第 84 図	岩殿山境内絵図中、三重塔、観音堂部分	128
第 85 図	岩殿山境内絵図中、七社権現部分	130
第 86 図	延享 2 年絵図中、七社権現部分	130
第 87 図	七社権現洞窟内現況	130
第 88 図	延享 2 年絵図中、新宮部分	131
第 89 図	新宮外觀現況	131
第 90 図	新宮洞窟内現況	132
第 91 図	四天柱全景	133
第 92 図	四天柱頭部	134
第 93 図	四天柱底部	134
第 94 図	礎石	134
第 95 図	四天柱の四面の側面図	135
第 96 図	四天柱のアイソメ図	135
第 97 図	旧円通寺三重塔外観	138
第 98 図	旧円通寺三重塔二層組物	139
第 99 図	旧円通寺三重塔初層堂内	139
第 100 図	日本列島の鳥弧会合	161
第 101 図	古い日本列島に重なる新しい日本列島とプレート	162
第 102 図	日本列島中央部におけるプレートと地震・火山概念図	162
第 103 図	山梨県周辺の地質構造図	163
第 104 図	日本列島中央部と富士山	163
第 105 図	山梨県地形区分図	164
第 106 図	山梨県リニアメント	165
第 107 図	岩殿山	166
第 108 図	山梨県地質図	167
第 109 図	岩殿山疊岩部の急崖	168
第 110 図	岩殿山周辺傾斜分布図	169
第 111 図	岩殿山周辺水系	169
第 112 図	岩殿山地形区分図	170
第 113 図	岩殿山からの展望（景観現況）	171
第 114 図	九鬼山から岩殿山周辺を望む（景観現況）	171
第 115 図	岩殿山東方景観現況	172
第 116 図	岩殿山付近地質図	173
第 117 図	中新世後期の大月付近の地質断面概念図	175
第 118 図	現在の大月付近の地質断面概念図	175

第 119 図	岩殿山礫岩、数百万年前の古桂川海峡堆積物	176
第 120 図	岩殿山礫岩中の共役断層	176
第 121 図	岩殿山礫岩中の地殻変動圧力による礁の変形、断裂礁	176
第 122 図	岩殿山直下、石英安山岩と礫岩の転石	176
第 123 図	1000 万年前の大月付近古地理	177
第 124 図	500 万年前の大月付近古地理	177
第 125 図	50 万年前の大月付近古地理	177
第 126 図	高月橋（岩殿山直下）西の断層鏡肌と条線	178
第 127 図	高月橋東の断層鏡肌と条線	178
第 128 図	不整合	178
第 129 図	下部・御坂層群右英安山岩（約 1 千万年前）、上部・富士火山噴出溶岩流（約 8 千年前）	178
第 130 図	桂川河岸不整合露頭位置図	179
第 131 図	桂川河岸の不整合露頭	179
第 132 図	リニアトンネル産出化石群周辺地質図	181
第 133 図	岩殿山地滑り深層杭全景	184
第 134 図	地すべり地平面図	185
第 135 図	地すべり地断面図	185
第 136 図	岩殿山南面	187
第 137 図	市の花 山百合	187
第 138 図	東から見た岩殿山	188
第 139 図	岩殿山横生断面図（神宮橋—高月橋）	189
第 140 図	日本の植物帯	190
第 141 図	山梨県の植物帯	190
第 142 図	中部日本垂直分布模式図	190
第 143 図	アラカシ	191
第 144 図	大月市内のアラカシ分布	191
第 145 図	イスブナ	192
第 146 図	ふれあい館前のハルニレ	192
第 147 図	フジザクラ	192
第 148 図	カナウツギ	193
第 149 図	丸山周辺の植栽のサクランボ	194
第 150 図	セイヨウタンポポ	195
第 151 図	ヒメムカシヨモギ	195
第 152 図	ハルジヨン	195
第 153 図	オオブタクサ	196
第 154 図	メマツヨイグサ	196
第 155 図	シロノセンダンダングサ	197
第 156 図	チコグサモドキ	197
第 157 図	ヨウシュヤマゴボウ	197
第 158 図	シロツメクサ	197

第159図	松くい虫被害木伐採現状（丸山付近）	197
第160図	ホタルブクロ	198
第161図	ミズキ	199
第162図	ノアザミ	199
第163図	クサギ	199
第164図	ガマズミ	199
第165図	ジュウニヒトエ	200
第166図	ノカンゾウ	201
第167図	クララ	201
第168図	オカトラノオ	201
第169図	リュウノウギク	202
第170図	ハンショウズル	202
第171図	ツルニガクサ	202
第172図	ミニガタテンナンショウ	202
第173図	ツノハシバミ	203
第174図	ヤブムラサキ	203
第175図	オケラ	203
第176図	アイズシモツケ	204
第177図	タマアジサイ	204
第178図	ウツギ	204
第179図	シモバシラ	204
第180図	代表する樹木 1.アカマツ・次林 2.アカマツ・落葉広葉樹林 3.コナラ林 4.サクラ植栽林	205
第181図	岩殿山現存植生図	206
第182図	潜在自然植生	207
第183図	ナンテン	207
第184図	ザイフリボク	207
第185図	ミヤマシキミ	208
第186図	ジャケツイバラ	208
第187図	マンサク	208
第188図	ツメレンゲ	209
第189図	カタクリ	209
第190図	シソバタツナミ	209
第191図	ヒメウラジロ	210
第192図	ミヤマウラジロ	210
第193図	ムギラン	210
第194図	岩殿山植物分布調査区域	212
第195図	ツキノワグマ	241
第196図	ニホンイノシシ	242
第197図	キツネ（幼獣）	242

第198図	キツネとイヌの足跡比較	242
第199図	ホンドタヌキ	242
第200図	タヌキの足跡	242
第201図	ニホンアナグマ	243
第202図	ホンドテン	243
第203図	ハクビシン	244
第204図	ハクビシンの足跡	244
第205図	ホンドイタチ	244
第206図	ニッコウムササビ	244
第207図	ホンドリス	245
第208図	ホンシュウヒミズ	245
第209図	ハクネズミ	246
第210図	アカネズミの仔	246
第211図	コサギ	246
第212図	コガモ	247
第213図	オオタカ	247
第214図	チョウゲンボウ	248
第215図	コジュケイ	248
第216図	タシギ	248
第217図	キジバト	249
第218図	カッコウ	249
第219図	ヨタカ	249
第220図	コゲラ	250
第221図	ツバメ	250
第222図	セグロセキレイ	250
第223図	モズ	251
第224図	ショウビタキ	251
第225図	トラツグミ	252
第226図	ウグイス	252
第227図	キビタキ	253
第228図	シジュウカラ	253
第229図	メジロ	254
第230図	ホオジロ	254
第231図	カシラダカ	254
第232図	カワラヒワ	254
第233図	シメ	255
第234図	カケス	256
第235図	アズマヒキガエル	256
第236図	ヤマアカガエル	256
第237図	カナヘビ	257

第238図	シマヘビ	257
第239図	ヤマカガシ	258
第240図	アサギマダラ	258
第241図	ウラギンヒヨウモン	258
第242図	オオクワガタ	259

表 目 次

第1表	第2調査区土層説明	23
第2表	岩殿城跡出土近世、近・現代陶磁器	31
第3表	柱穴計測値	40
第4表	寛文期における上組・下組の土地所有状況	53
第5表	御所平土層説明	79
第6表	御所平出土近世、近・現代陶磁器	80
第7表	周辺遺跡名称等一覧	98
第8表	旧円通寺三重塔跡出土近世、近・現代陶磁器	117
第9表	新宮洞窟出土近世、近・現代陶磁器	123
第10表	枝割による柱間寸法	136
第11表	旧円通寺三重塔の推定枝割による柱間寸法	137
第12表	旧円通寺大般若經と崇永版大般若經の各巻開版者比較	155
第13表	岩殿山周辺層序表	174
第14表	岩殿山松くい虫被害年度別状況表	198
第15表	松くい虫被害木午輪調査表	198
第16表	岩殿山植物目録集計表	214

図版目次

図版1	第1調査区全景（調査前） 第1調査区溝確認状況 第1調査区完掘状況
図版2	第2調査区全景 第2調査区池内部現況 第2調査区池北壁断面 第3調査区全景
図版3	第3調査区トレチ設定状況 第4調査区トレチ設定状況 第4調査区発掘調査風景
図版4	第4調査区北東コーナーテラス確認状況 第4調査区堅穴状造構確認状況 第4調査区堅穴状造構断面
図版5	第4調査区完掘状況 御所平調査区全景 御所平縫出上状況 御所平遺物出土状況
図版6	新宮洞窟調査区全景 新宮洞窟作業風景 新宮洞窟調査区完掘状況
図版7	丸山完掘状況 山頂・防災無線中継局舍改良予定地（調査前） 山頂・防災無線中継局舍改良予定地柱穴完掘状況
図版8	出土した炭化種実
図版9	岩殿城跡出土近世、近・現代陶磁器（外面） 岩殿城跡出土近世、近・現代陶磁器（内面）

- 図版 10 御所平出土近世、近・現代陶磁器（外面） 御所平出土近世、近・現代陶磁器（内面）
- 図版 11 旧円通寺三重塔跡出土近世、近・現代陶磁器（外面）
- 旧円通寺三重塔跡出土近世、近・現代陶磁器（内面）
- 図版 12 新宮洞窟出土近世、近・現代陶磁器（外面）
- 新宮洞窟出土近世、近・現代陶磁器（内面）
- 図版 13 木造十一面觀音像（I） 木造十一面觀音像（II） 木造七社権現立像
- 図版 14 1-1 月日貝化石 1-2 月日貝化石 1-3 月日貝化石 1-5 月日貝化石
1-6 月日貝化石 2-1 ピノスガイ化石 2-2 ピノスガイ化石
2-3 ピノスガイ化石
- 図版 15 2-4 ピノスガイ化石 2-5 ピノスガイ化石 2-6 ピノスガイ化石
2-7 ピノスガイ化石 2-8 ピノスガイ化石 2-9 ピノスガイ化石
3-1 ムカシカシパンウニ化石 3-2 ムカシカシパンウニ化石
- 図版 16 3-3 ムカシカシパンウニ化石 3-4 ムカシカシパンウニ化石
3-5 ムカシカシパンウニ化石 4-1 マテガイ化石 4-2 マテガイ化石
4-3 マテガイ化石 4-4 マテガイ化石 5 バイ化石
- 図版 17 6 チヂワバイ化石 7 ムラサキイガイ化石 8 カキ化石 9 オウムガイ化石
10 タケノコガイ化石 11 サザエ化石 12 アワビ化石
13-1 ツメタガイ化石 13-2 ツメタガイ化石 13-3 ツメタガイ化石
14 ブナ化石 15 生痕化石

第 1 編

第1編　序　編

第1章　調査に至る経緯

岩殿山は大月駅の北東、桂川を隔てた対岸に位置し、標高637mと低い山であるが、山の中腹から山頂部にかけて存在する「鏡岩」は岩肌を露出し厳然とそびえ立つ威容がひときわ目立ち、人々に広く知られている山である。また、大月市民の憩いの場・大月のシンボルとして愛され、市内はもとより県内外から多くの登山客に親しまれている山である。

岩殿城跡としては、「甲陽軍鑑」の「駿河に久能、甲州郡内にゆわ殿、信濃にあがつま三处の名城を信玄公御覽じ立られ候は、御庵城有るべきとの事なり」という一節から、関東3名城のひとつに数えられ、古くから天下の名城と称せられていることでも有名である。従って多くの市民は「城」というイメージから近世の天守閣を有する城を連想し、郡内領主であった小山田氏の居城であったと信じている。

しかし、「山梨県の中世城館跡」(昭和61年：山梨県教育委員会)に「大月市3-5岩殿城」として掲載されたところによれば、「甲陽軍鑑」や「甲斐国志」には「小山田氏の要害」と記述されているが、「郭の規模から、必ずしも十分ではない。この城は桂川流域の山頂部に多くある烽火台の中継点であったと考えられる。」と報告されている。

また、岩殿山麓にあったとされる円通寺についても諸説があるが、岩殿山そのものが古代から山岳修験道場として利用されており、城としての歴史以前に岩殿山とは切り離すことのできない歴史があることは、あまり認識されていない状況である。

更に、明治以降、郡内の名山であり観光資源として利用されるようになったことから、利用客のための環境整備が行われており、昔のままの姿がどの程度保たれているのか、実態は不明瞭である。

何れにしろ、岩殿山を取り巻く歴史的研究については、古文書等を基に論拠とする事柄の検証がなされないまま論ぜられている実態であるため、発掘調査等を含めた客観的な調査を待たなければその史実等は明らかにできないところである。

昭和60年山梨県は、山梨の歴史文化を紹介するために、大月市が山梨の玄関口としての意義を持ち、国や県指定の文化財の集中している地域であることから、「やまなしの歴史文化公園 猿橋・岩殿(猿橋から葛野・強瀬・岩殿山西側の築坂一帯)」の名で歴史文化公園として指定した。

その後、観光開発などによる景観の破壊はいくとめられることになったが、中央自動車道計画による岩殿トンネルの開通、その影響と思われる南側山腹の崩壊、大月市が実施した岩殿中段開発によって、山裾の景観は大きく変貌してきている。

このような状況の下、本市では、平成7年3月「大月市第5次総合計画」を策定し、この計画「第4章 創造的で心豊かな人と文化のまちづくり」の中に、市民共有の貴重な財産である文化財を次世代に引き継いでいくため、「文化遺産の保全と活用を図る」施策の一つとして「岩殿山全山の総合学術調査の実施」を位置づけるとともに平成7年4月には、「大月市指定文化財(史跡)」に指定した。

また、同年6月には、「山梨県指定文化財(史跡)」に指定され、これを契機として岩殿山及びその周辺地域の古文書、古絵画、記録、建築、彫刻、伝承、発掘、地質、動物生息、植物分布等について総合的な学術調査を実施するため、平成7年10月に岩殿山総合学術調査会が発足し、本格的な調査を行ったものである。

(大月市教育委員会)

第2章 調査経過

岩殿山の学術調査は、すでに述べたように、平成7年度（1995年度）から平成9年度の3ヶ年計画で、考古学、文献史学、城郭史、民俗学、建築史、都市史、仏教彫刻史、地形・地質、植物、動物等の諸分野から総合的に実施し、多くの成果を得ることができた。その内容は、以下章を追って報告するが、ここでは3年間にわたる調査の経過の大要を記したい。

岩殿山の総合学術調査は、きわめて多岐にわたっている。第一には、岩殿山山頂付近に築城された岩殿城の調査研究である。これは、考古学による発掘調査を含めたさまざまな分野から城郭の規模、形態、築城及び廃城年代の把握、経営主体の究明、城下の検討、さらには岩殿城にまつわる伝説・伝承類などの調査を行い、岩殿城の歴史性を幅広く解明することに主眼をおいた。また、規模や構造の把握のために城郭全体の測量調査も実施した。

第二には、岩殿山に鎮座し、中部・関東を中心に全国に教縁を広げていた旧円通寺の調査である。この調査も、まず旧円通寺の規模や寺域の復元、開創年代などの基礎的な課題を追究しつつ、その宗教史的意義などについて解明することを目的とした。そのため、文献史学や考古学のほか、とくに建築史、仏教彫刻史などの諸分野からの調査研究も精力的に行い、さまざま角度から検討を重ねてきた。

第三には、地形・地質、植物の分布状況、動物生息状態などの岩殿山に関する自然環境の調査研究である。岩殿山をめぐる歴史性とあわせてこれら自然環境をも詳細に把握しながら、これから文化財保護行政や史跡等の保存・整備に資することを目的としたのである。

以上に述べた岩殿山に関する総合的な調査研究を実施するために、「岩殿山総合学術調査会（会長・清雲後元）」を組織し、各分野ごとの調査研究に万全を期することにした。調査会組織と各年次ごとの調査研究の概要については、以下のとおりである。

調査会組織

会長 清雲後元

副会長 谷口一夫

会員 出月洋文 保坂康夫 田中 収 依田正直 小林 岳 犀野三郎 長幡照雄
鈴木美良 湯沢正典 杉本正文 福田正人

なお、岩殿城跡及び旧円通寺関係の学術調査は多岐にわたるために、人文系の調査は調査会のなかに研究分野ごとに専門の調査員をおき、より精緻な調査を進めることになった。調査員は以下のとおりである。

清雲後元 谷口一夫 秋山 敬 出月洋文 井上 豊 伊藤裕久 数野雅彦 川瀬山熙
信藤祐仁 鈴木麻里子 鈴木美良 長幡照雄 枝原三雄 煙 大介 保坂康夫 堀内 亨
星野三郎 山下孝司 八巻與志夫 渡辺 晃 渡辺正男 渡辺洋子 杉本正文 福田正人

第1年次調査

1年次（平成7年度）は、調査会の発足と調査体制の整備充実、及び調査研究方法等の検討を行いながら、予備的な調査などが主であったが、以下の事業を具体的に実施した。

1、岩殿城跡に関する資料調査

（1）岩殿城跡の踏査

縄張図及び測量図作成のための予備踏査

強盗集落中村家所蔵の文書及び絵画史料の踏査、整理作業

旧円通寺別当の大坊所蔵の絵画史料調査

(2) 強瀬集落調査

岩殿城の城下集落の可能性をもつ強瀬集落の予備調査

2、旧円通寺関係の調査の実施

(1) 修験道関係文書調査

中村家文書調査

旧円通寺寺域内の確認調査

(2) 旧円通寺関係の研究史の整理作業

(3) 旧円通寺蔵仏像等の調査

3、岩殿山の自然環境調査

地形・地質、植物分布、動物生態調査は随時調査

主な調査日程は次のとおりである。

平成7年10月3日 委嘱状交付、役員選出

学術調査の経過報告及び事業説明

今後の調査計画及び日程

11月15日 旧円通寺関係調査

平成8年2月13日 同上及び強瀬中村家所蔵文書調査

3月6日 文化庁調査官視察

3月13日 岩殿山総合学術調査会開催

総合学術調査の概要報告

岩殿城研究史について（報告）

旧円通寺研究史について（報告）

第2年次調査

2年次（平成8年度）は、岩殿城跡に対する試掘調査を実施し、さらに当城の全容把握のための測量図の作成を行うなど具体的な調査活動に入った。古文書調査、仏像調査、絵画史料、古建築の調査など全般にわたる調査も行われた。また、岩殿山全山を対象に地質学、動物学、植物学等の立場から自然分野の調査活動も随時展開された。実施された調査内容は、以下のとおりである。

1、岩殿城跡に関する資料の調査

(1) 岩殿城現地の調査と全容把握のための測量図の作成

①測量図作成

航空測量及び現地詳細測量によってほぼ完成

②試掘調査の実施

岩殿城跡の中心部分にトレーンチを設定し、遺構の確認調査を行った。その結果、試掘対象面積は少なかったが、16世紀を中心とする陶磁器類がまとまって検出され、当城の築城時期を含めた年代的位置づけが明らかとなった。また、これらの出土遺物から当城が臨時性の強い城郭ではなく、恒常に存在した拠点的城郭であることが明確となった。

③強瀬中村家所蔵の絵図及び文書等の継続調査

絵図中に岩殿城にかかる遺構群の記載があり、分析を重ねた。

④旧円通寺別当の大坊等が所蔵している絵画史料の継続調査

(2) 強瀬及び岩殿集落の歴史復元作業

岩殿城の城下集落の可能性がある強瀬及び岩殿集落に関して絵図や検地帳等の分析、現地踏査などか

ら少なくとも江戸前期には遡ることが予測され、さらに継続的な調査を実施。

2、旧円通寺関係の調査の実施

(1) 修驗道関係文書調査

中村家及び旧円通寺塔頭寺院文書の調査

(2) 旧円通寺寺域内の確認調査

絵画史料等によって建築史的立場から寺域復元を検討。旧円通寺三重塔の建築部材として遺存している木材の科学分析によって、おおむね鎌倉期の所産と判明、建築年代の推定資料として重要な成果となった。

(3) 旧円通寺関係の研究史の整理作業

(4) 旧円通寺蔵仏像等の調査

現在、真蔵院境内の収蔵庫に安置されている十一面觀音等の調査を実施し、11世紀の在地の仏師作や12世紀頃の中央作などを確認。旧円通寺の創建年代や創建者をめぐって重要な問題を提起した。

3、岩殿山の自然環境調査

各分野ごとに随時調査を実施

主な調査日程は次のとおりである。

平成8年7月24日 北条家古文書及び絵画史料調査

真蔵院仏像調査

8月20日 強瀬中村家、岩殿区及び北条家所蔵の絵図類、古文書等の調査

9月10日 岩殿城、七社権現、強瀬集落等の現地調査及び試掘箇所の検討

10月2日 岩殿城跡試掘調査の検討

12月2日～平成9年1月23日 岩殿城跡試掘調査

平成9年2月20日 浅利中村家所蔵文書調査及び金山金山調査

3月25日 各調査分野からの中間報告

今後の調査日程の検討

第3次調査

3年次（平成9年度）は、岩殿城総合学術調査の最終年度であり、各分野別の調査活動の一層の充実を期するとともに、最終報告書作成にむけて調査成果のまとめを行った。また、考古学調査は、岩殿城跡の試掘調査をさらに継続するとともに、旧円通寺跡や城下集落推定地での試掘調査も新たに実施した。

主な調査日程は次のとおりである。

平成9年6月11日 岩殿城の測量図について最終的検討

6月25日 岩殿山総合学術調査会開催

(1) 各分野別調査の進捗状況について

(2) 今後の調査日程について

(3) 総合学術調査報告書の刊行について

9月10日 岩殿城跡及び旧円通寺関係遺跡の試掘箇所の検討

城下集落推定地の試掘調査について検討

9月17日 岩殿城跡及び旧円通寺関係遺跡並びに城下集落推定地の試掘調査

～11月14日

12月16日 岩殿山総合学術調査会開催

調査報告の検討

(荻原三雄)

第 2 編

第2編 岩殿城の研究

第1章 岩殿城の研究略史

第1節 小山田氏要害説

岩殿城については、これまでに確認された一次的な文献資料が極めて少ないとから、築城から廃城に至る経緯や経営主体者、あるいは担った機能など、不明な部分が多い。しかし、その立地と網張りから、戦国時代に郡内地方の城郭群の中でも要となる位置を占めていたことは、容易に推定される。

これを裏付けるように、武田氏滅亡後の甲斐国支配を小田原北条氏と争った徳川家康は、天正10年(1582)12月に甲斐・信濃の領有体制を固めるべく、次の命令を発したことが記録されている。

「島居彦右衛門元忠・平岩七之助親吉に甲斐国守護を命ぜられ、元忠をして岩殿城に甲斐国都留郡にあり居らしめ給ひ、郡内を同国同郡賜りて軍功を賞せらる」

(『朝野回聞草叢』天正10年12月11日条、東照宮御事蹟第168・169)

即ち、甲斐に島居彦右衛門元忠・平岩七之助親吉の2名を配置し、郡内領主を元忠に与えて岩殿城を中心とした支配体制を整備したのである。郡内領主と称せられた小山田氏が、都留の谷村を本拠にしていたにもかかわらず、岩殿城が郡内領支配の拠点として選定されたところに、本地域における岩殿城の歴史的位置を見てとることができるのである。

岩殿城については、永らく小山田氏の要害(詰城)とする説が一般的であった。その根拠となったのは、江戸時代後期の文化年間に編纂された地誌『甲斐国志』の次の記述である。

「小山田氏ノ北八此山上ニ上多ク在番セシナルベシ、軍鑑ニ駿河ニ久能、甲州郡内ニ岩殿、上州ニ吾妻、三所ノ名城トアリ、武田家ヨリモ番兵ヲ加ヘ置キシヤラン、(中略) 小山田ハ中津森又谷村ニアリ、此山ヲバ要害ニ構エタリ、行程凡三里」

『甲斐国志』が岩殿城を小山田氏の要害とし、武田氏からも番兵の派遣があったと断定した要因は明らかでないが、『甲斐国志』の編纂に先立ち、天明3年(1783)に刊行された萩原元克の『甲斐名勝志』でも岩殿城を小山田氏の城として捉えていることから、この頃には小山田氏要害説が定着していたものと推定される。

小山田氏要害説の成立に大きな影響を与えたものとして、『理慶尼記』の存在があげられよう。この書は、勝沼信友の息女で、武田信玄のいとこに当たる理慶尼が、武田勝頼の最期を和歌をまじえて綴ったものといわれ、次の記述がある。

「こに国人小山田と申せし人、ははの尼公を人質にとられまひらせ、それかへさんがはかりことに仰せは、さこそ侍へども、御身をまたく、もりたまへ、みつからか在所、都留の郡、岩殿山と申は、およそ天下そむき候とも、一持もつべき山にてあり。そこへ御こし、しかるべきと、申されければ、勝頼聞こしめされ……」

小山田信茂が勝頼に岩殿城への築城を勧めたとする有名な一節であるが、「みつからか在所」とあることから、岩殿城を信茂支配下の城郭とする解釈が生まれたものと考えられる。しかし、『理慶尼記』は、岩殿城を小山田氏の城と特定したわけではない。「自らの所領である都留郡に所在する岩殿山は、天下を敵に回しても耐えられる」との信茂の言を引用するに過ぎず、また、本書について、理慶尼に仮託して著された近世の

小説とする見解も提示されており、史料的価値そのものが危ぶまれている。

しかしながら、小山田氏要害説はさしたる批判もないままに1978年発行の『大月市史通史編』に踏襲された。執筆にあたったなかざわ・しんきち氏は、「小山田氏は谷村に居館を移すとともに、大月の岩殿山に山城（要害城）を構築した。まさに武田氏の躊躇が崎館にたいする要害山の備えを、都内に引きうつしたといえよう」「軍事施設としての山城の構築が要求され、岩殿山が要害の地としてえらばれたにちがいない。山城の歴史は南北朝内乱の初期からはじまったが、戦国期には領域内の村々を支配するために城を構えることが不可欠となつたのである。小山田氏も所領支配の拠点として岩殿山の経営にのり出したものとおもわれる」と述べて詰城としての性格を強調し、本城（結城）築城の歴史的意義を付加することによって、小山田氏要害説を強化したのである。

第2節 武田氏築城・経営説の提起

江戸時代に早くも定説化した小山田氏要害説に対し、1980年代からの城郭研究の急速な進展や新史料の発見により、武田氏築城・経営説が提起され、今日の有力説となっている。

その萌芽となったのは、日本城郭協会による「岩殿山見学会」の開催で、このとき行われた意見交換の内容が、小林利久氏により「岩殿城址行」として『甲斐路』13号（山梨郷土研究会、1967年）に収録されている。これによれば、岩殿城の見直しに関して提示された考えは次のようなものであった。

- ①谷村館の詰城とするには距離が12kmと遠く、武田氏が相模との境目の城として築城したのではないか。
- ②情報伝達を目的に武田氏が領国内に構築した烽火台の一つで、大月周辺及び以東の中心的な役割を果たしていた。
- ③は佐藤禪光氏の意見であり、谷村館と岩殿城を居館と結城のセット関係で捉えることに異を唱えたことは、城郭研究の立場から容易に首肯できよう。④は植竹氏の説で、機能を烽火台に限定したことには問題があるが、谷村路と後の甲州街道の分岐点に所在することを重視し、この一帯の中心的な役割を担う城（烽火台）として位置づけたことは重要である。

山梨県における本格的な城郭研究の第一歩となったのは、1980年の『日本城郭大系8 長野・山梨』（新人物往来社）の刊行である。岩殿城の執筆にあたった室伏徹氏は、現地調査を踏まえて縦張り図を作成し、東西約300mにも及ぶ遺構群の存在を明らかにした。また、「甲斐国志」の小山田氏要害説を否定し、相模・武藏方面からの侵攻に備えて武田氏が築いた城郭との見解を示している。

1982年には、次に掲げる文書が八王子市の大野家に伝来していることが報告された（須藤茂樹「武田氏と都内領に関する一史料」『甲斐路』第46号、山梨郷土研究会）。

定

落合の新左衛門 大師の鎌殿右衛門 小笠原の助右衛門
小笠原の源次郎 百々の四郎右衛門 今宿の新五左衛門
寺邊 孫右衛門 徳行 助右衛門 曽根の新七郎 黒駒の新左衛門
右拾人岩殿令 在城、御番御普請等無 疾略 相動之由候条、
鄰次之御普請役被成 御教免 候間、自分之用所可被申付之山、
所レ被仰山也、仍如レ件、

天正九年三月廿日

土屋右衛門尉奉之

荻原豊前

『新編甲州古文書』3(角川書店、1969年)など既刊の史料集にも、写本をもとに翻刻されてはいたが、原本が確認されたことで、その重要性が再認識されるところとなった。

ここに見える地名は、甲府盆地の一円に広がるものであり、これらの郷村から招集された荻原豊前守の寄子・同心が、岩殿城の在番と普請を勤めたことが分かる。竜朱印が押されていることから命令を下したのは武田勝頼であり、岩殿城が天正9年段階において武田氏直轄の城郭であったことは疑いない。荻原豊前守は武田氏家臣で、小人頭十人の内、横日付衆に列せられている(『甲斐国志』人物部)。

本史料から、武田氏の劣勢が顕著となって他団との緊張関係が高まつた天正9年当初に、甲斐国防衛の一翼を担う拠点として、岩殿城が武田氏直属の荻原豊前守により修築されたことが確認されるが、築城時期や築城主体者まで明らかとなつた訳ではない。小山田氏結城説は、居館との距離関係から否定されるものの、小山田氏が築城し、ある段階まで使用していた可能性は、なお捨て切れないである。

柴辻後六氏は、小山田氏発給文書の分布から、小山田氏の勢力範囲が都留市と富士五湖周辺に限られ、大月市以北に及んでいないことを指摘している(『小山田氏の郡内領支配』[郡内研究]第2号 1988年)。しかし、永正17年(1520)の七社権現修造の際の奉加入のなかには、「当郡主護平(小山田)信有」の名が見え、永禄11年(1568)には、小山田信茂が「戸張七掛」を七社権現へ奉納している(以上『甲斐国志』巻90)。天文19年(1550)には、自らの病氣平癒を祈る小山田信有が、杜林寺(都留市今井)の住持に、岩殿山圓通寺の大般若経の転読を命じている(真藏院所蔵大般若經卷367裏表)。また、大月市駒橋には小山田氏被官である丹後氏の屋敷跡や小山田出羽守姿婦宅跡が伝承されている。こうしたことを合わせると、武田氏の領国経営体制が未成熟な段階において、岩殿城を小山田氏が築城・經營したことは想像に難くない。

第3章 岩殿城研究の深化

史料の少ない岩殿城の経営主体・機能・性格について、初めて本格的な考察を行い、「甲斐国志」以来の通説としてその枠を越えずに追隨する歴史研究のあり方と姿勢」に厳しく見直しを迫ったのは、荻原三雄氏である。『山梨県考古学論集Ⅱ』(山梨県考古学協会、1986年)に所収された「岩殿城の史的・考察」がそれで、研究史の検討を主体に小山田氏の支配領域、岩殿城の立地と築城時期、甲州街道筋の城郭分布と防衛体制、経営主体者といった諸視角から、小山田氏本城説に鋭い批判を加えている。

とりわけ、「甲陽軍鑑」や享保年間に著された「甲州断」には岩殿城と小山田氏の関係が触れられていて、先に挙げた天明3年(1783年)発行の『甲斐名勝志』以降に小山田氏本城説が流布され、通説となつた状況を捉えた点は、注目に値しよう。

結論として荻原氏は、「府中要害城を破棄してしまった天正10年の段階においては、菲崎新府城に続く国内第二の城郭であり、その占地的特徴は篠城に最も適した城であったとする見解すら提起可能ではないだろうか。したがって岩殿城は、対相模方面の警固の要的な役割と、小山田氏に対する日付の任務を帯びて戦国大名甲斐武田氏直轄の重要な支城として経営されていたと考えられる」と述べるとともに、築城時期について「岩殿城をとりまく多くの城館址群の有機的成立とその要的存在をながめるととき、武田信虎が領國を統一し戦国大名に脱皮した永正年間以前であると認めてよい」と自説を展開している。

荻原説はあくまで武田氏による築城と直轄経営を主張するものであるが、その裏づけとして武田氏権力の發展段階を緻密な史料分析によって追究していく必要があろう。

1987年発行の『図説中世城郭事典』(新人物往来社)では、八巻孝夫氏が岩殿城を執筆し、武田氏直轄説を

継承している。八巻氏の研究で注目すべき点は、登坂ルートの検討から岩殿山南西中腹にある岩殿公園付近を大手口を守る小郭として捉え、岩殿山から北に続く尾根上の「築坂」と呼ばれる場所に城門・番所といった施設の存在を推定していることである。これにより、岩殿山全体に遺構が広がっている可能性が指摘されるようになり、今回の総合学術調査でもこれまで未確認であった小郭がいくつか発見された。

以上、述べてきたように、岩殿城についてはかつての小山田氏要害説が否定され、武田氏経営説が有力となっている。しかし、築城時期の解明は史料的制約から難しく、発掘調査の結果を慎重に検討していかなければならない。

城下集落や当時の道筋の解明も今回の学術調査で緒についたばかりである。また、前述のように天正10年12月段階で島居彦右衛門が岩殿在城を命じられた経過があり、複雑な虎口をもつ大倉砦（上野原町）やコンバクトながら堅固な備えをみせる駒宮砦（大月市）もこの地域に存在し、武田氏滅亡後に修築された可能性もあることから、天正10年以降の対北条氏・対徳川氏を睨んだ防衛機能の役割をも検討していく必要がある。課題は多いが、こうした研究の蓄積をとおして都内地方の地域構造が明らかとなり、武田氏領国支配体制の解明にも寄与できるものと考えている。

（数野雅彦）

第2章 岩殿城の歴史環境

1. 山梨県内の中世城館分布調査

県内の中世城館の分布調査は、昭和10年以前に史跡指定を前提に、長坂町深草館・身延町波木井氏館など十数箇所の現地調査が行われた。これに先だつ昭和3年に新聞記者の小泉義幸氏が踏査して山梨日日新聞に連載した「烽火台巡り」は、昭和53年に「烽火台を訪ねて」と題されて出版されたが、約50ヶ所の烽火台の昭和初年の姿を知るうえで極めて貴重である。戦後の調査は、昭和44年に刊行された『甲府城総合調査報告書』で、『甲斐国志』に記載されている城館を中心に主要な城館の一覧表が作成された。ほぼ同時期に行われた福井県・飛谷浅倉氏館跡の調査に大きな影響を受け、昭和48年から着手された国史跡藤沼氏館跡の調査を契機に中世城館への研究が進み、昭和51年に290ヶ所の一覧表が、その翌年に中世城館の分布図が発表された。昭和53年から『日本城郭大系』執筆に伴う分布調査により、約330ヶ所の所在が確認された。その後、昭和58年から3年間山梨県中世城館の分布調査が行われ、430ヶ所に増加したが、平成3年に刊行された『定本山梨県の城』には460ヶ所の所在が確認されている。

このような数度の調査で確認されている中世城館460ヶ所余りの内訳は、守護・国人領主の館や土豪層の屋敷などが約300ヶ所、これらに付属すると考えられる詰め城（要害）が15ヶ所程度、天正壬午（1582）年に起こった徳川と後北条との戦いで築造・築城された砦や陣城などが10ヶ所程度、烽火台や鐘撞き堂などの伝承がある小規模城郭が130ヶ所余りである。これら館・屋敷類と烽火台伝承を有する小規模城郭の全県下での割合は、30:13であるが、甲府盆地を中心とした地域と急流の河川流域とではその比率が異なり、岩殿城がある桂川流域（大月市・上野原町）は1:1と特に小規模城郭が多く、桂川両岸に小規模城郭が集中する傾向が著しい。

2. 桂川流域の中世城館

桂川下流域に点在する城館の半数が小規模城郭であり、そのほとんどが烽火台・鐘撞き堂伝承を有している。これら小規模城郭を全て烽火台と断定することには問題もあるが、具体的には以下のとおりである。桂川両岸に集中する地域を、岩殿城を中心として上流と下流に分けると、下流域（東側）では、南東2 kmに胸橋の城山、3 kmに猪橋の城山、その4 km下流に斧窪の御前山、さらに2 km下流に綱之上御前山、北東3 kmに古城がある。綱之上御前山から東4 kmに四方津の御前山、その北2 kmに長峰砦、東に2 kmで牧野砦、南東2 ~ 3 kmに柄穴御前山と鶴島御前山がある。鶴島御前山より東に進むと甲斐相模国境の小仏峠に至るが、このように4 kmを越えない範囲で両岸に規則的に点在している。

一方西側には岩殿城から3 kmに花咲鐘撞堂があるが、ここから笠子峠烽火台まで13kmあり、この間の烽火台は確認されていない。桂川上流に当たる南西側に点在する城館は都留市の谷村の烽火台までは岩殿城から7 kmの距離がある。谷村からは、南西に4 kmで都留市の古渡城山烽火台、南西に9 kmで河口湖町の天上山烽火台がある。さらに南東に4 kmで吉田の城山へとつながる。

このように、烽火台相互の距離は4 km前後が基本と考えられるため、笠子峠までの間には3ヶ所、谷村までの間にも1ヶ所、古渡城山から天上山までの間にも1ヶ所の烽火台が想定できる。

3. 岩殿城の歴史

岩殿城の役割は、その拡張もさることながら周辺に点在する小規模城郭との関係を中心と考えることが必要である。既に述べたように、甲斐相模・甲斐武藏の国境からの情報は、北からは胸宮を経て、東からは桂川を溯って岩殿城に伝えられる。ここから、西に進めば笠子峠を越えて甲斐盆地へ、また桂川を溯ると小山川氏の居館へと伝達されるのである。その意味で、この城の機能は、情報の処理と伝達という二つの機能を

有していたことが考えられる。同様な性格を有する城をあげると、北巨摩郡須玉町の若神子城であろう。この城は、その立地から信州佐久郡からの情報が、須玉川流域と塙川流域からそれぞれ伝達された場所であろう。また、信州攻略に向かう武田軍は、この城の城下の若神子に陣所を設けていたことが『高白齋記』から窺える。若神子城と同様に『高白齋記』の中に「本須御陣所」・「谷戸御陣所」との記述があり、対応する遺構は西八代郡上九一色村の本栖の城山・北巨摩郡大泉村の国史跡谷戸城跡である。谷戸城には諏訪郡と佐久郡の情報が伝達され、本栖の城山は駿河国境からの情報を甲府盆地に伝達する重要な中継点である。これら、若神子城・本栖城山・谷戸城は、山梨県内でも比較的大きな繩張であったり、石積みを用いていたりと特色が認められる一方で、戦国時代の城主について明確な史料なり伝承はないと言える。しかし岩殿城は、『甲斐国志』の記述から郡内領主であった小山田氏の詰め城として築かれたとの見方が支配的となっていた。

近年の歴史学・考古学・城郭研究の発展によって疑問視されはじめた小山田要害説について萩原三雄氏は、『岩殿城の史的・考察』で、天正九年三月廿日付け萩原豈前宛の勝頼朱印状に「右拾人岩殿令在城、御番御普請等無疎略相動之由候条」とあること、また『甲陽軍鑑』に「岩（ゆわ）どの」として登場するが、小山田氏の居城との記述はないことを明らかにした。さらに、小山田氏の発給文書の分布からその勢力範囲が大月以北に及んでないとする柴辻俊六氏が行った研究成果などを踏まえて、「対相模方面の警固の要的な役割と、小山田氏に対する日付的な任務を帯びて戦国大名甲斐武田氏直轄の重要な枝城として経営されていたと考えるべきである。」と述べ、小山田氏の詰め城であると100年以上も言われつづけている岩殿城が、武田氏の管理下に置かれていたことを明らかにした。

この指摘は、他の3城も武田氏直轄経営の城と考えることも、さらに、岩殿城下に相模攻略の陣所が存在したことも推測されることになろう。

(八巻與志夫)

第3章 岩殿城の縄張

地表面から把握できる岩殿城の遺構は、岩殿山の頂上部分を中心に、その南側の丸山(岩殿公園)付近、北側斜面、西側の築坂付近等にもみられるが、ここでは山頂付近のみについてみたい。第1図は今回の調査の一環で作成した地形測量図に基づく縄張図であり、測量図では表現できない微妙な地形を縄張の視点から取り込んでいる。

第2図は主要な遺構に番号を付けたもので、これを基に縄張を説明したい。東側の尾根筋を登るとまず①の堀切に突き当たる。この堀切には土橋は設けられておらず、さらに尾根上を西に進むと堀切②に至る。堀切②は堀切①に比べ大規模で、堀底に土橋が施され、「甲斐国志」はこの2つの堀切を「一ノ堀・二ノ堀」と呼んでいる。

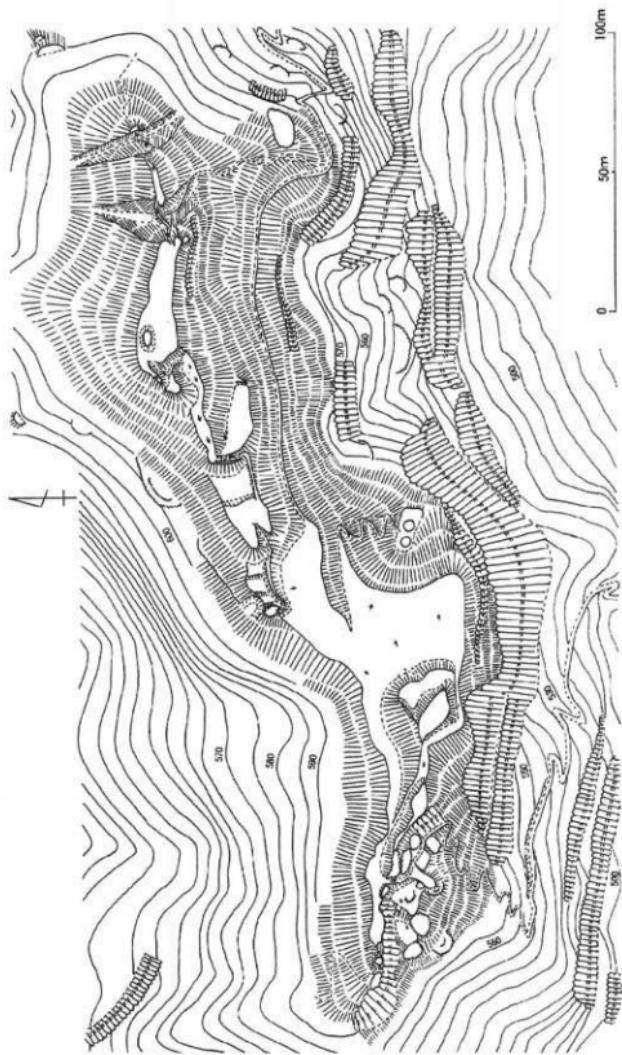
堀切②の西側には東西50m、南北15mほどの郭があり、最高地点にあたるため主郭と考えられ、「国志」が「本城」と呼んでいる場所であろう。現在は放送関係の中継施設があり、往時の状況は把握しがたい。郭の北西側には平面橿円形の高まりがみられ、看板によると「烽火台」とされるが、西側からの入り口近くに位置し、その地点が烽火台としてふさわしいか、烽火台の施設が台状であるかも含めて検討する必要がある。郭③の西北端は細長く突起し、その先には狹小な郭④があり、その東側において郭③に入る虎口が形成されていたと推測される。

⑤は西側に向けて下る尾根上の削平地で、郭の類とみることもできようが、荒れている状態であり、判然としない。⑥の西端には直角に南下する道が造られ、その西側は土壘状となり、東側には郭⑥が位置する。郭⑥の東端には削り残しの小規模な土壘が設けられている。

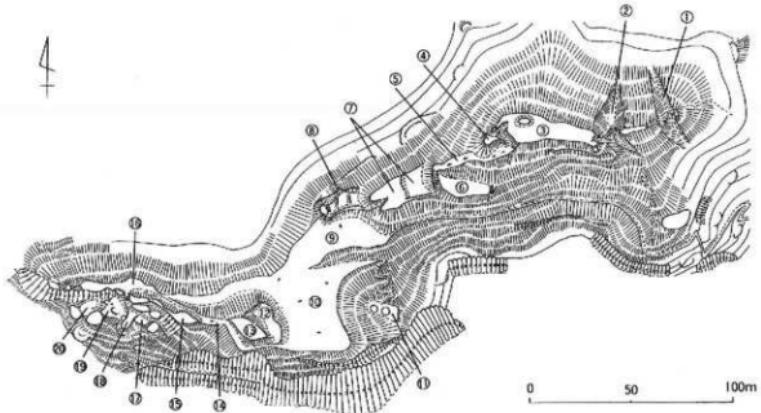
郭⑦は小さな段をもって東西2つに分かれ、東側の郭の南側は高まりをもち現在通路となっているが、かつては土壘であった可能性がある。西側の郭の西端は二股に分かれ、その間において道が下るが、往時の虎口形態を反映しているものと推測される。⑧は低い段をもっていくつかの狹小な郭群を形成し、その南側には低い土壘が位置する。

郭⑨は南側に向けてなだらかに下り、東端は七社様現へ向う山道とつながり、南西側で郭⑩と連結している。郭⑪⑫は一般に「蔵屋敷」と呼ばれている。郭⑪は東側に向けて傾斜しているものの、この城域では最も広い郭である。その東端において葛折りの道を下ると井戸⑬に至る。郭⑭の南西側の高所に郭⑯・⑰が位置し、現在郭⑯には東屋、郭⑰には石碑が設けられている。⑯は郭⑮と連続し、郭⑯・⑰の南側をめぐる帯状の削平地であり、西側部分は斜めに下り、その南側の⑯は自然の高まりであるが土壘状である。⑯は郭⑮の西側と連結する尾根上の削平地で、⑯と郭⑯の西側は細長く「馬場」と呼ばれている。⑯の西端は岩場を掘り抜けるように山道が下り、南側中腹の丸山へと続いている。⑯の南下方には通路に沿って狹小な郭⑯～⑰が設けられ、郭⑯のすぐ下の岩間の通路には「揚城戸跡」、郭⑯の脇には「番所跡」の看板がある。郭⑯の西下方にも小さな郭⑯があり、郭⑯⑯はともに地形に従い傾斜している。

岩殿城は山頂を改変し造営されているが、自然地形を生かした縄張がなされ、最高地点である郭③と次に高い郭⑯の2つのピーカーと、その鞍部である郭⑯⑯によって大きくなっている。浅野家の「諸国古城之図」(広島市立中央図書館・浅野文庫蔵)をみると、郭③が「本城」、⑯が「馬冷場(水ノ手)」、郭⑯の西側から⑯にかけてが「馬場」で、その南側に「大手」がみえ、大手から下る道は浅利宿に通じ、その対側の「鏡音堂」を経由する道は岩殿宿に通じている。図の作者は浅利宿から入る道を主要な進入路とし、その対局にあたる郭③を本城としているため、城は大きくなっている。この城は西側から北東側に向けて構成されていると考えている。郭③が最高地点であるためそのような構成になるのは当然のことと考えられるが、この城は西側、つ



第1圖 岩盤地圖 (山頂地點)



第2図 各施設番号図

まり國中側に向いて大手を開いていることになる。岩殿城の性格については、当初は小山田氏の本城といつた見方がされていたが、その後八巻孝夫氏や萩原三雄氏によって、武田氏直轄の城という位置づけがされてきている。さらには天正10年(1582)の武田氏滅亡後の甲斐国領有をめぐる徳川氏と後北条氏の争いの際は、この地域は一時的に後北条氏により制圧されており、その段階での城の改変も想定され、それら岩殿城を取り巻く情勢も視野にいれてこの城の縄張りや構成を再度考える必要がある。

郭③の東側背後には大きな堀切①②が位置し、主郭とその背後の堀切の組合せは武田氏の本拠である躑躅ヶ崎館後方の要害城やその近くの熊城でもみられる。堀切②の土橋から直接堅堀にする手法は、武田氏の山城に多いことを八巻孝夫氏は指摘しているが、この部分は確かに武田氏的である。

城を北側から登る場合、所々に崖や小郭はあるが、尾根上の道を進むと難なく城内に入ることができる一方、南側は自然の岸壁であり、視覚的にも堅固さを誇っている。よってこの城は、南側に向けて存在を誇示しているものと考えられ、南側を通る主要幹線道路や桂川流域に対する抑えの目的を兼ねて築かれたものと考えられる。郭⑦⑧には南側に上空の痕跡があり、それらも南側に対する防御の意識のあらわれと推測される。

岩殿山の南東側山麓にはかつて円通寺の伽藍が存在し、そこから山頂へ登る道は現在でも七社権現の前面を通過しており、築城以前においても山頂へ至る信仰の道が存在したと考えられる。往時の道筋は厳密には把握できないが、現在のこの道筋には阻塞類はみられず、城の中核である郭⑨へと通じている。円通寺は中世において本山派に属する修験寺院で、岩殿山全城はおそらく行場となり聖域であったと推測される。ここに戦国大名が築城を始める際、戦略的な好条件を備えるという立地的・地形的な面のみではなく、聖地に築城する意図もくみ取る必要があろう。飯村均氏は山城ができる「場」として聖地が選ばれるケースに注目し、視覚面・精神面において民衆掌握の一つの手法であった可能性を指摘している。岩殿城の縄張・構成は立地条件を最大限に生かし、前提となる円通寺の信仰空間を取り込む形で築かれている点に特徴があるといえる。

註

- (1) 八巻孝夫「岩殿城」『岡説中世城郭事典』第二卷、新人物往来社、1987。
- (2) 萩原三雄「岩殿城の史の一考察」『山梨考古学論集』Ⅱ、山梨県考古学協会、1989。
- (3) 註(1)と同じ。
- (4) 飯村均「山城と型地のスケッチ」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第5集、1994。

(編 大介)

第4章 岩殿城の考古学調査

第1節 試掘調査の日程と方法

「岩殿山頂」というと厳密には、現在電波中継塔が建っている東側の高まりであるが、一般的には通称「鏡岩」と呼ばれる大岩壁上の高まり（乃木將軍歌碑が建っている部分）をも含めていわれることが多い。つまり、通常山頂部といっている部分には標高610m前後の西側と635mほどの東側との2つのピークが存在している。

『甲斐国志』では山頂部の地名として、「一ノ堀」「二ノ堀」「本城」「馬場」「大門口」「藏屋敷」「亀ヶ池」「揚木戸門」などを挙げているが、現在遺構として存在が確認できるものは2つの塹（一ノ堀・二ノ堀）と湧水池（亀ヶ池）のみで、他は地形や伝承により比定されているにすぎない。

今回の試掘調査は「藏屋敷」と伝えられている2つのピークの鞍部にあたる標高605m前後の低い部分と、場所が判然としている「亀ヶ池」を候補地とし、平成8年度の調査として第3図に示す1～3の3ヵ所を試掘調査することとした。年度当初は8月頃に着手する予定だったが、他の緊急発掘に対応していたため、調査の事務手続きも大幅に遅れ、着手可能なのは11月下旬になってからであった。林務事務所からは、発掘に際して一般登山者の安全の確保と立木の伐採を一切行わないことで承諾を得ることができた。

調査は12月2日に着手し、1～3の調査箇所はそれぞれ第1調査区、第2調査区、第3調査区と呼称することとし、年末年始の休みをはさみ1月23日に終了した。

平成8年度の調査の結果、第3調査区から多くの遺物が出土したため、平成9年度の山頂部の調査においては第3調査区の周辺を拡張することとし、第4調査区（第3調査区の2次調査）として調査を実施した。

以下、各調査区ごとに具体的な調査経過や確認状況について説明する。

1. 第1調査区（第4図）

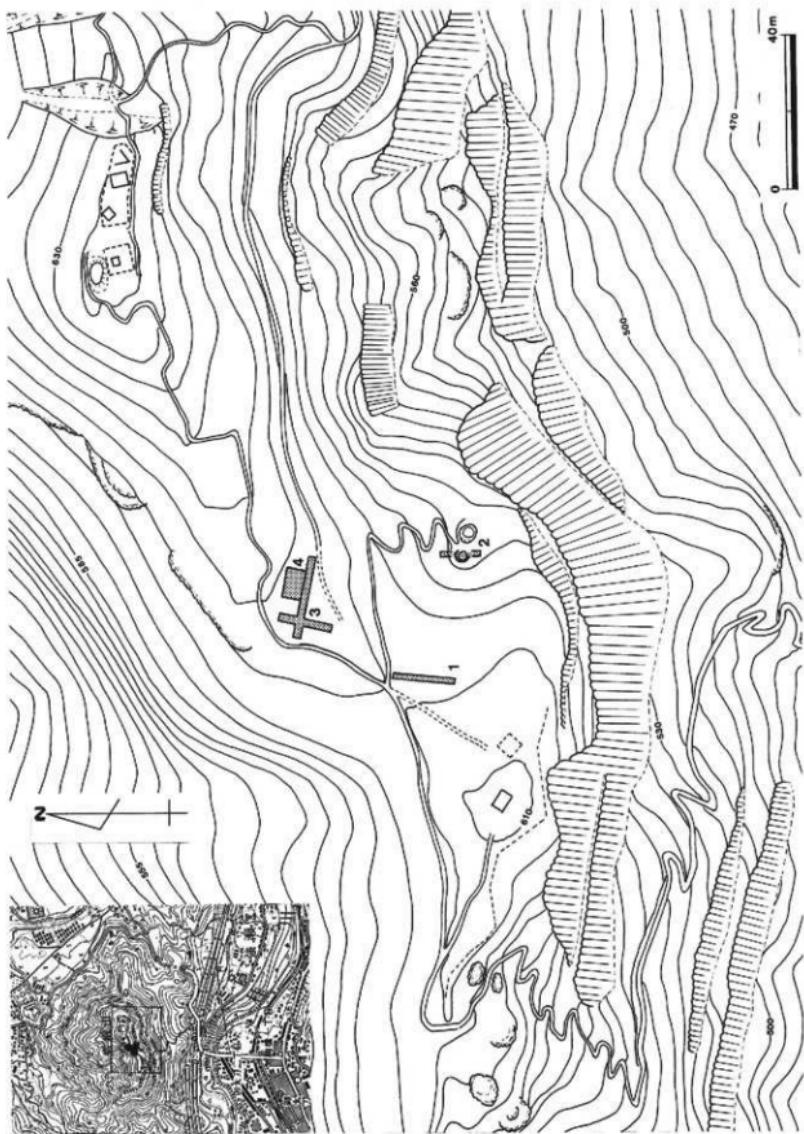
調査箇所として選定した場所は、鞍部の中で最も低い部分で、尾根のやや南東にあたる。第2調査区の亀ヶ池に向かって傾斜角が増大する斜面の上方は岩殿山頂の中でも最大の平坦面で、幾筋もある登山道が交差している場所である。

広い平坦面であることから何らかの造成や建築物の痕跡、あるいは亀ヶ池の上部であることから取水のための施設などを想定し、登山道を避けた場所に等高線に並行する方向にトレントを設定した。トレントは16×1mで長辺の方向は磁北より東へ12°振れた方向となる。

地形的には谷頭にあたり、表土が流失しやすい場所と考えていたが、表土除去作業にかかると40cmほど掘り下げるでも地山に達せず、しかも砂利などを含まない地味の肥えた上層であった。山頂の発掘というよりは里の耕作地を掘っている感覚である。さらに掘り進むと、浅くて45cm、深くて65cmの深さに開拓ローム層の堆積が認められた。岩殿山頂はいわゆる「岩殿礫岩」の岩盤の上に若干の腐植土が堆積している程度と想像していたので、良好に堆積したロームの地山が広がっていたことは驚きであった。

地山までの土層は、上部10cmほどが黒色の腐植土で以下ローム層までは一様に搅乱を受けた暗褐色土であった。暗褐色土上には版築など人工的な整地面は認められなかったが、それを取り除くといきなりローム層が現われるありかたは明らかに人の手が加えられていると判断できる。なお、現地形の最も低い箇所がトレントの南北中央に位置するように設定したが、地山の最低位面は現在よりやや南寄りにあったことがわかる。

ローム面上を精査すると、幾つかの溝状の落ち込みが確認された。確認面からの深さは一定ではなく、浅



第3図 山頂部試掘調査位置図（1～3＝平成8年、4＝平成9年）

いものは17cm(7)、深いもので61cm(4)である。幅も45から65cmを測ることができるが、いずれも全体を確認できたものはない。1は搅乱と考えられるので別として、2・6～8は掘り込みの西端が確認できた。これらからみてそれぞれの掘り込みの平面形は角の丸い長方形で、側面はほぼ垂直に立ち上がり、両端は斜めに立ち上がっているようである。5は唯一、北東と南西コーナーの丸みの一部が確認された掘り込みであるが、長辺の長さは140cmほどと推測できる。また、長軸の方向については、3～8は等高線に直交する方向に、それ以外は等高線に並行する方向に掘られている。

このような特徴を持つ掘り込みは、通常、耕作地での発掘調査時によく見受けられ、耕作物の貯蔵あるいは深耕を要する作物の耕作痕と考えられる。これが耕作痕であるか否かは後述することとして岩殿城あるいは山岳修験関係の遺構とは考えがたい。

掘り込み内からの遺物の出土ではなく、表土除去の際に数点の陶磁器が出土したほか、縄文時代早期の条痕文系の土器片1点、平安時代の甲斐型壺の破片1点が出土した。

2. 第2調査区(第5図)

『甲斐国志』にある「亀ヶ池」である。『甲斐国志』には「池二ツ常ニ水ヲ湛エテ下天ニモ不涸亀ヶ池ト名ツク一ハ用水一ハ馬洗水ナリト云傳フ」とあり、2つの池をあわせて「亀ヶ池」といっている。

現在も池は2つある。上方を用水、下方を馬洗い水に想定することは常識的に理解できるが、いつのまにか上方の池は「亀ヶ池」、下方は「馬洗池」と呼ばれるようになってしまった。

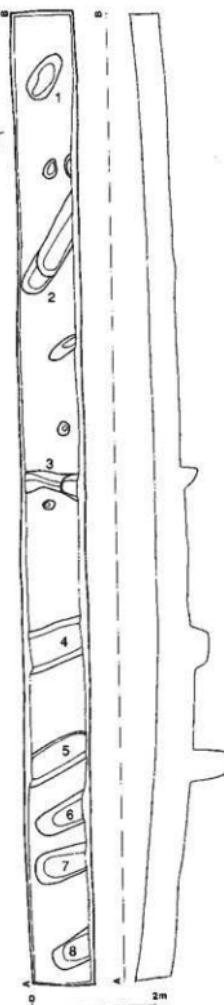
この地形は、南東に面した斜面の一部が崩れ落ちたような、掘り鉢状の形状を呈していることから、岩盤が透水性の低い性質であれば、水が溜まるのもうなずける形状ではある。

平成6年に県考古学協会のメンバーが踏査した際に、上方の池の周辺から常滑の陶器片2点が採集されており、池の中にはかなりの遺物が沈んでいるものと期待されていた。

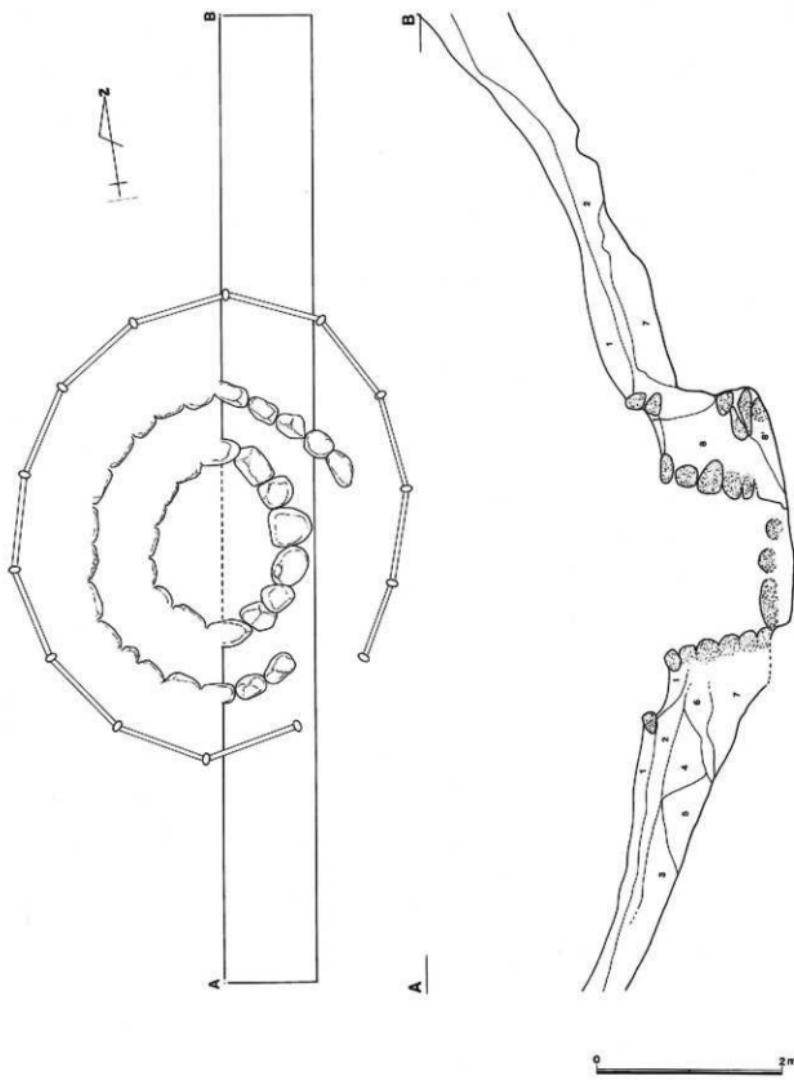
今回の調査は、石積みで構築されている上方の池の構築方法及び使用年代の把握等を目的に調査に着手した。

池の水を搔い出し中の泥を除去し、約1m掘った段階で人頭大以上の礫岩が幾つも現われ、それ以上の掘削を拒むかのように入り組んでいた。それまでの段階で、ガラス瓶の破片やプラスチック製の玩具などが出土しただけだったこともあり、急遽トレンチを設定し、石積みを取り除きながらの構造確認調査に移行することにした。

池は観光用に整備され、周囲を欄で囲ったり、石積みも十数年前に改修されたものだと聞いていた。よくみると石積みの隙間はコンクリートでふさがれ、オーバーフロー対策として配水管も設置されるなど、かなり手が加えられていることが明瞭であった。そのため、石積みをすべて外してしまっては調査後の復旧が困難であると判断し、西壁が池の中央を通るよう、南北10m、幅1mのトレンチを設定し、石積み部分は断



第4図 第1調査区実測図



第5図 第2調査区実測図

面の測量に必要な、人が通れる最小限の石のみ外すこととした。

石積みの上部は岩殿山中にはない、丸みを帯びた川原石で、改修の際に下から運ばれてきたものと思われる。南側の4段目・5段目以下、および池の中に落ち込んでいる石の多くは岩殿山に産する「岩殿山礫岩」塊で、本来使われていた石積みの石を利用したものであろう。

中に落ち込んでいた石を取り除くと底面が確認できた。南側は底面の立ち上がりの延長上に右が積み上げられているのに対し、北側では立ち上がりが確認できなかったため、現石積みの裏側の埋土を除去したことろ、立ち上がりと横際の石積みの一部が確認できた。

石積み上部からの深さは135cm、底径（石積みの内側）は115cm、北側に確認された立ち上がりまでの底径は240cmである。

水量については実験的に、作業終了時に中の水をすべて汲み出して帰ることを2回ほど試行した。2回とも翌朝作業を開始するまでの間（16時間ほど）に中が満杯になり、すでに排水口から流れ出していた。少なくとも一晩で1,200ℓ以上の水を集めていることになる。

トレンチ法に切替えてからも遺物の出土は少なく、数点の陶磁器が出上しただけであった。

3. 第3・第4調査区（第6図）

登山道の交差する鞍部から分かれて北東に向かう道は、尾根の上を通り東の頂上へ至る。第3調査区はその頂上へ向かう尾根の南側部にある平坦地である。この平坦地は山頂の上で最も広い場所で、尾根の裾を削り取っているようにも見える人工的な色合いを強く感じる地形である。

現在の登山道が、どの程度昔の道筋に沿っているか定かではないが、第3調査区から15mほど北に離れた場所にも平坦地があり、道はこの平坦地の南縁を10mほど東に向かったところで直角に北に曲がり、さらに東へ曲がる「曲の手」になっている。このことから、当時のままのルートがかなり残されている可能性がある。第3調査区を北へ回遊するように回り込む道も、平坦地を造り出すために裾を削られた尾根の肩部が北側へ後退した結果であると考えられる。

第3調査区は平成8年に調査し、良好な遺物の出土があったため、さらに平成9年度に隣接地を第4調査区として調査した。第6図は両調査区を合わせて示したものであり、南北・東西の「十」字のトレンチが平成8年度、東西トレンチの北側に接した長方形の区画が平成9年度の調査区域である。

第4調査区にあたる部分には、松食虫の被害があった松の薫蒸のため、伐採された多量の幹や枝が積み上げられていた。そのため、それを避けた位置に、21×2mの東西トレンチ、それに直交する14×2mの南北トレンチを設定し、第3調査区の調査を開始した。

表土としては黒色土（腐植土）が10cm前後堆積しており、南北トレンチでは地表下30cm以内にローム層の地山が確認できた。東西トレンチは西側ではローム層が認められるが、東側からは砂利層が現われるなど、東西で埋土の様相が異なっていた。しかも厳寒期のため、連日土壤が5cm以上も凍てつき、深さを調節しながら掘ることができず、版築工法などで突き固められた部分があったとしても、それを認識することはできなかった。ようやく砂利層を取り除いたところ、硬くて平坦な面が確認できたのでそれ以上掘り下げることをひかえたが、西側から掘り進んでくる確認面とは高さも土層も異なり、同一面をとらえることが困難であつ

番号	色調	特徴
1	黒 色	表土（腐植土）
2	黒褐 色	ローム土体の流れ込み上で小礫が混じる
3	暗 褐 色	小礫集中層
4	暗 褐 色	酸化した赤褐色土が混入し粘性強い
5	暗 褐 色	黄灰色粘質土を多量に混入
6	暗灰褐 色	粘質土
7	棕 褐 色	酸化した凝灰質角礫を含む粘性土
8	暗青灰 色	水により粘土化？
8'	暗青灰 色	8層に似るが混入物が少ない

第1表 第2調査区上層説明



第6図 第3・4調査区実測図・遺物分布図

た。そのため、底面を掘り抜く覚悟でサブトレンチを設定し断面を観察したところ、底面と思われる部分以上の土層には、焼土や炭化物片が多量に混入しており、取り除くことができる層であることがわかった。以後、焼上泥じりの土層を取り除く過程で陶器片が出土し、最終的に43点の遺物が出土した。

遺構としては、東西一南北トレンチが交差するあたりに、第1調査区で確認されたような隅の丸い長方形の掘り込み（1）と、径100cm、深さ40cmほどの丸い穴（2）が重複して確認された。丸い穴については、調査区内に単独で確認されたもので、この周辺から江戸期～昭和（戦後）にかけての年代の異なる古銭が出土している。

他に小穴が数箇所に確認されたが、空缶などのゴミを埋めたものや、植物の根あるいは小動物の活動による搅乱と考えられ、遺構である可能性があるものは図示したものだけである。なお、東西トレンチの遺物集中箇所の底面は周辺に比べて状況に低くなっていた。

出土した遺物は帝京大学山梨文化財研究所に運ばれ、分析の結果、瀬戸祖母懐の茶壺の破片がかなりの割合で含まれていることが明らかになった。

上記の調査結果により、平成9年度の山頂部の調査地として、第3調査区の周辺をさらに拡張調査することが決められた（第4調査区）。9月17日に調査着手することができたが、この場所は虫害にあった松の幹や枝が集積されている場所で、まずこれを移動することから始められた。登山道やこれから掘る調査区内の排水溝場所を確保するために、遠くに移動する必要があり、かなりの時間を要した。

第4調査区は、 5×8 mの長方形に設定し、尾根の裾際の造成の有無、遺物分布状況や遺構の有無の確認を目指した。時期的に気候もよく、昨年の状況を参考に掘り進むことができたので表土除去作業は順調に進んだ。下底面を追ってゆくと西側はローム層の平坦部が尾根の裾際まで続いているのに対し、東側には「岩殿礫岩」からなる岩盤（基盤）が現われた。第3調査区の調査時に認められた東西の土層の違いは、東側部分が岩盤に近いためであったことがわかった。岩を覆っている上を取り除くと、岩盤の一部にテラス状に整形されている場所が確認できた。テラスの幅は40～80cmあり、東側壁面には深さ14cmの楕円形の穴（11）が穿たれている。また、壁面に沿って、この穴から始まる、幅35cm、深さ3～5cmの溝が造り出されている。溝の先は南へ伸び、調査区外へ続いているようだが、テラスがその先まで続かないと推測されるので、溝はテラスの先端で終わっているものと考えられる。今思えば溝の先端を確認できなかったことは残念である。

テラス上の北東コーナーにはもう1つの円形の穴（12）があり、深さは14cmである。

岩盤を削り取って造り出されているテラス上には、以上、2つの穴、溝、床面、壁面などが人為的な痕跡として認められた。また、これらが明らかに人為的であると認められるのにに対し、岩盤上には他にも穴のように見える小さな裂痕が認められた。岩殿山中に露出した「岩殿礫岩」にはしばしばそのような裂痕がみられるので、これらについては判断しがたい。テラスの先端は本来の傾斜のまま土中に潜り込んでいる。

調査区西南部に広がるロームの地山部分には、第3調査区に確認された遺物集中箇所の隣接地から次々に陶器片が出土した。遺物が出土する範囲を精査すると、径4mほどの掘り込みの一部が確認され、内部は焼土や炭化物片を含む暗褐色土で埋められていた。遺構として調査を進めるうちにさらに遺物が出土し、やがて床面が確認された。床面はかなり凸凹があり、中央部が最も低く、確認面からの深さは15cmである。壁面は、西側で立ち上がりが確認できたが、東側では床面が徐々に高くなり明確な立ち上がりは確認できない。第3調査区調査時に遺物集中箇所の床面が低くなっていたことを考え合わせると、この掘り込みは円形の堅穴状遺構と言えよう。堅穴の内外には幾つかの穴（3～10）が確認されたが、位置や規模が不規則であり、この堅穴に伴うものかどうか判然としない。強いて言えば、小さな穴である7～10は、南にまわり込むと想定される壁面に沿って位置しているように見えるが、他の部分の壁面沿いにそのような小穴が確認されないことから無理がある。

他には、図中13で示す箇所に、長径37cm、短径26cm、厚さ9cmの上面が半坦な卵形の白石（花崗岩）が置かれていた。置かれていたとするのは、岩盤山中に産する石ではないことと、また、位置的には岩盤のテラスの西側先端であるが、この部分の滑り際の岩盤を、石がおさまりやすいように削り取っているからである。したがってこの石は何らかの理由で、この場所に置かれるべくして置かれたという感が強い。この石の北側に隣接して、径10cm、長さ30cm程の炭化材が出土していることから、柱などの礎石とも考えられるが、調査区内には対応すべき石の存在は認められなかった。

出土位置が明確な遺物は74点出土した。第3調査区の遺物と合わせて117点となる。また、陶磁器片以外にも粒状の炭化集塊が2点出土している。

遺物の分布状況をみると、密集している部分は明らかに竪穴状遺構の範囲に重なるが、全体的には竪穴を中心としつつも遺構外にも広がっているといえよう。竪穴の内部が焼上や炭化物片を含む暗褐色土で埋められていたことは前記したが、遺物の分布範囲は、竪穴を確認する前から認められた同様の土層の拡散範囲とほぼ一致するようである。

（杉本正文）

第2節 出土遺物

出土遺物は第3～第4調査区を中心に検出されており、限られた発掘調査面積であったがバラエティーに富んでいる。瀬戸・美濃産の天日茶碗、皿、四耳壺、各種染付、常滑産の壺、志戸呂産の皿などの国産の陶磁器のほか、輸入陶磁の明の染付、さらに錢貨を初めとする金属製品や茶臼、炭化種実などもあり、日常什器のほか茶の湯に関わるものも多い。中世の遺物からとり上げる。

1. 中世の遺物

（1）陶磁器（第7図-1～10）

1は、口径11cm、高台径約5cm前後の天日茶碗である。第3～4調査区出土。体部下方はほぼ直線的で、口唇部は直立、端部は短く外折する。高台は欠損しているが、周辺に銷軸が施されている。瀬戸・美濃産、大窯2段階で16世紀前半。2は、口径10.4cm、器高2.1cmの小皿である。第3～4調査区出土。体がやや丸みをもって立ち上がる。削り込み高台で、灰釉をかけているが、高台内は無釉である。上志戸呂系で大窯4段階、16世紀後半の所産。被熱されている。3は、口径約9.5cm、器高2.2cmを測る端反皿である。第3～4調査区出土。体部下方はやや丸みをもち、口縁部は緩やかに外反する。断面三角形の高台をもつ。瀬戸・美濃産で、大窯1段階、16世紀前半。4は、高台径約6cmほどの皿底部、断面三角形の高台をもつ。鉄軸が全面施釉されている。第3～4調査区出土。瀬戸・美濃産、大窯3段階で16世紀中、後半の所産。5は、擂鉢の体部片である。胎上には細繩を含む。内外面に銷軸が施されている。同じく第3～4調査区から出土している。瀬戸・美濃産で大窯1段階か。6は、口径約12cmほどの広く開いた胴部をもつ染付碗である。第3～4調査区出土。胴部に芭蕉文、口縁部には波濤文が描かれる。コバルトの発色は悪い。漆による補修痕がある。小野分類の染付碗C群。福建漳州窯系の所産と推定される。16世紀前半。7は、かわらけの口縁部片である。第3～4調査区出土。

8は、常滑産の壺である。第3～4調査区出土。口径約32cmほどで、頸部と胴下部の一部が残る。口縁部の縁帯が外側に伸び、「T」形状を呈す。14世紀前半の所産。9も常滑産の壺である。山頂の通称馬洗池と呼ばれている井戸周辺で表採されたものである。口径約38cmほど口縁部片で、縁帶は広くなり頸部に密着している。15世紀後半の所産。10は、瀬戸・美濃産の四耳壺である。第3～4調査区出土。口径約12.6cm、器高約40cm。肩部が張り体部が全体的に丸みをもち、頸部は直立しながら外反、口縁端部は玉縁状に肥厚する。肩部に横耳が4ヶ所につく。外面には銷軸が施される。被熱されている。16世紀の所産。（萩原三雄）

(2) 銭貨と金属製品（第8図-1、第8図-2～9、第9図-1～9）

第1調査区中央付近からは鉄製品が1点出土している（第8図-1）。破損し旧形をとどめていないが、平面形が若干弧状に湾曲しており、厚さは3mm弱で、用途・時期等は不明である。

銭貨は第1・2調査区では検出されなかったが、第3調査区で6点、第4調査区で2点出土した。第8図の2～7が第3調査区、8・9が第4調査区で、まず第3調査区の銭貨からみていきたい。2は劣化が進み、上が「景」、下が「元」で右がはっきりしない。「景祐元寶」もしくは「景祐元寶」の可能性が高いが、字の感じからおそらく「景祐元寶」（初鑄年1004年）であろう。3は真書の「皇宋通寶」（初鑄年1038年）である。4と5は調査区の東西トレーニング車の陶器片等の遺物集中出土地点近くから検出され、レベル的にも陶器片等と遜色はない。4は真書の「熙寧通寶」（初鑄年1068年）、5は篆書の「元祐通寶」（初鑄年1086年）である。6は著しく歪んでおり、銭種は把握できない。比較的薄く劣化が進み模鋳銭の可能性もある。7は昭和10年の「五銭」である。

第4調査区の8は、竪穴状造構の西側の際から出土した真書の「皇宋通寶」（初鑄年1038年）である。9は竪穴状造構の東側の斜面の裾から出土している。破損し劣化が著しいが「景祐元寶」（初鑄年1034年）と読める。

第3・4調査区出土の渡米銭のうち、判読できるものはすべて初鑄が11世紀代の北宋銭であった。中世後期あるいは末期の遺跡からは明銭の「洪武通寶」（初鑄年1368年）や「永樂通寶」（初鑄年1408年）が検出されるケースが多いが、この調査区からは確認されていない。

次に第3・4調査区の金属製品についてみてみたい。第9図のうち1～8が第3調査区、9が第4調査区から出土した。1～7は鉄製品で、1は2つの部分からなり接点は明確には接合しないが、同一個体と考えられる。食事用のナイフに似た形態をもち比較的新しい遺物であろうか。2～6は角釘で2や4の頭部は直角あるいは鋸角に折り曲げられた状態である。7は釘と呼ぶには細く、用途不明である。8は細長い円錐形を呈す中空の銅製品で、長軸にそって直線的な細い変色部分があるため、銅版を丸めこで接いで作った可能性がある。用途は特定できない。鉄釘をはじめとする金属製品の多くは陶器片が集中する調査区の東側地点から出土しており、図示していないがこの地点からは4cm大ほどの鉄滓が2点検出されている。9は第4調査区西端出土の鉄釘であり、この調査区からも鉄滓が2点出土した。調査区西端のものは7cm大、竪穴状造構西端のもの（同）は4cm大である。

さて、この第3・4調査区の地点はどのような場であったのか。鉄釘は建築物等を想起させ、鉄滓は近くで鍛冶がおこなわれたことを推測させる。焼土・炭化物を覆上中に多く含む竪穴状造構やピット群、礫石とも思われる石などの状況や、陶器類の器種構成などを含めて検討する必要がある。

（畠 大介）

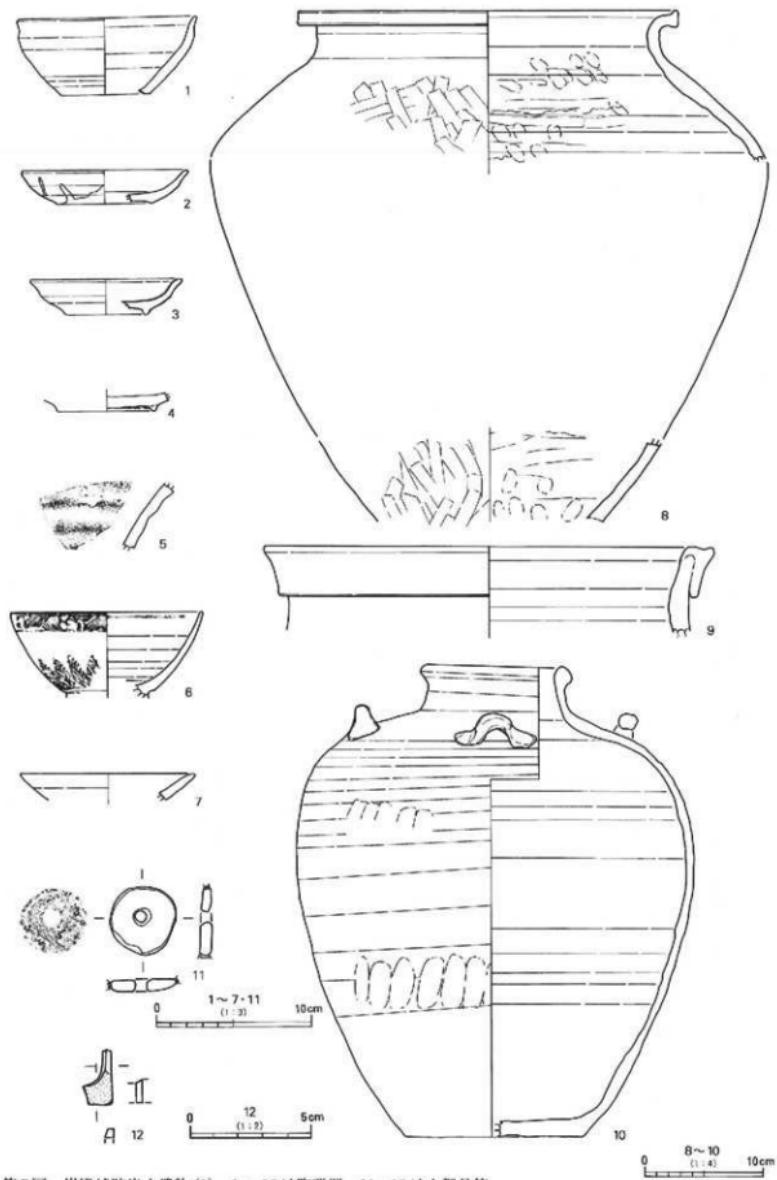
(3) 石製品（第9図-10～15）

10～12は砾石である。10は長さ5.5cmほどの変則な五角形を呈したもので、五面と頂部に使用された跡がある。砂岩製。11は残存長9cmの凝灰岩製の砾石片で火を受けている。12も凝灰岩製で、約5cm×4cmの大きさの砾石片である。13～15は、茶白である。いずれも第3～4調査区出土で玄武岩製である。13は下臼の受皿の一部分でこの部分の径は約26cmと推定される。14も同じだが、径は約42cmと大きい。受皿部分に漆の痕跡がみられる。15も下臼片であるが、受皿と下臼面が残る。臼面から底面の高さは約7.5cm。溝は摩滅して見当らない。

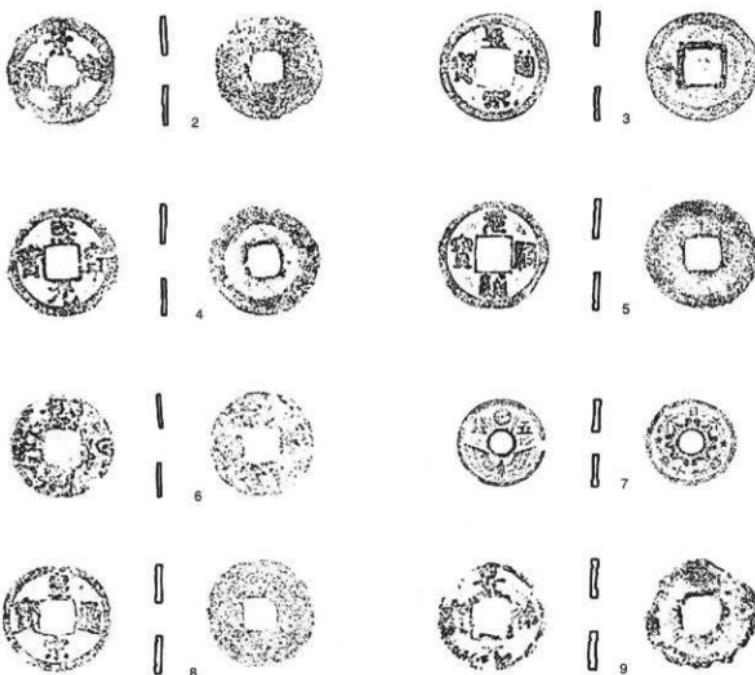
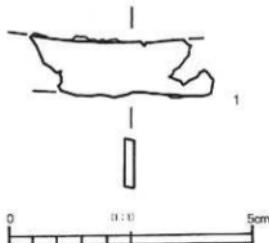
(4) 土製品等（第7図-11、12）

11は土製の紡錘車で直径4.1cm、孔の周囲には漆が付着している。12は、土師質の硯の脚の一部か。年代は不明。

（荻原三雄）

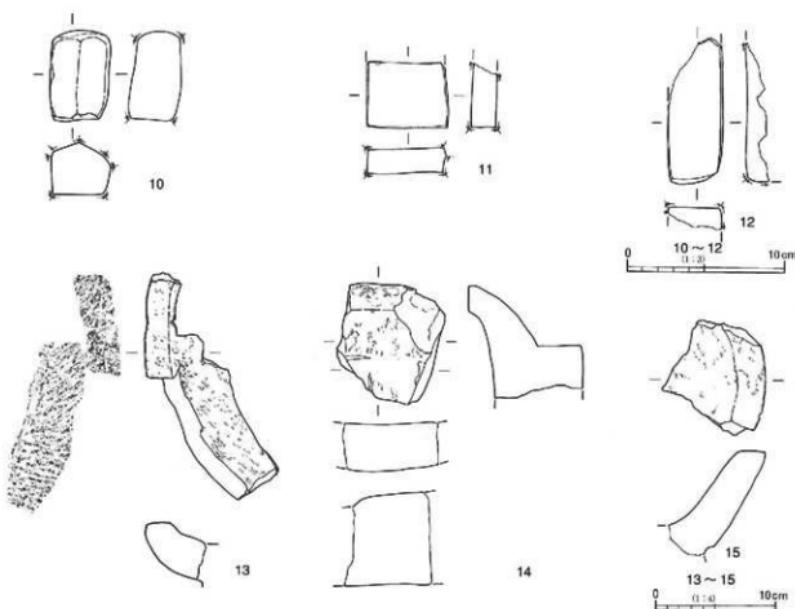
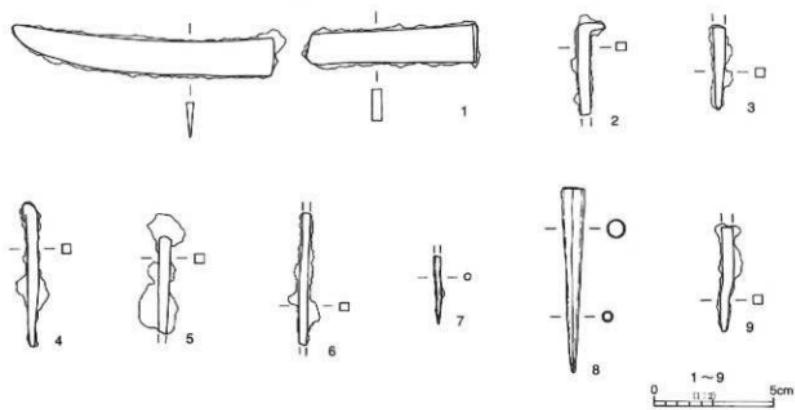


第7図 岩殿城跡出土遺物(1) 1～10は陶磁器、11・12は土製品等



第8図 岩殿城跡出土遺物 (2) 1は鉄製品、2～9は銭貨





第9図 岩殿城跡出土遺物(3) 1～9は金属製品、10～15は石製品

(5) 炭化種実 (図版8)

① 試料

第4調査区より、炭化塊（10×10cm程度）が出土した。試料Aは、この炭化塊の取り上げ時およびその後のクリーニングで一部が細かくなつたものを水洗して採取された種実である。試料Bは、破損せずに残つた元の炭化塊そのものである。この試料A、Bについて炭化種実の同定および粒数を計数した。

② 結果

・試料A　すべてアワであった。大半が単粒であったが、3～20粒程度が集合した小さな塊が少し見られた。単粒は4,664粒、小さな塊はおよそ400粒であり、合計5,000粒程度である。

・試料B　表面の観察では、すべてアワであり、おそらくアワの集合であると思われる。もしすべてがアワであるとすれば、試料Aの任意のアワ100粒の重さが0.05gであり、試料Bの塊は5.12gであるので、およそ10,000粒のアワの塊であると思われる。

③ アワの形態記載

アワ *Setaria italica* Beauv. 炭化胚乳

卵形で片凸レンズ形、尖端部はやや平坦である。腹面基部には細長い幅の狭いへそがあり、背面の胚部分の長さは果長の2/3程度。出土したものの中には頬が焼けただれて張り付いているものもしばしばみられた。

参考文献

吉崎昌・「北海道恵庭市柏木川11遺跡の植物遺体」104-113『柏木川11遺跡』1990

(新山雅広)

2. 近世及び近・現代の陶磁器 (図版9)

1は肥前・瀬戸・美濃以外の産地の製品とみられる陶胎染付の皿である。胎土は淡褐色で、釉の表面に貫入が多く見られる。2は瀬戸・美濃系の染付皿である。3・4・5・8・9は小壺である。3は内面に剥離するが上絵付で家屋図などを描く。4は端反りの器形で白磁、5は高台径の小さい白磁である。8は内面に染付で文字を記しており、残存部分では「かつ…正…」という文字が読みとれる。現代の製品であろう。9は褐色の下絵付で波線を描く。6は外面にゴム版で施文された酸化コバルトによる染付碗、流文と紅葉文がおそらく6単位施される。復元法量は口径8.2cm×器高4.8cm×高台径3.2cmである。7もゴム版による染付碗である。当地点は近代以降の製品がほとんどで、器種としては小壺が多く認められる。

第2表 岩城城跡出土近世・近・現代陶磁器 (すべて第1調査区より出土)

No	材質	器種・種別	技法・文様・装飾等	产地	製作年代	備考
1	陶器	皿	陶胎染付・貫入多	小明	19世紀前半以降	
2	磁器	皿	染付	瀬戸・美濃系	19世紀前半	
3	磁器	小壺	内面上絵付家屋図	不明	19世紀前半以降	
4	磁器	小壺	白磁	不明	19世紀前半以降	
5	磁器	小壺	白磁	不明	19世紀前半以降	
6	磁器	碗	ゴム版流水・紅葉文	瀬戸・美濃系	大正末～昭和初期	
7	磁器	碗	ゴム版	瀬戸・美濃系	大正末～昭和初期	
8	磁器	小壺	内面染付「かつ・正」	不明	近・現代	
9	磁器	小壺	褐色綾線文	不明	近・現代	

(森本伊知郎)

第3節 試掘調査から得られた成果と課題

1. 第1調査区

広い山頂鞍部の中で、幅1mのトレンチはあまりにも規模が小さすぎた感がある。そこから得られた成果

は決して多くはないが、表土が予想外に厚かったことや、ローム層の良好な堆積状態を確認することができた。

また、人為的な痕跡としては、幾つかの溝状(隅の丸い長方形)の掘り込みを確認できたが、これについては城郭の構築や修繕には直接的に関係はないものと思われる。同様の遺構は、一般の耕作地等に立地する平安時代の集落跡を発掘する際に、住居址より新しく、最近の耕作痕よりは確實に古い穴として頻繁に見受けられるもので、中世から近世の時期の、古い農耕の痕跡と考えている。第1調査区で確認された穴も、形態や深さ、等高線に並行あるいは直交して複数存在するなどの共通点があること、また、この場所が非常に地味の肥えた農耕の適地であることから、農耕の痕跡であると考えられる。

岩殿山周辺にも山頂まで耕地として利用していた例があり、岩殿山の北西に面する通称「峰山」では昭和40年代頃まで、山頂を含む一面が畠地であった。岩殿山でも、中央自動車道の新設工事以前は中腹の岩壁以下の傾斜面が耕地として利用されていた。しかし大正年間に撮影された岩殿山の写真には畠が写っていないことから、太平洋戦争前後の時期に耕地が開発されたものと推測される。のことから、山頂部もその頃耕作がなされたと考えることもできるが、それ以前である可能性も含め、敢えて時期については不明としておきたい。

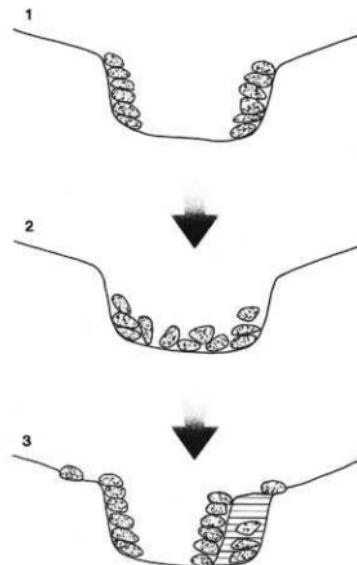
その理由としては、1) 掘り込みの形態などの特徴からは、上記の「古い時期の農耕」の痕跡と考えられる。2) 中腹以上の、礫岩が露出する地形の中では唯一の耕作可能地帯であるが、山裾の耕地とは位置的に離れており、広いと言っても700mほどの場所に耕作地を求めたかどうか、また表面から1m以上の深耕をする作物をわざわざ山頂に作付けしたとは考えにくいことが挙げられる。

2. 第2調査区

調査された池の構造は、最近修復された構造ということになる。しかし、石積みを取り去り、壁面を断ち割ったことにより、古い池の規模などが明瞭になった。

十数年あるいは二十年以上前に行われたとされる池の改修は、石積みが崩壊したために、あるいは老朽化に対する補強のために行われたものであろう。池の中の水と泥を払い出した時点で、石積みの下部および底部に落ち込んでいる石のみが「岩殿山礫岩」であったことにより、改修時に使用した石は麓から運ばれたものであることが推測できる。逆に言えば下部の石は改修前から存在していたと言えよう。上部はすべて川原石、中間は入り混じり、下部は礫岩で石積みされている現状からは、崩れていない下部の石はそのままに、再利用できる石と運ばれた石を上に積んで改修した様子がうかがえる。底には崩壊した状態のまま礫岩が残されていたが、実用のためではなく観光目的の改修であったため放置されたのであろう。

断面にかかる石を外し裏側の埋土を除去したときに、北側の壁面の立ち上がりと、その内側に崩れかけた礫岩の石積みが現れ、改修前の古い池の掘り込みが確認された。南側は本来の壁面を利用し、北側のみ規模を小さくして改修されたものであることがわかった。



第10図 池構築変遷模式図

その経過を模式図に表すと第10図のようになり、次の1～3の経過がたどれる。

- (1) 古い池があった状態。石積みの内側の底径はおよそ210cm。
- (2) 故意または老朽化により石積みが崩壊し、中に落ち込む。
- (3) 北壁を埋め、新しい壁面を造りながらその内側に石を積んだ。南壁側は旧壁面を利用し、残った石積みの上に石を積み上げ、内側の底径（長軸上）115cmほどの一回り小さい池として改修された。
〔岩殿城址行〕に「昔は三倍も広く、深さも倍はあり（中略）と野尻氏が語ってくれた」とあるが、直径が1mも異なればうなづける話ではある。ただし、底部の深さについては過去および現在を通して、掘り込みの痕跡ではなく、地表面が崩壊などにより低くなったことを想定しなければ考えられない。

水量については第1節に記したが、掘りあがった壁面を観察していると、地形上高位部にあたる北西側壁面のどこからともなく水が染み出ている様子がみられた。これを池として利用するには底部や壁面からの流失量以上の水量を確保するか、浸透による流失をできるだけ防ぐことが必要である。第5図の断面図に示す8層は青灰色の粘質土層である。泥にまみれて観察が困難なこともあり、意図的に貼り付けられたものか、底部の岩盤が水性作用で粘土化したものかは明確でないが、水の流失を妨げる機能を果たしているようである。

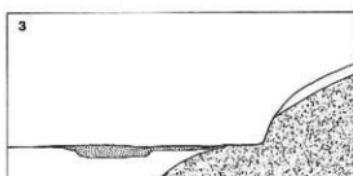
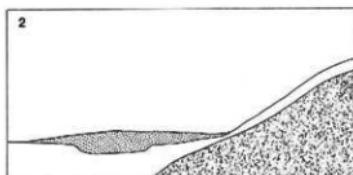
3. 第3・4調査区

両調査区からは、数箇所の人为的な痕跡と陶器片などの遺物が確認できた（第6図）。1は第1調査区に確認された溝状（隅の丸い長方形）の遺構と同じ形態であり、同様の機能が考えられる。第1調査区の項で記したように農耕の痕跡であれば、耕地はこの付近まで広がっていたことになろう。

2は調査区内で確認された穴の中では最大で単独で確認されたものである。柱穴などの機能も想定されるが、調査区域内には対応する穴は確認されていない。また、この周辺から古錢が出土したことから、洞などが祀られていた可能性もあるが、それと2の穴との関連は不明である。

第3調査区調査時点ではその存在が不明確だった堅穴状遺構は、第4調査区の調査時に円形の掘り込みとして確認された遺構である。堅穴内部を中心に多数の陶器片が出土したが、その分布は、堅穴内部および堅穴の周囲に広がる焼土・炭化物片混じりの土層の範囲と異なる。このことから、出土した陶器片は、堅穴に伴出するというより、堅穴を埋めている土層に、焼土や炭化物片とともに混入している状況と言える。中世における山頂での遺構で、本例のような円形の掘り込みを有する類例を得ず、遺構の機能は明確にできないが、以上の検出状況からは、堅穴廃絶後に人为的に埋められた様相がうかがえる。また分析の結果、出土した陶器片が二次的に被熱していることから、廃絶の要因として火災などが想定できる。

堅穴状遺構から出土した粒状物の炭化塊は分析の結果、アワ（粟）であることが判明した。このアワは集塊となって発見されたことから、調理後のものである可能性があるが、分析では触れられていない。いずれにせよアワを



第11図 第4調査区遺構変遷模式図

残したまま廃絶したことは確かで、出火が突發的なものだったことを思わせる。

この竪穴状遺構と第4調査区北東部に確認した岩盤のテラスとの時間的前後関係を示す資料は得られなかつたので、確認の状況から推測してみたい。

テラスの床面と竪穴状遺構の確認面にはレベル差があり、テラスの床面の方が数cm高い。この差は、竪穴状遺構を埋めている焼土混じりの土層の分で、これを除去して竪穴状遺構を確認したものである。調査当時この土層は、単純に床面上の埋土として考えられ、遺物も多量に出土することから「取り除くことができる土層」として掘り進み、結果的に竪穴状遺構を確認したのであるが、上記のように竪穴状遺構が人為的に埋められたと考えるに至った今、改めて考えると、焼土混じりの上層を確認したレベルは、テラスの床面と同一の平面であったと推測される。つまり、焼土の混じりの上層を除去した時点で確認された竪穴状遺構と、それを埋めた上層の上面と同レベルのテラスには構築時期に時間差があると考えられる。この変遷を模式図に示すと第11図のようになる。

- (1) 円形の竪穴状遺構が機能していた時期（性格や構造は不明）。
- (2) 竪穴状遺構が廃絶し、竪穴内部および周辺が埋められる（埋め込んだ土には焼土・炭化物片・陶器片などが混じることから、廃絶の要因として火災や放火など火に関する事項が想定される）。
- (3) その後（直後かあるいは時間差があるのか不明）、より広い平坦面の必要が生じ、尾根掘を切り落としての造成が行われた。その際、一部に岩盤が露出したが、これを削って有用な面積を確保した。

という経過が想定される。したがってこのテラスは、テラスを造ることを目的としたものではなく、広い造成面の一部であると理解しておきたい。岩盤に掘られた穴や溝の存在から、この平坦地には何らかの施設が存在していたものと思われる。

調査区北側にある、東西に延びる尾根の形状が不自然であることから、人の手が加えられていることが推測されていたが、テラスの面の造成時に岩盤を削ってまで平坦面を造り出している状況からも、人為的に尾根を切り崩していることは確かである。さらに竪穴状遺構が構築された時点で、既に平坦面が存在していたことから推測して、竪穴状遺構築以前に尾根の形状変更工事がなされていた可能性が高いと考えられる。

以上、調査の成果として明らかになったことや推測されることについて触れてきたが、確認された遺構が城郭または修験あるいはそれ以外の行為の結果なのか（竪穴状遺構については、アワの災害塊が出土していることから、山岳修験関連の遺構ではないと考えられる）、機能や性格を明確にできる確認は得られなかった。しかし、今まで伝説的に語られてきた岩盤山頂に、遺構が存在し、大規模な造成が行われた痕跡があることが明らかになった。岩盤山頂には広大な未調査区域があり、今後今回ののような学術的な調査が実施されることによって、多くの事実が解明されることが充分に期待できる。

今後の課題として、「甲斐国志」などにある地名の比定や機能の検証、山頂部における修験道の痕跡の確認など、残された課題は多い。ここでは特に地名の比定について、現在問題のあると思われる事項について触れておきたい。

岩盤城域内の地名について、「甲斐国志」巻之五十四古跡部十六ノ下都留郡郡内領〔岩盤城跡〕には「岩盤権現ノ祠」「一ノ堀」「二ノ堀」「本城」「馬場」「大門口」「蔵屋敷」「亀ヶ池」「揚木戸門」「花見カ窓」「出丸」ととりあげられている。また、浅野家文書の「岩盤城図」には、「觀音堂」「宮」「本城」「馬冷場」「馬場」「大手」とある。これらが書かれたのが江戸時代であるから、どれほど正確に戦国期の地名が伝えられているかは疑問であるが、少なくとも江戸時代にはそのように呼称されていたと思われる。

現在、山頂には「掲城戸跡」「番所跡」「馬場跡」「馬屋」「蔵屋敷跡」「空窪」「烽火台」「亀ヶ池」「馬洗池」「本丸跡」の表示板が立てられ、横にある説明板にはこの他に「二ノ丸」「三ノ丸」「兵舎」「物見台」「大手門」という名称が記されている。これらは村絵図などに記されている地名を基に場所を特定したものであろうが、「堀」や

「池」など、遺構が残るものはともかく、根拠が示されないまま場所が比定されたり、正面という意味の「大手」に「門」があったことになっている。このような実態とともに、必要以上に美化されて紹介されるため、「天守閣を備えた居城」があったと思い込んでいる人はかなり多い。

今後、岩殿山の実態を解明してゆく上でも、それぞれの名称を整理し、明確な検証を行いながら研究を進めてゆく必要があるものを感じている。

註

(1) 小林利久「岩殿城址」 1967『甲斐路』13号

(杉本正文)

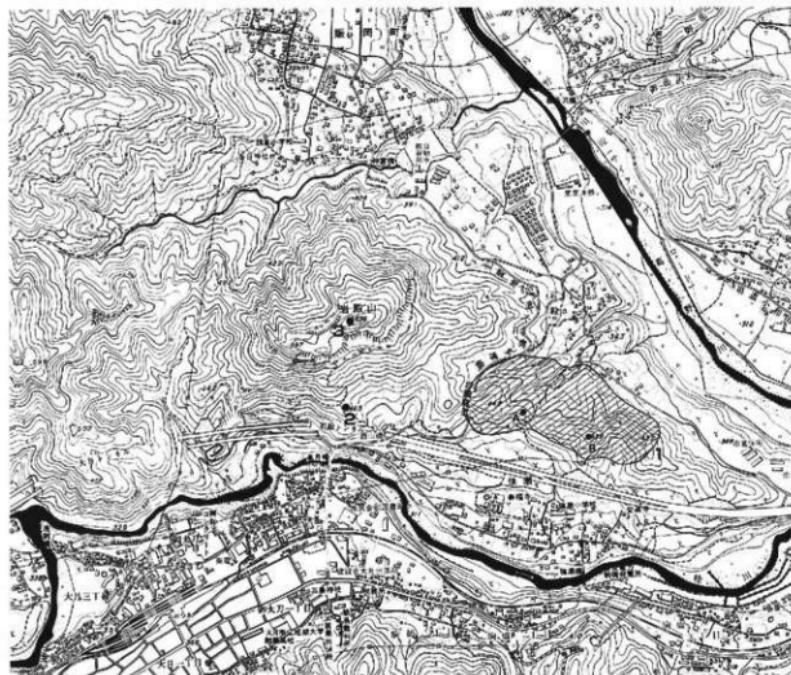
第4節 その他の調査

岩殿山頂及び山麓では、今回の学術調査以外にも発掘調査が行われた経過がある。ここでは補足資料として、現在までに実施された調査の概要を記しておきたい。

1. 中段開発（第12図—1）

岩殿山の南東側山腹には東西に1,100mほど連なる尾根がある。この尾根は、葛野川と桂川に挟まれつつ、合流点手前まで続く標高430～450m（麓との比高差約80m）ほどの小山塊である。

平成元年、大月市土地開発公社はこの尾根の主要地方道大月奥多摩線（現国道139号線）以東の部分162,000



第12図 その他の発掘調査実施位置図（1：中段開発、2：丸山公園、3：防災無線中継局舎）

mを宅地として造成する計画（現ゆりヶ丘）を策定した。

山梨県教育委員会から開発予定地内の遺構の有無について確認するよう指導を受けた大月市教育委員会は、同年5月に現地踏査と小規模な発掘調査を実施した。

踏査では、尾根の最東端付近に尾根を切ったような空壕状の痕跡が確認された。これが人工的なものであるかどうかは不明であるが、計画区域外であったので、それ以上の調査は行わなかった。尾根の上にはこれ以外に、目視によって遺構と確認できるものは確認されなかった。

その他の遺構の存在を確認するために、小規模な試掘調査を行うことにした。調査対象箇所は、次の2カ所を選定した。

1—A地点は、強瀬・岩殿集落を結ぶ峠道の頂部、切り通しのやや西側にある小ピークで、最も展望の利く平坦地である。 2×6 mのトレンチを設定して発掘調査を行った。地山は地形なりの馬の背状の形状で、深さは20~30cmであった。地山は火山岩からなり、表面の無数の複雑な亀裂と、亀裂中に土砂が潜り込んでいる様子が観察でき、地質学上の藤野木一愛川構造線に沿った複雑な軟弱な地盤の一端がみられたが、人工的な痕跡は確認されなかった。

B地点は標高438mで、計画区域内の最高位地点である。面積はさほど広くはないが、「金毘羅大権現」「天狗大権現」を祀る祠があり、信仰の場所でもあることから調査対象とし、 2×4 mのトレンチを設定した。表土は薄く、深さ10cmほどで地山が確認できた。地山層は赤褐色や橙褐色・黄褐色の火山岩を主体とした層と砂礫混じりの褐色土が複雑に混じっていた。地山を掘り抜いたような人工的な痕跡は認められなかった。

2. 丸山公園（第12図、2、第13図）

南面する鏡岩岩壁の下方は急斜面の崖縁地形となっている。その南面に1ヶ所だけ南方へ突き出した小山があり、通称「丸山」と呼ばれている。「丸山」という呼称がいつ頃から使われたものか定かでないが、古絵図などにはここを丸山と呼んでいた確認はないようである。

丸山からは、鏡岩にさえぎられる北面以外、特に南東から南西方向の展望がよいことから、近年になり丸山を含む周辺一帯は、桜などの樹木が植栽され、頂部にはあずま屋が建てられるなど「丸山公園」として整備され、市民の憩いの場として、また山顶を目指す登山者の休憩場所として活用されていた。

平成6年、大月市はこの丸山公園の新たな整備の一環として、丸山頂部への展望館建設を画策した。主管課である商工観光課は、市教委・県教委との協議の末、まず丸山公園全体を対象とする発掘調査を実施し、調査の結果により展望館建設の場所、意匠等を検討することで合意し、同年7月11日に調査に着手した。調査方法は、桜を除く周辺の植栽物を除去した後、頂部中央から4区画に分割し、1区画ごとに表土を剥ぎ、土層堆積状態や人為的な痕跡を確認することとした。

頂部には表土がほとんど認められなかった。明らかに人工的に削平されており、削平以来そのままの状態で利用してきたものと思われる。肩から裾にかけての傾斜面には15~20cm前後の表土が貼りつくように覆っていた。表土を取り去った丸山は安山岩などの火山岩からなる岩体で、土砂などを盛って構築したものではないことが明確になった。土層は次の3層に分層できた。0層—あずま屋の柱の基礎埋込み部（搅乱）、1層—黄褐色ローム塊、2層—サツキが植栽されていた表土であり、基本的には、すべてが時期の異なる搅乱層であった。

斜面には、丸山への登り下りのための擬木を打ち込んだ跡が、南北に確認されただけである。

頂部には、あずま屋の基礎の搅乱以外に、數箇所の小さな穴が確認できた。これらの多くは不定形で、基盤の亀裂痕であると思われるが、人為的と考えられる穴も数箇所に認められた。また、どちらとも言えない不確定な形状のものも存在している。人為的と考えられるものも配置などに規則性がなく、機能や性格は不明であるが、あずま屋の構築以外の目的で何らかの施設があった可能性がある。



第13図 丸山完掘実測図 (●=樹木、○=外灯)

裾部の北側には長径320cm、短径265cmの楕円形の穴が確認された。丸山の周辺ではこの部分だけにロームの堆積が認められ、このロームを掘り込んだ穴である。覆土からはジュースの空缶やビニール袋などが出でたり、壁面に重機の爪痕が残ることから、新しいものであることがわかる。頂部西側の肩部に認められた1層は、平坦部の面積を広げるため貼り付けられた土層であると考えられるが、その供給源はこの穴であったと推察される。

反対側の南側には石積みが存在した。これは掘木の穴列に沿って積まれていることからも、南側登り口の傾斜を緩くするために積まれた新しいものであることが分かる。

岩肌を剥き出しにした丸山は、北側の傾斜が緩く、南はやや急傾斜である。全体としては均整の取れた、円錐の上部を取り去ったような形状をしていることが明らかになった。この形状は、自然に残された地形を利用しながら、頂部の平坦部はもちろん、肩から裾にかけての部分も人為的に取り崩し、形を整えたものと言えよう。残念ながらその時期を決定付ける伴出遺物はないが、富士山の眺望が利くことから、山岳信仰関係の遺構である可能性もある。また、裾部北側の平坦な鞍部も含めた一帯が、岩殿城の構えの一部として、特に山頂からの連絡の中継地として機能していた可能性は高いと考えられる。

3. 大月市防災無線中継局舎改良予定地（第12図-3、第15図）

岩殿山東側の山頂には、約300m²の平坦地があるが、現在この面積のほとんどが電波中継アンテナの鉄塔用地として利用されており、大月市の防災無線中継局舎やアンテナもここにある。

大月市は今後の防災計画の一環として電波出力の増大のため、局舎とアンテナの改良を計画した。これにより調査の必要が生じ、平成9年11月18日から発掘調査に着手することになった。調査面積は、局舎、アンテナ、フェンスの基礎によって現状が維持される部分、約32m²を対象とした。

表土は疊混じりの暗褐色土で、浅い部分では10cm、深い部分（南西部傾斜面下位）で70cmほどであった。表土下は円錐を多量に含む黄褐色の堆山で、風化により南下した疊岩の表層部と思われる。全体的に平坦で、現地表面と同様の地形であるが、調査区南西部では現地表面以上の急傾斜をなしていた。これは局舎建設当時、余った土砂で斜面を埋め、平坦面を広げた結果であると考えられる。

局舎増設部分（局舎東隣接）には塵を埋めた穴以外に何にも確認されなかった。

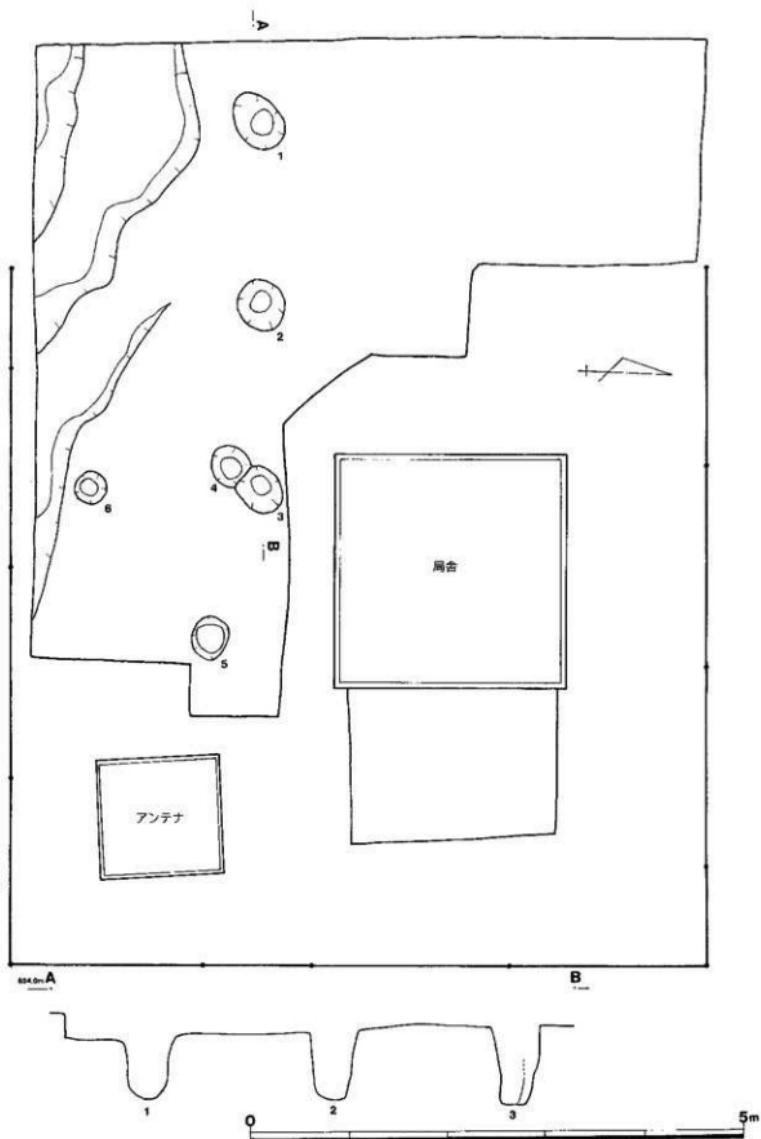
鉄塔新設予定地（局舎南西部）からは6ヵ所の穴が確認された。いずれも円形の平面プランで、確認面からの深さや直径は第3表のとおりである。3の覆土の中位以下には、有機物が腐食して土に置き換わった部分と、それを埋めていた疊混じりの土砂との境界部が明瞭に認められ、この穴が柱穴であり、柱材の直径は18cm前後であったことが分かった。他の穴から柱痕は確認できなかったが、3と同様の形態である、他の穴も柱穴であると考えられる。

6ヵ所の穴のうち、1～3は直径、深さともほぼ等しく、一直線上に等間隔（芯～芯キ185cm）に並んでいたことから、同一施設の一部分であることが予測された。これらの広がりを確認するために、2の北側2.1mまでと、3の延長である東側2.4mまでの範囲を拡張し調査したが、対応する穴は確認できなかった（3の北側は局舎があるため調査不能）。3の南に位置する6は、この柱穴とは規模が異なるが、1～3の列と直角の方向に180cmの場所に存在しており、位置的にみる限り一連の施設である可能性もある。

3と一部重複する4は、5と同様の規模を有する。調査区内にはこの2ヵ所以外に対応する穴がないため、



第14図 A地点完掘状況



第15図 山頂・防災無線中継局舎改良予定地実測図

明示することはできないが、間隔が180cmで、1～3と並行する東西方向に並んでいることから、同様の機能であると考えられる。3と4の重複については、土層観察からは明確な差異が認められなかったが、1～3群と4・5群では明らかに規模が異なり、構築時期に時間差があるものと思われる。

この穴の機能については、次のように考えられる。

1や2の北側に対応すべき穴が認められないことから、小屋や倉庫などのように平面的に広がる施設の存在は考えにくい。地形的に南側直下は崖であり、これら柱穴列群の位置は崖の上（平坦地の縁辺部）にあたる。以上か

ら、柱を使って施工された施設は檻であったと推測される。また、1～3と4・5が同時に存在していなければ、数次にわたって造られた可能性もある。時期を示す遺物の出土はなく、その時期を特定することはできないが、山岳修験に関連する可能性は低く、城郭関連の施設痕であろう。

（杉本正文）

番号	直径(cm)	深さ(cm)
1	45	66
2	47	72
3	45	70
4	35	45
5	37	46
6	32	30

第3表 柱穴計測値

第5章 岩殿山麓の集落空間構成に関する研究

第1節 集落の分布と特徴

桂川と葛野川に挟まれた岩殿山の山麓には浅利・強瀬・岩殿・畠倉などの集落が点在している(第16図)。近世以降、いずれも山間部の純農村的な集落となっているが、その中でも強瀬は、猿橋から花咲へ抜ける甲州道中の脇往還に位置する「宿」系の集落として、また岩殿は岩殿山七社権現等の「門前」系の集落としてやや特殊な位置を占めていたと考えられる。

第17図は、大月市役所に所蔵される旧駿岡村(強瀬・岩殿・畠倉地区)の地籍図をベースマップとして岩殿山周辺の小字名と「山梨県第三」⁽¹⁾・「区都留郡駿岡村之内強瀬粗略全図」などの絵図史料を基に比定した明治初期までの幹線道路を図示したものである。強瀬の集落は、桂川に沿って河岸段丘上を東西に走る往還に沿うように街村を形成しており、枝村の「川隣」および本村の「殿畑」「西畑」地区に宅地群が分布している。一方、岩殿の集落は、岩殿山七社権現の別当職であった常楽院および人坊を中心に岩殿山門前に塊村を形成しており、宅地群は「夏地」「中丸」地区に分布している。

幹線道路網の構成は、大きくふたつの系統に分けられる。第一は、強瀬を貫通する往還であり、桂川を迂回して下和田村から葛野川を渡り浅利を経て花咲へ抜けるルートであり、近世までは甲州道中の脇往還として機能していたと考えられる。また、岩殿城跡を描いた近世絵図(第22図)によれば、岩殿城の「人手先」もこの往還から派生していたとみられる。第二は、集落間をネットワークする往還であり、強瀬・畠倉・浅利・葛野といった周辺集落を結ぶ幹線道路網は、すべて岩殿山門前の参道前に集結していることが明らかであろう。このように岩殿山麓の集落群の中では、強瀬と岩殿が、一般的の農村集落とは異なる特徴的な立地特性をもっていたことが窺われる。

なお、「甲斐国志」卷之十九、村里部によれば、文化3年(1806)頃のこれらの集落規模は、浅利村：高87石4合・戸数58戸・人口1277人、強瀬村：高200石9斗3升1合・戸数79戸・人口1353人、岩殿村：高69石7斗5升4合・戸数45戸・人口201人、畠倉村：高305石6斗4升3合・戸数116戸・人口575人であり、近世後期における集落規模の点では、平坦地に多くの田畠をもつ畠倉村が大きくなっている。また、近世初頭の検地では、岩殿・畠倉は強瀬に属して「小畦村」と称され、文禄3年(1594)及び慶長15年(1610)の村高は小畦村589.460石、浅利村77.850石であり、寛文9年(1669)の検地の段階で強瀬村200.355石、岩殿村69.463石・畠倉村304.346石と分村していることが確認される。⁽²⁾

さて、これらの集落群は、古代に建立され15世紀以降に発展した岩殿山円通寺および岩殿明神(七社権現)の周辺集落として、中世末期にはすでに成立していたとみられる。とくに強瀬は、永正17年(1520)に人破した圓通寺の再建・修復に関わる「棟札銘」(「甲斐国志」卷之九十仏寺部、第十七下所収)に、

棟札之事

行基菩薩建立大同元年以來到永正十七年、依而及大破、爰上總國住僧賢覺阿闍梨為本願、造万民、之處少破修理畢、仍而御奉加之事

島日百匹 武田左衛門大輔信友、駒一匹太刀一腰 当郡主義平信有、駒一匹太刀一腰 半藤九上之奉行、駒一匹太刀一腰 藤原道光下之奉行、太刀一腰 源実次、駒一匹太刀一腰 繼吉、駒一匹太刀一腰 藤原実吉、駒一匹太刀一腰 藤原長吉、駒一匹太刀一腰 源忠長、駒一匹 源重胤、駒一匹 家重、三百文 白洲信重、二百文 内匠助長吉、五百文 其時当郷官長沼以秀、五百文 奥秋神右衛門尉長吉、二百文 牛田若狭守、二百文 奥秋大藏、百文 拝祐、五百文 強瀬四郎三郎、屏之本願 志村左近進長吉、駒一匹 強瀬六郎右



第16図 岩殿山周辺の集落（国土地理院5万分ノ1地形図）



第17図 岩殿山周辺の小字名と近世の幹線道路



第18図 往還の雁行部分



第19図 短冊形地割と前庭をもつ主屋配置



第20図 往還から奥に引いた宅地構成



第21図 往還からの引込み路と南側からのアプローチ



第22図 岩殿城の「大手先」と強瀬村

とあり、武田信友や小山田信有をはじめとする郡内衆の奉加に加えて、強瀬の有力住民から寄進があったことが知られる。したがって強瀬は、岩殿山円通寺に密接に関係した集落として、16世紀初期にはかなり発展した集落を形成していたことが推定されるのである。

一方、これらの集落と戦国期における岩殿城との関係については直接的な文献史料がみあたらず、現段階では不明とせざるを得ないが、本稿では、次節において強瀬（「宿」系集落）、岩殿（「門前」系集落）というふたつの特徴的な集落の空間構成について復原的考察を加えることから、逆に岩殿城下の集落としての性格について考察してみたい。

また、戦国期における岩殿城下の構成を考える場合、桂川対岸に位置し16世紀段階にすでに町場を形成していたことが確認される駒橋や、岩殿市を支配した商人司・加津野主清右衛門尉の拠点であった葛野川対岸の葛野などの中世集落もその領域に含めるべきであろうが、これらに関しては史料上の制約もあり、稿を改めて論じることとした。

註

- (1) 中村和夫家所蔵。以下に引用する強瀬に関する絵図史料は同家所蔵である。岩殿に関しては、岩殿区有文書（真藏院保管）に含まれる絵図史料を比較対照した。
- (2) 岩殿区有文書（真藏院保管）。
- (3) 『大月市史 史料篇』956頁～958頁の「村高推移表」を参照。
- (4) 『甲斐国志』巻之九十、仏寺部。円通寺には応永6年（1399）～8年に「大般若經」（北条熟美家文書）が奉納されており、また『創國雜記』（『続群書類從』紀行部所収）によれば、聖護院道興は廻國の途中、文明19年（1487）に岩殿明神（七社権現）に参詣している。
- (5) 大文期には、武田信虎が浅間神社御御柴屋坊に対して「駒橋之内宮のわき」6貫文の在所を与えていた（「武田信虎判物」『新編甲州古文書』217号）。
- (6) 「岩殿市連雀商人ノ由來書」（『甲斐国志草稿』）の奥書によれば、葛野村落合忠右衛門の先祖である加津野主清右衛門尉は連雀商人の頭として毎年3月18日の岩殿祭礼の市から役錢を徴収したことが記されている。詳しくは、堀内真「市と連雀商人の由来書」（『甲斐路』70号、1991年所収）を参照されたい。

第2節 集落空間構成の復原的考察

1. 強瀬の集落形態—「宿」系集落—

(1) 集落空間構成の特徴

集落形態を分析するための基本史料として、昭和22年（1947）にG.H.Q.によって撮影された「空中写真」（国土地理院）が現存しており、中央自動車道開通前の土地利用状況や敷地形態さらに当時の家屋配置までを詳細に読み取ることが可能である。また、強瀬に関しては、明治3年（1870）6月に強瀬村上組名主・中村伝左衛門によって作成された「甲州都留郡内領強瀬村上下組惣絵図面」（後掲第24図）があり、敷地一筆毎の地目・面積・所有者などを特定することができる。同絵図の記載内容の詳細については、(2)で検討することとし、ここではまず、前掲の空中写真に明治初頭の地割を比定した第23図と現状の集落造構調査とともに、集落空間構成の特徴について検討してみたい。

強瀬の集落空間構成は、基本的には集落を東西に貫通する往還に沿って短冊形地割の宅地が両側に並ぶ街村状の集落を形成していることがわかるが、第17図の「西畑」と「殿畑」の小字界に相当する集落中央の南



第23図 強瀬の地割形態 明治3年(1870)「甲州都留郡内領強瀬村上下組惣絵図面」に據る。
下図の空中写真はG.H.Q.撮影(昭和22年、国土地理院)。

北道路の東西で集落形態が異なっていることに特徴がみられる（以下、この小字界の東側を東部地区、西側を西部地区と称する）。

すなわち、西部地区では、往還が直線状に通り、西端部でし字型に2回転しておる（第18図）、極めて計画的な道路形態をもつ。また西側の半分以上が畠地となっているが、地割形態では往還の両側に30間程度の一定の奥行をもつ短冊形地割が規則的に並んでいる。それに対し、東部地区では、往還は微地形条件に対応するように湾曲しており、短冊形地割の形状も不規則となっている。

また、伝統的な住居配置をみると、西部地区では、往還に対して短冊形の敷地間口とほぼ同様の平行規模をもつ主屋を平入形式に建て、往還から直接アプローチする形式である。通常の町家のようすに主屋を接道させる場合もあるが、むしろ前庭を設けて主屋を若干奥に引いて建てる配置形式が一般的である（第19図）。

一方、東部地区では、同様の配置形式もみられるが、むしろ特徴的なのは、短冊形地割を前後に分割することで、往還に面して前後に数軒の主屋が並ぶように配置されており、引込み路を設けてアプローチする形式が多くみられる点である。また、往還の南側の敷地では、往還側に出入口を設けず、南側に回り込んで南庭からアプローチする農家型の配置形式も多く見受けられる（第20・21図）。こうした配置形式は街村から塊村への移行形態とみることもでき、基本的には分家輩出などの新垣敷の設立に伴う戸数分割や畠地の屋敷化によってもたらされたものであろう。

このように敷地形態や配備形式の観点からみると、西部地区が、往還を強く意識した都市的な集住形式であるのに対して、東部地区は農村的な集住形式であるとみなされる。強瀬は、ふたつの異なる集住形式が往還によって東西に連絡された集落空間構成をもつてゐる。

この他、集落周辺の空間構成として注目される点は、集落北側一帯の斜面で約4mの段差をもつ幅20間～40間程度の平用地が造成されていることである。近世以降は大半が畠地として利用されているが、こうした高台の平坦地に全福寺や安楽寺などの寺院が立地している。後述するように中世の居館跡とみられる「御所」もこの平坦地に位置しており、こうした後背地の大規模な施設群による積極的利用が、強瀬の集落整備と並行して実施されたことが想定される。

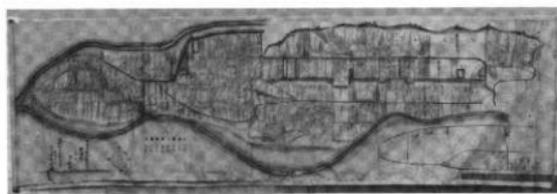
以上のような集落空間構成の特徴が抽出されるが、次に、絵図史料を用いてこうした集落空間構成の形成過程について考察してみたい。

（2）絵図史料による集落空間構成の復原的考察

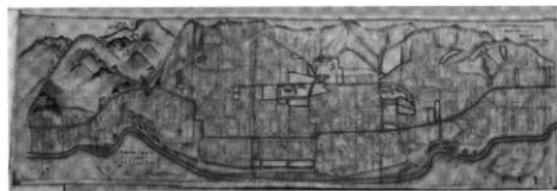
前掲の明治3年（1870）「甲州都留郡内領強瀬村上下絵図」（第24図、以下「總絵図」）は、明治初頭の作成であるが、敷地内に現所有者の他、旧小字名と複数の地目・面積・分米および旧名請人名が詳細に記述されており、この記載内容は、近世段階の土地所有状況を一筆毎に現状と比較対照したものとして注目される。例えば、絵図の作成者でもある上組名主・中村伝左衛門の宅地についてみると、旧小字名として「元馬場内・陣屋」とあり、敷地内には「四十三 屋敷三畝歩 三斗四升五合、四十四 家ノウラ 上畑五畝歩

五斗五升、四十五 同所（家ノウラ） 桑一束 三升六合」と3つの土地の地目・面積・分米、そして旧名請人として「請 與右衛門」と記載されている。つまり、明治初頭の大規模な短冊形地割をもつ中村伝左衛門の宅地は、近世段階には屋敷（3畝）と裏地の上畑（5畝）および桑地の3つの地目で構成されていたことが判明するのである。

それでは、この土地に関する記載内容はどの時期まで遡るものであるのか。このことに関しては、（3）で検討するように、寛文年中「郡内領強瀬村検地水帳」の記載内容と一致することが判明する。つまり、寛文検地で確定した土地所有状況が、その後の修正を加えながらも基本的に繼承され、明治初頭の現実の地割形態と対応させる形式で一筆毎に記述されているのである。したがって、總絵図を詳細に分析することで、寛文期まで遡及して集落空間構成を考察することが可能となる。



全体図 1 (925mm × 2840mm 軸装)



全体図 2 (910mm × 2920mm 軸装)



部分図一西部地区の「御所」と上組名主・伝左衛門屋敷

第24図 明治3年(1870)「甲州都留郡内領強瀬村上下組惣絵図面」(中村和夫家所蔵)

① 小字名

ここでは、まず、「惣絵図」に記載された旧小字名について検討してみたい（第25図）。明治期以降の集落部分の小字名は「西畠」と「殿畠」のみであるが、近世にはさらに多くの小字名が集落内に存在している。

まず注目されるのは、東西往還と集落を二分する南北道路の辻の東側を「見附ノ外」、西側を「見附ノ内」（共に字名は坂下）と称している事実である。そして見附ノ内に相当する西部地区では、西畠・西畠道下・西川ハタ・大門平・大牛・西畠などの小字名があるが、集落北側の高台の平坦地に「御所」と呼ばれる一画があり、往還から引込み路を設けていること、その前面の往還に面した数ヶ所の短冊形地割には「馬場」という記述があることが確認できる。

一方、東部地区では、東畠・カジ畠・殿畠・用明・外畠・宿畠・川ハタ・子ノ神・堂ノ前・堂ノ上などの小字名がみられ、下宿・中宿・宿畠など「宿」地名があることが特徴である。

以上の近世の小字名から推定されることは、集落の西端部でし字型に屈曲する直線道路とその両側に明確な短冊形地割をもつ西部地区が「御所」と称される大規模な居館とセットで、「見附ノ内」としてある時期に計画的に建設されたのではないかということである。それにもかかわらず、「惣絵図」では直線道路の両側に面する敷地の半分以上が畠地となっており、17世紀中期にはすでに衰退していた状況が窺われる。つまり、西部地区的御所を中心とした計画的な地区の建設・整備は、近世初期以前に遡るものである可能性が高い。

それに対して東部地区は、自然形成的な集落として往還沿いに発展したもので、「宿」地名に示されるように、近世以降における甲州道中の脇往還としての宿の機能を担ったのは、むしろ東部地区が中心であったことが推定される。往還の東端の安楽寺・愛宕社の門前には「高札場」が置かれ、道祖神・地蔵尊が祭祀されている。

② 御 所

御所については、後掲第28図には「元御所跡 中村與右衛門尉信公」と記載されており、「惣絵図」（第24図）では、御所の敷地が上組名主・中村伝左衛門の所持となっていることがわかる。

中村伝左衛門の家系については、寛文検地帳の包紙に記された由緒書（史料2：三、史料編参照、以下同）によって、代々上組（上強源村）庄屋を務めた家柄であり、延宝期の庄屋・与右衛門や寛文期の庄屋・左近が確認され、中村家が武田家浪人として上組の庄屋を務めてきたこと明らかになる。さらに遡って元亀2年（1571）には中村与右衛門尉が武田氏より免許状を与えられている（史料1）。

また史料2では、中村左近が、前掲の往還南側に面する伝左衛門屋敷に移住したのは万治元年（1658）であるとし、それ以前の居住については「左近浪人中者字神山諒訪明神前居住仕住」あるいは「浪人中ハ強源庄宇御所ト申ニ住居致候也」と述べている。以上の由緒書や絵図の記載から、上組の庄屋（名主）となった中村家が近世初期において御所に居住していたことは確実と思われる。さらに、中世に遡る居所については「与右衛門尉義興於テ字西山今之丸山に住為奉公致居」とあり、武田家家臣として岩殿山の中腹、大手先に近接した西山（丸山）に居住していたことが伝承されており、惣絵図にも西山に「元与右衛門郭跡」の付箋がなされている（第26図）。これは中村与右衛門尉が岩殿城に在番したことを示すものであろう。

以上の経緯から、御所が、中村家の居館となった時期があることは認められるものの、当初から中村家の居館として建設されたものとするには疑問が残る。

そこで注目されるのが、明治14年（1881）「第三拾屯区 賑岡郷之内強源組 一筆限反別地価取調帳 第弐号」に記載された土地に関する由緒書（史料3）であり、いずれも御所を武田信重など15世紀前半までの武田氏の居館跡と伝える由緒が残されていることである。15世紀以前に遡る武田氏の居館跡とするのは後世の偽作としても、中村家の居館跡と記載されていないことに注目して良いのではないか。つまり、御所は、武田氏滅亡以降、近世初頭に浪人庄屋となつた中村家の居所となつたが、中村家居住以前にすでに建設され



第25図 強瀬の小字名 明治3年（1870）「甲州都留郡内領強瀬村上下組惣繪図面」に據る。

ていた可能性が高い。前面の計画的な街区建設を伴う整備規模の観点からみても、御所は、戦国期における岩殿城下の中核的な居館として城郭整備の一環として建設されたものではなかろうか。

③ 寺社の立地

つぎに、寺社群の立地について考えてみたい。

神社・小祠については、強瀬の産土神として御岳権現があり（『甲斐国志』卷之七十二、神社部）、集落中央を東西に分する南北道路を北に登った高台に立地していた（第23図）。西部地区では、集落の西北に源訪明神が祭祀されており、往還の雁行部付近には八幡宮がある。この源訪明神は、後述のように西部地区的氏神的性格をもつ重要な神社であった。東部地区では集落の東北端に愛宕社が祭祀されている。その他、往還沿いの集落東西端にふたつの道祖神、集落中央の辻には天王社が祭祀されている。

一方、寺院は、前述のように集落北側の高台の平坦地に位置している。西部地区では、全福寺（曹洞宗）が、集落中央の北側に位置し大規模な境内地を占めており、東部地区では集落東北端に安楽寺（元真龍寺・淨土真宗）があり、いずれも往還から参道を引き込んでいる（第25図）。

後掲の寛文年中「郡内領強瀬村検地水帳」では、全福寺が、除地1町3反1畝18歩（分米9石6斗7升3合）、真立（龍）寺が除地9畝9歩（分米6斗9升9合）となっている。両寺とも建立年代は明らかではないが、全福寺に関しては『甲斐国志』卷之九十九、仏寺部に「寺領寄付の印書三輪五右衛門、浅野左衛門佐、島居久五郎ノ三通ヲ藏セシガ寛文九四年正月回額ノ災ニ罹リ皆灰燼トナル」とあり、中世末に遡る寺院であったと推定される。史料3には「当山開基者中村與衛門尉義興公之旨、延享式正年三月除地、御墨付參通寛文九四年正月焼失シ再差置願書ニ中村與衛門尉義興公ト書上、御差置成居候、延享式丑年三月願書ニ依テ記人、天文二乙巳年開基寺也」とあることから、全福寺の建立年代は、一応、16世紀中頃と考えてよからう。その他に「懇絵図」によって確認される寺院としては、全福寺門前の十王堂、東部地区に薬師堂、そして集落の西端には「祇迦堂敷地」という記載が確認される。

こうした宗教施設の立地から、集落北側の高台の平地が、前述の御所の立地と併せて重要な意味をもっていたこと。とくに西部地区では、中世末期に全福寺が御所の東側に建立されており、また西北端に産土神の御岳権現とは別に源訪明神を祭祀していること。詳細は明らかではないが、西に「祇迦堂敷地」が伝承されていることなど、街区の計画的建設と連動しながら宗教施設も整備されていった状況が推定される。

④ 上組・下組の分布と屋敷形態

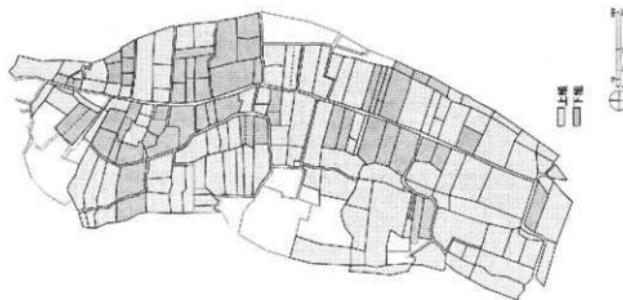
最後に、「懇絵図」に描かれた最も重要な情報のひとつとして、上組・下組の区別がすべての敷地になされていることが挙げられる。絵図では、上（組）高を黄色、下（組）高を赤色で書き分けしており、さらに各地割内に上・下の区別が記載されている。第27図に集落部分の土地について上組・下組の分布を示した。また、上組・下組の区別については、明治4年（1871）9月の「都留郡強瀬村上組下組屋敷取調査絵図」（第28図、以下、「屋敷取調査絵図」）においても、古屋敷と上組・下組の新屋敷が書き分けられており、「都留郡強瀬 上組名主 中村伝左衛門 組頭 中村源左衛門 同 鈴木茂兵衛 同 小林五郎右衛門 百姓代 古川嘉右衛門」および「同村下組 名主 新海治右衛門 組頭 小俣彦次右衛門 同 佐々木久四郎 同 西宝七郎平百姓代 杉本久八」が、絵図右下に記載している。このように強瀬では、近世を通じて上組・下組の区別があり、両組に名主・組頭・百姓代が存在していたとみられる。

第29図・第30図は、両絵図をもとに復原した上組・下組別の古屋敷および新屋敷の分布図である。古屋敷は、基本的に寛文検地で丈量された屋敷であり、新屋敷は、寛文検地では畠地等に丈量されたものが後に屋敷として用途変更されてきた土地で、地租改正にともない宅地として正式に地目変更する目的で新屋敷として区分し、絵図に記載されたと考えられる。ここでは、屋敷の分布状況について検討してみたい。

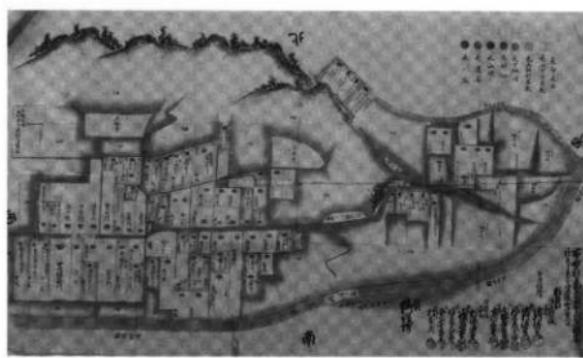
まず、古屋敷の分布について、全体的傾向として東部地区に下組屋敷が多く、西部地区に上組屋敷が多く



第26図 西山（丸山）にみられる「元與衛門郭趾」の付箋（「惣絵図」）



第27図 上緑・下緑の区分（集落部分）



第28図 明治4年(1871)「都留郡強瀬村上組下組屋敷取調免給図」
(中村和夫家所蔵)



第29図 古屋敷の分布
第30図 新屋敷の分布

分布している。また、上組名主・中村伝左衛門の屋敷は、前述のように集落西南端に大規模な短冊形地割の屋敷を占め、下組名主・新海治衛門屋敷は東部地区の中央北側に位置しており（第29図）、二地区にそれぞれ分かれて分布している。ただし、東部地区的東端や川岸にも上組屋敷が分布しており、逆に西部地区的西北にも下組屋敷が混在している。屋敷群は、往還沿いに分布しているが、屋敷間には未だ空閑地が数多く点在していた。また西部地区では、往還に面した短冊形地割の屋敷形態であるが、東部地区では往還から奥に引いた屋敷群がすでに多数存在する。

一方、新屋敷の分布については、東部地区に多く、古屋敷の空閑地を埋めるように分布しており、分家屋敷の輩出など近世を通じて次第に高密度化し、現状集落にみられるような街村あるいは塊村景観を形成したことが理解される。また、集落の後背地（カジ島・川明見附）や集落端部の畠地が新屋敷となり、集落の周辺部への拡張も確認される。上組・下組の分布については、やはり東部地区に下組の新屋敷が多い傾向が認められるが、古屋敷と同様に集落内に混在している。

以上の屋敷分布傾向から、当初、上組・下組の区分は、これまでみてきたふたつの異なる集落空間構成に対応しており、西部地区的屋敷群が上組、東部地区的屋敷群が下組に相当したものと推定されるが、近世初期の屋敷分解過程において、寛文期にはすでに集落は一體化し、両組屋敷が集落内に混在する状況となっていたとみなされる。したがって、強瀬の場合、両組の設定は、近世村方制度の一環として単純に区分されたものではなく、近世初期までに自律的に形成されていた、ふたつの集落内組織=集落空間のあり方を継承する形で導入されたものと考えられるであろう。

そのことを傍証する史料として、史料2に「上強瀬村氏神奉強瀬命、諏訪社也、抑強瀬村上下分岐為したる所謂者、武田家浪人と百姓の別より慶長六年檢地丈量セリ」とあり、上組=上強瀬村の氏神は諏訪（明神）社であり、武田家浪人の集住する上組と百姓の集住する下組=下強瀬村に分かれており、慶長期の大久保長安による検地時に上・下に分けて丈量されたことが窺われる。また、同史料は、上組すなわち西部地区にみられた「御所」を中心とした短冊形地割をもつ計画的街区が、かつて武田家臣団の集住した地区であったことを示唆する史料としても注目される。

（3） 寛文検地帳による屋敷形態の復原的考察

史料調査が行われた強瀬・中村家文書には、寛文9年（1669）「甲斐国郡内領郷村高辻帳（強瀬村中村控）」が現存するが、同年に作成されたと推定される寛文検地帳については包紙のみで検地帳自体は発見されなかつた（史料2）。したがって、ここでは山梨県立図書館に所蔵される寛文年中「郡内領強瀬村検地水帳」の分析を中心に、近世初期以前の集落空間構成について過汲的に考察してみたい。

第4表 寛文期における上組・下組の土地所有状況

	A・下組	B・上組	C・全村
田 畑 高	105.162石	95.353石	200.515石
田 高	10.780石	5.937石	16.717石
畠 高	94.382石	89.416石	183.798石
田 畑 合	1166畝12歩	1230畝25歩	2397畝7歩
田 合	133畝8歩	50畝8歩	183畝16歩
中 田	15畝5歩	27畝22歩	42畝27歩
下 田	13畝17歩	17畝3歩	30畝20歩
下々 田		3畝13歩	3畝13歩
見 附 山	104畝16歩	2畝	106畝16歩
畠 合	1033畝4歩	1180畝17歩	2213畝21歩
屋 敷	38畝20歩	45畝21歩	84畝11歩

上 煙	181畝	299畝24歩	480畝24歩
中 煙	291畝29歩	256畝7歩	548畝6歩
下 煙	191畝2歩	266畝	457畝2歩
下々 煙	205畝29歩	197畝20歩	406畝19歩
見 附 煙	60畝25歩	66畝21歩	127畝16歩
上 山 煙	16畝17歩	29畝1歩	45畝18歩
中 山 煙	17畝7歩	14畝4歩	31畝11歩
下 山 煙	10畝3歩	3畝13歩	13畝16歩
下々 山 煙	19畝22歩	1畝26歩	21畝18歩
漆	42束半	35束	77束半
桑	35束半小半	65束半	101束小半

同検地帳の内、集落に相当する部分を史料4に示したが、同検地帳に丈量された土地は、「惣絵図」(第24図)に記載された下組の土地と一致しており、下組分のみを丈量したものであることが判明する。また、末尾の田畠高反別の集計には、下組分(A)の他、全村分(C)が記載されている。C-Aによって上組分を算出し、両組の田畠高反別を集計したものが第4表である。

「秋元家甲州郡内治績考」は、寛文検地において強瀬村が「強瀬村 左近村(分)」と「同 助右衛門分」に分かれて丈量されていたことを記述しているが、この「左近」は、前掲の上組名主・中村伝左衛門の先祖であり(史料2)、もう一方の下組「強瀬村 助右衛門分」に相当する検地帳が、現存する本検地帳であった。この下組名主・助右衛門は、本検地帳(史料4の番号69、第31図および第32図を参照)によれば、東部地区にあって集落中央の辻付近に最大規模の屋敷を占めている。

ここでは、下組のみに限定されるが、同検地帳によって寛文期の屋敷形態について復原を試みたい。史料4に示したように、寛文期における下組の屋敷は全部で18筆であり、内3筆は枝村である「川隣」に立地しているため集落内の屋敷は15筆である。これらのすべての屋敷について面積や名請人名を惣絵図に対応させることによって位置を比定することが可能であった。

また寛文検地帳には、惣絵図に記載されていない堅・横寸法が記載されているので、各屋敷の形状を寸法通りの長方形として近似している。その結果を復原したものが第31図である。屋敷位置は、第29図に示した古屋敷の分布と完全に一致しており、「惣絵図」(第24図)および「屋敷取調絵図」(第28図)は明治初頭に作成された絵図であるが、その記載内容は寛文検地帳に基づくものであり、(2)で具体的に検討を加えた屋敷分布や集落空間構成の特徴が寛文期まで遡ることが判明するのである。

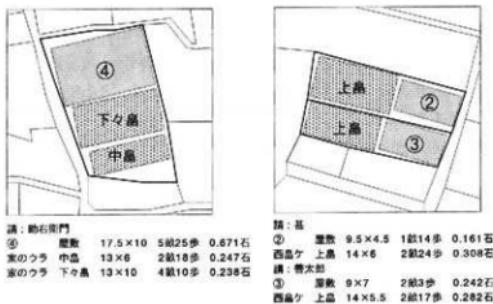
さて、復原された寛文期の屋敷分布についてみると、すでに指摘したように下組屋敷は、東部地区に12筆と多く分布しているが、3筆は西部地区に分布している。屋敷形態については、往還に面する屋敷が10筆で、とくに間口が狭く奥行の深い短冊型地割が①②③④⑨⑩⑪⑫⑯(○印番号は史料4に対応、以下同)と多い。それに対しての⑤⑦⑧⑪⑯の5筆は、往還から離れた位置に立地しており、往還からの引込み路を設けていたとみなされる。東部地区においても短冊形地割が多くみられることなど、寛文期の状況から遡及される近世前期以前の屋敷形態は、集落全体の傾向として自然形成的な農村集落とは異なり、往還に面する短冊形地割が卓越していたことが窺える。そこに「宿」系集落の特徴をみることができるであろう。

いまひとつ注目しておかなければならないのは、寛文期の屋敷が、そのまま完全に後世の屋敷地割に重なるのではなく、屋敷以外の土地を多く含んでいる事実である。その典型事例を第32図に示したが、前掲の下組名主・助右衛門の場合は、④屋敷10間×17間半(5畝25歩)の他に「家ノうら中畠6間×13間(2畝18歩)」、「家ノうら下々畠10間×13間(4畝10歩)」をセットとして敷地が形成されており、それが後世の大



○印番号は史料4に対応

第31図 寛文期の屋敷形態（下組）



第32図 寛文期の敷地構成と地割形態

規模な屋敷地割に対応している。また、西部地区の善太郎は、②屋敷4間半×9間半（1畝14歩）と「西島ヶ・上島6間×14間（2畝21歩）」、甚は、③屋敷7間×9間（2畝3歩）と「西島ヶ・上島5間半×14間（2畝17歩）」をセットとして、全体で奥行30間程度の短冊形地割の敷地が形成されている。

つまり、西部地区に典型的にみられる計画的な奥行30間程度の短冊形地割は、寛文期にはすべての敷地が屋敷であったのではなく、屋敷と畠地をセットとして計画されたと考えられるのである。裏地には畠地の方がむしろ大きくなりられており、裏地の畠地が重要な意味をもっていたのであろう。このような屋敷と畠地をセットとした短冊形地割の計画性、そして往還から離れた屋敷の併存など、近世初期において新規に整備された宿場町に一般的にみられるような街道に面する短冊形の単純な屋敷地割とは異なった、中世から継承された「宿」の原形的な集落的景観を読み取ることが可能ではなかろうか。

以上、強瀬の集落空間構成について復原的考察を加えた。直接的な史料に乏しく不明な点も多いが、交通上の要所に位置した強瀬では、岩殿山円通寺や七社権現への参詣ルートの宿として16世紀前半には相当規模の中世集落を形成していたとみなされる。そして、岩殿山が城郭として整備されるに及んで、岩殿城下の宿として計画的な整備がなされた可能性が高い。とくに御所を中心とする前面の直線道路と短冊形地割をもつ西部地区は、近世初期における畠地化=住民の定着性の低さを見る限り、町場系の宿ではなく根小屋のような武家地系の宿として東部地区を中心に土着的に展開していた既存の集落に隣接して建設されたと推定される。近世における上組と下組の分立、寺社の立地、そして上組名主・中村家の由緒や上組を武田家浪人の集落とする伝承などがそのことを示唆している。

そして、近世前期には西部地区の過半は畠地となり、強瀬の集落は急速に一村化してゆくが、近世においても、ふたつの異なる集落空間構成は根強く継承されているのである。

2. 岩殿の集落形態—「門前」系集落—

岩殿に関しては、強瀬の復原作業で用いたような基本史料を文献史料調査で確認することができなかった。したがって、近世以前の集落空間構成を復原的に考察することには限界もあるが、ここでは、現状の集落遺構調査と地券帳による明治初頭の宅地構成、そして「岩殿⁴〔有文書〕」に多数含まれる近世村絵図の分析から、岩殿の集落空間構成の特徴と形成過程に関する検討を加えてみたい。

(1) 集落空間構成の特徴

第17図で示したように、岩殿の集落は、かつての岩殿山円通寺の門前に形成されており、旧伽藍敷地の東側に隣接する「夏地」地区と沢を隔てた南側「中丸」地区に集中して宅地が分布している。第33図は、前掲のG.H.Q.による空中写真に地籍図（第17図）で判明する地割を比定したものである。

後述のように親音堂や三重塔が存在した円通寺の伽藍は、現在の嚴岡公民館岩殿分館の西側一帯に比定される。門前には参道となる急斜面の東西道路が通され、その両側には、天正年間に退避した円通寺に代わって岩殿山七社権現の別当職を務めた常楽院および大坊院の屋敷地が並んでおり、斜面地を石垣で造成した大規模な屋敷構が残されている（第34図）。この東西道路と強瀬・浅利・葛野・畠倉から岩殿に至る南北往還の交差する辻が集落の中心であり、夏地地区は、辻の付近とその東北部の斜面地が石垣によって段状に造成され、典型的な塊村集落を形成している。一方、夏地地区の南側にある南沢の谷地を挟んだ川向いの中丸地区にも、強瀬・浅利に抜ける往還に沿って小集落が形成されている。

寺社の立地をみると、寺院は、常楽院の北側に岩殿集落の真蔵院（真言宗）があり、「甲斐国志」卷之九十、仏寺部には、真蔵院が「常楽院ノ内庵」であり常楽院によって開基されたことが記されている。また、この真蔵院の東側の道路では、大正から昭和にかけて七社権現の祭日に岩殿市が開設されたという。神社は、集落の北に伸びる畠倉道に面して小高い山があり、その頂上に子ノ神社が祭祀されている。また、中丸地区では往還の分歧点の丘上に天満宮（天神）が祭祀されている。



第33図 岩殿の地割形態

大月市役所所蔵の地籍図（第17図）に拠る。
下図の空中写真はG.H.Q.撮影
(昭和22年、国土地理院)。



第34図 常楽院の石垣



第35図 主屋を南面させた農家型配置



第36図 明治初期の宅地分布（夏地地区） 明治14年（1881）「地券一筆限帳」に拠る。

集住形式に注目すると、集落内道路はループ状に繋がっているが、東西方向の道路からアプローチするのが基本であり、いずれも敷地の南側に庭を設けてその奥に東西棟の主屋を南面させて配置しており、南側からアプローチしている（第35図）。したがって、参道に相当する東西道路に対しても道路への正面性を重視した配置が特になされている訳ではない。これは、典型的な農村集落のアプローチ・配置形式であり、現状集落の空間構成を見る限り、門前町のような参道を軸とした特徴的な集住形式はみられない。

（2）明治初期の宅地構成

（1）のような現状の集落空間構成を前提として、次に明治14年（1881）「地券一筆限帳 北都留郡賀田村 岩殿村」によって明治初期の宅地構成について検討してみたい。なお現存する「地券一筆限帳」は一部分（二冊の内の第一号）であり、夏地地区の宅地構成については明らかとなるが、中丸地区については不明である。ここでは、中心集落である夏地地区のみを扱う。第36図は「地券一筆限帳」に記載された全宅地を示したものである。第33図で空地となっていた大坊が宅地となっている他は、宅地分布に大差なく、前述した集落空間構成の特徴が明治初期においても大きな変化がないことが窺われる。

ここで注目しておきたいのは、同史料の宅地が、「宅地」「畠宅地」「宅地畠成」の3種類の宅地に分類されている事実である。この中で「畠宅地」は、畠地から宅地へと地日変更になった宅地であり、逆に「宅地畠成」は元米は宅地であった土地が畠地に地日変更したものと解される。こうした地日変更がいつの時期になされたのかは不明であるが、前節で検討した強瀬の「屋敷取調絵図」の分析結果を考慮すると、「宅地」は古屋敷に相当し、基本的に寛文検地で屋敷として確定した土地であり、「宅地畠成」は寛文期以降に畠地化した土地、「畠宅地」は新屋敷に相当し、寛文検地で畠地であったものが屋敷化した土地と理解することができるであろう。第37図には「宅地」および「宅地畠成」、第38図には「畠宅地」の分布を示したが、第37図が古屋敷の分布、第38図が新屋敷の分布ということになる。以下両図をもとに分析を加える。

まず、古屋敷の分布は、旧円通寺の伽藍敷地に隣接した門前地区、集落中央を貫通する南北往還の西側にはほぼ限定されており、南北往還東側の斜面に広がる宅地は含まれていないことが大きな特徴である。また「地券一筆限帳」の土地所有者をみると、門前の東西道路の南側の宅地の大半が大坊（北条高順）の所有、北側の宅地の大半は常楽院（北条明雄）の所有となっており、古屋敷の中で両家以外の所有は、周辺部にわずかに存在するのみであることが判明する。

一方、新屋敷の分布は、南北往還の東側に展開しており、東斜面を下るように集落が拡張されていったことがわかる。

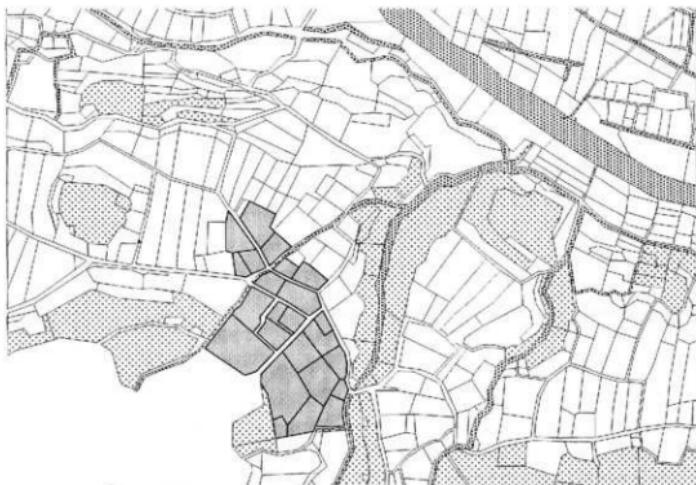
このような分布傾向から、近世初期の集落は南北道路の西側のみに存在し、屋敷群は東西軸をなす参道の両側に存在したこと、しかも土地所有者からみると、これらの土地所有者は常楽院・大坊であり、参道の南側は大坊、北側は常楽院が所有していたこと、寛文期以降、集落の発展と共に南北道路の東側斜面が開発され、屋敷数が増加するにしたがって次第に塊村的な集落空間構成が形成されたことが推定されるのである。

（3）近世絵図による集落空間構成の復原的考察

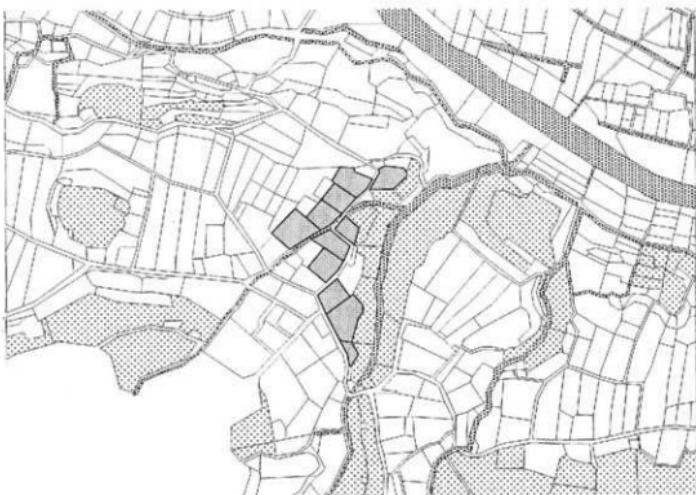
（2）で明らかとなったように、古屋敷の分布は、ほぼ、集落を貫通する南北往還の西側に限定されており、参道の両側のみが屋敷であった。しかも、明治初期の土地所有では常楽院・大坊がその大半を所有していた。ここでは、まず近世の土地所有状況から集落空間構成を考えてみたい。

常楽坊は、慶長6年（1601）に岩殿山社領として10石の土地の寄進を受けており、『甲斐国志』卷之九十、仏寺部には、黒印寺領1町8反1畝1歩、堂敷地750坪と記されている。これらの土地は、境内地および寺領として除地となっていたが、その範囲を小字絵図が數種類現存している。

第39図は、大坊に所蔵される境内絵図であるが、岩殿山中に造営された七社権現社の他、観音堂・三重塔・鐘楼などの堂宇、門前の内脇には石垣で造成された常楽院および大坊の敷地と建物が描かれている。同絵図



第37図 「宅地」および「宅地畳成」の分布



第38図 「烟宅地」の分布

で注目されるのは、「除地」を黄色で色分けしている点である。その範囲は南北往還の西側一帯に広がっており、寺領の上地が集落の広範囲に及んでいたことが明らかとなる。

同様の除地をさらに細かく表記した絵図が第40図である。同絵図からも、古屋敷の分布している南北往還の西側、参道両脇の上地がすべて除地であることがわかるが、参道の南側ブロックが大坊、北側ブロックが常楽院の支配地であったことが窺われる。大坊の占める南側ブロックでは、主屋の他に土蔵や南北往還の付近に「隠宅」が描かれている。常楽院の占める北側ブロックでは、主屋と土蔵、ブロック中央に石垣と門そして参道からの引込み路が描かれ、参道側からではなく東側からアプローチする形式であった。またブロックの東半分とは一応区画されていたことがわかる。さらに、集落の北にも子ノ神社付近まで除地が大きく広がっているが、これらの大半は畠地などの耕地であったとみられる。このように寛文期に遡る古屋敷は、ほとんどすべてが岩殿山円通寺・七社権現の寺領であり、実質的には常楽院と大坊の所有する上地であったことが判明するのである。

一方、南北道路の東側に分布する新屋敷は、第39図によって「御年貢地」であったことがわかる。なお、第41図は、集落内の屋敷を書き上げた絵図であるが、屋敷の表記に屋根形を描くものと長方形で表記されるものに描き分けられている。長方形で表記された屋敷には番号が付けられているが、その分布には第38図の新屋敷の分布にはほぼ一致する。つまり、前掲の「畠宅地」を決定するための下図とみられるが、同絵図によって、「地券・筆限帳」の残されていない中丸地区でも、寛文期以降に畠地から屋敷に転化した新屋敷が大半を占めていたことが明らかとなる。したがって、近世初期以前の岩殿集落は、ほぼ門前の参道両脇のみに限定されており、しかも境内地を中心に成立していたと考えてよからう。

最後に、「岩殿区有文書」に含まれる数点の岩殿村絵図を用いて、全体的な集落空間構成の特徴と集落形成過程について検討してみたい。

作成年代が判明する村絵図として、宝永2年(1705)岩殿村絵図(第42図)および延享2年(1745)岩殿村絵図(第43図)が現存する。ここでは両図に描かれた集落形態を比較する。

宝永絵図では、観音堂・三重塔・鐘楼の建つ伽藍敷地の正面に灯籠と石段が描かれ、東に伸びる参道の両側に茅葺家屋16棟が描かれている。内、右端の建物には「寺」とあり真蔵院とみなされる。また石段の両脇の建物が常楽院と大坊院であろう。「いわとの村」の名称は右側に描かれた建物群の中に記載されているが、同絵図では、基本的に参道に至る南北往還の西側にのみに家屋を描いていることがわかる。その他、南沢を渡った左側にも一棟の茅葺建物を描いている。

一方、延享絵図では、むしろ南北往還の東側に多くの家屋を描いていることに特徴がみられる。とくに集落東北部の新屋敷の分布する地区的ループ道路を正確に描き、ブロック内に9棟の家屋を描くことで畠敷地であることを強く印象付けている。さらに、左側の「中丸」にも6棟の家屋を描いており中丸地区が集落化していることが示されている。その他、同絵図には、小字名・山畑・出作状況なども詳細に記入されており、参道と南北往還の交差する辻の東側を「鳥居久保」と称したことが明らかとなる。

このように宝永絵図と延享絵図を比較すると、描かれた集落景観が大きく異なっていることに気づくのである。描写されない景観について議論することには問題もあるが、(2)で判明した寛文期以降の新屋敷の設立が両絵図の作成年代間に進展した可能性が高いのではなかろうか。少なくとも新屋敷の設立に伴う集落の拡張が、延享期までにはほぼ完了していたことは確実であり、18世紀前期に現状に近い集落空間構成が成立したことが推定される。両絵図は、近世中期における集落空間構成の変化を考える上でも貴重な絵図とすることができよう。

次に、他の村絵図についてもみておきたい。

第44図は、作成年代は未詳であるが、寺領の除地と年貢地を色分けした絵図で、村内全域の寺領を描くこ

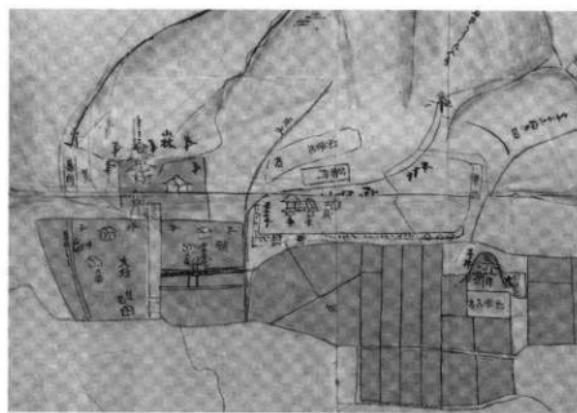
全体图



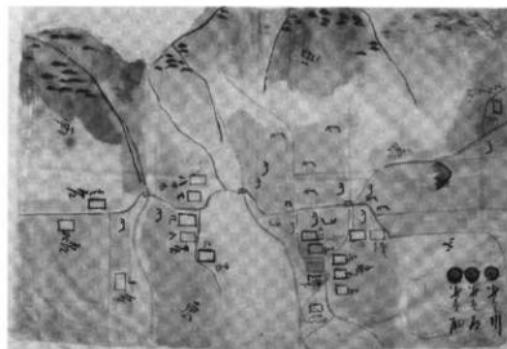
第39圖 岩巒山城内繪図（北条熱美家所藏）

部分图

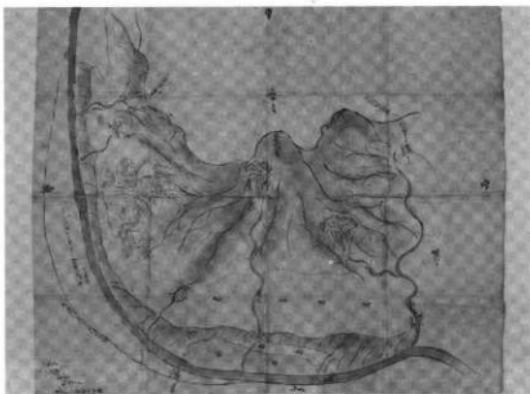




第40図 寺領・境内(除地)絵図(岩殿区有文書)



第41図 新屋敷絵図(岩殿区有文書)



全体図

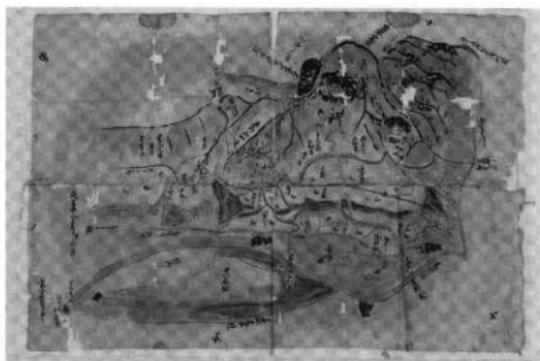
775mm × 910mm

「宝永二年西ノ十月書、いわとの村 庄屋 勘右衛門、組頭 長右衛門」



部分図

第42図 宝永2年(1705)岩殿村絵図(岩殿区有文書)

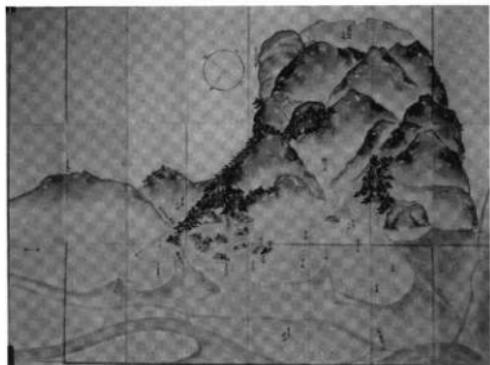


全体図
〔延享二年丑三月、岩殿村　名主　新(左衛門)、組頭　(弥)兵衛、当山真永書之〕

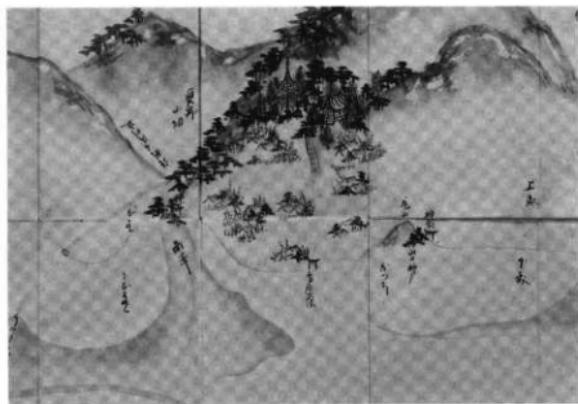


部分図

第43図 延享2年（1745）岩殿村絵図（岩殿区有文書）

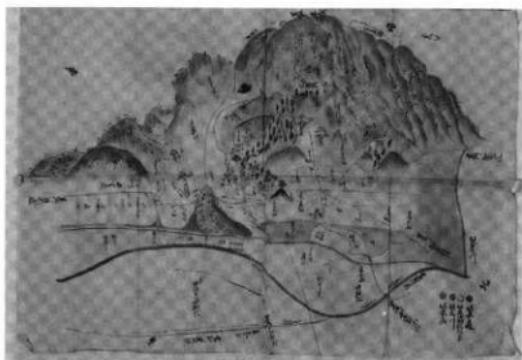


全体図

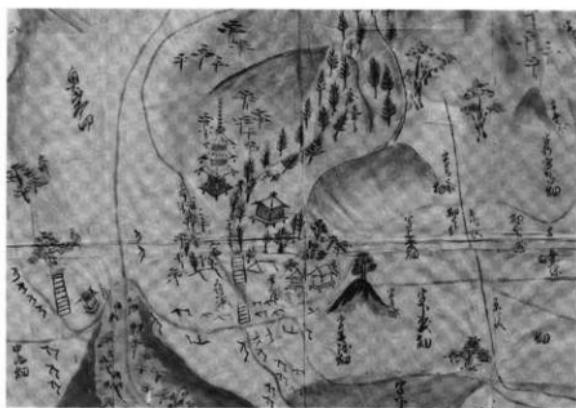


部分図

第44図 年未詳 岩殿村絵図（岩殿区有文書）



全体図



部分図

第45図 年未詳 岩殿村絵図（岩殿区有文書）

とを目的とした前掲第39・40図と性格の近い絵図である。南北往還の西側が除地、東側が年貢地であったことが明確に読み取れる。また、南北往還から参道への入口に朱塗りの明神鳥居が描かれており、その下には「鳥居久保」とある。この鳥居は現存していないが、境内を示す重要な境界装置となっていたに相違ない。屋敷林と2、3棟の建物で描かれる屋敷群は、この鳥居の内側、参道の両脇にのみ描かれており、境内に成立了した岩殿集落の景観を端的に描写している。その他、寺領の田地が葛野川沿いの「長崎」に存在したこと、右側の子ノ神社が祭祀された「丸山」、左側の南沢の橋詰（天神か）にも朱塗りの明神鳥居が描かれ、神聖な領域としての岩殿集落が象徴的に描写されている。

第45図も作成年代は未詳であるが、「大月市史 史料篇」では近世初期に作成されたものに補筆された絵図と推定されている。しかし、南北往還の東側や「中丸」に多くの家屋を描いており、18世紀以降の新屋敷の設立に伴う集落拡張後の空間構成を描いたものと判断される。小字名や田畠を記載し、強瀬分・畠倉分の耕地を黄色で塗り分けたり、周辺村落からの出作の状況が詳細に描かれていることに特徴がある。なお、南沢の橋詰あるいは天神の付近に高札場が置かれていたことが判明する。

以上、岩殿の集落空間構成について復原的考察を加えた。極めて断片的な史料の分析であるが、近世初期以前の岩殿集落は、円通寺の境内に成立した小規模集落であったことが推定される。その集落形態は、近世初期に成立した常楽院・大坊の崇教を中心に、南北往還に至るまでの参道の両側に集中している。また、集落敷地は、近世を通じて寺領・除地とされ、実質的には常楽院・大坊の支配下にあり、寺院に従属した門前百姓の集落としての性格をもつものであったと考えられる。

ところが、寛文期以降、18世紀中頃までは南北往還の東側や南沢を隔てた中丸地区などの「年貢地」に多くの新屋敷が設立され、集落の大規模な拡張が行われていることが判明した。

そこには、中世以来、円通寺に従属しつつ境内地に居住してきた門前百姓集落からの自立過程が反映されているように思われるが、その検証作業は今後の課題としたい。

なお、岩殿市の開催などで想定される門前町的な集落の発展は、現状集落から遡及した集落空間構成の特徴からは窺うことはできなかった。むしろ、そうした町場機能は、強瀬のような周辺に立地した街道沿いの「宿」にあったと考えられるのである。冒頭に述べたように、永正期の円通寺再建に際して、岩殿住民ではなく強瀬住民が寄進を行っていた事実も、そのことを示唆しているのではなかろうか。

註

- (1) 現在の御所神社は、中央高速道路の開発に伴い、諏訪神社と共に西部地区の北側の社地に移転している。
- (2) 「第四 棟地租税」『秋元家甲州郡内治績考』都留市教育委員会、1966年。
- (3) 中世後期における宿の類型は、街道沿いに発展し、宿駅・市場機能を伴った町系の宿と武士團の集住地となった武家地系の宿に大別して捉えることが可能である。詳しく述べ伊藤穂「宿の二類型」(五味文彦・吉田伸之編『都市と商人・芸能民』山川出版社、1993年)を参照されたい。
- (4) 以下に引用する近世絵図は、とくに断らない限り岩殿市有文書である。
- (5) 天正期に七社権現の別当職を仰付けられた常楽院が、正保3年～慶安3年(1646～50)頃に常楽院と大坊に二分されたといわれる。したがって、その時期に二坊の屋敷を参道の両側に配置した門前地区の整備が行われたことが推定される。『大月市史 通史篇』290頁～291頁を参照。
- (6) 第2節註(6) 墓内論文を参照。
- (7) 中村和夫家所蔵。
- (8) 『大月市史 通史篇』290頁参照。
- (9) 破損状況が甚いため本文では取り上げなかったが、他に、明治初頭の寺領を描いた村絵図が現存している。同絵図では、寺領を、境内・川・畠・裏所・私開墾地などに分類し色分けして描いており、参道両側のブロックは「境内」

に色分けされているように読み取れる。以下、同絵図に書上げられた寺領・境内等について掲げると、「觀音堂敷地：現境内坪数450坪（平均堅30間×横15間）、鐘樓堂敷地：坪数3坪（平均堅1間半×横1間半）、真藏院守内：現境内坪数36（0）坪（平均堅19間×横19間）、真藏院：右寺領除地上地之内高6斗6升（反別6畝歩）、七所尊：右社領除地上地之内 高13石3斗6升3合〔反別2町1反9畝5歩=田数8枚・畠地29枚（内5枚村持）当村之内8ヶ所〕、私開整地：1反9畝歩（4ヶ所）、村持除地：高1石8斗8升3合（反別2反9畝2歩）」となっており、常楽院・人坊屋敷の坪数・堅横間数も書上げられているが欠損しており判読できない。

三、史料編

史料1 武田氏印判状（強滿・中村和夫案文書）

定

- 一、御分国諸商二月ニ販毛足之分役等、御免許之事
- 一、本様別受間之分、御赦免之事
- 一、向後拘束候田、如軍役兼可被停候便之事
- 一、鄰次之人反音請被禁之事

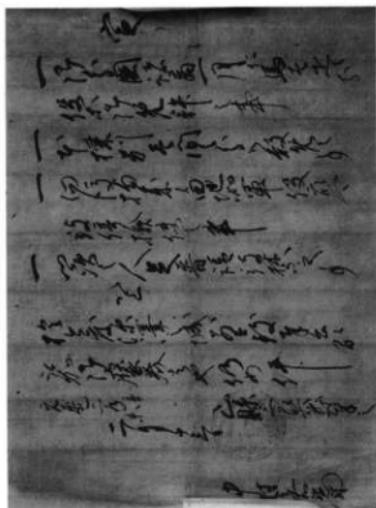
以上

於今度深澤之城、別而欽恭公之間、被加御褒美者也、仍如件

元龜二年辛未

二月十三日 山縣三郎兵衛時 奉之

中村与右衛門時



第46圖 武田氏印判狀

史料2 中村家由縕書（強滿・中村和夫案文書）

史料2-1 實文様地帳の包紙文書（一）

〔卷首〕
寶文九年二月

十一月

檢地帳

元浪人 大西山

上強羅村氏神奉強羅命、諱訪社也
即強羅村上下分歧為したる所謂者、
武田家浪人と百姓の別より慶長六年檢地丈量セリ

明了到着也
浪人庄屋 左近

左近浪人中者字神出源助明神前所住、万治元年今之屋敷に移る
字右衛門も明神の東隣に住す

字右衛門前義無於テ大西山今之丸山に住為泰公故居
享保十五年三月 大西山伝左衛門

享保十五年二月

写入

監領付

史料2-2 寛文檢地帳の包紙文書(2)

「寛文九年年

檢地帳

右衛門持

監領記載無之

寛文九年檢地帳ニ基名寺延宝元年出米數到帳事

慶長六年檢地帳ハ領主秋元公板御引揚相被成候三面事

享保十五年寛文檢地後始地掉板為織行

上強羅村

浪人庄屋

左近

寛文九年年

檢地帳 參照 延宝元年之写

庄屋宇右衛門

寛文九年年

檢地帳 式冊 享保十五年之写

名主傳左衛門

寛保式戌年四月

御奉行御評定書

前著書類既ク保護致、家督人又可伝之もの也

宝曆二四年

五月

傳左衛門

家より大西山と申伝者武田家臣ヨリ浪人為たるより申伝承ナリ

史料2-3 寛文9年「甲斐国郡内強羅村高辻帳(強羅村中村控)」の裏付文書

先祖左近庄屋役勤強羅一明延宝七年(延宝)一十八日追放

甥ハ全福寺六貞之弟徒じ世后子同寺七世大和専為

金福少六世攝觀秀州大和尚者、子右衛門二男柳之助院に而
 七世放光元瑞大和尚者武山家浪人甥之光之至院有之候也
 宣保七年七月二十五日寂ス、大西山傳左衛門子
 六世攝觀秀州大和尚
 元文三年八月十九日寂ス、武山家仁也
 七世放光元瑞大和尚
 左近・与右衛門兩家延宝元年迄于浪人シ百姓株ニ相成、
 今之國數ニ於仕教候御座候
 浪人中ハ強羅莊宇柳所ト申ニ仕教候也
 中村与右衛門
 同 左近 摘
 中村傳左衛門

史料3 明治十四年（一八八一）第三拾壹区 賑廻御之内強瀬組「筆張反別地取調帳編式見」
 に記載された土地に関する田権部分（強瀬・中村和夫著文書）

- ① 旧字御所
四百四 巻 等
同 所
一、烟五軒式拾步 同人（中村安信）
此收穫 委卷石八斗武升合
此地價 金三拾六円八拾貳錢花屋
- 〔解説〕「応永年間より水亭十一年迄于國主武田信満公以下信重公迄于三代居跡也、旧記ニ依テ記人」
- ② 旧字御所頭
四百八 巻 等
同 所
一、烟林成二軒式拾卷步 中村安信
此取穫 倉卷才五厘
此地價 金拾三錢四厘
- 〔解説〕「応永年間より水亭十一年迄于國主武田信満公以下信重公四代居跡也、旧記ニ依テ記人」
- ③ 旧字御所頭
四百九 三 等
同 所
一、烟六軒式拾卷步 同人（中村安信）
此收穫 委卷石壹升
此地價 金壹拾圓四拾貳錢半圓

〔前事〕

「前事」、武田信長公、同信元公墳墓地也、安政四年全福寺境内傳左衛門墓地二番改」

④

口字御所

四百拾 芒等

同 所

一、烟 八枚式拾參 同人（中村安信）

此松櫻 松毛石六寸二升式合

此地価 合二拾弐門九拾九錢九厘

〔前事〕

「前事」、家臣中村左近健名墳墓地也、安政四年全福寺境内傳左衛門墓地二番革」

⑤

口字大龜山

四百十七

同 所

一、墓地 芒反六拾拾六步 全福寺

〔前事〕

内

「安政四年谷村御位所領上」、中村傳左衛門墓地ヲ設ケ先祖中村傳左衛門時義興公之先祖代々墓地ト
為シ、併子武田信長公、同信元公之墓所トス」

⑥

口字大龜山

四百十八

同 所

元見捨地

一、竹林 式反六拾式拾參 全福寺領上知

〔前事〕

「当山開基者中村良衡門時義興公之貞、延享式正年三月除地、御付參通寛文九年正月燒失シ
再差置願者二中村良衡門時義興公上書上、御差置成后候、延享式正年三月願者二依テ記入、天
文二〇日開基寺也」

⑦

四百廿五

同 所

元隕地

一、境内 芒反八拾二拾參 同寺（八福寺）

〔前事〕

「同寺開基中村良衡門時義興公為貞、延享式正年二月除地御墨付參通寛文九年正月中焼失シ再
置左近健名二中村良右衛門時義興公上書上、御差置相成后候、延享式正年三月願者二依テ記入」

⑧

口字馬場

四百五十三

芒等

同 所

一、烟 壱反五升歩 古文
此取権 妻瓦石八斗四升

中村安信

此地価 合五拾七円四拾六錢五厘

〔圖書〕
「寶文九年御檢地名帳 地價額ナリ」

⑨ 旧字馬場合頭
四百五十四 六等

同 所
一、烟 四歩 同人(中村安信)

此取権 妻瓦升三合

此地価 合式拾六錢三厘

〔圖書〕
「万治元年中村與石衛門中村左近宗家之祠社」

* 同 第一号(現存せず)に記載されていた由難書とみられる付箋紙

⑩ 旧城池字口向山頭

七拾二番

同 所

一、山 七反參値歩

此取利(タツ)金(合) 七錢參厘

此地価 金(合) 六拾六錢四厘

〔圖書〕
「神木左近日向大和守昌時公ノ祠跡地、慶長六年御檢地二依記入」

⑪ 旧字神出

二百參十九

字上 平

一、山 五反四臘式抱持 村 持

此取利(タツ)金(合) 治錢九厘

此地価 金(合) 九拾四錢四厘

〔圖書〕
「延暦年間傳教大師が從僧澄觀正吉鞍山七社懶現尊体木走所より伐出、慶長六年御檢地帳二依
子記入ス」

⑫ 旧字同所

三百四十壹 六等

同 所

一、烟 壱反九臘式拾四歩 同人

此取権 妻瓦石八斗四升四合

此地係 合二拾七円六拾二錢二厘

(萬事)

「元神出左近泡池(也)、傳證僧正覺見シ、御殿中用シト伝フ、旧記ニ基キ記入」

史料4 寛文年中「都内領強瀬村検地水帳」(集落部分)

表記には、第3回に對応する通し番号(○印)を付記してある。

小字名	地目・等級	塾×横(間)	面積	石高	名前人	備考
1 西 島 ケ	上 島	23×8.5	6畝15歩	0.715	助 右衛門	内添小半東 植地ノ内 0.012 同人
2 西 島 ケ	上 島	23×8.5	6畝15歩	0.715	久 兵衛	内添小半東 植地ノ内 0.012 同人
3 西 島 ケ	上 島	21×11.5	8畝1歩	0.884	かめ ノ助	
4 西 島 ケ	下々島	10×1.5	15歩	0.028	かめ ノ助	此東半東 同人
5 西 島 ケ	上 島	17×13	7畝14歩	0.81	萬	内添1東 植地ノ内 0.036 同人
6 西 島 ケ	上 島	13×11.5	5畝歩	0.55	平 左衛門	
7 西 島 ケ	中 島	13×6	2畝18歩	0.247	平 左衛門	
8 西 島 ケ 道上共	下々島	12×3	1畝6歩	0.143	平 左衛門	此東1東半 同人
9 西 島 ケ 道下共	中 島	9×5	1畝15歩	0.143	久 左衛門	内添小半東 植地ノ内 0.009 同人
10 西 島 ケ 道下共	中 島	10×5	1畝20歩	0.158	真 龍寺	内添小半東 植地ノ内 0.009 同人
11 西 島 ケ 道下共	上 島	21.5×11.5	8畝7歩	0.906	助 右衛門	
12 西 島 ケ 道下共	上 島	13×5.5	2畝11歩	0.26	助 右衛門	
13 西 島 ケ 道下共	上 島	9.5×5.5	1畝22歩	0.191	かめ ノ助	
14 西 島 ケ	上 島	20×5	3畝10歩	0.367	助 右衛門	
15 西 島 ケ	上 島	8×5.5	1畝14歩	0.161	五 右衛門	
16 ①	屋 敷	11×6.5	2畝11歩	0.272	五 右衛門	内添1東 植地ノ内 0.036 同人
17 西 島 ケ	上 島	14×6	2畝24歩	0.308	吉 太郎	
18 ②	屋 敷	9.5×4.5	1畝14歩	0.161	善 太郎	
19 ③	屋 敷	9×7	2畝3歩	0.242	善	
20 西 島 ケ	上 島	14×5.5	2畝17歩	0.282	善	内添小半東 植地ノ内 0.009 同人
21 西 島 ケハタケ	上 島	12×4.5	1畝24歩	0.198	小 兵衛	
22 西 島 ケ	上 島	11×4.5	1畝19歩	0.18	与 兵衛	
23 西 島 ケ	中 島	11×10	3畝20歩	0.348	惣 左衛門	
24 西 島 ケ 下	上 島	11×9	3畝9歩	0.363	惣 左衛門	内添半東 植地ノ内 0.012 同人
25 西 島 ケ 下	上 島	12×8.5	3畝12歩	0.374	かめ ノ助	
26 西 島 ケ 下	中 島	12×5	2畝歩	0.19	かめ ノ助	内添小半東 植地ノ内 0.012 同人
27 桑 原	下々島	7×1	10歩	0.018		此東半東 同人
28 桑 原	上 島	10×9	3畝歩	0.33	甚 右衛門	
29 桑 原	中 島	9.5×9	2畝25歩	0.269	甚 右衛門	
30 桑 原	下々島	3×1	3歩	0.006	甚 右衛門	此東半東 同人
31 桑 原	上 中 島	16×8	4畝8歩	0.405	与 兵衛	
32 桑 原	上 中 島	8×4	1畝2歩	0.059	兵 兵	此東1東 同人
33 桑 原	上 中 島	20×7	4畝20歩	0.443	兵 兵	
34 桑 原	下々島	7×5	1畝5歩	0.064	小 小	
35 桑 原	下々島	7×2	14歩	0.026	小 小	
36 桑 原	下々島	9.5×6.5	2畝1歩	0.112	甚 右衛門	
37 桑 原 通	見附島	14×1.5	21歩	0.025	兵 兵	
38 桑 原	見附島	12×1	12歩	0.014		
39 桑 原	見附島	14×4	1畝26歩	0.065	兵 兵	
40 桑 原	見附島	3×1	3歩	0.004	兵 兵	
41 た ち	下々島	7×5	1畝5歩	0.087	兵 兵	
42 た ち	下々島	15×7	3畝15歩	0.193	久 久左衛門	
43 た ち やま	下々島	7×2.5	17歩	0.02	久 久左衛門	
44 た ち やま	上 島	15×6.5	3畝7歩	0.356	久 久左衛門	内添小半東 植地ノ内 0.012 同人
45 た ち やま	中 島	10×6.5	2畝5歩	0.206	久 久左衛門	
46 た ち やま	中 島	16×7.5	4畝歩	0.44	真 龍寺	
47 た ち やま	中 島	10×7.5	2畝15歩	0.238	兵 兵	
48 た ち やま	見附島	3×2	6歩	0.007	兵 兵	
49 わ た い いら	上 島	20×4	2畝20歩	0.293	甚 右衛門	
50 わ た い いら	中 島	17×4	2畝8歩	0.215	甚 右衛門	
51 わ た い いら	上 島	20×4	2畝20歩	0.293	兵 兵	
52 ひ た い いら	中 中 島	27×5	4畝15歩	0.428	兵 兵	
53 上 た い いら	中 中 島	13.5×6	2畝21歩	0.257	兵 兵	内添半東 植地ノ内 0.023 同人
54 上 た い いら	中 中 島	12.5×3	1畝7歩	0.117	惣 左衛門	内添半東 植地ノ内 0.012 同人
55 上 た い いら	上 島	12.5×5	2畝2歩	0.227	惣 左衛門	
56 上 た い いら	上 島	10×7	2畝10歩	0.257	兵 兵 小藏	
57 上 た い いら	中 島	7×5	1畝5歩	0.111	兵 兵 小藏	内添半東 植地ノ内 0.012 同人
58 七 た い いら	上 島	7×7	1畝19歩	0.18	助 右衛門	

59 上たいら	中島	7×7	1戸19歩	0.155	助右衛門	
60 上たいら	中島	12.5×7.5	3戸3歩	0.295	かめノ助	
61 もりのわき	見附島	6×5	1戸歩	0.035	跡塙門番右衛門	内塗小半束 檜地ノ内 0.009 同人
62 もりのわき	見附島	10×3	1戸歩	0.035	かめノ助	内塗小半束 檜地ノ内 0.012 同人
63 もりのわき	見附島	6×5	1戸歩	0.035	かめノ助	跡塙門番右衛門
64 もりのわき	見附島	13×10	4戸10歩	0.152	跡塙門番右衛門	内桑半束 檜地ノ内 0.018 同人
65 ちんでん	下々島	16×8	4戸8歩	0.235	善太郎	
66 ちんでん	見附島	10×10	3戸10歩	0.117	善太郎	
67 かち島ヶ	上島	13×10.5	4戸15歩	0.499	悲左衛門	内桑半束 檜地ノ内 0.018 同人
68 そと島ヶ	下島	9×6	1戸24歩	0.135	助右衛門	内桑半束 檜地ノ内 0.023 同人
69 ④	屋敷	17.5×10	5戸25歩	0.671	助右衛門	内桑半束 檜地ノ内 0.018 同人
70 家ノうら	中島	13×6	2戸18歩	0.247	助右衛門	
71 家ノうら	下々島	13×10	4戸10歩	0.238	助右衛門	
72 ⑤	屋敷	10×6	2戸歩	0.23	かめノ助	
73 川はたた	下下島	19×9	5戸21歩	0.248	かめノ助	内桑小半束 檜地ノ内 0.009 同人
74 家ノわき	中島	10×6	2戸歩	0.19	かめノ助	
75 家ノわき	下々島	15×7	3戸15歩	0.193	かめノ助	内桑半束 檜地ノ内 0.018 同人
76 川はたた	中島	10×6	2戸歩	0.19	真龍寺	
77 川はたた	中島	10×5	1戸20歩	0.158	久左衛門	
78 まえ島ヶ	上上島	14×12	5戸18歩	0.616	かめノ助	内桑1束 檜地ノ内 0.036 同人
79 そと島ヶ	上島	6×5	1戸歩	0.11	助右衛門	内桑小半束 檜地ノ内 0.009 同人
80 そと島ヶ	上島	12×10	4戸歩	0.44	助右衛門	内桑1束 檜地ノ内 0.036 同人
81 ⑥	屋敷	6×5	1戸歩	0.115	長三郎	
82 そと島ヶ	上島	8×6	1戸18歩	0.176	長三郎	内桑半束 檜地ノ内 0.018 同人
83 川はたた	中島	15×5	2戸15歩	0.238	利右衛門	内桑半束 檜地ノ内 0.023 同人
84 ⑦	屋敷	14×7	3戸8歩	0.376	利右衛門	
85 とうのまえ	中島	9×3	27歩	0.086	利右衛門	内桑半束 檜地ノ内 0.023 同人
86 とうのまえ	下々島	10×4	1戸10歩	0.073	久左衛門	
87 とうのまえ	下々島	6×1	6歩	0.011	久左衛門	
88 そとはたけ	中島	8×4.5	1戸6歩	0.114	利右衛門	内桑1束 檜地ノ内 0.036 同人
89 ⑧	屋敷	10×6	2戸歩	0.23	悲左衛門	内桑半束 檜地ノ内 0.018 同人
90 かち島ヶ	中島	18×8	4戸8歩	0.405	喜兵衛門	内桑小半束 檜地ノ内 0.009 同人
91 かち島ヶ	下々島	9×2	18歩	0.033	喜兵衛門	此束半束 同人
92 から島ヶノ上	下島	5×3	15歩	0.038		
93 から島ヶノ上	中島	10×6	2戸歩	0.15		
94 から島ヶノ上	下々島	7×2	14歩	0.026		
95 から島ヶノ上	中島	6×3.5	21歩	0.067		
96 ⑨	屋敷	15×3.5	1戸17歩	0.18	喜兵衛門	内桑半束 檜地ノ内 0.009 同人
97 ⑩	屋敷	15×3.5	1戸17歩	0.18	小成	
98 ⑪	屋敷	8.5×7	2戸歩	0.23	兵左衛門	
99 家ノままま	下々島	6×2	12歩	0.022	甚左衛門兵左衛門	
100 ⑫	屋敷	11×6	2戸6歩	0.253	甚左衛門	
101 しく島ヶ	上島	8×4	1戸2歩	0.117	かめノ助	
102 しく島ヶ	下島	8×6.5	1戸22歩	0.13	助右衛門	
103 しく島ヶ	中島	6×3.5	21歩	0.067	平左衛門	
104 ⑬	屋敷	4.5×4	18歩	0.069	平左衛門	
105 ⑭	屋敷	10.5×9	3戸4歩	0.36	久兵衛門	内桑2束 檜地ノ内 0.072 同人
106 せとノま	下々島	10×1	10歩	0.018	久兵衛門	
107 ねノかみ	上島	13×6.5	2戸24歩	0.308	助右衛門	
108 ねノかみ	下島	13×6.5	2戸24歩	0.21	助右衛門	内桑小半束 檜地ノ内 0.012 同人
109 ねノかみ	下々島	6×1	6歩	0.011	助右衛門	
110 ⑮	屋敷	12×6	2戸12歩	0.276	久左衛門	
111 ねノかみ	上島	13×8	3戸14歩	0.381	久左衛門	内桑小半束 檜地ノ内 0.009 同人

(以下、省略)

註) 他に枝村分として「川隣」に3家の屋敷が確認される。川隣の壁敷は以下の通りである。

⑯	屋敷	9.5×8	2戸16歩	0.291	茂左衛門
⑰	屋敷	7.5×6	1戸15歩	0.173	九右衛門
⑱	屋敷	6×6	1戸6歩	0.138	源蔵

(伊藤裕久)

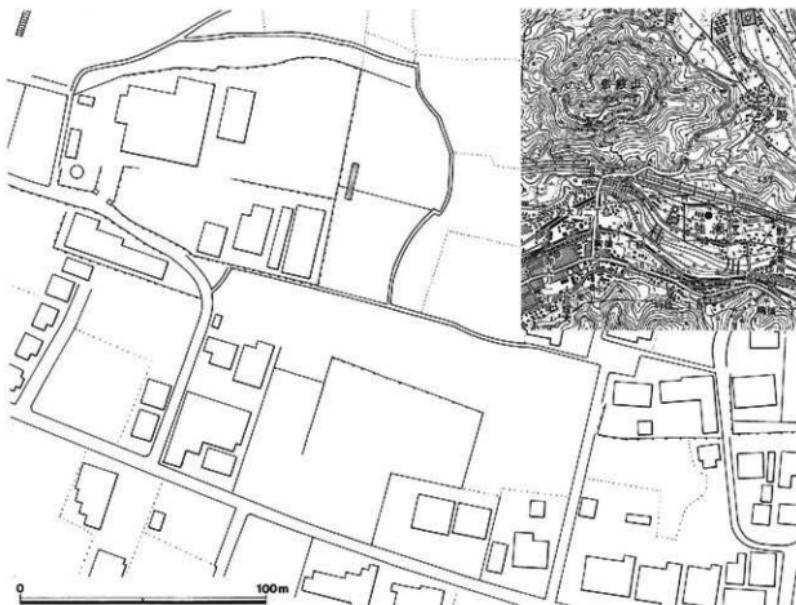
第3節 試掘調査の成果

1. 調査の概要

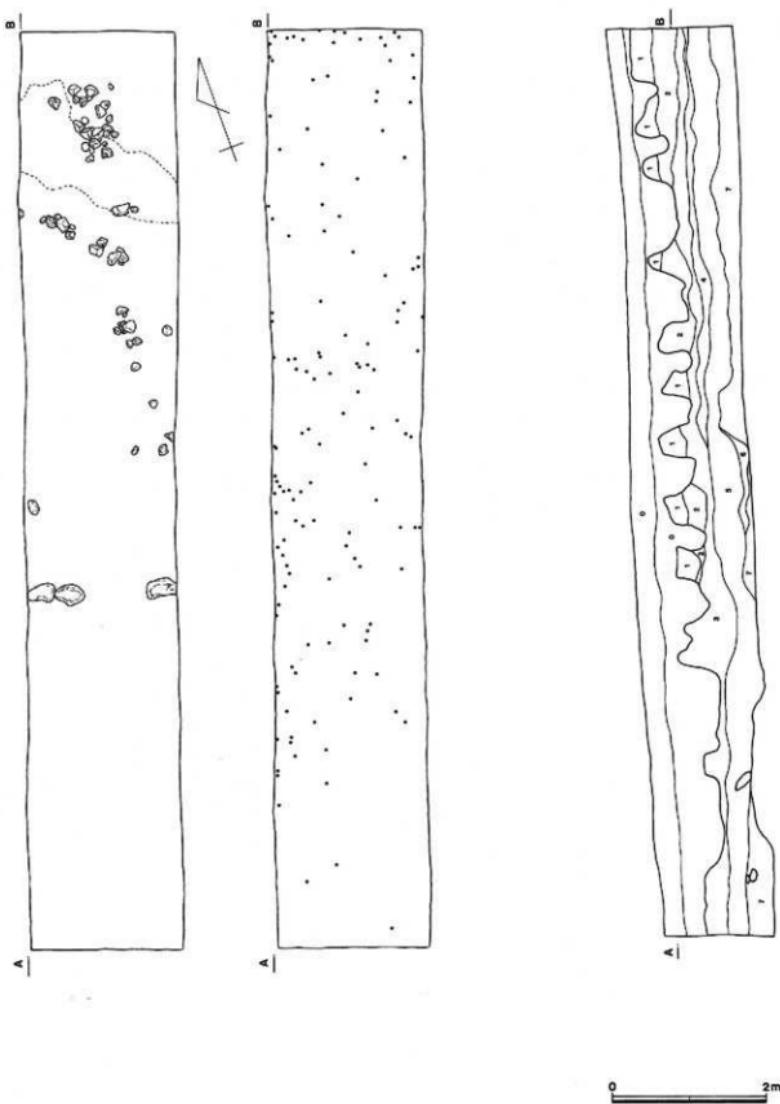
強瀬および岩殿集落は岩殿城に関連する城下集落であった可能性があることから、集落調査班により古絵図や検地帳の照合、現地踏査などが行われ、「御所」という場所の存在が明らかになった。「御所」は有力者の居館跡と考えられ、その検証のため試掘調査の必要が生じたものである。

強瀬は岩殿山の南東山麓、桂川左岸の日当たりのよい河岸段丘上に位置する居住適地である。河岸段丘は低位・中位の2段により形成され、東西両端は幅が狭まり崖になっている。江戸時代以降、近年まで集落は低位段丘東部に偏在し、西側および中位段丘面は耕作地として利用されてきた。最近になり中位段丘面に中央自動車道が施設されたり、低位部西側にも住宅や工場が増えるなど、急速に開発が進んでいる。地形も変わり、旧態を説明するのに適当な縮尺の地形図がないので、新旧の地図を合成・復元したのが第49図であり、調査地周辺の地形を表わしている。桂川と低位面の比高差は12~16m、低位面と中位面では14~20mほどで、「御所」は低位面中央のやや西側で、中位段丘の段丘崖を背にした場所、駿岡町強瀬394~397番地に位置する。周辺はなだらかな緩傾斜地であるが、「御所」だけは周囲より高く土盛りされ、台状の平坦地となっていいる。地元ではこの「御所」を含む周辺一帯を「御所平」と呼称しており、近隣には「馬場」「西畠」などの小字名が残る。

「御所」該当地は現在精密機械工場の敷地となっているため、隣接する休耕地を調査地として選定した。幸



第47図 御所平試掘調査位置図

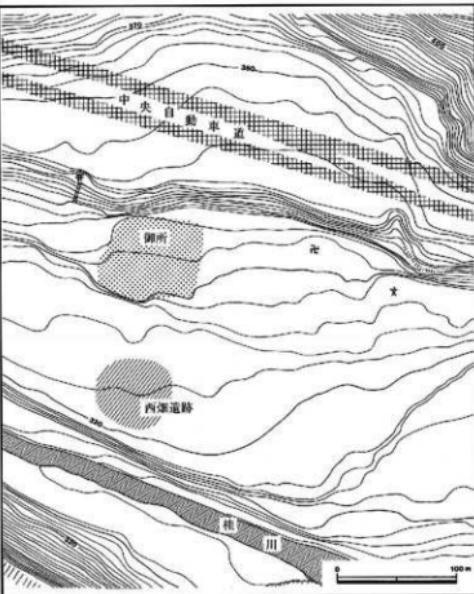


第48図 御所平試掘トレンチ実測図 集石平面図・遺物分布図・土層断面図

いにして、地主からは快く承諾を得ることができたので、岩殿山頂の調査の終了を待ち、平成9年10月27日から調査に着手した。隣接地とは言っても、明らかに「御所」の範囲外であり、礎石や柱穴などの遺構は確認できないと予想されたが、

層位	色調	特徴
0	暗褐色	最近の耕作上。
0'	暗褐色	旧耕作土。
1	暗黄褐色	多量の橙褐色スコリアを含み、粒子が荒い。
2	暗褐色	少量の橙褐色スコリアと微量の炭化物片を含む。
3	暗黄褐色	多量の橙褐色スコリアを含む。1層より色調暗い。
4	黒褐色	3層と5層の中間層。
5	黒褐色	柔らかく、微量の炭化物を含む。
6	黒褐色	炭化物片集中層。焼土粒を含む。
7	黒褐色	黄褐色土塊が混じり、細かいスコリアを含む。5層より明るい色調。

第5表 御所平土層説明



第49図 御所周辺地形復元図

中世の陶磁器などの出土を期待しての調査である。調査区はできるだけ「御所」に近い場所に設定することにし、工場の東側の擁壁に沿って2×12mのトレーニチを設定した。

表土付近は農耕による擾乱が深く、作付けによる凸凹もあり、20~90cmの深さまで擾乱を受けていた。土層の堆積は非常に厚く、最も深い場所で地表下150cmの深さでもローム層を確認することができなかつた。確認された土層は第5表のように分層することができた。

地表面から50~60cmほど掘り下げたレベル（3層の上部）に、拳大以上の大きさの砾による集石と踏み固められて硬く締まった部分が確認された（第48図：左）。両者とも確認された範囲が一部分であり、全体の広がりは不明である。硬い部分については、北西から南東方向に延びている様子から、農道などの道ではないかと推測される。これを道としてとらえると、集石も道の両側に配されているようにも見えるが、その場合の機能が不明である。耕作時に出た無用の砾を道端に捨てた結果かもしれない。

トレーニチ中央のやや南には、東西に並ぶ人頭大ほどの石列が確認された。この位置が現在の土地の区画とほぼ一致することから、土地の境界を示す境石と考えられる。集石などとともに、この面が長期にわたって地表面であったと推測される。この面からは陶磁器類が出土したが、分析の結果近世以降のものと判定された。

5層下部から7層上部のレベルに、かなり濃密な遺物分布が認められた（第48図：中央）。遺物のほとんどは平安時代の壊や壘の破片で、明確な中世陶器はみられなかった。遺物の分布状態から、平安期の住居址などの遺構の存在が予想されたが、調査の目的が中世の居館跡や城下集落の存在を探ることにあったため、これ以上の掘削を中止し、調査を終了した。なお、トレーニチ西壁中央部に確認された炭化物片の集中層（6層）

は火を焚いた痕跡と考えられるが、明確な掘り込みもなく、火床面が焼化した様子もみられなかった。平地での一過性の火の使用によるもので、時期的には古代末から中世と考えられる。

以上、結果的に中世の居館等の痕跡を確認することはできなかった。しかし、調査区近隣の西畠遺跡で平安時代の集落が確認されていること、また、今回の調査でも平安期の遺構存在の可能性があることから、平安時代以降、近世に至る間のある時期までは、段丘西部も居住区域として利用されていたことは確実である。今回の調査が「御所」比定地そのものでなかったことは残念であるが、中世の居館址や城下集落の存在は否定できない。

(杉本正文)

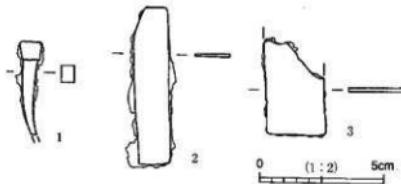
2. 出土遺物（図版10）

第6表 御所平出土近世、近・現代陶磁器

No	材質	器種・種別	技法・文様・装飾等	産地	製作年代	備考
1	磁器	丸碗	染付二重網目文	肥前系	1690~1780年代	
2	磁器	丸碗	染付草花文	肥前系	1690~1780年代	
3	陶器	丸碗	染付草花文	肥前系	1690~1780年代	
4	磁器	仏飯器	染付蘿蔓文	肥前系	1690~1780年代	
5	磁器	皿	染付	肥前系	1690~1780年代	
6	磁器	皿	口銚・染付	肥前系	18世紀後半~19世紀前半	
7	磁器	端反碗	酸化コバルトによる染付	瀬戸・美濃系	明治4・5年以降	
8	磁器	端反碗	酸化コバルトによる染付	瀬戸・美濃系	明治4・5年以降	
9	磁器	端反碗	酸化コバルトによる染付	瀬戸・美濃系	明治4・5年以降	
10	磁器	碗	酸化コバルト・型紙絵付	瀬戸・美濃系	明治15年以降	
11	陶器	甕	鉄釉	瀬戸・美濃系	17世紀後半~18世紀	
12	陶器	土瓶	灰釉	不明	18世紀後半以降	底外面煤付着

1~6は18世紀代の肥前系の磁器である。1は二重網目文を施した厚手の丸碗である。2・3は草花文を施す。4は形状から仏飯器の壊部とみられる。5・6は染付皿で、6は口銚部に口銚を施す。7~9は酸化コバルトによる染付の端反碗である。酸化コバルトは瀬戸には明治4・5年頃伝えられたと考えられており(仲野泰裕 1994 「19世紀の窯業」「化学史研究」第21巻第2号 化学史学会)、また幕末に盛行する端反碗は型紙絵付が行われるようになると減少することから、明治初期の製品とみられる。類似した松葉状の文様を描いた酸化コバルトによる染付碗は多治見市の大原窯などにみられる(田口昭二ほか 1993 「美濃窯の焼物」多治見市教育委員会)。10は型紙絵付による瀬戸・美濃系の碗で、口唇内面に瓔珞文が施される。11は漆黒色の鉄釉を施釉した甕などの破片で、釉調等から近世の瀬戸・美濃系陶器と思われる。12は灰釉を施釉した土瓶の底部で、底外面には煤が付着する。当地点は18世紀代の肥前磁器から、酸化コバルト・型紙絵付を使用した明治期の瀬戸・美濃系磁器が出土しているが、大正期以降の近・現代の陶磁器は少ないようである。

(森本伊知郎)



第50図 御所平出土鉄製品

また、ここからは鉄製品が3点出土している(第50図)。1は調査区のほぼ中央から検出された角釘で、先端が一部欠損し、レベル的にこの調査区出土の土器類と同じ頃のものと考えられる。2は厚さ2mmほどの鉄板で調査区北側の東壁脇から出土した。3も厚さ3mm弱の鉄板であるが、表土から出土し新しい時期の遺物である可能性もある。

(畑 大介)

第6章 岩殿城の伝説・伝承

岩殿山周辺には永い歴史を物語る数々の伝説・伝承・民話が多く残っている。正史としての信憑性にはややかけるが、はなばなし歴史の舞台に登場したものとは別に地域の文化遺産として大切に後世に伝えたい物語である。

1. 石動の鬼の杖

昔、岩殿山に住む鬼がいつも左右の手に石の杖を持っていた。右の手には長く太い杖を、左の手には短い杖を持ち、他の鬼どもを従え大将気取りで威張っていた。ある時この鬼がなにかに驚きこの杖を天高く投げ上げた。左の手の短い杖は1kmほど離れた原中に落ちて突きささった。大地は百雷が一度に落ちたかのように地響きをたてた。この原を「石動」という。今この「杖」は岩殿山東方の台地に、頭を2mほど出したまま立っている。岩殿山の方向に少し傾き、上端部には鬼の手のあとが残っていたという。一方、右の手に持っていた長い杖は4kmも離れた西方の笹子まで飛び突きささったという。右の手は左の手より力が強いため遠方まで飛んだのであろう。この地を地元の人は「立石坂」と呼んでいる。この鬼の杖は明治36年ごろ旧国鉄の工事により埋め込まれたが、地上2mぐらい出たまま残っている。

岩殿山と対岸にある葛野の徳岩山を、ひとまたぎにした鬼はまたが切れ、その血で染まった地面が大島の天神山と岩殿の丸山といわれ、今も赤土が出土する。

なお、この鬼の伝説は近世拡大され、犬目宿から島沢宿・猿橋宿・百蔵山とを結ぶ一連の「桃太郎」伝説と発展した。犬目はイヌ、島沢はキジ、猿橋はサル、百蔵はモモの里、川は桂川、「鬼ヶ島」は岩殿山として、地元の子どもたちの関心は高い。

2. 孝阿比丘尼

平安初期の頃、岩殿山円通寺に美人で聰明な孝阿比丘尼が逗留して三年後の夏、尼僧の発願により円通寺に三重塔が建立された。時は承平3年7月25日である。この尼僧は若狭国の出身。

3. 岩殿山頂の亀が池

岩殿山の山頂にある井水である。

この池は、どんな旱天にも枯れることがないので、幾月も雨が降らず干害の生じたときは雨乞いの池として岩殿郷の人たちが崇めた。

4. 円通寺と七社権現

大同元年(806)、円通寺創立と同時に岩殿山東中腹洞窟内に七社権現(伊豆山・箱根山・日光山・藏王山・熊野山・白山・山王)の各権現が祀られたという。中央の藏王権現は高さ2.20mもある巨体で、相馬將門の化身という。この7体はいずれも16世紀初期の造顛である。7体揃った神の立像として保存状況も良好で現在山梨県指定の文化財である。

大同元年行基上人が岩殿山に参って東方山腹にある洞窟にこもり、七社権現や円通寺本尊の十一面觀音を



第51図 千古の歴史を秘めて立つ鬼の杖

造顕したことが始まりという。

5. 大乗院のヤシロ

むかし岩殿山の麓に円通寺という寺があった。その中に大乗と常楽がいた。二人の若者はたいへん仲がよく、何をするにもともに話合い励まし合って修業を重ねていた。二人は和尚からも信頼されかわいがられていた。ある日、この二僧は相談し将来はえらい修驗道の法印になることを約束した。そしてともにきびしい修業に入った。修業を一心不乱に積み、初心をつらぬき法印の号を受領したという。一人は常楽院、他の一人は大乗院といった。

だが二者はこの官位に満足せず、さらに業と術をみがくことに専念した。そしていつしか、互に強い競争意識が芽生え、ついに敵意を持つようになっていた。日増しに仲は悪くなり、くる日もくる日もケンカばかりしていたので人々は信頼せず、立派な蒙號も靈力も發揮することなく、いつとはなく生活は貧困となつた。やがて腕力と鍛えた体力にものをいわせ、旅人や郷人をおどして金品をとりあげたり、言いがかりをつけて悪業を働くようになった。あきれはてた和尚は両者を呼んで、「仲の良かったお前達だが、このごろケンカばかりしていて肝心の業はどうした。それに郷人をおどして金品を奪うとは、法印としてあるまじき行為である。今日からこの寺を出て行け」と寺から追放した。大乗院は岩殿の対岸葛野郷に移り住んだ。今日もこの跡地を在名家大乗屋敷という。常楽院は岩殿山北麓一番の神（新）宮洞窟に住むようになった。けれども二人の仲は相変わらず悪くなるばかりだった。ついにはホラ貝を吹きながら「のろい」あるいは「殺し」を始めた。しかし、両者の術は伯仲し勝敗を決すことなく、いたずらにホラ貝の音は葛野川を挟んで響き渡った。

ところが西風の強く吹くある日のこと、常楽の吹くホラ貝の音が高らかに空に響き、殺氣のこもった「のろい」の音は風に乗って葛野川を渡り、大乗の胸元に突きささった。大乗は常楽の方向をにらんだまま「天われに利あらずしか」と天空に叫び、立ったまま息絶えたという。人衆の「立ち往生」であった。この凄まじい一劇を見た郷人は、「立ち往生」は弁慶以来聞いたことがない、この修驗者の立ち往生は強力な念力と長い間の厳しい修業のものと驚き崇敬のあまり、郷の入口に大乗の功徳を称え大乗院明徳神社を建立した。

6. 稚児落しとツヅラ峠

岩殿山から北西に約1km、大手門、築坂峠、兜岩と続く岩壁を行くと、高さ150m程の南に向かって屏風を広げたような岩窟上に出る。そこで話をすると声が響くので、昔から村人は「呼ばわり谷」といった。

この道はとてもけわしく小山田氏はいざ「岩殿落城」という時に東奥山から天日山境へ、小金沢山方面へ落ちのびる道と定めていた。天正10年（1582）3月初め岩殿城は北条勢によって攻撃された。この月の3日武田勝頼は新築して間もない新府城に火を放ち岩殿城に向かったという。武田軍の中には毎夜逃亡者が続出し、武田氏の「運命せまる」状況下にあった。城主小山田信茂は武川軍と行動をともにしていた。夕刻とともに北条勢の攻撃は激しさを加え、岩殿城は落城した。

城主小山田大人は家臣小幡氏二郎にツヅラを背負わせ、二人の子どもを連れ城内の婦女子とともに、築坂から東奥山方面に落ちた。そして「呼ばわり谷」の上まで来た時に、急に背中の子どもが泣きだした。夫人は背の子どもをおろし乳房を含ませたり、あやしたりしたがどうにも泣き止まない。そういう他の子どもも泣きだし、その泣き声は「呼ばわり谷」に響いて敵兵に発見されてしまった。夫人は敵兵の手からのがるために、やむなく涙ながらに子どもを岩壁上から落とし、「雁が腹すり山」方面にのがれた。この時からこの谷を「稚児落し」と村人は呼ぶようになったといふ。また最後に子どもに末期の水を飲ませたお堂を今も「水くれ堂」と呼ぶ。小幡氏がツヅラを置き去った跡は「ツヅラ峠」という。

(鈴木美良)

第7章 岩殿城周辺の城郭

1.はじめに

大月市から上野原町にかけての桂川流域には、岩殿城をはじめとして多くの城郭跡が点在している。これら城郭の築城経緯等に関しては不明な点が多く、城郭に関する史料は主に『甲斐国志』にその記載があるのみで、時期の特定が難しい。しかしながら、築城時期の比較的推定しやすい城郭を例にやや強引に推測をすると、概ね築城された時代が予想できると考える。

都留市にある谷村城は近世に入って整備された城郭であり、その前身は谷村館である。小山田氏の拠った谷村館は、天正10年（1582）3月武田氏滅亡後小山田信茂が誅殺され廃棄されるが、郡内の領有が織田・北条・徳川・豊臣から再び徳川へとまぐるしく代わる中、郡内支配の拠点として維持発展し近世前期には谷村藩が成立し谷村城とその城下となり、谷村城は宝永元年（1704）に谷村藩が廢止され幕府直轄地となると魔城に至る（出月洋文「谷村城・勝山城」萩原三雄編『定本山梨県の城』郷土出版社 1991年）。また、この谷村城と桂川を挟んだ勝山城は、当初小山田氏の要害として築かれ、小山田氏滅亡後北条氏が入り、その後は文禄3年（1594）に浅野左衛門佐が修築し、谷村城の支配変遷と軌を一にして宝永年間（1704～1711）に魔城となる（出月洋文「谷村城・勝山城」前掲書）。この築城時期の推定が容易な谷村館と勝山城を例にするならば、近世前期の郡内における城郭は谷村城と勝山城のみが機能していたのであり、桂川流域の城郭はそれ以前の中世段階に構築された可能性が高いと推測できる。さらに岩殿城跡の発掘調査成果によれば中世遺物は16世紀前半～中頃という年代綱がえられており、岩殿城を中心にみた場合にはそれらはおよそ武田氏滅亡以前の戦国時代に築かれたものとすることができる。

以下、現況造構の大略を示すことを主眼に岩殿城周辺に点在する城郭を紹介していくが、それら桂川流域に展開する城郭は戦国時代に築かれたという前提にたって、武田氏と北条氏の動向による甲斐・相模関係と城郭のかかわりについても瞥見してみたいと思う。

2. 岩殿城周辺の城郭

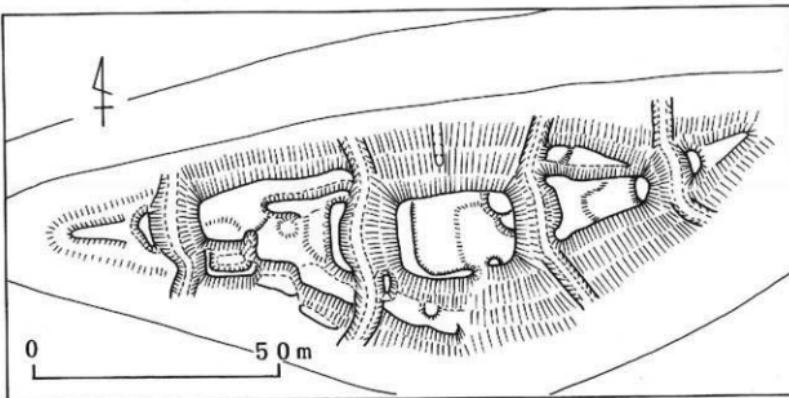
県内にのこる城館跡の現状を知るには、分布調査の報告書である『山梨県の中世城館跡』（山梨県教育委員会 1986年）が便利であり、ほかに『日本城郭大系 第8巻 長野・山梨』（磯貝正義ほか編 新人物往来社 1980年）・『定本山梨県の城』（萩原三雄編 郷土出版社 1991年）があり、冒頭で触れた近世段階での様子をうかがい知ることのできる『甲斐国志』（本稿では、「大日本地誌大系 甲斐国志」第1巻～第5巻 雄山閣 1968年～1982年を、参照並びに引用）も欠くことが出来ない。また、『都留市史 資料編 古代・中世・近世I』（都留市 1992年）には、都留市全域と大月市・西桂町の一部に及ぶ、中世城郭研究会による縦張研究と地名考証に基づく城館調査の成果が掲載されている。これらの資料を参考に現地踏査の成果と縦張図を掲げて岩殿城周辺に展開する城郭を見ていく。なお、城郭の名称に関しては、城郭の性格を規定してしまうような命名や、伝承名以外の城・砦名を使用することに批判があるが（松岡進「6花咲城」・八巻孝夫「8駒宮城」『都留市史 資料編 古代・中世・近世I』前掲書）、ここでは『山梨県の中世城館跡』に掲載された名称を用いることにする。また、各城郭の規模は本格的な測量を行ったものではなく、簡易測量や歩測・目測であり造構の配置や大きさ・距離などは実際とは多少のズレがあり厳密に言うと正確なものではない。

＜駒宮砦＞（第53図）

葛野川に浅川が合流する所の北側、標高496mの天神山に築かれた城郭。天神山北側に形成された駒宮集落との比高差約90m。葛野川の谷あい沿いに岩殿城と相互に望むことができる。造構は山頂を中心東西120m、南北40mの範囲にみられ、東西方向にのびる尾根上に4本の堀切とそれに挟まれた3つの郭によって成



第52図 岩殿城周辺の城跡
①岩殿城 ②駒ヶ岳前山 ③駒ヶ岳宮前山 ④駒ヶ岳御前山 ⑤斎輪の城 ⑥洞之上御前山 ⑦牧野砦 ⑧四方津御前山
⑨橋穴御前山 ⑩鹿島御前山 ⑪長峰砦 ⑫大曾砦 ⑬在光院金堂 ▲その他の城郭 ●その他の城跡



第53図 駒宮砦

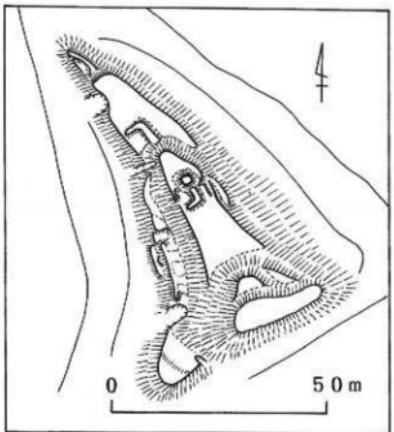
り立っている。主郭は山頂部分にあり、東西25m南北15m程の広さで東西二段に分かれている。周囲にはやや不鮮明ながら部分的に土塁がめぐり、南辺には土塁に挟まれた虎口があり下段の腰郭に通じている。堀切を隔てて一段下がった東側の郭は三角形状で東端に土の高まりがあり、北側には腰郭をともなう。西側の郭も堀切を隔てて一段下がってつくられており、郭内部が土塁や段差により幾つかに区画され、見様によつては直径5m程の円形の凹みが中央部分にみられる。南側には腰郭が三つありそのうち西端のものは上塁をともなう特異な形態を呈している。4本の堀切から続く堅堀は、堀切の方向とは逆に落とすという特徴がみられる。『甲斐国志』には「御前平 浅川ト駒宮両村ノ間ニアリ御前ト云コト尋常ナラヌ称ナリ是亦其故ヲ知ラズ郡中凡御前ト云山所々ニアリ多ハ烽火台ノ跡ナルベシ御前平モ其類ナルベシ」とあり、烽火台と推定している。

<駒橋御前山>（第54図）

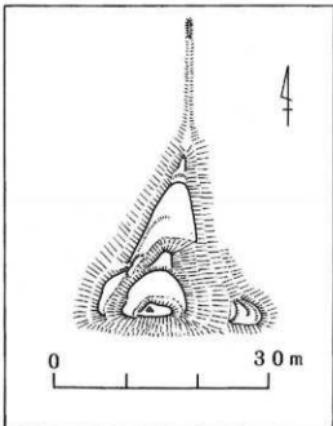
東京電力駒橋発電所背後の御前山に立地する。城郭は御前山の切り立った山頂の50m×70mの範囲の僅かな平場を利用して築かれ、南端の岩場から北に向かって三段程の平坦地があり、標高は730m程度。北側の駒橋二丁目集落との比高差は約400m。岩場は御前岩と呼ばれ、そこから北に一段下がって幅5m程の平坦地があり、さらに大きく下がって中央部分となる15m×20mの平坦地がある。この平坦地の北西隅には土塁に囲まれた樹形状の施設があり、その先には2m四方の土壇をともなう三角形状の平坦地があり、さらにその先には一段下がってL字状の土塁が施された長さ25mの平坦地がある。中央部分平坦地西側の山腹には腰郭と思われる細長い平坦地があり、堅堀とみられる凹みに挟まれている。南西角には岩場からかなりの段差をもつて三角形状の平坦地がある。これら平坦地は郭と見て間違ひ無いと思われるが、周囲には土塁はめぐらない。

<猿橋の城山>（第55図）

小沢川右岸の河岸段丘にせりだした標高548mの城山山頂に立地する。北西の小倉集落、東側の藤崎集落との比高差は210m前後で、JR中央線猿橋トンネルが山裾地下を貫通している。城郭は切り立った山頂の幅20m程の僅かな平場を利用して築かれ、南端には三角点のある幅広の土塁状の高まりがあり、それを囲むように8m×10m程のおにぎり形の平坦地があり、そこから北方向に長さ3mの小段が続き、大きな段差を



第54図 胸橋御前山



第55図 猿橋の城山

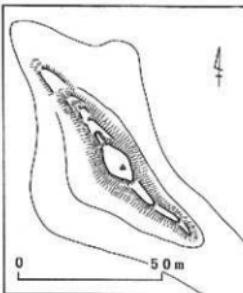
もって10m前後の三角形状の平坦地となる。西側には幅2m前後の腰郭と思われる細長い平坦地がある。東側には舌状の尾根上に三段ほどの平坦地がみられる。『甲斐国志』には「駅ノ東南ニ城山ト云山アリ高サ一町許上平坦ニセテ礎石ノ跡アリ蓋シ烽火台ナルベシ」とある。

<斧窪御前山>（第56図）

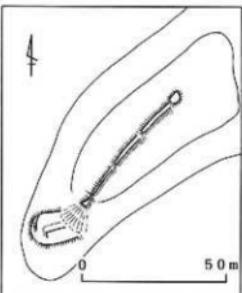
斧窪御前山は桂川左岸段丘上の斧窪集落西側に屹立する山をさす。斧窪集落との比高差は約200m、山頂の標高は523mで、15m×8m程の広さの平坦地となっており、明瞭な遺構はなく北と南の尾根筋に三段の段差がある位である。山頂からの眺望は良く、西に猿橋の城山、東に四方津御前山などを見る。

<綱之上御前山>（第57図）

『甲斐国志』に「御前山繩庄 本村ノ



第56図 斧窪御前山

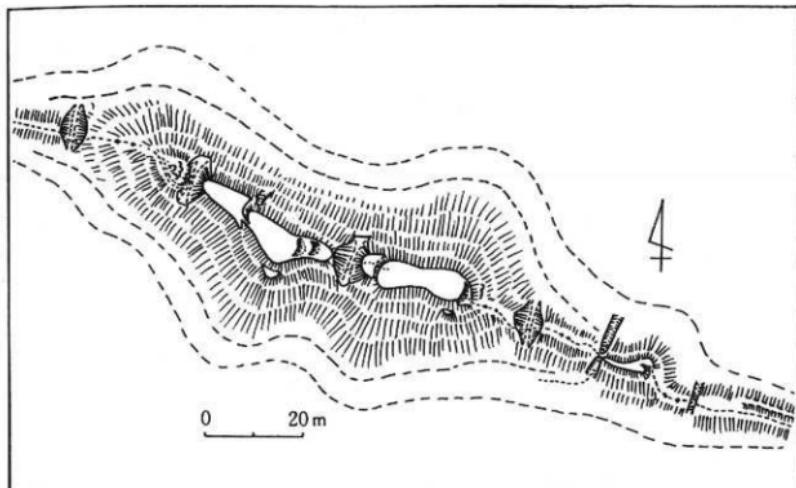


第57図 綱之上御前山

北ニアリ高ク秀デ其上少シ平地アリ前ハ桂川ニ臨ミ後ハ上大野村ナリ是古ノ烽火台ノ跡ナルベシ」とある。『山梨県の中世城館跡』では桂川左岸段丘上の綱之上集落西側に屹立する山をさしているが、地元ではこの山を「寺山」あるいは「コンボウヤマ」と呼んでおり、綱之上集落周辺での御前山の名称は前出の斧窪の御前山のみである。名称に混同があるのだろうか。『山梨県の中世城館跡』の分布地点の山頂は標高568mで、3m四方程の広さの平坦地があり、南西方向に瘦せ尾根が続いている。綱之上集落との比高差約290m。南東方向の尾根続きには綱之上と大野を結ぶ峠道が通っている。

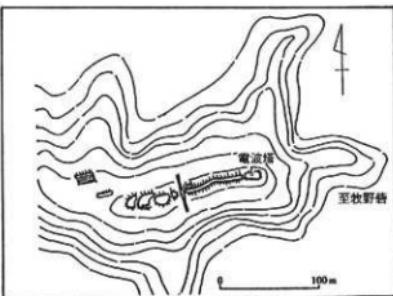
<牧野砦>（第58図）

桂川左岸の四方津御前山から東にのびた尾根上に立地し、東側山下の段丘上には松留集落がありその先で桂川と鶴川が合流しており、南は桂川の谷間、北はハツ沢の谷が入り込む要害の地となっている。南西側の



第58図 牧野砦（畠大介「甲斐における尾根上の城の比較私論—熊城を中心として—」
〔甲府市史研究〕第9号 1991年より一部改変）

牧野集落との比高差は約110m、松留集落との比高差は約130m、標高は360m程で、尾根を分断する6本の堀切と3つの大きな郭から成り立っている。西側からみていくと、最初の堀切があり20m程隔てて2番目の堀切があり、そこから東にかけて山頂の長さ10m程の郭を中心に東と西に段差をもった郭がつくられる。さらに東側には4番目の堀切を隔てて腰郭を伴う長さ20m程の大きな郭があり、やや下って4番目の堀切、そこから15mで5番目の堀切、さらに20m離れて6番目の堀切となる。5番目と6番目の堀切の間には長さ10mほどの平坦地がつくられる。最初の堀切と2番目の堀切の間と4番目の堀切と5番目の堀切の間は、削平されたような平坦地は見られず自然の尾根のままのようである。6番目の堀切から東側の尾根の鞍部には牧野とハツ沢を結ぶ峠道が通っている。『甲斐国志』には「古城跡勘定 本村ノ北山上ニアリ頂上平地ニシテ館舎ノ趾アリ礎石今ニ存セリ峯ニ切通シ三所アリ此山南ハ桂川ニ臨ミ東北ハ鶴川ヲ廻ラシ其内ニ八沢・松留・民戸山足ニ連リ西ハ大野村アリ四方連峯ナキ一孤山ナリ要害類ナキ城跡ナリ此何者ノ居城ナリシコト不詳土人唯御番町ト称スルノミ然レバ小山田ノ比翼ニ築テ国界ノ鎮トセルモ不可知此山ヨリ遠望スレバ本郡ヨリ相ツツキテ相模ノ津久井県ノ諸村眼前ニミユ敵兵襲来ルモ明ニ見ツベシ又其西ヲ御前山ト云是又人工ヲ用テ切平ゲシ山ナリ烽火台ノ跡ニヤ又村ノ東松留村へ出ル道ニ門闕ノ跡アリ表木戸ト称ス此道山ノ中腹ニ掛テ南岸ハ桂川ニ持チ甚グ細路ナレドモ往来唯此ニ由ルノミ門闕ノ所南岸ニハ石ヲ高クタタミテ門ノ礎石ノ跡アリ今世掘崩シテ其趾僅ニ存セリ又村ノ西中井ト云所ニ門闕ノ跡アリ裏木戸ト称スソノカミ村内ニ居館ヲカマヘ東西ニ木戸ヲ構ヘ山上ハ要害城ニ築ク許ニテ常ニ住所ニハアラザルベシ何人ノ居館



第59図 四方津御前山（『日本城郭大系』より）

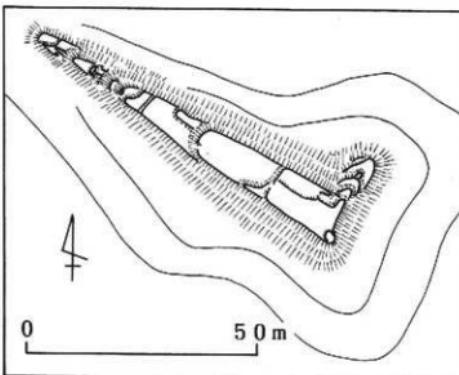
ナルコトヲ不詳」とあり、「表木戸」・「裏木戸」と称する閑門を村の出入り口となる東と西に設け、居館を村内に構え要害城を山上に築いたとの認識がなされている。築城者については不詳としながらも、相模津久井郡の諸村が遠望でき、国境の抑えとして小山田氏が築いたとの見方も行っている。さらに四方津御前山にも触れている。現在『甲斐国志』にみえる「御番城」の名称や、館跡・礎石・門閑・居館などは詳らかではない。

<四方津御前山>（第59図）

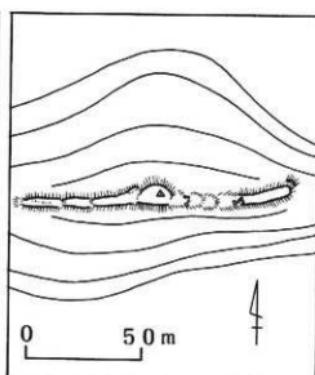
桂川左岸の仲居集落北方に屹立する山を御前山と称し、『甲斐国志』には「其西ヲ御前山ト云是又人工ヲ用テ切平ゲシ山ナリ烽火台ノ跡ニヤ」と記され、烽火台とされている。牧野砦の西側に位置し、集落との比高差約210m、標高は460m程度で、東西方向にのびる尾根上に築かれる。中央付近に堀切があり、東側は細長い平坦地で東端には電波塔があり遺構は不明となっている。西側では三角点のある12m×8m程度の広さの郭を頂点に東に一段、西に二段の平坦地がつくられ、さらに西側には広い平坦地と5段ほどの平場がみられる。

<柄穴御前>（第60図）

桂川右岸段丘上の柄穴集落南東にそびえる、標高431mの独立峰に築かれた城郭。柄穴集落との比高差は約180m。山頂は10m×15m程度の長方形の郭で南角に土盛り状の高まりがあり、北角には梯形状の遺構がみられ、その先には三段の郭がつくられる。山頂から南東側は急崖で、北西方向には大きく二段の郭があり、さらに小さな溝を隔てて三段の小郭が続く。大きな二段の郭にはそれぞれに南隅と北隅に土壘状の高まりがある。小郭には土壘に挟まれた虎口がみられる。小郭の先は大きな段差で堀切があり、その外側に三段の郭がつくられる。『甲斐国志』には「柄穴御前 四方津ノ支村柄穴ニアリ山上平坦ニシテ礎石存セリ土人拾來已ガ家ノ柱礎ニ用山上又神明屋敷ト云地アリ其山下鶴島村へ出ル山路ニ柳沢ト云地アリ此所ヲ木戸ト云門ノ跡アリ相伝鶴島ノ神明祠ハ往昔此山ヨリ祠ヲ移ス故ニ其社地ヲモ柳沢ト云トゾ此山桂川ヲ隔テ城山ト相対セリ烽火台モサノミ遠カラズシテ數所ニ置クコトモアルマジ何ノ用タルコト不詳」とある。



第60図 柄穴御前



第61図 鶴島御前山

<鶴島御前山>（第61図）

柄穴御前の南東に屹立する標高484.1mの山を御前山と称し、『甲斐国志』には「御前山關 本村ノ西ニアリ柄穴御前ト相並ベリ故ニ此ヲバ鶴島御前ト称ス山頂平坦ノ地日向屋敷ト云土人相伝テ小俣日向守ト云者居館ナリトゾ其辺ニ門前・駒門・馬剣ナド云地アリ」と記され、小俣日向守の居館と伝える。東側鶴島集落との比高差は約270m。現状では三角点のある10m×15mの平坦地を中心に、東西方向にのびる尾根上の東と西

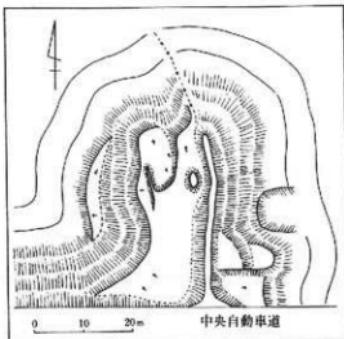
に三段程度の平場がある位で、居館とは認め難い。

＜長峰砦＞（第62図）

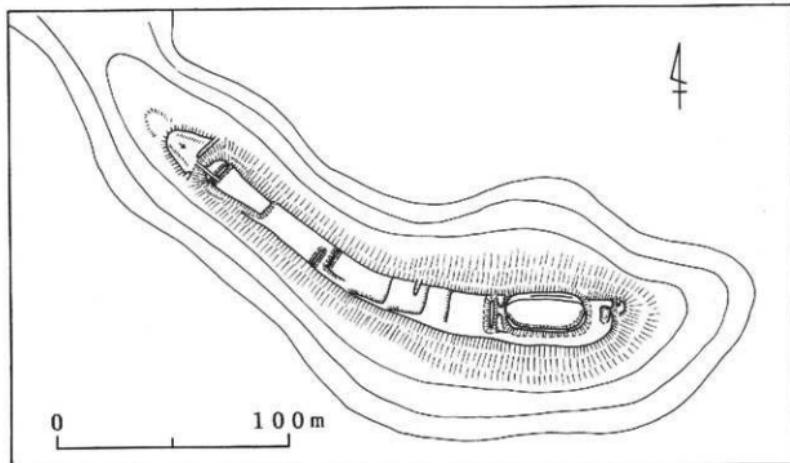
仲間川右岸の段丘上に立地する日野集落西側の後背丘陵に築かれた城郭で、集落との比高差は約35m、標高は375m。城郭の南端は江戸時代の初めに設置された旧甲州街道が通っており、街道沿いの大柄の集落と野田尻の集落との間に位置している。当時は大柄に一里塚、野田尻に宿場が置かれていた。「上野原町誌」（上野原町 1975年）によれば、城跡は小高い平坦地で北方に堀切があり、南は「陣門」と呼ばれ、その東側に「湯り池」北西部に「殿の井戸」という旱魃にも涸れない泉があったという。中央自動車道によって現在その大部分が破壊されてしまい、現状では僅かに自動車道の北側に土星・腰郭などの遺構が確認できるのみである。『甲斐国志』に「長峯砦并野田尻村ノ東大柄村ノ分界森ヶ巣ト云所ニアリ官道ノ旁少シ高キ地是ナリ上平地ニシテ北方ニ堀切ノ跡アリ東岸ニ池アリ湯り池ト云水常ニ溝テ菱生ズ此水早魃ニモ枯ルコトナシ城ノ南ヲ陣門ト云當時門塙ナドアリテ官道ヨリ南ニ道ヲ通ゼルカ此何人ノ居趾ナルコトヲ不知或云加藤丹後守ガ居城ナリト然レドモ丹後守ハ上野原ニ居住シテ敵國ノ鎮タリ且此旧趾甚狭小ニシテ常ニ住ベキ所トモ見エズ陣鍬ナド置テ敵ノ急ヲ近郷ニ告シ所ニヤアラン」とあり、加藤丹後守の居城との伝承を伝えるがそれには否定的で、狹小な規模から有事の際の連絡施設・物見的城郭としている。

＜大倉砦＞（第63図）

仲間川が鶴川に合流する手前の左岸段丘上にせりだした尾根上の末端に、幅20m長さ210mの範囲に築か



第62図 長峰砦（『定本山梨県の城』より）

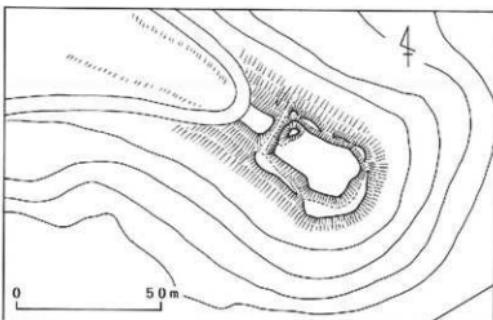


第63図 大倉砦

れた城郭。南西側山裾の谷あいには大倉の集落があり、北側にはツケ沢が入り込み登下集落がある。地元では要害山と呼ばれ、山頂には秋葉社が祀られており標高は536m、大倉集落との比高差は約180m。山頂は尾根の東側にあり、30m×15mの長方形をした平坦地で南側半分には高さ1m程の土塁がある。この山頂の郭の一段下には東から南へかけて帶郭がめぐり、帶郭は南西部で西側の郭へとつながっている。帶郭東側は幅が広くなつており小さな樹形虎口があり、その先は浅い堀をともなう馬出状の半円形の郭となつていて。山頂の郭と西側の郭の間には土塁と堀がみられる。西側の郭は尾根を削平してつくられた七段の平坦地で、尾根筋に沿つて北西方向に弧状に並び、南側に高さ50cm前後の土塁がある箇所や食道い虎口がみられる。西端ではかなりの段差をもつて北と南から浅い堀が入り込む長さ15m程の郭がつくれられている。現在城跡には遊歩道が付けられており、部分的にではあるが構造を破壊している。西側の尾根続きの鞍部には、大倉と登下をつなぐ峠道が通つていて。地元の伝承では、東端の樹形虎口の凹み部分で烽火を焚いたといい、登下にはその昔お蔵が2～3つあり戦に備えて穀物を蓄え城に供給したという。「甲斐国志」には「城山大倉 本村ノ寅方山ノ中腹ニアリ平坦ニシテ四方石垣ノ跡アリ土人城山ト称ス何人ノ居跡タルコトヲ不知或云陣跡ヲ置シ地ナリトサモアルベキカナ」とある。石垣の跡は現在では分からぬ。

<花咲鐘撞堂>（第64図）

笛子川左岸の上花咲集落北側の天狗山に築かれた城郭。標高は417mで、集落との比高差は約45m。南東方向にのびる尾根上の先端が20m×30m程の平坦地となっており、平坦地北西側の尾根続きには土塁と堀切があり、山腹には帶郭がある。現在中央自動車道が南側山麓を通つていて、城跡にはその工事にともない神社が移転され、公園となっている。「甲斐国志」には「拂鐘堂趾上花咲駅 本村ノ北山ノ中腹ニアリ上平坦ニシテ広シ崖下ニ掘ツメグラシ山腹ニ差出シ地ナリ土人唯居敷趾トノミ



第64図 花咲鐘撞堂

伝ヘテ居人ノ姓名ヲ失ヘリ思ニ是戰國ノ時相図ノ鐘撃シ跡ナルベシ」とある。

このほか、桂川上流の都留市には近ヶ坂鐘撞堂、谷村の烽火台、大和村と大月市の境には笛子峠烽火台があり、上野原町の鶴川上流には猪丸城山の烽火台や桐原（小伏）の城山などが知られ、また秋山村には一子沢の城ヶ峯、道志村には道志鐘撞堂が神奈川との県境にあり、館跡は伝承地を含め各地に点在している。館跡を除くと岩殿城周辺に展開する城郭群は、例外はあるものの眺望のよい尾根上や山頂につくられるようである。

3. 戰国期の甲斐・相模関係と城郭

前項でみてきた城郭は、「1.はじめに」で触れたように戦国時代の所産と推定したが、これら城郭群の築造時期に関しては何人かの研究者が言及している。

室伏徹氏によれば、永正17年（1520）築城の要害城（甲府市）や大永3年（1523）築城の湯村山城（甲府市）との比較においてそれ以後、北条氏とのかかわりで享禄3年（1530）に上野原西部で小山田氏が敗戦する矢坪坂合戦から永禄4年（1561）に上野原の加藤氏が文書に現れる間に郡内北部の城郭群が築かれたとしており、岩殿城は郡内衆が岩殿山円通寺の再建に奉賜した永正17年前後に対相模・武藏の拠点として位置付

けられたとしている（「甲斐・武藏・相模国境の城砦」『日本城郭大系 第8巻 長野・山梨』前掲書）。

萩原三雄氏は、武田氏と北条氏との攻防から国境となる都留郡北部の地が重要視され漸次城郭が整備されていった、という認識を示し、永正7年（1510）の武田氏と小山田氏の和睦、享禄3年に小山田氏の敗北した矢坪坂合戦をその画期と見ている（『都留郡北部の城館跡』『五街道』No.42 東京美術 1985年）。また岩殿城の築城時期に関しては、永正7年の武田氏と小山田氏の和睦以降比較的早い段階で、永正17年の猿橋や大永7年（1527）の岩殿橋の架設、永正16年（1519）・同17年の鶴躑躅ヶ崎館や要害城の建設、大永3年湯村山城の築造などと連動して築かれたとしている（『岩殿城の史的考察』『山梨考古学論集Ⅱ』山梨県考古学協会 1989年）。

このほか、八卷孝夫氏は岩殿城を武田氏直轄の境目の城と位置付け、桂川流域につくられる城郭を北条氏との対戦を想定した国境の各ルートを守備する岩殿城の支城群ととらえており（『8駒宮城』『都留市史 資料編 古代・中世・近世Ⅰ』前掲書）、畠大介氏は武藏からの複数の進入路のある上野原付近に境目の城が数多く築かれたと認識している（『甲斐における尾根上の城の比較私論—熊城を中心として—』『甲府市史研究』第9号 甲府市市史編さん委員会 1991年）。

これらはいずれも基本的には、桂川流域や相模との国境地帯の甲斐国側に存在する城郭は対北条氏用に武田氏が築いたもの、という理解をしている。

ところで、『妙法寺記』には延徳4年（1492、7月に改元して明応元年となる）6月11日条に「甲州乱國ニ成始ル也」とあり、このころより甲斐国内に戦国の動乱が続くことが記されている。郡内においても、明応4年（1495）・文亀元年（1501）には北条早雲が乱入し、永正4年（1507）に家督を繼いだ武田信虎が永正5年（1508）には国内に攻め入った小山田氏ら郡内勢を打ち破り、逆に翌年には郡内に乱入するといった動きなどがみられる。しかし、永正7年に都留郡と国内が和睦を結んだ段階以降は、小山田氏が武田氏の被官となると、武田氏と北条氏は直接対峙することになる。以後、両者の抗争の歴史がはじまり、郡内地方は甲斐と相模・武藏の国境に接するという地理的な要因から度々戦火にさらされることになる。この抗争の過程において城郭がつくられたり、整備されたりしたことは想像に難くない。

戦国時代における武田氏と北条氏の対立と同盟の関係は、『妙法寺記』を資料に柴辻俊六氏が整理しているが（『第四節 戦国期の甲・相関係』『戦国大名領の研究—甲斐武田氏領の展開—』名著出版 1981年）、対立関係は第1期として大永4年（1524）～天文9年（1536）頃までの武田信虎と北条氏綱の甲斐都内領と相模津久井郡をめぐる争い、第2期として永禄11年（1568）の武田信玄による駿河侵攻にともない勃発した戦い、第3期として天文6年（1578）上杉氏の家督争いの「御館の乱」に武田勝頼が介入したことによる起因する両者の争い、におおきく分けられ、友好関係は天文23年（1554）の駿河今川氏を入れた三国同盟の成立、元亀2年（1571）11月北条氏康の死によってもたらされた講和、の二時期に分けられる。

このなかで大月市から上野原町にかけての地域が戦場或いは攻防の対象となった時期を上げてみると、第1期では大永4年に武田信虎は猿橋に陣取り奥三保（神奈川県津久井郡の一帯）へ戦いを仕掛け、小猿橋（神奈川県津久井郡藤野町吉野橋下辺り）で度々合戦をしている。翌大永5年には津久井城（神奈川県津久井郡津久井町）をめぐる武田氏と北条氏の攻防があり、大永6年にも紛争は続く。享禄3年には小山田信有率いる武田軍が猿橋に陣取るが、北条氏綱に矢坪坂（上野原町矢坪）において負けを喫する。天文5年（1536）には小山田信有が相模青松郷（神奈川県津久井郡津久井町）へ乱入し足弱100人ばかりを生け捕っている。第2期では永禄12年（1569）に小山原城を包囲した武田信玄は、その帰路三増峠（神奈川県愛甲郡愛川町）で北条氏照・氏邦の軍を打ち破り甲斐国へ戻っている。第3期にはこの地域での直接的なぶつかり合いはみられないが、天文9年3月付けの武田家朱印状に岩殿城の在番と普請が定められている（『一三四 河野家文書写』『大月市史／史料篇』大月市役所 1976年）。

このような軍事的状況の変遷から城郭の築造経緯を推測すれば、まず武田信虎や小山田信有の狼橋への布陣から、国境を侵されてしかも惨敗した享禄3年の矢坂の戦いが、先にあげた室伏氏らの説のように、この地域での城郭築造のひとつの画期としてあることは間違いないであろう。また永昌院（山梨市矢坪）の住職から寺領があった狼橋郷（大月市狼橋）の年貢収納などについて小山田氏に出された要望書のなかに、「一、界名普請之事　此二三ヶ年者相州と御不和故、境目之御普請ニ罷出候条、不及是非候、只今者申相御無事上者、如前々伽藍之再興四壁之繩結等申付度候」（「四七二 永昌院領中條日」荻野三七彦・柴辻俊六編『新編甲州古文書』第一巻 角川書店 1966年）の一項目がみられる。ここに記された「境目之御普請」とは国境の境目にある城郭の普請のことをさし、寺領狼橋郷内百姓が相模との緊張関係により行っていた境目の城の普請役を、現在は甲斐・相模関係が好転し平穏となったので前々の如く寺院の修理に当てたいと申し出たものである。本文書は年未詳であるが元亀3年（1572）と推定されており（『大月市史・史料篇』前掲書）、「境目之御普請」は元亀2年北条氏康が死亡する以前の第2期の抗争関係においてなされたものとされよう。小田原城の包囲や三増峰において大勝したとはいえ、対北条氏の軍事的緊張関係のなか城郭を構えて国境の維持管理に腐心している様子が理解できる。さらに武田氏の末期である天正9年段階での岩殿城在番の定書もこの時期での緊張状況を示しており、岩殿城が国境地帯の要として位置付けられ在番衆の増強を行い相模方面に対する防衛の強化が図られたことが窺える。

武田氏と北条氏両者の抗争史とその間の友好状態によって、国境地帯は軍事的緊張関係やその弛緩を繰り返す。城郭はその軍事的緊張状態のなかで形成され発展していったと考えられる。

4. おわりに

尾根上の城郭を比較検討した畠大介氏は、敵側に対する防御方向を表としその反対側を裏として城郭遺構を「表裏性」という言葉で表現し、中心的遺構となる郭に関しては、堀によって区画される郭を独立性の高いものとし郭間の堀切の有無により「郭の独立性」という言葉で特色付け、駒宮砦や牧野砦などを例としながら、これらを「郭の独立性」が強い城郭ととらえ、郡内地方北部の城郭の特徴とみなしている（『甲斐における尾根上の城の比較私論——熊城を中心として——』前掲書）。しかし、「2. 岩殿城周辺の城郭」でみてきたように、堀切が多用されるのは駒宮砦・牧野砦だけで、そのような城郭はさほど多くはない。四方津御前山・柄穴御前の堀切は一ヶ所のみであり、斧津御前山・網之上御前山・鶴島御前山は明確な遺構ではなく、大倉砦・柄穴御前は尾根上に連郭的な縄張をもち、駒橋御前山・狼橋の城山は階梯的な構造となっている。花咲籠堂は堀切と郭の単純な構成で、より集落に近い立地に築かれる。

城郭の縄張研究では地表面観察により、郭・堀・堀切・堅堀・土塁・石積みあるいは虎口等の城郭を構成する諸要素の比較検討によって、その城郭の特徴を抽出し築城の背景や築城主体・經營者に迫ろうとする。岩殿城周辺の城郭にも縄張にいくつかの傾向があり、それらが機能的な相違によるものなのか、立地に基づくものなのか、築城者の意図によるものなのか、地理的・地域的な差異によるものなのか、歴史的な段階の結果があらわれたものなのか、いくつかの総合的要因によるものなのか、今後深く検討していく必要があろう。さらにこの地域にみる重層的な城郭の有り様は、戦国期における複雑で微妙な国境地帯の様相を示していると思われ、城郭相互の比較のなかで相対的な把握と位置付けを行っていくことが不可欠と言える。

なお、本稿では前提として桂川流域に展開する城郭を武田氏滅亡以前の戦国時代に築かれたとしたが、武田氏滅亡後に徳川氏と北条氏によって甲斐国の大有をめぐる争いが引き起こされ、甲斐国内は戦場となる。この抗争はその年の十干をとって天正壬午の戦いと呼ばれ、郡内地方は北条氏が入り徳川氏の拠点への攻撃の足掛かりとなる。この戦いでは徳川・北条の両氏によって国内の城郭が築造・改修された可能性が極めて高い。ここでは言及できなかったが、岩殿城周辺の城郭ばかりでなく県内にのこる城郭を考究する場合に、天正壬午の戦いを大きなひとつの画期としてとらえることが重要な視点となるであろう。（山下孝司）

第8章 岩殿城研究の考察

岩殿城は、戦国時代の山城として全国的によく知られている存在である。威風堂々としたその姿はまさに天下の名城の名に相応しいものがあるが、しかしその実態となるといままで十二分に把握されているとは言い難いものがあった。そのために、三ヶ年におよぶ学術調査が計画され、岩殿城と、かつて岩殿山中に存在していた名刹円通寺などの歴史性について改めて詳細に検討することとし、あわせて岩殿山全体の自然を含めた総合的な調査として実施された。

本章では岩殿城の学術調査の成果をふまえて、その史的意義について若干の検討を加えることとし、さらに今後の課題等を二、三述べながら、総括にかかないとおもう。

岩殿城の調査成果についてはすでに各章で詳細に報告されており、ここであらためて繰り返すことではないが、本城がかかえる課題は多く、とくに築城時期などの年代観や築城主体の問題、あるいは城主はいったいだれなのかといったような重要な問題をはらんでいるだけに关心が高いものがあるが、直接的な資史料は乏しく、今回の学術調査においても明らかにできなかった点は少なくない。しかし、岩殿城の全体測量などによって規模や構造がさらに鮮明になり、また山頂部の「蔵屋敷」と伝えられている地点に設置された第3～4調査区の試掘調査では思いもかけない重要な遺構や遺物が発見され、岩殿城の全容解明の重要な糸口を得ることができた。

上記の地点で確認された遺構は礎石建ての建物跡である。ごく限られた調査範囲であったが、多くの遺物も残されていた。作出遺物には、天日茶碗や茶壺、茶臼などの茶の湯にかかるるものが多く、この建物は茶の湯にかかる非日常性の強いものと想定することができる。瀬戸産の天目茶碗などの出土遺物から、16世紀中ごろから後半の年代観が示され、建物自体は戦国期の所産であることは明らかである。

この建物跡の発見は、岩殿城の性格を考えるうえでいくつかの重要な内容を提示している。その一つは、岩殿城は少なくとも16世紀半ばごろにはすでに存在していたことである。もちろんこれが、岩殿城の創築を示すものではないが、武田氏最盛期に存在していたことは確実となった。二点目には、茶の湯に関する建物が城内に存在していたという事実である。ふつうこれだけの比高差をもつ山城の内部に、軍事目的以外の非常用の建物の存在は予測しがたいものであり、いさかおどろきであった。これは岩殿城自体の格の高さを物語るもので、相応の力をもった武士たちの常駐を意味しているにちがいなかろう。この点は、この建物が礎石建てである点とも共通する。甲斐国内では戦国期の城郭で礎石建ての建物が存在している城郭は、本拠地の躑躅ヶ崎館や新府城のほか武田信玄の叔父である勝沼信友の館跡などかなり限られたものとなっており、その意味では本城に礎石建ての建物が存在していたことの意味は大きい。

第三は、出土遺物の多くが火を受けている点である。これはおそらく、この建物が火災にあっていることを示唆するのであろう。それが本城が廃城となった武田氏滅亡時の天正10年のことなのか、なお検討を要するのであるが、平常の火災ならば後片付けがなされるであろうから、この火災は本城の最終末期の廃城時に起きた蓋然性はきわめて高い。

岩殿城の特質を探るうえで重要な点の第四は、山岳修験の場として有名な旧円通寺等の聖域内に存在することである。近年では、中世の城郭がこうした宗教色の強い場所、いわば聖地があえて選ばれて築城され、宗教性を巧みにとり込みながら民衆支配を貫徹している様子が各地で明らかにされているが、本城の場合もその例にもならないであろう。この円通寺は、創建年代は必ずしも明らかにされているとは言い難いが、伝来している諸仏などによって鎌倉期には存在していることはほぼ確実となっており、しかもこのたびの調査による三重塔の遺材の分析結果でも13～15世紀ごろの数値が示され、少なくとも本城が軍事的に最も重要な役割

を果たしていた16世紀後半では円通寺も存立していたことは確実となった。したがって、岩殿城は円通寺の聖地性を十二分に抱え込みながら城郭經營されていたことになるのである。

今回の学術調査で新たに明らかとなった重要な点の第五は、本城の眼下に展開している強瀬集落の存在である。従来は、岩殿城とこの集落の歴史的関係には全く目が向けられなかつたのであるが、今回新たに都市史的観点から分析を加えた結果、強瀬集落は16世紀前期には旧円通寺や七社権現への参詣ルートの宿として相当な規模の中世集落として成立しており、その後岩殿城が城郭整備されるにしたがって岩殿城下の集落として計画的に整えられた可能性が浮かびあがってきた。また、「御所を中心とする前面の直線道路と短冊形地割をもつ西部地区」は、「町場系の宿ではなく楓小屋のような武家地系の宿」として建設されたのではないかと結論づけられたのも興味深い。強瀬集落の空間構成について、なお引き続き検討を重ねなければならないが、岩殿城がこのような計画された宿泊集落を抱えていたとするならば、甲斐国内の提点的城郭としてその歴史性はさらに重要なものとなるのであろう。

岩殿城は、城主をめぐりいくたびかの議論が重ねられている。江戸後期編纂の『甲斐国志』は、郡内領主小山田氏の要害とし、それ以来永くその説が巷間に定着してきているが、近年では城郭史研究の立場から戦国大名武田氏の支城の位置づけとする学説が提起され、新たな研究段階に入っている。今回の学術調査ではその点に渉り深く究明するに至らなかったが、本城の研究史等を追うなかで論点が洗い出され整理も試みられている。この城主論は、単に城主がだれであったのかという問題にとどまらず、戦国大名武田氏と郡内地域を支配下においた小山田氏との政治的諸関係、城郭史上での居館と詰城のあり方、本城と支城論などといった多くの課題を背負っており、中世史研究上の根幹にかかる問題を含んでいる。今後の資料収集と動向をみながら、息長く論すべきものとなろう。

(荻原三雄)

第 3 編

第3編 旧円通寺の研究

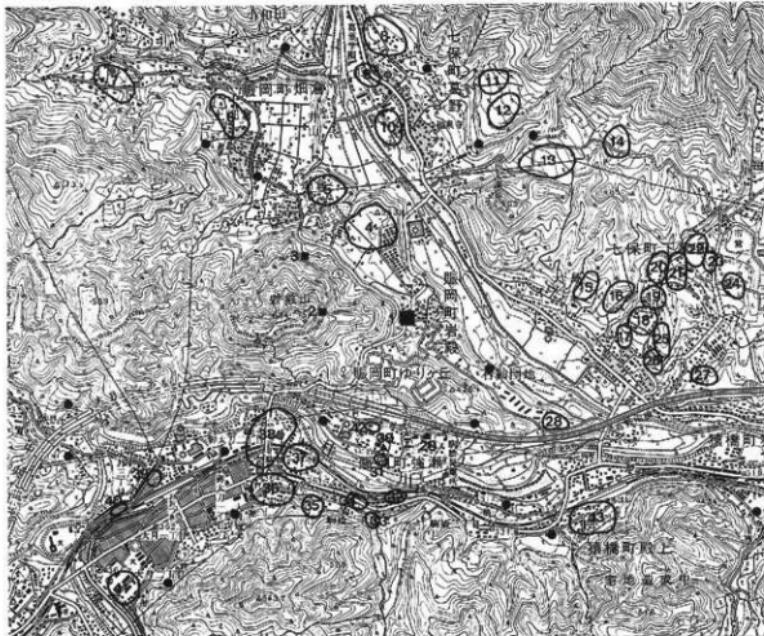
第1章 旧円通寺の立地と歴史環境

10世紀前半には存在したと思われる円通寺は、都内さらにはその近隣地域を含めた中で、修験道の中心的寺院であった。修験道は山岳修行によって駿力を獲得するものであり、修行の場には、葛城・吉野・熊野に見られるような山岳の厳しい自然環境を必要とした。このような条件を満たしたのが鏡岩に象徴される険しい岩場や洞窟を持つ岩殿山であった。

岩殿山は、麓から中腹部分が玄武岩・安山岩・石英安山岩等から構成され、中腹から山頂にかけてが岩殿山礫



第65図 旧円通寺跡遠景（東より撮影）



第66図 周辺遺跡位置図

No	遺跡名	所在地	時代	No	遺跡名	所在地	時代
1	円通寺跡(縄音堂・三重塔等)	飯岡町岩殿	平安・近世	22	東槻木戸1	七保町下和田	绳文中期
2	七社権現御堂	。	平安・近世	23	東槻木戸2	。	。
3	新宮洞窟	飯岡町新宮	平安・近世	24	京井尻原	。	。
4	岩殿中倉	岩殿中倉	縄文早・中期	25	八幡2	。	。
5	木戸狩	畠木戸狩	绳文中・後期	26	八幡1	。	。
6	雄倉ヤスバ	御倉	縄文中期	27	お株かけ	。	绳文早期
7	日影	日影	。	28	大田ヶ原	栗岡町強瀬	弥生・平安
8	葛野泉	七保町葛野小泉	縄文早・前・中・後期、平安 弥生後期、平安	29	強瀬ノ神古墳	。	古墳
9	沖平	七保町葛野	縄文早期	30	強瀬西畑古墳	。	。
10	七保中学校校庭	。	弥生・古墳	31	西畑	。	。
11	正原1	。	縄文	32	中郷	馬橋	绳文
12	正原2	。	。	33	清水入	。	。
13	太田1	。	縄文早・前・中期、古墳	34	御所	。	绳文、平安、中世
14	太田2	。	縄文中期・古墳	35	蛭屋敷	。	中世
15	大鏡	。	縄文晩・中期	36	川後屋敷(鐵冶屋敷)	。	中世
16	花輪	七保町下和田	縄文、弥生、古墳	37	柳田	夷太刀・駒輪	绳文後期
17	和田原	。	縄文期、古墳	38	四本木	馬橋	绳文中期
18	下巣	。	縄文早・中・後期	39	大木	大月3丁目	绳文後期・弥生、古墳
19	寺原1	。	縄文中期	40	御立原	。	平安
20	寺原2	。	縄文晩・中・後・晚期、 弥生、平安	41	大月	大月2丁目	绳文中・後期、弥生
21	西槻木戸	。	縄文中期、古墳	42	御所平	栗岡町強瀬	平安
				43	馬橋町殿上	。	

第7表 周辺遺跡名称等一覧

岩層からなる標高634mの起伏に富んだ堅岡な山である。山の北側に葛野川、南側に桂川が流れ、その両河川が約2km東で合流するという場所でもあり（第65図）、東は相模・武藏、南は駿河、北は秩父、西は甲斐国中地方（甲府盆地とその周辺）へと通じる要所でもあった。後に岩殿城が築かれたことからも地理的条件が整っていた事がわかる。

円通寺の立地について述べるにはその寺域に触れなければならないが、修行の場を含めて考えれば全山に及ぶと言える。堂塔などの施設は、岩殿山東側の麓より山腹にかけて配置されており、山腹の七社権現や新宮は、中腹から山頂にかけての礫岩層と、麓からの凝灰岩等で形成された層との断層部にできた洞窟に柱を立て、床を張り祭られていた。また、觀音堂・三重塔は岩殿山より東に伸びる尾根の先端に建立されていた。

河川に沿って展開する大月地域では、古代よりわずかな平坦地や緩斜面地を利用して集落が形成されてきた。円通寺が建立された岩殿山東側の岩殿地区やその周辺も古代から集落が形成された所である。円通寺跡（推定觀音堂・三重塔建立地）北東の岩殿中倉付近には、縄文時代早・中期の遺跡（岩殿中倉遺跡）があり、そこから南東にかけての葛野川河岸段丘上には、遺物散布地や平安時代の集落（大田ヶ原遺跡）が存在した。また南側の強瀬付近には、強瀬ノ神古墳・西畑古墳や平安時代の集落（西畑遺跡）などが存在し（第66図・第7表）、寺院建立につながる有力豪族の存在を思わせるものである。

このように岩殿地区は、古代の集落などが存在する中にあって、歴史・地理的にも地域の中心的な場所である。円通寺建立には、これらを背景とした在地有力豪族の関与なども考えられ、円通寺を解明していくことで、都留郡の歴史的空白である古代から中世を埋める手掛かりにもなるのではないだろうか。

註

(1)『甲斐國志』卷之九十 佛寺部 第十七下の記載により、三重塔折形に刻まれた文字の中に承平3年7月25日という日付けがある事から考えられる。なお、同史料中に円通寺棟札についての記載もあり、それによれば「行基菩薩建立大鏡元年」という建立年代についてのさらに古い記載があるが、行基の入滅年代との相違もあり、これまで論じられているようにはやはり無理があると思われる。

- (2) 第3編第4章第1節1三重塔跡図(第68図)参照。
- (3)『甲斐国志』卷之九「佛寺部 第十七下に「坪殿東西七間、南北十一間、岩壁ニ柱ヲ立テ床ヲ張リ、天井ハ即チ岩ナリ」とある。
- (4)ここに掲載した遺跡位置図及び周辺遺跡名称等一覧の作成にあたっては、大月市教育委員会の「埋蔵文化財包蔵地台帳」(昭和46~47年度分布調査実施)及び大月市史編さん室が昭和48年に実施した遺跡分布調査結果、そして山梨県教育委員会『山梨県の中世城館跡』(昭和61年3月)、「大月市史」を参照にした。この周辺遺跡名称等一覧表中のNo10七保中学校校庭遺跡は、「大月市史」中では天上原遺跡と記載されている。また、「山梨県の中世城館跡」では、No34の妾廻屋敷をNo36の位置として記載しているが誤りだと思われる。No36の丹後屋敷(鐵治屋敷)も、同書中ではNo43の位置として記載されているがこれも誤りである。しかし、この付近は『甲斐国志』卷之十九 村里部 第十六 殿上村の部分で、「殿上小屋ト云地アリ」などと記されている事もあり、屋敷跡など何らかの施設があった可能性もある。

(福田正人)

第2章 三円通寺の歴史

1.はじめに

円通寺は、岩殿山南東麓に伽藍を配した天台系修験の寺院で、都内地方における拠点であった。『甲斐国志』⁽¹⁾が引いているが「甲斐国志資料」によると永正17年（1520）の七社権現の棟札の記録から大同元年（806）開創としている。また、萩原元克の『甲斐名勝志』、大森快庵の『甲斐叢記』をみると「岩殿権現」、「七社権現」、「七社明神」と呼んでいた。このように円通寺は、七社権現を中心とする観音堂、三重塔、新宮などがあり、その別当寺として常楽坊、大坊があり、大坊には更に真藏院が存在した。また『甲斐叢記』から円通寺を概観する。

七社明神 伊豆、箱根、日光、白山、熊野、藏王、山王、七座の神を配せ祀る神体は木像にて各長七尺許あり行基僧正の作なりと云へり岩窟の中に柱を樹て床を張て祠殿とせり天井は自然の一片岩なりよりて岩殿といふとぞ岩尖より細流の落る事多の如し相伝へて、平城天皇大同元年の鎮座にて創造の棟札ありといへり別当は本山修験常楽院なり又大坊院真藏院の二箇寺ありて相ともにこれを司祀する社領十四石余寺号を岩殿山円通寺といひて寺田一町八段余あり行基僧正の刻める觀音を本尊とす、三重の塔あり九輪の下の外形に銘文あり承平三年七月廿五日大權那孝阿権尼とあり、比丘尼何人なりけむ詳ならず塔の南に比丘尼屋敷といふ處あり、又古塚あり孝阿塚と云ふ塔の前より北西へ陥き山路を攀躋は岩殿の社殿に至る又山下の北向に新宮あり十一面觀音を安置す此地も岩窟の内に堂を建て自然の岩天井ありて七社と同じ造構なり。とある。江戸時代にあって七社権現像は大同年間の造仏とみており、七社権現の造仏の時期については県指定文化財調査では15世紀の初頭の作とみられる。また、三重塔については、『甲斐国志』が九輪の下部の升形に「承平3年7月10日大比丘建立」と記載があったと伝えるが、上記のように『甲斐叢記』では「承平3年7月25日大權那孝阿権尼」と記されていたともいい、いずれにしても詳らかな資料はない。三重塔の本尊は釈迦三尊であったと伝えるが現存しない。

本尊は十一面觀音菩薩像で二躯あり、現在真藏院収蔵庫で保管している。その一躯は像高146cmある等身大的尊像で、一本造りである。10世紀から11世紀の作で円通寺本尊で新宮といわれる岩窟に安置されたものと考えられる。

もう一躯の觀音像は像高99cmあり、12世紀末から13世紀前半の作で觀音堂に安置されていたとみられる。中世にあっては京都聖護院を中心に組織化された本山派修験の都内地方の拠点として勢力をもち七社権現堂、觀音堂、三重塔、新宮、不動堂、鐘楼があり、別当寺として常楽坊が存在している。近世になると大坊、真藏院などの伽藍を擁したことが推察できる。

2.円通寺大般若經

円通寺には14世紀末の大般若波羅蜜多經533卷（北条熟実氏所蔵現在真藏院収蔵庫保管）が現在する。經典卷262～264、266、268～270の7卷は書写本で他は版本である。版本にみえる墨書きから3期に分けられる。

まず、卷170までの現在ある計152卷と卷231には「順翁有道知客」と「応永6年（1399）6月」の年紀が記されている。次いで卷171から卷500までの写本を除いた280卷に「応永7年9月」の年紀と「明賢」の名が墨書きされている。經典に見える順翁ならびに明賢は円通寺の住持である。最後は、応永8年12月13日の年紀が、卷501以降の現存する88卷と『甲斐国志』所載の卷600に見え、この日に明賢が近江国佐々木から經典を選び下着したことを伝えている。

（巻五八一）

奉施入七所権現御宝前

岩殿山（三箇所）開板

甲斐国鶴郡岩殿山円通寺住持明賢

応永八年辛巳十二月十三日 自近江佐々木下着

また、大般若経を転読する大般若会に法具として用いる十六善神画像を3日後の応永8年12月16日に納めていることが巻586に見える。

（巻五八六）

奉施入岩殿七所権現御宝前

岩殿山（二箇所）・甲斐国鶴郡岩殿・都留郡岩殿・金剛仏子明賢・円通寺

甲斐国鶴郡岩殿山円通寺明賢

応永八年壬辰月十三日下着 同十六善神

書下申畢

これらのことから、この経典は円通寺僧の順翁・明賢の勧進によるもので、応永6年から8年にかけて3回に分割されて奉納された。

また、巻367の奥書きには、天文19年（1550）に桂林寺僧元松により小山田信有の病氣平癒のため本経転読がなされたとあり、円通寺と領主小山田氏との関係を伝える唯一のものである。

（巻三六七）奉施入岩殿山円通寺

化縁比丘智感

康暦三月

甲斐州鶴郡岩殿山円通寺律師明賢

応永七歳九月日

桂林住持比丘前禪與三榮叟元松、天文十九庚戌白卯月晦日至五月三日一心転読、其信旨大檀那小山田出羽守信有、当病早癒、転禍為祥之効也

岩殿山関係資料として現存するものに勝沼町柏尾山大善寺に伝わる不動尊画像がある。「大善寺々記」によると、この画像は巨勢金岡が仁和4年（888）5月に大善寺に寄進したものと伝える（『甲斐国志』）。画像は竪3間、横2間の大幅である。春日居の菩提山長谷寺と大善寺が1年おきの7月15日におこなわれていた精霊送りにこの画像を掛け護摩法要を行い、その火で鳥居焼をおこなってきたと伝える。延徳3年（1491）にこの画像は修復されており、その墨書銘が現存している。

解功之表本、当寺住僧式部公長、辻此「近里」勸化、被^{（R）}加^{（H）}修補^{（G）}舉、時住寺岩殿・權少僧都明泉代、別當權少僧都榮賢、表背師錦之住僧聖通

延徳^{（D）}辛巳歲九月八日

この不動尊画像の修補を岩殿山の明泉がおこなっているが、ここでいうところの明泉は岩殿山円通寺住持と考えられ、大善寺も天台系の寺院であり、両寺が密接なかかわりあいをもっていた証拠である。

3. 岩殿山と熊野信仰

岩殿山円通寺の信仰の中心は、現存する七社権現、円通寺本尊十一面觀音、更には新宮の本尊十一面觀音への信仰と漠然と理解されてきた。現存する七社権現は15世紀初頭のものであるので、それ以前の円通寺草創期を考えると、円通寺本尊十一面觀音と新宮十一面觀音である。いずれも平安末期の尊像で、円通寺の由緒からしても符合する本尊である。しかし、新宮については由緒が伝わらないが院政期から鎌倉期にかけ全国に盛んになった熊野信仰からきたもので、熊野三山の本宮、新宮、那智への信仰の中の新宮を熊野先達によって勧請されたものであろう。従って本地仏である十一面觀音を安置していることも妥当であると思う。

現存する七社権現像は、伊豆、日光、箱根、白山、藏王、熊野、山王の七聖の神像を伝えているが、これは15世紀初頭の尊像である。それ以前のものもあったかも知れないが伝承はない。山梨県内で七社権現を伝えているのは豊富村上大鳥居の七所権現である。由緒では熊野三所、金峰、白山、伊豆、箱根の七社を祀り明らかに熊野信仰を中心にしたものである。この七所権現像は被損した像が五軀ほど大福寺に保存されているが、平安期の神像である。岩殿山七社権現像は藏王権現の最高が196cm、熊野権現が175cmあり他は151cm以下の神像であるが、最初に調査された〔山梨県の文化財（第1集）〕には「個々の尊名が判然としない」とあり、地元の関係者の話でも神像と尊名は一致しないことが判明したので、円通寺の宗教形態は判然としないが、後日の円通寺を中心とする岩殿山の宗教活動からみて熊野信仰の拠点としての聖地であったと考えられるので、神像も熊野の神像を中心に祭祀したものではないだろうか。

岩殿山と紀州の熊野三山との関係は詳らかでないが、郡内一円の熊野信仰から推考してみたい。

鎌倉時代になると皇族や豪族に限らず地方の武士たちの熊野への参詣が流行した。「鎌の熊野詣」という諺を生みだすほどであった。地方に在住した熊野先達、山伏は旦那である武士、土豪から一般庶民を熊野に嚮導して三山の熊野御師に引き続ぐ、御師、先達の統合巡回組織を確立し熊野信仰は貴賤にかかわらず拡まり各地に伝播された。

熊野三山にはこうした地方の先達や檀那を受け入れ、宿泊、祈祷、山内の案内をする御師がいた。先達は檀那を熊野に導くと、御師あてに檀那の在所、氏名、自己の在所、名前、提出年月日などを記した願文を提出出した。

熊野の米良文書をみると時代は下るが、都留郡内の関係文書が伝わっている。

永正5年（1508）の鹿留（都留市）の住人らの熊野山ノ申状がその一例である。

〔御願文〕
「甲州鶴郡願文
此時二八開敷山海ニテ松
三坊へ付ケ山海也」
〔署名〕
甲州鶴之郷しとみ住
〔署名〕
安衛門殿 新左衛門殿
〔署名〕 小出さ たけしゆき
〔署名〕 ぬいの助 源六殿

御先達 吉祥坊（ママ）

永正五成度 七月廿八日

この願文は熊野那智大社の実報院の支配に属する。都留郡山ノ倉の先達吉祥坊が、同地鹿留ほかの住人の何人かを自坊の旦那とすることを実報院に申し出た願文である。こうして地方信者を熊野那智へ送ったのである。のちに大坊は吉祥院の山伏支配頭になりその中心的役割を果たすことになる。しかし近世に入るとそれが争いの原因となる。御師は自己の檀那・先達の願文を大切に保存し、さらに名簿や檀那の系図などを作成して保存した。また檀那や先達の譲渡状・売買や借金に関する文書が取り交わされた。現在熊野の那智大社と本宮大社には御師文書が一括して「米良文書」として保存されている。

その中に甲州関係のものとして前述の願文をはじめ檀那譲状・檀那充券・借錢状などがある。大月市内の浅利一族と関係が有る熊野文書もその一つである。

浅利一族の熊野御師旦那株充券

甲斐国浅里之地下一族共一円、其外日本国一円浅里名字、出羽国永代充波申候旦那之事。

合拾伍貫文ハ

右作旦那ハ筒井重代相伝旦那ニテ候を、依ニ有ニ用要、永代はまミヤ八郎二郎方へ充波申候。只甲斐國浅里之地下一族一円、出羽國其外ニ日本國浅里一族一円充波申候、何方よりも違乱妨出来候共、筒井之しそんとして道遣可レ申候。仍状如レ作。

長禄元丁酉十二月十七日山井吉田（花押）

この熊野御師の旦那株売券は、甲斐国浅利の地下一族と出羽（秋田）を始めとする全国の浅利一族の旦那株である。浅利氏の支族が大市内にも在住していたことが十分推定されるので、熊野信仰が地方に浸透してきた証左でもある。こうした旦那株は小山田氏にもみられる。

小山田一族の熊野御師旦那株売券

充渡中本錢返日那之事。

合四拾貫文者

右件旦那者依り有り用要、上之僧後守雖為重代相伝、武藏國ちふ（秩父）一族一円、同豊島名字、彼両名字之わたり何国在所より參候共一円戊申年より米成慶祐十五年氣、本錢返しニ充渡中実正也、甲斐国小山田、ちふ以前ニ外所へ充申候、其外一円たるへく候。彼於上郡候て、自何方違乱頗出来候者本主として道違可申候、仍為後日一本錢返充券之状如件。

長享二年卯月廿日 上之九郎次郎（花押）

これは武藏の秩父一族と、豊島名字の株を売るというものであるが、秩父一族と甲斐国小山田については、以前に他所へ株を売ったことがあると断っている。このように一族をとおして熊野信仰の形態があった。

熊野三山の信仰が岩殿山円通寺を郡内地方の拠点としていたことを端的に示しているのが文明19年(1487)の聖護院門跡道興の入軒である。

道興は室町中期から戦国時代の聖護院門跡であり、幼少にして三井寺（圓城寺）に入室、のち聖護院に付弟として入った。当時の院主義親の入寂後聖護院門跡を相続し、同時に熊野三山、新熊野検校職を兼帯したとみられる。また圓城寺長吏をも兼ねた。寛正6年(1465)12月に准三后の宣下をうけ、それより以後道興准后と呼ばれた。

文正元年(1466)から畿内および近国の旅に出立。さらに翌11月8日紀伊熊野の那智山参籠に出発し、足かけ3年の修験道修行をおこなった。

応仁2年(1468)4月熊野權現に奉納した経巻の奥書きに「三井門人、圓城寺前長吏、熊野三山新熊野検校、八千枚数行人、大峯持藏親音証一所巡礼当澣奉仕一千日」とみえる(米良文書)。

文明18年(1486)6月に北国巡行を決意し文明19年に甲斐国に入る。道興の巡拝の様子は道興の紀行文「越国雜記」に記されている。

甲州へおもむき侍りけるに。坊主のことのはかになごりをおしみ侍りければ。しばらく馬をひかへてよみつかはしける。

旅立てす、むる駒のあしなみも なれぬる宿にひく心かな

かくして甲州にいたりぬ。岩殿の明神と申て壇社ましましけり。參詣して歌よみて奉りける。

あひかたき此岩との、神やしる 世々に朽せぬ契ありとは

猿橋とて川の底千尋にをよび侍るうへに。三十餘丈の橋をわたして侍りけり。此橋に種々の説有。昔猿のわたしけるなど。里人の申侍りき。さることありけるにや信用しがたし。此橋の朽損の時はいづれに國中の猿飼どもあつまりて勤進などして渡し侍るとん。しかあらばその由緒も侍ることあり。所がら奇妙なる境地なり。

名のみしてさけふもきかぬ猿橋の したにこたふる山川の聲

おなじ心をあまた詠じ侍りけるに。

谷深きそはの岩ほのさる橋は 入も梢をわたるとぞみる

水の月猶手にうときさるはしや 谷は千ひろのかけの川せに

此所の風景さらに凡景にあらず。すこぶる神仙逍遙の地とおぼえ侍る。

雲霞漠々渡・長梯・ 四顧山川眼易い迷

吟歩誤令・疑入峠 沢隈残月断・猿啼

おなじ国はつかりの里といへる所を過侍りける。折ふし帰雁の鳴けるを聞て。

今はとて霞を分てかへるさに おほつかなしやはつかりの里

かし尾といへる山寺に一宿し侍りければ。かの住持のいはく。後の世のため一首を残し侍るべきよし。頗に申侍ければ。立ながら口にまかせて申つかはしける。かし尾と俗語に申ならはし侍けれども。柏尾山にて侍るとな。

かけたのむ岩もと柏をのつから一よりねに手折てそしく

花藏坊といへる山伏の所に十日ばかりとゞまりけるに。武田刑部大輔禮に來り侍りき。さかづきとり出でしばらく遊覧し侍りければ懸詠を所望しければ。翌日使をつかはずついでに。

消のこる雪のしらねを花とみてかひある山の春の色哉

又此國のしほの山。さしての磯とてならびたる名所侍りければ。

春の色も今一しほの山みれば 日かけさしての磯そかめる

此二首をつかはし侍りき。其後さしての磯にて鶯を聞てよめる。

はる日影さしていそくかしほの山 たるひとけてや鶯のなく

宿坊の軒に悔いとおもしろく咲かほりて。月かけおぼるる夜もすがら。かりねの夢も忘はて、。

梅かほり月がすむ夜の旅まくら 夢に都をなにか忍

武田が館に梅あまた侍り。宿所へのことははばかり有て。祖母の比丘尼の寺へ招引し侍りて。さまざまの風情をこらし侍りき。此あたりに鶴嶋といへる名所侍り。一首所望し侍しかば。

この紀行文によれば文明18年(1486)6月に聖護院道興は京都を出立し、若狭、越前から加賀・能登・越中を経て、7月15日越後の岡府に至り、上杉氏の接待を受けた。

その後関東へ入り、上野・武藏から下総・七總・安房を通り、海路鎌倉に出た。そして、再び北上して下野の日光へ向かい、常陸の筑波山、武藏の浅草寺へ参拝して鎌倉に戻った。今度は西に向かって駿河に行き、また引返して武藏国へ入って、越冬した。

文明19年(1487)正月武藏国から甲斐国に入り、岩殿明神、猿橋、初狩の里、柏尾山を経て、石和市部の花藏坊に宿泊した。石和には甲斐守護武田信昌の館があり、10日ばかり逗留した道興は信昌の接待を受けている。

その後道興は、富士山麓の役行者堂を管掌した七覚山円楽寺や富士山北門の吉田に着いたのが2月15日である。それから再び関東に出て、3月2日には利根川を過ぎて奥州路へと旅を続けたのである。

道興のこの廻国の旅は北陸、東国全域にわたる20カ国におよび、しかも葛川(滋賀県)、白山(石川、岐阜県)、石動山(石川、富山県)、立山(富山県)、神野山・清澄山(千葉県)、日光山、黒髮山(栃木県)筑波山(茨城県)、箱根山(神奈川、静岡県)、富士山(山梨、静岡県)、相州大山(神奈川県)岩殿山・七面山などの修験霊山に赴いている。またその靈山とかかわりのある上野の大藏坊・杉本坊、下野の宇都宮慈心院、武藏の大塚十玉坊・佐西親音寺・河越最勝院・所沢くめ川福泉坊、常陸の山田慶城坊、下総の熊野別当、相模の日向薬師・熊野堂そして甲斐にあっては岩殿山七社権現、石和の花藏坊、柏尾山人善寺、七覚山円楽寺等の各地の熊野先達を訪ねていた。こうして道興が巡録した地域は熊野先達が活躍したところである。とくに若狭の武田、越後の上杉、上野の成田、武藏守護代大石氏、そして甲斐の武田など各国の守護や武将が深くかかわりあっている。

甲斐武田についても熊野三山との関係をみると弘安10年(1287)に證道坊道賢の祖父寂円が「ひたちのさたけの一門、かいのたけだの一門をゆつりわたす」という且那譲状が現存しているが、武田氏は鎌倉時代から一門を挙げて熊野三山を信仰していた。したがって、道興は入峠に際し、市部の花藏坊に10日ばかり宿泊

している間に、甲斐守護信昌と会い、相母の比丘尼の寺、小石和の成就院を訪ねたり、差出の磯や菊島など名所をめぐったりして風詠を楽しんでいるが、これは単なる風流人の諸国漫遊だけではなく、各地の熊野の修験者たちを掌握する意図をもって行われたものである。とくに岩殿山にあっても小山田氏や浅利一族などの以前からの先達や檀那は勿論のこと、岩殿山七社権現を含めて、聖護院を中心とする組織強化のための訪問と考えられる。

道興の岩殿山円通寺への参拝は、円通寺が郡内地域の熊野信仰の拠点であったことを物語る証左でもある。

4. 円通寺の退破

円通寺が退破した時期については詳らかでないが、『甲斐国志』によると永正17年(1520)上総國の住僧賢覚阿闍梨が願主となり円通寺の修理をおこない、このとき武田信友が中心になり、小山田信有ら郡内衆が円通寺再建に奉加をしている。

棟札之事

行基菩薩建立大綱元年以来到永正十七年依而及大破爰上總國住僧賢覺阿闍梨為本願進万民之處少破修理單仍而御奉加之事

鳥日百匹武田左衛門太輔信友、駒一匹太刀一腰当郡主護平信有、駒一匹太刀一腰平藤丸上之奉行、駒一匹太刀一腰藤原道光下之奉行、太刀一腰源実次、駒一匹太刀一腰維吉、駒一匹太刀一腰藤原実吉、駒一匹太刀一腰藤原長吉、駒一匹太刀一腰源惠長、駒一匹源重胤、駒一匹家重、三百文白洲信重、式百文内佐助長吉、五百文其時当郷代官長沼以秀、五百文奥秋神右衛門尉長吉、二百文牛田若狭守、二百文奥秋大藏、百文禪祐、五百文強瀬四郎三郎、罪之本願志村左近進長吉、駒一匹強瀬六郎右衛門、同所三百文八郎右衛門、三百文藤崎匠勝右衛門

この棟札を見る限り、永正17年に円通寺が退破して、武田信友らによって、円通寺を再建するが、このときの本願が、円通寺の住僧でなく上総國住僧賢覚阿闍梨であったことから、円通寺がこのころから無住であつたと考えられる。また円通寺所蔵の大般若経(北条熟実氏所蔵)卷367の奥書きには、次のようにある。

桂林住持比丘前祥興三榮叟元松。天文十九庚戌自卯月晦日至五月三日一心転読其情旨、大檀那小山田出羽守信有當病旱喰、転掛為祥之嗣也

この奥書きは、天文19年(1550)に郡主小山田信有の病気平癒の祈願をしたものであるが、桂林寺の住職が古い版経の大般若経367に書き入れたものである。桂林寺は都留市にある臨済宗妙心寺派の富春山桂林寺で小山田出羽守信有が開基した寺であり、小山田信茂が中興開基の寺である。このように円通寺所蔵の大般若経に、他の住職が奥書きを加えることは円通寺に何か異変があり無住であったためと考えられる。

それを裏付ける史料として常楽院(北条明直氏)所蔵の武田義信が京都聖護院末の勝泉院に宛てた文書が伝わる。

就修験中之儀、尊翰悉存知候、向後相応之御用被仰下候者、不可存疎略之趣、宜被浅巾入候、恐々謹言

六月十二日

義信(花押)

勝泉院

聖護院は鎌倉末期以降、熊野系修験を統轄する寺院となり、とくに室町時代になると熊野三山檢校と新熊野檢校とを兼任するのにおよんで、聖護院が修験道に占める位置は不動のものとなった。これが全国の本山派山伏を統轄する教團体制の確立となった。本山直下に院家先達を置き、院家は全国各地に山伏の配下をとり繕る先達を支配した。このことは聖護院を頂点とした支配体制が形成されたことを示すのである。従ってここにみえる勝泉院は勝仙院のこと、聖護院の院家であり、とくに京都六角にあって勝仙院は聖護院の執事的存続でもあった。また全国の先達、檀那たちからも注目された。武田氏も13世紀末から14世紀に武田一

族として熊野信仰に対する檀那株の存在があったので、戦国期にあっても当然に考えられ、武田義信が勝仙院を通じて聖護院に修験の統帥を依頼している。その文書が常楽院に伝わっていることは、岩殿山修験の統率を円通寺に代わって常楽院がおなっていることであり、武田義信は永禄10年(1567)に自刃しているので、それ以前に常楽院に対し修験の統率することを要請したと考えられる。

また『甲斐国志』「仏寺部」に

奉懸⁽¹⁵⁾斗帳一旒、某權現御宝前⁽¹⁶⁾、永祿十一年戊辰參月十八日大願主平信茂⁽¹⁷⁾

とあるのは、小山川信茂は岩殿山円通寺に戸帳七掛を寄進した。金襴赤地の豪華なものであった。この記事からも円通寺の存在はなかったと見られる。こうしてみると円通寺の退城が永正17年(1520)で、その後復興はしたが、住職の存在はみられず、常楽院が岩殿山七社権現をはじめ岩殿山の修験を統率していたとみることができる。それを一層に裏づける史料として、天正10年(1582)10月より天正18年(1590)8月まで郡内領主であった鳥居彦右衛門元次が、岩殿山七社権現その他の社領に「常楽坊召出され右之別当職仰付られ候」とあり、また天正11年の「修験名称原儀」の奥書にも「甲州郡内岩殿山別當常楽院」とあることから、この時期に常楽坊が七社権現の別當職として不動のものであった証左でもある。

5. 常楽院・大坊

慶長6年(1601)8月28日鳥居久五郎成次は、岩殿山社領として拾石の社領を寄進している。⁽¹⁸⁾

爲岩殿山社領、拾石之所令進納者也、仍如件、

鳥居久五郎

慶長六年 成次(花押)

八月廿八日

この十石の社領は、明治維新まで岩殿七社権現社領として、山林(豊五町・横12町の杉・桧・松林)とあわせて常楽坊の経済的基盤となった。

こうして常楽坊は、山伏として岩殿山の別當だけでなく、郡内地方の山伏の先達としても確固たる位置を築いた。

慶長12年(1607)郡内領主であった鳥居成次が、京都の勝仙院の依頼を受け、領内の者が熊野参詣をする際はこれまで同様、先達である常楽坊に届けるよう命じている。

從當郡熊野參詣之者共、如前代先達へ相屈、可致參詣候。京都御理候間、常楽坊ニ申付候者也。

鳥居上佐守

慶長十二年

未

閏四月廿四日 成次(書判)

郡中

熊野參詣衆

この命令を受けた鳥居成次の家臣、佐久間三休は同日「郡内在々肝煎衆」に宛てて次の文書を出している。

以上

郡中より熊野參詣之輩、貴賤共ニ先達江為無届罷上事、從京都御理付、御城より堅く御法度被仰付候、為其常楽坊へ御直判被遣候在々肝煎衆、兼日村中へ可申付候、自然先達へ為無相届罷上者、船津、山中、黒野田口々にて押申候間、先達より手形令取可罷上候様ニ堅可申付候、以上

慶長十四年

丁未閏四月廿六日 三休(花押)

郡内在々肝煎衆 參

郡内より船津、山中、黒野田口を差押えても、領主は、熊野參詣者に先達である常楽坊へ届け出るように

命じて統制しようとした。

常楽坊明運は元和7年(1621)9月24日法印の免許を聖護院より授与せられる。明運はその後、本寺である勝仙院の執事職を務めている。勝仙院證存から幕府寺社奉行に宛てた文書によると、慶安3年(1650)勝仙院大僧正證存は、常楽坊、大坊が寛永8年以前の建立の古い修験の寺である故に、岩殿山社領を朱印地にするように領主秋元越中守富朝や幕府寺社奉行安藤右京進、松平出雲守に働きかけている。⁽²⁵⁾

常楽坊明運は元和8年から寛永2年(1622~25)頃に没し、その跡職を明運の弟の小保惣太夫の二人の棒に継がせている。これが常楽院明賢と大坊明尊である。

『甲斐国志』によると、前述した武田左衛門太輔信友らが永正17年(1520)円通寺を修復して、134年後の承応3年(1654)再び破損し、当郡主秋元越中守富朝が修理している。柳原明文氏が所蔵する承応3年の棟札にそのことがみえるとともに常楽坊明賢、大坊明尊の名がみえる。

岩殿山棟札之事⁽²⁶⁾

行基菩薩御建立大銅元以来到永正十七年依而及大破爰武田左衛門大輔信友修理宁其後承應三年破損依而爰ニ當郡自秋元越中守富朝公修理爰ニ奉行町田左五衛門尉

丁時承應二年八月吉辰 爰ニ別當人保惣太夫明尊法印

大工奉行 竹内小右衛門

大工頭 花田長右衛門

棟 梁 花田初右衛門

その後さらに貞享2年(1685)にも、岩殿山は破損し、当郡主秋元撰津守喬朝が修理しており、その棟札にも常楽院、大坊が並列されている。

岩殿山棟札之事⁽²⁷⁾

行基菩薩御建立大銅元稔以来永正拾七年承應三稔尚度破損其後貞享二年及破損處當郡主秋元撰津守喬朝公修理早

于時貞享二年四月吉辰 城代高山傳右衛門繁文

普諸奉行 近藤十兵衛

別 当 権大僧都法印白賢
権大僧都法印高存

承応3年、貞享2年の棟札からも、常楽院と大坊は並列して記されており、それ以前には常楽院が支配してきた山伏と役場を二分して、両者で岩殿山七社権現別当を勤めていたと考えられる。

近世入り本末制度が確立すると、常楽坊、大坊が七社権現の別当となり、一方從来からの熊野諸は全国的に衰退していった。また各地で修験を束ねてきた院家、甲州修験がかわっていた勝仙院も熊野御師との関係を離れて聖護院を本山とする本末関係を確立した。

また勝仙院は甲斐国内八代、山梨、巨摩三郡の山伏支配頭を元和8年(1622)に一宮村の大覺院に任せた。⁽²⁸⁾一方都留郡の山伏支配頭には常楽院、大坊を任せ各郡の修験者を統轄した。さらに江戸末期から明治初頭にかけて起きた廢仏毀釈運動、明治元年(1868)に出された神仏分離令があり、そのとき平行して公布された明治5年の修験廃止の布告により、岩殿山円通寺の本末の信仰形態は全く消滅したのである。明治6年6月天台宗圓城寺末の僧侶として帰入することが常楽院、大坊に進められたが、両者とも固辞して明治8年1月廃寺となり帰俗することとなった。

また真藏院については、『甲斐国志』によると常楽院の内庵であり、常楽院が開基となっている。しかし真言宗に属し、一宮町の慈眼寺が本寺であったので廃止されなかった。

註

- (1) 「甲斐国志資料」（県立図書館蔵「若尾資料」所収）
棊札之事 岩殿山七社権現
行基菩薩御建立大綱元年以来承正十七年依而及大破爰上懿國住僧賢覺阿闍梨為本願進萬民之處少破修理事仍而御奉加之事（以下略）
- (2) 『甲斐名勝志』（天明2年）
岩殿権現・七社権現 祭神 須野、白山、薬王、日光 相伝平城天皇大同元年鎮座也岩窟の中に各木像長七尺許の立像也又說音堂有三重の塔あり九輪の下の升形に銘文有承平三年七月十日大比丘建立と云々別當常楽院大坊とて修驗あり社領十四石（以下略）
- (3) 『山梨県の文化財』第1集は、木造七社権現立像七躯について「鎌倉期の像にくらべ、すでに類型化の傾向をみせ、時代の下落が感じられておそらく15世紀初頭の造像かと推定される」とする。
- (4) 『山梨県史』 資料編6 中世3上県内記録 59頁
- (5) 『山梨県史』 資料編6 中世3上県内記録 748頁
- (6) 『山梨県史』 文化財編 611頁
- (7) 『修驗辞典』（官家準編）東京堂出版
- (8) 熊野那智大社の火報院の支配文書
- (9) 『大月市史』 史料篇67参照
- (10) 『群書類從』 第18輯 紀行部II
- (11) 註(7)と同じ。
- (12) 『石和町誌』
- (13) 『甲斐国志』仏寺部 第17ノ下
- (14) 註(7)と同じ。
- (15) 熊野那智大社文書第1『米良文書』
- (16) 『大月市史』 史料篇
- (17) 北条熱火家所藏宝永3年正月由緒書
- (18) 日本大藏經編纂会編 「修驗名跡原儀」30頁
- (19) 『新編甲州古文書』 第3卷
- (20) 『大月市史』 通史篇
- (21) 『大月市史』 史料篇 135
- (22) 大坊北条熱火氏所藏
- (23) 『大月市史』 通史篇 290頁
- (24) 『山梨県史資料叢書』 山梨県棊札調査報告書、郡内1
- (25) 同上
- (26) 『甲斐国志』卷91修驗 『大月市史』 通史篇 296頁

(清雲俊元)

第3章 旧円通寺研究略史

はじめに

大同元年(806)創建と伝承されている円通寺は、1000年以上に及ぶ年月を経ながらその起源と盛衰の経過は判然としていない。それは、旧円通寺に関する十分な調査と研究がごく最近になるまでなされなかつたことにあるといえる。残存する有力な資料が僅少であることもその一因であるともいえよう。

昭和43年(1968)、大月市史の編纂にともない、大月市において初めて広範囲にわたる資料の収集と調査が実施された。その成果が大月市史の『史料篇』と『通史篇』である。この頃から、ようやく円通寺に関する研究が始まったといえる。しかし、旧円通寺を正面から取り上げた研究は大月市史を除けば1、2件にすぎず、他は部分的に取り上げたり一部言及しているだけである。

次に、その多くが『甲斐国志』を唯一の典拠としていることである。つまり、旧円通寺に関する研究や言及の大部分が『甲斐国志』の記述を引用し、解釈していくそれを越えていない。それは『甲斐国志』以外の研究資料や材料が皆無に近い、という状況を物語っているといえるかもしれない。このように、旧円通寺の研究は、『甲斐国志』に始まって『甲斐国志』に終るといつても過言ではないが、今回の「岩殿山の総合研究」にかかる調査において、初めておこなわれた考古部門における発掘調査等によって、新しい角度からの研究が進められ加味されることは重要な意味をもつものと考えられる。

以上のように、旧円通寺の研究は、まだその緒についたといえる状況であるので、以下旧円通寺研究の概略と旧円通寺に関する文献史料を取り上げてみることにする。

① 文化11年(1814)『甲斐国志』

『甲斐国志』は、言うまでもなく山梨県における有数の歴史的、古典的な地誌であり、また研究書でもある。前に触れたように、旧円通寺に関する研究は『甲斐国志』の記載に始まるといったが、その中でもっとも重要な部分が「仏寺部」の棟札に関するものである。「永正十七年」(1520)、「永応三年」(1654)、「貞享二年」(1685)の三枚である。後者の二枚は前者の記載を継承したものである。『甲斐国志』は歴史の貴重な文献史料であるばかりでなく、研究的な考察や小説をところどころに織りませている。三枚の棟札のうち、最初の「永正十七年」の棟札にそれが窺える。

棟札の冒頭部分「行基菩薩建立大同元年」の内容について、その後部で

按スルニ行基ハ天平二十一年二月二日入寂年八十八先大同元年巳ニ五十八年時代大ニ違ヘリ然レトモ
古来斯ク伝説スレバ其頃ノ創造タルベシ

と記述し、統いてもう一点別の角度から

塔ノ升形ニモ承平三年七月二十五日大旦那孝阿禪尼トアレハ旧刹タルコト可知

とこのように注記している。考察と検討が加えられている部分である。旧円通寺の創建を知る唯一の手掛かりがこの部分にあり、極めて貴重な指摘である。行基菩薩による開創の伝説と孝阿禪尼による三重塔の存立の事実を示したものである。棟札につづいて寺宝600巻の大般若經施入の経緯と岩殿山円通寺への寄進者の名前が記述されている。

このほか『甲斐国志』には、「山川部」、「古蹟部」等に旧円通寺に関する記載があるが、いずれも「七社権現」あるいは「岩殿権現」として出てきており旧円通寺の名称はみられない。このことは、かなり早い時期において旧円通寺は七社権現によって代表されていたことを示しているものといえる。

② 昭和45年(1970)『円通寺跡』 小林利久

昭和43年(1968)、大月市史編纂事業が開始された。市の文化財審議委員であった小林氏は市史編纂委員

として参加し、調査研究を盛んに展開した。その中でいち早く旧円通寺に関する論文を発表した。昭和45年5月号の「広報おおつき」、「文化財巡り」欄（その四）の紙上である。ついで7月号（その五）、8月号（その六）、9月号（その七）の4回にわたって論及している。以下各号の主要点を取り上げてみる。

- （その四）・岩殿山及び小山田氏の研究が約1世紀近く立ち遅れたのは、「武田氏滅亡の責任を小山田氏とそのグループに転嫁」したことからコンプレックスが生じたこと、明治の学制が皇国史觀を強制したことによる結果であるとしている。
・「円通寺は郡内有数の山林所有者」であり、「大規模な林産地には必ず修験道のセンターが集中的に発達」しているとして、一大修験道場の発展の必然性に触れている。
- （その五）・相模川、桂川を源流とする古代の文化が岩殿に定着した。
・七社権現立像の7体は上和田地区に残る将門伝説と共に一考すべきである。
・足利氏の開板による「大般若波羅密多經」600巻は、足利氏の信仰のためだけではなく、「円通寺に托した戦略上の期待があつてのことといわれる」
・文明19年（1487）の聖護院道興の円通寺參詣は、「応仁の乱後、本山修験の組織再建のためである」
・16世紀、岩殿山は修験道本山派のセンターから小山田、武田両氏の支配による「戦略戰術上の拠点への転換を強制された。所謂岩殿城はこうして生まれた」として築城に触れている。
- （その六）・天正11年（1583）4月、家康は甲州へ入り、「円通寺の解除、寺領その他の大改革が行われたということである」
・「十九世紀も半ば過ぎると、本寺、或いは地域民との矛盾が深まり屢々衝突が生じた」
- （その七）・「円通寺－常楽院・大坊の両院は…近代文化的アウトサイダーとして亡んでいった」
・「近世のはじめ、66の末院と、100ヶ所に及ぶ附院を支配していた両院も、近世には僅か30院のみとなり、今はそれも奪われることとなった」

市の広報紙に「文化財巡り」として発表されたもので、一般の市民を対象にしているため厳密な考証はされていないが、数多くの示唆をふくみ課題が凝縮されている。

③ 昭和51年（1976）『大月市史史料篇』 大月市

取り上げられている旧円通寺関係の史料は意外と少なく、史料番号で42、63、73、103、124の5点である。以下に要点を載せてみる。

42 岩殿山円通寺に大般若經を奉納される

「この円通寺に応永六年（1399）から同八年の間に大般若經六百巻が奉納された」とし版本の形態を記し、版經としては県内最古のものであり、刊記によれば延文二年（1357）から応永五年（1398）にわたって開版されたが、現在は533巻が残っていて詳細な調査はこれから課題であるとしている。この大般若經については後章で取り上げられる。

63 聖護院道興、大月を巡遊する

「この年（1487）京都の聖護院門跡道興准后が、小仏峠を越えて郡内へ入ってきた。聖護院は本山修験者の本山であって、天台宗の門跡寺院である。市内岩殿山の円通寺はその支配下にあった」とし、「文明十八年六月に京を立ち…翌十九年（1487）正月に郡内に入ってきた時の紀行文である」

これは『廻国雜記』所収の紀行文である。旧円通寺に関する史料では、前出の大般若經600巻の奥書等について現存する年号も最も古い貴重な文献である。江戸時代の諸書で取り上げられているがそれにについては後で触れる。

73 岩殿山円通寺の再建に、郡内衆奉加

「円通寺の坊寺常楽院に伝わった棟札銘。都留郡主小山田信有をはじめ、郡内の有力者の名や、上ド奉行、代官の存在が伺える貴重なものである。現存する」と説明して棟札の本文を載せているが、誤字が二字あることと、前述した「按スルニ…」以下の『甲斐国志』編著者森嶋其進の貴重な注記は載せられていない。

103 小山田信有、病気平癒を祈る

「岩殿山円通寺大般若經裏書」の中で「前出42号の大般若經卷367の裏書、古い版経に改めて都主小山田信有の病気平癒の祈願を込めて、この年（1550）に桂林寺の住職が書き入れたもの」と解説している。

124 岩殿山の円通寺に戸帳奉納される

「円通寺戸帳銘（甲斐国志仏寺部）」として「この年（1567）三月、小山田信茂は、岩殿山円通寺に戸帳七掛を寄進した。金襴赤地の豪華なものであった」としていて、信茂の自書したとされる部分のみを紹介している。次につづく「七掛皆同文ナリ」の持つ意味や銘として自書した中の「某權現御宝前」の「某」等については触れていない。

④ 昭和53年（1978）『大月市史通史篇』 大月市

旧円通寺については、「古代 第二節 大月地方の古社寺」の中で、「仏教と寺院」の項に登場する。「行基菩薩が806大同元年に建てたという伝承を持つが、行基は天平21年（749）に入寂しているから、大同年間まで生きたはずはない。おそらく本尊十一面觀音が行基作であるという伝承と、寺の創立を大同元年とする縁起と、別々の二つの伝説を後世あわせて一つにしたための矛盾であろう」と述べ、中世末期にはこの行基伝説がすでに成立していたとしている。

次に、「近世 II 第一章 修驗本山派の本末体制」の中で、「第一節 中世から近世へ」の項で、「岩殿山七社權現の別当であった常楽院・大坊の属した修驗本山派（京都聖護院門跡を本山とし、院家住心院・勝仙院を本山とする）に例を取って、近世の本末体制に論及している。都留郡の修驗山伏の支配頭であった常楽院・大坊については、「聖護院・勝仙院・常楽院・大坊・郡内同行修驗者」という上下統属関係＝本末関係が組織されていたことを明らかにしている。

⑤ 参考資料

以上が旧円通寺に関する研究略史であるが、前に触れたように旧円通寺については未解明な部分がまだ多く残されている。今後の研究のために参考になると思われる文献史料を挙げておく。

大般若波羅密多經	現存 533巻	真藏院
廻國雜記	「岩殿の明神」とあり歌一首	
缺中紀行	「七社權現及大上龕」	
風流使者記	「七社權現又有大上像」	
甲斐國志 山川部	「七社權現」	
古蹟部	「岩殿大權現」	
仏寺部	「七所大權現」	
甲斐國志草稿	「岩殿七社權現」	
甲斐叢記	「七所明神」「七社明神」	
甲陽隨筆	「岩殿山大權現」	
甲信紀程	「七所權現」	
甲斐國社寺宝庫日録	「岩殿山円通寺」「岩殿七社大權現神軀木像」	

甲斐国社記寺記	「七社権現」「七社大権現宮」
甲斐国都留郡岩殿山山緒書上帳	明治 5 年 営樂院
一筆限反別地倅取調帳	明治14年 強瀬組
地券一筆限帳	明治14年 岩殿
続峠中家歴鑑	明治25年 米山信八編
「物徂徠手書峠中紀行」について	昭和33年 甲斐史学 丹羽友三郎
史跡「円通寺跡」	昭和45年 小林利久
郡内三十三番観音靈場順礼記	昭和50年 羽田 一
大月市史史料篇	昭和51年 大月市
大月市史通史篇	昭和53年 大月市
岩殿山	昭和53年 天野寿太郎
名城岩殿山と小山田氏	昭和61年 鈴木美良
郡内甲州街道物語	昭和62年 鈴木美良
岩殿山と信仰	昭和63年 大月市文化財展資料
山伏の里・岩殿山	平成 6 年 北條明直
甲斐百寺その歴史と文化「真蔵院」	平成 8 年 小林 岳
咸徳寺物語	平成 9 年 井上 豊

おわりに

旧円通寺に関する研究史の概略をまとめてみたが、長い歴史を持つにもかかわらず幅広い研究がなされていなかったことに驚く。旧円通寺をふくめた岩殿山、そして特に七社権現堂の別院であった新宮については今後の大きな課題として残るといえる。

(井上 豊)

第4章 旧円通寺の考古学調査

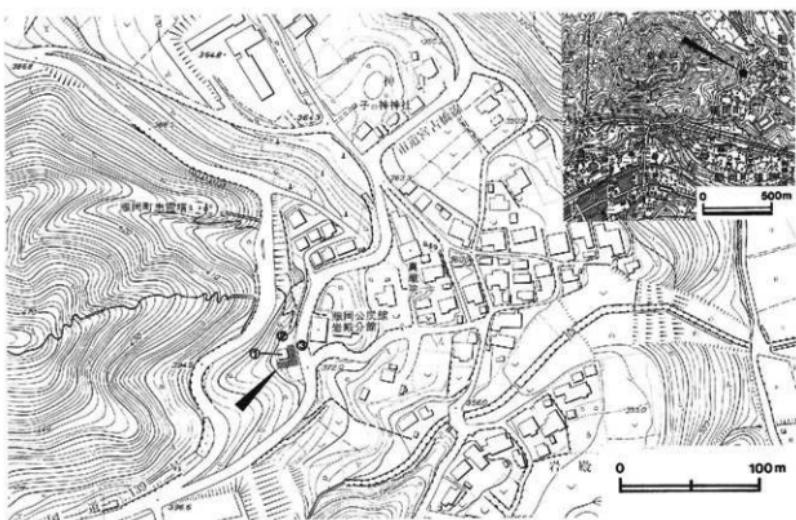
第1節 三重塔跡

1. 試掘調査の経過および成果と課題

岩殿山円通寺は郡内（山梨県東部地域）及び近隣地域を含め、修驗道の一大拠点であり、その寺域は岩殿山全域に及ぶと思われる。とくに施設が配置されたのは、観音堂・三重塔などが建てられた岩殿山東側の麓から、七社推現・新宮の祀られた山腹までという広大なものであったことが、現存する絵図（第67図）などに見える。修驗道山岳寺院の伽藍配置は、上社・中社・下社というように三区分されると石田茂作氏は述べている（石田茂作「伽藍配置の研究」『新版 仏教考古学講座』第二巻 寺院 雄山閣）。山地ということも



第67図 岩殿山古絵図：北条家（大坊）文書



第68図 試掘調査地及び塔跡推定地

あり、地形の制約を受け必ずしも定まった配置にはならない場合もあるが、これを円通寺にはてはめて考えると、觀音堂・三重塔などの区域が下社であり、新宮洞窟が中社、そして七社権現洞窟が上社となるか、または新宮洞窟や七社権現洞窟を中社とし、山頂部に上社が祀られたのではないかと想定できる。絵図（第67図）には、中腹以上に目立った施設は描かれていません。これは、岩殿山が軍事的に利用されるようになって、上社施設が山頂部から追いやられたとは考えられないだろうか。だとすれば、成立年代は確かでないが、後世に描かれた絵図の山頂部に施設が描かれていらないのも納得できる。円通寺創建時の信仰形態がどのようなものであったかは明らかでないが、七社権現像が祀られた頃には、岩殿山での修験道の形態が確立していたものと思われる。しかし、それがいつ頃であったかは、像の年代鑑定を持つところである。

施設を中心とした寺域と思われる区域の現状であるが、山腹部分には登山道の整備に伴う階段などが設置されてはいるものの、七社権現洞窟・新宮洞窟は現存している。一方、麓の部分については、国道や市道、住宅などの建物があり、堂塔の面影はない。

今回の試掘調査は、麓部分の觀音堂・三重塔などが配置されていた区域を対象とした。この区域は、岩殿山より延びる尾根の先端部であるが、現在は国道139号、市道宮古橋線に分断されている（第68図）。また、住宅などの建設で、境内と思われる平地はコンクリートに覆われている。それらの理由から調査対象となるのは、市道西側のわずかな平地のみであった。しかし、このわずかな平地も昭和初期に建てられたという御堂があり、調査区域はさらに限られた部分となつた。絵図によるとこの付近は三重塔が描かれており、真偽はともかく三重塔跡の推定地も整備されている。従って今回の調査は、三重塔跡試掘調査として実施した。

試掘調査の方法は、約1.5m×10mのトレンチ2本による掘り下げで、三重塔礎石及び基壇または整地面等の確認を目的とした。先にも述べた通り、発掘可能な部分は限られており、御堂の南側及び東側にトレンチを設定した（第68図）。

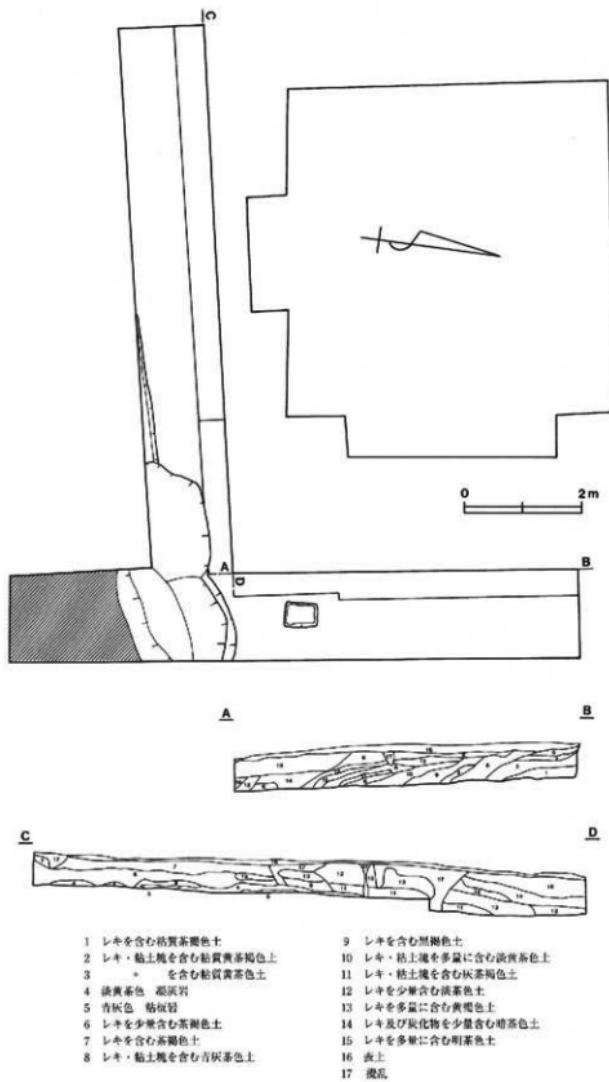
調査は、平成9年11月4日から同14日までの間の9日間で実施した。1日目は、重機及び人力による表土剥ぎを行い、2日目以降は掘り下げ・実測などを行つた。最終の2日間で埋め戻しを行い、調査を終了した。



第69図 南側トレンチ（東より撮影）



第70図 東側トレンチ（南より撮影）



第71図 トレンチ平面図及び土層断面図

調査はまず、上面に敷かれた砂利を除去することから始まった。表面より50cm程掘り下げるが、土層の違いは認められるものの三重塔に関連すると思われるような礎石や基壇などは確認できず、整地面や削平面も確認できなかった。その為、南北トレンチの西壁側及び東西トレンチの北壁側にサブトレンチを設定し、さらに10cm程掘り下げる。しかし、土層断面の観察結果からも自然堆積層であり、寺院廃絶後の埋土とは考えられないことから、掘り下げを終了した。

掘り下げの結果、2本のトレンチが交わる付近から南側にかけて、落ち込みを確認した(第71図・第69図・70図)。この落ち込みは、コンクリートなどの廃材で埋められており、全てを撤去することができなかった。なお、落ち込み部分より陶磁器片や古銭などが出土した(後述)。

以上が調査の結果であるが、絵図によると、三重塔や觀音堂から沢を挟んで南側に、「円通院墓地・比丘尼ヤシキ・岩舟地蔵・円通寺屋シキ」という記載がある。この中で円通院とは大坊であり、墓地は調査地南側の斜面に現存している。また、岩舟地蔵も、試掘トレンチに隣接する御堂の西側に現存するが、地元の古老によれば、もとは墓地近くに祀られていたものを移動したとのことである。これらのことからも、確認した落ち込みは絵図に見える境内南側の沢と思われ、境内南辺と沢の境界を一部ではあるが確認することができた。なお、この沢は埋め立てられ、現在は駐車場になっている。

この付近で他に塔跡と考えられる場所について検討してみると、現在御堂の建っている部分(①とする)と三重塔跡として整備されている部分(②とする)、そして御堂東側の現在市道となっている部分(③とする)の3ヶ所があげられる(第68図)。岩井隆次氏は著書の中で、「一辺6m以下のものは宝生寺のような例外を除き三重塔…」と述べている(岩井隆次「日本の木造塔跡」雄山閣、昭和57年)。また、現存する当麻寺(奈良県北葛城郡当麻町)の東塔・西塔は、一辺が5.32m(東塔)、5.2m(西塔)の三重塔である。推定建造年代は東塔が奈良時代、西塔が平安時代初期と思われる。これらより円通寺三重塔一辺をおよそ5mと仮定して考えてみる。②の位置では、すぐ背後に傾斜面がせまっているため面積的にやや余裕がない。また①の部分は面積的に否定はできないが、基壇などを考慮すると、試掘調査の結果からも可能性は低いと思われる。従ってこれらのことや絵図での位置関係から見ると、③付近に建っていたのではないかと推察できる。なお、絵図から推察した觀音堂の位置についても触れておくと、絵図中の塔よりやや北東に描かれており、塔跡を先に述べた市道付近と仮定すると、觀音堂は現在の駿岡公民館岩殿分館付近と考えられる。

今後円通寺を明らかにしていくためには、今回の総合学術調査の成果を踏まえ、新たな文献史料や発掘調査による成果の蓄積を待つところである。

(福田正人)

2. 出土遺物

(1) 陶磁器(図版11)

遺物は大半が断片資料で、法量を復元しうる資料はない。1~7は18世紀代の肥前系染付丸碗で、草花文などを施す。8は灰釉を施釉した瀬戸・美濃系の陶器碗である。9は染付の発色が鮮明な輪花皿である。10は肥前系染付皿である。11は肥前系の筒形碗で、18世紀後半頃の製品である。12・13は酸化コバルトによるゴム版で施文された染付碗である。12は「寶」字や麻葉文の周縁にゴム版特有のじみが見られる(東京都清瀬市郷土博物館の内田祐治氏のご教示による)。13は羊齒状文はゴム版、中央の花文は手書きである。ゴム版は大正末期から昭和初期に実用化された技法といわれている(仲野泰裕 1994 「19世紀の窯業」「化学史研究」第21巻第2号 化学史学会)。14は厚手の湯呑み碗で、口唇外面に酸化クロムによる2本の巡回が施される。太平洋戦争中に瀬戸・美濃などで生産された統制磁器の一種である。15~21は太平洋戦争以後の現代遺物とみられる磁器である。15はプリントで文様を施した碗、16は薄手で輻線文を施した碗、17は青磁皿、18は褐色の下絵付による碗、19は外面に白色の刷毛目を施した碗である。20は内面に赤色のプリントで松文を施す。底部内面の窪みから紅茶ないしコーヒーカップのソーサーとみられる。21は口縁の外反する小鉢で、

内面に緑・青・白の下絵付けを施す。当地点から出土した近世以降の陶磁器は、18世紀代の肥前磁器はみられるが、型紙絵付、銅板転写などの明治期の遺物はほとんどみられない。一方、大正末期以降のゴム版による磁器、太平洋戦争中の統制磁器、またそれ以降の現代の陶磁器は多量に出土している。

第8表 旧円通寺三重塔跡出土上近世・近・現代陶磁器

No.	材質	器種・種別	技法・文様・装飾等	産地	製作年代	備考
1	磁器	丸碗	染付草花文	肥前系	1690~1780年代	
2	磁器	丸碗	染付草花文	肥前系	1690~1780年代	
3	磁器	丸碗	染付草花文	肥前系	1690~1780年代	
4	磁器	丸碗	染付草花文	肥前系	1690~1780年代	
5	磁器	丸碗	染付草花文	肥前系	1690~1780年代	
6	磁器	丸碗	染付草花文	肥前系	1690~1780年代	
7	磁器	丸碗	染付草花文	肥前系	1690~1780年代	
8	陶器	碗	灰釉	瀬戸・美濃系	18世紀後半~19世紀前半	
9	磁器	輪花皿	染付	不明	18世紀後半~19世紀前半	
10	磁器	皿	染付	肥前系	18世紀後半~19世紀前半	
11	磁器	筒形碗	染付	肥前系	18世紀後半	
12	磁器	碗	ゴム版「寶」字	瀬戸・美濃系	大正末~昭和初期	
13	磁器	碗	ゴム版・手書き	瀬戸・美濃系	大正末~昭和初期	
14	磁器	湯呑み	酸化クロム遮線	瀬戸・美濃系	大西洋戦争中	統制磁器
15	磁器	碗	プリント	不明	現代	
16	磁器	碗	染付縞文	不明	現代	
17	磁器	皿	クロム青磁	不明	現代	
18	磁器	碗	褐色の釉下彩	不明	近・現代	
19	磁器	碗	外面白色刷毛目	不明	現代	
20	磁器	皿	プリント松文	不明	現代	
21	磁器	鉢	緑・青・白の釉下彩	不明	現代	

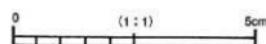
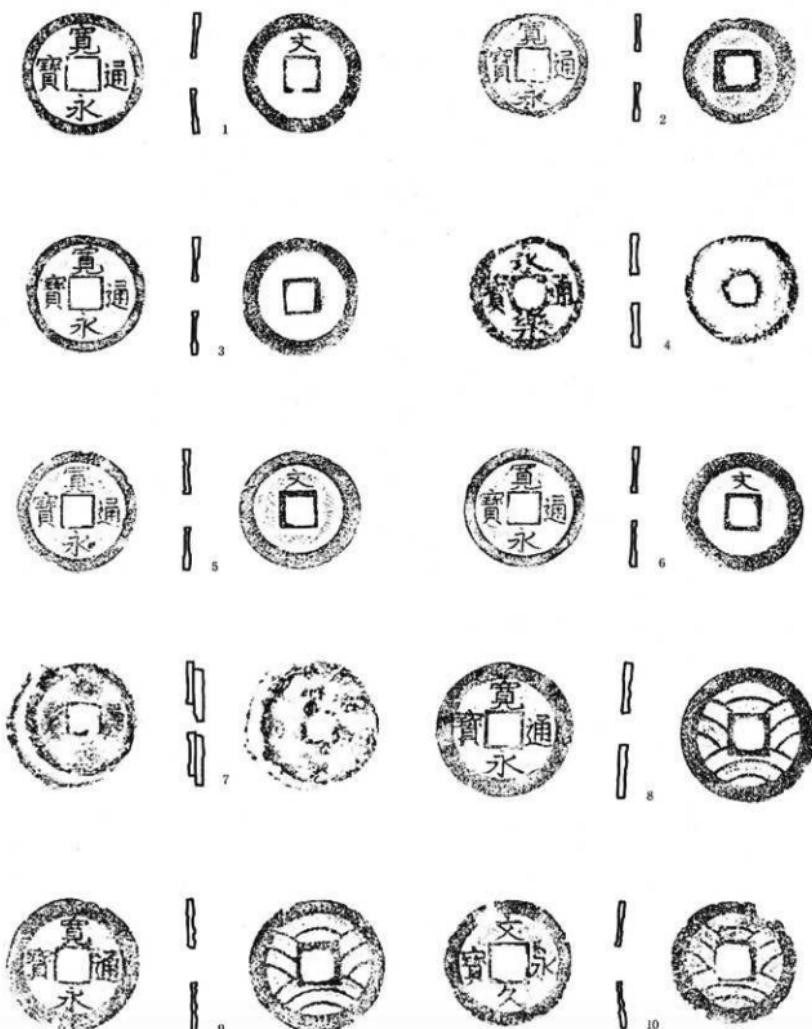
(森本伊知郎)

(2) 銭貨と金属製品等

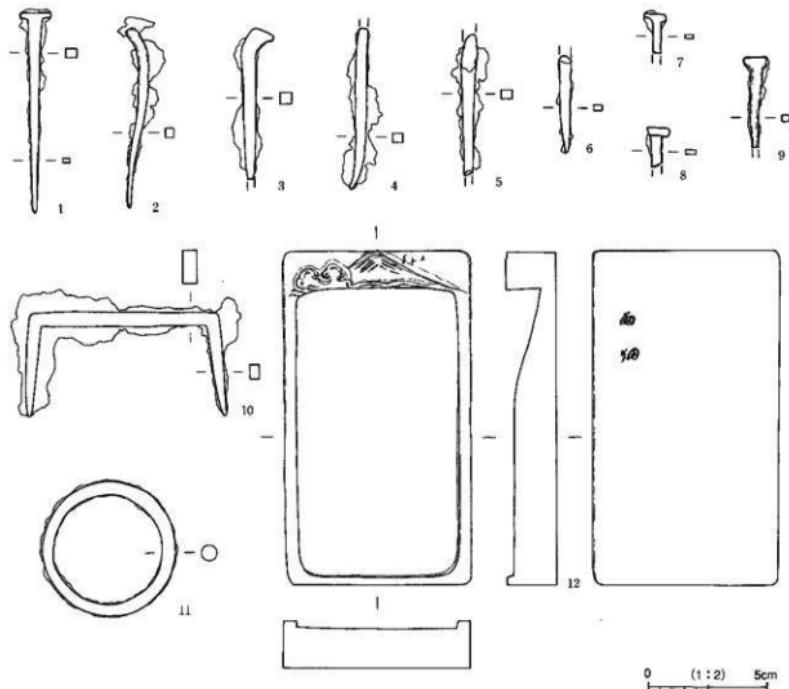
この調査区からは「寛永通寶」を主体とする11点の銭貨や鉄釘等が出土し、ここでは磁器類以外の遺物について報告する。第72図の1~3は東側トレンチから出土し、1は文銭、2・3は新寛永で、2は埋土の中から検出された。4~10は南側トレンチから出土し、4は明銭の「永樂通寶」で幾分劣化している。5・6は文銭で、5は東側の落ち込み部分から、6は埋土から確認された。7はトレンチ中央部から出土し、銅錢と鉄錢が密着した状態である。銅錢は「寛永通寶」であるが表面劣化のためどの種類のものであるか把握できず、鉄錢は内側を向いているため詳細不明であるが、「寛永通寶」の鉄錢であろう。8・9は「寛永通寶」の波錢で、8はトレンチ中央付近、9はトレンチ東側から出土した。10は埋土内から検出された真文の「文久永寶」である。以上、はっきりしないものもあるが、「寛永通寶」のうち最古銭は寛文8年(1668)以降の文銭で、その前の古寛永はみられず、この地点の時期的側面を反映しているものと推測される。ただし、1点であるが「永樂通寶」(初鑄1408年)が確認されたことは、中世後期においてこの地でなんらかの営みがあつたことを想起させる。

次に鉄釘等についてふれたい(第73図)。1~8は東側トレンチから出土した鉄釘で、この内2・3・6は南側の落ち込み部分から検出された。9は南側トレンチ出土の鉄釘である。10は南側トレンチ内の東側落ち込み部分から出土した鉄製の鎌で、背の部分が15cmと厚くしっかりとした作りである。11は鉄製の環である。このような環のなかには接続部分をもつものがあり、それらは棒状のものを曲げて接合したものであるが、この遺物にはX線でみても接続部分がなく、最初からこの形で鍛られたと推測される。鎌杖の環や家具の把手など、様々な性格・用途が考えられる。12は正面上面に富士に雲・鳥が彫られた鏡で、裏面に「雨煙」とあり、いわゆる雨烟鏡である。

(畠 大介)



第72圖 旧円通寺三重塔跡出土錢貨



第73図 旧円通寺三重塔跡出土金属製品等

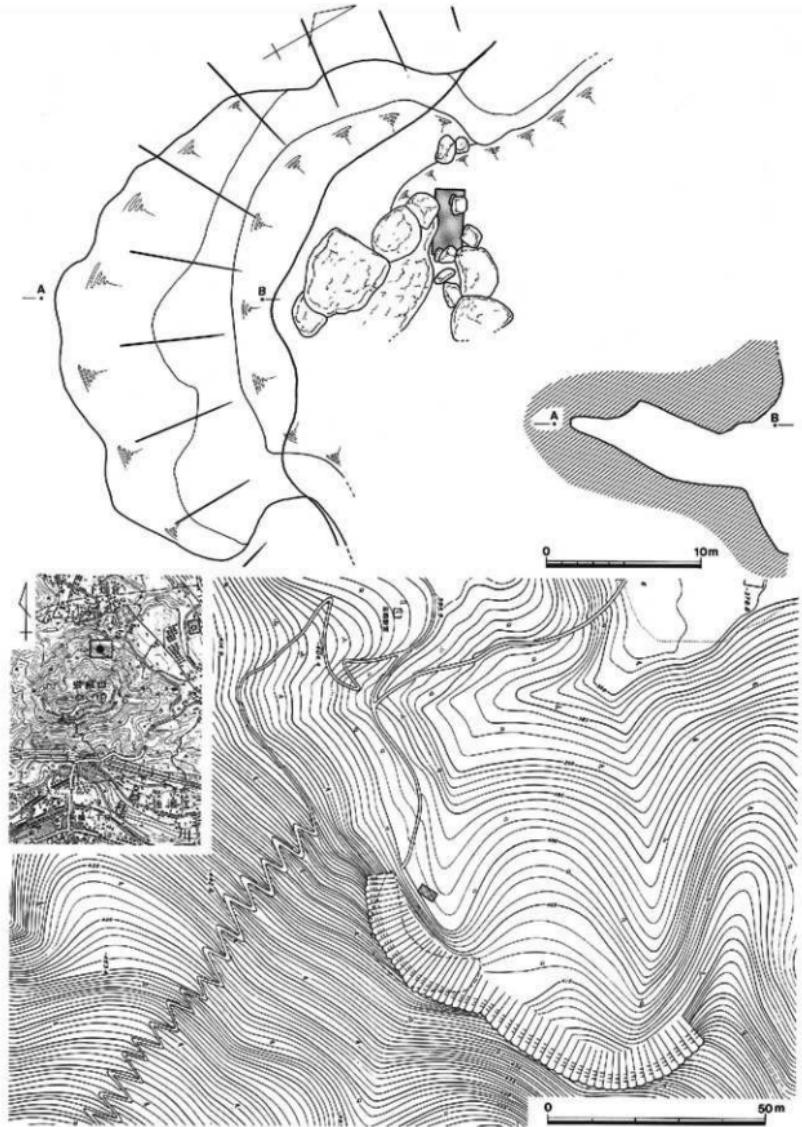
第2節 新宮洞窟

1. 試掘調査の経過および成果と課題

岩殿山北麓を流れる中倉沢は、稚児落としの東谷から流れ出る葛野川の支流である。全長2kmほどの小河川であるが、深い浸食谷を形成し、岩殿山とその北側にある広大な河岸段丘（畠倉集落）とを分断している。現在「神宮橋」が架かり往来は容易になったが、橋架橋以前は、上流へ回り込む道筋があったようである。

新宮は神宮橋から南に200mほど（比高差約50m）の位置にある岩窟である。開口は約35m、奥行は最奥部が約16m、北川端部に向かって奥行が減じ窟外となる。床面は最奥部から開口部に向かい下方に傾斜している（25°前後）岩盤であるが、開口部縁辺は崩れた岩などの堆積により、平坦になっている。天井部も傾斜しているため高さは一様でないが、平均面からの高さは3.4m～5.5mを測ることができる。天井部は岩殿山産岩の巨大な岩塊で、縁辺部外側へ覆いかぶさるように張り出している。

現在洞窟内にはコンクリート製の祠の台座と石仏2体（いずれも馬頭観音）の人工物があり、他には天井



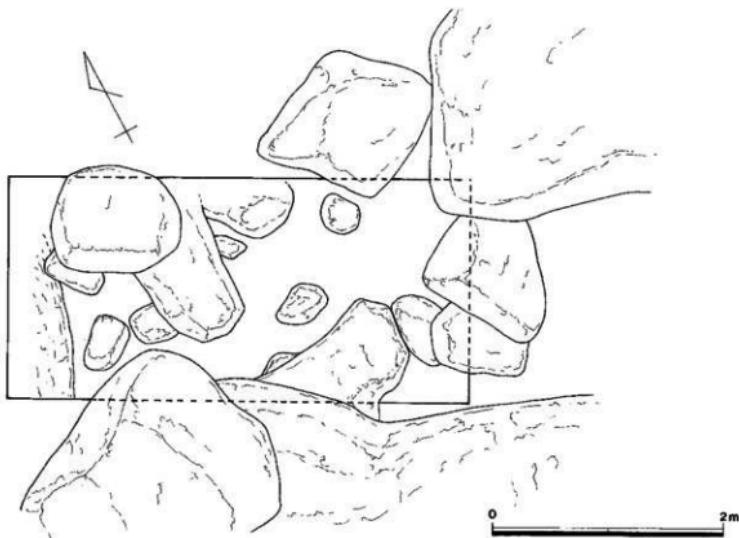
第74図 新宮洞窟調査位置図及び洞窟実測図

から剥がれ落ちた礫岩塊が幾つかみられるだけである。縁辺部以外に土砂などの堆積層ではなく、窟内には発掘可能な箇所は見当たらなかった。縁辺部は平坦面を造り出すために人為的に埋められているようではあるが、掘り返した場合、現在安定している傾斜面を復元することが不可能と考え、他の場所を検討することにした。

洞窟の開口部下方には岩壁から崩落したと思われる大小無数の礫岩塊が重なっており、この礫岩群中の窪地からは、中倉沢に注ぎ込む全長180mほどの沢が発している。現在は水量もなく、山裾部は埋められ国道139号線が横切っている。

洞窟内に適当な試掘箇所が得られなかつたことから、堂宇として利用されていたころ前庭部であった沢を調査対象とし、洞窟内からこぼれ落ちたであろう供獻物などを収集することとし、平成9年10月20日から着手した。大岩が密集し足場も悪い中で、鋤削が可能で遺物が混入していそうな場所を選定する作業に多くの時間を費やした。最終的に洞窟の入口部の下方、参道から5mほど離れた場所を調査対象として選定した。時間かけて選定した場所ではあるが、周囲より岩の密集度がやや少ないのであった。トレンチ設定に際し、杭を打つことができないので、やむを得ず石灰で範囲を印し、 2×4 mのトレンチを設定した。

人力で移動不可能な石を掘り残しながら、石の隙間を可能な限り掘るという方法で、砂利や岩を除去したのであるが、下部には石が多く、伏流水の湧出などもあって作業は困難を極めた。砂利層であったため、トレンチの壁面に法をつけながらの鋤削であり、次々に岩が露出し、壁面はすべて岩という状態であった。そのため土層断面の観察も実測もできなかつたのであるが、掘りながらの所見では、表面にみえる青みがかつた色調の砂利層と、その下の橙褐色に変色した砂利層とが互に何層も累積している状況であった。砂利層の変色は鉄分の酸化によるもので、あまり流動しない水分の影響であり、砂利層の堆積後時間の経過を経て生成されたものと考えられる。これが何層も認められるということは、砂利層の堆積は連続的なものではな



第75図 新宮洞窟調査区平面図

く、一過性の堆積が、長い年月間にわたり何回も繰り返されたことを意味している。またその間、浸食による流失量よりも堆積する供給量の方が多かったと言える。

地表下50~70cmのレベルから4点の遺物が収集された。遺物の内容は磁器片3、陶器片1で、分析の結果、器種は碗と徳利で、時期的には18世紀後半以降に位置づけられることが分かった(後述)。層位的にこれらより古いと考えられる地表下70cm以下の土層からは遺物の出土はなかった。

最終的には地表下150cmほど(最深部)まで掘り下げることができたが、トレーニングへの出入りに足場として利用していた岩が微動し始めたこと、大きな岩が多量に露出しトレーニングの底面積が小さくなりすぎたことから、これ以上の掘削を断念した。砂利の層はさらに下部へ続いているようであったが、砂利や石のためボウリング棒も役に立たず、深さを確認することはできなかった。トレーニングを埋め戻す間に洞窟内部の実測を行い、10月27日に全ての作業を終了した。

古絵図には新宮洞窟の岩壁に滝が描かれているものもあり、「甲斐国志」にも水が落ちていたことが記されている。現在でも大雨の直後には岩壁を流れ落ちる滝を見る事ができるが、絵図が描かれた当時、當時水があったかどうかは不明である。しかし、洞窟前庭を谷頭にしている沢は、岩壁の上から落ちた水の浸食作用によって形成されたものであり、現在沢を埋めている多量の砂利や礫岩は岩壁が崩れ落ちて堆積したものであることは確実である。

また洞窟の成因については、岩殿山疊岩層と下層との境界部の比較的軟らかい凝灰岩質の層が、抜けるように崩落してできた洞窟であり、やはり浸食作用によるものと考えられる。この過程は次のように説明できる(第76図)。

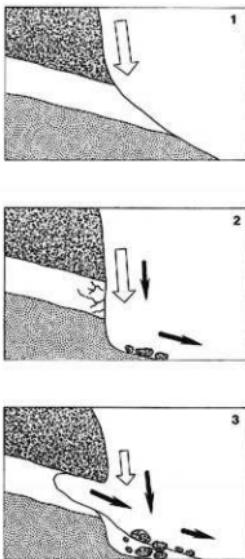
- 1 岩壁上からの水の落下により岩下の土層が浸食され始める。
- 2 浸食が進み、礫岩より下層の軟らかい層が削られ、側面が急角度になる。前方には谷が形成され、崩壊した岩石なども一時堆積するが、浸食作用が凌駕し、永くは留まらない。また岩壁を伝って落ちる水は、軟らかい下層に浸透し、層の風化を促進した。
- 3 このような浸食や風化が繰り返されるうちに、基質が弱体化した軟らかい下層が崩壊し滑り落ち(地層が開口部に向かって下方に傾斜していたことが滑落を助けている)、これが繰り返され洞窟が深くなつた。やがて水量が減り、流失する土砂よりも堆積する土砂の量が勝り、現在にいたる。

この過程は新宮洞窟だけでなく、窟前が谷になっている七社権現洞窟の形成にもあてはまり、地層の走行が同様な北東斜面に特徴的な現象と言えよう。

今回調査の成果として言えることは、江戸時代に何らかの信仰対象が存在していた可能性があるということだけである。地形的・地質的な条件から、将来に亘り発掘という方法による調査は非常に困難であると予想されるが、あらゆる方法を駆使し、今後、資料が蓄積されることを期待したい。(杉本正文)

2. 出土遺物(図版12)

1は肥前系の染付筒形碗で18世紀後半頃の製品である。2は酸化コバルトを用い、型紙絵付で施された瀬戸・美濃系の染付碗で、外面に型紙の重複する部分が認められる。口唇内面には環珞文を施す。型紙絵付



第76図 洞窟形成過程模式図

(摺絵)は江戸時代には各地で用いられていた技法であるが一時中断し、美濃では明治15年(1882)頃、伊勢の白子(鈴鹿市)から型紙職人を招き、脇之島窯などで酸化コバルトを使用した型紙絵付が再興されたという(田口昭二ほか 1993 「美濃窯の焼物」多治見市教育委員会)。その後、銅板転写におされて、明治30~40年代には衰退したと考えられている。型紙の性格から染付部分が列点状につながる特徴があり、碗では器面の文様が3分割されることが多いという(内田祐治 1986 「第2節 鎌倉時代以降 出土陶磁器類の分類」『下宿内山遺跡』東京都清瀬市下宿内山遺跡調査会)。3は肥前系の瓶でやや大形の徳利である。4は鉄釉を施釉した瀬戸・美濃系のベコカン徳利である。当地点から出土した近世以降の陶磁器は少ないが、18世紀以降の近世磁器と、型紙絵付による明治15年以降の瀬戸・美濃系磁器が出土している。

第9表 新宮洞窟出土近世・近・現代陶磁器

No	材質	器種・種別	技法・文様・装飾等	産地	製作年代	備考
1	磁器	筒形碗	染付七宝彫文	肥前系	18世紀後半	
2	磁器	碗	酸化コバルト・型紙絵付	瀬戸・美濃系	明治15年以降	
3	磁器	瓶(徳利)	白磁	肥前系	18世紀	
4	陶器	ベコカン徳利	鉄釉	瀬戸・美濃系	18世紀後半~19世紀前半	

(森本伊知郎)

第5章 旧円通寺の諸建築

1. 円通寺の造営に関する概略

本章では岩殿山圓通寺の建築構成に関して記述する。すでに彰刻史の章ほかで述べられたことであるが、圓通寺伽藍の造営とその後の経緯に関して、まず史料記載を明らかにする必要がある。ここでは『甲斐国志』の内容を調べ、延喜造についての概要をまとめることとする。

圓通寺は古く大同元年(806)行基の創建と伝えられる。その最も大きな根拠は『甲斐国志』卷九十 佛寺部第十七ノド 圓通寺条の記載である。このうち一部を下記に示す。

なお、漢文では読み下している。

「○秋元氏修理棟札二枚

岩殿山棟札之事 行基菩薩御建立大銅元年以来 永正十七年ニ剝ル 依而大破ニ及ブ 爰ニ武田左衛門大輔信友修理シ畢ンヌ 其ノ後承応三年甲午年ニ剝リ 破損ニ依テ而爰ニ當郡主秋元越中守宮朝公修理シ畢ンヌ 爰ニ奉行町田五左衛門尉 承応三年甲午天八月吉辰大工奉行竹田小右衛門…(中略)

行基菩薩御建立大銅元年以来永正十七年承応三稔兩度破損ス 其ノ後貞享二乙丑年破損ニ及ブノ処 当郡主秋元源津守喬朝公修理シ畢ンヌ 普請奉行近藤重兵衛 時丁ニ貞享二乙丑四月吉辰 城代高山伝右衛門繁文 別當常樂院高賢 高尊」

すなわち大同元年に行基によって創建された圓通寺は、永正17年(1520)までに大破(退破)したため、この年武田信友(信虎弟)が修理、承応3年(1654)秋元喬朝が修理、貞享2年(1685)秋元喬朝が三度目の修復を行ったとある。行基は天平21年(749)に入寂しているから大同元年まで生きていた筈ではなく、創建年次に関しては本尊十一面觀音が行基作であるとする伝承と、寺の創立の縁起とを混同したための矛盾とされる。

さらに『甲斐国志』には上記引用文のほかに、永正17年修理に関する棟札銘が記載されており、それによると永正17年の修理が上総国の住僧賢覚阿闍梨が本願となって再建の志を立てたこと、武田(勝沼)信友および郡内守護、平(小山川)信有以下主だった郡内衆が寄進者として名を連ね、さらに棟札末尾には強漸の農民と思われる者1名と藤崎の番匠1名の名前が見えることで、16世紀以降の圓通寺と七社権現とが地域郷村組織と密着しつつ存続していくことを示唆している。

次に三重塔については、

「三重塔 本尊釈迦薦土文殊普賢 此塔初建立ノママ修復ヲ加ル耳 造営ノ事ナシ 丱形ニ經文ヲ刻ス 末ニ承平三年七月廿五日 大燈那孝阿禪尼トアリ 此ノ人何人タリシコトカ評ナラズ 塔ノ南ニ旧宅ノ址アリ比丘尼屋敷ト称ス 相伝ヘテ孝阿禪尼ノ庵室ノ跡也ト云フ 又古塚アリ 孝阿塚ト云フ (以下略)」

すなわち圓通寺の三重塔升形に刻まれた經文の末尾に承平3年(933)の年紀と大燈那孝阿禪尼の銘記があったという。この塔は初建立のまま修復を加えるのみとしており、『甲斐国志』記載では19世紀初期までは承平3年以前の建物があったと読みとれる。

岩殿七社大権現については、

「岩殿七社大権現 伊豆・日光・箱根・白山・藏王・熊野・山王 神軀ハ木像各々長サ七尺許リ 行基ノ作ト云フ 戸帳七掛、金欄赤地、小山田左兵衛尉寄附、裏ニ自書シテ云ク斗帳一施ヲ某権現ノ御宝前ニ懸ケ奉ル 永祿十一年戊辰參月十八日大願主平信茂敬白 七懸皆同文ナリ 拝殿ハ東西七間南北十一間岩礎(校者註:岩窟)ニ柱ヲ立テ床ヲ張リ天井ハ即チ岩ナリ 故ニ岩殿トサス 岩上ヨリ細流滴リ軒ニソソグ (中略) 社地堅五町横十二町 麓ヨリ登ルコト七町ニシテ社頭ニ至ル 其ノ間秋葉権現ノ小祠アリ (以下略)」

また新宮については、

「新宮ノ本尊ハ十一面觀音 脇士ハ三宝荒神・毘沙門天、是レ亦行基ノ作ト云ヒ伝フ 山下ノ北面アリ 嶺岡ニ柱ヲ立テ岩ヲ直チニ天井トスルコト七社ノ造営ト同ジ 冷水岩上ヨリ落チ殿前ニ飛流シテ數十丈ノ谷ニ落ツ 甚ダ奇觀タリ 炎天ノ頃此ノ洞中ニ入レバ冷氣冬ノ如シ」

すなわち七社権現および新宮の建造物は岩窟内に建てられており、七社権現の拝殿は東西7間×南北11間で、天井は岩のままであるという。

後年の『甲斐名所図会』(甲斐叢記後編 卷之九)の記載も基本的には『甲斐国志』と同様である。なお『甲斐名所図会』による「岩殿山 大月橋 桂川」には七社権現や新宮の建造物は見あたらないが、ふもとの三重塔はじめ数棟の建築が描かれている(第77図)。



第77図 『甲斐名所図会』中、「岩殿山 大月橋 桂川」の図

永正17年に修理したものの、円通寺はやがて廃絶し、天正年間(1573-1591)の後半に都留郡領主鳥居元忠(在位1582-1590)により、本山派修験者である常楽坊明運は岩殿山七社権現その他社領の別当職を与えられた。このうち正保3年(1646)～慶安3年(1650)頃、常楽坊を継承した常楽院と大坊とにより、明治に至るまで円通寺の伽藍と仏像は修補され、守られていく。前記『甲斐国志』の記に見える三重塔、七社権現、新宮の状況は棟札に言う承応3年(1654)、貞享2年(1685)等々の修補を経たのちの近世の姿である。ではこれら建築が実際に建ったのはいつだろうか。

『秋元家甲州郡内治績考』中、元禄二年(1689)正月廿二日付「御領内ニテ御建立被遊候堂宮之覚」によると、上吉田や川口の浅間御宮、勝山の北室等、寺社六件は「是ハ古ヨリ御座候先年御葺替仰付候」としており、谷村の薬師堂は大火で焼失後、再建したとしている。続いて「七社権現／觀音堂 岩殿」「飛竜権現丹波山」として「右飛竜権現社三十三年前…(後略)」と記載されている。このうち「三十三年前酉年」は明暦3年(1657)酉年を、「五年以前丑年」は貞享2年丑年を指すと考えられ、この両年に建立(再建)されたとしている。丹波山の飛竜権現に並記されている岩殿山の七社権現と觀音堂もこの対象と考えられる。何故なら前記「古より御座候」の建物群に名前がなく、また飛竜権現の再建である明暦3年及び貞享2年は、秋元氏修理の棟札に言う承応3年及び貞享2年の修築年次とは一致しているからである。これらを総合すると円通寺の棟札

に修理とあるのは、実際には建物の再建を指すのであろう。

ここではさらに建築物に関して詳細を知るため、大坊（北条家）所蔵および岩殿区有の絵図史料と慶応4年（1868）の『甲斐国社記・寺記』第四巻の記載をもとに分析を試みる。

2. 絵図史料および『甲斐国社記・寺記』による伽藍構成の復原的考察

觀音堂や三重塔が存在した円通寺の伽藍は、現在の駿岡公民館岩殿分館の西側一体に比定される。門前には参道となる急傾斜の東西道路が通され、その両側には、天正年間までに廃絶したと考えられる円通寺に代わって岩殿山七社権現の別当職を務めた常楽院および大坊の屋敷地が並んでおり、斜面地を石垣で造成した大規模な屋敷構が残されている。この東西道路と強瀬・浅利・葛野・畠倉から岩殿に至る南北往還の交差する辻が集落の中心となっている。

以上がいわゆる「麓」の情景で、ここより岩殿山に入り七・八丁登ったところに「七社大権現」が、別に「新宮」があり、この二者で構成されているところに岩殿山をめぐる建造物群の最大の特徴がある。

大坊（北条忠実氏）所蔵史料中の岩殿山境内絵図（第2編第5章の第39図）は作成年代が不明であるが、岩殿山中に造営された七社権現社の他、觀音堂・三重塔・鐘楼などの堂宇、門前の両脇には石垣で造成された常楽院および大坊の敷地と建物が描かれている（第78図）。

また、岩殿区有文書の中には年代のわかる史料として宝永2年（1705・第2編第5章の第42図）、延享2



第78図 岩殿山境内絵図
大坊（北条忠実氏）所蔵史料

年（1745・同第43図）、文政3年（1820）、天保7年（1836）、安政6年（1859）の絵図がある。このうち、文政3年、天保7年、安政6年の絵図はそれぞれ村絵図であり、三重塔と数棟の堂宇、民家を描き分けているが、七社権現と新宮が描かれておらず、詳細がほとんどわからない。最も克明に建築を表現しているのが延享2年の絵図である。延享2年の年紀のある絵図は2葉あり、一方には「延享二年正月三日 當山真榮書之」、他方には「右絵図之通少茂相達之儀 無御座候以上 延享二年正月三日 郡内領岩殿村 名主新太郎組頭四郎兵衛 百姓代孫左衛門」と同じ筆跡で書かれている。建築の表現もほぼ共通しているが、ここでは欠損が少なく、第2編第5章で第43図として紹介した前者の絵図と宝永2年絵図、および大坊（北条忠実氏）所蔵史料中の岩殿山境内絵図、また岩殿区有文書のうち明治初年頃と推定される絵図の部分を用い、慶応4年（1868）の『甲斐国社記・寺記』第四巻（以下『寺記』と略す）による記載と照合しながら、分析を試みる。

（1）大坊および常楽院、真藏院の建築

『寺記』第四巻〔通巻第七十三巻 修驗本山派〕中、大坊については、建家（張五間 行間七間 但し板葺）、上蔵（張六間半 行間三間 但し板葺）、長家（七間 武間 同）、このほかに貸地家作の百姓家敷が七軒となっている。常楽院については、建家（間口拾間 奥行五間半 但シ茅葺）、土蔵（三間 四間 但シ板葺）、門（六尺 二間 但シ板葺）、同裡門（東西二間 南北六尺 但シ板葺）、「常楽院ノ内庵」であり常楽院を開基とする真言宗寺院の真藏院（高六斗六升、此六畝歩）、そして百姓屋舗の借地三軒としている。

ところで岩殿区有文書のうち、明治初年頃と推定される絵図で、絵図の下半分（東側）を欠くもの、および上半分（西側）を欠くもの、それぞれ一葉ずつが伝存している。絵図の示す内容は酷似しているが、この二葉は一枚の絵図の上下ではなく、別々の絵図の残欠である。このうち前者には大坊および常楽院の建築の状況が、一部欠けながらもよく描かれている（第79図）。『寺記』による文言とよく一致し、大坊の建家、土蔵、常楽院の建家、土蔵、門の姿を認めることができる。大坊、常楽院とともに幕末の寺院伽藍としてはごく通常の構成とみなすことができる。かつ、真藏院に関しては絵図に『寺記』記載以上の情報があり、本堂と庫裡とが鉤手型に廊下で接続される形式を示している。これもまた山梨県下の真言宗系近世寺院に多い形式である。



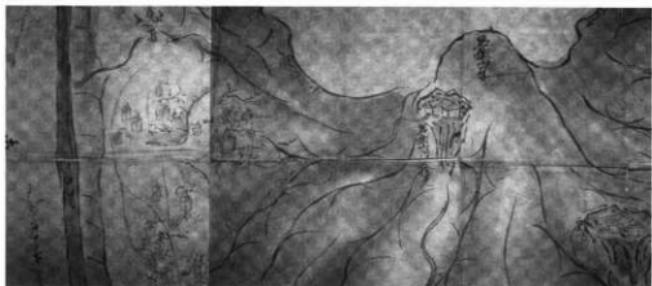
第79図 明治初期頃と推定される絵図残欠（岩殿区有文書）

(2) 観音堂、三重塔、鐘樓の建築

さて、「寺記」のうちでも、通巻第七十三巻の最終条にある記載では、「十一面觀音堂地 七百五十坪」として觀音堂四間四面茅葺、三重之塔、梵鐘および鐘樓二間四面である。一方、通巻七十四巻の大坊および常樂院の項では両寺院持ちとして觀音堂京間三間四面茅葺、三重之塔式間四面高サ五丈八尺怖葺、梵鐘は口式尺で武田信玄公御施主（但し無銘）とあり、鐘樓の記載は見られない。すなわち両者の記載には若干相違がある。觀音堂が四間四面および京間三間四面となる長い違いについては、仏堂の通例、正面の柱間数が奇数となるため、3柱間の建築と考えてよいだろう。使用寸法が京間（真々で6尺5寸モデュール）であるとしている。

大坊所蔵の岩殿山境内絵図（第78図、以後大坊所蔵絵図と呼ぶ）は園中の觀音堂近くに「觀音堂地七百五十坪」と記載され、『寺記』の記載と符合する。また觀音堂、三重塔、鐘樓、大坊および常樂院の建物がそれぞれ描かれている。觀音堂は3柱間で縁のある建物に見え、屋根は正面側に妻を見せる形式で描かれている。『寺記』によると屋根は茅葺である。また、前述の明治初期と推定される絵図残業による表現では屋根が方形に描かれているが、岩殿区有文書の絵図のうち、宝永2年絵図（第80図）、延享2年絵図（第82図）では入母屋となっており、後年描かれたと推定される絵図の方形屋根とは異なる。従って、18世紀中期以降のいざれかの時期に、葺替えによる屋根形式の変更、ないし建物そのものの再建がなされた可能性がある。幕末期の觀音堂は三間仏堂形式、方形の茅葺屋根をもつ建築であったと推察される。

第78図の大坊所蔵絵図による三重塔にはやや誇張された塔頂部、および縁の表現があり、觀音堂同様3柱



第80図 宝永2年(1705)絵図(岩殿区有文書)



第81図 宝永2年絵図(第80図)
中、三重塔、観音堂部分



第82図 延享2年(1745)絵図(岩殿区有文書)



第83図 延享2年絵図(第82図)中、
三重塔、観音堂部分



第84図 岩殿山境内絵図(第82図)
中、三重塔、観音堂部分

間の建物に描かれている。層塔の柱間数も奇数が原則であるため、「寺記」による「三重之塔式間四面高サ五丈八尺柿葺」の式間四面は桁行・梁間とも3柱間平面の、1辺の実長を書いたものであろう。高さが五丈八尺(約17.4m)で柿葺の建物としており、建築の格の高さを窺わせる。

鐘楼は「寺記」七十三卷に二間四

面とある建物で、大坊所蔵絵図では柱が内軒びに描かれている。前述の明治初期と推定される絵図残次による表現でも柱は内軒びで、かつ屋根が方形となっており、典型的な小規模鐘楼の形状であったと推定される。

(3) 七社権現の建築

次に観音堂地より八町ほど登った七社権現について、「寺記」通巻第七十三巻の最終条記載では、「七社権現社地岩窟 但シ押殿東西七間南北十一間岩窟之内工建込候拝殿ニ候 同本社之儀者一宮七原ニ建統之宮ニ御座候」とある。通巻第七十四巻の大坊および常楽院の条では「七社大権現宮 明三尺 拝殿 東西江五間 南北江九間 但し岩窟掛造」であり、拝殿に掛かる「半鐘 口一尺五寸(常楽院の条では口一尺五寸)」および

「鶴口」があるという。このうち「岩窟掛造」の掛造とは、懸造のことで、社寺建築などにおいて山、崖に持たせかけ、あるいは水の上に架け渡して造られる建物や、その構造方法をこう呼ぶ。床を支持するために長い足代を組むのが普通である。懸造の代表的な建築としては、三仏寺奥院（=投入堂・鳥取県・平安後期）、清水寺本堂（京都府・1633）などが挙げられる。

ここで両巻の拝殿規模を比較してみると、七十三卷記載は東西七間南北十一間であるが、七十四卷記載は東西五間南北九間である。この相違はどこからくるか。

相違の理由を明らかにするに伴い、七社権現拝殿の建築に3通りの可能性があることが判明した。以下に箇条書きとする。

①前述の觀音堂の項に戻ると、「寺記」の両巻で相違があるのは、七十三卷記載が実長に近い数値を、七十四卷記載が柱間数を述べたものと推定した。当然、拝殿に関しても同様であるという可能性がある。すなわち建物の東西は5柱間で実長が7間、南北は9柱間で実長が11間という規模であったと推定される。

②反対に前述の三重塔の項では、七十四卷記載が実長を述べたものと推定している。これを適用すると、①とはまったく逆に建物の東西が7柱間で実長が5間、南北は11柱間で実長が9間という規模であった可能性がある。1柱間が実長で1間に満たない計算となるが、天井高さのとれない岩窟内の祠としての堂宮の場合、このような小スパンの事例は珍しくない。

③拝殿の東西七間南北十一間という数値は前節で述べた『甲斐国志』の記載とまったく同じ数値である。『甲斐国志』の神社規模に関する記載は、崖八幡神社に関する実証より、基壇規模、あるいは屋根の投影規模を記載したという論がある。七社権現に関してもこれが適用されると考えると、拝殿の基壇ないし懸造の足代規模が東西七間南北十一間、その上にのる拝殿建築が東西五間南北九間であったと推定される。

これらのうち、最も可能性が高いのは懸造にあるべき足代規模を記したとする③であると考える。以上は拝殿規模に関する論述であるが、では拝殿に対する本殿はいかなるものであったか。

『寺記』七十三巻の最終条記載に「七社権現社地岩窟 但シ拝殿東西七間南北十一間岩窟之内工建込候拝殿ニ候 同本社之儀者一宮七扉ニ建統之宮ニ御車候」とある。後ろの文章で本社と呼ぶのが七社権現本殿を考えると、統いて「一宮七扉ニ建統之宮」の部分が本殿の形式を指し、これが七社の相殿形式を意味している可能性がある。相殿とは一つの社殿に二柱以上の神を合祀する社殿形式で、建築もそれに適合した形式を採用している。山城国の大石清水八幡宮などが代表事例であるが、山梨県では比較的小規模な二社社二扉、三間社三扉の相殿がよく知られている。しかし例えば三間社が三棟、「つくりあい造作」によって接続した崖八幡神社本殿（十一間社流造）のような特殊な形式もこのようない一例と言ってよいだろう。「一宮七扉ニ建統之宮」の七社権現の具体的な形式は不明であるが、七社を一つ屋根で覆う形式の相殿でなくとも、春日造りのようない一間社が七社「建統」く形式であった可能性も考えられる。

『甲斐国志』に記される「戸帳七掛、金襷赤地、小山田左兵衛尉寄附、裏ニ白書シテ云ク斗帳一旒ヲ某権現ノ御宝前ニ懸ケ奉ル 永禄十一年戊辰参月十八日大願主半信茂敬白 七懸皆同文ナリ」の記載により、永禄11年（1568）に七社権現のそれぞれに豪華な斗帳を一旒ずつ奉納、懸けたと記録されるが、本殿が七社相殿形式をとり、各柱間に神牘一体、斗帳一旒ずつを納めた構造をとったのではないだろうか。

七十四巻で大坊、常楽院の条ともに「七社大権現宮 明三尺」とあり、文字通りに捉えると、建築物間の何らの間隙が二尺であったと受け取れる。前述のように春日造りのような一間社が七社「建統」く形式であった場合には、各社間の間隙ないし各社のスパンそのものが三尺であったとも考えられる。ところがここに問題がある。本殿に関しては規模記載がないことである。

次章「旧円通寺の影刻」で七社権現像の背面に虫害が多く見られることを述べている。そのため七社権現の堂（本殿）に天井がないことと同様、背面も岩窟そのものであった可能性を指摘している。史料記載を総

合すると「一宮七扉ニ建統之宮」は各間隔を三尺にとった七柱間の宮と推定され、権現神社を各スパンに一軒ずつ合計七軒納め、その各々に豪華な斗帳を一歳ずつ懸けた相殿とするのが最も妥当ではないだろうか。ところが天井および背後は岩窟であり、建築規模を表記することが不可能だったと考えられるのである。

ここで第78図の大坊所蔵絵図を見ると、七社権現の建築としては左側に向拝のような小建築が突出していて、そのあとに建物の主要部分が描かれ、また右側には別方向へ突出する小建物が描かれている。建築の主要部分が洞窟内の奥行を描いたものとすると、右側の小建築は洞窟の最奥にある本殿かとも受け取れるが、この絵からはむしろ谷に向かって別棟が突出しているように見える。全体に高い柱に載っているように表現されており、「守記」に云う岩窟掛造の建築であると納得できる。

さらに岩殿区有文書中のうち延享2年の絵図(第82図)を見ると、建築構成としては前述の大坊所蔵絵図と同じ様な形状をとっており、懸造の七社権現が18世紀中期には成立していたことが窺える。



第85図 岩殿山境内絵図(第78図)中、
七社権現部分



第86図 延享2年絵図(第82図)中、七社権現部分

以上により18世紀中期から幕末にかけての七社権現の建築については、参道を登っていくとまず向拝があり、それに統いて規模の大きな押殿が続く。さらに最奥に「一宮七扉ニ建統之宮」の本殿が控え、押殿の一部が谷へと張り出した懸造の構造となっていると考えるのが妥当であろう。



第87図 七社権現 洞窟内現況

(4) 新宮の建築

次に觀音堂地より北方へ十町ほど離れた新宮であるが、『寺記』通卷第七十三卷の最終条記載では、「新宮境内 竪一町 橫二町（中略） 同拝殿東西三間南北エ七間岩窟之内建込之拝殿 同本尊千手觀音木像ニ候」と、七社権現と同様に洞窟内に建て込んだ建築であることを記している。通卷第七十四卷の大坊条では「三宝大荒宮 東西七尺 南北江七間」、「拝殿 東西江三間 南北江七間半（常樂院条では七間） 但し岩窟造り掛り」とある。新宮の本尊は十一面觀音であるが、『甲斐国志』によれば駿士として三宝荒神・毘沙門天の名を挙げている。第七十四卷大坊条の「三宝大荒宮 東西七尺 南北江七間」は拝殿より前に記載のあることから、新宮の本殿を指す可能性もあるが、三宝荒神の摂社であるとも考えられ、疑問が残る。七社権現と同様、次章で十一面觀音像の一軀に関して背面に虫害が多く見られるとしており、この像の納められていた背後が岩窟であった可能性を示唆している。新宮の本尊である十一面觀音像は、東西三間南北七間半（常樂院条では七間）で懸造の形式をとる拝殿の奥に祀られていた可能性が高い。

延享2年絵図（第82図）を見ると、新宮の建築は正面に妻と見せた懸造の建築が前方の谷へと突出していて、上から滝が落ちてくる情景が描かれている。新宮の谷の方向を考えると、正面が北を向いているため、東西三間南北七間という拝殿の規模は、正面が三間、洞窟内部に向かって七間（ないし七間半）となり、前方は水滴したる流れの下に張り出した懸造であったと推定される。



第88図 延享2年絵図(第82図)中、
新宮部分



第89図 新宮 外観現況



第90図 新宮洞窟内現況

(5) 岩殿山をめぐる建築の特徴

岩殿山をめぐる建築は、以上のようにオーソドックスな龍の建築群とかなり特殊な形態の七社権現および新宮の建築群に分けて捉えることが可能である。後者を特徴づける主たる要因は「懸造」である。懸造そのものは岩殿山のような山岳を拠点とする宗教施設には珍しくないが、山梨県下では現存例がほとんど無いと考えられるため、七社権現および新宮の建造物が失われたことが惜しまれる。

さて、近世に入ると岩殿山大坊および常楽院は郡内における熊野先達触頭を勤めているが、岩殿山をめぐる建築の特徴を一言でまとめるならば、本拠である熊野三山の建築構成によく似ていることである。

紀伊の東南部にあたる古の熊野国に、熊野本宮大社（熊野坐神社・本宮）、熊野速玉大社（熊野速玉神社・新宮）、熊野那智大社（熊野夫須美神社・那智）の三大社が鎮座する。平安時代初期に熊野坐神社（本宮）および熊野速玉神社（新宮）が成立し、那智滝（飛流権現）への靈湯信仰から起こった熊野那智神社が11世紀中頃に加わった。元来は各々独立した神社であったが、地域を同じくすことから、古代末には一種の宗教的連合体を形成するようになったとされる。

熊野本宮は和歌山県東牟婁郡本宮町の熊野川上流にあり、新宮はその東南で熊野川河口にあたる新宮市に鎮座する。那智大社は新宮の南西の那智勝浦町に位置し、本宮からは小雲取越、大雲取越の難所を経て南東方向の那智に至る。この位置関係は南北方向を逆にした場合、岩殿山における七社権現、新宮および龍の領域の構成と実によく似ている。

すなわち岩殿山において、七社権現を祀る最も標高の高い領域が「本宮」、七社権現とは別な岩窟を本拠とする新宮が「新宮」、円通寺伽藍の遺構としての三重塔が建つ龍の領域が岸岸渡寺との神仏習合色の濃厚な「那智」に近いイメージのものとして、近世の再建を経て整備されたのではないだろうか。

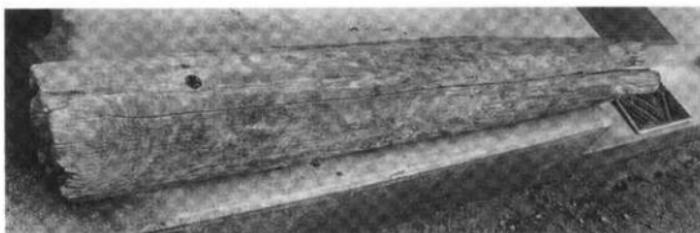
以上、岩殿山をめぐる各領域の建築について概観したが、さらに円通寺伽藍の建築を解明するにあたり、ひとつつの鍵となるのが三重塔である。この塔は現存しないが、近世の絵図にはその姿が描かれ、また大坊（現・北条熱実家）所蔵史料中の慶賀祝祭時の対象建築として「三重塔」と明記されており、明治初年までは実在していたことが確認される。この塔の柱の1本とされる部材が常楽院跡の柳原家に伝存しており、本調査において、放射性同位元素^{14C}による材の年代判定を行った。この結果に関して次節に述べる。

3. 伝三重塔四天柱に関する所見

三重塔は『甲斐国志』によれば、升形に刻まれた経文の末尾に承平3年(933)の年紀と大旦那孝阿禅尼の銘記があったとされる。建物は現存していないが、前述のように近世の絵図にはその姿が描かれ、遠方から眺望できるため、『甲斐名所圖会』などにも示されるように甲州三十三觀音靈場の第三十番札所のシンボル的な存在であったと考えられる。

また大坊(北条忠実氏)所蔵史料中の廃仏毀釈時の対象建築として「三重塔」と明記されており、明治初年までは実在していたことが確認される。この塔の柱の1本とされる部材が常楽院跡の柳原明文家に伝存している。柳原家では廃仏毀釈の際、取り壊された三重塔の柱をもらいうけ、それを長年池の松の枝の下支えに使用していたという。近年、傷みがひどくなつたためにその柱を取り外し、保管している(第91・92・93図)。その形状は以下の通りである。

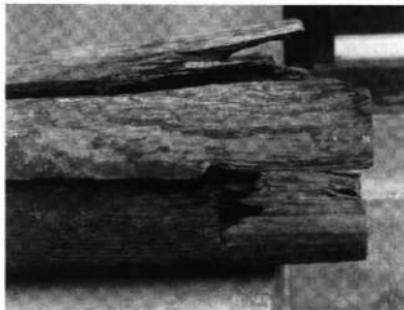
- ①元口で直径230mm、末口で直径210mm、高さ1955mmの円柱である。元口は傷みのために材形が梢円に近く、最大直径260mmに達する箇所がある。柱中程の材直径は248mmである。
- ②樹種は檜で、表面に漆の朱塗りのあとが残る。
- ③柱頭部には頭貫を通したと推定される幅55mm、深さ140mmの欠き込みが通る。
- ④柱底部には地覆を通したと推定される幅80mm、高さ200mm、奥行き140mmの欠き込み(仕口)が設けられている。
- ⑤上記③の欠き込みから④の欠き込みにかけて、柱側面の上から下まで、幅およそ55mmの塗装のない溝が一本通る。現在は傷みがひどくなり、材の「背割れ」のような状況を呈している。鈴木英良氏による昭和51年6月の先行調査によれば、この箇所およびその周辺には角釘が3ヶ所に打ててあることを指摘している。
- ⑥そのほかに、図に示すような若干の痕跡(埋木)等が残存する。
- ⑦三重塔の基壇に近かった場所に、現在礎石が集められている。礎石のうち1個には、明らかにこの柱の元口形状に対応するひかりつけの行われた痕跡が残る。
- ⑧以上の材形状、仕口痕跡により、四天柱の1本であると考えられる。礎石のひかりつけ痕跡が一致すること(第94図)、表面に朱漆塗りの跡が残ることから、初層四天柱である可能性が最も高い。



第91図 四天柱 全景

この材のみから年代判定することは困難であるため、柳原家のご厚意により材の一部を採取し、帝京大学山梨文化財研究所の鈴木稔氏のご協力によって、放射性同位元素^{(14)C}による材の年代判定を行った。その結果は以下の通りである。

- ①^{(14)C}年代測定により慣例となるLibbyの半減期5568年を採用した場合、西暦1950年までの経過年数は600年±60年である。



第92図 四天柱 頭部
頭貫穴および柱表面に残る朱漆塗り
が認められる。



第93図 四天柱 底部
地貫ないし地覆穴が認められる。



第94図 磊石
四天柱と同じ形状の
ひかりつけが認められる。

②14Cの半減期として使用されている最新の値、5730年を採用した場合、西暦1950年までの経年数は620年±60年である。

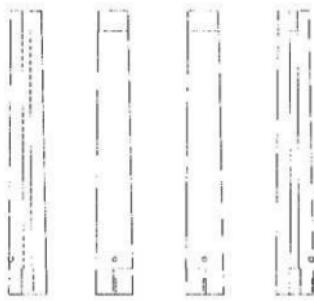
③上記いずれも約70%の確率で年代誤差（±60年）の範囲に入る。

以上の結果により、三重塔の柱の年代は西暦1270年～1410年と考えることができる。つまり鎌倉末期の文永7年（1270）頃から室町中期の応永17年（1410）頃の間に、三重塔の柱材が伐採されたことを示している。これを前述の円通寺の寺歴にあわせて考えると、次のように推察される。

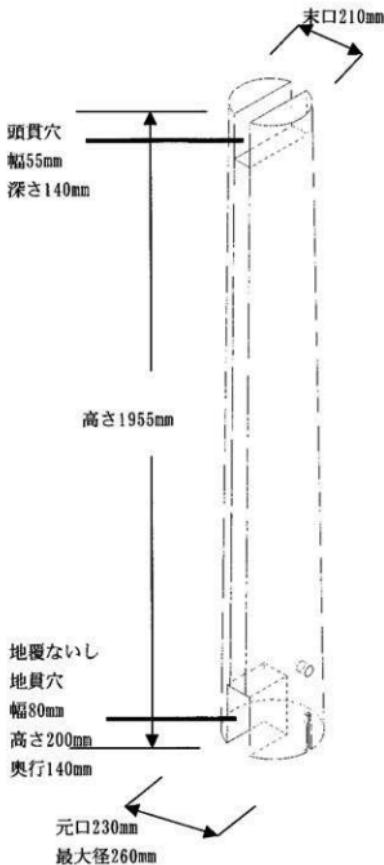
まず『甲斐国志』にある、升形に刻まれた経文の末尾に承平3年（933）の年紀があったとされる三重塔に関しては、承平3年以前に建立されたとみることができ、中世中期と推定される現存部材の三重塔とは一致しない。現存部材は中世期の後補柱であり、あくまでも古代の三重塔が明治初年まで存在したという可能性が皆無という訳ではないが、現存部材が最も主要な柱である四天柱の1本であることを考えると、この可能性は極めて低い。『甲斐国志』の記載通りに、承平3年年紀の三重塔が建立されていたとしても、それは後年失われ、再建されたと考えるのが妥当であろう。

円通寺伽藍の再建年次として次の画期とされるのは、大破（退破）の修理を行った永正17年（1520）であるが、これは逆に時代が降りすぎている。中世に円通寺は京都都聖護院を本山とする本山派修驗寺院であり、応永6年（1399）～同8年の間に金剛佛師明賢は大般若經六百卷を円通寺に奉納している。三重塔の柱材が示す年代はまさにこれに若干先立つ年代を中心とし、修驗寺院として信仰を集めていた時期にあたる。

さて、三重塔の四天柱と推定される1本の遺材のみでの建築復元は不可能であるが、材の示す1270年～1410年という年代に、日本の層塔建築は実にダイナミックな発展を遂げている。建築の各部比率に関し、蟇垂木の真々間隔を基準寸法とし、その倍数によって設計する手法を「枝割の制」、ないし「木割」と呼ぶが、これが実に13世紀から15世紀前期にかけて成立をみているのである。以下



第95図 四天柱の四面の側面図



第96図 四天柱のアイソメ図

に中世の層塔建築における枝割の制の成立過程を要約しておく。

(¹⁰) 浜島正上氏の研究によれば、海住山寺五重塔（京都府・1224）、明王院五重塔（広島県・1348）、嚴島神社五重塔（広島県・1407）の三棟の層塔に注目すると、13世紀前半から15世紀前期にかけて層塔の枝割が次第に整っていく経緯が把握できるとしている（第10表）。

中世の現存遺構を見ると、海住山寺五重塔は初層総間を9尺の完数とし、それを22等分して中の間を8枝、脇間を7枝にとるが、その柱間割付の基準寸法がそのまま垂木割となる。ここに至って初めて枝割の制が見られる。柱間は各重各間で一枝寸法は異なるが、古代のように単に完数あるいは比率によるものではなく、枝割を利用してと推定される。

明王院五重塔では基準となる1枝寸法が既に存在し、その倍数によって初層の各柱間寸法を決定している。二層以上では総間を初層と同じ1枝寸法で各2枝落ちとして決定しているが、垂木枝数がそれに伴わないので1枝寸法が各重で異なる。

これがさらに進み、嚴島神社五重塔に至って一枝寸法は各重各間にわたって同一となる。ここにおいて初めて初重の枝割が各重を完全に支配することになる。

以上が五重塔における枝割の制の発展過程であるが、三重塔においても同様の状況を示し、遺構としては、

第10表 枝割による柱間寸法（単位 尺）

名称	年代	層	総間			中央間			脇間			通減		
			寸法	枝数	一枝寸法									
海住山寺 五重塔	建保2年 1224	一	9.035	22	0.41	3.285	8	0.411	2.875	7	0.41	—	—	—
		二	8.445	19	—	3.085	7	0.44	2.68	6	0.447	0.59	—	—
		三	7.91	19	—	2.89	7	0.413	2.51	6	0.419	0.535	—	—
		四	7.31	18	—	2.55	6	0.425	2.38	6	0.397	0.6	—	—
		五	6.66	16	0.416	2.49	6	0.415	2.085	5	0.417	0.65	—	0.737
明王院 五重塔	貞和4年 1348	一	14.4	28	0.514	5.14	10	0.514	4.63	9	0.514	—	—	—
		二	13.37	26	—	4.98	10	0.498	4.195	8	0.524	1.03	3	—
		三	12.34	25	0.494	4.44	9	0.494	3.95	8	0.494	1.03	3	—
		四	11.31	22	0.514	4.11	8	0.514	3.6	7	0.514	1.03	3	—
		五	10.28	19	0.541	3.78	7	0.541	3.25	6	0.541	1.03	3	0.714
嚴島神社 五重塔	応永14年 1407	一	15.04	32	0.47	5.64	12	0.47	4.7	10	0.47	—	—	—
		二	13.63	29	0.47	5.17	11	0.47	4.23	9	0.47	1.41	3	—
		三	12.22	26	0.47	4.7	10	0.47	3.76	8	0.47	1.41	3	—
		四	10.81	23	0.47	4.23	9	0.47	3.29	7	0.47	1.41	3	—
		五	9.4	20	0.47	3.76	8	0.47	2.82	6	0.47	1.41	3	0.625

常楽寺三重塔（滋賀県・応永7年=1400）において、ほぼ完全な枝割の使用を認められる。しかしながら、圓通寺三重塔はそれより時期が遅ること、また、甲州という地域性を考慮すると全体を通して統一木割がまだすでに存在していないと考えられる。

次の節では残された四天柱より、できる限り妥当な形態を目指し、圓通寺三重塔の推定復原を行う。

4. 圓通寺三重塔の復原的考察

14世紀に主流であった層塔の設計手法に加え、ここでは圓通寺三重塔に地理的、時期的に最も近いと考えられる長野県小県郡の大宝寺三重塔（国宝・正慶2年=1333）の枝割寸法を参考として、以下にその手法をまとめる。

①初層総間を尺の完数とし、かつ丸桁間の寸法を初層、2層、3層で10：9：8の比率となるように決定

する。後者は大宝寺、興福寺三重塔等で見られる手法である。

- ②初層に関しては、枝割による一枝寸法を基準とし、枝割の割により部材大きさを決定する。
③二層各間は初層より中央間、脇間とも各1枝落ちとし、三層各間はさらに二層より中央間、脇間とも各2枝落ちとする。軒の出は各重とも丸桁心より地垂木6枝、飛えん垂木は5枝の合計11枝とするが、枝が各重で異なるため、軒の出も次第に漸減していくことになる。
④各重の一枝寸法は上の層に行くに従い、原則として小さくなる。2層および3層では各柱間を各々の枝割により割り付けるが、三ツ斗が六枝掛とはならないことで初層とは異なる。

『甲斐国社記・寺記』通巻七十四巻の大坊および常樂院の項には、「両寺院持ちとして「三重之塔式間四面高サ五丈八尺柿葺」とある。大坊所蔵の岩殿山境内絵図では観音堂、鐘楼、大坊および常樂院の建物とともに三重塔が描かれており、やや誇張された塔頂部、および縁の表現があり、観音堂同様3柱間の建物に描かれている。層塔の柱間数も奇数が原則であるため、「寺記」による「三重之塔式間四面高サ五丈八尺柿葺」の式間四面は桁行・梁間とも3柱間平面の、1辺の実長を書いたものであろう。高さが五丈八尺(約17.4m)で柿葺の建物としており、建築の格の高さを窺わせる。

一方、大坊(北条忠実氏)所蔵史料中の庵敷釈時の史料には「三重塔 一間半」と記されており、前述の式間という記載とは数字を異にするが、使用する基本モジュールの相違によるものであろう。ここでは中世中葉の層塔設計の理念に従い、初層総間を尺の完数とするが、史料記載による総間の範囲である9尺より12尺の間の数字では、丈の完数である10尺が最も適していると考えられるため、10尺とし、日本の代表的な木割書である『所明』⁽¹⁰⁾塔記集の記載に従って、復原を行った。各重の基本寸法は下記、第11表の通りである。以下に、CADによって各部材のモデリングを行い、復原した円通寺三重塔の推定復原透視図を示す。総間

第11表 円通寺三重塔の推定枝割による柱間寸法 (単位: 尺)

名 称	層	総 間		中央間			脇 間			通 減		
		寸法	枝 数	寸法	枝 数	寸法	枝 数	寸法	枝 数	寸法	枝 数	
円通寺 三重塔	一	100.0	32	3.125	37.5	12	3.125	31.25	10	3.125	—	1
	二	87.5	29	3.017	33.18	11	3.017	27.15	9	3.017	12.5	— 0.875
	三	68.75	23	2.989	26.90	9	2.989	20.925	7	2.989	18.75	— 0.688

が一間半より二間の間で総高さが5丈8尺とされ、決して大きな層塔ではないが、絵図等史資料および残された柱より得た情報でその姿を復することができた。

以下に図を示す。

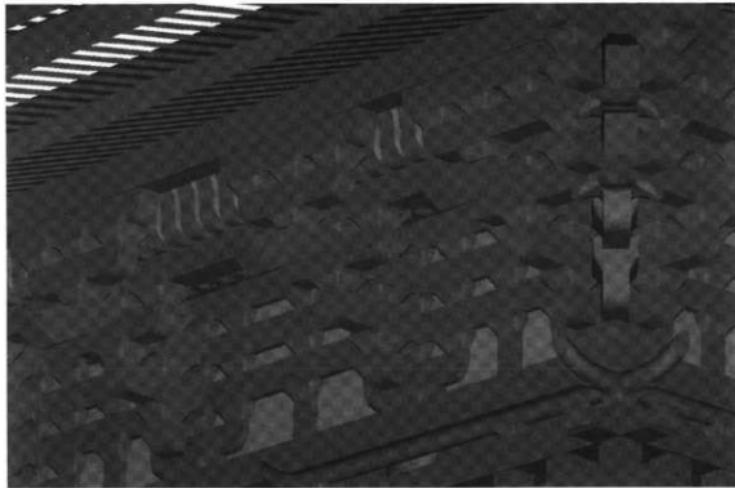
初層堂内に関しては、柱にあった板壁痕跡により、米迎壁が設けられており、真柱は初層梁上にとどまっていたと考えられる。第99図すなわち堂内の透視図において、奥の米迎壁に向かって右の四天柱が現在に残された柱である。

なお、絵図より風鐸の存在が明らかであるが、大坊所蔵遺物中に建築に関わると見られる金属器が残されており、これとの関連を熟考する必要がある。そのため今回、風鐸のモデリングは行わなかった。また、中世中葉の層塔は通例初層に床が貼られており、当復原においても、同様に復した。従って、四天柱に残された地貫ないし地覆の痕跡に関して、初層床紙を設ける横枠材のための穴であったと解釈したが、四天柱そのものに床板と接した痕跡が認められないため、この点に関しては再考の余地があることを付記しておく。

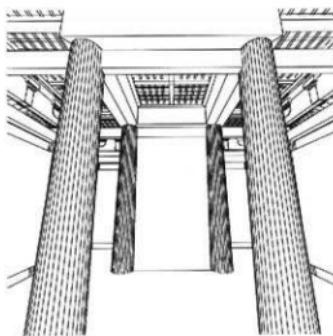
山梨県においては中世期の塔建築が現存しておらず、旧円通寺三重塔の破却は極めて惜しまれる。



第97図 旧円通寺三重塔 外観



第98図 旧円通寺三重塔 二層組物



第99図 旧円通寺三重塔 初層堂内

註

- (1) 「大日本地誌大系 甲斐国志」第三卷 昭和46年 雄山閣
- (2) 「大月市史 通史編」p72 昭和53年 大月市史編纂室
- (3) 註(2)前掲書 p74、pp.119-121
- (4) 註(2)前掲書 p290
- (5) 都留市教育委員会 昭和41年
- (6) 「甲斐国社記・寺記」第四卷 昭和44年 山梨県立図書館編
- (7) ^{14}C による年代判定は財團法人九州環境管理協会に委託した。
- (8) 浜島正士編「塔の建築」日本の美術 第158号 昭和54年および浜島正士「塔の柱間寸法と枝剤について」日本建築学会論文報告集 第143号 昭和43年。本文中の第10表は後者論文からの抜粋である。
- (9) 太田博太郎編集、中村伸夫、浜島正士、吉澤政己ほか著「日本建築史基礎資料集成十二 塔婆Ⅱ」中央公論美術出版社 平成11年
- (10) 太田博太郎監修、伊藤要太郎校訂解説『匠明』昭和46年 鹿島出版会
- (11) 本稿においては MicroGDS ver.6.02を使用した。

(渡辺洋子)

第6章 旧円通寺の彫刻

かつて円通寺に祀られていた像として伝えられるのは、木造十一面觀音像二躯と県指定文化財である木造七社権現像七躯の計九躯の像であり、現在は、真蔵院境内の収藏庫に安置される。これらの像について、以下に調査結果を記し、それに対する若干の考察を付すこととする。

1. 木造十一面觀音像（1）（図版13）

現在、真蔵院境内の収藏庫に七社権現像と共に安置される二躯の十一面觀音像のうち、像高の高い方の像である。

本像は、ほぼ等身の大きさで、十一面觀音像の通例の通り頭上に化仏を影出するが、頭部頂上から、後頸部、両肩背面にかけては、特に虫害等による損傷がひどく、頭上の化仏は、現在正面に三面、両側面にそれぞれ二面が残るのみである。天冠台（無文）を戴き、天冠台下の地髪は平彫りとする。三道は表さない。右手は屈臂し、左手は体側に添って垂下するが、共に手首から先を失う。胸前には条帛をかけ、両肩から垂下して膝前を一重にわたる天衣をつけ、下半身には一段折り返しのある裙と腰布を着ける。右腕に臂钏（絆一条の上下に列弁を付す）をつける。像高は、現状で146.0cmである。

材は、はっきりしない。一本造。彫眼。構造は、像容の全てを一材から影出するもので、内刺りはない。右手上膊及び左手は体部と遊離せずに影出される。像表面は現在ほぼ素木の状態となり、当初の状態は不明である。本像は、先に述べたように、全身に虫害等の損傷を受け、特に上半身の頭部から背面にそれが著しく、頂上仏面及び化仏の数面を失い、両耳も左耳上部の耳輪の一部を残して欠失する。両手首から先、及び両足首から先も欠失し、光背、台座も失われる。

本像にみられる、丸くふくらした顔に大振りな目鼻立ちを刻み、上唇を突き出すように表す面貌の表現や、腹部を丸く膨らんで表す体態の表現、さらに膝前を一重にわたる天衣の形などは、県内の平安時代10世紀頃の彫刻にままみられる表現と通じるところがある。しかし、体躯の厚みは意外に薄く、全体に量感を減じている点、また表情にも穏やかさが増している点などからは、本像の造立は11世紀に入るものと思われる。両肩にかかる天衣や折り返した裙の表現にはやや素朴なところがあり、両腕を体部と離さずに影出する点等を考え併せると、本像は、在地での制作と考えられる。

本像は、次項の十一面觀音像と共に、円通寺より伝えられた像であるとされる。『甲斐国志』巻十九・寺部第十七ノ下円通寺条によれば、円通寺の本尊は、行基作と伝えられる十一面觀音であり、新宮の本尊もまた、行基作と伝えられる十一面觀音であるといい、当寺には、二躯の十一面觀音像が祀られていたとされる。次項にみると、円通寺の平地伽藍のうちの觀音堂の本尊が、次項の十一面觀音像であるとすれば、本像は、『甲斐国志』のいう新宮の本尊であったと考えられるが、新宮の本尊は、千手觀音像であったとする伝えもあり、また『甲斐国・社記・寺記』にも、新宮の本尊を千手觀音木像と記すなど、新宮の本尊については、諸説がある。しかし、『甲斐国志』によれば、新宮は山下の北面にある岩窟で、深い谷に面しているとあり、本像の保存状態がもう一躯の十一面觀音像にくらべ非常に悪いのは、この岩窟の宮に安置されていたためではないかとも思われ、新宮の本尊の本尊はやはり本像ではなかったかと思われる。

本像は、岩殿山の信仰の中でも非常に早い時期の遺例であり、神仏混合した岩殿山の信仰を知る上で重要な像であると思われる。

(法量)	単位: cm			
像高	146.0	面奥	20.5	捲張
髮際高	136.0	耳張	20.1	
頂一顎	24.0	胸奥	17.8	
面長	16.2	腹奥	19.7	
面幅	15.6	肘張	41.6	

2. 木造十一面觀音像(II) (図版13)

現在、真藏院境内の収蔵庫に、七社権現像と共に安置される二基の十一面觀音像のうち、像高の低い方の像である。

本像は、像高99.0cm。頭部は、現在頭上に十面を表し、頭頂の仏面を欠失する。天冠台(紐一条の上に花型を付す)を戴き、天冠台下の地髪はまばら彫りとする。鬢髪一条が両耳をわたる。白毫、三道を表す。右手は垂下して掌を前にし、左手は、肩臂して持物(欠失)を執る。腰をやや左に捻り、右脚をやや前に出して蓮華座上に立つ。天衣、条帛、一段折り返しのある裙、腰布を着ける。

材は、ヒノキ。彫眼、漆箔、白毫嵌入(欠失)。構造は、体部は三道下の中央やや左寄りの位置から両足間に連する線で左右に割矧ぎ、内側りする。割首か。右手は、肩、肘で矧ぎ、左手は、肩、肘、手首で矧ぐ。本像は、前項の十一面觀音像と異なり虫害による損傷はほとんどないが、造像後、大破した時期があったようで、頭部及び両手の肘から先は後補のものと変わり、体部中央の矧ぎ目と両肩には、後補の楔が打ち込まれ、体部中央の矧ぎ目には、材の欠けた箇所もみえる。また、両足首から先も欠失する。光背、台座も後補である。

本像は、後代に補われた頭部と両手の肘から先、また矧ぎ目のゆるみなどによって、全体の姿を損ねてはいるが、体幹部は、12世紀後半頃の典型的な藤原時代彫刻様式を示すものである。僅かに左に捻る上半身から腰にかけては豊かな量感をみせ、下半身は薄い衣を通して両脚をくっきりと表し、全体の像容を引き締めている。衣は、いずれも薄く柔らかい布の質感を見事に表していて美しい。衣文は、全体にやや細かく、褶の折り返しや腰布では、浅くゆるやかに弧を描く衣文を、両脚脇ではやや深く斜めに疊まれる衣文を刻んで変化をみせる。こうした本像の示す様式は、本県においては、中臣摩郡玉穂町永源寺聖觀音像(重文)や甲府市善光寺阿弥陀三尊像中の脇侍像(重文・収蔵庫安置)と共に通性を持つものといえる。特に、同じ二尺像である永源寺像とは、上半身に較べて下半身をやや長めに造形する点などに似た傾向を示すが、より繊細となつた衣文の表現などから、その制作は、同像よりやや遅れる時期ではないかと考えられる。このように、本像の示す様式は、先の善光寺像、永源寺像などと共に12世紀後半期における本県の造像の水準を示すものといえよう。

『甲斐国志』や近世の絵図等によれば、円通寺の主要堂宇は、岩殿山山麓の平地伽藍、同山中腹の岩窟にある七社権現堂、平地伽藍北方の岩窟にある新宮の三箇所であったようである。これらのうち、岩殿山山麓の平地伽藍には、觀音堂、三重塔等があり、この觀音堂の本尊は、諸史料共に十一面觀音であったことを記す。『甲斐国志』に引く秋元氏修理棟札によれば、円通寺は永正17年(1520)に大破し、承応3年(1654)、貞享2年(1658)には、破損した為、永正17年には、武田信友、当郡主小山田信有等の寄進により、承応3年及び貞享2年にはそれぞれ時の郡主、秋元富朝、秋元喬朝により復興されたという。先にみたように、本像は、造像後のある時期に大破して頭部や両手を失っており、或いはこれは、大破と記される永正17年時の堂宇の破壊等に伴うものかとも考えられ、本像が、平地伽藍の主要堂宇である觀音堂の本尊であり、円通寺の本尊とされる十一面觀音像であったのではないかと考えられる。本像は、大破の後、修復を加えられ、江戸時代

には、光背、台座を新たに補われたが、明治維新後の円通寺の由緒を継いだ常楽院、大坊の廢絶、衰退により安置堂宇を失い、破損を進めたものの、昭和58年、真藏院境内に収蔵庫が完成すると、円通寺の旧仏として安置され、現在に至っているのである。

(法量)	単位: cm		
像高	99.0	耳張	13.2
髪際高	90.7	胸奥	13.2
頂一顎	21.4	腹奥	13.9
面長	12.3	肘張	31.7
面幅	10.4	裾張	19.4
面奥	12.5		

(鈴木麻呂子)

3. 木造七社権現立像 七躯 (図版13)

真藏院に所蔵される七社権現像は、明治初年に岩殿山中腹の七社権現社から移座したという。現在は同院収蔵庫に収められているが、以下本七躯の形状・品質構造等について略述したい。

まず形状について記す。ひときわ大きい中尊の藏王を中心として俗形の男神像が六躯、僧形の神像が一躯の計七躯の神像がいずれも直立して並んでいる。以下各像の形状について中尊の記述を基本として略述するが、名称は現在用いられている呼称にしたがう。

〔藏王〕 頭部には中折の鳥帽子をかぶり、壯貌にして正面を向く、袍を着し、両手を屈臂させ、右手を外にして胸前にて笏(欠矢)を持ち、袴をはき、沓を履いて直立する。

〔熊野〕 頭部に立鳥帽子をかぶる他、藏王に準じる。

〔山王〕 頭部に巾子を被るほか、藏王に準じる。

〔白山〕 藏王に準じる。

〔日光〕 藏王に準じる。

〔伊豆〕 山王に準じる。袈裟(鉤環付)を着し、両口角を吊り上げて微笑し、両手を屈臂させ持物を握る形をする。

〔箱根〕 僧形、袈裟(鉤環付)を着し、両手を屈臂して持物を握る形をする。

次に品質構造等について記す。

各像は、ほぼ全容を一材から木取りする。材は桧材とされているが或いは楓材かとも思われる。ただ熊野像は他の五躯とは材が異なると考えられる。木心は後方中央ぎりぎりにあり、すべて木表を用いる。

丸彫、彫眼。内削しない。現状は素地をあらわしているが、当初は白土下地彩色か。冠・鳥帽子・髪・髭・眉・眼を墨描する。

修補損傷等について記すと、各像とも持物を亡失し、彩色も剥落している。また、背面及地付・脊先等虫歯朽損(とくに箱根の後頭部から左肩上面にかけて甚しい)の状態が著しい。眉・眼・髭等の墨描はすべて後補。

また、中尊袴正面に墨苔銘があるが、現在ほとんど判読できない。

真藏院は現在千手觀音像を本尊とする密教寺院であるが、「甲斐国志」仏寺部の岩殿山円通寺の条には、行基作の十一面觀音像を本尊とする寺院であったという。同条の円通寺の寺宝を記すなかに「岩殿七社大権現」とあり、一本群像がこれにあるとされている。その尊名も「伊豆・日光・箱根・白山・藏王・熊野・山王」と記され、現在も同様に呼称されている。また「神林ハ木像各々長ケ七尺許リ行基ノ作ト云フ」とあり、大きさの点でそぐわないが本像のことを指していると考えられる。また、七躯の像は七社権現として個々に尊名

がつけられているが、名称については当初よりこのように呼ばれていたかは不明である。

彫りは概して変化に乏しく單調で、造形的に類型化の傾向化が著しく、鎌倉期の神像彫刻に比べれば素朴で、中世室町期における再興期の造像と考えられる。

また、本像は像高150cm前後とこの時期の神像としては大きい像ではないか。現存する神像彫刻には仏像のように丈六のような大きな像はほとんどなく、小像が概して多いが、おなじ山梨県には平安後期の作例とされる美和神社の大物主命像(130.6cm)にみられるように平安時代の神像は等身前後ないしそれよりややおおぶりに造られているものが多く、それ以降はさほど大きな像は造られていない。本像はなかでも等身人の木造の像が七躯をそろえたものとして注目される。七体の像の意味については不明だが、しかるべき目的をもって造られたことが想像される。

(法量) 単位: cm

	像 高	肘 張	最大奥
箱根	136.5	43.3	28.1
伊豆	151.0	41.2	28.2
日光	144.0	44.2	31.9
藏王	196.0	52.4	26.8
白山	149.0	44.3	26.0
山王	149.0	41.9	25.2
熊野	175.0	32.1	25.8

(川瀬由照)

第7章 新宮洞穴

はじめに

新宮洞穴は、岩殿山の北麓にある洞窟で、東側中腹の七社権現の洞窟とほぼ同じ頃に、そして同じ職能を持った別院が置かれていたものと推定される。七社権現堂についても残されている資料は少なく、その研究も十分されているわけではない。この洞穴に置かれた新宮についてはさらに資料は少なく、ほとんど研究は手つかずであるといえる。

ここでは、新宮が本格的に登場する『甲斐国志』を中心に、その前後を畠倉村の榮成院（のち永正院）という修験同行に関する資料で流れを追ってみることにする。それは、新宮がその位置する地形的な面から、すぐ近くの畠倉村の修験同行によって管理運営がおこなわれていたと思われるからである。

使用した資料は、旧大坊文書と畠倉村の文書である。

1. 『甲斐国志』以前の新宮

後述するように、新宮について本格的な資料が現われるのは『甲斐国志』である。しかし、それ以前の資料も少しばかりがあるので、そこから取り上げてみる。

- ・亨保17年（1732）、新宮が初めて資料に登場する。

当春御留守中村方之もの権現様之枯松二本新宮わき杉三本切り候ニ付タレ人ニ候ヤ…切り手を出シ候而者…（略）

七社権現領の枯れ松2本と新宮領の杉の木3本を、だれか村人が切って問題になった。地理的にみて松は岩殿村、杉は畠倉村の者であろう。罪人を直ちに面倒になるので真蔵院が間に入って常楽院・大坊に詫び、事を収めた。新宮領の山林は、『甲斐国社記寺記』等によれば「継一町横二町」とあり、小林利久氏が『円通寺跡』で指摘しているように、岩殿山が近在における大規模な林産地であったことが知れる。そして当時そこが修験の一大センターでもあったのである。真蔵院は『甲斐国志』によれば、常楽院の内蔵であったが、この頃すでにかなりの力を保持していたといえる。

- ・寛延3年（1750）畠倉村の榮成院の名が初出するが、以下新宮に関する歴史的な経緯をこの修験者の生活の側面から追ってみることにする。

本山修験道法式修行等猥りノ様ニ拙僧共奉存候…（略）

本山修験の法式や修行の亂れについて、畠倉の榮成院ほか8人の同行が連名で、「岩殿山両御支配所」へ差し出したものである。「両御支配所」は常楽院・大坊である。榮成院ほかの同行にかかる上下の支配組織が知れる。この後に「人用夫錢」は最寄りで集めて何時なりとも差し出すことを約束している。

- ・宝曆13年（1763）此度御公儀様被仰出候銅山拙僧持領之場所銅山無御座候ニ付連印仕指上申候…（略）
岩殿山下大宝院以下20人の修験同行の名がみえ、最後に「畠倉村 榮成院」とあり、「岩殿山両御所様」へ差し出している。常楽院・大坊が駄頭として配下を掌握していた様子がわかる。

- ・宝曆14年（1764）修験同行者「人別改帳」

御公儀様前々被仰出候御条目堅ク相守可被申候事…（略）

に始まる前文につづいて「江戸御役所 岩殿村 大宝院」以下全22人の同行者名があり、最後に「畠倉村 榮成院」とある。

- ・明和2年（1765）前に同じ 「人別改帳」 「畠倉村 榮成院」
- ・明和3年（1766）前に同じ 「人別改帳」 「畠倉村 榮成院」

・文化10年（1813）畠倉村の栄成院にかかわり、立入人一同の連印一札をもって本山へ差し出したもの。

私儀段々身上不増ニ付御登可免ニ〔預〕奉恐入候尚又此度真藏院様江御無心申御詫尾奉申上候尙早速御承引成被下難有仕合存候然上ハ法用旦廻第一ニ相勧可申候…（略）

真藏院が仲介役となって本山へ詫びている。常楽院・大坊とその配下の同行の間にあって、真藏院が取りまとめ的な役割を持ってきたことが窺われる。また修験同行の日常的な職能の一部を知ることができる。「法用旦廻第一」の部分である。「法用」は修験道の法式を指し、「旦廻り」は各家を祈祷や祝いをして回ることと考えられ、修験者の日常的な活動を示しているといえる。

以上7点の資料は、「甲斐国志」以前の82年間の新宮にかかる内容である。それは新宮の堂社と周辺の山林管理を主にしたと思われる修験者が、すぐ近くに住んでいた畠倉の栄成院と思料されることからである。

さらに次の点も新宮を暗示している。

「甲斐国志」の「仏寺部」の中の「寺宝ハ大般若經六百卷」とある部分の注記に

甲斐州鶴都岩殿山円通寺金剛仏子明賢同甲斐國都留郡畠倉郷岩殿山円通寺

応永八年辛巳十二月十三日撰畢

とある。この中の「畠倉郷岩殿山円通寺」であるが、「畠倉」は勿論今の畠倉であるが、これが新宮を指していると考えられるのである。即ち前半の「甲斐州鶴都…」と同格に「同甲斐國都留郡…」と並べられた中の「畠倉郷」である。新宮が円通寺の別院であった証左といえる。

2. 「甲斐国志」等にみる新宮

「仏寺部」の円通寺に関する記述の後部に新宮が登場する。次のようにある。

新宮ノ本尊ハ十一面觀音騎士ハ三宝荒神毘沙門天是亦行基ノ作ト言伝ヘタリ山下ノ北面ニアリ岩
劍ニ柱ヲ立テ岩ヲ直ニ天井トセルコト七社ノ造営ト同シ冷水岩ヨリ注キ殿前ニ飛流シテ數十丈ノ
谷ニ落ツ芭々奇観ナリ炎火ノ頃此洞中ニ入レハ冷氣冬ノ如シ

新宮の本尊、位置、堂社の構造、景観等を簡潔に記述している。次に取り上げる「甲斐叢記」をはじめ、以後の諸文献、諸資料のほとんどはこの「甲斐国志」の記載に準拠しているといえる。例えば本尊であるが、「甲斐国志」によるものは当然ながら十一面觀音を本尊としている。しかし後で触れるように、常楽院や大坊に残る「由緒書」や「由緒明細」では千手觀音が本尊になっている。この「甲斐国志」の記載に疑義を表明したのが、羽田一「郡内三十三番觀音靈場順礼記」である。その中で、本尊千手觀音は新宮の魔寺後真藏院へ合祀されたとしている。この究明も大きな課題である。

次に、新宮の堂社の構築であるが、七社権現の造営と同じように岩窟に柱をたて岩を天井としていることは、北条家や岩殿区に残されている古絵図にみられる通りである。山店寺院特有の舞台造り、懸造りだったことがわかる。延享2年（1745）の年号が記載してある最も古い絵図でもこの堂社の構造形態が読み取れる。また新宮にはどの絵図にも飛流が垂直に描いてある。

洞穴の広さについては触れていないが、「由緒書」他から知ることができる。しかし、一定していない。

堂地 東西9間 南北19間 天保3年（1832）除地山林書上 大坊

堂地 東西8間 南北4間 嘉永6年（1853）改善上帳 常楽院

拝殿 東西3間 南北7間 慶応4年（1868）甲斐國社記寺記

堂地 東西9間 南北11間 明治5年（1872）由緒書上帳 常楽院

拝殿 東西3間 南北7間半 由緒明細 大坊

このように一定していないのは、「由緒書上帳」のなかに、「千手觀音堂 五間三間 内仏木像」とあるように、新宮洞穴の中にある觀音堂の大きさを表したものと、拝殿の広さを記したものとの違いと考えられる。建て替えや修復が時代により種々変化した結果を示しているといえよう。

次に『甲斐叢記』のなかの新宮をみてみる。

岩殿の社殿に至る。又山下の北向に新宮あり。十一面觀音を安置す。此地も岩間に堂を建て自然の岩穴井ありて七社と同じ構造なり。冷水あり岩の上より堂の前に流れて数十丈の谷に落つ。甚奇觀なり。

『甲斐國志』を踏襲していることがわかる。現在でも、大雨の後には白い滝の流れが見事に落としているのがみられる。

3. 『甲斐國志』以後の新宮

・文化13年（1816）畠倉村の「高抜指改帳」に「1斗3升 永正院」の名がみえる。文化10年には「榮成院」であったが、この年から「永正院」に変わっている。この間に代が替わったものと思われる。以後明治に入るまで、52年間この名称がつく。この資料から修驗永正院が畠倉の地で耕作に従事していたことがわかる。

・文政13年（1830）質地奥印帳

6両	勘右衛門より永正院へ	スタマ	上烟	3升5歩	3斗6升4合
			中烟	2升	
			桑	小半束	

質入地の移動がわかるが、文政13年から弘化3年まで、永正院が関係する質地は8件あり、18筆である。それらを集計してみると、永正院の質受け烟が2反1升20歩、質入れ烟は1反6升24歩で、弘化3年には手持ちの煙は5升2歩となっている。その間の質地金の動きをみると、入りが16両で、出が38両3分となっている。また「奥印帳」以外にも、永正院が以前から所持していた煙も考えられ、畠倉に専念した時期とみることができよう。

・弘化3年（1846）「中西類焼相続御押借請印帳」に永正院の名があり、源三郎引負の御年貢並びに相続御押借類焼割り返し残り分とも25年賦返納、年々高割にすることに請印したものである。永正院が小前の人として名を連ねている。

・嘉永元年（1848）「庵宿見舞芳代覚帳」 200文永正院

子どもの庵宿見舞金の提出である。後述の永正院の「由緒書」で知られるが、永正院は下畠倉の春日神社の下向に居住していて、近所の付き合いをしていたことがわかる。100文も何人かいるが、平均約200文を見舞金としてだしている。尚この当事者の家は上畠倉地区にあり、永正院家の交際範囲の広がりを窺わせる。

・嘉永元年（1848）「日記万覚帳」

上畠倉の茂八家へ永正院が稼人足として仕事をした記録がある。仕事の内容は不明であるが、角兵衛、甚兵衛など7人の名があり、畠倉作か山仕事、あるいは養蚕等の農繁期に1日、2日と手伝ったものといえる。「永正院 3月25日 人足1人、5月27日 人足1人」というようにあり、延べ18日手伝ったことがわかる。その余白に「利足分12両 外に600文」とある。

のことから、修驗本来の勤めや行事にかかる日以外は、自らの畠倉作を済ませて他家の手伝いをすることで生活を支えていたとみることができる。

・嘉永5年（1852）「山畠御水銀封印継添小前連印帳」

小前の一員として永正院の名が入っている。これは畠倉村の「山畠水銀」のなかに、字違いの疑いが生じ、地主、役人が立ち合い改めたがわからず、谷村の御役所へ訴した結果誤りが判明、それぞれ写し取り、本帳はそのまま封印、以来は写しをもって用印を致す、という内容である。

ここでも、修驗永正院が村の小前百姓としての身分を村人に認められていたことを知る。

・嘉永 6 年 (1853) 「御尋ニ付改書上帳 常樂院 大坊」

両院弟子 番倉村 永正院 泰光 40 才

天保十三年 御通御礼相済

嘉永二酉年三月 御補任拾通金地頂載

院敷 東西 5 間 南北 6 間 御年貢地

この史料で、永正院が泰光という名で40才であることが判明した。この年に40才であることは、文化10年の生まれである。20才頃独立したと仮定して、文化、文政、天保期は、先代の永正院の時代である。さらに遡る享保から明和の時期は、永正院泰光の祖父の時代であると考えられる。榮成院から永正院への移りがどういう意味をもつかは不明である。30坪の院敷をもち、本山へ修行に行って、金地の法衣を得ていたことなどが知られる。

・安政 3 年 (1856) 「御貸附金借請証文」 永正院

番倉村の銘々が暮らし方に差し支え、利左衛門へ金30両を無心した。その借請証文の112人のなかに永正院の名があり、連印をしている。村人と協同協調の姿勢をとっていたことがみえる。

・安政 5 年 (1858) 「冥加止金割附小前請印帳」 無門 永正院

21 両の冥加止金にたいする割賦で、高門割になっている。

門割分 銀 20 貴 518 文

村門 119 軒

内 27 軒 寺 修驗 神主 濱門

新左衛門除之

残門 92 軒ニ割

1 軒ニ付 218 文

修驗は永正院泰光であり、名簿には「732文 無門 永正院」とある。割賦されていない者の部分は空白である。新左衛門は名主である。永正院は「無門」として免除されているが、732文を提出している。東陽寺は437文、神主因幡が65文であるから、永正院の732文は少なくなく、かなりの高持ちであったといえる。これで永正院が修驗として高い位置を村のなかで保持していたことを知る。

・安政 5 年 (1858) 「御尋ニ付改書上帳 番倉村 永正院」

聖護院官家

住心院殿御末下

甲州都留郡番倉村 永正院

泰光 45 才

同院附弟

大学 7 才

同院母

む免 74 才

同院妻

きく 40 才

同院娘

姫無 15 才

メ 5 人

一院舎 東西 8 間 南北 12 間 但シ御年貢地

一畠 3 石 4 斗 9 升 3 合 同断

天保拾三年寅七年

一御通御札大峯修行相済

嘉永二四年三月

一御補任拾通金柵地迄頂戴

安政元寅年二月

一夷狄退撫御祈禱之節參勤度數四峯

右御尋ニ付人別持高触頭以奥書奉書上候處相違無御座候以上

安政五年七月日

永正院 泰光

住心院殿

永正院泰光の家族構成と院敷、持高、経歴がこれでわかる。畠3石4斗9升3合は、畠倉村において、決して少ない石高ではない。年齢的にも充実した時期で、修験の執行と農業経営、さらには小前農民として精力的に活躍していたといえよう。

・文久4年(1864)

差上申一札之事

一御山内新宮面大被相成候處拙院就志願ニ今般再建仕度旨願之通御許容之上社務奉幣等迄御任被下難有奉存候然上者御境内見廻り社木ニ至る迄精々成木之儀丹誠致嚴重ニ守護可仕候尤堂社御用之節者御差支不相成様急度御返シ可申上候若又拙院交代之度新書認替差上可申候間此書面ヲ以テ御預被下候為後口一札差上置申處因而如件

文久四甲子年

正月日

畠倉村
額人 永正院 泰光

同村
引受人威徳寺 臨峯

同村
同寺檀中惣代

(略)

岩殿山
常樂院
大坊
両御役者中

岩殿山の山内にある新宮の前面が大破した。永正院が再建を願いでたところ、認可されたばかりでなく、新宮の社務、奉幣までまかされた。この上は、境内の見廻りは勿論社木の管理まで永正院がおこない、成木になるよう厳重に守護する。もっとも堂社が必要の際には差し支えなく返却し、もし永正院が交替する場合には、新しく書面を書き替え差し上げるというもので、常樂院・大坊と永正院との間の新宮殿に関する契約書である。

この種の資料は他に発見されていないので推定になるが、新宮殿の堂社および周辺の山林をふくめた管理運営を畠倉に居住する修験榮成院が担当し、七社権現堂の社務は前出の宝曆14年の「人別改帳」にみられる岩殿に居住する「大宝院」他の修験同行が担当していたものと考えられる。

時代が下るにつれ、畠倉の榮成院は永正院に代わって新宮を担当管理し、七社権現堂の方は大坊文書にみえる岩殿に住居をもつ「行宝院」「正寿院」「寿徳院」「岩本」等の修験者が担当し運営していたの

ではないだろうか。

・慶応4年(1868)「由緒書 永正院 泰光」

聖護院宮正院家
住心院殿御配下
甲州都留郡畠倉村
本山修驗 永正院 泰光

春日明神之下字官下

一院敷 86坪 東西18間 南北10間余

但シ年貢地

此反別合 2畝26歩

分米 3斗2升3合

板葺

一立家 間口豎8間 奥行5間

此内 本尊間2間8方

本尊

一本尊 不動明王 丈1尺7寸

(以下略)

この「由緒書」から、本山修驗泰光が畠倉の春日神社下の「宮の下」に院敷を構え、板葺の家に住み、不動明王を本尊として祀っていたこと、そして省略した後半部に、その支配地が西奥山村の遼能戸地区までおよんでいたことが知れる。

4. 郡内三十三番札所としての新宮

嘉永4年(1851)、畠倉村の井上清兵衛が郡内三十三番札所めぐりをした。その時の御詠歌集が残されている。郡内札所については、前出の羽田氏の著書に詳しいが、江戸時代に觀音信仰が興盛し、その流れのなかで新宮が二十三番札所として盛んに参詣されたであろうことは十分に考えられる。

井上清兵衛の御詠歌集では、山号は「岩殿 しんぐう山」となっているが、羽田氏の著書のなかでは「畠倉村 神宮」とある。地元の畠倉では「おしあんごう様」と呼んでいる。手前の橋は「神宮」橋で「じんぐう」である。七社権現の堂社に対して新宮、それが「おしあんごう様」に転化してきたのであろう。

二十番札所新宮の御詠歌は次の通りである。

昔よりたつとも志らぬ志んぐうの

たきの飛びきも三能里奈るらん

羽田氏の著書には、小形山の井上敏雄氏、小明見の舟久保兵右衛門氏、山梨県立図書館(後藤氏)所蔵の三首が紹介されているが、三首とも舟久保氏のものと同じである。昔からいつ建ったのかわからない新宮であるが、滝のひびきが導い觀音の教えにきこえることだ、というような意味であるが、新宮の歴史を象徴しているように思われる。

おわりに

少ない資料をもとに新宮洞穴について、そこに円通寺の七社権現の別院が置かれ、畠倉に住む修驗同行が管理していたことを、主として江戸後期の資料をもとに考察してみた。前述のように円通寺、七社権現についての研究が十分にされていないなかで、特にその別院については全く手つかずの現状である。この総合調査を機にさらに資料の発掘と研究の進展を望みたい。なお、新宮同穴の考古学調査については、第3編第4章第2節を参照されたい。

(井上 豊)

第8章 旧円通寺藏大般若經

第1節 経典の概要

現在、岩殿の真蔵院の保存庫に保管される大般若經は、かつては円通寺に伝来したものである。文化年間に編纂された『甲斐國志』(以下「国志」という)の段階では600巻が完存していたが(同書卷九〇)、明治維新の神仏分離等を経て円通寺は廃寺となり、一部散逸したものの、昭和44年には市の文化財に指定されている。山梨県史編纂室との合同調査及びその後の補足調査で確認したのは533巻である。

現存巻のうち、巻二六二から巻二七〇間の7巻は書写本で、残りの526巻が版本である。書写本は文明9年(1477)に慶久・禪珍等によって筆写されたもので、巻二六六に挟み込まれた付箋によれば、猿橋の童神に奪われた1箱分を補写したものという。「国志」にはそのような事情は記録されていないが、付箋に記された筆跡は近世後期頃と見られるから、「国志」編纂時にはこの童神伝説は成立していたものと思われる。1箱分の補写という表現を言葉どおりに解すれば、小経箱に納める10巻が書写本だったことになるから、現在失われている巻二六一・二六五・二六七も書写巻だったことになる。童神伝説成立の背景はわからないが、ある部分に集中して書写本が残っている特異性を一括して説明するために考えられたのであろうから、逆にいえば書写本がこの部分にしか残っていない反映ともみることができ、付箋のとおり10巻まとめて書写巻であった可能性は高い。

版本は、智感によって開版された、いわゆる「智感版」と呼ばれるものと、近江守渡佐々木氏頼により康暦元年(1379)に刊行されたとされる「崇永版」と呼ばれるものとから成る。版本の性格については後述することとして、ここではまず体裁に触れると、料紙は黄色に染めた精紙で、縦27.5cm・横11.5cm、折本仕立てである。表紙には「大般若波羅蜜多經卷第〇〇〇」の木版の外題を記した紙が貼付され、その下部に「岩殿山」との墨書きが記される。当初は全巻が同じ体裁だったはずで、残存巻においても異なる体裁のものは確認できないが(ただし、書写本はすべて表裏を欠き体裁は不明)、永年の使用による摩耗のため、既に外題を記した紙を失い、墨書きは判読不能までに磨滅したものも少なくない。ちなみに「岩殿山」の墨書き銘が確認できたのは333巻で、そのうち巻四七九には「岩殿山円通寺」とあった。経典には、袖と奥だけではなく行間に墨書きが見られるが、すべて円通寺に関わるもので、残存巻すべてに何らかの形で墨書きが確認できる。したがって、当初の600巻すべてに墨書きはなされていたものと考えてよいであろう。

第2節 円通寺への寄進とその後の伝来

本經に記される墨書きはすべて円通寺に関係するものである。それを年代順を追うことによって、寄進の事情を始めとして円通寺の歴史の一端を窺うことができる。以下、年代ごとに整理してみたい。

【応永6年の寄進】 奥書きに見える年号が大般若經の寄進時期とすれば、それは3期に分けてなされたことになる。最初の寄進は、応永6年(1399)6月、円通寺勸進聖順翁有辯知客によってである。順翁は僧・沙門とも表記されるが、円通寺住持と考えてよい。応永6年6月は經典を寄進した時と解せられるから、勸進行為はそれ以前からなさいたはずであるが、その始期・目的・極那等については何も語っておらず、不明とせざるを得ない。ただ一般的には、南北朝が合一して多少落ち着いた時代を迎えた時に相当していることに関係しているとみることもできよう。

順翁の墨書き内容は、「寺名+僧名+年号」で若干の単語の相違の他はほとんど変わらない。記載される巻は、

卷一七〇までの154巻のうちの152巻と卷二三〇である。前者のうち、記載されない卷一三五と卷一三九は末尾切れの可能性や破損が著しいことから、本末あった銘が欠落したと考えられる余地が高い。また、そうでないにしても順翁以外の人物が関与したことを示す記事はないから、卷一から卷一七〇までの経巻に関わったのは順翁であると考えてよいであろう。1巻だけ離れて卷二三〇に順翁の墨書のある理由はわからないが、卷一七〇までと何らかの事情による卷二三〇を加えた171巻の経典の寄進を順翁が担当したのである。これらの経典はいずれも智感版である。

では、なぜ中途半端な巻数の寄進をしたかである。推測によらざるを得ないが、寄進が勧進に基づいて行おうとしているのであるから、この時点までに全巻を整えるだけの経費が集まっていたことが当然考えられよう。にもかかわらず、部分的な購入に踏み切らざるを得なかつたのは、順翁が何らかの事情で勧進を続けることが困難になつた—その理由として第一に考えられるのは健康上の理由であるためではないだろうか。経典寄進の発願者であった彼は、部分的にでも自分の意志を遂げたかったのであろう。

【応永7年の寄進】 次は、応永7年9月の年紀を持つ明賢の墨書である。これも「寺名+僧名+年号」で、若干の単語と記載順序が異なるだけで、内容は各巻同じである。その肩書きは円通寺金剛仏子・勧進金剛仏子・律師・別当等とあるが、住持と記するものもあるから（卷五八一等）、順翁の跡を継いだことになろう。

この年紀を持つものは、卷一七一から卷五〇〇までに現存する290巻のうち、墨書の7巻及び末尾を欠く卷三〇一・四一二を除く281巻に見える。年紀欠の9巻はその理由が明らかだから、卷一七一～卷五〇〇の330巻のうち順翁が関与した卷二三〇を除いた329巻は、明賢が順翁に代つて主体的に関わり、約1年後に寄進をなしたものと考えるのが妥当であろう。

しかし、なぜ100巻を残して取り敢えず寄進した形を取つたのかが問題となるのは順翁の場合と同様だが、この場合は刊記の本版作製年月を検討することによって一応の想定はつく。智感版人般若經の智感の刊行は卷四三四の明徳3年（1392）2月を最後とし、その後を法龜が受け継ぐことになる。法龜の刊記を持つものは応永3年（1396）3月を始めとして、応永3年3巻・4年6巻・5年13巻・6年14巻と続き、卷四八三の応永7年5月を最後とする。最後の版本の作製は、明賢による経典寄進の9月より4カ月前に過ぎない。以下、卷五〇〇までの17巻には年紀・開版者は見えないが、明賢の墨書が寄進の実態を反映したものであれば、9月までに版刻・撰写が行われたはずであり、前年までのベースをみれば、その実行は相当きつかったものと思われる。明賢が急いだ理由はわからないものの、卷五〇〇までしか寄進できなかつたのは、版本の版刻が間に合わなかつたことに原因が求められよう。

【応永8年の寄進】 3回目の寄進となるのが卷五〇一以降の100巻分である。現存する89巻のうちの卷五四・五五を除く88巻及び「国志」記載の巻六〇〇に応永8年12月13日の年紀を持つ明賢の墨書がある。内容は「甲斐國鶴都岩殿円通寺住持明賢応永八年辛巳十二月十三日自近江佐々木下着」（卷五八一）と目的地まで記載したものが4点で、他は「僧名+寺名+年号」の後に「下着」の語を付しただけだが、意味するところは同じである。明賢はこの日近江国の佐々木から円通寺に下着したが、それは「摺下作單」（卷五八九）、「下着摺單」（卷六〇〇）とあるとおり、摺写した経典を伴つてであり、これによって円通寺の大般若經は全巻が調達されたことになる。そして、3日後の12月16日には大般若經に付き物の十六善神の画像が描かれ（卷五八六）、一式の法具として完成している。

明賢が行った近江国（滋賀県）の佐々木は、延暦寺領であった佐々木莊の意であろう。同莊は蒲生郡安土町付近にあった莊園で、宇多源氏佐々木氏の本拠である。佐々木氏は鎌倉・室町時代を通じて同國守護を歴任しており、応永8年当時の守護溝高は小脇（八日市市）に館を構えていた。明賢が佐々木莊のどこで手に入れたかわからないが、この地から運んできた経巻は、その開版者の名前から、崇水版と呼ばれる大般若經であったことがわかる。崇水は佐々木氏頃の法名で、溝高の父に当たり、佐々木莊で入手するに相応しい経

典であった。

500巻までの場合と異なり、自らが他団にまで行って別版を明賢が求めたのは、応永7年の寄進のところで説明したように、智感版の版刻を待っていたいのでは時間が掛かり過ぎる点にあったことは間違いない。しかし、急いで全巻の寄進を完了させなければならなかった事情については、記録されていない。

【応永16年の供養】既に失われた巻六〇〇の奥書によれば、応永16年(1409)閏3月25日に供養が行われたことがわかるが(国志)、人穀若経の寄進から7年余も経っているから、経典奉納に伴う供養でないことはいうまでもない。残念ながら奥書はその理由を記録しないが、通常であれば堂宇の落慶供養等に伴って執行されることが多い。この時期に大規模な修復工事が行われたのではなかろうか。

【文明9年の補写】概要で触れたように、文明9年(1477)6月から8月にかけて欠失した巻を慶久等が補写している。その目的は、慶久が自ら記すように「一生歎懐二生成弁」の仏果を得んがためという当時の写経の一般的功徳を願ってのものであった(巻二六二)。慶久は、自分の書写した経巻を円通寺に寄進したと記すところからすると、この時の写経の檀那(施主)であり、もう一人の押珍が寺僧として補写を主催したと考えることは許されるであろう。

【永正6年の唐紙新調】永正6年(1509)4月に新調した経箱に記された墨書が「国志」に載るが、現存する中では最古と見られる漆塗の小経箱(10巻を納めるもの)には、「三百内 勅二」と墨書きされるだけで年紀ではなく、当時のものかどうかわからない。なお、別に天保10年(1839)4月の墨書きのある小経箱もあるから、天保10年に新調した際、永正6年銘を持つ経箱は失われたと考えられよう。

【天文19年の転読】巻三六七の紙背に、桂林寺住持押興三栄叟元松が大權那小山田出羽守信有の病氣平癒のため、天文19年(1550)4月晦日から5月3日の4日間に亘ってこの經典を転読し、「当病早癒・転禍為祥」を祈ったとある。桂林寺は都留市金井にある臨濟宗妙心寺派の寺で、小山田出羽守富春を開基とする。本經と小山田氏との関係を伝える唯一の記述である。

【元文5年の經典改め】巻五九五に元文5年(1740)10月の日付で天下御用附改役人として高山・立花尚氏が記載され、巻二には二人の花押が載る。同年9月、青木昆陽は幕命により関東諸国の古書・文書等の調査を行っているから、本經もその調査の対象とされ、直接の担当者がその旨を記録したのであろう。

第3節 智感版大般若經について

經典のうち、明瞭に智感版とみられるのは巻一～巻四八三(現存数419巻一巻三及び書写本7巻を除く)である。このように称せられるのは、刊記に見える智感なる人物が「遍えに旦越を慕りて刊行」(巻二一九)を企て、「^ひに命じて板行」(巻二二〇)していることから、本經刊行の中心人物と考えられるからである。しかし、文和五年(1356)5月(巻二)から始まった開版は完成までには至らず、明徳3年(1392)2月(巻三四)を最後に智感の名は刊記から姿を消し、その後を法龜・法機が引き継いで刊行したものとされている。

この智感版については、吉沢義則『日本古刊書目』(昭和8)、『横浜市史料調査報告書』第一集(昭和22)所取の関靖氏による慶應寺大般若經調査報告、近藤喜博「中世武藏國に於ける典籍の開版」(『仏教史学』2号)、熊倉政男「智感版大般若經」(『金沢文庫研究』7巻8号)、貫達人「円覚寺藏大般若經刊記等に就て」(『金沢文庫研究』8巻2号～11号)、川瀬一馬「五山版の研究」(昭和45)等で紹介されているが、その所在が白山神社(東京都日出町)・慶應寺(横浜市)・金沢文庫(同前)・円覚寺(鎌倉市)・大山寺(伊勢原市)旧蔵等と関東にしか確認されないとところから、関東において開版されたものと考えられ、熊倉氏は「智岸比丘智感」(巻二一九)とあるところから、智感を鎌倉扇谷にあった智岸寺の僧と推定し、貫氏は法龜・法機が法の字を共有するところから円覚寺統灯庵の開祖大喜法忻の法系になる人物として解するなど、関係者が鎌倉

に縁のあるところから、同地が開版の有力候補地と目されてきた。

ところが、最近行われた奈良県の調査で、これとは全く異なった智感の刊記を持つものが確認された。それは御所市鷹神の高鷹神社が所蔵する大般若經である。以下、報告書の解説に従って特徴を述べれば、次のとおりである。

同社の経巻のうち卷一～卷二九が同一版だが、卷二十三・二十四にのみ刊記があつて、

大般若經王 諸佛所稱揚 我令發大願 運動化諸方 檀信施心感 印板文字彰

微誠導消滴 功用包大洋 傳共國家久 露凡聖濟 神明加保護 佛德致滋昌

多少助役類 福聚報無量 自界及塵剎 同照大智光

貞和三年丁亥月日幹縁沙門後敬誌 自同五年七月日沙門智敬誌 (卷二十三)

と智感の名が見えるが、経文だけを比較すれば、十輪寺(奈良市)・南明寺(同)・等区(桜井市)のものが同版であることが確認できた。高鷹神社の刊記は経文と字体が異なり、また、尾題と刊記の間に版本を継いだ痕跡があるから、高鷹神社の刊記は別に付加されたもので、本来この4種の大般若經は南北朝期に補刻された春日版であることが判明する。金沢文庫本と写真比較をすると、本文部分はまったく同版といえるから、「関東に流布している版本大般若經の一種である智感版は、春日版補刻本に版行の度ごとに、横越などの変化に応じて別種の刊記を付して摺写されたということができよう。」

從前智感により独自に開版されて関東に広まった地方版の版經として知られた智感版にとって、版本は南北朝期に補刻された春日版の転用であるとの指摘は重大である。とすれば、既存の版本に智感は文和5年から明徳3年まで36年にもわたって小刻みに刊記を継ぎしなければならなかつたのか等を始めとして智感版の開版システムそのものを問題にせざるを得ない。そのためには、諸経本の比較を踏まえての本格的検討を必要とするが、今はその時間的余裕がないので、とりあえず、智感版が既存版本の利用としたのでは理解できない一点を指摘するにとどめておき、後日を期したい。

その一点とは、旧円通寺本の刊記のない卷四八四～卷五〇〇にある。貫氏の紹介した典型的な智感版である圓覺寺本では、卷四八四是応永7年4月・卷四八五は同年5月と、この2巻は明賢の9月寄進に間に合う年紀を持つが、卷四八六・同年12月～卷五〇〇・応永17年8月と寄進以後の日付となっており、刊記どおり刊行されたとすれば、少なくとも卷四八六以降は智感版ではあり得ないことになる。もちろん、刊記は継本という考え方からすれば、刊木を継ぎ入れる余裕もないほど怠いで摺って明賢の要求に間に合わせた(円通寺本ができた)後、刊記を追加して摺刷して圓覺寺本ができたとも考えられないことはないが、版本の枚数を示す柱刻を見ると、卷四八三までの多くが十六まで十八を超えるものがなかったのに対し、卷四八五は廿三となり、以降廿を下回るものはないことからして、版が替っているとみて間違いない。版本が用意されていての刊記だけの補刻であれば、別版による印刷という事態が生ずることは考えられないであろう。

第4節 崇永版大般若經について

既述したように、崇永は佐々木(六角)氏頼の法名である。彼は幼くして近江守護になり、親応の擾乱の際一時その職を辞したが、まもなく復して応安3年(1370)に死ぬまでその地位にあった。崇永版と呼ばれるのは、卷六〇〇の刊記に「開板比丘義達 此經喜捨施入江州佐々木新八幡宮專為上翻四恩下資三有無辯法界廣大流通者 康暦元年己未八月七日 幹縁比丘勝源 願主當國大守菩薩戒弟子崇永」とあるからだが、康暦元年(1379)は崇永没後9年も経っていること等から、勝源の方を開版の中心人物と見る説もある。しかし、勝源は江州大澤寺に關係する僧侶であり、同寺は一族である京極政経が居住したという大善寺(水原寺町のことと思われるが、近くには氏頼が開基した永願寺・金剛寺(近江八幡市)・慈恩寺(安土町)があり、

佐々木氏の支配が強く及んだところであった。勝源が実質上の開版顧主だったにしても、刊行に篤信家であつた佐々木崇永の意思が関与した可能性がないわけではない。少なくとも守護佐々木家の庇護のもとになされたことは認められてよいであろう。この通常崇永版と呼ばれる大般若経の巻五〇・以降の次の表の20巻には開版者を示す刊記があるが、その有無を比較して見ると第12表のとおりである。

円通寺本は欠巻の2巻を除いて他の崇永版といわれる諸巻と開版者が重なっており、開版者を伴わない巻も型式が共通するから、巻五〇・以降が崇永版であることは間違いない。崇永版が近江国と深く繋がっていることは既述したとおりで、その意味で明賢が近江国佐々木から崇永版を入手したとみられる記述を残していることは、単に円通寺本の成立事情を物語るのみでなく、智盛版・崇永版の存在形態や版経の地方受容の問題を考える上で、興味深い視点を与えるものとして今後の検討が期待されるところである。

第12表 旧円通寺大般若経と崇永版大般若経の各巻開版者比較

巻数	開版者	円通寺	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
巻五一一	玄仙	○	○	無	○	○	○	○	○	○	○	○	○
巻五一二	源念	○	○	無	○	○	○	○	○	○	欠	○	×
巻五一三	崇祥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
巻五一四	源殊	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×
巻五一五	永顕	○	○	○	×	○	○	永源	○	×	○	欠	×
巻五一六	妙芳	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	欠	×
巻五一七	用光	○	○	○	×	○	○	×	○	○	○	○	×
巻五一八	崇祥	○	○	○	×	○	○	○	×	○	無	×	×
巻五三六	明意	○	○	○	○	○	妙意	○	○	○	無	×	欠
巻五三九	淨用	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×
巻五四四	道純	○	○	○	×	○	○	○	×	○	×	×	○
巻五五八	淨用	○	○	○	○	○	○	○	×	○	無	×	○
巻五七一	因造・道阿	○	○	○	×	○	○	無	○	○	無	○	×
巻五七三	淨印	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×	×	○
巻五七八	能阿弥	×	×	×	×	○	×	○	不明	○	×	×	×
巻五九九	彦二郎	○	○	○	×	○	○	○	○	彦三郎	無	○	×
巻五八〇	菩覺・聖西	○	○	○	×	○	○	○	○	○	無	×	無
巻五八一	菩覺・聖西	○	○	○	×	○	前覚	○	○	○	無	×	×
巻五九六	妙芳	○	○	○	○	○	○	×	×	×	無	○	○
巻六〇〇	義選	×	×	×	○	○	×	○	×	○	別	×	×
計		18	18	18	10	20	16	16	14	17	7	6	4

註

- (1) 文書からは円通寺へ着いてから摺ったように読み取れないこともないが、版本を買い取って現地で摺写するというのは不自然・不合理である。版本を携帯して帰国したと解するのが穩当であろう。
- (2) 奈良県教育委員会による県下一円にわたる大般若經調査によるもので、その成果は2冊の報告書にまとめられているが、高鶴神社は『奈良県大般若經調査報告書』（以下「奈良」と略す）・（平成4）に収録されている。
- (3) 卷二一四では、俊藏・智感にそれぞれ上人の称が付く。
- (4) 『滋賀県大般若波羅蜜多經調査報告書』（以下「滋賀」と略す）二（平成6）所収の樹下神社の解説。
- (5) 奈良・笠区の解説。
- (6) 滋賀県・奈良県の悉皆調査結果で卷五〇～卷六〇〇に確認できた崇永版との比較である。所蔵者は次のとおり。① 荒戸神社・入津市（滋賀二）、②引接寺・八日市市（滋賀一）、③野々宮神社・八日市市（滋賀一）、④樹下神社・滋賀町（滋賀二）、⑤淨福寺・甲南町（滋賀二）、⑥正禪寺・安土町（滋賀二）、⑦日枝神社・永源寺町（滋賀一）、⑧日吉神社・愛東町（滋賀一）、⑨醍醐寺・浅井町（滋賀二）、⑩五社神社・浅井町（滋賀一）、笠区・桜井市（奈良一）。
なお、表中の表示は、○=同一の開版者あり、×=欠巻或いは同版巻なし、無=同版者の刊記なし、不明=同版巻かどうか不明、欠=刊記部分欠損、人名=開版者名が異なる、別=開版者以外の刊記、を意味する。

なお、旧円通寺蔵大般若經刊記・墨書き一覧を別編第二章として掲載した。

（秋山 敏）

第9章 旧円通寺研究の考察

円通寺は『甲斐国志』をはじめ関係史料、とくに永正17年(1520)の七社権現の棟札によれば大同元年(806)に開創されたと伝えるが、大同元年から永正17年までの岩殿山の歴史については詳細なことは伝えていない。

『甲斐名勝志』、『甲斐叢記』等を見ると、「岩殿権現」「七社権現」「七社明神」と呼ばれた七社権現が中心で、円通寺はその別当寺である典型的な神仏習合寺院で、境内には觀音堂、三重塔、鐘楼、新宮、そして中世までは常樂坊の存在が明らかである。のちに大坊、真藏院が加えられ伽藍の林立をみるとともに、岩殿山全体が靈山としての尊嚴を保っていた。

現在真藏院の収蔵庫に保存されている七社権現像は15世紀初頭の作であるので、それ以前の円通寺の信仰の対象は觀音堂および新宮に安置されていた十一面觀音菩薩である。鈴木麻里子氏によれば両尊像は10世紀の作と12世紀ごろの作であるといわれるので、平安末から鎌倉期にかけて円通寺が存在したことが明らかである。中でも新宮は、院政期から鎌倉期にかけて全国的に盛んになった熊野信仰からきたもので、熊野三山の本宮、新宮、那智への信仰の中の新宮を勧請したものであるのでその形体は古く、十一面觀音は熊野三山の本地佛と考えられる。

渡辺洋子氏によれば岩殿山を紀州熊野三山に模して七社権現を祀る領域が「本宮」であり、別な岩窟を本拠とする新宮は「新宮」であり、円通寺伽藍のある三重塔が建つ麓の領域が熊野三山の青岸渡寺にみたて最も「那智」に近いイメージのもとにして、近世の再建を経て整備されたものではないかと推論されるが、その後の岩殿山の歴史を併せて考えると納得できるように思う。

円通寺には14世紀後半住持の順翁、明賢の代の大般若經六百卷(現在533巻北条忠氏所蔵)が伝わる。最後に經典を納めるのが応永8年(1401)12月13日で、転説用いる十六善神像圓もその3日後の同年12月16日に同寺に納めている。この時期に併せたように15世紀の初頭七社権現像が造営されている。それから、しばらくの間円通寺は熊野信仰の拠点として栄えたことが熊野文書などを通して散見することができる。

それから文明19年(1486)の聖護院道興の入峠である。道興は京都型護院門跡を相続し、同時に熊野三山の新熊野檢校職を兼帯し、園城寺長史をも兼ねるなど天台宗系修驗の最高の権力者であった。「廻国雜記」を見ると諸国を巡錫しているが、その多くの寺がその地方の熊野信仰の拠点を勤めていた寺院であった。

甲州にあっても、岩殿山七社権現、柏尾山大善寺をへて石和の市部の花藏坊に至り十日ほど滞在している。更に七覚山円楽寺、富士山北口の吉田におもむいている。この中で花藏坊はのちに天文18年(1549)に都留郡の檀那を熊野に導いた先達であったが、道興が甲州に滞在した寺院も熊野先達と関係が深かった。花藏坊滞在中、甲斐國守武田信昌が花藏坊を訪ねて歓待しているのも紀州熊野三社との関係を物語るものであり、武田氏や小山田氏が深く熊野信仰と関連をもった証左である。

延徳3年(1491)に、勝沼大善寺が7月15日の鳥居焼で用いた不動尊画像を修理しているが、その施主の中に岩殿山権少僧都明泉の名前が見えるが、円通寺と大善寺との本山系修驗としての深い関係を知ることができる。

円通寺が退避した時期は詳らかでないが、『甲斐国志』によると永正17年(1520)の棟札に上総国の住僧賢覚阿闍梨が領主となり円通寺の修理をおこなっており、小山田信有ら郡内衆が円通寺再建に奉加をしている。また円通寺所蔵であった大般若經の奥書に天文19年(1550)に郡主小山田信有の病氣平癒の祈願を都留市の桂林寺住職がおこなっていることから、この時期から円通寺は無住であったと推測できる。

このように永正17年円通寺は復興したが、住職の存在はみられず、常樂坊が岩殿山修驗を統率していた。史料として明らかになるのは天正18年(1590)に郡内領主であった鳥居彦右衛門元次が常樂院を岩殿山七社

権現その他の社領の別当職に任命していることである。

近世に入り、常楽坊は岩殿山の別当だけでなく、郡内地方の山伏の先達としても確固たる位置を築いていった。慶長12年（1607）、郡内領主島居成次が京都の勝仙院の依頼を受け領内の者が熊野参詣をする際はこれまでと同様に先達である常楽坊に届けるように命じている。

常楽坊明運が元和8年から寛永2年（1622～25）頃に没し、その跡職を明運の弟の小俣惣太夫の二人の間に継がせている。これが常楽院明賢・大坊明尊である。

永正17年（1520）に武田信玄が円通寺を修復するが、承応3年（1654）再び破損し、当郡主秋山富朝が修理をしているが、その棟札に常楽坊明賢・大坊明尊の名が見える。更に貞享2年（1685）に修理した棟札にも両者が並列して記されていた。

近世に入り本末制度が確立すると常楽坊・大坊が七社権現の別当となり、従来からの熊野詣は全国的に衰退していった。

また各地の修験を束ねてきた院家・甲州修験がとくにかかわった京都の勝仙院も熊野御師との関係を離れて聖護院を本山とする本末関係を確立した。また勝仙院は甲斐国内八代、山梨、巨摩三郡の山伏支配頭を元和8年（1622）に一宮村の大覺院を任せ、一方の都留郡の山伏支配頭に常楽院・大坊を任せ各郡の修験者を統轄した。このように中世から近世にかけて全国的に修験の様相が変わっていたのである。

更に江戸末期から明治維新にかけ、廢仏毀釈運動、神仏分離令が出され、それと平行して明治5年（1872）の修験の廃止の布告によって岩殿山圓通寺の本来の姿は全く消滅したのである。常楽院・大坊についても明治6年6月天台宗圓城寺末の僧侶として帰入することを勧められたが、両者とも固辞して明治8年1月廃寺となり帰俗したのである。その時常楽院の内庵で一宮町の慈眼寺末であった真藏院が岩殿に残り、現在まで岩殿山の法灯と文化財を継承してきたことにより岩殿山圓通寺の残影を見ることができるのである。

（清雲俊元）

第 4 編

第4編 岩殿山の自然

第1章 岩殿山の地形・地質

第1節 岩殿山の地形・地質的位置

1. 岩殿山の地形的位置

岩殿山が位置している日本列島は、深い海溝と高い山脈を有する起伏量の大きい環太平洋の代表的島弧の一つである。この日本列島の本州弧が太平洋側に弓型に張り出した地域に、伊豆・小笠原弧が真会（連鎖）の関係で接続している（第100図）。

この真会の真中に山梨県は位置することになる。これは、東西方向に細長く発達してきた古い日本列島に、南北方向の新しい弧・海溝系が斜交して発達したために形成された大地形である。このような地域であるから、地形の配列は、世界の中で最も複雑な様相を示している地域の一つである（第101・102図）。

日本列島を横断している糸魚川・静岡構造線の西方には、西南日本弧の東端としての日本アルプス（飛騨山脈、木曾山脈、赤石山脈）が位置している。これらの山脈は、西南日本弧の一般的の方向である東北東-西南西方向から山梨県の近くになると北東ないし北方向に山系の延びを変えている。しかも、伊豆・小笠原弧の特性である雁行配列を示している。

また、山梨県北西部の関東山地は、東北日本弧の特性である南北方向から山梨近くになり東西方向に山系の延びをかえている。両弧は山梨県で八の字型でつながっているのである。

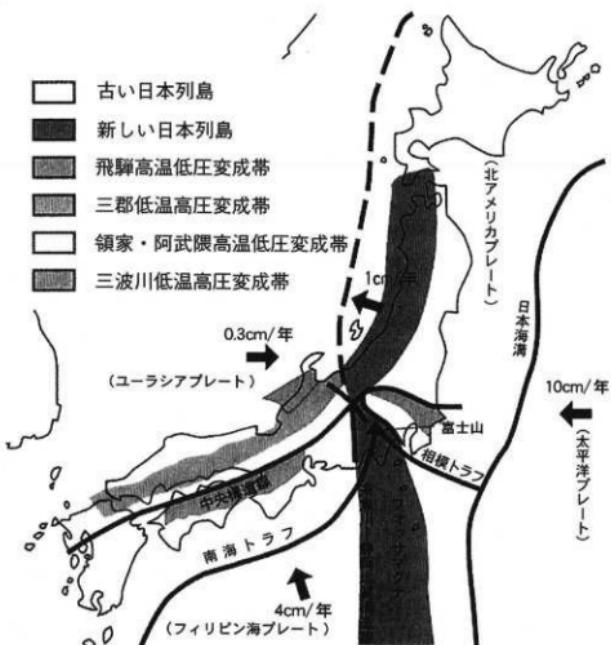
一方、富士山周辺も、東北東-西南西方向の御坂山地が甲府盆地南方において南北方向の天子山地に折れ曲がってつながっている。地形的には一見伊豆半島を取り囲むような八の字型に山系が連なっている。この八の字の真中を裂くように北西-東南方向に八ヶ岳・富士山が位置し、大きな火山の山麓を広がらせている。さらに、中心部に三角形の甲府盆地が位置しているのである。山梨はちょうど古代ローマの円形コロシアムのように、外側から高山・中山・低山の山地、丘陵、低地と中心部に向かって漸次高度を減じているのである（第103・104図）。

山梨県の大局的地形的区分は第105図に示すとおりである。2000~3000m級の高い山地は山梨県最西部の県境、赤石山地、最北部の県境、秩父山地地域であり、1000~2000m級の山地は甲府盆地の北方、北山山地、西方の巨摩山地、南方の御坂山地、山梨県東部の道志山地、秋山山地、それに富士川沿いの身延山地、天子山地地域である。北西には八ヶ岳の火山と山麓地、南東には富士山の火山と山麓地地域があり、甲府盆地西端と東端には海拔400mの丘陵性台地が存在している。

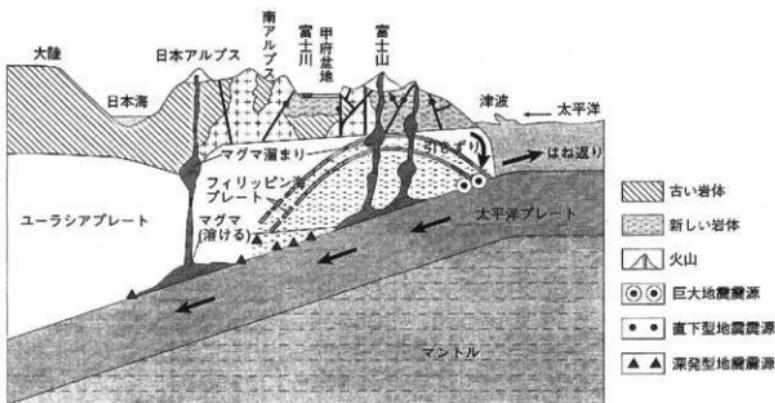
水系としては富士川水系（釜無川、笛吹川など）、相模川水系（桂川、道志川、秋山川など）、多摩川水系（丹波川、小菅川など）の三大水系に山梨県の水系は分類することができる。これらの河川の河岸には多くの河岸段丘が広がっている。



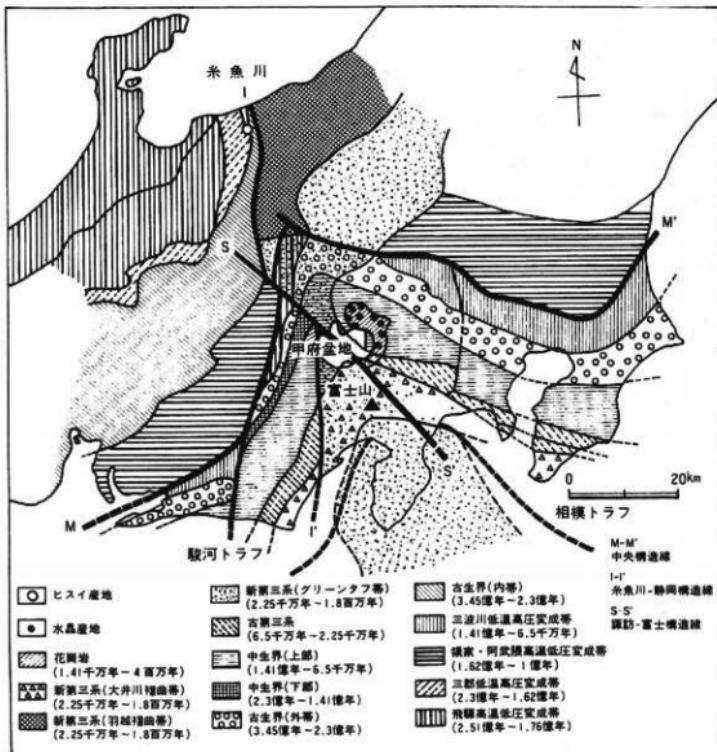
第100図 日本列島の島弧会合



第101図 古い日本列島に重なる新しい日本列島とプレート (1987・田中収)



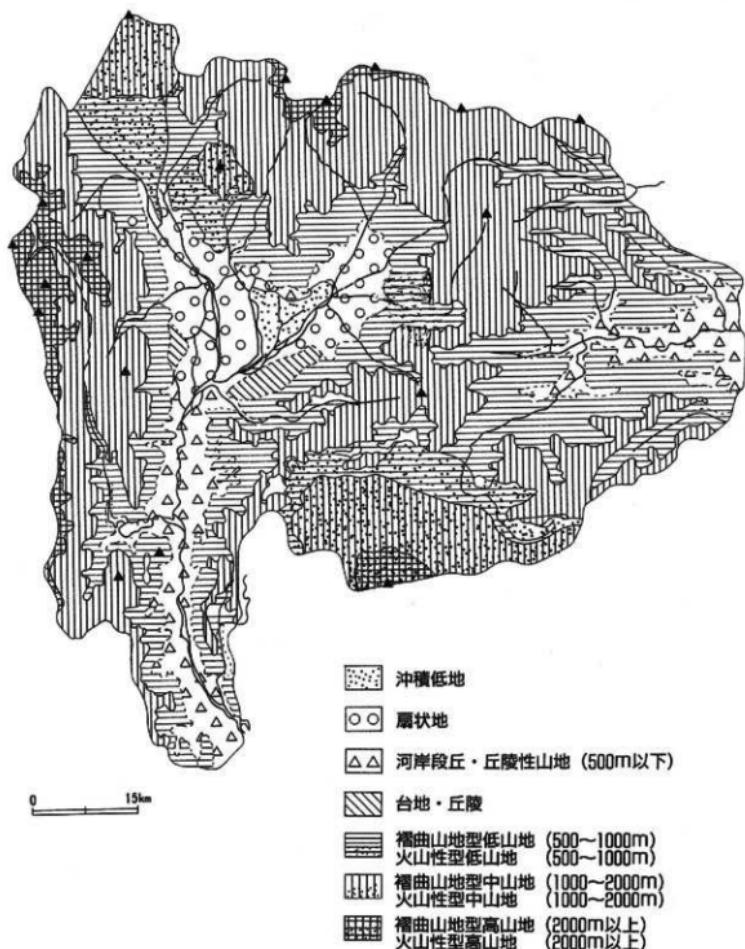
第102図 日本列島中央部におけるプレートと地震・火山概念図 (1982・田中収)



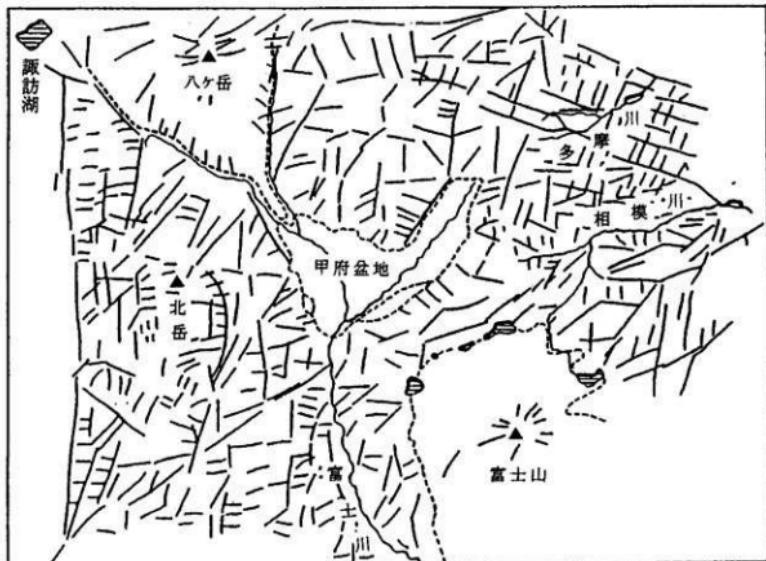
第103図 山梨県周辺の地質構造図 (日本地質構造図 (地質調査所) 修正加筆 1979・田中収)



第104図 日本列島中央部と富士山
(アーツ衛星写真)



第105図 山梨県地形区分図 (1987・田中収)



第106図 山梨県リニアメント（1982・田中収）

リニアメント（線状模様）から見た地形の特性は、第106図で分かるように西部地域は、連続しているリニアメントとして南北方向、北北東方向、北東方向、北西方向が卓越しており、北部、北東部地域は、西北西、北北東方向が卓越している。南東地域は、東北東方向が卓越している。八ヶ岳と富士山は、放射状リニアメントが卓越している。リニアメントからは、山梨西部、山梨北東部、山梨南東部、八ヶ岳、富士山、甲府盆地の6地域に分類することができる。このような地形の特性を有する山梨県の東部地域、関東山地と道志、秋山山地の境界部、相模川水系、桂川の北側に岩殿山は位置し、景観的には北側に秩父多摩甲斐国立公園の関東山地の連山、南に道志、秋山、丹沢の山地、南西に御坂山地を望み、富士山麓から北東流する桂川谷の南西奥には美しい火山地形を有する富士山が望まれるという景観地形を有している。

2. 岩殿山の地質的位置

岩殿山が位置する日本列島は、大局的にはほぼ平行に太平洋側に発達してきた秋吉、佐川、四万十、瀬戸内川の古い造山帯（東西方向）に、新しい造山帯としての端穂—フォッサマグナの褶曲帯（南北方向）が斜交関係で重なっている。このフォッサマグナ地域の要に山梨県は位置している。山梨県は古い構造と新しい構造が斜交している、地質構造上きわめて複雑な地域である。しかも、古い構造が北に凸に曲げられ、八の字型の構造をなしている中心部を南北に切るようにして新第三系の新しい堆積物が分布をしている。

山梨県で最も古い時代の地層は、三波川—秩父—三宝山帯の地層で、今から3億6000万～1億4000万年くらい前の古生代石炭紀から中生代ジュラ紀ころまでの付加帯としての堆積物である。南アルプスの北端、山梨県北西、権現山付近に北東走向の構造で分布する地層と、関東山地の山梨県北東端、雲取山付近に北西走向の構造で分布する地層がある。いずれも、海成の石灰岩、粘板岩、砂岩などの岩石からなる地層である。この地層の内側（山梨県側）は、今から1億4000万～6400万年ぐらいう前の中生界白亜系からなる付加帯とし

ての四万十帯である。三波川－秩父－三宝山帯とは、仏像線という地質構造線で境されている。南アルプス、赤石山地の四万十帯は、北岳を中心とする北西走向の複背斜構造を中心に分布している。

北岳は、背斜構造の中心軸だけに、より下位層の石灰岩、チャート、輝緑凝灰岩、砂岩、粘板岩からなりたっている。関東山地の四万十帯は、丹波川を中心に北西走向の構造で地層が分布している。岩相は、赤石山地の四万十帯の地層と同一である。四万十帯のさらに内側には、今から6400万～2400万年ぐらい前の新生界古第三系の付加帶としての瀬戸川帯が分布している。赤石山地の瀬戸川層群は、大きな断層線である篠山構造線と糸魚川・静岡構造線の間に挟まれた早川に沿った地域に分布している。南北走向でスレート劈開のきわめてよく発達する粘板岩、砂岩からなるのが岩相の特徴である。

関東山地の瀬戸川帯は、小仏層群と呼ばれている地層からなる。五日市一川上構造線と藤ノ木愛川複合断層系に挟まれた地域、大月市北方に広く分布している。東西ないし西北西走向の構造が卓越しており、輝緑凝灰岩などを挟む砂岩、粘板岩などの岩相よりなっている層群である。新しい日本列島の構造を象徴する地層は、県の西部を南北に走っている小瀬沢・静岡地質構造線（糸魚川・静岡構造線南部）より東側および県の東部を東西に走っている藤ノ木愛川複合断層系南側に広く分布している。

- ① 小瀬沢・静岡構造線と巨摩断層群（甲府盆地の西端を南北方向に走る断層群）に挟まれている巨摩山地、身延山地
- ② 小瀬沢・静岡構造線と釜無川断層群（塩尻－吉崎構造線）の間に挟まれている中山山地、甘利山地域
- ③ 甲府盆地東南に広く分布する御坂山地
- ④ 甲府盆地北方の北山山地
- ⑤ 藤ノ木愛川複合断層系より南の秋山、道志山地などはいずれも今から2400万～500万年ぐらい前の塩基性～酸性の海底火山を中心とした堆積物である御坂層群からなっている

これらの御坂層群の構造は、小瀬沢・静岡構造線近くで一部南北方向に近い構造を示す所があるが、基本的には東北東走向の構造が卓越している。

山梨県東部の桂川に沿った地域と富士川谷に沿った地域には、御坂層群より上位の今から1000万年ぐらい前の新しい中新世後期から鮮新世の時代の礫岩、砂岩、泥岩などの岩相からなる地層が分布している。この地層は、山梨県で最も豊富に化石を含んでいる。クジラの骨やサメの歯、カキ、二枚貝、貝巻、ウニなどの動物化石のほか、陸化の時代に移るので植物化石も含まれている地域もある。富士川谷



第107図 岩殿山

は、東北東走向の褶曲軸のほかに南北走向、北西走向の褶曲軸も発達している。また、南北走向系の衝上断層や、北東走向右ずれ、北西走向左ずれの共役系の断層も発達し複雑な構造を示している。

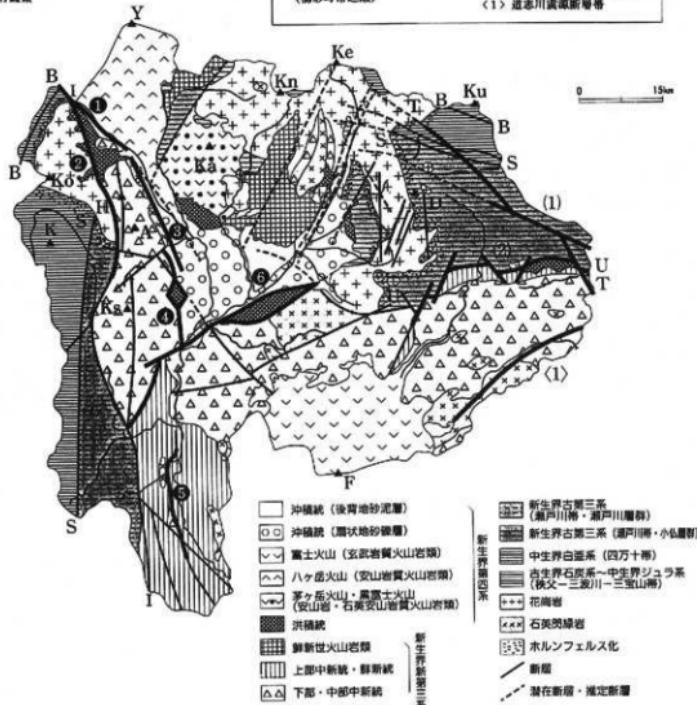
桂川地域では、東西走向の上野原衝上断層を切るような北東走向左ずれ、北西走向右ずれ共役断層が発達するほか、道志川断層のような東北東走向の断層系も発達している。深成岩類は、新第三紀に貫入した酸性深成岩類の花崗岩、石英閃綠岩が、甲斐駒ヶ岳、鳳凰山、釜無川右岸、金峰山、甲武信ヶ岳、笠取山、大菩薩西方、芦川上流、御嶽昇仙峠、丹沢山地に広く分布している。

年代測定値は、1400万～400万年の間の結果がでている。大菩薩嶺西方に南北方向に細長く分布する花崗岩体は東西構造の四万十帯、瀬戸川帯に直交する形で分布し、しかも東縁と西縁が調和的な境界線を示し、南北方向の裂け目に沿って貫入したことを示唆するような形態を示している。また、この花崗岩体の中に貫入

Y 八ヶ岳火山 B-B 仏像縫造
 K 北岳 S-S (北富士山一川口山構造)
 F 富士火山 I-I 条魚川一静岡複合構造線
 H 道志山 U-U 藩ノ木受川複合構造線
 Ko 甲斐駒ヶ岳 T-T 駒川断層
 A 甘利山
 Ks 御影山
 Ka 箸ヶ岳火山
 Ka 金峰山
 Ke 甲武駒ヶ岳
 Ku 雲取山
 D 大菩薩嶺

●山梨県の主な活断層●

- 福生小瀬構造線第四紀断層群
(北巨摩・豪河川沿い)
=横ずれ水平断層型
- 小瀬沢静岡構造線北端第四紀断層
(甲斐駒ヶ岳東麓)
- 豪河川第四紀断層群
(道志市・甘利山東麓)
- 市之瀬台地第四紀断層群
(御影町市之瀬)
- 富士川第四紀断層群
(中富川町・身延町)
=曾根丘陵第四紀断層群
(中道町・曾根丘陵)
※②~⑤は逆断層型
※カッコ内は断層の主な地域
- (1) 駒川断層破碎带
(2) 藩ノ木受川複合断層破碎带
(1) 道志川震源断層群



第108図 山梨県地質図 (1987・田中収)

している安山岩類の岩脈群も大局的に南北方向が卓越し、安山岩貫入時南北走向の裂け目が発達するような応力場であったことを暗示している。この花崗岩体の周辺部に熱変成によって形成されたホルンフェルスがよく発達している。今から170万年前以降の新生界第四系としては甲府盆地に1000m以上に達する厚い堆積物がある。

第四紀火山岩類としては、甲府北山山地に約100万年前に活動した石英安山岩類の黒富士火山を中心とする甲府北山火山群、北西に広大な山麓を有する20万～50万年前に活動した老年期の安山岩質の南八ヶ岳火山群、南東に数万年前から活動している青年期の雄大な成層火山、日本の象徴玄武岩質の富士火山がある。

岩殿山は、このような地質的特性を有する山梨県の東側、関東山地の小仏層南端にある上野原街上断層南方を東西走向に発達する新第三系鮮新統地域に地質的位置している（第108図）。

第2節 岩殿山の地形・地質

1. 岩殿山の地形

岩殿山は、褶曲山地型高山地（標高2000m以上）を一部含む褶曲山地型中山地（標高1000～2000m）から形成されている秩父多摩甲斐国立公園の関東山地と、褶曲山地型中山地を一部含む褶曲山地型低山地（標高500～1000m）から形成されている丹沢山地、道志・秋山山地、御坂山地の地形的境界部に位置している。また、岩殿山（標高634m）は、桂川渓谷に沿った標高300m前後の低い平坦な段丘地形帶の中に、全体として傾斜30度以上の傾斜部の多い山として一際聳え立ち、南斜面は垂直の一枚岩絶壁をなしている小さな名山である（第110・111図）。



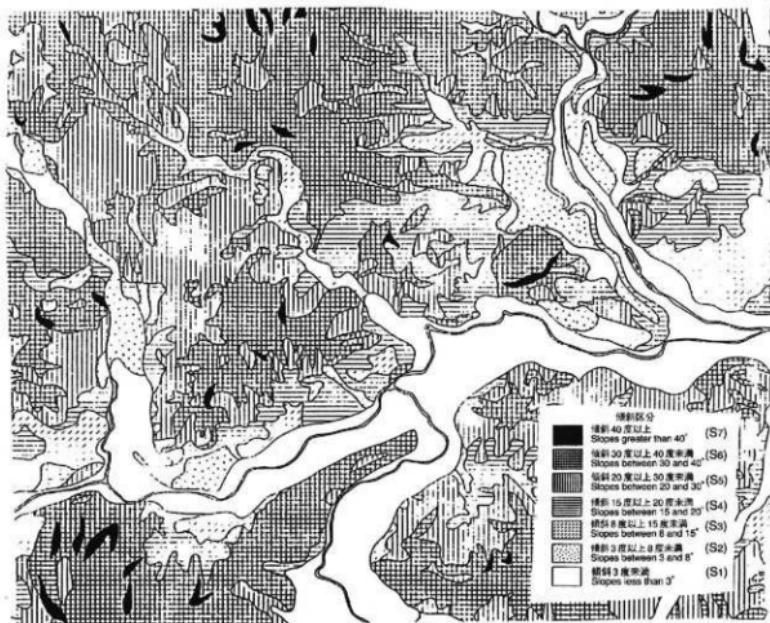
第109図 岩殿山縦岩部の急崖

大岩壁には東方に緩く傾斜する數本の筋が認められるが、これは礫岩層の地層に調和的な断裂に沿って風化が進み草木が生育している縞模様である。礫岩層に沿って大きなブロックとして滑落し、大岩壁を作ったのである。

地形区分的には山頂平坦面内至緩傾斜部が東西方向に発達しており、南側は大岩壁部と急傾斜部が発達し、山麓部に若干の中傾斜部が認められる。北側は中傾斜山腹部が全体として発達しており、西側及び東側に小岩壁部が発達している（第112図）。

2. 岩殿山の地質

岩殿山は、中腹から山頂部にかけて今から500万～600万年前に浅海に堆積した円い礫と、小さな石英粒の多い砂とからなる岩殿山縦岩層から構成されている。縦岩の基質部（セメントとして縦同志をくっつけている部分）は細かい砂であるが、数百万年の間に次第に固化され極めて固くなっている。縦は、美しい円礫である。川の流れや海の波で研磨されている。縦種から推定すると、北方の関東山地と南方の丹沢山地から運ばれてきていることが推定される。しかも、岩殿山縦岩層の下部（古い方）の縦種は北の関東山地のものが多く、上部（新しい方）の縦種は南の丹沢山地のものが多い。先に関東山地の方が隆起していた可能性が高いと考えられる。山麓部は、岩殿山縦岩層が堆積する前の浅い海、一部火山島のような陸上で火山活動によって形成された黒っぽい色の玄武岩、灰色の安山岩等の熔岩や火山灰、火山砂礫の固まった凝灰岩、凝灰角礫岩等で構成されている。さらに下部は、黄色っぽい石英安山岩質の熔岩や凝灰岩、凝灰角礫岩等の岩相（岩の顔つき）で形成されている。桂川右岸には、岩殿山縦岩が古い桂川によって浸食され、削り取られ、下位



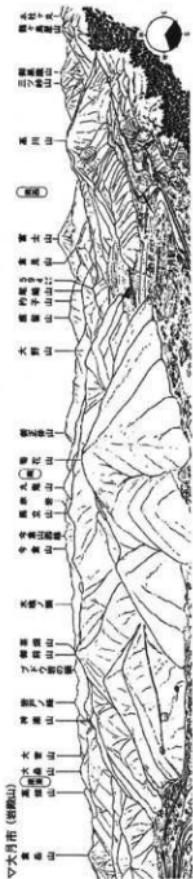
第110図 岩殿山周辺傾斜分布図（1987・山梨県）



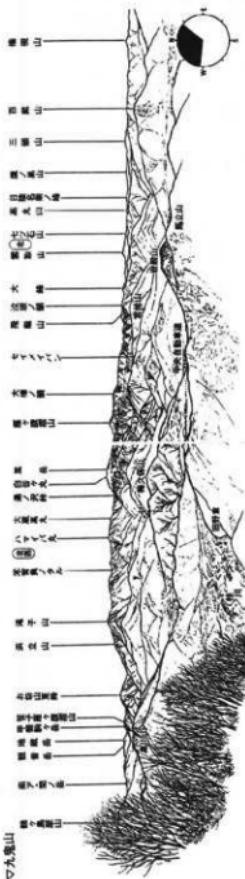
第111図 岩殿山周辺水系（1987・山梨県）



第112図 岩殿山地形区分図



第113図 岩殿山からの展望（景観現況）（1995・田代博）



第114図 九鬼山から岩殿山周辺を望む（景観現況）（1995・藤本・美



第115図 岩殿山東方景観現況
左方：古期日本列島岩体、
右方：新期日本列島岩体、
境界部：藤ノ木愛川複合構造

の地層であった、少し傾動している黄褐色の石英安山岩質の地層の上に直接8000万年前に流下してきた猿橋熔岩が水平に重なっている。さらに、南の林宝山付近一帯は700万～1000万年前の古い海底火山の堆積物から形成されている。

林宝山の中には、菊化石と呼ばれる石灰岩のレンズ状の地層が挟まれており、かつての火山等の周りのサンゴ礁であったことを物語っている。

岩殿山周辺の地殻は、ここ数百万年の間、南北方向を中心とした地殻への縫合が著しく、時には岩体が破壊

され、断層という地殻の傷が無数に入っている。そのために、中央道の構造性地滑りの発生や岩殿山の大岩壁ができているのである（第116図）。

3. 岩殿山周辺における地質構造の発達

岩殿山周辺の構造発達史は、まず、1500万年前後に亘って南方において海底火山によって形作られた丹沢島が次第に北上し、古い日本列島の関東山地との間に数百万年前頃、上野原、岩殿山、西桂の古桂川海峡、身延・中富の古富士川海峡にかけて形成されたチャンネル（海底谷）に厚い疊岩層を堆積し、古桂川海峡のチャンネルは西の身延の方に向かって深くなり、岩殿山の方から礫を供給していき、その後丹沢島と関東山地は衝突し接合したと考えられる。

その後さらに、伊豆がフィリピン海プレートに乗って移動してきて、約数十万年前に丹沢南部に衝突したと推定される（第117図・118図・123図～125図）。

第3節 岩殿山周辺の自然遺産と自然災害

1. 地球科学的自然遺産としての高月橋の断層鏡肌・断層条線（擦痕）

岩殿山の下に位置する高月橋の北端、西側手すりの直下に岩盤が認められる。

この岩盤には $70 \times 80\text{cm}$ の平坦な面が垂直に認められ、面は鏡の様に磨かれている。これは、断層によつて形成された断層面である。しかも面には、 $N30^\circ E$ 、 $85^\circ E$ の面に、 $11^\circ N$ にブランジしている条線が著しく発達している。これは、断層運動の時に形成された断層面をこすった条線である。条線のつき方から、水平断層の可能性が高い。

一方、高月橋北端の東側手すりの直下には縦長の鏡肌面が認められ、 $N32^\circ W$ 、 $80^\circ W$ の面に、 $10^\circ N$ にブランジした条線が数多く認められる。最終の断層の動きは水平断層の可能性が高い。

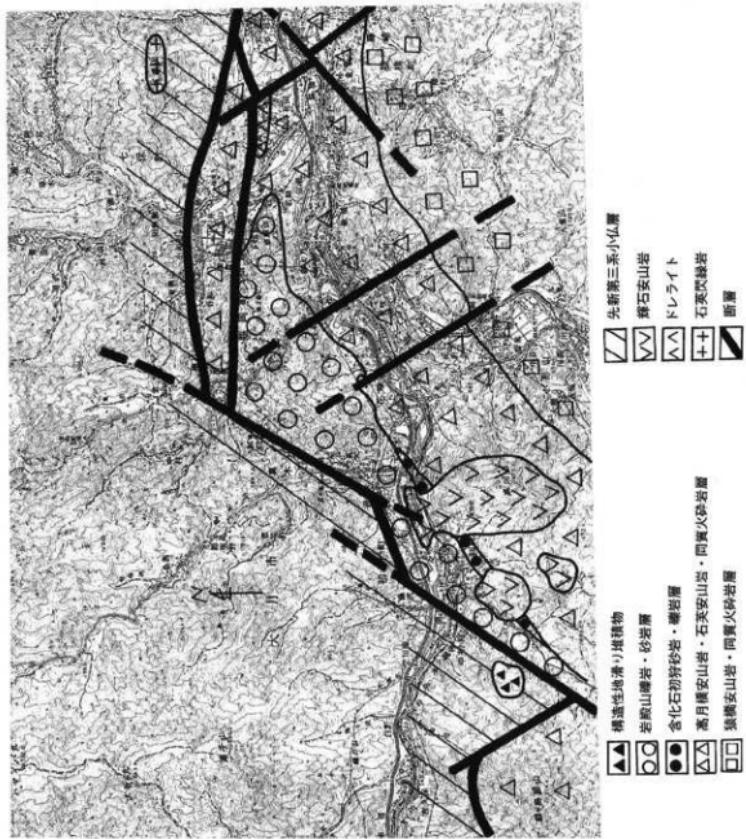
断層面の鏡肌と条線を示すこの露頭は、大地の変動を示す優れた地球科学的自然遺産である。

2. 地球科学的自然遺産としての高月橋・桂川河岸の不整合露頭

岩殿山の屏風岩直下には、桂川渓谷の美しい景観を有する高月橋がある。この橋の西方、桂川河床に下ると、桂川が侵食により曲流しているやや広い河原が認められる。

この河原から東方の桂川対岸を望むと、桂川の攻撃斜面鋪が水の強い侵食により岩盤の壁になっている大露頭を眺めることができる。

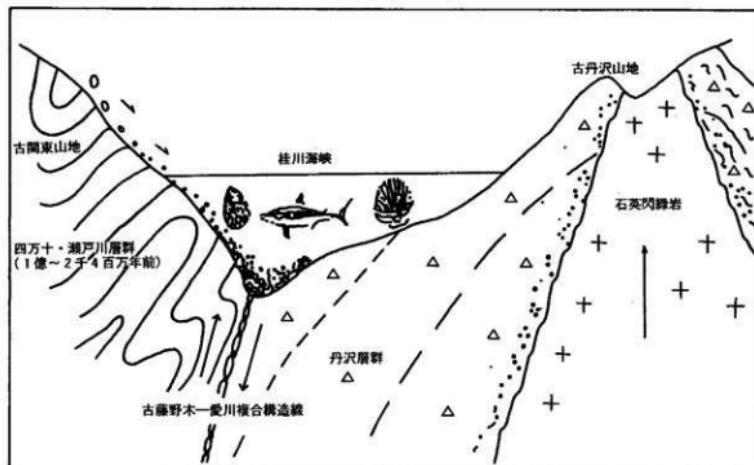
よく観察すると、岩相（岩の顔つき）が異なる上と下の地層に分かれている。下の方はやや北側（岩殿山）に傾斜している黄褐色の岩石の地層からなっている。上の方は最上部と最下部がブロック状、中央部は柱のような全体として黒っぽい岩石の地層が認められる。下の層は今から1200万年ぐらい前の海底火山の激



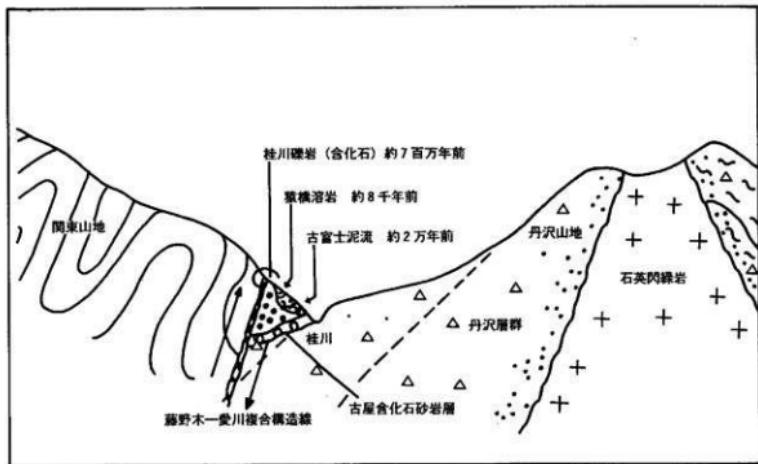
第116図 岩殿山付近地質図

時代			絶対年代 (万年前)	地層名		
新 生 代	第 四 期	現 世	1— 170 200 300 400 500 600 700 800 900	現河床・土石流堆積物層 新富士火山溶岩層 ローム層 古富士火山泥流層 旧土石流堆積物層 旧河岸段丘堆積物層		
				鶴川疊岩層		
		新 鮮 世		桂川疊岩層〔岩殿山疊岩〕		
				古屋含化石砂岩層 (リニア化石)		
				足和田山(三ツ峰)疊岩層 河口湖安山岩質溶岩・火碎岩層		
	第 三 期	中新 世 中期	1000 1100 1200 1300 1400 1500 1600 1700 1800 1900 2000 2100 2200 2300 2400 2500 2600	十二ヶ岳石英安山岩質 火成碎屑岩層		
				高秋玄武岩・同質火碎岩層		
				勝坂泥岩層		
				古閑川塩基性火山 岩質溶岩・火碎岩層		
				藤ノ木愛川複合構造線	(丹沢層群)	
	古 第 三 紀	新 新 世		小佛層(硬砂岩、粘板岩、チャート、輝緑凝灰岩)		

第13表 岩殿山周辺層序表



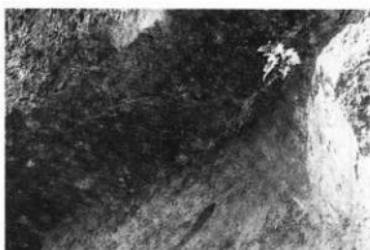
第117図 中新世後期の大月付近の地質断面概念図



第118図 現在の大月付近の地質断面概念図



第119図 岩殿山礫岩、数百万年前の古桂川海峡堆積物（関東山地より供給されている粘板岩・砂岩・輝緑凝灰岩・ホルンフェルス等の円錐と砂の固結岩）



第120図 岩殿山礫岩中の共役断層
N10°E、80°E、78° N ブランジ、左ズレ
N50°W、58° SW、18° N ブランジ、右ズレ



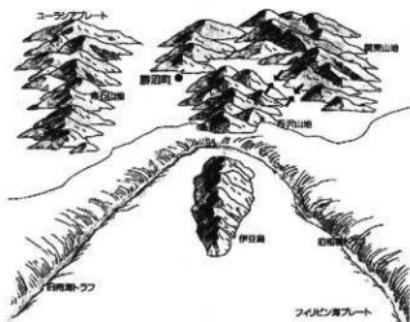
第121図 岩殿山礫岩中の地殻変動圧力による礫の変形、断裂繊



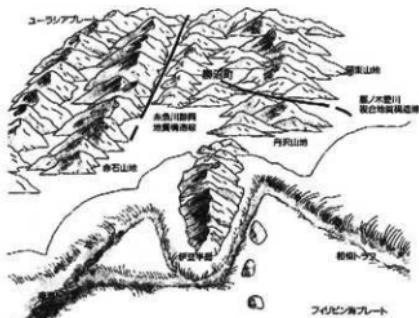
第122図 岩殿山直下、石英安山岩と礫岩の転石



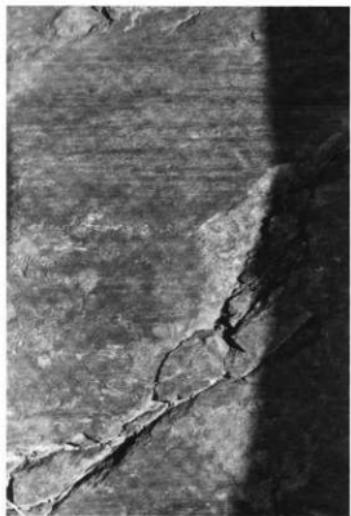
第123図 1000万年前の大月付近古地理



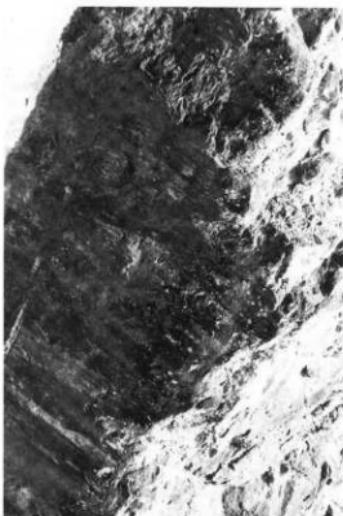
第124図 500万年前の大月付近古地理



第125図 50万年前の大月付近古地理



第126図 高月橋（岩殿山直下）西の断層鏡肌と条線



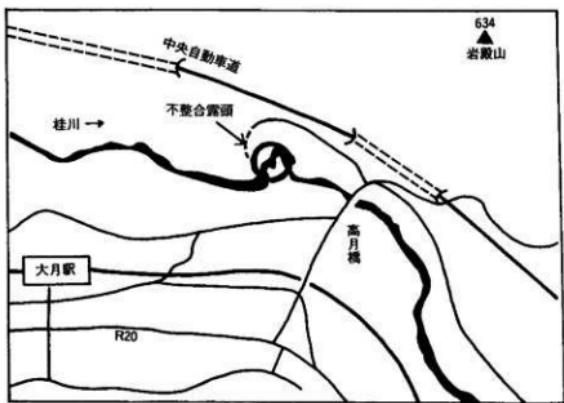
第127図 高月橋東の断層鏡肌と条線



第128図 不整合



第129図 下部・御坂層群石英安山岩（約1千
万年前）、上部・富士火山猿橋溶岩流
(約8千年前)



第130図 桂川河岸不整合露頭位置図



第131図 桂川河岸の不整合露頭

しい時代の堆積物で、御坂、道志、秋山山地等に広がる御坂層群上部層の「一ヶ岳石英安山岩質火成碎屑岩層の凝灰角砾岩（火山灰が固まつた岩石）である。上の地層は、今から8000年ぐらい前に古桂川谷に沿つて藤崎まで流れ下つて固結した新富士火山古期の猿橋溶岩流で、岩石名は玄武岩である。

上の地層と下の地層の境界は凹凸に富んでいるが、これは1200万年前に水平に海に堆積した石英安山岩層がその後の地殻変動により北側に傾き、古桂川により岩盤が削られ、凹凸の面の上に猿橋溶岩流が流れたのである（第130図・131図）。

このように、時代の大きく異なる地層が接している現象を不整合と呼ぶ。高月橋の不整合は教科書的な貴重な不整合露頭である。

3. 岩殿山疊岩層（桂川疊岩層）下位層より産出し、天然記念物として山梨県より指定された化石群

本化石群は、古桂川海峽の浅海部に生息していた約700万年前の二枚貝や巻貝、ウニ等であり、産出した場所がリニア実験線高川トンネル西工区仮入口から約400メートルの地下深部であり、700万年ぶりに地上に表れた化石群である。長い年月、地表で晒されて風化されていないだけに極めて新鮮で、赤色の二枚貝は生きしく見えるほどである。

本地域、含化石古屋層を中心に産出した化石は、次のとくである。

- 1 Amussiopecten akiyamae Masuda
- 2 Amussiopecten iitomiensis Otuka
- 3 Chlamys kaneharai (Yokoyama)
- 4 Pecten sp.
- 5 Venericardia panda sp.
- 6 Anadara sp.
- 7 Cucullaea labiata granulossa Jonas
- 8 Mytilus grayanus Dunker
- 9 Paphia sp.
- 10 Clementia sp.
- 11 Notoacmaea concinna
- 12 Trbo sp.
- 13 Conus sp.
- 14 Siphonalia sp.
- 15 Neverita sp.
- 16 Fulgolaria sp.
- 17 Tonna Luteostoma
- 18 Beringius
- 19 Trochs maculatus
- 20 Haliotis
- 21 Atrina pectinata Japonica
- 22 Solen
- 23 Unbonium
- 24 Dentalium
- 25 Lucinoma

- 26 *Astryclipeus intiger* Yoshiwara
 27 *Echinolampas* Yoshiwara
 28 *Osrea grovistesto* Yokoyama
 29 *Carcharudon megalodon* Agassiz
 30 *Fagus crenato* Bume

また、今回、平成6年11月、天然記念物として山梨県より指定された化石は、下記の15種、37点である(図版14~17)。

動物化石

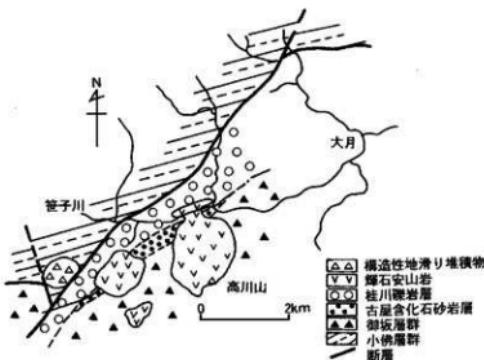
1	ツキヒガイ (月日貝)	<i>Amussiopecten</i> sp.	6点
2	ビノスガイ	<i>Mercoenaria</i> sp.	9点
3	ムカシカシパンウニ	<i>Astriclypeus</i> sp.	5点
4	マテガイ	<i>Solen</i> sp.	4点
5	バイ	<i>Babylonia</i> sp.	1点
6	チヂワバイ	<i>Ancistrolepis</i> sp.	1点
7	ムラサキイガイ	<i>Mytilus</i> sp.	1点
8	カキ	<i>Ostrea</i> sp.	1点
9	オウムガイ	<i>Aturia</i> sp.	1点
10	タケノコガイ	<i>Terebra</i> sp.	1点
11	サザエ	<i>Turbo</i> sp.	1点
12	アワビ	<i>Haliotis</i> sp.	1点
13	ツメタガイ	<i>Glassanlax</i> sp.	3点
植物化石			
14	ブナ	<i>Fagus</i> sp.	1点
15	生痕化石	<i>Lebennsspuren</i>	1点

1 月日貝化石 *Amussiopecten*

インド洋から太平洋の地域に、新生代第三紀中新世(今から2400万年~510万年前の時代)から現世にかけて、暖流系の海洋の水深10~100mの細砂泥底に住んでいた二枚貝で、現在日本産のツキヒ貝は10種確認されている。

現在のツキヒ貝は、殻は円盤状で10cmぐらいの大きさで左殻が濃い赤色で平滑であり、左右の殻の色のコントラストから月日貝の名前がついている。ホタテ貝やイタヤ貝の仲間で、イタヤガイ科(Pectinidae)の二枚貝である。

この細繰岩中の二枚貝化石は、600万



第132図 リニアトンネル産出化石群周辺地質図 (1994・田中恵)

年～800万年前の駿河湾から、現在の柱川谷付近を通って東京湾まで連なっていた水深2000m級の流れの早い暖流系の海峡（古柱川海峡）の海岸に住んでいて化石化したツキヒ貝化石群である。

山梨リニア実験線の高川西工区のトンネル掘削工事現場で1993年発見された主な月日貝化石は、下記の如くである。

- 1 - 1 月日貝化石は、殻幅132mm、殻高125mm、耳長63mm、頂角135度、肋数14の左殻
- 1 - 2 月日貝化石は、殻幅138mm、殻高121mm、耳長70mm、頂角135度、肋数15の左殻
- 1 - 3 月日貝化石は、殻幅133mm、殻高129mm、耳長65mm、頂角139度、肋数14の左殻
- 1 - 4 月日貝化石は、殻幅126mm、殻高125mm、耳長48mm、頂角135度、肋数13の左殻（図版なし）
- 1 - 5 月日貝化石は、殻幅135mm、殻高135mm、耳長70mm、頂角135度
- 1 - 6 月日貝化石は、殻幅110mm、殻高103mm、耳長52mm、頂角140度

2 ピノスガイ化石 *Mercenaria*

ハマグリ、アサリ、フスマガイ、スダレガイ等と同じ仲間のマルスダレガイ科 (*Veneridae*) の二枚貝である。

殻は厚く、卵形で4cm前後の貝である。

この疊質砂岩中のピノスガイ化石は、今から約600万～800万年前の古柱川海峡の瀬戸内海から水深20mの細砂底に住んでいて、化石となったと考えられる二枚貝である。

ピノスガイ化石の子孫である現在のピノスガイは、7cm前後の長さの貝で、東北、日本海以北の寒流域の浅い海に住み、灰白色で放射肋がなく、成長縦脈が細い板状で密である。幼い貝は全て雄であり、後に半数以上が雌になる。

現在は、おいしい貝として食用に利用されている。

リニアトンネル産出の主なピノスガイ化石は、下記の如くである。

- 2 - 1 ピノスガイ化石は、殻長71.7mm、殻高57.9mm、殻幅38.1mm
- 2 - 2 ピノスガイ化石は、殻長74mm、殻高57mm、殻幅(片)19mm
- 2 - 3 ピノスガイ化石は、殻長29mm、殻高30mm、殻幅(片)12mm
- 2 - 4 ピノスガイ化石は、殻長70mm、殻高52mm、殻幅(片)25mm
- 2 - 5 ピノスガイ化石は、殻長73mm、殻高59mm、殻幅(片)25mm
- 2 - 6 ピノスガイ化石は、殻長68mm、殻高55mm、殻幅(片)22mm
- 2 - 7 ピノスガイ化石は、殻長80mm、殻高63mm、殻幅(片)25mm
- 2 - 8 ピノスガイ化石は、殻長50mm、殻高54mm、殻幅(片)22mm
- 2 - 9 ピノスガイ化石は、殻長35mm、殻高38mm、殻幅(片)15mm

3 ムカシカシバンウニ化石 *Asticlypeus*

ヒトデやナマコと同じ棘皮動物のウニは、磯に住むものや砂泥に住むもの等があり、カシバン類は砂泥の中に潜って生活している。現世のムカシカシバンウニは殻径が140mmぐらいの大きさであり、房総半島、相模湾以南に分布している。茶褐色の円盤状で縫穴状の大きな5個の透かし穴を有している。

リニアトンネル産出の主なムカシカシバンウニ化石は、下記の如くである。

- 3 - 1 ムカシカシバンウニ化石は、長殻径124mm、短殻径116mm
- 3 - 2 ムカシカシバンウニ化石は、長殻径96mm、短殻径77mm
- 3 - 3 ムカシカシバンウニ化石は、長殻径119mm、短殻径105mm
- 3 - 4 ムカシカシバンウニ化石は、長殻径94mm、短殻径85mm
- 3 - 5 ムカシカシバンウニ化石は、長殻径125mm、短殻径120mm

4 マテガイ化石 *Solen*

マテガイ（馬刀貝）はマテガイ科（Solenidae）の貝であり、現世のマテガイは殻長90mm前後、北海道南部から九州まで生息している。潮間帯の砂や泥の底に深くもぐって住んでいる。マテガイ科（Solenidae）の日本産は15種である。

リニアトンネル産出の主なマテガイ化石は下記の如くである。

4-1 マテガイ化石は、殻径13mm

4-2 マテガイ化石は、殻径11mm

4-3 マテガイ化石は、殻径10mm

4-4 マテガイ化石は、殻径11mm

5 バイ化石 *Babyronia*

腹足綱・エゾバイ科（Buccinidae）の巻貝であり、現世のバイ貝は殻長60mm前後、北海道から九州まで生息している。水深10mmくらいの細紗底等に住み、水管を海底に出して潜入している肉食性の貝である。

6 チヂワバイ化石 *Ancistrolepis*

エゾバイ科の巻貝であり、現在のチヂワバイは殻高35～40mmであり、銚子以北の水深200～1000mの泥底に住んでいる。殻は短防錐形で強い螺肋がある。

7 ムラサキイガイ化石 *Mytilus*

殻長60mm前後、亜三角形で紫黒色を呈し、薄く、潮間帯の岩礁、海岸や岩や港湾の人工物等に足糸で大量に集団でついている貝である。イガイ科（Myliliidae）の貝で、ヨーロッパ等ではムール貝として食用としている。

リニアトンネル産出のムラサキイガイ化石は、殻長29mm、殻高64mm、殻幅(片)15mmの新鮮な化石である。

8 カキ化石 *Ostrea*

イタボガキ科（Ostreidae）の貝であり、殻表に細かい放射肋と松皮状の成長脈がある。

マガキ（Crassostriagias）、イタボガキ（Ostrea denselamellosa）は、新生代に入ってから出現したカキで食用に利用している。

9 オウムガイ化石 *Aturia*

イカやタコの仲間の軟体動物である。現在のオウムガイ類はたった6種類しかないが、古生代のオウムガイ類、中生代のアンモナイト等、古い地質時代が全盛期であるだけに生きた化石（Living fossil）と呼ばれている。現世のものはインド洋、西太平洋に棲んでおり、日本には死殻が漂着する。リニアトンネルのオウムガイ化石も死殻が運ばれてきて化石化したものと推定される。

10 タケノコガイ化石 *Terebra*

現世のタケノコガイは殻高80mm前後あり、紀伊半島以南に生息している。

リニアトンネル産のタケノコガイ化石は、殻高64mm、殻径8mmの化石である。

11 サザエ化石 *Turbo*

現世のサザエは、殻高80mm前後北海道南部から奄美まで生息している巻貝である。

リニアトンネル産のサザエ化石は殻高50mm、殻径54mmの新鮮な化石である。

12 アワビ化石 *Haliotis*

ミミガイ科（Haliotidae）の巻貝であり、現在ミミガイ科の日本産は9種ある。

メガイアワビは房総半島以南に、クロアワビは常磐以南の岩場の深場に住む。

リニアトンネル産のアワビ化石は殻長54mm、殻高48mmの化石である。

13 ツメタガイ化石 Giassanlax

タマガイ科 (Naticidae) の巻貝であり、現世のツメタガイは北海道以南の潮間帯下の細砂底に住む。

リニアトンネル産のツメタガイ化石は下記の如くである。

13-1 ツメタガイ化石は、殻径 25mm、殻高 24mm

13-2 ツメタガイ化石は、殻径 37mm、殻高 35mm

13-3 ツメタガイ化石は、殻径 32mm、殻高 21mm

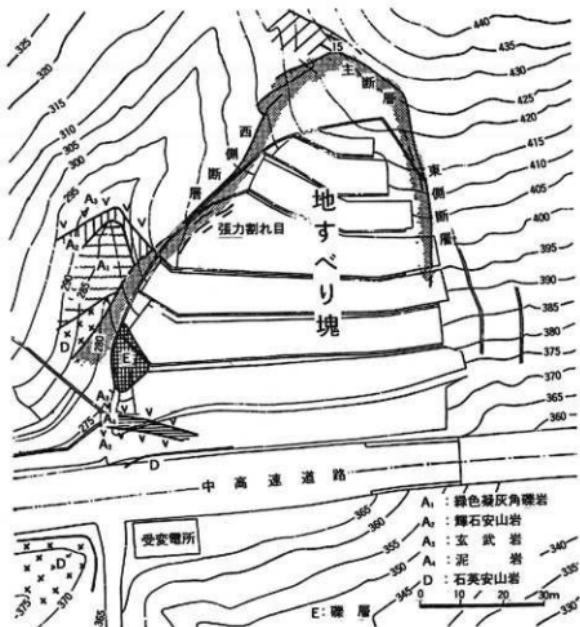
4. 自然災害としての岩殿山地滑り

昭和 47 年 3 月に中央高速道路の岩殿山南斜面で地滑りが発生した。

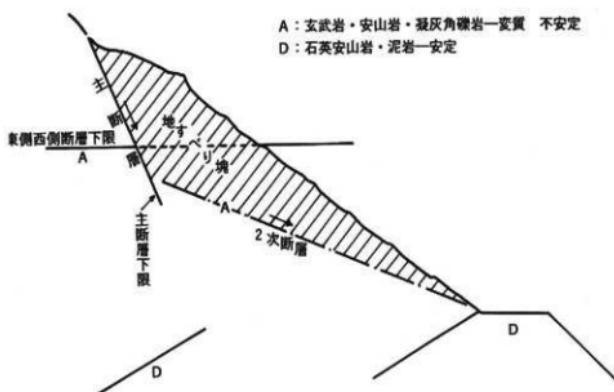
地滑りは、岩殿山岩層下部の玄武岩層の中に発達している①N 50° W, 65° S、②N 40W~50° W, N 10° W, 80° W の 3 本の断層によって発生した構造性地滑りであり、現在は深層杭で止められている（第 134 図・135 図）



第 133 図 岩殿山地滑り深層杭全景



第134図 地すべり地平面図（1974・濱野一彦）



第135図 地すべり地断面図（1974・濱野一彦）

参考文献

- 山梨県 1974 「山梨県応用地質誌」
- 田中収、他 1987 「山梨県地学のガイド」コロナ社
- 山梨県 1987 「土地基本分類図(都留)」
- 田中収 1993 「ふるさと桂川谷の世界」(リニアトンネル講演要旨)
- 田中収・口野道男 1993 「リニア高川トンネル産出化石群報告」
- 大森昌衛 1993 「牛浜化石調査法」地学団体研究会
- 小菅貞男 1994 「日本の貝」成美堂出版
- 田中収 1994 「リニア高川トンネル産出化石」山梨県文化財調査報告
- 田中収・口野道男 1995 「新天然記念物・大月リニア高川トンネル化石群」『大月短大論集』26巻
- 藤本--美・田代博 1995 「続々展望の山旅」
- 田中収・口野道男 1995 「大地のロマン」勝沼町

(田中 収)

第2章 岩殿山の植物

はじめに

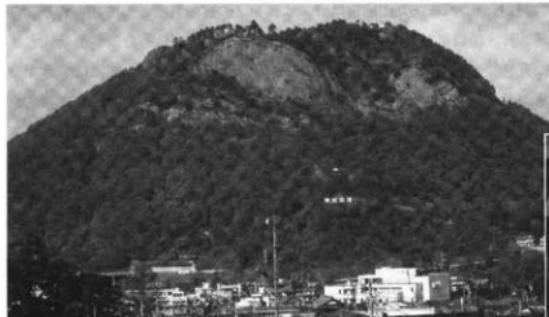
岩殿山は標高634mで、南の標高643.7mの林峯山と対峙している。岩殿山は南北を桂川と葛野川にその合流点を頂点とした三角状にはまれ、また築坂をもって東西に分離された独立峰的な存在となっている。自然と人為的要因が複雑に絡み合っていて、植物分布上において興味ある地域となっている。

植物の分布を左右する最大要因は気候であるので略記する。山梨県の気候は内陸的気候の代表的なもので、日本の気候型からは表日本型のうちの中央高原型に属している。この山の近くの県立都留高等学校校庭（標高364m）の観測気象データによれば、年平均気温13.8℃、年平均降水量1439mmで、県内では平雨高温区に入る。

この山はあまりにも低山のせいか、植物研究者の来訪は僅かである。本県の植物研究者植松春雄博士は1955年にこの山で58種類の植物を記録し、シダ植物のイヌイワデンダを見つけている。しかし確証がなく、誤認と思われる。また本県の植物学者石塚末吉氏も長年旧制都留中学校の校長として在職中、この山に登った記録があり、中に記された植物数は僅かであるが、希少種のムギランを見つけている。

今回は、岩殿城跡県指定に伴う総合調査の一環としての植物調査であるため、指定区域に近づけて調査区域を設定した。今回の調査期間中に松くい虫被害が続出し、被害木の下部に成長を続けたアラカシが出現し、この山を見なれている人々に驚きを与えていた。筆者は1972年、日本生態学会中部地区研究発表会において、植生調査の結果として、この山のアカマツ林の樹下にアラカシの稚樹の成長を示し、代償植生のアカマツに代わって自然植生であるアラカシの台頭を予告したが、現在そのように進みつつある。

地球温暖化や、登山者の急増、その他予期しない条件も加わり、この山の植物相も変貌が予測される。この調査結果が、この後の重要な資料として活用されれば幸せである。



第136図 岩殿山南面



第137図 市の花 山百合

第1節 植物相の概要

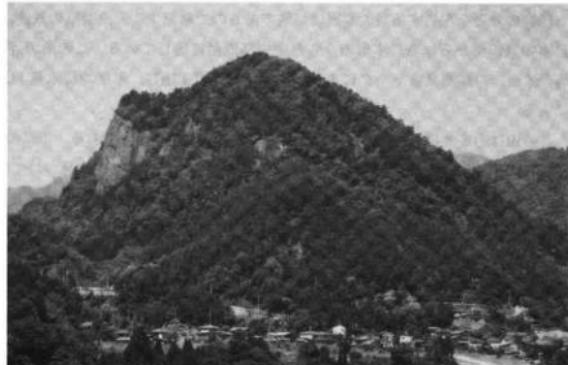
1. 概観

この山は現在大月林務事務所第167林班区に属す。かつて戦国期の岩殿城の跡として保存の意味をもって、第2次世界大戦後は植林を施すことなく、自然更新のままに今日に至っている。1975年、歴史景観保全地区

に指定され、大月市の公園として管理されるに至り、入口から丸山、頂上にかけての登山道周辺の草刈り等の管理は年間を通じて行われるようになった。しかし、新設の「ふれあいの館」周辺のサクラ及びツツジ等植栽地や頂上の馬場、本丸、馬洗池周辺及び登山道沿いを除いては、自然状態が良く保たれ、自然植生の遷移過程を知る上の格好の場となっている。後記の植生図でも判るように、本山の植生は大きく見てアカマツ林とコナラを中心とした落葉広葉樹林によって構成されている。また本山の植生の構成要素は、気候的要因や人為的要因が複雑に絡み合い、従って種の数は多く、461種を記録した。

2. 南斜面の植物

南斜面下部は県道、中央自動車道、桂川の影響を受けている地域である。アカマツ・落葉広葉樹林帶で、下生にアズマネザサ、ヤマツツジが目立つ。桂川河岸の断崖にはアラカシ、キハギ等が見られ、路傍にはブタクサ、セイタカアワダチソウ、オオマツヨイグサ、カモガヤその他の帰化植物が非常に多い。高月橋西の河原のアカマツ林は、対岸の俗称象の鼻の断崖や吊り橋と対になり景勝地として親し



第138図 東から見た岩殿山

まれている。丸山下方の史跡の看板周辺のアカマツ林も松くい虫の被害で大打撃を受け、林下に生息していたアラカシが台頭してアラカシ林に移行しつつある。丸山周辺はソメイヨシノの桜の名所として知られる。これは1934年に岩殿山の公園化が企画され、植樹されたものである。上部はコナラを中心とした落葉広葉樹とアカマツの混交林である。アカマツは天然種であるため規模には差異が多い。特に東南中・上部にはアカマツの立派な林が多い。東南部は民有地が多く、アカマツ林やスギ・ヒノキの植栽林、および開墾地跡に植えたキリ林となっている。南西部は古くから強漸地域の住民の耕作地として利用され、定期的に火入れが行われていたようである。1966年の山火事を最後に現在にいたっており、この周辺に立つ樹木はそれ以後のものである。西側上部はアカマツが少ない。正面岩壁にはイワヒバ、ツメレンゲ、ナンテン、キハギ、ネズなどが見られる。近年から鏡岩の東の崖疊地にアカマツに代わってアラカシが目立つようになってきた。

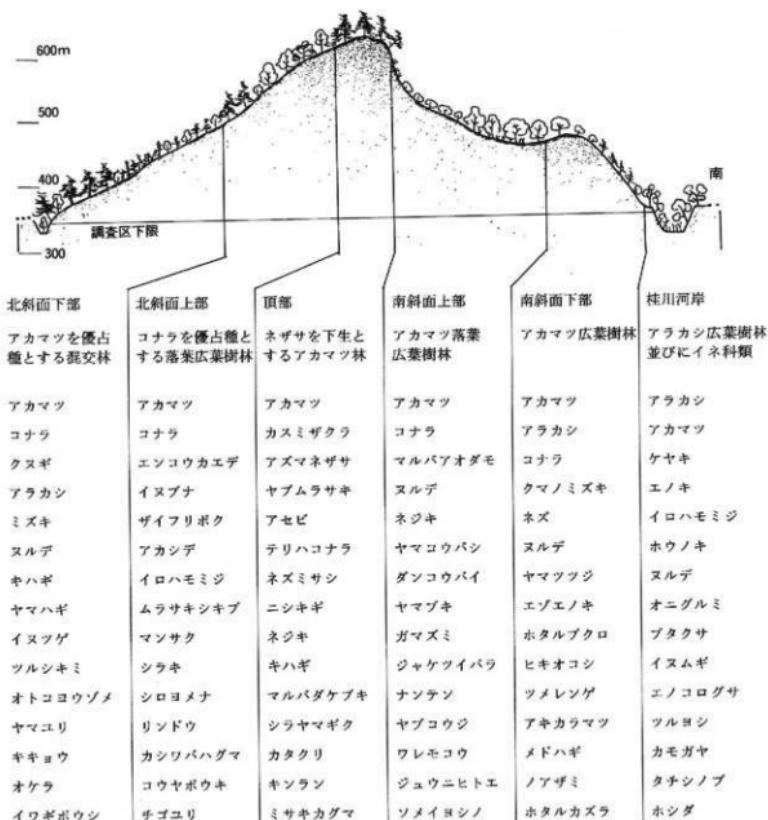
3. 北斜面の植物

北斜面下部はアカマツを優占種とする落葉広葉樹との混交林が多く、スギ・ヒノキの植栽林も多い。下生にはイヌツゲ、ミヤマシキミ、アセビ等の常緑低木やカンスゲ、ウラハグサなどが多い。また北東山麓と北斜面上部にかけてのカタクリ群落は特記すべきものであろう。斜面上部は、コナラを中心とし、テリハコナラ、シラキ、マンサク等で成り立つ落葉広葉樹林が多く、中にイヌブナ、ハルニレといった温・寒帯樹種も見られる。斜面北西上部にはアカマツの成木が多い。

4. 頂上の植物

頂部は目通り幹圍1~1.5mクラスのアカマツ林で、古城の旁聞気が醸し出されている。傾斜地はアズマネザサが林床を覆っているが、馬場と呼ばれる平坦地は桜のソメイヨシノが植栽され、下草刈りが行われている。湧水の馬洗池にはセキショウが生えている。かつてこの池にはシャジクモ、ニッポンフラスクモ、アギ

ナシが見られた。



第139図 岩殿山横断面図（神宮橋—高月橋）

第2節 植物分布の構成要因

1. 気候的要因

(1) 植物帶

地表上のある場所にどんな植物が生え、どんな植生が成立するかはその場所の地形、地質、土壤、水分、日光、気温等の状況により異なり、中でも気温と降水量によって大きく規定される。日本列島をはじめ東アジアの諸地域は十分な降水量に恵まれ、温潤及び準温潤気候（森林気候）の下にあるため、この地域は温度的

序列に応じて大きく熱帯、暖帯、温帶、寒帯の4つの植物帯に分けられている。

熱帯は等温線21°C以上の地で、小笠原群島と沖縄本島中央以南でソテツ、バショウ、ガジュマル、ヘゴといった種類が多く、サトウキビ、バナナなども栽培出来る地域である。ガジュマル帯とも呼ばれる。

暖帯は等温線13°C~21°Cの地域で、沖縄本島中央以北、九州、四国、本州の北緯35度以南の地が含まれ、内陸ではアラカシ、シラカシなどのカシ類や、海岸ではタブノキ、カゴノキ、シイ類などの常绿広葉樹が生え、米、麦、茶、穂などの栽培に適する。この帯の代表的植物はカシ類でカシ帯とも呼ばれる。

温帯は等温線6~13°Cの地域で、暖帯以北の本州、北海道の西南部を

占め、ブナ、ミズナラ、シデ類などの落葉広葉樹を主とし、大麦、大豆等の穀類やリンゴ、ナシなどの栽培にも適する地域である。ブナ帯と呼ばれる。

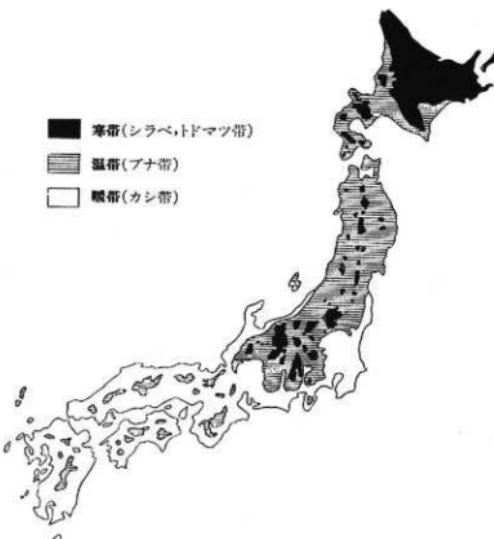
寒帯は等温線6°C以下の地域で、北海道の東北部がこれに属し、シベラ、トドマツ、エゾマツなどの針葉樹を主とし、ジャガイモ、大麦などが栽培される。その代表種の名をとってシラベ・トドマツ帯と呼ばれる。

また熱帯に近い地域を亜熱帯、寒帯に近い地域を亜寒帯として6つの温度帯に分けることもある。

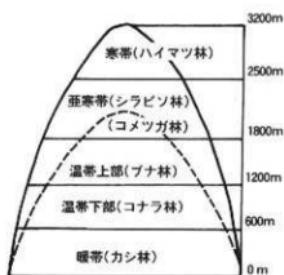
以上は水平的に見た植物帯であるが、低地から高山の山頂に至る垂直方向にも前者に似た植物帯が見られる。この垂直的植物帯の移り変わりは緯度によっても相違はあるが、中部山岳地帯ではおよそ標高500m乃



第141図 山梨県の植物帯



第140図 日本の植物帯（本多静六博士による）



第142図 中部日本垂直分布模式図（大月市内）

至600mまでが暖帯で、その上1800mまでが温帯、それ以上は寒帯となっている。寒帯の下部を亜寒帯とし、およそ1800～2500mの間をこの区域にいれている。

(2) 暖 带

山梨県の暖帯域は富士川を遡って甲府盆地周辺の標高600m以下の地域と、相模川を遡った郡内大月周辺の標高600m以下の地域である。本山では南面の鏡岩下の標高600m付近までアラカシの成木が見られるが、北面では温度差があるようで、現在では東北麓で標高500m、北麓では450mまでアラカシが見られる。後記目録の中から暖帯域に本拠を持つものをあげると次のようになる。カヤ、イヌガヤ、アラカシ、シラカシ、クヌギ、エノキ、ヤマコウバシ、ダンコウバイ、ネムノキ、ジャケツイバラ、コクサギ、シラキ、アカメガシワ、ムクロジ、キズタ、カニクサ、オオバノイノモトソウ、ヒメウラジロ

次にその代表種を記す。

A. アラカシ（ブナ科）

暖帯の山野にきわめて普通な常緑高木。樹皮は灰黒緑色。若枝は淡褐色の軟毛を密生するが次年枝には毛は落ちる。葉は互生して柄があり、長楕円形で長さ7～12cm、基部は広いくさび形、中部以上に鋭い鋸歯があり、裏面には絨毛が残る。花期は4～5月。雌雄同株。堅果は年内に熟し、卵円形。暖帯に林をつくる。この地域には桂川の断崖に多く、川淵から強瀬にかけて大きな林となり、強瀬全福寺裏にもこの林がある。

B. シラカシ（ブナ科）

アラカシと同じく暖地の山中に野生する常緑高木。関東では生け垣や防風林として利用される。樹皮は灰黒色。葉は互生して狭長楕円形、基部はくさび形、先ははすどく尖り、葉の裏面は淡緑色で最初は絨毛を散生するが後無毛となる。花期は5月、雌雄同株、堅果は卵形。駿岡町浅利にはこの林がある。

C. アカメガシワ（トウダイグサ科）

本州、四国、九州の暖帯に普通な落葉高木。樹皮は褐色で、芽は紅赤色をしている。葉は卵形で先が分裂し、長い葉柄とともに紅赤色の毛がぎっしりとおおっていて美しい。夏に花をつけるが雌雄異株である。相模川流域では、この山の周辺が上限であるが、支流葛野川の奥地の小金沢渓谷に隔離分布する。



第143図 アラカシ



第144図 大月市内のアラカシ分布

(3) 温 带

山梨県の山岳地域はそのほとんどが温帯域に属し、高山の山頂周辺が亜寒帯というところが多い。本山の山頂周辺と北斜面上部はこの地域に入る。特に本山と周辺の山々との相違は、低標高にもかかわらずイヌブナの見られることである。ブナは温帯の指標植物で、イヌブナもそれに近いものである。普通郡内地域ではイヌブナは標高1000m付近から出現し1500m付近からブナに変わるものである。それがこの山では標高550

m周辺から見られることで珍しい。温帯・寒帯に本拠を持つものをあげると次の植物が見られる。サワシバ、ハルニレ、ホウノキ、チョウジザクラ、ウツミズザクラ、メグスリノキ、シナノキ、ミツモトソウ、マルバタケブキ、イワデンダ。次にその代表種を記す。



第145図 イヌブナ

A. イヌブナ (ブナ科)

山中の温帯域に生える落葉広葉樹。幹は高さ25mぐらいに達する。樹皮は暗灰色。若枝は灰紫色で淡褐色の長軟毛を密生するが、次年度は無毛となり色も黒紫に変わる。葉は枝に2列につき互生し、長楕円形をして、先は尖り、基部は広いくさび形、裏面に淡緑色のねた毛が残り、特に葉脈上に著しい。花期は4~5月。堅果は3稜卵形。岩手県以南の主として太平洋側の本州、四国、九州にみられる。

B. ハルニレ (ニレ科)

北地に多い落葉高木。幹は高さ30mぐらいになる。若枝には軟毛が多いが2年枝は無毛となる。樹皮は灰褐色、縦にやや深い割れ目がある。葉は倒卵状橢円形で、基部はくさび形で、先は急に尖る。葉の縁には二重鋸歯があり、表面はざらつき、裏面は葉脈に沿って短毛がある。花は4~6月に葉に先だって咲く。

C. エゾエノキ (ニレ科)

温帯の山地に生える落葉高木。幹は高さ20mに達する。葉は互生し、長楕円形で先は尖り、基部は広いくさび形で左右不同、ふちには鋸歯があるが、下部の3分の1ではない。花期は4月。果実は球形で熟せば黒くなる。同属のエノキは暖帯に根拠をおく樹種で、葉の上部に小さい鋸歯があり、果実は橙色に熟すのでエゾエノキと区別できる。

2. 地史的要因

西の赤石山脈と東の関東山地は元もとは一連のものであったが、第3紀地質時代に起こったフォッサマグナによって東西の2つに分けられ、その中間の地域は大きな海峡になり、その弱い地殻から火山の噴出が続いた。その後の隆起に依って現在の山梨県の山容が成立した。このような火山地域は、植物にとって生態環境が特殊で特異の分化が行われる。特に富士山のような新しい火山の場合は、噴出物によって従来の植物は一旦はなくなり、その裸地の上に四方から新しく植物が侵入分布したものと考えられる。しかしこのような裸地は、植物の生育条件が厳しく、その中には適応分化して今日に至っているものも見られる。新しい所に適応分化した植物は他に比して時間的経過が少ないために分布の広がりは狭く、富士山はその好例で、この周辺のみに見られる植物を富士山要素とよんでいる。この山にはフジザクラ、フジイバラ、カナウツギが見られる。

次にその代表を記す。

A. マメザクラ (フジザクラ) (バラ科)



第146図 ふれあい館前のハルニレ



第147図 フジザクラ

山地に生える落葉小高木。幹の高さは3~10m。若枝は無毛、葉は小さく、広倒卵形で先は尾状に尖り、基部は丸く、縁には二重鋸歯があり両面にねた毛が散生する。腺点は葉身の基部にある。花は5月、葉と同じに咲く。下向きに咲くことで他のサクラと区別が容易である。この山全域に見られるが、中には花が密に咲くものもある。

B. カナウツギ（バラ科）

山中に稀に生える落葉低木。茎は叢生し、高さ2mほどになる。枝は灰赤褐色。葉は互生し、広卵形で、3~5に裂け、先は急に尖り、基部は心臓形で、二重鋸葉縁となっている。葉は裏面葉脈に沿って微毛がある。花は6月。本年の枝の先の円錐花序に白い小花を数多く付ける。静岡県、神奈川県、山梨県に分布する。本県では郡内地域、特に富士山周辺には普通に見られる。この山では北斜面に見ることができる。

3. 人為的要因

低山帶は人間の生活の場であり、この地域の植生は地域住民との密接なかかわりあいの中で変化してきている。特にこの山のように市街地の中の独立峰であり、かつ数百年の開発歴史を持つために植生は時代とともに変化してきていることは想像にかたくない。中でも中央自動車道やゆりヶ丘団地の造成は山麓の植生に大きな影響を与えてきている。

(1) 農耕

正面鏡岩の下方の東南部は、古くから開墾され桑畠として利用され、その名残は隨所に見られる。また、戦後一部にキリの木が植栽された。西南山麓は第2次世界大戦中、及び戦後開墾されて畑として使用された。中央自動車道建設地となって消滅したが、1970年代にはコンニャク栽培の跡を示す古株が生えていた。現在も中央道の上方の平坦地は畑として耕作されている。東北部山麓の神倉地区は広大な耕作地として使用されていて、現在この地域の耕地は、作物の他はその約60%が帰化植物であるといつても過言ではない。

(2) 植林

山の東南部から東斜面にかけては、自然更新のアカマツを育成したアカマツ二次林として立派な林となっている。しかし近年、松くい虫被害が拡大しつつあり、アカマツ林が維持されるかどうかが心配される。東北部山麓から北斜面にかけての山麓はスギ・ヒノキの植林が進んでいる。北から北西の斜面にかけては自然更新がそのまま進みアカマツ林、アカマツ-落葉広葉樹林の自然常態が保たれ、特にその古木が多く見られる。ここに沢筋にはスギ・ヒノキの植林が多く、それもかなり大きくなっている。

(3) 草刈り・火入れ

寛文9年(1669年)の検地帳によれば、南西斜面は下葉山となっており、また古絵図によって強瀬地域の入会として利用されていたことがうなづける。強瀬の中村和夫氏によれば、この地域は1910年代頃までは、毎年6月に幼木の刈り払いを行って禾本科の育成を計って、同時に火入れも行ったという。

(4) 公園化

岩殿山は都留市の鹿留発電所、上野原町の大野貯水池とならんで郡内地区的サクラの名所として知られている。この山ではサクラは丸山付近と頂上平坦地にその植栽が見られる。その中の古木は、1914年春、強瀬青年会の奉仕活動によって植えられたものといわれる。この山を飾る多くのサクラは、1933年4月、地域の観光に関心を持つ嶽明会会长高山信朗県議会議員の努力によって、富士山麓電気鉄道株式会社社長堀内良平衆議院議員からサクラとカエデの苗木1万本宛の寄贈を受け、大月町民の協力によって植樹されたもので



第148図 カナウツギ

ある。これを記念して、1934年4月3日付けで高月橋畔に記念碑が建設された。現在この碑は所在が確認されていない。この碑には「岩殿山与高月橋俱甲陽之名勝也有志胥謀欲設公園堀内良平氏賛其舉寄贈桜楓之稚苗一万株後年得添春秋之美觀者氏之賜也矣轉記伝焉」と記されていた。これによって、現在見られるサクラの多くは70年近くは経ていることとなる。しかしこの時一緒に植えたであろうカエデが現存しないのは、土壤との適合性に原因があったものであろうか。

また1966年には市木(八重桜)、市花(ヤマユリ)が選定されて、サトザクラの記念植樹が行われ、また、近年ヤマユリの植栽も行われている。

(5) 火災

入山者の不注意による山火事は昔からあったものと推測されるが、近いところでは1966年の子供の火遊びによる火災がある。高月橋西の山裾から失火し、南西斜面を焼きつくして、多くのアカマツやサクラに被害が及んだ。

4. 偶發的要因

(1) 帰化植物

帰化植物とは「自然の營力によらず人為的營力によって、意識的、無意識的に移入された外來植物が野性の状態で見出されたもの」と定義づけられる。要するに流通過程で外国から渡ってきて野性の状態になつた植物をいう。中には一時的にしか見られないものもあって、これを放浪植物と呼んで帰化とみなさない学者もいるが、渡来の記録として欠かせないもので普通には帰化植物に含めている。また園芸観賞用や薬用や食用、また牧草として栽培していたものが逃げだして野性化したものもあり、これを逸出植物といい、同様に帰化植物の仲間に入れている。一方帰化植物は帰化した年代によって3段階に分類される。

○有史以前に、よそから移住してきた人々によって入ってきた植物を推定したもので、これを史前帰化植物と呼ぶ。この中核となるものは、弥生時代にイネの隨伴植物としてもたらされた植物群で、南方系のものが多くイヌタデ、ミチヤナギ、スペリヒュ、エノキグサ、ツユクサ、エノコログサ、カヤツリグサ等々で水田や畑の雑草として知られる。

○次いで有史時代の初期からはじまってそれ以降に朝鮮・中国、あるいは中国を経由して中近東やヨーロッパなどから継続して入ってきた植物を推定したものを旧帰化植物と呼ぶ。ムギやアブラナの隨伴種として入ってきたものを初めとしてアジア大陸の温帯からヨーロッパにかけてのものが多い。ウシハコベ、ミミナグサ、カタバミ、ヤエムグラ、キツネアザミ、スズメノカタビラ、カニツリグサなどがある。

○そして江戸末期から現代にかけて外国から入ってきたもので記録に依って確認できる植物があり、これを新帰化植物という。普通一般には帰化植物と言えばこのような信憑性のある新帰化植物のことを言う。新帰化植物は現在日本全土に約700種があると言われる。

この帰化植物は山梨県内には現在約200種が挙げられるが、この山には帰化植物36種が確認できた。調査地が市街を含めない山地にもかかわらず帰化率12.6%と高い数値を示した。その主なものについて以下に挙げる。

A. セイヨウタケボボ (キク科)

ヨーロッパ原産の多年草。葉は羽状に裂けているが、裂け方は一定でない。総苞の外片が反曲する点で日



第149図 丸山周辺の植栽のサクラ



第150図 セイヨウタンポポ（キク科）



第151図 ヒメムカシヨモギ（キク科）



第152図 ハルジョオン（キク科）

本産のタンポポと区別することが出来る。明治末期には北海道各地に多く見られたようである。本県においては戦後の侵入であるが1955年頃は極めて稀なものであった。1965年頃からは各地域の路傍の至る所に出現するようになり、かつ花期も春から晩秋までと長く、カントウタンポポやエゾタンポポを駆逐しつつあり、山地にも進出しつつある。この山では山麓から頂上にかけて見られる。

B. ヒメムカシヨモギ（キク科）

北アメリカ原産の1～越年草。高さ1.5mにも達し、全体に開出する荒い毛がある。7～10月にかけて上部で分枝し、小さい白色の花を多数につける。日本へは明治初期（1870年頃）に渡来し注目されたようで、メイジソウ、ゴイッシングサ、テツドウグサとも呼ばれていた。山梨には昭和年代に入ってからで、この山でも路傍や荒れ地に多く見られる。

C. ヒメジョオン（キク科）

北アメリカ原産の1～2年草。草丈は1～1.3m位になり、淡緑色の葉には荒い毛がまばらに生え、茎の中は白い體で埋められている。6～10月頃枝の先端に白または淡紅色の花をつける。明治維新（1868年）頃の渡来でアメリカカグサと呼ばれていたようである。全国各地に非常に強い繁殖力で広まっていたが、近年やや減少気味である。本県では昭和初期に入ったものであろう。休耕畑一面に生える様は壯觀である。この山では全山に見られる。同属のハルジョオンも北アメリカ原産の多年草。草丈は30～60cm。ヒメジョオンに似ているが、葉は中空であること、花期は4～6月でそれよりも早く咲くこと、花序ははじめ茎ごとにうなだれていることなどで区別は容易である。1920年頃に東京から広まった。県内では1976年大月市強瀬で筆者が発見した。それから数年して爆発的に全県下に広まった。この山では至る所に見られる。

D. プタクサ（キク科）

北アメリカ原産の1年草。草丈は30～120cm。7～8月に枝先に細長い穂をつくりて花を付ける。花粉は球形である。明治初期（1870代）の渡来といわれるが、昭和年代になって全国的な広がりを見せてきた。花粉が遠くまで運ばれるせいか、1980年頃からはこの草の蔓延

とともに花粉症の元凶とされてきた。今ではスギの花粉がこれと入れ替わり、この種は注目されなくなりつつある。本県には昭和35年頃の侵入で、県内各地に見られるが、やや衰退気味である。ここでは山麓に普通に見られるが、高月橋西の河畔には特に多い。

同属のオオブタクサは北アメリカ原産の1年草。草丈1.5～3.0m。柔の葉に似た大きな葉身を付ける。8～9月に枝先に穂になって花を付ける。日本へは1953年、静岡・千葉に入ったのが確認されたが、現在では全国各地の肥えた河川敷や造成地に急速に広まってきている。ブタクサ同様に花粉症を引き起こす草として敬遠されている。山梨には1965年頃甲府市荒川の河川敷で発見されたが、今は県内の河川敷に普通に見られ

るようになった。岩殿の招魂社下に見られる。

E. アメリカセンダングサ（キク科）

北アメリカ原産の1年草。草丈50～150cm。8～10月に多数の黄色い頭花を付ける。他のセンダングサに比べて6～12個の緑色の長い総苞片が付く。果実は扁平で、先に2本の刺がある。1920年には京都に入り、本県には1935年頃には見られたようである。県内至る所の湿った荒れ地や、河川、溝等に見られる。

同属のコセンダングサは果実が線形で、平たい4稜形をし、先に3～4本の刺があるので区別できる。江戸末期からその存在は知られていたが、全国各地に広まつたのは戦後になってである。県内では1979年甲府市内で見つかり、その後、平成年代に入ってから急速に広がってきた。この山では山麓にどちらも普通に見られるが、コセンダングサの方が急速に広まりつつある。コセンダングサに似るが白い花弁のあるシロノセンダングサが1994年頃から高月橋周辺に散見されるようになった。

F. ハキダメギク（キク科）

熱帯アメリカ原産の1年草。草丈10～60cm。茎は白毛が多い。花期6～10月。径5mm程度の小頭花を付ける。18世紀にヨーロッパで栽培され、日本には昭和初期には渡来していたようである。本県では1968年に猿橋付近の広場で発見された。その後1980年代から爆発的に増えはじめ、現在は県内至る所の畠、路傍、休耕地等に見られるようになった。この山では山麓の路傍や畠に見られる。

G. オオイヌノフグリ（ゴマノハグサ科）

ヨーロッパ原産の2年草。草丈10～30cm。葉は地表を這って四方に広がり、先が直立する。花期3～5月。上部の葉のわきにコバルト色の小さな花をつける。明治20年(1887)頃に東京に帰化していることが認められた。大正初期には全国的に分布、人里近くではどこにでも見られるようになった。県内でも昭和初年代にはどこにでも見られるようになった。同属のタチイヌノフグリは、茎が立ち上がり、花柄の短い花は葉腋に付くのでオオイヌノフグリと区別されるが、これも同じ環境に見られる。

H. アレチマツヨイグサ（アカバナ科）

北アメリカ原産の2年草。草丈30～150cm。月見草と呼ばれるオオマツヨイグサに似るが、花がやや小型で花弁の間に隙間があるのが区別点である。これは明治の後期に渡来したが、広まつたのは戦後で、県内には1960年頃甲府の荒川土手で発見された。現在はオオマツヨイグサよりこの方が多く見られる。高月橋周辺には両者を見ることが出来る。

I. イネ科植物

イネ科（禾本科）の植物は戦前、戦後を通じて家畜の飼料として輸入され、あるいは栽培されたものの逸出したものが多い。特に戦後、酪農の振興につれて、それらは山間部まで急速に広まつた。また道路建設や宅地造成の際に土止として使用されることも多く、全国至る所に広まりつつある。この山にはイヌムギ、ヒゲナガスズメノチャヒキ、ネズミムギ、カモガヤ、ナガハグサ、シナダレスズメガヤ、カラスムギなどが見られる。

J. その他、この山に見られる帰化植物を挙げる。

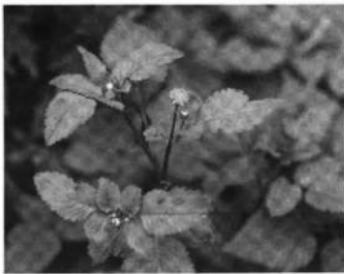


第153図 オオブタクサ（キク科）

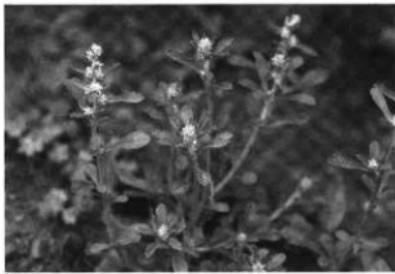


第154図 メマツヨイグサ（アカバナ科）

エゾノギシギシ(タデ科)、アレチギシギシ(タデ科)、ケアリタソウ(ヒユ科)、ホソアオゲイトウ(ヒユ科)、ヨウシュヤマゴボウ(ヤマゴボウ科)、マメゲンバイナズナ(アブラナ科)、ハリエンジュ(マメ科)、シロツメクサ(マメ科)、コニシキソウ(トウダイグサ科)、トゲチシャ(キク科)、ハルノノゲシ(キク科)、オニノゲシ(キク科)、オオアレチノギク(キク科)、ヒメムカシヨモギ(キク科)、オオオナモミ(キク科)、チコグサモドキ(キク科)。



第155図 シロノセンダングサ (キク科)



第156図 チコグサモドキ (キク科)



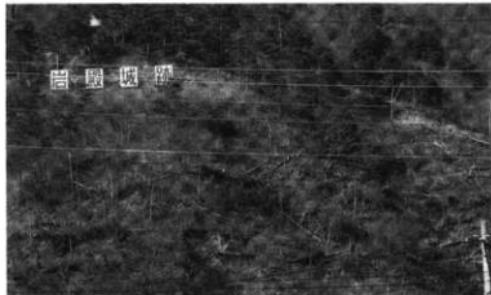
第157図 ヨウシュヤマゴボウ (キク科)



第158図 シロツメクサ (マメ科)

(2) 病虫害

山梨県内における松くい虫被害は、1978年夏、北巨摩郡双葉町に端を発し、甲府市御岳昇仙峡に被害が及び話題になったが、1980年代になって郡内にも見え始めるようになった。岩殿山は県有林で、県もその防除対策として1989・90年とヘリコプターによる薬剤散布を行ってきた。しかし付近住民におよぼす薬害影響を考慮するとともに、伐倒薬剤処理及び薬剤樹幹注入処理によって防止出来るものとしてその使用を停止するに至った。その後、特に1995・96



第159図 松くい虫被害木伐採現状 (丸山付近)

年は異常気象のせいもあって、その被害は甚大であった。松くい虫はマツノサイセンチュウ(松の材線虫)と呼ばれる線虫で、マツノマダラカミキリ(鞘翅目カミリキムシ科)の幼虫の体内に寄生して松の樹皮や材部に入り込み繁殖する。従ってカミキリムシを駆除することが被害防除の要件となる。上野原町の松くい虫被害について1996年7月21日付けの山梨日日新聞に、「中央道沿いの松枯れは調査した沼津市の国道沿いなどの状況と似ており、車の排ガスの影響が大きいと見られる。松の葉の気孔に排ガス中の汚染物質(ベンツビレンやジベンゾアントラゼン)などが詰まり、樹勢が弱まり殺虫作用のあるスチルベンを生成できなくなり、松くい虫が進入しやすくなった。松枯れを防ぐためには車の燃料見直しが必要」と沼津西高校の遠藤稔教諭は指摘している。勿論直接原因はマツノサイセンチュウによるものであるが、間接要因としての大気汚染は検討に値するであろう。

岩殿山の松枯れについて、大月林務事務所はその被害防止に努力されているが、松枯れはまだまだ進行するものと推測される。

第14表 岩殿山松くい虫被害年度別状況表
(大月林務事務所調)

平成4年度 (1992)	10m ²
平成5年度 (1993)	26
平成6年度 (1994)	41
平成7年度 (1995)	524
平成8年度 (1996)	219

第15表 松くい虫被害木年輪調査表 (1997年)

調査地	被害木樹齢	年輪数	平均年輪数
丸山周辺	115cm	45	38.2
鏡岩下周辺	218	76	71.2
馬場周辺	172	82	75.0
頂上周辺	219	82	79.6
山の神前巨木	214	158	

第3節 登山道に沿って見られる植物

1. 南正面口から頂上まで

県道小菅線の高月橋をわたると道は3本に分岐する。左折の道を下れば松林から「象の鼻」と呼ばれる桂川の断崖が望まれ、右折すれば強烈な集落に至る。分岐点左に岩殿山案内板が立ち、その周辺にはコセンダングサ、ハキダメギク、ケアリタソウ、ハルノゲシ、ハルジョオン、ヒメジョオン、オニノゲシ、チコグサモドキ、オオマツヨイグサ、アレチマツヨイグサ、カモガヤ、イヌムギ、カラスムギ、ナガハグサ、シナダレスズメガヤなどの帰化植物が多い。真ん中の県道はゆるやかな上りとなる。道の右下の石垣にシダのヒメウラジロがびっしりと貼り付けたように生えているのがフェンス越しに見える。左側壁にはテリハノイバラが垂れ下がり、ヒヨドリジョウゴ、イケマなどにつる草も裂け目に生えている。岩殿山公園入口の標柱が立ち、いよいよ登山道に入る。ソメイヨシノの桜並木の急坂である。ツユクサ、コモチマンネングサ、ホタルブクロ、ヨモギ、セイヨウタンポポ、エゾノギシギシ、オニタビラコ、ミチヤナギ、ジュウニヒトエ、センポンヤリと春から初夏にかけては色とりどりの花が出来る。メガルカヤとオガルカヤが見られるのも面白い。右手道下の礫岩の大岩にツメレンゲがびっしりと生えている。鋭い鷹の爪が想像されるような姿態である。これも全国的に分布種なものである。荒れた畑にヨウシュヤマゴボウが何本も見られる。山の神の前にムクロジ(目通り幹幅0.8m)が立つ。自生か植栽かは不



第160図 ホタルブクロ (キキョウ科)



第161図 ミズキ (ミズキ科)



第162図 ノアザミ (キク科)



第163図 クサギ (クマツヅラ科)

明である。ここを過ぎると右にミズキの太い木があり、6月になると白い花を数多くつけ見事である。ここから大月の町を左に眺めながらの上り道となる。この辺りから丸山にかけてはかつては立派なアカマツの林であった。1994年頃から松枯れの兆候が見えたが、1995年に入って夏の旱天も影響してかほほ全滅に近い状況となつた。マツクイムシが主たる原因であろうが、大気汚染の影響も関係のあるのではなかろうか。アカマツ林の下床に陰樹として育ったアラカシが、この時とばかりに目立つのが印象づけられる。伐採放置されたアカマツ材の間からヤマツツジの花の赤色も一際鮮やかに見られる。右手上の段にアカラシの大樹が1本立っている。クサボタン、アキノタムラソウ、ナンテンハギ、アキカラマツ、ホタルブクロ、ヒキオコシ、シラヤマギク、タケニグサ、リュウノウギクといった草本や、コナラ、ヤマコウバシ、ガマズミ、クサギ、クマノミズキ、ツノハシバミ、ウツギ、シモツケなどの木本が目につく。葉の互生するミズキと、葉の対生するクマノミズキが近い間隔で見られるのも興味深い。低木とアカマツの立つ中を進むと岩殿城址の看板が立つ。ノアザミが群落を作つて見事である。この辺りからまた桜並木となり、ドウダンツツジが道に沿つて植栽されている。樹下は當時刈り払いが行われている。クララ、イヌヨモギ、コヤブラン、キツネノマゴ、ネコハギ、ヒメジョオン、オオジシバリなどが目立つ。数年前迄はフナバラソウの群落が見られたのに、たび重なる刈り払いのせいか絕滅してしまったのは残念である。道から離れた所にはアズマネザサとスズタケがびっしりと生えている。

「ふれあい館」の門前には目通り幹囲0.6mのハルニレ



第164図 ガマズミ (スイカズラ科)

が立つ。ハルニレは寒地に本拠をおく樹種でこの山のように暖地の樹種の多い所に見られることは珍しい。門の上の斜面には地元の人達による「市の花」山百合の植え付けが行われ、夏には大きな白い花が見事に咲き競っている。丸山にはヤマツツジをはじめ園芸種のつづじが數十株植えられている。館周辺にはシロツメクサ、セイヨウタウンボボ、チャカタバミ、コニシキソウ、キツネノマゴ、ヘビイチゴ、タチツボスミレ、イブキボウフウ、ヤブジラミ、ナツヅタ、

フジテンニンソウ、シラヤマギク、オオバコ、アキノタムラソウ、ヨウシュヤマゴボウ、スキ、オオアブラスキ、チジミザサなどの草本がみられる。またふれあい館の周辺は、県内に知られた桜の名所となっている。1934年4月に富士急行電鉄の初代社長堀内良平氏が桜と楓の苗木1万本を寄付し、地元有志によって植樹されたものである。樹種はソメイヨシノがほとんどで、花の白いヨシノザクラも混じり、近年植樹された「市の木」のサトザクラ（ヤエザクラ）も見られる。太いものの目通り幹囲は1.35mで、3月末から4月中旬の間に開花する。南斜面の本数（種類を問わず）約50本。樹勢に旺盛さを欠く。この他に植樹されているものにサルスベリ、モッコク、マテバシイ、サザンカ、イスツゲ、ユキヤナギ等の木本があり、またコスモス、マツバボタン、ヒオウギスイセンといった草本類も植栽され、公園にふさわしい色どりを添えている。

ここから道はじぐざぐの上りとなる。コマツナギ、ナワシロイチゴ、キハギ、コウゾ、ヤマツツジ、ヤマグワ、クマヤナギ、アオツヅラフジ、センニンソウ、ヘクソカズラ、ジュウニヒトエ、ジシバリ、キジムシロ、タチツボスミレ、スミレ、オケラ、アキカラマツ、ヤクシソウ、タカトウダイ、ヤマハッカ、オトギリソウなどが目に付く。常時下草刈りが行われているので草丈は高くない。自生のヤマユリも点在する。タカサゴソウやオミナエシも道沿いに見られ珍しい。エゾエノキが2本記念植樹されている。鏡岩の下部にはジャケツイバラの群落が黄色の花をびっしりと付け、5月の登山客の目を楽しませる。岩の裂け目にはナンテンが帶状に群落をつくっている。冬季は葉が赤褐色に色付き、灰色の岩場に彩りを添えている。右手にアラカシのやや大きいものがある。ダンコウバイ、ヤマコウバシ、ヌルデ、ヤマハギ、キハギ、イスガヤ、タケニグサ、ノイバラ、コナラなどの低木の道を進むと揚木戸の下にでる。左手に築坂経由稚児落への道があり、このすぐ上の岩場にはツメレンゲの群落がある。秋には白い可憐な花をつける。ティカカラマツもこの周辺には多く、ヤブコウジも多い。ヤブコウジは暖帯に生えるもので、アラカシとともにこの辺りがこの山の暖帯の上限になるものと考えられる。アカマツの目通り幹囲1.5mクラスのものが岩の隙間に点々と現れてくる。岩場にはホソバノキリンソウが黄色の花を付け、シノブ、ノキシノブ、イワデンダなどのシダも見られる。

揚木戸を過ぎると頂上の馬場に至る。ここから最高地の本丸跡迄アカマツの樹高20mクラスの古木でおおわれている。ここにはその林床にミサキカグマ、タチドロコ、チゴユリ、コゴメウツギ、ヤマウルシ、イカリソウ、オカトラノオ、カノツメソウ、サルトリイバラ、ヘクソカズラ、アオツヅラフジ、シモバシラ、ヤマシロギク、ヤマハッカ、キンミズヒキ、ヒヨドリバナ、タガネソウ、ノアザミ、タカトウダイ、ヤマニガナ、アキカラマツ、アカショウマ、アキノキリンソウ、イタドリ、センボンヤリ、ナルユリ、オオバギボウシなどの草本や、リョウブ、カスミザクラ、ツノハシバミ、ツリバナ、ネジキ、アワブキ、ムラサキシキブ、ケヤキ、フジキ、イボタノキなどの亜高木や低木などが見られる。北側斜面にはアズマネザサが多い。鏡岩の頂は眺望がきき、鳥沢、猿橋、大月、初芽、笛子峠まで市内が望まれ、南西には都留市のはるか向こうに富士山がくっきりと浮かぶ。この大岩壁にはかつてはセキコク、ウチョウランといった貴重種が見られた。今は、イワヒバ、キハギ、ヒキヨモギ、オカルカヤ、ヒメノガリヤスなどが岩の裂け目に生えている。平坦地に立つ乃木大将の詩碑の北側に、スズランが、地元山草会によって植栽されているが、分布域が異なるだけにこの山にはそぐわない。その東の平坦地にはソメイヨシノ桜の古木が5本、若いものが22本ある。カラムシ、オオバコ、ノカンゾウ、マルバダケブキ、キンミズキ、セイヨウタンポポ、ヤマタツナミソウ、ヤク



第165図 ジュウニヒトエ（シソ科）



第166図 ノカンゾウ (ユリ科)



第167図 クララ (マメ科)

シソウ、アキカラマツ、クララ、タカトウダイ、ヤマニガナ、シラヤマギク、ヤマハッカ、ヒメヤブランなどが生える。ツルニガクサが多く見られるが県内では分布の少ないものである。

鏡岩の東の凹地に亀ヶ池と馬洗池と呼ばれる湧水池と溜地がある。亀ヶ池は深さ50cmぐらいで丸く石積みされていて、その回りは草もなく水も澄んでいる。馬洗池は自然のままで浅く、その中にはセキショウが生い茂っている。両池の

周辺の植物をあげるとニシキシダ、ミゾシダ、オクマワラビ、トラノオシダ、スギナ、オクタマゼンマイ、フユノハナワラビ、ナンテン、ケツネノボタン、オオバコ、タカトウダイ、ヤブレガサ、ホウチャクソウ、チゴユリ、オカトラノオ、タチツボスミレ、ケマルバスミレ、ヒトリシズカ、カノツメソウ、コヤブラン、サルトリイバラ、ボタンズル、クズ、ノブドウ、センニンソウ、ヒメヨツバムグラ、ノイバラ、ミツバアゲビ、ミヤマナルコユリ、ミミガタテンナンショウなどである。

広場から本丸まではアカマツ林であるが、途中から木の規模が小さくなり、間隔も混んでいる。本丸にはテレビ塔が立つ。周辺の植物はフジイバラ、オカトラノオ、ヤマニガナ、タムラソウ、オトコヨモギ、リュウノウギク、シラヤマギク、イタチササゲ、オケラ、タチシオデ、タチドコロ、コウヤボウキ、ナワシロイチゴ、アブラススキ、スキ、ノガリヤス、ノアザミ、タイアザミ、オケラ、ワレモコウ、アキカラマツ、コゴメウツギ、ツリバナ、ウリカエデ、マルバアオダモ、ザイフリボク、ホウノキ、ハリギリ、ネジキ、ヤマウルシ、ヤブムラサキ等が目立つ。テレビ塔北側にコブシが見られるが、この山ではこの1本のみで植栽品か自生か不明である。

2. 岩殿口から頂上まで

真蔵院の上の県道から登る。登り口近くのスギ林にはカタクリの大群落があり県道からも眺められる。近年、外米者によるものと思われる盗掘被害が甚大である。スギが大きくなるにつれて群落も縮小気味である。この付近の道沿いに高さ2m以上のオオブタクサが生えている。その他ブタクサ、セイヨウタンポポ、ハキダメギク、トゲチシャ、イヌムギ、カモガヤ、アメリカセンダングサ、コセンダングサ、ホソアオゲイトウといった帰化植物が多い。登山道に戻り、アラカシの亜高木が立ち並ぶ中を進む。ワラビ、ゼンマイ、イワイタチシダ、イワギボウシ、メナモミ、ミズヒキ、オカトラノオ、コウゾリナ、センポンヤリ、キンミズヒキ、タチツボスミレ、ヨモギ、ヒカゲイノコズチ、イタドリ、コナスピ、コウゾ、アオツヅラフジ、サルトリイバラ、コゴメウツギ、マルバウツギ、アイズミツケ、ヤマコウバシ、ムラサキシキブ、スイカズラ、ハンショウズルが見られ、道はやや緩やかになり、アカマツ林となる。樹下にオケラ、アキノキリンソウ、シリヤマギク、リンドウ、ウツボグサなどが生えている。松林が終わるとアラカシ、コナラ、ミズキなどの広

第168図 オカトラノオ
(サクラソウ科)

葉樹林となる。林下には草本のオミナエシ、ヒヨドリバナ、オケラやマルバハギ、キハギ、ニシキギ等の低木が多い。この付近にはムラサキが見られたが、今回は確認できなかった。所々にネズの木が見られる。ネズは瘠地に耐えられるもので瘠地の指標植物と言われる。ここのような岩地には多いものである。

右に少し入ると七社権現の洞窟がある。ここにはかつて社殿があったが、今は石の祠が建てられている。この周辺にはモミジイチゴ、ヤブムラサキ、ガマズミ、オトコヨウゾメ、アイズミツケ、ナンテン、アズマネザサ等がみられる。岩窟の壁にシダのミヤマウラジロがゲジゲジシダとともに生えている。これは葉の裏が粉白色になるシダで珍しい。しかし年々減少しつつあり、緊急の保護対策を必要とする。

道は頂上への急な上りとなる。登山道には随所にコンクリート階段と手摺りが設けられている。岩場には、ホソバノキリンソウが黄色い花をついている。ここからはコナラの品種のテリハコナラが主な樹種となる。葉が長楕円形でやや厚く、鋸歯も鋭く葉に光沢があるものである。オトコヨウゾメ、ネジキ、アラカシ、サイフリボク、ガマズミ、キハギ、マルバハギ、ネズ、イロハモミジ、チョウジザクラ、フジザクラ、マルバウツギ、ウツギ、コウヤボウキ、ナガバノコウヤボウキ、シモツケなどの低木とシロソウ、ヒメハギ、オケラ、イヌヨモギ、タムラソウなどの草本、フジ、フジイバラ、タチシオデなどの蔓植物が見られる。かつての城跡の名残を留める二の堀、一の堀と呼ばれる空堀を過ぎれば、頂上NHK中継アンテナの下に至る。

3. 番倉口から頂上まで

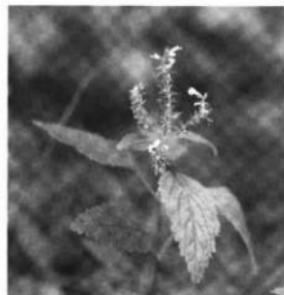
神宮橋の南詰めの石造物の立つ所から登る。アカマツの古木が立つ所を進む。ヤクシソウ、リュウノウギク、タマアジサイ、ヤマホタルブクロ、ウツボグサ、イカリソウ、シユロソウ、タケニグサ、アシボソ、コブナグサ、オオアラススキ、スキキ、エノコログサ、ミズヒキなどの草本や、ヤマブキ、ハナイカダ、ヤマウルシ、スルデ、ウワミズザクラ、ケヤキ、コナラ、エゾエノキ、ヤマハギなどの低木・亜高木が見られる。1997年から神宮洞窟入り口から秋葉神社横を通る登山道が新設された。神宮周辺の植物を擧げるとカタクリ、ヤクシソウ、ハルジョオン、クズ、コゴメウツギ、ノイバラ、イタチシダ、クマワラビ、トランオシダ、ゲジゲジシダ、イワギボウシ、ミズキ、オオモミジ、アズマネザサなどがある。出丸を過ぎると道はやや平らになり、樹齢20年ほどのアカマツ林帯にはいる。アセビやイヌツケといった常緑低



第169図 リュウノウギク (キク科)



第170図 ハンショウズル (キンボウゲ科)



第171図 ツルニガクサ (シソ科)



第172図 ミミガタタナンショウ (マムシグサ科)



第173図 ツノハシバミ（カバノキ科）



第174図 ヤブムラサキ（クマツヅラ科）

ヤマツツジ、ムラサキシキブ、コゴメウツギなどの低木がその下を埋めている。頂上の手前から空掘にかけてカタクリの大群落があり、3～4月にかけて咲くピンク色の花が可憐である。これは6月となればすっかり姿を消してしまう。上り詰めて頂上のテレビアンテナの下に出る。

4. 築坂口から揚木戸まで

築坂には坂の目標木として親しまれた築坂の一本杉がある。南向きの斜面に立ち、上地下地の差1m、根元の周囲3.05m、目通り幹周231m。樹幹下部の北東の一部表皮が剥がれている。樹高約12m。この樹下の道は、高月橋の架かる前までは秩父街道の主要道路で、高月橋の上流にかかっていた扇橋を通って大月に出た。樹下にはアズマネザサがびっしりと生えている。この東にミスミソウの群落があったが、近年絶滅してしまった。ここからわずかにスギの林となる。アセビ、ヤマハギ、ウツギ、ツクバネ、エンコウカエデ、イロハモミジ、ツノハシバミ、ハナイカダ、ホタルブクロ、アキノゲシ、シユロソウ等が生えている。頂上



第175図 オケラ（キク科）

木が見られるのも珍しい。アカマツ林を抜けるとネズミ、ウリカエデ、ウリハダカエデ、イロハモミジ、コマユミ、コナラ、シラキ、アオハダなどの高木・亜高木の林となる。この低山にアセビが多いのも特異で、この山ではこの周辺にしか見られない。礫岩の露頭にティカカズラやイワギボウシ、ヒメノガリヤスが生え、ミヤマシキミがこの辺りから出現てくる。シソバタツナミソウも県内稀なもので、5～6月初旬に淡紫色の花をつける。小さな沢があり、細いながらも沢水が流れいで水たまりが3箇所できている。かつてこの沢沿いにカキランが見られたが今はない。この付近にはカンヌグやミヤマシキミが多く、アオハダ、エンコウカエデ、アカシデ、カスミザクラ、ヤマグワ、ホウノキ、イヌブナなどの高木・亜高木の林となっている。イスブナがこのような低海拔の地に自生することは極めて珍しい。頂上が稍越しに見えるようになると道は直登するようになる。樹齢約30年のアカマツがアサダ、エンコウカエデ、ウリカエデ、イロハモミジ、クリ、ケヤキ、シラキ、マンサク、メグスリノキ、ウワミズザクラなどの落葉樹と混交した林となっている。ツクバネ、ハナイカダ、ミツバアケビ、

林となっている。頂上近くの北側の岩壁にツメレンゲの大群落が見られる。



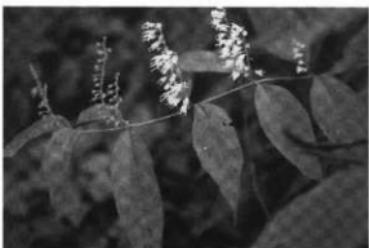
第176図 アイズシモッケ (バラ科)



第177図 タマアジサイ (ユキノシタ科)



第178図 ウツギ (ユキノシタ科)



第179図 シモバシラ (ユキノシタ科)

第4節 植 生

1. 現存植生

この山の現在の植物群落（林を対象として）は、第181図の通りとなる。この山の主たる樹種はアカマツとコナラである。特にアカマツは、城跡に風情を添えるものとして、この山には欠かすことができない。今回の調査ではアカマツの苗からの植林は見かけていない。そのほとんどが天然更新によるもので、それを保護育成した立派な林がこの山の東南部から西北部の斜面にかけてのアカマツ林である。この山のその他の地域のアカマツは、そのほとんどが自然放置のままの天然林である。ここ数年間に枯損したアカマツの年輪を数えると32～158年と大小様々で、樹齢の均一性に欠ける。コナラ林も戦後の二次林で、特に南西斜面のものは、火災の影響を受けたためか、樹齢20～30年位のものが多く、中に1966年の焼け残りと思われる50年程度のものが混在している。正面丸山周辺から鏡岩にかけての山腹や、頂上の馬場と呼ばれる平坦地や、乃木將軍詩碑周辺にサクラの植栽が多く、また丸山の西、旧登山道沿いに数多くのサクラが点在する。丸山の東は開墾地が放置された状態で、アラカシの幼樹やヌルデ等の落葉広葉樹木が混在している。その上部から鏡岩直下まではコナラ・落葉広葉樹林である。鏡岩の一部や崖疊地にアラカシの幼樹が目立ってきている。東北から北西の山麓部の民有地はスギ・ヒノキの植林が進んでいる。北斜面は、部分的にコナラを主とした落葉広葉樹林が見られるが、全体的にはアカマツ林またはアカマツを主とした落葉広葉樹林で占められている。

第180図 代表する樹木



1 アカマツ二次林



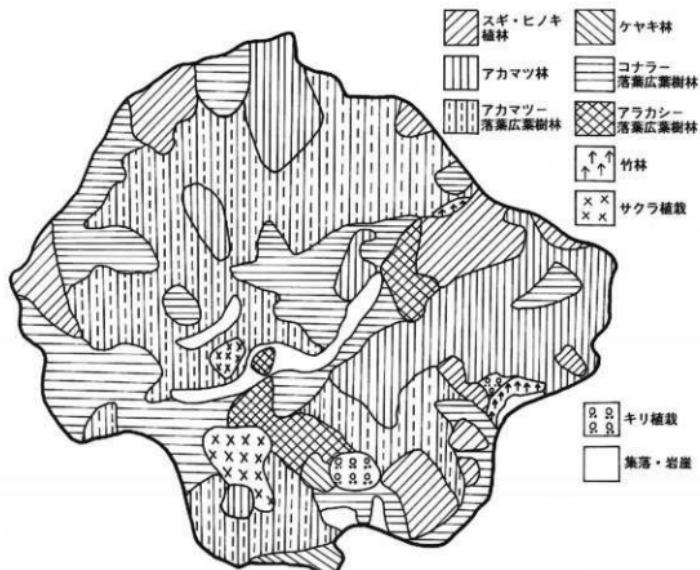
2 アカマツ・落葉広葉樹林



3 コナラ林



4 サクラ植栽林



第181図 岩殿山現存植生図

2. 潜在自然植生（人為的影響を与えない純自然状態における植生）

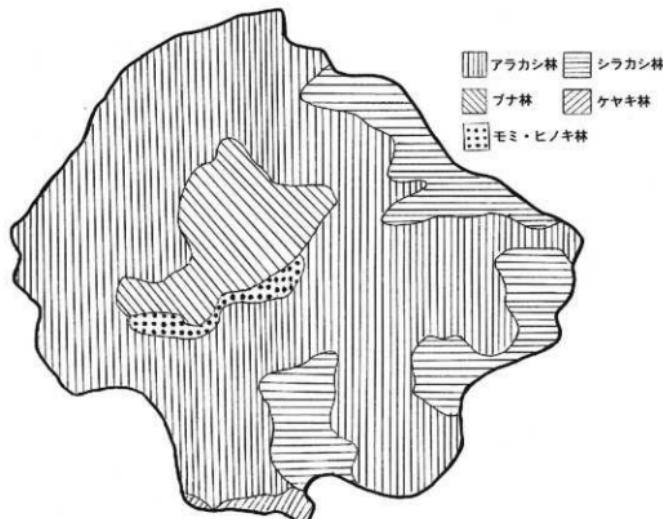
植生は常に変化していくが、終局的には地域を支配する気候と調和して安定植生となる。但しクライマックスに達するまでには、場所により遅速が見られる。この山では伐採、火入れ等が行われた跡には先ずワラビや草本類が生え、ヤマツツジやアカマツが続き、やがてアカマツが林分を形成するといった過程を経てきている。一方大月市は年平均気温13.8度で、この地域はカシ類の生育適地の上限にあたる。猿橋町川脇の桂川断崖や、強瀬全福寺裏山のアラカシ、浅利のシラカシ林などはその代表的な林である。カシ類は陰樹で、日陰でも充分成長することができる。従って、人によって伐採されない限り、アカマツ林や広葉樹林の中で成長し、やがてそれらを圧倒して、安定したカシ林として持続することとなる。現在、この山の林下にアラカシの稚樹が多く、このままに推移すれば、やがては、この山の標高600m以下はカシ類の縁で埋めつくされることとなるであろう。また、北斜面上部にはイヌブナが点在する。カシ類は暖帯の指標植物といわれ、ブナ類は温帯の指標植物として両温度帯の代表種である。普通イヌブナは標高1000m、ブナは1500m辺りから出現するが、この山では標高600m以下から見られる。南側と比較して表土の厚いこの周辺は、イヌブナの適地として林分が形成されることとなろう。

第5節 注目すべき植物

1. 希少植物

(1) ナンテン（メギ科）

Nandina domestica Thunb.



第182図 潜在自然植生



第183図 ナンテン（メギ科）



第184図 ザイフリボク（バラ科）

日本中部以南の暖地の山林中に自生する常緑低木である。茎は高さ2mになるものもある。本山南側大岸壁の裂け目に生えるものは1m内外のものが多い。6月頃茎の先に大きい円錐花序をだし、多数の小さい白花を付ける。実は秋から冬に赤く熟して美しい。山梨県内では、芦川村から中富町以南の地域と、上野原町の一部に自生している。ここは山梨県東部地域最大のナンテン群落である。

本山では南側岩壁の裂け目に生え、何段もの横列をつくって生えており、赤褐色に色付いた葉は冬季の岩壁を彩り、遠くからもその存在を知ることが出来る。また山の東北部、七社権現の周辺にも多いが、この辺りでは1m以上の高さをもつものも多い。

（2）ザイフリボク（シデザクラ）（バラ科）

Ameranchier asiatica (Sieb. et Zucc.) Endl.

日本中部以西の山地に生える落葉小高木である。幹は紫色を帯びる。若い葉の下面に密生した白または肉色の絨毛を付けるが、成葉では無毛となる。4～5月に白い5弁花を密集して開く。県内の暖帶に点在して稀に見られるが、この山には特に多く、貴重である。

(3) ミヤマシキミ (ミカン科)

Skimmia japonica Thunb.

関東以西、四国、九州の山地の木陰に生える常緑低木。基部から直立して分枝し、高いものでは1mに達する。葉は皮質で互生するが、集まって付くため輪生状にみえる。葉面に小さい油点が散在する。4~5月頃、枝の頂に円錐花序をつけて香りのある多数の白色小花を開く。果実は熟すと紅色となり美しい。有毒植物。県内の暖地に見られるが稀である。この山の北斜面登山道沿いに多いが、大切にしたいものの一つである。



第185図 ミヤマシキミ (ミカン科)

(4) ジャケツイバラ (マメ科)

Caesalpinia japonica Sieb. et Zucc.

関東以西の本州、四国、九州、琉球、中国、ヒマラヤに分布するつる性の落葉低木。河原、崩壈地、林縁など日当たりの良い場所に生えるもので、高さ1~2mになる。枝はつる状になり樹木にからみつき、茎や葉軸に逆刺が並ぶ。4~6月に長い柄を持つ黄色い花を枝の頂に総状花序につける。県内各地に少ないものである上に、本山の南斜面のようにまとまって見られる処は県内に稀で、貴重である。



第186図 ジャケツイバラ (バラ科)

(5) マンサク (マンサク科)

Hamamelis japonica Sieb. et Zucc.

山地に普通な落葉高木。本州(太平洋側)、四国、九州の温帯・暖帯に自生する。葉は菱形状の円形をし、基部は左右不相称。花は早春、葉に先だって開き、花弁は線形で黄色である。万花に先立つて先ず咲く、の意味と、一杯に花を付ける意味で満作(豊年)と名付けられたともいう。頂上アンテナからわずかに北に下った所にまとまって見られる。かつて猿橋神楽山がマンサクの名所として知られたが、宅地造成によって絶えた。ここは神楽山の規模には劣るが、この山の来訪者に春の到来を告げる花の群落として、大事にしたい。



第187図 マンサク (マンサク科)

(6) ツメレンゲ (ベンケイソウ科)

Orostachys erubescens (Maxim.) Ohwi

関東以西の本州、四国、九州、朝鮮、中国に分布する多肉質の多年草。山地の岩上、または尾根の上に生える。越冬葉は狭いさじ形、長さ3cmほど、幅5mmで先は硬くなつて針状に尖る。夏の根出葉や茎葉はそれよりやや細い。花茎は高さ6~20cm、中部以上に密に穗状花序をつけ、9~10月頃に白色の花を付ける。国内各地に分布は少なく、山梨県は国内でも多い産地とされるが、県内では石和、下部、駿沢、大月とその産地は稀である。本山では数箇所にその群落がみられ、大月市真木の群落とともに大事に保護したいものである。



第188図 ツメレンゲ（ベンケイソウ科）



第189図 カタクリ（ユリ科）



第190図 シソバタツナミ（シソ科）

(7) カタクリ (ユリ科)

Erythronium japonicum Decaisne

樺太、北海道、本州、四国、九州に分布する多年草。根茎は白色多肉の鱗片状(鱗茎)で、鱗茎は前年のものと接着して筒状になり地中に深く横たわっている。3~4月に10~20cmの茎を出し、紅紫色の1花をつける。花の内面の基部にWの字の紋様が見られる。葉は茎の中部から2枚出で、卵状または卵状長椭円形で、表面は淡緑色で紫斑がある。早春を飾る花として話題に上り、注目されている花であるが、土地開発によって激減している。県内各地に群落を見られるが、同じく減少傾向にある。この山の北東斜面の大群落は県内屈指のもので貴重である。

(8) シソバタツナミ (シソ科)

Scutellaria laeteviolacea Koidz.

福島県以南の本州、四国、九州のやや湿った林中に生える多年草。茎は方形で直立して高さ5~15cm、葉とともに上向きに曲がった毛を密生する。葉の下面是通常紫色を帯びる。5~6月頃、茎の頂に淡紫色の花数個を付ける。この種は、特に貴重なものではなく、県内に生息していることも推定されるものであるが、現在はここが県内唯一の産地として貴重である。

(9) ヒメウラジロ (ワラビ科)

Aleuritopteris argentea (Gmel.) Feé

岩手県の一部、関東地方、和歌山県以西、琉球の一部の乾燥した岩上や石垣などに稀に見られる常緑性のシダである。小さい根茎から小型の五角形の葉を多数集まって出し、高さ10~20cmになる。葉柄は葉身より長く、紫褐色で光沢があり、折れやすい。葉の表面は緑色、裏面は白色または黄白色の粉状物を密布して美しい。この山では南山麓県道の石垣に生えている。この種の県内唯一の産地として貴重である。

(10) ミヤマウラジロ (ワラビ科)

Aleuritopteris Kuhnii (Milde) Ching

var.*Brandtii* (Franch. et Savat.) Tagawa

関東および中部地方の山地に稀に産する夏緑性のシダである。普通岩壁上や石垣などの乾燥地にみられるが、県内産地は日陰のやや湿った場所に生えている。根茎はやや太くて鱗片がある。葉は叢生し20~50cmになり、表面は緑色、裏面は灰白色の粉状物が付く。県内では昇

仙崎清川谷、都留市、丹波三条谷、塩沢谷・小袖、岩殿山が産地で、特に本山は観光客の乱獲によって減少しつつある。

(11) ムギラン (ラン科)

Bulbophyllum inconspicuum Maxim.

関東地方以西の本州、四国、九州の岩上や樹上に群生する常緑の多年草。茎は糸状に細長く横に這い、ひげ根をだしてへばりつく。葉は肉質で厚く、偽鱗茎ごとに1枚ずつ付ける。花は6月頃偽鱗茎に側生し、黄白花を開く。県内産地は南部町鍋島、身延町清子と極めて稀で、本山には南面山麓に1ヶ所見られたが、現在は障害物があって確認できない。

2. 絶滅植物

近年自然志向の昂まる中で山野草栽培もブームとなり、特にウチョウラン、カモメラン、アツモリソウ、スズムシソウ、エビネ等のラン科植物が標的にされ、それらが各地で乱獲されつつある。当山のように交通の便の良い所は格好の採取地であるのか、あるいは登山人口の急激な増加による持ち去りか、または環境変化によるものか、貴重な植物が絶滅の危機に至っている。以下当山において絶滅と思われるものについて記載する。

(1) オキナグサ (キンポウゲ科)

Pulsatilla cernua Spreng.

本州、四国、九州、朝鮮、中国に分布する多年草。1965年頃までは、当山では丸山周辺や麓の強漬集落周辺に見られたが絶滅。昭和年代初期には、県内各地の山麓帯にごく普通に見られたものであるが、環境の激変によるものか、近年ではごく稀な存在となっている。現在山草店の店頭に見られるものはすべて栽培品である。

(2) マツバニンジン (アマ科)

Linum stellereoides Planch.

本州、四国、九州、朝鮮、中国、東シベリアに稀に生える1年草。草丈40~60cmになり、8~9月に淡紅色の小花を開く。県内には三ツ峠山に知られたが今は見られない。当山では西側の開墾地近くに1967年頃に見られたが今回確認できなかった。県内では極めて稀な植物である。

(3) ムラサキ (ムラサキ科)

Lithospermum erythrorhizon Sieb. et Zucc.

北海道、本州、四国、九州、朝鮮、中国に分布する多年草。草丈50cmになる。白色の小さい花を6~7月に開く。根を紫色の染料として用いた。県内に八ヶ岳、帶那山、四尾連湖、御坂山地、三ツ峠山、大月市神楽山等の産地が知られるが、いずれも少なくつつある。岩殿山では七社権現周辺から上にかけて点々と見られたが、今回の調査では確認できなかった。猿橋の神楽山・山王山の産地も大規模宅地造成によって絶滅してしまった。



第191図 ヒメウラジロ (ワラビ科)



第192図 ミヤマウラジロ (ワラビ科)



第193図 ムギラン (ラン科)

(4) ウチョウラン (ラン科)

Orchis graminifolia Tang et Wang

関東以西の本州、四国、九州、朝鮮の暖帯に生える多年草。花は紅紫色で6～8月に開く。県内各地にやや稀に見られたが、現在は絶滅に近いようである。当山の鏡岩周辺、この山の西の兜岩、稚児落周辺には普通に見られた。戦前までは高月橋周辺にもあったという。特に、この山には白花品も生えていたと伝えられている。今回の調査では確認されなかった。もともとは野草であったものが品種改良されて、現在は山野草の主流商品として販売されている。

(5) セキコク (ラン科)

Dendrobium moniliforme (L.) SW.

岩手県以南の本州、四国、九州、朝鮮、中国の暖帯に分布。岩上や樹上に生える多年草。草丈5～25cm。白か淡紅色の花を5～6月に付ける。県内では御岳昇仙峡、富沢町奥山が産地であった。本山では鏡岩の西南部にみられたが、数年前頃から見られなくなった。

(6) カキラン (ラン科)

Epipactis Thunbergii A.Gray

北海道、本州、四国、九州、朝鮮、中国東北部に生える多年草。山間の湿った地に生える多年草。6～7月に橙紅色の花を横向きに開く。県内には一宮町、御坂山地に稀に生える。本山には1970年ころまでは北斜面の中腹の沢近くに数株生えていたが、その後見られなくなった。

(7) ミスミソウ (キンポウゲ科)

Hepatica acuta Britton

中国地方以西の本州、九州北部の山地の木陰に生える多年草。葉は根もとから叢生し、3浅裂する。2～4月に白色の花を開く。県内産地には芦川渓谷、市川大門、下部、蝕沢、大月市浅利、上野原町大野がある。当山では築坂の東に1975年頃までは見られたが、現在は絶滅したのか、かつて見た場所では確認できなかつた。

(8) ニッポンフラスクモ (シャジクモ科)

Nitella japonica Allen

本州北部から九州に至る各地の池、沼、溝などに生える日本特産の藻類である。体長は20cm内外で、比較的硬直な感じである。茎の節部から小枝を輪生し、さらにその先で分枝して扇形に広がる。頂上馬洗池に見られたが、池の改修工事によって絶滅した。

(9) シャジクモ (シャジクモ科)

Chara Brauni Gmel.

淡水または汽水の湖水、池、水田などの底の泥・砂などに生える水藻で、体は明緑色で、高さ30cmぐらいになる。体は短い節細胞と長い節細胞が交互に縱に一列に並び、その各節部から4～10本の枝を車輪状にだしていて、体形はスギナによく似ている。分布域は広く全世界に及び、わが国でも北海道、本州、四国、九州にかけて分布している。雌雄の生殖器によって繁殖している。当山では頂上馬洗池に見られた。水鳥によつて運ばれたものであると思われるが、池全面にわたって見ることができた。しかし残念ながら、1970年頃行われた池の改修工事によって絶滅してしまった。

(10) フナバラソウ (ガガイモ科)

Cynanchum atratum Bunge

山野草に生える多年草。草丈は40～80cmで、茎には密に軟毛をつける。葉は対生し、葉身は10cmほどで、下面に軟毛を密生する。濃紫色の花を5～6月に葉腋に付ける。北海道から九州の温帯に稀に生える。県

内でも極めて稀で、市内では初狩町日向と大月市厄王山に自生を見ているが現況は不明である。当山では丸山下部に生えていたが、たび重なる下刈りによって絶滅してしまった。

第6節 植物目録

1. 凡例

- (1) 本目録は岩殿山に自生するシダ植物以上の高等植物について記載した。但し特殊な植栽品について若干記載した。
- (2) 本目録は完璧を期したが、調査期間の制約によって幾許かの欠落種はあろうかと思われる。
- (3) 使用した学名と和名及び科の配列は大井次三郎著『日本植物誌』を参考とした。
- (4) 分布量については地域全体から勘案しての目安で「多い」、「普通」、「少」、「希」の4段階で示した。
- (5) 日本国内分布で暖帯とは年平均気温13℃以上21℃未満の地域、温帯とは年平均気温6℃以上13℃未満の地域をいう。
- (6) 岩殿山を東西に走る稜線によってA（南斜面）、B（北斜面）の2植物区に分けてその分布量を示した。



第194図 岩殿山植物分布調査区域

2. 植物目録に記載した植物数

種子植物	SPERMATOPHYTA	
裸子植物	GYMNOSPERMAE	
イチイ科	TAXACEAE	1
イスガヤ科	CEPHALOTAXACEAE	1
マツ科	PINACEAE	2
スギ科	TAXODIACEAE	1
ヒノキ科	CUPRESSACEAE	2
被子植物	ANGIOSPERMAE	
單子葉植物	MONOCOTYLEDONEAE	
イネ科	GRAMINEAE	41
カヤツリグサ科	CYPERACEAE	9
サトイモ科	ARACEAE	4
ツユクサ科	COMMELINACEAE	1
イグサ科	JUNCACEAE	2
ユリ科	LILIACEAE	19
ヤマノイモ科	DIOSCOREACEAE	4
ラン科	ORCHIDACEAE	5
双子葉植物	DICOTYLEDONEAE	
離弁花類	CHORIPETALAE	
ドクダミ科	SAURURACEAE	1
センブリヨウ科	CHLORANTHACEAE	2
ヤナギ科	SALICACEAE	1
クルミ科	JUGLANDACEAE	1
カバノキ科	BETULACEAE	6
ブナ科	FAGACEAE	8
ニレ科	ULMACEAE	4
クワ科	MORACEAE	3
イラクサ科	URTICACEAE	6
ビャクダン科	SANTALACEAE	2
タデ科	POLYGONACEAE	8
アカザ科	CHIENOPODIACEAE	1
ヒュ科	AMARANTHACEAE	4
ヤマゴボウ科	PHYTOLACCACEAE	1
スペリヒュ科	PORTURACACEAE	1
ザクロソウ科	AIZOACEAE	1
ナデシコ科	CARYOPHYLLACEAE	8
フサザクラ科	EUPTELEACEAE	1
キンポウゲ科	RANUNCULACEAE	11
アケビ科	LARDIZBALACEAE	2

メギ科	BERBERIDACEAE	3
ツヅラフジ科	MENISPERMACEAE	2
モクレン科	MAGNOLIACEAE	2
クヌキ科	LAURACEAE	4
ケシ科	PAPAVERACEAE	4
アブラナ科	CRUCIFERAE	6
ベンケイソウ科	CRASSULACEAE	4
ユキノシタ科	SAXIFRAGACEAE	7
マンサク科	HAMAMELIACEAE	1
バラ科	ROSACEAE	25
マメ科	LEGUMINOSAE	24
フウロソウ科	GERANIACEAE	1
カタバミ科	OXALIDACEAE	1
ミカン科	RUTACEAE	5
ヒメハギ科	POLYGALACEAE	1
トウダイグサ科	EUPHORBIACEAE	5
ウルシ科	ANACARDIACEAE	3
モチノキ科	AQUIFOLIACEAE	2
ニシキギ科	CELASTRACEAE	5
ミツバウツギ科	STAPHYLEACEAE	1
カエデ科	ACERACEAE	7
アワブキ科	SABIACEAE	2
ムクロジ科	SAPINDACEAE	1
ツリフネソウ科	BALSAMINACEAE	1
クロウメモドキ科	RHAMNACEAE	2
ブドウ科	VITACEAE	4
シナノキ科	TILIACEAE	2
マタタビ科	ACTINIDIACEAE	1
オトギリソウ科	GUTTIFERAE	1
スミレ科	VIOLACEAE	4
キブシ科	STACHYURACEAE	1
グミ科	ELAEAGNACEAE	1
アカバナ科	ONAGRACEAE	2
ウコギ科	ARALIACEAE	3
セリ科	UMBELLIFERAE	7
ミズキ科	CORNACEAE	5
合弁花類	GAMOPETALAE	
リョウブ科	CLETHRACEAE	1
イチヤクソウ科	PYROLACEAE	1
ツツジ科	ERICACEAE	4

ヤブコウジ科	MYRSINACEAE	1	スイカズラ科	CAPRIFOLIACEAE	9
サクラソウ科	PRIMULACEAE	2	オミナエシ科	VALERIANACEAE	2
カキノキ科	EBENACEAE	1	ウリ科	CUCURBITACEAE	1
モクセイ科	OLEACEAE	3	キキョウ科	CAMPANULACEAE	4
リンゴ科	GENTIANACEAE	2	キク科	COMPOSITAE	54
カガイモ科	ASCLEPIADACEAE	2	シダ植物 PTERIDOPHYTA		
キヨウチクトウ科	APOCYNACEAE	1	トクサ科	EQUISETACEAE	1
ヒルガオ科	CONVOLVULACEAE	1	イワヒバ科	SELAGINELLACEAE	1
ムラサキ科	BORAGINACEAE	2	ハナヤスリ科	OPIIOGLOSSACEAE	1
クマツヅラ科	VERBENACEAE	3	ゼンマイ科	OSMUNDACEAE	1
シソ科	LABIATAE	14	カニクサ科	SCHIZAEACEAE	1
ナス科	SOLANACEAE	1	ワラビ科	PTERIDACEAE	7
ゴマノハグサ科	SCROPHULARIACEAE	4	シノブ科	DAVALLIACEAE	1
キツネノマゴ科	ACANTHACEAE	1	オシダ科	ASPIDIACEAE	11
ハエドクソウ科	PHRYMACEAE	1	チャセンシダ科	ASPLENIACEAE	1
オオバコ科	PLANTAGINACEAE	1	ウラボシ科	POLYPODIACEAE	2
アカネ科	RUBIACEAE	4			

第16表 岩殿山植物目録集計表

分類	科数	種類数
種子植物	93	434
裸子植物	5	7
被子植物	88	427
單子葉植物	8	85
双子葉植物	80	342
離弁花類	56	222
合弁花類	25	120
シダ植物	10	27
合計	104	461

3. 岩殿山植物目録

種子植物	SPERMATOPHYTA	單子葉植物 MONOCOTYLEDONEAE
裸子植物	GYMNOSPERMAE	イネ科 GRAMINEAE
イチイ科	TAXACEAE	マダケ
カヤ		Rhyllostachys bambusoides Sieb. et Zucc. 常緑竹類。中國原産。植栽。
Torreya nucifera (Linn.) Sieb. et Zucc.		県内普通。B地域(少)。
常緑高木。宮城県から九州までの温帯・暖帯。 県内普通。B地域(少)。		アズマネザサ
イスガヤ科	CEPHALOTAXACEAE	Arundinaria chino (Fr. et Sav.) Makino 常緑竹類。北海道西南部～九州の温帯・暖帯。県 内普通。A地域(多)・B地域(多)。
イスガヤ		ヤダケ
Cephalotaxus harringtonia (Knight.) K.Koch		Sasa japonica (Sieb. et Zucc.) Makino 常緑竹類。本州～九州の温帯・暖帯。 県内やや少ない。B地域(少)。
常緑高木。岩手県以南九州の温帯下部・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。		スズタケ
マツ科 PINACEAE		Sasa borealis (Hack.) Makino 常緑竹類。北海道(中部以北は太平洋側)～九州 の温帯。県内普通。A地域(普通)・B地域(少)。
モミ		ミヤコザサ
Abies firma Sieb. et Zucc.		Sasa nipponica (Makino) Makino 常緑竹類。北海道(中部以北は太平洋側)～九州 の温帯。県内普通。A地域(少)。
常緑高木。秋田県から屋久島までの温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。		イヌギ
アカマツ		Bromus catharticus Vahl 多年草。本州、四国の温帯・暖帯。 帰化普通。A地域(少)・B地域(少)。
Pinus densiflora Sieb. et Zucc.		ヒゲナガズメノチャヒキ
常緑高木。北海道南部から九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(多)・B地域(多)。		Bromus rigidus Roth 1～2年草。帰化植物。ヨーロッパ原産。 県内少。A地域(少)。
スギ科 TAXODIACEAE		オカモジグサ
スギ		Agropyron ciliare (Trin.) Franch. var. minus (Miq.) Ohwi 多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。
Cryptomeria japonica (Linn.fil.) D.Don		県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
常緑高木。本州から九州の太平洋側の温帯・暖帯。 県内普通。ほとんど植林である。B地域(普通)。		ヤマカモジグサ
ヒノキ科 CUPRESSACEAE		Brachypodium sylvaticum (Huds.) P.Beauv. 多年草。日本各地の温帯・暖帯。
ヒノキ		県内普通。B地域(少)。
Chamaecyparis obtusa (Sieb. et Zucc.) Sieb. et Zucc.		ネズミムギ
常緑高木。福島県から屋久島までの温帯・暖帯。 県内普通。植林。B地域(普通)。		
ネズ		
Juniperus rigida Sieb. et Zucc.		
常緑低木。岩手県から九州の温帯・暖帯。 県内やや少ない。A地域(普通)・B地域(少)。		
被子植物 ANGIOSPERMAE		

Lolium multiflorum Lmarck	Eragrostis curvula (Schrad.) Ness
多年草。帰化植物。全世界の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)。	多年草。南アフリカ原産。北アメリカから帰化。 県内普通。A地域(少)。
オオウシノケグサ	ニワホコリ
Festuca rubra Linn.	Eragrostis multicaulis Steud.
多年草。北海道～関東の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)。	1年草。日本各地の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
トボシガラ	チヨウセンガリヤス
Festuca parvigluma Steud.	Cleistogenes hackelii (Honda) Honda
多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(少)。	多年草。本州～九州の温帯。 県内に少ない。A地域(普通)。
カモガヤ	ネズミガヤ
Dactylis glomerata Linn.	Muhlenbergia japonica Steud.
ヨーロッパ原産の帰化植物。北海道～九州の温 帯・暖帯。県内普通。A地域(普通)。	多年草。日本各地の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
ナガハグサ	カラスマギ
Poa pratensis Linn.	Avena fatua Linn.
多年草。ヨーロッパ原産の帰化植物。北海道～九 州の温帯・暖帯。県内普通。A地域(少)。	多年草。ヨーロッパ原産帰化植物。 県内普通。A地域(少)。
スズメノカタビラ	シバ
Poa annua Linn.	Zoysia japonica Steud.
1年草または越年草。日本各地の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)。
タツノヒゲ	トダシバ
Diarrhena japonica Franch. et Savat.	Arundinella hiruta (Thunb.) C. Tanaka
1年草または越年草。日本各地の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(少)。	多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)。
ウラハグサ	カニツリグサ
Hakonechloa macra (Munro) Makino	Trisetum bifidum (Thunb.) Ohwi
多年草。中部地方(太平洋側)の特産種。温帯。 県内やや少。A地域(普通)・B地域(少)。	多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)。
ミチシバ	エノコログサ
Melica onoceti Franch. et Savat.	Setaria viridis (Linn.) Beauv.
多年草。関東以西～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	多年草。日本各地の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
ヒメノガリヤス	ムラサキエノコロ
Calamagrostis hakonensis Franch. et Savat.	Setaria viridis (Linn.) Beauv. forma. misera Honda
多年草。関東以西～九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(少)。	多年草。日本各地の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。
シナダレスズメガヤ	

キンエノコロ <i>Setaria glauca</i> (Linn.) Beauv.	多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	多年草。北海道～琉球の温帯・亚热带。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
メヒシバ <i>Digitaria adscendens</i> (H.B.K.) Henr.	多年草。日本各地の温帯・暖帯・亚热带。 県内普通。B地域(少)。	オガルカヤ <i>Cymbopogon tortilis</i> (presl) Hitchc. var. <i>Gocringii</i> (Hand. Mazz.) T.Koyama 多年草。北海道～琉球の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)。
チカラシバ <i>Pennisetum alopecuroides</i> (Linn.) Sprengel	多年草。日本各地の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。	メガルカヤ <i>Themeda triandra</i> Forssk subsp <i>japonica</i> T.Koyama 多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)。
チヂミザザ <i>Oplismenus undulatifolius</i> (Ard.) Roemer et Schul.	多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	カヤツリグサ科 CYPERACEAE カヤツリグサ <i>Cyperus microiria</i> Stend. 1年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)。
スズメノヒエ <i>Paspalum thunbergii</i> Kunth	多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)。	アオスゲ <i>Carex breviculmis</i> R. Br. 多年草。日本各地の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(少)。
アブラスキ <i>Eccloiporus cotulifer</i> (Thunb.) A.Camus	多年草。日本各地の温帯・暖帯・亚热带。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	イトスゲ <i>Carex fernaldiana</i> Lév. et Van. 多年草。北海道南部～九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(少)。
チガヤ <i>Imperata cylindrica</i> (Linn.) Beauv.	多年草。日本各地の温帯・暖帯・亚热带。 県内普通。A地域(少)。	タガネソウ <i>Carex siderosticta</i> Ilance 多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(普通)。
ススキ <i>Miscanthus sinensis</i> Anderss.	多年草。日本各地の温帯・暖帯。 県内多し。A地域(普通)・B地域(普通)。	ジュズスゲ <i>Carex ischnostachya</i> Steud. 多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(少)。
オオアブラスキ <i>Spodiopogon sibiricus</i> Trin.	多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。	カンスゲ <i>Carex morrowii</i> Boott 常绿性多年草。本州～九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(普通)。
コブナグサ <i>Arthraxon hispidus</i> (Thunb.) Makino	多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。	ナキリスゲ <i>Carex lenta</i> D.Don

多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)。	多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)。
カワラスゲ <i>Carex incisa</i> Boott	ユリ科 LILIACEAE シユロソウ <i>Veratrum maackii</i> Regel
多年草。北海道・本州の温帯。 県内普通。A地域(少)。	var. <i>japonicum</i> (baker) T.Shimizu 多年草。関東地方以西九州の温帯。 県内普通。A地域(少)。
ヒカゲスゲ <i>Carex humilis</i> Less.	ヤマホトトギス <i>Tricyrtis macropoda</i> Miq.
subsp. <i>lanceolata</i> (Boott) T.Koyama 多年草。本州・四国・九州の温帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	多年草。本州(中部地方以西)～九州の温帯。 県内普通。A地域(少)。
サトイモ科 ARACEAE カラスピシヤク <i>Pinellia ternata</i> (Thunb.) Breitenb.	オオバキボウシ <i>Hosta montana</i> F.Maekawa
多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(少)。	多年草。本州・四国・九州の温帯。 県内普通。A地域(少)。
セキショウ <i>Acorus gramineus</i> Soland.	イワギボウシ <i>Hosta longipes</i> (Franch. et Savat.) Matsum.
湿地に生える多年草。本州・四国・九州の温帯。 県内少。A地域(少)。	多年草。本州・四国・九州の温帯。 県内少。B地域(少)。
ミミガタテンナンショウ (ヒガンマムシグサ型) <i>Arisaema limpatum</i> Nakai et F.Maekawa	ノカンゾウ <i>Hemerocallis longituba</i> Miq.
多年草。本州(関東地方・東北地方)の暖帯上部。 県内少ない。A地域(少)。	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯。 県内普通。B地域(少)。
アオマムシグサ <i>Arisaema japonicum</i> Blume	ノビル <i>Allium grayi</i> Regel
多年草。関東地方以西九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)。	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
ツユクサ科 COMMELINACEAE ツユクサ <i>Commelinina communis</i> Linn.	ウバユリ <i>Lilium cordatum</i> (Thunb.) Koidz.
1年草。北海道・本州・四国・九州の温帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	多年草。本州(関東地方以西)暖帯・温帯。 県内普通。B地域(少)。
イグサ科 JUNCACEAE スズメノヤリ <i>Luzula capitata</i> (Miq.) Miq.	ヤマユリ <i>Lilium auratum</i> Lindl.
多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(少)。	多年草。本州(近畿地方以北)暖帯・温帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
イ <i>Juncus effusus</i> Linn. var. <i>decipiens</i> Buchon	キジカクシ <i>Asparagus schoberioides</i> Kunth
	多年草。日本各地の温帯・暖帯・亜热带。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。

ミヤマナルコユリ	ヤマノイモ科 DIOSCOREACEAE
Polygonatum lasianthum Maxim.	タチドコロ
多年草。北海道・本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。A (少)・B 地域 (少)。	Dioscorea gracillima Miq.
ナルコユリ	多年草。本州・四国・九州の温帯下部・暖帯。 県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (少)。
Polygonatum falcatum A.Gray	ヤマノイモ
多年草。本州・四国・九州の暖帯・温帯。 県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (少)。	Dioscorea japonica Thunb.
ホウチャクソウ	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。B 地域 (少)。
Disporum sessile Don	オニドコロ
多年草。日本各地の温帯・暖帯・亚热带。 県内普通。A 地域 (普通)・B 地域 (少)。	Dioscorea tokoro Makino
チゴユリ	多年草。北海道～琉球の温帯・暖帯。 県内普通。A 地域 (少)。
Disporum smilacinum A.Gray	ウチワドコロ
多年草。北海道～九州の温帯。 県内普通。A 地域 (多)・B 地域 (多)。	Dioscorea nipponica Makino
カタクリ	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。B 地域 (少)。
Erythronium japonicum Decne.	ラン科 ORCHIDACEAE
多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。B 地域 (多)。	キンラン
コヤブラン	Cephalanthera falcata (Thunb.) Blume
Liriopspicata Lour.	多年草。本州 (秋田県) 以西の暖帯。 県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (少)。
ヒメヤブラン	サザバギンラン
Liriopspicata (Maxim.) Makino	Cephalanthera longibracteata Blume
多年草。本州・四国・九州・琉球の暖帯。 県内普通。A 地域 (少)。	多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (少)。
サルトリイバラ	ネジバナ
Smilax china Linn.	Spiranthes sinensis (Pers.) Ames.
落葉低木。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (少)。	多年草。北海道～琉球の温帯・暖帯。 県内普通。B 地域 (少)。
タチシオデ	サイハイラン
Smilax nipponica Miq.	Cremastra appendiculata (D.Don) Makino
多年草。本州・四国・九州の温帯。 県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (少)。	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A 地域 (少)。
ヤマカシユウ	シュンラン
Smilax Sieboldii Miq.	Cymbidium virescens Lindl.
多年草。本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (少)。	多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (少)。
	双子葉植物 DICOTYLEDONEAE

離弁花類 CHORIPETALAE	落葉高木。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖 帶。県内普通。A地域(少)・B地域(普通)。
ドクダミ科 SAURURACEAE	アサダ
ドクダミ	Ostrya japonica Sarg.
Houttuynia cordata Thunb.	落葉高木。北海道・本州・四国・九州の温帯。 県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。
多年草。本州・四国・九州・琉球の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(少)。	ツノハシバミ
センリヨウ科 CHLORANTHACEAE	Corylus sieboldiana Blume
ヒトリシズカ	落葉小高木。北海道・本州・四国・九州の温帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
Chloranthus japonicus Sieb.	ブナ科 FAGACEAE
多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	イスブナ
フタリシズカ	Fagus japonica Maxim.
Chloranthus serratus (Thunb.) Roem. et Schult.	落葉高木。北海道・本州・四国・九州の温帯上部。 県内普通。B地域(少)。
多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	シラカシ
ヤナギ科 SALICACEAE	Quercus myrsinaefolia Blume
バッコヤナギ	常緑高木。本州(福島県以南)・四国・九州の暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
Salix bakko Kimura	アラカシ
落葉高木。北海道(西南部)・本州・四国の温帯。 県内普通。B地域(少)。	Quercus glauca Thunb.
クルミ科 JUGLANDACEAE	常緑高木。宮城以南の本州～琉球の暖帯。 県内普通。A地域(普通)・B地域(少)。
オニグルミ	コナラ
Juglans ailanthifolia Carr.	Quercus serrata Thunb.
落葉高木。北海道・本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。A地域(少)。	落葉高木。北海道・本州・四国・九州の温帯下部。 県内普通。A地域(多)・B地域(多)。葉の大き いオオバコナラtypeのものも見られる。
カバノキ科 BETULACEAE	テリハコナラ
イヌシデ	Quercus serrata Thunb. var. donarium (Nakai) Kitam. et Horikawa
Carpinus tschonoskii Maxim.	落葉高木。北海道・本州・四国・九州の温帯下部。 県内少ない。A地域(少)。
落葉高木。本州(岩手県以南)～九州の温帯・暖 帯。県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	カシワ
アカシデ	Quercus dentata Thunb.
Carpinus laxiflora (Sieb. et Zucc.) Blume	落葉高木。北海道・本州・四国・九州の温帯下部。 県内普通。A地域(少)。
落葉高木。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖 帯。県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。	クヌギ
クマシデ	Quercus acutissima Carruth.
Carpinus japonica Blume	落葉高木。本州(岩手県以南)～琉球の暖帯。
落葉高木。本州・四国・九州の温帯・暖帯上部。 県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。	
サワシバ	
Carpinus cordata Blume	

県内普通。A地域（少）。	多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。
クリ	県内普通。B地域（少）。
<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	ミズ
落葉高木。北海道（西部）から九州の温帯下部・暖帯。県内普通。A地域（少）・B地域（少）。	<i>Pilea hamaoi</i> Makino
ニレ科 ULMACEAE	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。
ハルニレ	県内普通。B地域（少）。
<i>Ulmus davidiana</i> Planch.	アオミズ
var. <i>japonica</i> (Rehd.) Nakai	<i>Pilea mongolica</i> Weddell
落葉高木。北海道・本州の温帯。	1年草。北海道～本州の温帯・暖帯。
県内普通。A地域（少）。	県内普通。A地域（希）。
ケヤキ	カテンソウ
<i>Zelkova serrata</i> (Thunb.) Makino	<i>Nanocnide japonica</i> Blume
落葉高木。本州・四国・九州の温帯・暖帯。	多年草。本州・四国・九州の暖帯。
県内普通。A地域（普通）・B地域（普通）。	県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
エゾエノキ	コアカソ
<i>Celtis jessoensis</i> Koidz.	<i>Boehmeria spicata</i> (Thunb.) Thunb.
落葉高木。北海道・本州・四国・九州の温帯。	多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。
県内普通。A地域（普通）・B地域（普通）。	県内普通。A地域（少）。
エノキ	カラムシ
<i>Celtis sinensis</i> Pers.	<i>Boehmeria nipponivea</i> Koidz.
var. <i>japonica</i> (Planch.) Nakai	多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。
落葉高木。北海道・本州・四国・九州の暖帯。	県内普通。A地域（普通）・B地域（少）。
県内普通。A地域（少）。	ビャクダン科 SANTALACEAE
クワ科 MORACEAE	ツクバネ
クワクサ	<i>Buckleya lanceolate</i> (Sieb. et Zucc.) Miq.
<i>Hatoua villosa</i> (Thunb.) Nakai	多年草。本州・四国の温帯・暖帯。
1年草。本州・四国・九州の暖帯。	県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
県内普通。A地域（少）。	カナビキソウ
ヤマグワ	<i>Thesium chinense</i> Turez.
<i>Morus bombycina</i> Koidz.	半寄生1年草。本州～琉球の温帯・亜熱帯。
落葉高木。日本全土の温帯・暖帯・亜熱帯。	県内普通。A地域（希）。
県内普通。A地域（少）。	タデ科 POLYGONACEAE
コウノ	エゾノギシギシ
<i>Broussonetia kazinoki</i> Sieb.	<i>Rumex obtusifolius</i> Linn.
つる性木本。日本全土の温帯・暖帯。	多年草。ヨーロッパ原産の帰化植物。
県内普通。B地域（少）。	県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
イラクサ科 URTICACEAE	アレチギシギシ
イラクサ	<i>Rumex conglomeratus</i> Murr.
<i>Urtica thunbergiana</i> Sieb. et Zucc.	多年草。ヨーロッパ原産の帰化植物。
	県内普通。A地域（少）。

ミズヒキ	城（少）。
Polygonum filiforme Thunb.	ヒカゲイノコズチ
多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域（少）。	Achyranthes japonica (Miq.) Nakai 多年草。本州・四国・九州・琉球の暖帯。 県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
ミチヤナギ	ヒナタイノコズチ
Polygonum aviculare Linn.	Achyranthes fauriei Lev. et Van. 多年草。本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
オオミゾソバ	ヤマゴボウ科 PIYTOOLACCACEAE
Polygonum thunbergii Sieb. et Zucc. var. stoloniferum Makino	ヨウシュヤマゴボウ
1年草。日本全土の温帯・暖帯。 県内普通。A地域（少）。	Phytolacca americana Linn. 多年草。北アメリカ原産帰化。 県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
イスタデ	スペリヒユ科 PORTURACACEAE
Polygonum longisetum De Bruyn	スペリヒユ
多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域（少）。	Portulaca oleracea Linn. 1年草。全世界に広く分布温帯～熱帯。 県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
ハナタデ	ザクロソウ科 AIZOACEAE
Polygonum Yokosanum (Makino) Nakai	ザクロソウ
多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域（少）。	Mollugo pentaphylla Linn. 1年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域（希）。
イタドリ	ナデシコ科 CARYOPHYLLACEAE
Polygonum cuspidatum Sieb. et Zucc.	ツメクサ
多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域（普通）・B地域（普通）。 アカザ科 CHENOPODIACEAE	Sagina japonica (Sw.) Ohwi 多年草。日本全土の温帯～亜熱帯 県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
アカザ	ノミノツヅリ
Chenopodium vigatum Linn. var. centroubrum Makino	Arenaria serpyllifolia linn. 多年草。日本全土の温帯～亜熱帯。 県内普通。B地域（少）。
1年草。本州・四国・九州・琉球の暖帯。 県内普通。A地域（少）・B地域（少）。	ミミナグサ
ヒユ科 AMARANTHACEAE	Cerastium caespitosum Gilib. var. iantes (will.) Hara
ケアリタソウ	越年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
Chenopodium ambrosioides Linn.	ウシハコベ
1年草。南アメリカ原産の帰化植物。 県内普通。A地域（少）。	Stellaria aquatica (Linn.) Scop.
ホソアオゲイトウ	
Amaranthus patulus Bertoloni	
1年草。熱帯アメリカ原産の帰化植物。北海道～ 九州の温帯・暖帯。県内普通。A地域（少）・B地	

多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)。	帶。県内普通。B地域(少)。
ハコベ <i>Stellaria media</i> (Linn.) Villars.	イチリンソウ <i>Anemone nikoensis</i> Maxim.
多年草。日本全土の温帯～亜熱帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(少)。
ナンバンハコベ <i>Cucubalus baccifer</i> Linn.	アズマイチゲ <i>Anemone raddeana</i> Regel
多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(希)。	多年草。北海道・本州・四国、温帯。 県内普通。B地域(少)。
カワラナデシコ <i>Dianthus superbus</i> Linn.	ウマノアシガタ <i>Ranunculus japonicus</i> Thunb.
多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	多年草。北海道(西南部)～日本全土の温帯～亜 熱帯。県内普通。A地域(普通)。
ケフシグロ <i>Melandryum firmum</i> (Sieb. et Zucc.) Rohrb. forma pubescens (Makino) Makino	ケキツネノボタン <i>Ranunculus cantoniensis</i> DC.
多年草。北海道～琉球の温帯・暖帯・亜熱帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯。 県内普通。B地域(少)。
フサザクラ科 EUPTELEACEAE <i>Euptelea polyandra</i> Sieb. et Zucc.	アキカラマツ <i>Thalictrum minus</i> Linn.
落葉高木。本州・四国・九州の温帯。 県内普通。B地域(普通)。	var. <i>hypocucum</i> (Sieb. et Zucc.) Miq. 多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯。 県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。
キンポウゲ科 RANUNCULACEAE ハンショウヅル <i>Clematis japonica</i> Thunb.	オオバショウマ <i>Cimicifuga acerina</i> (Sieb. et Zucc.) C.Tanaka
落葉藤本。本州・九州の温帯。 県内普通。B地域(少)。	多年草。本州・四国・九州の温帯。 県内普通。B地域(少)。
クサボタン <i>Clematis stans</i> Sieb. et Zucc.	イスショウマ <i>Cimicifuga japonica</i> (Thunb.) Sprengel
多年草。本州の温帯。県内普通。A地域(普通)・ B地域(普通)。	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯。 県内普通。B地域(少)。
ボタンヅル <i>Clematis apilifolia</i> DC.	アケビ科 LARDIZABALACEAE アケビ <i>Akebia quinata</i> (Thunb.) Decaisne
落葉藤本。本州・四国・九州の温帯。 県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。	落葉藤本。本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。
センニンソウ <i>Clematis terniflora</i> DC.	ミツバアケビ <i>Akebia trifoliata</i> (Thunb.) Koidz.
細い藤本。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯。 県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。
	メギ科 BERBERIDACEAE

メギ

Berberis thunbergii DC.

落葉低木。本州（関東以西）・四国・九州の温帶・暖帶。県内普通。A地域（少）。

ナンテン

Nandina domestica Thunb.

常綠低木。東海道以西の本州・四国・九州の暖帶。県内岐南地方少。A地域（普通）・B地域（普通）。

イカリソウ

Epimedium grandiflorum Morr.

var. *thunbergiaum* (Miq.) Nakai

落葉低木。奥羽以南の太平洋側の本州・四国の暖帶・温帶。県内普通。B地域（普通）。

ツヅラフジ科 MENISPERMACEAE

コウモリカズラ

Menispermum dauricum DC.

落葉藤本。北海道・本州・四国・九州の温帶・暖帶。県内普通。B地域（希）。

アオツヅラフジ

Cocculus trilobus (Thunb.) DC.

落葉藤本。本州・四国・九州の温帶・暖帶。県内普通。A地域（普通）・B地域（少）。

モクレン科 MAGNOLIACEAE

ホオノキ

Magnolia obovata Thunberg

落葉高木。北海道・本州・四国・九州の温帶・暖帶。県内普通。A地域（少）・B地域（少）。

コブシ

Magnolia Kobus DC.

落葉高木。北海道・本州・四国・九州の温帶・暖帶。県内普通。B地域（希）。

クスノキ科 LAURACEAE

ダンコウバイ

Lindera obtusiloba Blume

落葉小高木。本州（関東以西）・四国・九州の温帶・暖帶。県内普通。A地域（普通）・B地域（普通）。

ヤマコウバシ

Lindera glauca (Sieb. et Zucc.) Blume

落葉小高木。本州（関東以西）・四国・九州の温帶・暖帶。県内普通。A地域（普通）・B地域（普通）。

アブラチャン

Parabenzoin praecox (Sieb. et Zucc.) Nakai

落葉小高木。本州・四国・九州の温帶下部・暖帶。県内普通。A地域（普通）・B地域（普通）。

クロモジ

Lindera umbellata Thunb.

落葉低木。本州・四国・九州の温帶下部・暖帶。県内普通。A地域（少）・B地域（少）。

ケシ科 PAPAVERACEAE

クサノオウ

Chelidonium majus Linn. Subsp. *asiaticum* Hara

多年草。北海道・本州・四国・九州の温帶・暖帶。県内普通。A地域（少）・B地域（少）。

タケニグサ

Macleaya cordata (Willd.) R.Br.

多年草。本州・四国・九州の温帶・暖帶。県内普通。A地域（少）・B地域（少）。

ムラサキケマン

Corydalis incisa (Thunb.) Pers.

多年草。本州・四国・九州・琉球の温帶・暖帶。県内普通。B地域（少）。

ミヤマキケマン

Corydalis hondoensis Ohwi

多年草。本州（近畿地方以東）の温帶・暖帶。県内普通。B地域（少）。

アブラナ科 CRUCIFERAE

マメグンバイナズナ

Lepidium virginicum Linn.

多年草。北アメリカ原産の帰化植物。県内普通。A地域（少）・B地域（少）。

タネツケバナ

Cardamine flexuosa With.

多年草。本州全土の温帶・暖帶。県内普通。B地域（少）。

ジャニンジン

Cardamine impatiens Linn.

多年草。本州全土の温帶・暖帶。県内普通。A地域（少）・B地域（少）。

イスガラシ

Rorippa indica (Linn.) Hochr.

多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(少)。	県内普通。B地域(少)。
ナズナ <i>Capsella bursa-pastoris</i> (Linn.) Medik.	バイカウツギ <i>Philadelphus satsumi</i> Sieb, ex Lindl. et Paxton
多年草。日本全土の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	落葉低木。本州(福島県以南)～九州の温帯・暖帯。県内普通。B地域(少)。
ヤマハタザオ <i>Arabis hirsuta</i> (Linn.) Scop.	ウツギ <i>Deutzia crenata</i> Sieb. et Zucc.
多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	落葉低木。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。
ペンケイソウ科 CRASSULACEAE	マルバウツギ <i>Deutzia scabra</i> Thunb.
ホソバキリンソウ <i>Sedum aizoon</i> Linn.	落葉低木。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
多年草。北海道・本州・温帯・暖帯。 県内少。A地域(普通)。	ヒメウツギ <i>Deutzia gracilis</i> Sieb. et Zucc.
コモチマンネングサ <i>Sedum bulbiferum</i> Makino	落葉低木。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
多年草。本州・四国・九州の暖帯。 県内少。A地域(少)・B地域(少)。	マンサク科 MAMMELIDACEAE
ツルマンネングサ <i>Sedum sarmentosum</i> Bunge	マンサク <i>Hamamelis japonica</i> Sieb. et Zucc.
多年草。中国原産の帰化植物。 県内稀。B地域(希)。	落葉小高木。本州(太平洋側)～九州の温帯。県内普通。B地域(普通)。
ツメレンゲ <i>Orostachys erubescens</i> (Maxim.) Ohwi	バラ科 ROSACEAE
多年草。関東以西の本州・四国・九州の暖帯。 県内少。△地域(少)・B地域(少)。	カナウツギ <i>Stephanandra tanakae</i> Franch. et Savat.
ユキノシタ科 SAXIFRAGACEAE	落葉低木。本州(静岡・神奈川・山梨)の温帯。 県内少。B地域(少)。
アカシヨウマ <i>Astilbe thunbergii</i> (Sieb. et Zucc.) Miq.	コゴメウツギ <i>Stephanandra incisa</i> (Thunb.) Zabel
多年草。本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。B地域(少)。	落葉低木。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。
タマアジサイ <i>Hydrangea involucrata</i> Siebold	アイズミツケ <i>Spiraea chamaedryfolia</i> Linn.
落葉低木。本州(福島県～中部地方)の暖帯・温帯。県内普通。B地域(少)。	落葉低木。北海道・本州・九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(少)。
ヤマアジサイ <i>Hydrangea macrophylla</i> (Thunb.) Ser.	シモツケ <i>Spiraea japonica</i> Linn.fil.
var. <i>acuminata</i> (Sieb. et Zucc.) Makino	落葉低木。北海道・本州・九州の温帯・暖帯。 県内普通。△地域(普通)・B地域(普通)。
落葉低木。本州(関東以西)～四国・九州の温帯	ヤマブキ

<i>Kerria japonica</i> (Linn.) DC.	落葉低木。富士箱根・紀伊半島・四国の温帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
落葉低木。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖 帯。県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。	
<i>Hebe ichinge</i>	
<i>Duchesnea chrysanthia</i> (Zoll. et Mor.) Miq.	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	
<i>Potentilla fragarioides</i> Linn. var. <i>major</i> Maxim.	
多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(希)。	
<i>Potentilla cryptotaeniae</i> Maxim	
多年草。北海道・本州・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(小)。	
<i>Rubus moluccanus</i> Thunb.	
<i>Rubus palmatus</i> Thunb. var. <i>corytophyllus</i> (A. Gray) Koidz.	落葉低木。本州(中部地方以北)の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
落葉低木。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖 帯。県内普通。A地域(普通)・B地域(少)。	
<i>Rubus parvifolius</i> Linn.	
落葉低木。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖 帯。県内普通。A地域(普通)・B地域(少)。	
<i>Rosa multiflora</i> Thunb.	
落葉低木。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖 帯。県内普通。B地域(普通)。	
<i>Rosa luciae</i> Franch. et Rosch subsp. <i>hakonensis</i> (Fr. et Sav.) Kitamura	
落葉低木。本州(関東以西)・四国・九州の温・ 暖帯。県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	
<i>Rosa wichuraiana</i> Crep.	
落葉低木。本州・四国・九州・琉球の温帯～亚热 带。県内普通。A地域(少)。	
<i>Rosa luciae franch. et Rochebr.</i> var. <i>fujisanensis</i> Makino	
	落葉低木。富士箱根・紀伊半島・四国の温帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
	<i>Kiminzibiki</i>
	<i>Agrimonia pilosa</i> Ledeb.
	多年草。本州・四国・九州・琉球の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)。
	<i>Chiosyzygium</i>
	<i>Prunus apetala</i> (Sieb. et Zucc.) Franch. et Savat.
	落葉低木。本州・九州の温帯。
	県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。
	<i>Mameza</i> (Fuzza)
	<i>Prunus incisa</i> Thunb.
	落葉小高木。本州(中部地方・関東地方)の温帯。 県内普通。A地域(普通)・B地域(少)。
	<i>Kasumizaka</i>
	<i>Prunus verecunda</i> (Koidz.) Koehne
	落葉高木。北海道・本州・四国・九州の温帯。 県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。
	<i>Uwazimazaka</i>
	<i>Prunus grayana</i> Maxim.
	落葉高木。北海道・本州・四国・九州の温帯。 県内普通。B地域(少)。
	<i>Waramokuwa</i>
	<i>Sanguisorba officinalis</i> Linn.
	多年草。北海道・本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。A地域(少)。
	<i>Kasaboke</i>
	<i>Chaenomeles japonica</i> (Thunb.) Spach
	落葉低木。本州・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)。
	<i>Zumi</i>
	<i>Malus sieboldii</i> (Regel) Rehder
	落葉小高木。北海道・本州・四国・九州の温帯。 県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。
	<i>Zayifribok</i>
	<i>Amelanchier asiatica</i> (Sieb. et Zucc.) Endl.
	落葉小高木。岩手県以南の本州・四国・九州の温 帯。県内稀。A地域(少)・B地域(少)。
	<i>Keikomasuka</i>
	<i>Pourthiaca villosa</i> (Thunb.) Decne.

var. <i>zollingeri</i> (Decne.) Nakai 落葉高木。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(少)。	落葉低木。本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
アズキナシ <i>Sorbus alnifolia</i> (Sieb. et Zucc.) C.Koch 落葉高木。北海道・本州・四国・九州の温帯。 県内普通。B地域(普通)。	メドハギ <i>Lespedeza cuneata</i> G.Don 多年草。日本全土の温帯・暖帯・亜熱帯。 県内普通。A地域(少)。
マメ科 LEGUMINOSAE ネムノキ <i>Albizzia Julibrissin</i> Durazz. 落葉高木。北海道・本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。	ネコハギ <i>Lespedeza pilosa</i> (Thunb.) Sieb. et Zucc. 多年草。本州・四国・九州の暖帯。 県内少。A地域(少)。
ジャケツイバラ <i>Caesalpinia japonica</i> Sieb. et Zucc. 落葉低木。山形県以西の本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。A地域(普通)。	フジカンゾウ <i>Desmodium oldhamii</i> Oliver 多年草。本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。A地域(少)。
クララ <i>Sophora flavescens</i> Aiton. 多年草。本州・四国・九州の暖帯。 県内少。A地域(少)。	ヌスピトハギ <i>Desmodium oxyphyllum</i> DC. 多年草。日本全土の温帯・暖帯・亜熱帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
フジキ <i>Cladastis platycarpa</i> (Maxim.) Makino 落葉高木。本州(福島県以南)・四国の温帯。 県内少。A地域(少)・B地域(少)。	カラスノエンドウ <i>Vicia sepium</i> Linn. 越年草。本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。A地域(少)。
イヌエンジユ <i>Maackia amurensis</i> Rupr. et Maxim. var. <i>buergeri</i> (Maxim.) C.K.Schn. 落葉高木。北海道・本州(中部以北)の温帯。 県内普通。B地域(少)。	スズメノエンドウ <i>Vicia hirsuta</i> (Linn.) S.F.Gray 越年草。本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。B地域(普通)。
キハギ <i>Lespedeza buergeri</i> Miq. 落葉高木。北海道・本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	ナンテンハギ <i>Vicia unijuga</i> A.Br. 多年草。北海道・本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。
ヤマハギ <i>Lespedeza bicolor</i> Turcz. forma <i>acutifolia</i> Matsum. 落葉低木。北海道・本州・四国・九州の温帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	イタチササゲ <i>Lathyrus davidii</i> Hance 多年草。北海道・本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。B地域(少)。
マルバハギ <i>Lespedeza cyrtobotrya</i> Miq.	トキリマメ <i>Rhynchosia acuminatifolia</i> Makino 多年草。関東地方以西の本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
	クズ <i>Pueraria lobata</i> (Willd.) Ohwi

多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内多。A地域(普通)・B地域(普通)。	Zanthoxylum piperitum (Linn.) DC. 落葉低木。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
ヤブマメ <i>Amphicarpaca edgeworthii</i> Benth.	イヌザンショウ <i>Zanthoxylum schinifolium</i> Sieb. et Zucc. 落葉低木。本州・四国・九州の暖帯・温帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内多。A地域(少)・B地域(少)。	コマツナギ <i>Indigofera pseudo-tinctoria</i> Matsum.
草本様小低木。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内多。A地域(普通)・B地域(普通)。	Orixa japonica Thunb. 落葉低木。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(少)。
ワジ <i>Wisteria floribunda</i> (Willd.) DC.	マツカゼソウ <i>Boenninghausenia japonica</i> Nakai 多年草。本州・四国・九州の暖帯・温帯。 県内多。B地域(少)。
落葉藤本。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内多。A地域(普通)・B地域(普通)。	ミヤマシキミ <i>Skimmia japonica</i> Thunb. 常緑低木。関東以西の本州・四国・九州の温帯。 県内少。B地域(少)。
ミヤコグサ <i>Lotus corniculatus</i> Linn. Var. <i>Japonicus</i> Regel	ヒメハギ科 POLYGALACEAE ヒメハギ <i>Polygala japonica</i> Houtt. 常緑多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)。
多年草。北海道～琉球の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)。	トウダイグサ科 EUPHORBIACEAE アカメガシワ <i>Mallotus japonicus</i> (Thunb.) Muell.Arg.
ハリエンジュ <i>Robinia pseudo-acacia</i> Linn.	落葉高木。本州(岩手県以南)四国・九州の暖帯。 県内普通。A地域(少)。
落葉高木。北米原産種の逸出。 県内普通。A地域(普通)。	シラキ <i>Sapium japonicum</i> (Sieb. et Zucc.) Pax. et Hoffm. 落葉小高木。本州(秋田県以南)～琉球の暖帯。 県内少。A地域(少)・B地域(普通)。
シロツメクサ <i>Trifolium repens</i> Linn.	エノキグサ <i>Acalypha australis</i> Linn. 1年草。北海道・本州・四国・九州、琉球の暖帯。 県内少。A地域(少)・B地域(少)。
多年草。ヨーロッパ原産の帰化植物。 県内多。A地域(普通)・B地域(普通)。	コニシキソウ <i>Euphorbia supina</i> Rafin.
フウロソウ科 GERANIACEAE ゲンノショウコ	
Geranium thunbergii Sieb. et Zucc.	
多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内多。A地域(少)。	
カタバミ科 OXALIDACEAE カタバミ	
Oxalis corniculata Linn.	
多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯。 県内多。A地域(少)。	
ミカン科 RUTACEAE サンショウ	

1年草。北アメリカ原産の帰化植物。	form. ciliatidentatus (Fr. et sav.) Hiyama
県内普通。A地域(少)。	落葉低木。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。県内普通。B地域(少)。
タカトウダイ	カントウマユミ
Euphorbia pekinensis Rupr.	<i>Euonymus sieboldianus</i> Blume
多年草。本州・四国・九州の暖帯。	var. sanguineus Nakai
県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。	落葉亞高木。中部地方の温帯・暖帯。
ウルシ科 ANACARDIACEAE	県内普通。A地域(少)。
ツタウルシ	ツリバナ
Rhus ambigua Lavallee, ex Dippel	<i>Euonymus oxyphyllus</i> Miq.
落葉藤本。本州・四国・九州の温帯・暖帯。	落葉亞高木。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。
県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。
ヤマウルシ	ミツバウツギ科 STAPHYLEACEAE
Rhus trichocarpa Miq.	ミツバウツギ
落葉小高木。北海道～九州の温帯・暖帯。	<i>Staphylea bumalda</i> (Thunb.) DC.
県内普通。B地域(普通)。	落葉低木。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。県内普通。B地域(普通)。
ヌルデ	カエデ科 ACERACEAE
Rhus javanica Linn.	イロハモミジ
落葉小高木。日本全土の温帯・暖帯。	<i>Acer palmatum</i> Thunb.
県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。	落葉高木。本州・四国・九州の暖帯。
モチノキ科 AQUIFOLIACEAE	県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
アオハダ	オオモミジ
Ilex macropoda Miq.	<i>Acer palmatum</i> Thunb. var. <i>amoenum</i> (Carr.) Ohwi
落葉小高木。北海道～九州の温帯・暖帯。	落葉高木。本州・四国・九州の暖帯。
県内普通。B地域(普通)。	県内普通。B地域(少)。
イヌツゲ	エンコウカエデ
Ilex crenata Thunb.	<i>Acer mono</i> Maxim. var. <i>dissectum</i> Honda
落葉小高木。本州・四国・九州の温帯・暖帯。	落葉高木。本州・四国・九州の温帯。
県内普通。B地域(少)。	県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。
ニシキギ	ウリカエデ
Euonymus alatus (Thunb.) Sieb.	<i>Acer crataegifolium</i> Sieb. et Zucc.
落葉低木。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	落葉高木。本州(福島県以南)・四国・九州の暖帯。
ツルマサキ	県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。
Euonymus fortunei (Turcz.) Hand-Mazz.	ウリハダカエデ
var. <i>radicans</i> (Sieb. ex Miq.) Rehd.	<i>Acer rufinerve</i> Sieb. et Zucc.
常緑つる性木本。本州・四国・九州の温帯・暖帯。	落葉高木。本州・四国・九州の温帯・暖帯。
県内普通。B地域(少)。	県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。
コマユミ	カジカエデ
Euonymus alatus (Thunb.) Sieb.	

Acer diabolicum Blume, ex Koch	サンカクヅル
落葉高木。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(普通)。	Vitis flexuosa Thunb.
メグスリノキ	落葉藤本。本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。B地域(普通)。
Acer nikoense Maxim.	ノブドウ
落葉高木。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(普通)。	Ampelopsis brevipedunculata (Maxim.) Planch.
アワブキ科 SABIACEAE	落葉藤本。本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。B地域(普通)。
アワブキ	ナツヅタ
Meliosma myriantha Sieb. et Zucc.	Parthenocissus tricuspidata (Sieb. et Zucc.) Trautv.
落葉高木。本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。B地域(普通)。	落葉藤本。北海道・本州・四国・九州の温帯・温 帶。県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。
ミヤマハハソ	シナノキ科 TILIACEAE
Meliosma tenuis Maxim.	シナノキ
落葉高木。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(少)。	Tilia japonica (Miq.) Simonkai
ムクロジ科 SAPINDACEAE	落葉高木。北海道・本州・四国・九州の温帯・温 帶。県内普通。B地域(少)。
ムクロジ	カラスノゴマ
Sapindus mukorossi Gaertn.	Corchoropsis tomentosa (Thunb.) Makino
落葉高木。中部以西の本州～九州の温帯・暖帯。 県内少。A地域(希)。	1年草。本州・四国・九州の暖帯・温帯。 県内普通。A地域(少)。
ツリフネソウ科 BALSAMINACEAE	マタタビ科 ACTINIDIACEAE
ツリフネソウ	マタタビ
Impatiens textori Miq.	Actinidia polygama (Sieb. et Zucc.) Maxim.
多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(少)。	落葉藤本。北海道・本州・四国・九州の暖帯・温 帶。県内普通。B地域(少)。
クロウメモドキ科 RIIAMNACEAE	オトギリソウ科 GUTTIFERAE
クマヤナギ	オトギリソウ
Berchemia racemosa Sieb. et Zucc.	Hypericum erectum Thunb.
落葉つる低木。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)。	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・温 帶。県内普通。B地域(少)。
ケンボナシ	スミレ科 VIOLACEAE
Hovenia tomentella (Makino) Nakai	スミレ
落葉高木。本州・四国の温帯。 県内普通。B地域(少)。	Viola mandshurica W.Becker
ブドウ科 VITACEAE	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(少)。
ヤマブドウ	タチツボスミレ
Vitis coignetiae Pull.	Viola grypoceras A.Gray
落葉藤本。北海道・本州・四国の温帯。 県内普通。B地域(普通)。	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。

ケマルバスミレ	落葉高木。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。県内普通。A地域(少)。
Viola Keiskei Miq.	セリ科 UMBELLIFERAE
form. Okuboi (Makino) F.Maecawa	オオチドメ
多年草。本州・四国・九州の温帯。	Hydrocotyle remiflora Maxim.
県内少。A地域(少)。	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。
アカネスマレ	県内普通。A地域(少)。
Viola phalacrocarpa Maxim.	ウマノミツバ
多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。	Sanicula chinensis Bunge
県内普通。A地域(少)。	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。
キブシ科 STACHYURACEAE	県内普通。B地域(少)。
キブシ	カノツメソウ
Stachyurus praecox Sieb. et Zucc.	Spuriopimpinella calycina (Maxim.) Kitagawa
落葉小高木。北海道(西南部)から九州の温帯・暖帯。	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。
県内普通。B地域(少)。	県内普通。A地域(少)・B地域(少)。
グミ科 ELAEAGNACEAE	イブキボウフウ
ツクバゲミ	Seseli libanotis Koch var. japonica H.Boiss.
Elaeagnus montana Makino var. ovata (Maxim.)	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯。
Araki	県内普通。A地域(普通)・B地域(少)。
落葉高木。関東・中部地方の温帯。	ヤマゼリ
県内普通。A地域(少)。	Ostericum sieboldii (Miq.) Nakai
アカバナ科 ONAGRACEAE	多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。
アレチマツヨイグサ	県内普通。B地域(少)。
Oenothera parviflora Linn.	ヤブジラミ
多年草。北米原産帰化植物。	Torilis japonica (Houtt.) DC.
県内普通。A地域(少)。	越年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。
オオマツヨイグサ	県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。
Oenothera erythrosepala Borbas	オヤブジラミ
多年草。北アメリカ原産の帰化植物。	Torilis scabra (Thunb.) DC.
県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。	越年草。本州・四国・九州、琉球の暖帯。
ウコギ科 ARALIACEAE	県内少。A地域(少)。
キズタ	ミズキ科 CORNACEAE
Hedera rhombifolia (Miq.) Bean	アオキ
落葉藤本。本州・四国・九州、琉球の暖帯。	Aucuba japonica Thunb.
県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。	常緑低木。北海道・本州・四国・九州、琉球の暖帯。
ヤマウコギ	県内普通。B地域(少)。
Acanthopanax spinosus (Linn.fil.) Miq.	ハナイカダ
落葉低木。北海道・本州の暖帯・温帯。	Illicium japonica (Thunb.) F.G.Dietr.
県内普通。B地域(少)。	落葉低木。北海道・本州・四国・九州、琉球の暖帯。
ハリギリ	県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。
Kalopanax pictus (Thunb.) Nakai	

- コバノハナイカダ
Helwingia japonica F.G.D.
 var. *parvifolia* Makino
 落葉低木。関東地方南部以西の温帶・暖帶。
 県内普通。B地域（少）。
- ミズキ
Cornus controversa Hemsl.
 落葉高木。北海道～琉球の温帶・暖帶。
 県内普通。A地域（普通）・B地域（普通）。
- クマノミズキ
Cornus brachypoda C.A.Mey
 落葉高木。本州・四国・九州の温帶・暖帶。
 県内普通。A地域（普通）。
- 合弁花類 GAMOPETALAE
- リヨウブ科 CLETHRACEAE
 リヨウブ
- Clethra barbinervis Sieb. et Zucc.
 落葉高木。本州・四国・九州の温帶・暖帶。
 県内普通。B地域（普通）。
- イチヤクソウ科 PIROLACEAE
 イチヤクソウ
- Pyrola japonica Klenze
 多年草。北海道・本州・四国・九州の温帶・暖帶。
 県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
- ツツジ科 ERICACEAE
 ヤマツツジ
- Rhododendron kaempferi Planch.
 落葉低木。北海道・本州・四国・九州の温帶・暖帶。
 県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
- ミツバツツジ
Rhododendron dilatatum Miq.
 落葉低木。千葉県以西の本州の温帶下部。
 県内普通。A地域（少）。
- アセビ
Pieris japonica (Thunb.) D.Don.
 常綠低木。山形・宮城以南の本州～九州の暖帶。
 県内少。B地域（普通）。
- ネジキ
Lyonia ovalifolia (Wall.) Drude
 subsp. *Neziki* Hara
- 落葉小高木。岩手県以南の本州・四国・九州の暖帶。県内普通。A地域（普通）・B地域（普通）。
- ヤブコウジ科 MYRSINACEAE
 ヤブコウジ
- Ardisia japonica* (Thunb.) Blume
 常綠小低木。北海道・本州・四国・九州の暖帶。
 県内やや少。A地域（普通）。
- サクラソウ科 PRIMULACEAE
 オカトラノオ
- Lysimachia clethroides* Duby
 多年草。北海道・本州・四国・九州の暖帶・亜熱帶。県内普通。A地域（普通）・B地域（普通）。
- コナスビ
Lysimachia japonica Thunb.
 多年草。北海道～琉球の温帶・暖帶。
 県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
- カキノキ科 EBENACEAE
 ヤマガキ
- Dispyros kaki* Thunb.
 var. *sylvestris* Makino
 落葉高木。本州（中部地方以西）～九州の暖帶。
 県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
- モクセイ科 OLEACEAE
 イボタノキ
- Ligustrum obtusifolium* Sieb. et Zucc.
 落葉低木。北海道・本州・四国・九州の温帶・暖帶。県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
- マルバアオダモ
Fraxinus sieboldiana Blume
 落葉高木。北海道・本州・四国・九州の温帶・暖帶。県内普通。A地域（普通）・B地域（普通）。
- コバノトネリコ
Fraxinus lanuginosa Koidz.
 落葉高木。北海道・本州・四国・九州の温帶・暖帶。県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
- リンドウ科 GENTIANACEAE
 フデリンドウ
- Gentiana zollingeri* Fawcett
 越年草。北海道・本州・四国・九州の温帶・暖帶。
 県内普通。A地域（少）。

リンドウ

Gentiana scabra Bunge

var. *buergeri* (Miq.) Maxim.

多年草。本州・四国・九州の暖帯。

県内普通。B地域(少)。

キヨウチクトウ科 APOSYNACEAE

ティカカズラ

Trachelospermum asiaticum (Sieb. et Zucc.) Nakai

常緑蔓本。本州・四国・九州の暖帯。

県内暖地に普通。A地域(普通)。

ガガイモ科 ASCLEPIADACEAE

ガガイモ

Metaplexis japonica (Thunb.) Makino

多年生つる草。北海道～九州の温帯・暖帯。

県内普通。A地域(少)。

イケマ

Cynanchum caudatum (Miq.) Maxim.

多年生つる草。北海道・本州・四国・九州の温帯。

県内普通。A地域(少)。

ヒルガオ科 CONVOLVULACEAE

コヒルガオ

Calystegia hederacea Wall.

多年生つる草。本州・四国・九州の暖帯。

県内普通。B地域(少)。

ムラサキ科 BORAGINACEAE

ホタルカズラ

Buglossoides zollingeri (D.C.) Johnston

多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。

県内少ない。A地域(少)。

ハナイバナ

Bothriospermum tenellum (Hornem.) Fisch. et Mey.

越年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。

県内普通。A地域(少)。

クマツヅラ科 VERBENACEAE

ムラサキシキブ

Callicarpa japonica Thunb.

落葉低木。北海道～九州の温帯・暖帯。

県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。

ヤブムラサキ

Callicarpa mollis Sieb. et Zucc.

落葉低木。本州(宮城県以南)、四国・九州の暖帯。

県内普通。B地域(少)。

クサギ

Clerodendrum trichotomum Thunb.

落葉低木。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。県内普通。A地域(普通)・B地域(普通)。

シソ科 LABIATAE

ジュウニヒトエ

Ajuga nipponensis Makino

多年草。本州・四国の温帯・暖帯。

県内普通。A地域(普通)。

キラシソウ

Ajuga decumbens Thunb.

多年草。本州・四国の温帯・暖帯。

県内普通。A地域(少)。

ツルニガクサ

Teucrium viscidum Blume

var. *miquelianum* (Maxim.) Hara

多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。

県内少。A地域(少)。

ヤマタツナミソウ

Scutellaria pekinensis Maxim.

var. *transitria* (Makino) Hara

多年草。北海道・本州(近畿地方以北)の温帯。

県内普通。A地域(少)。

シソバタツナミソウ

Scutellaria lacteviolacea Koidz.

多年草。福島県以南の本州・四国・九州の暖帯。

県内極めて稀。B地域(少)。

カキドオシ

Glechoma hederacea Linn.

var. *grandis* (A.Gray) Kudo

多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。

県内普通。A地域(少)。

ウツボグサ

Prunella vulgaris Linn. var. *lilacina* Nakai

多年草。日本全土。寒帯～暖帯。

県内普通。A地域(普通)・B地域(少)。

オドリコソウ

Lamium album Linn. var. barbatum (Sieb. et Zucc.) Franch. et Savat.	越年草。ヨーロッパ原産の帰化植物。日本全土。 県内普通。A 地域 (普通)・B 地域 (少)。
多年草。日本全土の暖帯・温帯。 県内普通。B 地域 (少)。	コシオガマ
アキノタムラソウ	Pitheirospermum japonicum (Thunb.) Kanitz 半寄生の一年草。本州～九州の暖帯・温帯。 県内普通。A 地域 (少)。
Salvia japonica Thunb.	ヒキヨモギ
多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A 地域 (普通)。	Siphonostegia chinensis Benth. 半寄生の一年草。北海道・本州～九州の暖帯・温帯。県内普通。A 地域 (少)。
ヒキオコシ	キツネノマゴ科 ACANTHACEAE
Plectranthus japonicus (Burm.) Koidz.	キツネノマゴ
多年草。北海道 (南) ～九州の暖帯・温帯。 県内普通。A 地域 (普通)・B 地域 (少)。	Justicia procumbens Linn. var. leucantha Honda 1年草。本州・四国・九州の暖帯。 県内普通。A 地域 (少)。
テンニンソウ	ハエドクソウ科 PHRYMACEAE
Leucosceptrum japonicum (Miq.) Kitamura	ハエドクソウ
多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A 地域 (少)。	Phryma leptostachya Linn. var. asiatica Hara 多年草。北海道・本州・四国・九州の暖帯・温帯。 県内普通。B 地域 (少)。
キセワタ	オオバコ科 PLANTAGINACEAE
Leonurus macranthus Maxim.	オオバコ
多年草。北海道 (南) ～九州の暖帯・温帯。 県内少。A 地域 (少)。	Plantago asiatica Linn. 多年草。日本全土の温帯・暖帯・亚热带。 県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (少)。
シモバシラ	アカネ科 RUBIACEAE
Keiskea japonica Miq.	アカネ
多年草。北海道 (南) ～九州の暖帯・温帯。 県内普通。A 地域 (少)。	Rubia akane Nakai 多年草。北海道・本州・四国・九州の暖帯・温帯。 県内普通。B 地域 (少)。
ヤマハッカ	ヘクソカズラ
Plectranthus inflexus (Thunb.) Vahl ex Benth.	Paederia scandens (Lour.) Merrill var. mairei (Léveillé) Hara 蔓性の大木。北海道・本州～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A 地域 (普通)・B 地域 (少)。
多年草。北海道 (南) ～九州の暖帯・温帯。 県内普通。A 地域 (少)。	ヒメツツジムグラ
ナス科 SOLANACEAE	Gaultheria gracilens (A. Gray) Makino 多年草。本州・四国・九州の暖帯・温帯。 県内普通。A 地域 (少)。
ヒヨドリジヨウゴ	カワラマツバ
Solanum lyratum Thunb.	
多年草。日本全土・亚热带・暖帯・温帯。 県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (少)。	
ゴマノハグサ科 SCROPHULARIACEAE	
タチイヌノフグリ	
Veronica arvensis Linn.	
多年草。ヨーロッパ原産の帰化植物。日本全土。 県内多。A 地域 (普通)・B 地域 (少)。	
オオイヌノフグリ	
Veronica persica Poir.	

Gaultheria verum Linn. var. asiaticum Nakai form. nikkoense (Nakai) Ohwi	落葉低木。北海道（南部）～九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域（少）。
多年草。北海道・本州・四国・九州の暖帯・温帯。 県内普通。A地域（少）。	オミナエシ科 VALERIANACEAE
スイカズラ科 CAPRIFOLIACEAE	オトコヘシ
ニワトコ	Patrinia villosa (Thunb.) Juss.
Sambucus sieboldiana Blume.	多年草。北海道～琉球の温帯・暖帯。 県内普通。B地域（少）。
落葉低木。本州・四国・九州の暖帯・温帯。 県内普通。A地域（少）・B地域（少）。	オミナエシ
ヤブデマリ	Patrinia scabiosaeifolia Fisch.
Viburnum plicatum Thunb. var. tomentosum (Thunb.) Miq.	多年草。日本全土の温帯・暖帯。 県内普通。A地域（少）。
落葉小高木。本州・四国・九州の温帯。 県内少。A地域（少）。	ウリ科 CUCURBITACEAE
ガマズミ	アマチャズル
Viburnum dilatatum Thunb.	Gymnostemma pentaphyllum (Thunb.) Makino
落葉低木。本州・四国・九州の暖帯・温帯。 県内普通。A地域（少）・B地域（普通）。	つる性の多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域（少）。
コバノガマズミ	キキョウ科 CAMPANULACEAE
Viburnum erosum Thunb.	ツリガネニンジン
落葉低木。福島県以南・四国・九州の暖帯・温帯。 県内普通。B地域（少）。	Adenophora triphylla (Thunb.) A. DC.
オトコヨウゾメ	var. japonica (Regel) Hara
Viburnum phlebotrichum Sieb. et Zucc.	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域（少）。
落葉低木。本州・四国・九州の温帯。 県内普通。B地域（少）。	キキョウ
ツクバネウツギ	Platycodon grandiflorum (Jacq.) A. DC.
Abelia spathulata Sieb. et Zucc.	多年草。日本全土の温帯・暖帯。 県内普通。A地域（少）。
落葉低木。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域（少）。	ホタルブクロ
メツクバネウツギ	Campanula punctata Lam.
Abelia tetrasepala Hara et Kurosawa	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
落葉低木。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域（少）・B地域（少）。	シデシャジン
スイカズラ	Phytuma japonicum Miq.
Lonicera japonica Thunb.	多年草。本州・九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域（少）。
蔓性落葉木本。北海道（西部）～九州の温帯・暖 帶。県内普通。B地域（少）。	キク科 COMPOSITAE
ヤマウグイスカズラ	チコグサモドキ
Lonicera gracilipes Miq.	Gnaphalium purpureum Linn. var. spathulatum (Lam.) Baker
1～2年草。アメリカ原産の帰化植物。 県内少。A地域（少）。	

コヤブタバコ	var. <i>asiatica</i> Nakai
<i>Carpesium cernuum</i> Linn.	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (少)。
越年草。日本全土の温帯・暖帯。	ユウガギク
県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (少)。	<i>Kalimeris pinnatifida</i> (Maxim.) Kitam.
センボンヤリ	多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A 地域 (少)。
<i>Leibnitzia anandria</i> (Linn.) Nakai	ハルジョオン
多年草。日本全土の温帯・暖帯。	<i>Erigeron philadelphicus</i> Linn.
県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (少)。	越年草。北米原産帰化植物。日本全土。 県内多。A 地域 (普通)・B 地域 (普通)。
コウヤボウキ	ヒメジョオン
<i>Pertya scandens</i> (Thunb.) Sch. Bip.	<i>Erigeron annuus</i> (Linn.) Pers.
落葉小低木。本州 (関東以西) ~ 九州の温帯・暖 帶。県内普通。A 地域 (普通)・B 地域 (普通)。	越年草。北米原産帰化植物。日本全土。 県内多。A 地域 (普通)・B 地域 (普通)。
ナガバノコウヤボウキ	オオアレチノギク
<i>Pertya glabrescens</i> Sch. Bip.	<i>Erigeron sumatrensis</i> Retz.
落葉小低木。福島県以南本州 ~ 九州の温帯・暖帯。	越年草。南アメリカ原産の帰化植物。日本全土。 県内多。A 地域 (普通)・B 地域 (普通)。
県内普通。B 地域 (少)。	ヒメカシヨモギ
カシワバハグマ	<i>Erigeron canadensis</i> Linn.
<i>Pertya robusta</i> (Maxim.) Beauverd	越年草。北アメリカ原産の帰化植物。日本全土。 県内多。A 地域 (普通)・B 地域 (普通)。
多年草。本州・四国・九州の温帯。	シラヤマギク
県内普通。B 地域 (普通)。	<i>Aster scaber</i> Thunb.
ブタクサ	多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A 地域 (普通)・B 地域 (少)。
<i>Ambrosia artemisiifolia</i> Linn.	ノコンギク
var. <i>elatior</i> (L.) Desc.	<i>Aster ageratoides</i> Turcz.
1 年草。北アメリカ原産の帰化植物。日本全土。	var. <i>ovatus</i> (Franch. et Savat.) Nakai
県内普通。A 地域 (普通)・B 地域 (普通)。	多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (少)。
オオブタクサ (クワモドキ)	シロヨメナ
<i>Ambrosia trifida</i> Linn.	<i>Aster ageratoides</i> Turcz. forma <i>leucanthus</i> Ilonda
1 年草。北アメリカ原産の帰化植物。日本全土。	多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (少)。
県内普通。B 地域 (少)。	マルバダケブキ
ヒヨドリバナ	<i>Ligularia dentata</i> (A.Gray) Hara
<i>Eupatorium chinense</i> Linn.	多年草。本州・四国・九州の温帯。
var. <i>simplicifolium</i> (Makino) Kitam.	
多年草。北海道・本州・四国・九州の温帯・暖帯。	
県内普通。B 地域 (少)。	
ハキダメギク	
<i>Galinsoga ciliata</i> (Raf.) Blake	
1 年草。熱帯アメリカ原産の帰化植物。日本全土。	
県内普通。A 地域 (普通)・B 地域 (普通)。	
アキノキリンソウ	
<i>Solidago virga-aurcea</i> Linn.	

県内普通。A地域（少）。	県内分布少。A地域（少）。
フキ <i>Petasites japonicus</i> (Sieb. et Zucc.) Maxim.	センダングサ <i>Bidens biternata</i> (Lour.) Merr. et Sheriff
多年草。本州・四国・九州・琉球の温帯・暖帯。	1年草。北アメリカ原産の帰化植物。日本全土。
県内普通。A地域（少）。	県内普通。A地域（少）。
ヤブレガサ <i>Syneilesis Palmata</i> (Thunb.) Maxim.	オオオナモミ <i>Xanthium canadense</i> Mill.
多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。	1年草。北アメリカ原産の帰化植物。日本全土。
県内普通。A地域（少）。	県内普通。B地域（少）。
リュウノウギク <i>Chrysanthemum makinoi</i> Matsum. et Nakai	オケラ <i>Atractylodes japonica</i> Koidz. ex Kitam.
多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。	多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。
県内普通。A地域（少）・B地域（少）。	県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
オトコヨモギ <i>Artemisia japonica</i> Thunb.	ノアザミ <i>Cirsium japonicum</i> DC.
多年草。日本全土の温帯・暖帯・亜热带。	多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。
県内普通。A地域（少）。	県内普通。A地域（少）。
イヌヨモギ <i>Artemisia keiskeana</i> Miq.	タイアザミ <i>Cirsium niponicum</i> (Maxim.) Makino
多年草。日本全土の温帯・暖帯。	var. <i>incomptum</i> (Maxim.) Kitam.
県内普通。A地域（少）・B地域（少）。	多年草。関東・中部地方南部の温帯・暖帯。
ヨモギ <i>Artemisia princeps</i> Pampan.	県内普通。A地域（少）。
多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。	キクアザミ <i>Saussurea ussuriensis</i> Maxim.
県内普通。A地域（少）・B地域（普通）。	多年草。本州・四国・九州の温帯。
ノブキ <i>Adenocaulon himalaicum</i> Edgew.	県内少。A地域（少）。
多年草。日本全土の温帯・暖帯。	タムラソウ <i>Serratula coronata</i> Linn.
県内普通。B地域（少）。	var. <i>insularis</i> (Iijin) Kitam.
アメリカセンダングサ <i>Bidens frondosa</i> Linn.	多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。
1年草。北アメリカ原産の帰化植物。日本全土。	県内普通。A地域（少）。
県内普通。A地域（少）・B地域（普通）。	コオニタビラコ <i>Lapsana apogonooides</i> Maxim.
コセンダングサ <i>Bidens pilosa</i> Linn.	越年草。本州・四国・九州の暖帯。
1年草。世界に広く分布原产地不明。日本全土。	県内普通。A地域（少）。
県内分布少。A地域（少）・B地域（普通）。	コウゾリナ <i>Picris hieracioides</i> Linn.
シロノセンダングサ <i>Bidens pilosa</i> var. <i>minor</i> (Blume) Sheriff	var. <i>glabrescens</i> (Regel) Ohwi
1年草。世界に広く分布原产地不明。日本全土。	越年草。日本全土の温帯・暖帯。
	県内普通。A地域（普通）。

セイヨウタンポポ	Lactuca scariola Linn.
Taraxacum officinale Weber	越年草。ヨーロッパ原産の帰化植物。
多年草。欧洲産帰化植物。日本全土の温帯・暖帯。	県内普通。A 地域 (少)。
県内多。A 地域 (少)・B 地域 (少)。	
エゾタンポポ	ノゲシ (ハルノノゲシ)
Taraxacum hondoense Nakai	Sonchus oleraceus Linn.
多年草。中部地方以北の温帯・暖帯。	越年草。ヨーロッパ原産の帰化植物。日本全土。
県内普通。B 地域 (少)。	県内普通。A 地域 (少)。
ジシバリ	オニノゲシ
Ixeris stolonifera A. Gray	Sonchus asper (Linn.) Hill.
多年草。日本全土の温帯・暖帯。	越年草。ヨーロッパ原産の帰化植物。日本全土。
県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (少)。	県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (普通)。
オオジシバリ	オニタビラコ
Ixeris japonica (Burm.) Nakai	Younghia japonica (Linn.) DC.
多年草。日本全土の温帯・暖帯。	越年草。日本全土の温帯・暖帯。
県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (少)。	県内普通。A 地域 (少)。
ノニガナ	ヤクシソウ
Ixeris polyccephala Cass.	Youngia denticulata (Houtt.) Kitam.
越年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。	多年草。日本全土の温帯～亜热带。
県内普通。A 地域 (少)。	県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (普通)。
ニガナ	ハナヤクシソウ
Ixeris dentata (Thunb.) Nakai	Youngia denticulata (Houtt.) Kitam.
越年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。	forma pinnatipartita (Makino) Kitam.
県内普通。A 地域 (少)。	多年草。日本全土の温帯～亜热带。
タカサゴソウ	県内普通。A 地域 (少)。
Ixeris chinensis (Thunb.) Nakai	シダ植物 PTERIDOPHYTA
var. strigosa (Lev. et Lan) Ohwi	トクサ科 EQUISETACEAE
多年草。本州・四国・九州の暖帯。	スギナ
県内少。A 地域 (少)。	Equisetum arvense Linn.
ヤマニガナ	夏緑性草本。北海道～九州の温帯・暖帯。
Lactuca raddeana Maxim.	県内普通。B 地域 (少)。
Var. elata (Hemsl.) Kitam.	イワヒバ科 SELAGINELLACEAE
越年草。日本全土の温帯・暖帯。	イワヒバ
県内普通。A 地域 (少)。	Selaginella tamariscina (Beauv.) Spring
アキノノゲシ	常緑性草本。北海道～九州の温帯・暖帯。
Lactuca indica Linn.	県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (少)。
var.laciniiata (O.Kuntze) Hara	ハナヤスリ科 OPHIOGLOSSACEAE
2年草。日本全土の温帯・暖帯。	フユノハナワラビ
県内普通。B 地域 (少)。	Botrychium ternatum (Thunb.) Swartz
トゲチシャ	夏緑性草本。北海道～九州の温帯・暖帯。
	県内普通。A 地域 (少)・B 地域 (少)。

ゼンマイ科 OSMUNDACEAE	県内普通。B地域（少）。
ゼンマイ <i>Osmunda japonica</i> Thunb.	シノブ科 DAVALLIACEAE
夏緑性草本。日本全土の温帯・暖帯。 県内普通。A地域（少）。	シノブ <i>Davallia mariesii</i> Moore
カニクサ科 SCHIZAEACEAE	夏緑性多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域（少）。
カニクサ <i>Lygodium japonicum</i> (Thunb.) Swartz	オシダ科 ASPIDIACEAE
夏緑性草本。関東・富山県以西～九州の暖帯。 県内少。A地域（少）。	イワデンダ <i>Woodsia polystichoides</i> Eaton
ワラビ科 PTERIDACEAE	夏緑性多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域（少）。
オウレンシダ <i>Dennstaedtia wilfordii</i> (Moore) Koidz.	ヤブソテツ <i>Phanerophlebia Fortunei</i> (J. Smith) Copel.
夏緑性草本。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域（少）。	夏緑性多年草。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域（少）。
イヌシダ <i>Dennstaedtia hirsuta</i> (Swartz) Mett.	オクマワラビ <i>Dryopteris uniformis</i> (Makino) Makino
夏緑性草本。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域（少）。	夏緑性多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
オオバノイノモトソウ <i>Pteris cretida</i> Linn.	クマワラビ <i>Dryopteris lacera</i> (Thunb.) O. Kuntze
常緑性草本。関東以西の暖帯。 県内普通。A地域（少）。	常緑性草本。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
ワラビ <i>Pteridium aquilinum</i> (Linn.) Kuhn	イワイタチシダ <i>Dryopteris saxifraga</i> H. Ito
var. <i>latiusulum</i> (Desv.) Underw.	常緑性草本。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
夏緑性草本。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域（普通）・B地域（普通）。	ミサキカグマ <i>Dryopteris chinensis</i> (Baker) Koidz.
ヒメウラジロ <i>Aleuritopteris argentea</i> (Gmel.) Fée	夏緑性多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域（少）。
常緑性草本。関東以西～九州の温帯・暖帯。 県内稀。A地域（少）。	サクライカグマ <i>Dryopteris gymnophylla</i> (baker.) C. Chr.
ミヤマウラジロ <i>Aleuritopteris Kuhnii</i> (Milde) Ching	夏緑性草本。本州（宮城県以南）・九州の暖帯。 県内普通。A地域（少）・B地域（少）。
var. <i>Brandtii</i> (Fran. et Sav.) Tagawa	ミゾシダ <i>Lastera totta</i> (Schltdl.) Ohwi
夏緑性多年草。関東・中部地方の一部。 県内稀。B地域（少）。	夏緑性草本。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域（少）。
クジャクシダ <i>Adiantum pedatum</i> Linn.	ゲジゲジシダ
夏緑性多年草。北海道～九州の温帯・暖帯。	

Lastera decursive-pinnata (van Hall) J. Smith	Asplenium incisum Thunb.
夏緑性草本。本州・四国・九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(少)。	常緑性草本。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)。
イヌワラビ	ウラボシ科 POLYPODIACEAE
Athyrium niponicum (Mett.) Hance	ヒメノキシノブ
夏緑性草本。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(少)・B地域(少)。	Pleopeltis onoei (Franch. et Savat.) Okuyama 常緑性草本。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内普通。B地域(少)。
ニシキシダ	ノキシノブ
Athyrium niponicum (Mett.) Hance forma metallicum (Makino) Honda	Pleopeltis Thunbergiana Kaulf. 常緑性。北海道(南)～九州の温帯・暖帯。 県内普通。A地域(普通)・B地域(少)。
夏緑性草本。北海道～九州の温帯・暖帯。 県内少。A地域(少)。	
チャセンシダ科 ASPLENIACEAE	
トランオシダ	

おわりに

今回の調査は2年間という短期間であった上に、諸種の制約があって調査報告書の記載も不充分なきらいがある。しかし、地元という好条件に恵まれて、調査は充分で、分布する種の見落としは少ないものと思われる。1990年山梨県植物研究雑誌に、この山の植物567種を記録したが、今回は目的及び調査期間の関係から河川敷などを除外して調査範囲を縮小したために記録種類は減少した。また枯損アカマツの年輪調査、サクランボの木数調査や、コドラーード(方形調査区)10ヶ所による植生調査も行ったが残念ながら割愛した。

我が家の庭の背景として日々親しんでいるこの山を、愛情をもって見守っていきたい。最後に松くい虫被害についての資料を頂いた大月林務事務所林業振興課と種々ご協力を頂いた山梨県植物研究会理事笠井界氏に感謝申し上げたい。

参考文献

大井次三郎	1960年	『日本植物誌』	至文堂書店
植松春雄	1958年	『山梨の植物』	井上書店
植松春雄	1981年	『山梨の植物誌』	井上書店
石塚末吉	1935年頃	『岩殿山の地質と植物』	m e m o
小林 岳	1972年	『岩殿山の植物』	日本生態学会中部地区研究発表会資料
小林 岳	1987年	『岩殿山の植物』	山梨県植物研究会会誌
小林 岳	1990年	『秋の山野草めぐり「岩殿山」』	大月市教育委員会
小林 岳	1993年	『ふるさとの生物「岩殿山」』	山梨県編

(小林 岳)

第3章 岩殿山の動物

はじめに

特定地域の動物分布を調査するに当たっては、その地域が動物地理学上どんな位置にあるのか、また、その地域の地形や植生にどんな特徴があるのかなどを熟知しておく必要がある。それだけではなく、過去においてその地域に生息していた動物群集の消長についても「聞き取り調査」を通して把握しておかなければならない。

なぜならば、動物の多くは一定の場所に永年定住していたり、生活の痕跡を将来にまで留めておいたりすることが少ないと、出現時も不定期であって、人の目に触れる機会が極めて少ないからである。

今回のように限られた期間での調査では、それらの全容を把握することは困難であるが、現在生息している動物の生活の一断面を可能な限り捉えるために、ほ乳類の場合はフィールドサインを手がかりとして、鳥類・両性は虫類・こん虫類は線センサス法を中心として調査をすすめて来た。

聞き取り調査は、この地域の動物分布に詳しい小俣峯男氏（岩殿159番地）ほか数名を対象に実施した。
動物相の概要

七福神の布袋様の腹を思わせる大岩壁（鏡岩）がそり立つ岩殿山は、周囲が急峻な地形で囲まれており、長い間人間の通行を阻んで来た。そのため、野性獸にとっては逃避やねぐら場所として利用しやすい環境である上に、北西側は大菩薩連嶺や小金沢山系などの深山に連なっているため、この方面から移動して来る大型獸は、岩殿山ろくを出入り口として、人里近くまで出現してきている。また、鏡岩の南側は日当たりが良く、冬期でも暖かいため、冬鳥たちの越冬に適していて、多くの野鳥が集まるようになっている。

こん虫類では、幼虫時代をアリと共生するキマダラルリツバメ（県指定天然記念物）が生息しているなど、この地域ならではの幾つかの特徴があることが判明した。これらの詳細については、以下の各論で述べてみたい。

第1節 獣類

（1）ツキノワグマ（食肉目・クマ科）

大月市においては、平成9年ころまで、ツキノワグマの出没情報は、年に1～2件程度であったが、11年度から出没数が俄かに増加はじめ、この年には11頭、13年には14頭が岩殿山周辺の人家近くに出没し、有害駆除で捕獲処分された。

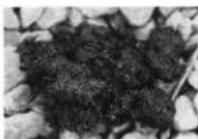
これらのクマは、それまで、日川や葛野川上流域で生息していたものであるが、発電所建設などによる生活圏の分割や生息場所の減少により、人里に出現するようになったのではないかと言われている。

昔は、築坂峠や稚児落し近くのクマ穴で冬眠していた個体もあったらしいが、中央道の拡張工事で穴の一部が取り壊された。

クマは雑食性のため、季節が変わると自然の餌を求めて、かなり広範囲を移動するので、人家近くまで足をのばしてくる個体もある。



第195図 ツキノワグマ
(右下は見つかった糞)



る。平成9年6月22日に、植物調査を実施中の小林氏は、丸山公園内で前夜に徘徊したと思われるクマの糞を発見し、写真に収められた。糞の中には、たくさんの植物の種子が混じっており、この季節に実をつける漿果を食べたことが分かった。

(2) ニホンイノシシ（偶蹄目・イノシシ科）

当地域でこれまでイノシシが目撃されているのは、平成8年10月に、県営神倉住宅の北側で2頭が、また畠倉地内で数頭の情報がある。これらはいずれも小金沢山系に生息しているものが季節移動によって、岩殿山ろくに出現したものであろう。

最近は他地域でもイノシシが人家附近に出没し、農作物に被害を出すなどの問題を起こしているが、これらは農業の衰退によって、これまで農耕地として使われていた場所が荒地に変わり、イノシシが生息しやすい環境が増えたことや、山林原野の手入れが行きとどかなくなり、荒廃したために餌となる木の実や小動物（は虫類・両生類・こん虫類・甲殻類・小型は乳類・ミミズなど）が減少してきたことに因るものと思われる。

今回の調査では、成獣の目撃はできなかったが、足跡や糞、とや場などのフィールドサインを何か所かで確認できた。

(3) キツネ（食肉目・イヌ科）

夜行性であるキツネは、日中歩くことはほとんどないが、5月下旬から6月にかけては出産した仔ギツネを育てるために、早朝や夕刻に入里に姿を見せることがある。

調査期間中に幼獣と1回出会ったことはあったが、足跡や糞などは何か所かで確認することができた。但し、雪上に残された足跡は、野犬のものと紛らわしく、新しいものでないと判定しにくい（第198図）。足跡が多く見られた場所は、新宮から舟久保にかけてと、宮向から茶道にかけての2ヵ所で確認できた。

情報によると、岩殿山南ろくの丸山公園でも見かけるというが、行動圏の広いキツネ（1頭当たり平均4㎢内外）は、一夜のうちに数kmも移動するので納得できる。キツネの個体数を把握することはむずかしいが、ひと頃より餌となるノウサギやノネズミの数が減ったことや、野犬との競合などにより少なくなっているのではないかと思われる。



第196図 ニホンイノシシ



第198図 キツネとイヌの
足跡比較

第197図 キツネ（幼獣）



第200図 タスキの足跡

第199図 ホンドタスキ

(4) タヌキ（食肉目・イヌ科）

タヌキは、巣穴として木の洞や岩の割れ目、人家の縁の下などを使うが、中央道大月トンネル北側の斜面には岩穴が多く、タヌキの生息しやすい環境となっている。また、かつて岩殿山下の小坂国広氏宅の縁の下には、タヌキが住みついていたこともあり、一帯には数頭のタヌキが生息しているものと思われる。フィールドサインでの確認は“ため糞”（自分の通り道の1ヶ所に決まって脱糞する）や足跡があるが、タヌキの場合足にある四個の蹠球（第200図参照）の並び方が不揃いで第3指が一番上に出ている。

この地域で“ため糞”的確認はできなかったが、足跡は数ヶ所で見つけることができた。

しかし、平成6年ころよりタヌキの間に犬の伝染病である疥癬症が蔓延し、どこの地域でも多数のタヌキが死んだ。本地域においても罹病個体が発見され、県鳥獣センターに収容されたことがある。

(5) ニホンアナグマ（食肉目・イタチ科）

この地域では、アナグマのことを俗に“ササグマ”とか“マミ”などと呼んでいる。アナグマはタヌキと同じ環境に生息しているが、数は少ない。前足には大きな爪があって、これで土に深い巣穴を掘り、昼はその中に眠っている。巣穴は迷路のように複雑になっているが、内部は清潔に保たれていて、枯葉や枯れ草がきれいに敷き詰められている。

この地域では、舟久保や新宮あたりに足跡が見つかったが巣穴は確認できなかった。アナグマも子育ての季節には日中も出歩くことはあるが、全身をさらして歩くことを避け、物陰や水路伝いに移動するので目撃する機会は少ない。

アナグマは肉食性であるが、カキやリンゴ、堅果類などの植物質のものもかなり食べる。しかし、肉類の方が好物で、ある調査によると動物質68%、植物質が32%となっている。

(6) ホンドテン（食肉目・イタチ科）

テンは、森林地帯を好んで生息するので、山ろくの木の少ない場所に出現することは希である。

この地域では、樹林の多い北西側で見かけたという情報があったが、成獣の確認はできなかった。

小保峯男氏によると、この地域に生息するテンは、冬季に毛の色が黄色に変わるキテン（冬季でも変色しない褐色のままのものはスステンという）であるという。また、フィールドサインでは林道の石の上や木の根に、特有な形をした糞を残し、自分の縄張りの表示をするが、調査期間中にそれを見つけるには至らなかった。

テンの餌は70%が動物質で、ムササビをはじめ、ノウサギ・リス・ネズミ・ヤマドリ・ヘビ類・カエル・小鳥などである。

(7) ハクビシン（食肉目・ジャコウネコ科）

中型・大型の獣類の数が減っているなかで、ハクビシンだけは、県内のどこの地域でも数が増えていく。最近では山里だけでなく、市街地の社寺にも住みついており、繁殖までするようになった。それにつれて、農作物への被害も増えており、ブドウをはじめ、トウモロコシ・カキなどが食害されている。ハク



第201図 ニホンアナグマ



第202図 ホンドテン



第203図 ハクビシン

ビシンは、木登りもうまく、細い枝先にも平気で登りつめることができる。この地域では百合ヶ丘地内と畠倉で

目撃例があるが、今後は更に多くの情報が寄せられる可能性がある。夜行性で、昼間は巣穴の中に数頭が同居していて、夜間には1頭ずつで餌を探し歩く。餌は果実類のほかネズミ・カエル・サワガニ・バッタ・トカゲなどで雑食性である。

ハクビシンの生息地の分布を見ると局地的で山梨をはじめ、静岡・長野・神奈川・愛知・宮城・福島・愛媛・高知県となっているが、今後においては、その分布域は次第に広がっていくものと思われる。

足跡は、キツネ・タヌキ・テンなどとは違っており、後足は爪先からかかとまで地面につけて歩く（蹠行性）ので容易に区別できる。

(8) ホンドイタチ（食肉目・イタチ科）

イタチは、山林をはじめ、農耕地・人家付近・水辺など、餌のあるところに出現し、ネズミをはじめ、モグラ・カエル・ヘビ・魚類・カニ・こん虫・小鳥などを捕食する。

日中は物陰や穴の中に潜んでいて、夜間活動し木に登ったり水中に潜ったりもする。早春から初夏にかけてが繁殖期で、この期間には日中にも出歩いて解探しをする。

この地域では山ろくの林や人家付近に生息しており、住民の多くに目撃されている。今回の調査では、岩殿山頂から円通寺に下る雪の山道で足跡を確認した。イタチは冬になんでも冬眠することはなく、雪の下にいるネズミでも鋭い嗅覚で捜し当てて捕食する。捕食するネズミは餌全体の50~60%を占めており、ネズミの駆除には大変貢献している動物である。

(9) ニッコウムササビ（げっ歎目・リス科）

ムササビは、大木のある林ならどこでも住みつく動物で、巣は木の穴や神社・お寺などの天井裏につくる。夜行性であるため、人の目につくことは希であるが、夕刻（日没時）から巣を出て明け方近くまで林の中を飛び回る。活動中の個体を見つけることは困難であるが、樹皮をかじり取って食べたり、巣の材料にしたりするので、なわばりの中の樹につけられた剥皮痕を見ると、細かい特有の歯痕があることで生息の確認ができる。

また、巣の中に樹皮を繊維状にしたものを入れる際、これを地上に落とすことが多いので、そのことでもわかる。岩殿山北斜面の山ろくにあるスギ・ヒノキの植林地には、ムササビが剥皮したと思われる食痕が見つかった。

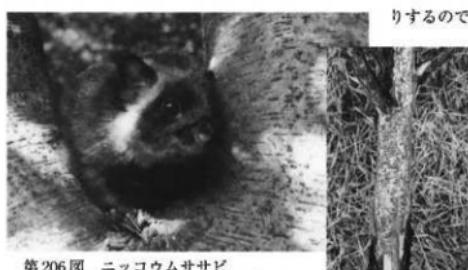
ムササビがどの地域の林でも生息でき



第204図 ハクビシンの足跡



第205図 ホンドイタチ



第206図 ニッコウムササビ
(右下はムササビの食痕)

る理由は、いろいろな樹木の葉をはじめ、芽・花・実・樹皮・こん虫など、多様なものを解としているからである。

(10) ホンドリス（げっ歯目・リス科）

リスは、獣類の中では比較的数も多く、昼行性であるためによく目撃される。平地から1500mくらいまでの森林に住みついているが、特にマツやスギの山林を好んで生息する。

夏と冬とでは毛色がちがい、夏毛の場合は背中の赤褐色が白い腹部とはっきり区別できるが、冬毛では背中は灰色になり、耳の先までふさ毛が長くなる。

リスの餌は、ドングリやクルミ・クリなどの堅果をはじめ、マツの種子・若芽・花の蕾などが主であるが、こん虫や小鳥の卵などの動物質のものも食べる。

繁殖期は春と秋の2回で、1産は平均5子である。巣は高い樹枝上のまたの部分に、細い枯れ枝を集めてフットボール状にし、内部には樹の皮を繊維状にしたものや、木の葉をしきつめる。

岩殿山では北斜面や西側の山林で何度か見かけた。

(11) モグラ類

この地域に分布しているモグラには、アズマモグラのほかにホンシュウヒミズなどがある。アズマモグラは、頭胸長（頭から尻までの長さ）が12~14cmで、地下に何層かの横穴と、それをつなぐ上下の縦穴を掘って網状のトンネルの中で生活している。時に地中の古いトンネルを抜けたり、新しいトンネルをつくったりした時の土を地表に押し上げて、いわゆる“モグラ塚”をつくる。地表でモグラの姿を見つけることはなくとも、この上の盛り上がり方で生息の確認ができる。モグラの餌は主としてミミズであるが、地中にすんでいるこん虫（幼虫）も補食する。大食漢で知られているモグラは、1頭が平均400ml以上のなわびりの中で採食し、年間18~36kgの餌を食べているといわれている。表土の浅い場所や急斜面では、モグラ塚を見ることはないが、有機質に富んだ土壤のある山林や平地では普通に見つかっている。

ホンシュウヒミズは、平地から亜高山帯まで分布している小型のモグラで、頭胸長は8.7~10cmである。全身が黒色のビロード状の毛で被われており、吻（口先）が細く尖っている。また、前足は前種より頑丈でなく弱々しい。従って硬い土にトンネルを掘らず、森林の林床などの落ち葉のつもった層の下に、直徑2.8cm程の横穴を掘って生活する。山道を歩いていると、道端の落葉がむくむくと盛り上がってくることがあるが、これはヒミズが狭くなった通路を通り抜けようとしている時で、こうした時に落ち葉をかきわけていくと、ヒミズを容易に見つけることができる。ヒミズの餌は、ミミズや地中のこん虫などのほかに、草の根や実などの植物質も食べることが知られている。

早朝に山道を歩くと、路傍でヒミズの死がいが転がっているのが見つかる。

(12) ネズミ類

ネズミ類は、種類や個体数が多い獣類だが、ほとんど夜行性であるために姿を確認することがむずかしい。また、地下で生活するものが多く人の目に触れる機会は大変少ない。従って、ここでは文献調査に頼りながら、この地域で生息しているであろう何種かについて紹介するにとどめる。



第207図 ホンドリス



第208図 ホンシュウヒミズ

クマネズミは、家ネズミとしてよく知られており、人家の屋根裏やお倉などをすみかとしている。頭胴長は約16cmで、体より長い尾がある。その生態については、詳しく分かっているので、ここでは省略する。

ハツカネズミは、山間の耕作地や人家付近にすんでいる小型のネズミで、頭胴長は約7cm、尾長は6cmである。分布が広く森林をはじめ、人家付近・原野などいろいろな環境に適応して生息している。繁殖率が高く、一年間に平均5回以上出産し、1産に5~6子を産む。妊娠期間が20日であることから二十日ネズミの名がある。

このネズミは、なわばり意識が強く、自分の尿を行動圏のなかにつけてそこを固守する。

ハタネズミは、草原や庭園・農耕地・雑草の生えた開けた森林などにすむネズミで、頭胴長は約11cm、尾が短く、頭が大きい。また、ほかのネズミに比べると耳が短く先が円い。

巣は草むらの中や地面のすぐ下に幅広の通路をつくり、1頭あたり約150m²の行動圏のなかで生活する。繁殖期は春と秋で1産に3~8子を産む。条件が良いとこの期間中に4回以上も出産することがある。このため個体数が急激に増えることがある。

植林地では、ヒノキやスギ・アカマツ・カラマツなどの幼い樹を食害し、大きな被害を出すこともある。

アカネズミは、背中が美しい赤褐色で腹部が白い。頭胴長は約12cmあり尾は長い。主に草原や農耕地をはじめ、明るい広葉樹林などをすみかにしており、地中にトンネルを掘って生活している。餌は農作物も食べるが主食は木や草の実で、特にドングリ・クルミ・クリなどを好む。繁殖は春と秋の2回で、1産は3~6子である。



第209図 ハタネズミ



第210図 アカネズミの仔

第2節 鳥類

大空に向て垂直にのびる岩殿山の岩壁は、渡り鳥たちが方向を知る目印として利用するほか、南ろくの日溜まりは冬季でも暖かく、冬鳥たちの格好の越冬場所ともなっている。また、繁殖期のさえずり声は岩壁に大きく反響して四方に広がり、ほかの場所では聞かれない美しいひびきがある。

四季を通じてみられる野鳥の種類も多く25科64種にのぼることが分かった。以下、この地域で確認できた種類を科別に紹介する。

(1) サギ科の鳥

山ろくを流れる桂川には、体の純白なコサギが飛来し、日中に流れの中で小魚や甲殻類を捕食しているのが見られる。コサギは白サギ（体の色が白いものの総称）のなかでは体が最小で、全長は61cmあり、嘴が黒い。

この地域では、以前には数は少なかったが、最近では次第に増えている。しかし、冬季になると他地域へ移動



第211図 コサギ

するらしく、ほとんど見られなくなる。

ゴイサギは夜行性の鳥で日中は水辺近くの林や篠のなかで休息していて、夕刻より活動をはじめる。河川のほか休耕田や人家の生け簀などに飛来し、カエルやザリガニ・魚などを補食する。

人家の庭先の池から金魚や鯉の稚魚を失散することもある。桂川や葛野川周辺の林には小さな群れがすみついている。

(2) カモ科の鳥

カルガモは、周年日本で生活するカモで冬鳥ではない。近年は都市部でも繁殖するものが増えてきて、親鳥が雛を連れて路上を歩くなどの光景が各地で見られるようになった。水辺の鳥であるため、山林に入ることはなく、農耕地や河川敷で生活しているものがほとんどであるが、なかには広い庭のある家の屋敷内で繁殖するものもある。

コガモは、10月ころ北国から渡来する冬鳥で、カモのなかでは体が最も小さい。雄では頭部が栗色で、目の周囲から頭にかけては緑色をしている。いつも小群でいることが多い。カルガモもコガモも岩殿山ろくの桂川に飛来してくる。

(3) タカ科の鳥

トビは、市街地周辺で普通にみられる猛禽類だが、繁殖期には低山の樹枝上に大きな巣をつくって雛を育てる。夏季から冬にかけては街の上空にもよく飛来する。

特に岩殿山岩壁の南側には上昇気流が発生しやすく、午前10時ころからこの気流に乗って飛翔するトビの姿が目につく。

オオタカは数少ない猛禽類で、小型は乳類や小鳥を餌にしているため、見通しのよい巨木の枝などに止まって獲物を探している。

丸山公園付近は樹木が疎であるため、獲物を見つけたり追跡したりするのに格好の狩場として利用されている。しかし、人影の少ない早朝や夕刻時に飛来するため、ここでオオタカを目撃できる機会は希である。

ツミは最も小型の猛禽であるが、餌はほかのタカと同様に小型は乳類や小鳥などで、主に低山帯の林の中で生活している。小型であることから樹林中でも巧みに飛翔し、獲物を追うことができる。最近では市街地周辺でも繁殖する個体もでてきて、ドバトやカワラヒワなどの都市鳥が襲われるようになってきた。

岩殿山周辺にも時として姿を見せ、樹枝上に止まって獲物を探していることもある。

ハイタカは、ツミより幾分大きいタカで、生息環境や習性はツミによく似ている。しかし個体数は少なく目撃する機会はずっと少ない。岩殿山周辺でも生息している可能性はあるが、調査期間中は確認できなかつた。

サシバは、夏鳥として5月ころ南の国から渡ってくるタカで、トビに次いで数が多い。繁殖は低山の松林が多く、地上10~20mの樹枝上に営巣して雛を育てる。「ピックィーッ」と高い声で鳴きながら上空を飛ぶ姿をよく見かける。この場所でも中丸方面の樹林中で繁殖しているものがあるらしく、餌を探しながら上空を



第212図 コガモ



第213図 オオタカ

旋回している姿を何回か確認した。

(4) ハヤブサ科の鳥

チョウゲンボウは、近年になって都市鳥の仲間入りをした猛禽で、市街地のビルでも毎年繁殖するようになっている。大月市内のビルでの繁殖は確認されていないが、上空を飛ぶチョウゲンボウの姿は何回か目撃している。この個体は国中方面から狩のために飛来するものと思われる。

チョウゲンボウの飛び方は、ほかの猛禽とはちがい、ひらひらとはばたいたり、停空飛翔をしたりするので容易に識別できる。

(5) キジ科の鳥

キジは平地から標高1200mぐらいの山地や高原をすみかとしているが、特に山ろくの農耕地や草原、雑木林などに数も多い。繁殖期には平原や低木のあるやぶの中で巣づくりして雛を育てる。

登山道を歩いていると眼前を横切ったり、大きな羽音をたてて飛び去ったりする。晩秋には小さな群れになり山林中で餌を探しまわる。岩殿山では、北ろくの山林や畠倉方面で多くみられるが、冬季には丸山公園付近にも姿を見せる。

ヤマドリは山地の林内に生息するが、秋季には標高1000m付近の林で、ブナ・ミズナラなどの実や、ヤドリギの果実などをついばんでいることが多い。冬季には山腹や山ろくの沢沿いで過ごすが、この地域で見かけるのはこの時期が多い。

コジュケイは、平地から低山のやぶの多い林や林縁にすみ、数羽の群れで行動している。

春になると大きな声で「ビーコロホイ」とやかましく鳴き交う。山道では地上で餌を探っている群れに出会うことが多いが、人との距離が近くとも直ちに飛び立とうとはせず、やぶの中を潜りぬけながら四散するのが常である。この地域ではふもとに近いやぶの中で鳴き声を耳にする。

(6) チドリ科の鳥

柱川の高月橋付近の河原には、夏季にイカルチドリが姿を見せる。この鳥は、川の中流より上の中州や河原で餌を探していることが多く、広い砂疊地があれば、そこで繁殖もする。秋が深まると下流域へ移動するものもあるが、一部のものは冬季でもその場所に留まる。

(7) シギ科の鳥

イソシギは河原や沼畔の草地で繁殖し、厳冬期になるまで流れのほとりで生活する。いつも尾を上下に振りながら水生動物を探しているが、人が近づくと「チーリーー」と細い声で鳴きながら流れに沿って低く飛び去る。体の上面が灰黒褐色であるため、河岸の稲の中にいる時は、周囲の色と区別にくく、見つけるのが困難である。この地域においては数少ない鳥である。



第214図 チョウゲンボウ



第215図 コジュケイ



第216図 タシギ

タシギは、冬鳥または旅鳥として水田や川岸に渡ってくる。日中は草の陰や稻の切り株のかげなどに隠れていて夕刻から活動する。長い嘴を泥や土中に押しこんで、水生動物やミミズなどを補食する。

人が近づくと「ジェッ」と鳴きながら飛び立ち、電光型に飛んでから急降下する。体の色は褐色の地に黒斑がある地味な色なので、枯れ草の中にいる時は大変わかりにくい。岩殿山ろくの水田や桂川河川敷で少数が見られる。

(8) ハト科の鳥

キジバトは平地にも山地にも普通に見られる鳥で、俗に山鳩と呼ばれている。最近では人家の植え込みや学校・病院などの樹の枝に巣造りするものが増えてきて、いわゆる「都市鳥」の仲間に加えられるようになった。



第217図 キジバト

繁殖期が長く、厳冬期の1~3月を除いて、何回も雛を育てる。秋季には、河川敷や草原に数十羽も集まることがある。岩殿山をはじめ、市内の公園でも繁殖が確認されている。

(9) カッコウ科の鳥

ジュウイチは、その鳴き声が「十一」と聞こえることから付けられた名前である。5月ころ南の国から渡って来て深い森林にすみつく。カッコウ科の鳥はどの種類でも自らは巣を造らず、ほかの鳥の巣に自分の卵を産みこんで雛を育てさせる(托卵)。この鳥が托卵する相手(仮親)は、

オオルリをはじめ、コルリ・ピンズ・イルビタキなどの山の鳥であるため、低山よりは山地で生息する。岩殿山周辺では、中丸から大峠方面的森林中で鳴き声が聞かれる。

ホトギスは、カッコウより幾分遅れて南の国から渡ってくる。渡りの途中では夜中でも鳴きながら上空を通り過ぎることもある。托卵の相手はウグイス・ミソサザイ・センダイムシクイ・クロツグミ・アオジなどの鳥で、仮親の卵によく似た色の卵を産みこむ。

この鳥の鳴き声は情熱的で「ホッチョカケタカ、キヨキヨキヨキヨキヨキヨ」などと鋭い声で鳴くため、古くから人々によく知られている。この地域でも渡りの時期には、その鳴き声がよく聞かれる。

カッコウは、ホトギスと同じ時期に南の国から渡ってくる。先に渡ってくるのは雄の方で、早くなわばりを確保するために雄同士が争うが、雌が到着するころには、なわばりも決まり、モズやオオヨシキリ・アオジなどの巣に托卵する。

最近では、都市部に住むキセキレイに托卵するのも増えてきて



第218図 カッコウ

いるため、街中でもカッコウの声が聞かれるようになった。

ツツドリは、ジュウイチとほぼ同じころ南の国から渡ってくる。低山にはすみつかず、標高1000mあたりの山林で繁殖する。仮親は、この付近にすみつくセンダイムシクイやメボソムシクイなどの場合が多い。

初秋のころには平地へ移ってきて、サクラの木につく毛虫をよく補食する。この地域ではこの時期に限ってツツドリの姿が見られる。



第219図 ヨタカ

(10) ヨタカ科の鳥

ヨタカは夏鳥として5月ころ低山や山地の開けた林に渡ってくる。夜行性で昼間は山林の太い横枝に平行に止まって眠っており、夕刻から活動を始める。空中を飛びながら、大きな口を開けて蛾などを捕食する。車のライトが当たると、真っ赤な目だけが反射して光るので、初めて出会った人はその異様さに驚かされる。この地域でも6月から8月にかけて希に見られる。

(11) キツツキ科の鳥

アオゲラはムクドリ大の鳥で、背中が黄緑色をしている。低山のよく茂った林に留鳥としてすみついている。木の幹に垂直に止まって樹皮の下にいる害虫を掘り出して食べる。人が近づくと「キョッキョッ」と鋭い声をあげて警戒する。繁殖期には生きている樹の幹に穴をあけて、その中に雛を育てる。岩殿山々頂から円通寺に通ずる松林では、何回も鳴き声を聞いた。

アカゲラは、アオゲラよりやや高い山にすむキツツキで、頭から背中にかけて白と黒の模様で、雄の後頭部と下腹部が赤い。嘴で木の皮のすき間をついて害虫をとる習性は、ほかのキツツキと同様である。この鳥も木に穴を掘ってその中に雛を育てるが、巣づくりに使う木は枯れたものであることが多い。

コゲラは、キツツキのなかでは体が最も小さく全長約15cmほどである。体の上面は黒褐色で背と翼には白色の黄斑がある。低山や山ろくの林に留鳥としてすんでおり、数も多くどこの林でも普通に見られる。アオゲラやアカゲラのように警戒心は強くなく、近づいても逃げようとしない。

鳴き声は「ギーーギーー」と乾いた声で、枝移りする時によく鳴く。秋冬にはシジュウカラやメジロ、ヒガラなどと混群をつくって平地の林にも姿を見せる。岩殿山では、山頂からふもとにかけての全域に分布している。

(12) ツバメ科の鳥

イワツバメは、ツバメより小型で全長が14.5cmほどである。また喉から胸、腹にかけては白く、腰も白い。以前は山地の岩場に渡ってきて営巣していたが、近年では平地に進出してきて、学校の建物や橋の下など人の近づきにくい場所で巣づくりするようになった。從来からいたツバメと競合しているため、ツバメを追い出して行動圏を広げつつある。岩殿山南ろくではツバメよりはるかに数が多い。

ツバメは、米の減反や家屋の構造の変化などの影響から、昔に比べると数が減ってきてている。

加えてイワツバメの進出もあって、減少に拍車がかかっている。岩殿山周辺でも、空中を飛翔しているツバメは、イワツバメの1/3~1/4程度しか見られない。

(13) セキレイ科の鳥

キセキレイは水辺をはじめ、人家付近・農耕地など、どこでも普通に見られる。名前の通り胸から腹にかけて鮮やかな黄色をしており、長い尾がある。地上をよちよち歩きながら常に尾を上下



第220図 コゲラ



第221図 ツバメ



第222図 セキレイ

に振っている。繁殖期になると河原の石間や人家の棟瓦の中に巣をつくって雛を育てる。7月ころになると平地から高山の涼しい場所に移動し、9月ころ再び低地へ戻ってくる。桂川河川敷でよく見られる。

セグロセキレイは、名前のように背中と頭が黒く、体の下面と頬が白い。留鳥であるが、真夏の暑い季節には涼しい場所へ漂行する個体もある。河原をはじめ、農耕地・人家付近の溝など、どこにでもすんでいてよく目につく鳥である。繁殖期には人家の建物の隙間や河原の石間などに営巣して雛を育てる。街中でも繁殖し、車の運転席などに巣造りして話題をまくこともある。この地域では山ろくの農耕地や高月橋下の桂川などで普通に見られる。

ハクセキレイは、日本の北部地方で繁殖して、冬季になると中部地方以南に渡ってきて越冬するセキレイで、色彩はセグロセキレイによく似ており、顔の細かい模様を見ないと区別がつきにくい。

この地域では、冬季に山ろくの農耕地や河川敷で姿を見かける。

ビンズイは、山地の明るい林や木がまばらにある草原などで繁殖し、夏の間はそこで過ごしているが、秋のおわりごろから山を下って平地に移ってくる。冬季は、日だまりの地上で餌を拾っているが、セキレイ特有の尾振りをしている。この地域では南斜面の丸山公園付近でよく見られる。

(14) ヒヨドリ科の鳥

ヒヨドリは、最近になって数が増えてきた鳥で、山林をはじめ、公園・学校・病院・住宅地など樹木のあるところならどこでも見られる。「ビーキー、ビーキー」という特有の声で鳴き交う情景は珍しくなくなった。

春はサクラヤツバキの花の蜜、夏はいろいろの小昆虫、秋は木の漿果や熟し柿、冬はピラカンサや南天の実など、ヒヨドリの餌になるものは数多い。

(15) モズ科の鳥

モズは留鳥として周年同じ場所で生活している鳥で、小型ながら肉食鳥である。早春のうちから低地の村落の林や、低木のある農耕地・公園などで繁殖をはじめる。この鳥には“早にえ”という変わった習性があり、捕られた餌の一部を木のバラや有刺鉄線に突きさしておく。秋の終わりころになると家族生活を解いて、それぞれが単独生活をするようになる。この時の鳴き声が、いわゆる“モズの高鳴き”と呼ばれるもので、鋭い声で「キーキィー」と鳴くあの声は秋の風物詩の一つになっている。岩殿山南ろくの日溜りには、冬季に虫を探しているモズによく出会う。



第223図 モズ

アカモズは夏鳥として5月ころ南の国から渡ってくる。平地にすみつくことはなく、低山の明るい林や低木のある草原・低木林にすみつく。近年数が減ってきており、この地域で確認することはできなかったが、生息の可能性は充分ある。

(16) イワヒバリ科の鳥

カヤクグリは全身茶褐色のスズメ大の鳥で、夏季は高山帯の低木林で繁殖し、冬になると山ろくの低木林や林縁のやぶに移ってくる。鳴き声が大変美しく、鈴を鳴らすようなすき透った声で「チリリリリ」と鳴く。冬の間も同様な声で「チンチリリ」と短く鳴く。南ろくのやぶのある場所で冬季に見かける。

(17) ツグミ科の鳥

ジョウビタキは10月ころ、中国北部やサハリンなどから冬鳥として渡ってくる。渡来直後はなわぱりを決めるために数羽で争う



第224図 ショウビタキ

姿が見られるが、間もなく行動範囲が定まって、その中で単独生活をするようになる。平地から山地の農耕地・河原・公園・庭先などに出てきて杭や屋根、電線などに止まり「ヒッピッカ、カッ」と鳴きながら地上にいる小虫などを探索している。雄は頭が銀色で顔が黒く、胸から腹、下腹部にかけて美しい橙色をしている。

ルリビタキは、亜高山帯から高山帯にかけての針葉樹林中で繁殖し、冬季には山ろくに移ってきて暗い斜面や渓流沿いのやぶで越冬する。雄は名前のように頭から背中、尾にかけて美しいり色をしており、脇腹が橙色である。日が昇って地面が暖まると、日溜りにやってきて地上にいる小虫を探す。丸山公園上部の林縁では、美しい色の雄とよく会ったので、写真撮影を楽しむことができた。

トラツグミは全身が虎の斑に似た模様のある鳥で、大きさはムクドリくらいである。山地のよく茂った林に住み、ここで繁殖する。この鳥は夜間に消え入るような不気味な声で「ヒーヒー」と鳴くため妖怪騒ぎを巻き起こすこともある。

冬季になると山ろくの公園や人家付近にもやって来て、ごみ捨て場でミミズなどを探したり、ヒメリングの実をついぱんだりする。数は少ないが注意していれば見つけることもできる。

アカハラは山地の明るい林で繁殖し、秋冬には山ろくの林に下りてくる。警戒心が強く、人が近づくと「キョッキヨッ」と高い声をあげて飛び去る。名前のように腹が赤く、中央部だけが白い。主に暗い林のなかでミミズなどを探していることが多い。岩殿山では北側斜面の林で見かけた。

シロハラは腹側が汚白色の鳥で、冬鳥として低地や低山の暗い林に渡ってくる。アカハラと同様に暗い林のなかにいて、開けた場所にはなかなか出ないが、夕刻ごろなどになると庭先のビラカンサやウメモドキの実をついぱみにやってくることもある。岩殿貯木場付近で1羽を目撃した。

ツグミは冬鳥としてシベリア方面から大群で渡ってくる。渡来後は小さな群れに分かれて行動するが、厳冬期ごろから次第に単独生活をするようになる。農耕地や河原などで小虫や雑草の実などを探索しているが、時に人家の庭先にも現れてウメモドキやナンテン、ビラカンサの実などをついぱむこともある。地上にいることが多く、人が近づくと「クワックワッ」と二声ずつ鳴いて飛び去ることが多い。この地域では普通に見られる。

(18) ウグイス科の鳥

ウグイスは冬の間平地に下りて来て越冬しているが、3月末ころから繁殖期に入り、それまでの「チャッチャッ」という地鳴きから一転して「ホーホケキョ」という美しいさえずりを始める。巣は低山のやぶやササ原の中につくる。気温が高くなになるとそれまで生活していた場所から高い場所へと移動していき、真夏には亜高山帯あたりまで上って生活する。

ウグイスが好んで生活する場所は伐採後の低木林の下生えの中で、深い森林中や開けた林などにはすまない。

センダイムシクイは夏鳥として4月下旬ころ南の国から渡ってくる。低山の落葉広葉樹林にすみつき、ここで繁殖する。「チヨビィー、チヨチヨビィー」というさえずり声は「焼酎一杯ぐいっ」と聞きならされていて、愛鳥家の間には人気がある。岩



第225図 ツルグミ



第226図 ウグイス

巣山の北側や北西側の広葉樹林中で鳴き声を耳にする。

(19) ヒタキ科の鳥

キビタキは夏鳥として5月ころ南の国から渡ってきて、広葉樹林にすみつく。雄では頭や背、尾が黒く、腹側は鮮やかな黄色をしている。鳴き声も美しく、ピッコロの様な音色で長くさえずる。

岩殿山では北西部の林で鳴き声が聞こえた。

オオルリは夏鳥としてキビタキと同じころ南の国から渡ってくる。沢沿いの林や崖のある山地にすみつき、なわばりをつくる。雄では頭から背中、尾にかけて美しいり色をしており、顔や喉は黒く、腹が白い。姿も美しいが鳴き声もすばらしく、人気の高い鳥で、密猟で捕獲されることもある。さえずり声は「ピーリーリー、ポイヒィービ、ビールリビールリ、ジェ」などと複雑に鳴く。この地域では数が少なく見る機会は少ないが、北西側の広葉樹林中でさえずり声が聞かれた。巣は崖の窪みに苔を使ってつくり、4~5羽の雛を育てる。



第227図 キビタキ

(20) シジュウカラ科の鳥

シジュウカラは林のあるところならどこでも見られる留鳥で、頭や顔が黒く頬が白い。また、喉から腹、尻にかけて黒いネクタイ様の帯がみられる。繁殖期以外は群れでいることが多く、秋冬にはヒガラやメジロ、コゲラなどと混じって大群をつくる。4月下旬ころからさえずり始め「ツビーツビーツビー、ツツビー」などと明るい声でよく鳴く。シジュウカラ1羽が年間補食する木の害虫の数は、約15万匹といわれており、森林のレンジャーとも呼ばれている。木の洞や建物の隙間にコケを運び入れて巣づくりをし雛を育てる。



第228図 シジュウカラ

ヒガラはシジュウカラよりは少し小さく、頭に短い冠羽がある。また喉には蝶ネクタイ様の黒帯があるので区別できる。生息環境はシジュウカラと同様であるが、針葉樹林の方を好む。シジュウカラに次いで数も多く、冬季には里山に集まって林の中を巡回しながら餌を探している。新宮洞くつから秋葉神社に通ずる登山道沿いのアカマツ林には特に数が多い。

ヤマガラはスズメ大の鳥で、シジュウカラの仲間では色彩が最もカラフルな鳥である。雄雌同色で、頭は黒とうす黄色の斑、背と腹は茶褐色、肩と翼は青灰色である。主に常緑広葉樹に生息するが、落葉樹の林にも姿を見せる。繁殖期にはゆっくりとしたテンポで「ツーツービー、ツーツービー」と繰り返してさえずる。ここでは、北斜面の落葉広葉樹に少数が飛来する。

(21) エナガ科の鳥

エナガは体が13.5cmと小さいが、体の長さくらいの長い尾をもっている。背は黒とブドウ色で腹側は白く、下腹はブドウ色をしている。全体は白っぽく、ふわふわした感じの鳥である。3月下旬ころから繁殖をはじめ、苔をクモの糸で綴ったラクビー・ボールのような形の巣をつくる。巣づくりの時は、番以外の仲間も協力して巣を完成させる（ヘルパー制）習性がある。針葉樹林中にもいて、小群で虫を探しある。全山に分布するが多くのはない。

(22) メジロ科の鳥

メジロは広葉樹林を好んでいる留鳥で、頭から背、尾にかけて美しいオリーブ色をしている。春に

はサクラやツバキなどの花の蜜に集まり、秋にはイチヂクやカキの実に群れる。繁殖期には「チーチュル、チーチュル、チチルチル」などと美声を張りあげてよく鳴く。秋から冬にかけては、シジュウカラやエナガ、ヒガラなどと混群になり、林の中を巡回している。ここではコナラなどの多い官向の林で特に多く見うけられる。

(23) ホオジロ科の鳥

ホオジロは頭や背、尾にかけて茶褐色で、そのなかに黒い縱斑のある地味な色彩の鳥である。一見してスズメによく似ているので、野外では誤認することが多い。秋から冬にかけては、数羽で群れをつくり、道端の雜草の実をついばんでいることが多く、人が近づくといち早く飛び立ち、遠くへ逃げてしまう。この鳥のさえずり声は大変有名で、春先になるとよく目につく高い枝で美声を張り上げて「チョッピーチーリーチョ」と繰り返し鳴く。そのため「一筆啓上仕り候」のほか、たくさんの聞きなしがある。林内にはすます、主に開けた場所や林縁でよく見られる。

ここでは、ふもとの林や丸山公園でさえずっている雄を何度も目撃した。

カシラダカはホオジロによく似た色彩の鳥で一見して見違えることもあるが、ホオジロが留島に対して、この鳥は冬鳥として10月ころ北国から渡ってくることで区別できる。またホオジロは冬でも小群で行動するが、カシラダカは10~15羽以上もの大群でいることでも識別できる。農耕地や低木林・林縁などに群れていて、地上で餌をついばんでいるのを見かける。ここでは、ふもとの林縁でよく見られる。

アオジは、頭と頬が緑灰色で、背中は緑褐色、腹側は黄緑色をしている。夏の間は標高1000m付近の林にすんでいるが、冬季はふもとへ下ってきて越冬する。暗いやぶの中をくぐりながら、「ツツ、ツツ」と小声で鳴いて餌を拾っていることが多い。この地域で見られるのは冬の間だけで、やぶのある場所に限られる。

(24) アトリ科の鳥

カワラヒワは、体がオリーブ褐色で翼と尾が黒く、そのつけ根に黄色の帯が見られる。大きさはスズメくらいで、光の当たり方で黒っぽく見える時は、スズメと誤認しやすい。また、河原などに群れているので見過ごしてしまうことも多い。初夏のころになると、高枝や電線に止まってセミのような鳴き声で「ジューアイ」と長くさえずる。普段の地鳴きは「キリリ、コロロ」と軽快な声でよく鳴く。山林にも人家付近にも普通にみられる鳥で、スズメに次いで数も多い。



第229図 メジロ



第230図 ホオジロ



第231図 カシラダカ



第232図 カワラヒワ

マヒワは冬鳥として10月ころ北方から渡ってくる。いつも群れで生活していて、ハンノキやスギの実などをついばんでいる。頭から腹にかけての黄色がよく目立つため識別は容易である。しかし、数は少なく、この地域でも見かける機会は少ない。

ベニマシコは冬鳥としてマヒワと同じころ渡ってくる冬鳥である。名前のように雄では全身が薄紅色で、嘴は短かい。数羽の小群でやぶの中をくぐりながら、地上に落ちた雑草の実などを拾って食べている。その間はお互いの居場所を確認するため、絶えず小声で鳴き交ってコミュニケーションをしている。鏡岩の下方のやぶの中では、この鳴き声がよく聞かれた。

ウソは夏の間高い山の針葉樹林中で生活している鳥であるが、秋から冬にかけては山ろくから山地の山に下りて来て群れで生活するようになる。春先には平地の公園にも姿を見せ、サクラの花芽（蕾）をついばんだりする。

このためサクラの開花に影響が出たりして問題になることもある。この地域でも、丸山公園にはたくさんのが植えてあるので、年によって被害を受けることもある。ウソの地鳴きは、人の口笛にそっくりで「ヒッッ」と鳴く声でよく騙されることがある。雄では頭が黒く、背中や肩は灰白色で翼は黒い。頬と喉が赤く、この鳥のチャームポイントになっている。この地域では丸山公園や奥多摩沿道のサクラの木に群れている。

イカルはムクドリ大の鳥で、顔や頭が黒く、太い嘴が特徴で、黒い翼の一部に白斑があり、飛んでいる時にこれがよく目立つ。鳴き声は「キヨコキーキー、キヨコキーキー」と美しくよく通る声でさえずる。6月の調査の折に鏡岩の下で岸壁に大きく反響して聞こえるイカルの声に耳を疑ったことがある。イカルは冬でも気温が高い日中には鳴ることがある。この付近の林内では繁殖もしているらしく、調査に赴く度によく出会った。

シメは10月ころ北国から渡ってくる冬鳥で、イカルのように太い嘴とずんぐりとした体型が特徴である。最近はシベリア地区の開発などの影響で数が減ってきて、日本への渡来の数も少なくなっている。越冬中は単独でくらしており、落葉広葉樹の林でカエデやシデ、マツの実のほか枯れ葉などをついばんでいる。春の渡りの前には群れをつくり、北国へと旅立つ。ここでは南ろくの広葉樹林で姿を見ることができる。

(25) ハタオリドリ科の鳥

スズメは人家のあるところならどこでもすみついている。繁殖期には屋根瓦の下や建物の隙間に巣づくりして雛を育てる。秋になると成長した雛を連れて大きな群れをつくり、農耕地や河原でくらすようになる。

この時期に稻などに食害を与えることもあるが、年間の餌の種類は大部分が雑草の実と虫である。

(26) ムクドリ科の鳥

ムクドリは、この地方で俗に“ギャーギャー”と呼ばれていて、果樹や農作物の害鳥扱いされている鳥である。繁殖期には人家の屋根や戸袋の隙間にたくさんの素材を運び入れて巣造りをするので嫌われるが、この鳥が一年間に補食する害虫の数は約10万匹であり、農業に役立っていることも見逃せない事実である。この地域では、あともとの農耕地に群れていることが多い。また、クワの実が熟するころになるとその実をついぱみにやってくる。

(27) カラス科の鳥

カラスには、嘴の細いハシボソガラスと、嘴の太いハシブトガラスがいる。この地域では前者がほとんど



第233図 シメ

で、農耕地をはじめ、河川敷・山林・市街地など、どこでも普通に見られる。

最近ではその数も増えてきて、ゴミ場に集まったり、小鳥の卵や雛を食い荒すなどのいたずらが横行してきて、自然の生態系に悪影響を及ぼすようになった。現状では駆除する良策がないため、どこの地域でも対策に苦慮している。

カケスは、低山の林に多く、林の中で「ジャージャー」と鳴く声をよく耳にする。体はぶどう色で、頭は白地に黒の縦斑がある。飛ぶときに翼の一部と腰の白い部分がよく目立つ。低山で繁殖するが、8月ころからは群れをつくって行動するようになる。秋になると低山から平地へ漂行し、翌春ころまでここで過ごす。岩殿山では、この時期に最もよく観察できる。



第234図 カケス

第3節 両生類

両生類の生活は、水に大きく依存していることから、水源から離れた地域での生息はかなり制約されるがカエルの仲間では、産卵場所と生活場所が離れている種類もあるので、移動の時期を知って調査をすすめれば予想外の分布を把握することができる。しかし、種のほとんどは夜行性であるため、その実態を明らかにすることは極めて困難である。またほかの動物のようにフィールドサインを残すことないので、聞き取り調査や文献調査に頼らざるを得ない。

(1) カエル目

ヒキガエル（ヒキガエル科）は、ふつう“ガマガエル”としてよく知られている。大月市付近に生息するものは、特にアズマヒキガエルで、日本在来のカエルの中では最大である。

体長は9～15cmであり、鼓膜がはっきりしている。繁殖期以外はあまり水に入らず、主として陸上生活をし、日中は草むらや倒木の下に潜み、夜間に活動をはじめ、昆虫や小動物を盛んに摂食する。

繁殖期は4月下旬で、山道の水滴りをはじめ池・沼・川岸わきの止水などに、付近の山から集まってきた個体が大集団となり「ガマ合戦」と呼ばれる産卵風景を展開する。この付近では岩場や急峻な斜面を除いた落葉広葉樹林の林床にいることが多く、やや湿気の高い場所で見つかる。

ヤマアカガエル（アカガエル科）も山沿いの地域に住むカエルでこの地域では単に“アカガエル”と呼んでいる。

晩春から秋までは、主に森林の地上で生活していて、晩秋になると森林から産卵場所に移動するものが多い。このカエルは産卵期が早く、3月には既に産卵を終え、その後再び冬眠にはいる。繁殖期以外は山林の落葉の多い林床にいて、人が近づくと、あわてて飛び出すことが多い。この付近では北西側の広葉樹林中に生息している。



第235図 アズマヒキガエル



第236図 ヤマアカガエル

アマガエル（アマガエル科）は、平地や低山に住むカエルで、体色を変えることでよく知られている。5月～7月にかけて水田や水たまりに産卵し孵化した幼生は夏まで水中で過ごすが、体重が0.5gほどに成長すると陸に上って生活するようになる。夕立が来る前兆に「クエックエックエックエック」とよく鳴くので生息場所がわかる。地上にいることは希で、低木や草の上で生活している。乾燥の激しい場所を除けば、どこでも普通に見られる。

第4節 は虫類

（1）トカゲ目

ニホンカナヘビ（カナヘビ科）は、トカゲによく似ていて、この地方では“カナビッショ”と呼んでいる。姿や形はトカゲと同様だが体の表面がかさかさした感じの鱗で覆われているので区別できる。また尾が大変長い。主にやぶと草地の入り混じったところにすみ、草木の陰にかくれているが、日射しが増してくると日光浴をするために出てくることが多い。日陰の森林中にはすます、日当たりの良い場所を好んで生活している。岩殿山では南ろくのやぶで見られる。

ニホントカゲ（トカゲ科）は背面の鱗がなめらかで光沢があることで、前種と容易に区別できる。

生息場所はカナヘビと同じ場所で、時に混棲していることもある。やはり南ろくの日だまりでよく見られる。

（2）ヘビ亜目

アオダイショウ（ナミヘビ科）は、日本の本土では最大のヘビで、成長すると2mになるものもある。全身が褐色を帯びたオリーブ色で、その中にうす黒い四本の縦条が見られる。胴の横断面がまばこ形をしているため腹面の両側が角張っていて、ここをひっかけて樹に上ることができる。ネズミ類の天敵で、ネズミの駆除に役立っているが、小鳥の卵や雛などもよく補食する。山林や草地、人家付近にもすんでいて、どこでもよく見られる。

特に岩場の多い西斜面ではよく出現する。

シマヘビ（ナミヘビ科）は麦わら色の背に4本の黒褐色の縦条のあるヘビで、平地から低山にかけての森林や河原などにすんでいる。敏感なヘビで、人気を感じると素早く逃げてしまうことが多い。主な食物は両生類や飛虫類であるが、小鳥や小型は乳類も補食する。日当たりの良い場所ではトカゲを追いまわしている姿をよく見る。

気が荒く、人が追いつめると体をくねらせて攻撃ポーズをとり咬みついてくることもある。

やはり南ろくの日当たりの良い場所で見られる。

ジムグリ（ナミヘビ科）は背面が暗褐色の地に小さな黒斑のあるヘビで、クリーム色の腹側には角張った黒斑が見られる。臆病な性質のため、人気がするといち早く物陰に潜りこんでしまう。

食物はネズミ類やヒミズで、ヒキガエルなどは補食しな



第237図 カナヘビ



第238図 シマヘビ

い。土に潜りやすいように、下あごが後退し、上あごの前縁がこれに覆いかぶさっているほか、頸部もくびれていません。ここでは北東斜面の暗い林のなかで見られる。

ヤマカガシ（ナミヘビ科）は山林の沢沿いにいることが多く、主にカエルや小魚などを捕食している。夏から秋にかけては活動が活発になり、山道に現れることもある。追いつめたりすると体の前部をもち上げて頭を平たくし、攻撃ポーズを見せる。頸部には、有毒な液がたまっている頸腺があり、深く咬みついた場合には奥歯に沿ってこの液が注入されることもあり、極めて危険である（咬症被害によって死亡した例もある）。山林内では大きなヒキガエルをくわえて動けなくなっているヤマカガシによく出会う。この地域では岩場以外の山林中に分布している。



第239図 ヤマカガシ

ニホンマムシ（マムシ科）は有名な毒ヘビであるが、数は少なく性質もおとなしいヘビであるから、むやみに恐れることはない。しかし、鼻孔と眼の間にある窩はピット器官と呼ばれ、0.1°Cの温度差を感知する赤外線レーダーの役目をもち、僅かな温度差を感じた場合でも反射的に咬みつくので踏みつけたりしないよう注意しなければならない。この地域では岩場も多く、冬眠場所として適しているので、山歩きには注意が必要である。

第5節 昆虫類

昆虫類は、種類や数が多く、発生期も一様ではないので短時間の調査での生息状況を把握することはできない。昆虫のなかでも最も人気のあるクワガタムシでさえ、日本で25種が知られており、その全種類を採集するだけでも10年くらいはかかる。従って、ここで紹介する昆虫は、よく知られている蝶類・セミ類・甲虫類の一部を、主として文献に依り紹介するにとどめたい。

(1) 蝶類

アゲハチョウ科では、キアゲハ、アゲハをはじめクロアゲハ、オナガアゲハ、カラスアゲハなどが分布するとと思われる。

シロチョウ科では、モンキチョウ、キチョウ、ツマグロキチョウ、モンシロチョウ、スジグロチョウなど。

マダラチョウ科では、アサギマダラ（秋季）。

テングチョウ科では、テングチョウ（6月頃）。

ジャノメチョウ科では、ヒメウラナミジャノメ、ヒメジャノメ、ヒカゲチョウ、クロヒカゲ、キマダラヒカゲなど。

タテハチョウ科では、ゴマダラチョウ、オオムラサキ、スミナガシ、イチモンジチョウ、コミスジ、サカハチチョウ、アカタテハ、ルリタテハ、ウラギンヒョウモン、ギンボシヒョウモン、ウラギンスジヒョウモン、ヒョウモンチョウなど。

シジミチョウ科では、ウラゴマダラシジミ、ウラナミアカシジミ、ミドリシジミ、オオミドリシジミ、フジミドリシジミ、カラ



第240図 アサギマダラ



第241図 ウラギンヒョウモン

スシジミ、トラフシジミ、キマダラルリツバメ(県指定天然記念物)、ゴイシシジミ、ベニシジミ、ヤマトシジミ、ルリシジミ、ツバメシジミ、ミヤマシシジミ、ゴマシジミ、ウラギンシジミなど。

セセリチョウ科では、ダイヨウセセリ、イチモンジセセリ、チャバネセセリ、チャマダラセセリ、ミヤマセセリ、ギンイチモンジセセリ、コチャバネセセリ、オオチャバネセセリなどである。

(2) セミ類

ニイニイゼミをはじめ、アブラゼミ、ハルゼミ、ミンミンゼミ、ヒグラシ、ツクツクボウシなど。

(3) 甲虫類

カブトムシをはじめ、ルリクワガタ、チビクワガタ、ミヤマクワガタ、ノコギリクワガタ、コクワガタ、ヒラタクワガタ、オオクワガタなど。

カミキリムシの仲間では、アカハナカミキリ、ノコギリカミキリ、ヒラタカミキリ、トラフカミキリ、ヨツスジハナカミキリ、キボシカミキリ、エグリトラカミキリなど。



第242図 オオクワガタ

参考文献

今泉吉典	『動物の大世界百科』1~20巻	日本オームメータン社
小原秀雄	『原色日本哺乳類図鑑』	保育社
子安和弘	『日本野生動物記』1~2	中央公論者社
小田島謙編	『足跡図鑑』	日経サイエンス社
高野伸二	『原色野生哺乳動物』	家の光協会
中村司・依田正直	『フィールドガイド日本の野鳥』	日本野鳥の会
依田正直編	『山梨の鳥』	山梨日日新聞社
清瀬幸保	『山梨の野鳥』	山梨日日新聞社
千石正一	『野鳥の辞典』	東京堂出版
中村健児	『原色日本両生・爬虫類』	家の光協会
竹内吉蔵	『原色日本両生爬虫類図鑑』	保育社
横山光夫	『原色日本昆虫図鑑』	保育社
黒沢良彦監修	『クワガタムシ』	保育社
松井孝爾	『ヘビの世界』	平凡社
松井孝爾	『カエルの世界』	平凡社
甲州昆蟲同好会	『山梨の蝶』	山梨日日新聞社

(依田正直)

第 5 編

第5編 岩殿山研究の総括

本編では今回の岩殿山研究の総括を述べてみたい。まず、調査は大月市教育委員会から委嘱をうけた考古学、城郭史、文献史学、民俗学、建築史、都市史、仏教彫刻史、地球科学、植物学、動物学などの研究者が岩殿山を総合的に科学しようと「岩殿山総合学術調査会」(清雲俊元会長)を立上げ、平成7年度から平成9年度まで3ヶ年にわたり精力的に調査に取り組んだ。各研究分野とも現在確認できる全ての資料を駆使し、かつ分析・解析を試み、可能な限り岩殿山の全貌に迫った。その報告書が本書である。

特にこれまでの歴史研究に加え、岩殿山という自然体系にも範囲を拡げ、地形、地質、植物分布、動物生態調査も並行して実施し、これが集大成されるに至ったことは本県における歴史研究の上でも学史に残る総合調査の一となる。調査の方法、手順については第1編第2章で述べている。

さて岩殿山は、岩肌を露出、かつそびえ立つ堂々とした偉容を誇り、その自然景観は正に壯觀であり、古代から山岳修驗道場の宗教的な聖地としての「場」となったが、その理由は現地に立つと容易にうなづける。

また、後の戦国期には山頂に山城としての機能をもった時代があり、これが後に「岩殿山=岩殿城」として前面に押し出され、城郭だけ突出してきた感がある。また研究の方も城郭研究が先行してきた経緯がみられる。

岩殿城に關わる歴史研究は、主なものを拾うと、これまでに小林利久(1967)、柴辻俊六(1974・1988)、中沢信吉(1978)、鈴木美良(1986)、小峰裕美(1987)、堀内亨(1988)等によって行われており、それらをふまえ荻原三雄(1989)は総括的に「岩殿城の史的一考察」(山梨県考古学論集Ⅱ)として取りまとめた。その論文の中で「なぜ小山田氏本城説が深く浸透し定着してしまったのか。根柢が薄いにもかかわらず『甲斐国志』以来の通説としてその枠を越えず追隨する歴史研究のあり方と姿勢は、そろそろ見直しせざるを得ない時期に来ている」と述べているが、今回の調査は、その見直しをも包括した総合調査で大きな意義があった。

岩殿山関係については一^次的な直接資料が少ない中で、これまでに確認されている歴史史料(文献史料、地誌、絵図など)と、さらに新たな資料の収集を行い、さらには考古学による発掘調査を実施し、遺構や遺物資料など新たに加え、詳細に分析が試みられた。

調査の結果は、第1編序章につづき、第2編で「岩殿城の研究」報告がされている。その中の第1章研究略史では、小山田氏要害説が定着した経緯に触れ、また武田氏築城・經營説が提起されるに至った状況、さらに岩殿城研究が「一次的な文献資料が極めて少ない中で、歴史解釈されてきたが、これからは発掘調査の結果をふまえ慎重に検討していく必要がある」(数野雅彦)という現状認識がまず示されている。

第2章で岩殿城の歴史環境に触れ、第3章では岩殿城の縄張について、特に頂上部分の縄張は地形実測図をもとに現地踏査の情報を加え、今回新たに作成(第1図・第2図)され、城郭の構造や通路などが検討された。築城にあたって山頂を改変しているものの自然地形を生かした縄張となっていることが確認された。

本城は当初小山田氏の本城とされ、その後武田氏直轄と位置づけられ、さらに天正10年武田氏滅亡後の甲斐国領有をめぐる徳川氏と後北条氏の戦いの際に、一時的にこの地域が後北条氏に制圧されたことから幾度かの改変が想定され、こうした情勢も視野に入れて、この城の縄張や構造を再度考える必要があるとした(畠人介)。そして飯村均氏が言われる山城ができる「場」として型地が選ばれるケースがあるというとおり、岩殿城は前提となる円通寺の信仰空間を取り込む形で縄張構成されているところに特徴があるとしている。

第4章では岩殿城の考古学調査報告がされているが、今回の総合調査ではじめて試掘調査が実施された。発

掘現場の通常山頂部と呼ばれるところは、標高610m前後の西側と635mほどの東側との2つのピークがみられ、その鞍部にあたる位置で、「甲斐国志」ではこの山頂部に「一ノ堀」「二ノ堀」「本城」「馬場」「大門口」「藏屋敷」「亀ヶ池」「揚木戸門」などの伝承があるが、今回の試掘調査は、それら伝承のなかの遺構確認が大きな課題であった。現在遺構が存在し確認できるものは2つの塹（一ノ堀・二ノ堀）と湯水池（亀ヶ池）のみで、他は地形や伝承によって比定されているだけ、という現状をふまえ、試掘調査は平成8年度に「藏屋敷」と伝えられる山頂の平坦部で始まった。また「亀ヶ池」とみられる池の試掘調査も行った。

「藏屋敷」と伝えられる山頂部からは、出土遺物がみられ、平成9年度も引き続きその周辺を拡張し調査した。発掘地点は広い平坦地のごく一部であるが、何らかの遺構が狙える場所にトレーンチを設定したものである。

亀ヶ池は「甲斐国志」には「池ニツ常ニ水ヲ満エテ…」とあって、一つが「亀ヶ池」、もう一つが「馬洗水」とあり、二つで「亀ヶ池」と言われているところの発掘調査であった。

平成8、9年度に行われた「藏屋敷」と伝えられる山頂平坦部の調査では第6図の状態で遺物の分布と弧を描いた竪穴状遺構を確認。また「亀ヶ池」については第5図の遺構が検出された。

山頂平坦部からの遺物は陶磁器片計117点と粒状の炭化集塊2点で、陶磁器の中には瀬戸祖母懐の茶壺がほぼ完形に近い状態まで復元された。祖母懐の茶壺は山梨県内の出土例として笛崎市の新府城跡、下部町の湯之奥中山金山遺跡にみられる。

遺物的には14世紀前半の常滑の甕、16世紀前半の染付碗、16世紀中葉の瀬戸・美濃産の天目茶碗、16世紀後葉の上戸呂系がみられる。また銭貨は初鎔が11世紀初頭の北宋錢のみ数点がみられた。中世後期や末期の遺跡からは明鏡の「洪武通宝」や「永樂通宝」などが出土する例が多いが、この調査区からは確認されていない（畠大介）。そして粒状の炭化塊はすべてアワであった（新山雅広）。

試掘調査で得られた成果と課題については、広い山頂鞍部の中で、幅1mのトレーンチはあまりにも規模が小さすぎた感があるとしながらも（杉本正文）、表七が予想外に厚かったこと、ローム層が良好な堆積状態であったことが確認できたことは、将来本格的な発掘調査が実施されたときに、遺構などの発見に期待が残された。

今後の考古学調査の課題として「甲斐国志」にある地名の比定や機能の検証、山頂部における修築道の痕跡の確認など、残された課題が多い。城城内の地名についても「池」など遺構が残るものはともかく、根拠が示されないまま場所が比定され、正面という意味の「大手」に「門」があったことになっているが、このような実態とともに、必要以上の美化は問題が多く「天守閣を備えた居城」と思い込んでしまう人はかなり多い。今後、岩殿山の実態を整理していく上でも、それぞれの名称を整理し、明確な検証が研究の発展につながる前提としている（杉本正文）。

この他、発掘調査は岩殿山南面下方にある、通称「丸山」の公園整備の一環として調査が行われた（第13図）。自然に残された地形を利用し、肩から裾にかけ人為的に形を整えていたが、時期を決定づける出土遺物はみられなかった。

また岩殿山の635mの東側山頂には、約300m²の平坦地があるが、現状は電波中継アンテナの鉄塔用地や、大月市の防災無線中継局舎やアンテナが設置されているが、現状が維持されている約32m²を対象に発掘調査、鉄塔新設予定地から6カ所の穴が確認された（第15図）。この穴は掘であったと推測される。時期を示す遺物の出土はなかったが山岳修築に関する可能性は低く、城郭関連の施設痕とみられる（杉本正文）。

第5章は岩殿山麓の集落空間構成に関する研究報告がまとめられている。その第1節では集落の分布と特徴に触れているが、桂川と葛野川に挟まれた岩殿山の山麓には浅利・強瀬・岩殿・畠倉などの集落が点在し（第16図）、近世以降、いずれも山間部の純農村的な集落となっているが、その中でも強瀬は、狼橋から花咲

へ抜ける甲州道中の脇往還に位置する「宿」系の集落として、また岩殿は岩殿山七社権現等の「門前」系の集落としてやや特殊な位置を占めていたと考えられるとしている（伊藤裕久）。資料的には旧貢岡村（強瀬・岩殿・畠倉地区）の地籍図、都留郡貢岡郷之内強瀬組全図（絵図史料）、岩殿城跡を描いた近世絵図などから解析を進め、また『甲斐国志』巻之十九、村里部にみられる文化3年頃の集落規模と近世後期における集落規模を比較し、平坦地に多くの田畠をもつ畠倉村が大きくなっている姿を確認、さらに近世初頭の検地では、岩殿・畠倉は強瀬に属し「小畠村」と称され、文禄3年及び慶長15年の村高は小畠村589.460石、浅利村77.850石。それが寛文9年の検地では強瀬村200.355石、岩殿村69.463石、畠倉村304.346石となっており、分村していることが確認できた。

これらの集落群は、古代に建立され15世紀以降に発展した岩殿山円通寺及び岩殿明神（七社権現）の周辺集落として、中期末期には既に成立していたことを明らかにした（伊藤裕久）。

特に強瀬村は永正17年に大破した円通寺再建・復興で有力住民から寄進があったことから、岩殿山円通寺に密接に関係した集落として、16世紀初期にはかなり発展した集落が形成されていたと推定。またこれらの集落と戦国期における岩殿城との関係については直接的な文献史料はないが、第2節集落空間構成の復原的考察において、強瀬（「宿」系集落）、岩殿（「門前」系集落）として空間構成が特徴づけられると分析している（伊藤裕久）。

その第2節集落空間構成の復原的考察では、1で強瀬集落形態－「宿」系集落－を詳細に分析し、(1)で集落空間構成の特徴を考察し、(2)では絵図史料から集落空間構成の復原的考察が試みられている。小字名、御所、寺社の立地、上組・下組の分布と屋敷形態まで解析している。2では岩殿の集落形態－「門前」系集落－に触れ、(1)集落空間構成の特徴、(2)明治初期の宅地構成まで触れている。

そしてこの章の「まとめ」では、岩殿の集落空間構成について復原的考察を加えた。極めて断片的な史料の分析であるが、近世初期以前の岩殿集落は、円通寺の境内に成立した小規模集落であったことが推定される。その集落形態は、近世初期に成立した常楽院・大坊の屋敷を中心に、南北往還に至るまでの参道の両側に集中している。寛文期以降、18世紀中頃までは南北往還の東側や南沢を隔てた中丸地区などの「年貢地」に多くの新屋敷が設立され、集落の大規模な拡張が行われていることが判明したと述べている（伊藤裕久）。総合調査の大きな成果である。

第3節では、古絵図や検地帳の照合、現地踏査などが行われ「御所」の存在が明らかになったが、この御所の性格を探るべく試掘調査が行われた。ただし「御所」に該当する地点は精密機械工場敷地内となっているため、明らかに御所から外れた躰地であるが、何かの手がかりが得られる可能性を追って、隣接する体説地を選定、試掘を行った（第47・48・49図）。出土した遺物は平安時代の壺、甕の破片で中世の陶器などはみられなかった。

第6章は岩殿城の伝説・伝承ということで民俗学の立場から取り組んだ。岩殿山周辺には永い歴史を物語る数多い伝説・伝承・民話が残されている。これらには岩殿山や岩殿城に関わる歴史像が見え隠れしている。

第7章では岩殿城周辺の城郭について触れている。この中で桂川流域の城郭を武田家滅亡以前の戦国時代に築かれたとしているが、武田家滅亡後の天正壬午の戦いで甲斐国内の城郭が築造・改修された可能性が極めて高く、県内の城郭を考察する場合、天正壬午の戦いが大きな画期の一つとしてとらえることが重要だとしている（山下孝司）。

第8章は岩殿城研究の考察で、今回の岩殿城調査の歴史的意義と今後の課題が述べられている。当初から予期していたが直接的な資史料に欠け、今回の総合調査においても明らかにできなかった点は少なくなかった。しかし全体測量などつうじ規模や構造がより鮮明になった。また藏屋敷といわれる山頂平坦部での出土資料は、今後の全容解明の重要な糸口として評価される。特に出土遺物からみると16世紀半ばには岩殿城が存在

していたことが明らかとなった。そして本城の立地が山岳修験の場である円通寺等の聖域内に存在する意義が取り上げられている。さらに本城の眼に広がる集落が、今回新たに解明されたことは特筆される。今後資料の蓄積と動向をみながら息長く論ずべきだろうと述べられている（萩原三雄）。

第3編は旧円通寺の研究報告がされている。第1章旧円通寺の立地と歴史環境では、10世紀前半には存在し、修験の中心的寺院で、岩殿山の自然環境が修行に適していたところであった。寺域は修行を考えれば全山に及んだとみられる。円通寺の解明は、都留郡の歴史的空白である古代から中世を埋める手がかりにつながるとしている（福田正人）。

第2章は旧円通寺の歴史にふれている。岩殿山南東麓に伽藍を配した天台系修験の寺院で、「甲斐国志史料」の永正17年（1520）の棟札によれば大元年（806）の建立。円通寺は七社権現を中心に觀音堂、三重塔、新宮などがあり、その別當として常樂坊、大坊があり、大坊には真藏院が存在したと言われている。

第3章では旧円通寺の研究歴史に触れているが、1000年以上に及ぶ年月を経ながらその起源と盛衰の経過は判然としていない。理由は旧円通寺に関する十分な調査と研究がごく最近までなされなかったことによる。また残存する有力資料も僅少であることを一因としている（井上農）。昭和43年の大月市史編纂にともなって円通寺に関する研究が始まったといわれるようすに旧円通寺研究は、正にその緒についたばかりの状態にある。

第4章は旧円通寺の考古学調査報告である。第1節は試掘調査を行った三重塔跡であるが、現存する絵図（第67図）と現在の地形図を検証し位置を特定し、麓部分の觀音堂・三重塔などが配置されていた区域を対象とした。しかし現地は国道139号、市道宮古橋線に分断され、また住宅などの建物で、境内とみられる平地もコンクリートで覆われるなど、長い年月での改変が大きく、試掘地点はわずかな平地に限られた。また調査結果でも三重塔に関連する礎石、基壇などの確認はできなかった。出土した陶器は大半が細片で復元できる資料はなかったが、18世紀代の櫛前系染付丸碗で草花文が施されたもの、灰釉を施釉した瀬戸・美濃系の陶器碗や、18世紀後半のもの、さらには現代のものに及んでいる。これらは考古学調査の成果である。

また調査区から銅錢と鉄錢の「寛永通宝」、鉄錢の「水楽通宝」と「文久永宝」など銭貨の出土があった。「寛永通宝」のうち最古銭は寛文8年以降の文銘で、その前の古寛永はみられず、これがこの地点の時期的な側面を反映していると推測している（畠大介）。

第2節の新宮洞窟（第74図）は、現在コンクリート製の欄の台座と石仏2体（いずれも馬頭觀音）の人工物がある。洞窟内には天上から剥がれた砾岩塊がいくつかみられる。この中に2×4mの小トレンチをいれ調査し4点ほどの遺物を採集した。18世紀後半頃の櫛前系の染付筒形碗、18世紀後半～19世紀前半の鉄軸がかかった瀬戸・美濃のベコカン徳利、18世紀の備前系の白磁の瓶（徳利）、それに明治15年以降の瀬戸・美濃の酸化コバルトの型紙絵付碗などである。これらから、ここが江戸時代に何らかの信仰対象の場となっていたことが確認できた（杉木正文）。しかし、この場所は地形的・地質的条件から危険がともない、発掘調査は非常に困難なところである。

第5章旧円通寺の諸建築では、円通寺の建築構成に関して報告されているが、円通寺伽藍の造営とその後の経緯について、これまでの史料記載を明らかにする必要があるとした上で、「甲斐国志」の記載事実の見直しを図りながら、建造物の検証が行われている（渡辺洋子）。全ての建造物に解析が加えられており、今回の調査の成果が反映されている。

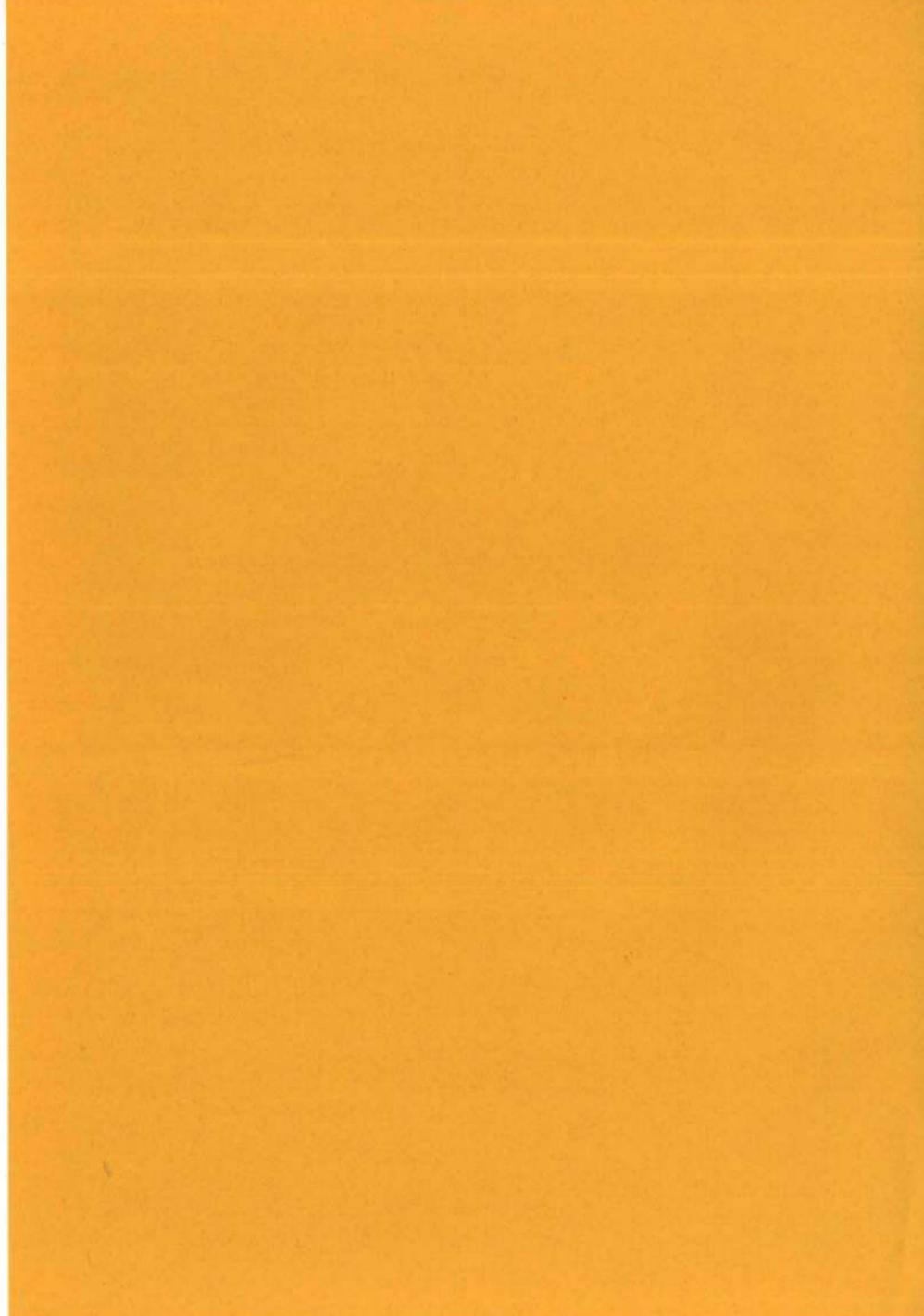
第6章では、旧円通寺の影刻に触れている。真藏院境内の収蔵庫に納められた木造十一面觀音像2体と木造七社権現像7体（県指定文化財）の九体の調査が行われた。これらは「甲斐国志」に、円通寺より伝えられた像とされ、今回の総合調査で再吟味されたことは大きな成果として残ったといえる。第7章で岩殿山の北麓にある洞窟の新宮洞窟にふれている。東側の七社権現の洞窟とほぼ同じ頃、同じ職能をもった別院があつ

たと推定されているが、資料が少なく研究も手つかずの状況にあった。今回の調査では『甲斐国志』以前の資料に着目し調査が進められた(井上豊)。第8章では旧円通寺蔵大般若経にふれているが、岩殿の真藏院にはかつての円通寺に伝来された600巻が、現在533巻(大月市指定文化財)残されている。般若経には智感によって開版された「智感版」と近江守護佐々木氏頼により承暦元年に刊行された「崇永版」から成り、表紙には「大般若波羅蜜多經卷第〇〇」の木版による外題を記した紙が添付され、その下に「岩殿山」との墨書きが記されている。これが永年の使用で外題を記した紙を失い、墨書きも判読不明までに摩滅したものも少なくない。「岩殿山」が確認できたのは333巻、うち四七九には「岩殿山円通寺」とあった。これらはすべて円通寺に関わるものとして評価された(秋山敬)。別編第2章で旧円通寺蔵大般若經刊記・墨書き一覧が添付されている。また円通寺本の成立事情を物語るのみでなく、智感版・崇永版の存在形態や版経の地方受容の問題を考える上で、興味深い視点を与えるものとして今後の検討が期待されるとしている(秋山敬)。第9章は旧円通寺研究の考察で清雲俊元によってまとめられている。さらに、別編の第1章では岩殿城及び諸宗教施設・岩殿市など岩殿山にかかわる文献資料を集めた(堀内亨)。

さて第4編は今回の総合調査の特筆で「岩殿山の自然」として第1章で岩殿山の地形・地質にふれている。第1節は岩殿山の地形・地質的位置を解説、第2節で岩殿山の地形・地質にふれ、第3節では岩殿山周辺の自然遺産と自然災害に及んでいる。第2章は岩殿山の植物で、第1節で植物相の概要、第2節で植物分布の構成要因、第3節で登山道に沿って見られる植物、第4節で植生、第5節で注目すべき植物、第6節で植物目録が一覧されている。第3章では岩殿山の動物にふれ、第1節獸類、第2節鳥類、第3節両生類、第4節は虫類、第5節昆虫類までが総合調査の中で行われた。

岩殿山の一枚岩に見える景観も構造的には極めて複雑、不整合といわれる断層の露頭などが観察でき、また岩殿山の下、高月橋直下に見られる岩盤など、学習材料の宝庫としてとらえられる。その地形の上に成り立っている岩殿山には、数多い植物相と動物相が観察できるが、この豊かな自然という歴史舞台の上で展開された旧円通寺の歴史、岩殿城の歴史を重ね合わせると、この自然遺産・文化(歴史)遺産は、地域の尊い宝であり、観光資源でもある。地域の皆さんのが誇りに思い、この環境を壊すことがないように大切に守り、子供達に誇りついでいくことで、地域の豊かな発展につながっていくと考えられる。

(谷口一夫)



別

編

別編 資料編

第一節 近世・近代の地誌に見える七社権現・岩殿城

「甲斐国志」

〔卷五四〔古跡部一六(下)〕〕

第一章 岩殿山にかかる文献資料

本章には、岩殿山にかかる文献資料を集成した。

文明十八年（一四八六）から翌十九年にかけて北陸・関東を旅した牛頭院門跡道興が残した紀行歌文集『廻國雜記』の記事が最も古い。道興は、「岩殿の明神」に参詣し、一首を遺した。当地が、柏尾山（大善寺、東山梨郡勝沼町）や七覚山（円乗寺、東八代郡中道町）となるんで、本山派修驗の拠点であったことを如実に物語っている。

戦国時代には山頂に城郭が築かれた。天正十年（一五八二）三月、滅亡の危機に瀕した武田勝頼は当城を最後の砦に選んだが、小山田信茂の裏切りの前に城さえ果たせず、田野（東山梨郡大和村）において生命を絶った。また、当城は、駿河の久能城、上野の吾妻城と並んで、武田領国内外三名城と謳われたといふ。こうした考え方とは、どうやら『甲陽軍鑑』の記述に端を発しているらしい。「甲斐国志」をはじめとする地誌に引用、増幅され、甲州道中を走った旅人はこれを「予備知識」に山を見やり、戦国の世に思いを馳せている。

第一節では、近世の地誌から関係記事を抜粋した。続く第二節では、『廻國雜記』以降、明治前半に至る紀行文に現れる岩殿山についてまとめた。第三節では、「甲陽軍鑑」から、岩殿城に言及した箇所を摘録するとともに、戦国時代の文書を合わせ収めた。第四節には、七社権現・圓通寺・常乗坊・大坊など、山内・山麓に点在した宗教施設にかかる史料を集成した。最終節（第五節）では、七社権現の祭日に行われたいへん賑わったと伝えられている「岩殿の市」にかかる史料をまとめた。

〔巻七二（神社部一七下）〕

一、岩殿七社権現・岩殿村 本村産神、祭礼七月十七日、別当本山修驗常乗院、事見仏寺部、

一、岩殿山門通寺、岩殿村一 黒印寺領一町八段一畝一步、堂敷地七百五十坪、本尊十一面觀音、行基作、別堂本山修驗常樂院・大坊、相伝大同元年創造棟札アリ、如左、

棟札之事 行基菩薩建立、大鎌元年以来到永正十七年、依而及大破、爰上繩國住僧覺阿闍梨為本願、進万民之處、少破修理舉、仍而御奉加之事、

鳥口百匹武田左衛門大輔信友、駒一匹、太刀一腰當郡主護平信石、駒一匹、

太刀一腰平藤丸上之奉行、駒一疋、太刀一腰藤原追光下之奉行、太刀一腰源実次、駒一疋、太刀一腰源吉、駒一疋、太刀一腰藤原実吉、駒一疋、太刀一腰藤原長吉、駒一疋、太刀一腰源忠長、駒一疋源重胤、駒一疋家重、三百文

白洲信重、三百文内所助長吉、五百文其時当羅御代・長沼沼以秀、五百文與秋

神右衛門尉良吉、三百文牛田若狭守、一百文與秋大藏、百文押佑、五百文強瀬四郎三郎、犀之本願志村左近進長吉、駒一疋酒溝六郎右衛門、同所三百文

八郎右衛門、三百文藤崎近勝右衛門、一接二行基者、天平廿一年二月二日入

哀、年八十二、先大同元年己二五十八年、時代人ニ述ヘリ、然レドモ古來斯

々伝説スレバ、其頃ノ創造タルベシ、塔ノ升形ニモ、承平三年七月廿五日、大

僧那阿彌尼トアレバ、旧刹タルコト可知、

○秋元氏修理棟札

岩殿山棟札之事 行基菩薩御建立、大鎌元年以来到永正十七年、依而及大破、

爰武田左衛門大輔信友修復舉、其後到承応二甲午年破損、依而爰當郡主秋元

越中守富朝公修理舉、爰奉行割山五左衛門驅、承応二甲午八月廿日辰、大工奉行竹田小右衛門、人工頭花田長右衛門、棟梁花田助右衛門、別當椎人僧都

明賢法印、極大僧都明尊法印、因行基菩薩御建立、大鎌元年以来永正十七年・承応三・穩向度破損、其後貞享二

乙丑年及破損處、當郡主秋元振津守喬朝公修理舉、普請奉行近藤重兵衛、于時貞享二乙丑四月吉辰、城代高山伝右衛門繁文、別當常楽院高賢・高尊、

唐銅燈第二掛、奉納岩殿山觀音堂、願主從四位下行谷村侍從佐馬守藤原朝臣

秋元喬朝、宝永甲申年十一月十七日、

繪馬一面、狩野洞元邦筆、奉掛御室前、元禄十年丁丑閏二月五日、戸田氏

忠真寄付、

○寺宝 大般若經六百卷、奉施入印斐州都留郡岩殿山通寺、応永六年己卯六月、勅進僧順翁有德知客、金剛仏子明賢、一三百廿八卷尾、永和四年正月

開板、奉施入七所大権現御室前、応永七年庚辰九月日、六百卷尾、康暦元己未八月七月開板、応永八年極月十三日下着撰畢、印斐州都留郡岩殿山通寺全

順仏子明賢、同甲斐国都留郡貢郷岩殿山通寺、応永八年辛巳十二月十三日撰下畢、同十六年己丑洞月十五日奉供養、経兩一蓋記云、永正六年己巳

卯月唐僧新作畢、一十六善佛一輪、一大般若經ニ属スレバ、是亦必水中ノ両ナルベシ、一 不動明王古画二幅、老梅鹿吉画、一唐画無名、一三重塔

本尊觀音、脇士一文殊・普賢、此塔初建立ノママ、修復ヲ加ル耳、造宮ノ事ナシ、一 升形二經文ヲ刻、末ニ承平三年七月廿九日、大僧那阿彌尼トア

リ、此人何人タリシコトカ不詳、塔南二旧宅ノ址アリ、比丘尼屋敷ト称ス、相伝ヘテ孝阿彌尼ノ庵室ノ跡也ト云、又古塚アリ、孝阿塚ト云、洪鐘一古鐘、形

今鐘ト異ナリ文字ナケレバ、時代不詳、是古ノ障鏡ナリト云、一 岩殿七社

大権現、一伊豆・日光・箱根・白山・藏王・熊野・山王・神体木像、各長

七尺許、行基作云、一斤銀七掛、金鑄赤地、小山田左兵衛尉寄附、裏二書云、

奉難帳一歲某種現御室前、永祿十一年戊辰春月十八日、大願主慶茂數石、七

懸皆同文、押跋、東西七間、南北十間、岩欄二柱ヲ立、床ヲ張り、天井ハ

即岩ナリ、故ニ岩殿ト号ス、岩上ヨリ細流滴り軒ニソング、窓上ヨリ烟倉、葛野等ノ諸村ヲ見ラロシ、勝景タリ、社地堅五町、横十二町、麓ヨリ登ルコ

ト七町ニシテ杜頭ニ至ル、其間秋葉様現ノ小祠アリ、又乳妙石ト云石アリ、婦人乳ノ出サル者、此石ニ祈レバ其被ヲ得ルト云、文明十九年正月ノ末、聖護

院道興准后、此山ニ參詣アリシコト、回国築記ニ見エタリ、

かくて甲州にいたりぬ、岩殿の明神と申て靈社ましましけり、參詣して歎

よみて奉りける。

あひかたき此岩殿の神やしる 世々に朽せぬ契ありとは

是ヨリ又登ルコト七町ニシテ、古城跡アリ、古跡二出ス、凡般官及稚兒、皆行基ノ建立ノ由相伝ナリ、正説不詳。承平三年、重塔建立アル時ハ是ヨリ前寺アリシナラン、應永ニ至テ大野村ヨリ大般若經ヲ寄附シ、永正十七年修理、武田信友ヲ始、当郡主小山田信有、其余ノ諸士皆助力ノコトアリ、永禄十二年ニ小山田信茂戸帳奉納シ、慶長六年、鳥居成次社領上石寄進アリ、秋元氏二至テ五石余ノ免田ヲ給リ、合テ五石三斗五升ノ社領トナレリ、又承応二年・貞享二年、并秋元修造アリ、至今其マ、ナリ、祭礼三月十八日・六月十七日、七社権現ノ例祭ニテ、神輿ヲ昇出ス、新宮本尊十一面觀音、脇三十三荒神・毘沙門天、是亦行基ノ作ト云伝フ、山下ノ北面ニアリ、巖壁ニ柱ヲ立て、直二天井十スルコト七社ノ造営同ジ、冷水岩上ヨリ落、殿前ニ飛流シテ數十丈ノ谷ニ落、甚ダ奇観タリ、炎天ノ頃、此洞中二入レバ冷氣冬ノ如シ。
○久居久五郎成次社領寄附状一通、武田太郎信義消息一通。

*文化年間（一八〇四—一八一）に編纂された中華書の代表的な地誌。甲府勤番支配松平定能編。全一二三卷。『大日本地誌大系』（雄山閣）所収本に掲載した。

註

（1）第三節参照。

（2）承応三年銘、貞享二年銘とも、大月市分院の梅原昭文家に現存する（「山梨県立山梨県史資料叢書」、一九九五年）。

（3）第三編第八章参照。

（4）大月市分院の北条明直家へ旧常樂院に現存する。第二篇所収。

「甲斐舊記」卷九

嚴殿山城趾 岩殿村—— 大月・駒橋・駅の北にて桂川の岸に臨み、絕壁數十丈、東より西へ廻りて一片の巨石疊ち円く高して、桶を建たるが如く、四方峭絕たる孤峰なり、驚より上の事七丁許にして七所明神の祠あり、此より西へ旋りて登事七八丁にして續に至れば、即ち城跡なり、一の漁・二の漁・牙城・馬場・大門口・藏屋舗等の地名遺存り、牙城の南少許下て上木戸門あり、岩を盤て柱礎となしたる痕存れり、又池一つあり、大旱にも涸る事なし、又北方の方堀岸より半町許登て平地あり、出丸と云ふ、此山の南に桂川あり、北より東南へ向ひ、葛野川回環り流れて桂川に会ひ、西は大澤をもて源となせり、実に幾險の固といふべし、軍艦に駆け河に久能、甲州に嚴殿、上州に吾妻、三所の名城なりと云へり、山上より望めば、前は桂川を隔て、大月・駒橋・殿山・猿橋等の諸村眼下に連り、北は畠倉・奥山、又東南の方に岩殿・強羅の諸村山下を擁き、周回凡三町余、小山田氏數代本郷を領して、中津森又は谷村に館を構へ、此山をは要害にせしものなるべし、其頭用ひし陣跡なりとて、山下の觀音堂の邊にあり、銘文もなくして、形も今製作と異なり、

○七社明神 伊豆・箱根・日光・白山・熊野・藏王・山王、七座の神を配祀せる、神体は木像にて、各長七尺許あり、行基僧正の作なりと云へり、岩窟の中に柱を樹て、床を張て、祠殿とせり、天井は自然の一片岩なり、よりて岩殿といふとぞ、岩尖より細流の落る事多の如し、相伝へて、平城天皇大同元年の鎮座にて、創造の様ありといへり、別當は本山修驗常樂院なり、又大坊院・真藏院の二箇寺ありて、相ともにこれを司祀る、社領十四石余、山寺

号を岩殿山圓通寺といひて寺田一町八段余あり、行基僧正の刻める觀世音を本尊とす、三重の塔あり、九輪の下の升形に銘文あり、承平二年七月廿五日、

大樹那阿彌尼とあり、此塔建立せし時の體にて、時々修復を加るのみ也と云へり、此尼何人なりけむ、詳ならず、塔の南に比丘尼屋敷といふ處あり、又古塚あり、孝家塚と云ふ、塔の前より北西へ陥き山路を攀跡は、岩殿の社殿に至る、又山下の北向に新宮あり、十一面觀音を安置す、此地も岩窟の内に堂を建て、自然の岩天井ありて、七社と同じ造構なり、冷水あり、岩の上より堂の前に流れて數十丈の谷に落つ、甚奇観なり、炎暑の頃も、此の窟の中に入れば、寒涼ばかりの寒さを覺ゆとなり、缺中紀行曰、

大月又有橋、長二十四丈五尺、徒橋上東北望、長嶺連亘數里、一巖突起如蛇背、號曰巖殿、有七所施現及大士龕、皆羽流所奉雲、かくて甲州にいたりぬ、巖殿の明神と申て靈社ましましけり、參詣して歌よみて奉りける、あがたき此巖殿の神やしろ 世々に朽せぬ契ありとは

よろづ代にかけてしめむる巖殿の名のみはいはと共にくちせず
甲斐の國つるの郡岩殿山を見て、吹みだる峯のかぜをいたみ きそひし雲の行方しらすも

黒川春村
粟越院准后
落合直澄

*大森後庵の著。嘉永元年（一八四八）成立。全一〇卷。『甲斐叢書』六に掲った。

此詩の末句に、佛中名あるは、伝聞の誤なり。
乙事耐軒
石高如巖燒為城、想像益崎昔日堂、す々山耕耕岱通、路人猶識舊中名、

*大森後庵の著。嘉永元年（一八四八）成立。全一〇卷。『甲斐叢書』六に掲った。

「甲斐名勝志」卷五

○岩殿權現

号七社權現、祭神—熊野・白山・藥王・日光・伊豆・第根・藏王、一相傳、平城天皇大同元年鎮座也、岩窟の中に有各木像、長七八尺許の立像也、又觀音堂有て、三重の塔あり、九輪の下の升形に銘文有、承平二年七月十日、大比丘創立と云々、別當常樂院・大坊とて修驗あり、社領十四石、此辺に小山田氏の城跡有、今に難纏有、小山田氏は代々都留郡を領する事久し、天正十年、武田氏滅亡の時、叛逆によりて、織田氏のために誅せられ家亡ふ、

*萩原元克の著。天明二年（一七八二）成立。全五卷。『甲斐叢書』六に掲った。

「甲州斷」卷下

岩殿權現、同城之事

一、同郡岩殿山大權現は、人皇五十一代平城天皇の御時、大同元年の建立也、御朱印社領井権起等追て承可記之、又巖殿の城は、駿州久能山・上州吾妻、甲州に岩殿と申、山本勘助か見立の三つの名城にして、甚奇観の岩石なり、四方共に要害且しき城にて、山の頂上には清水涌出る、此水の流にて煮の村田を作らる、尤先年の石すべ門櫓等の敷石も御座候由申之、

*村上某の著。享保十七年（一七三二）成立。全三卷。『甲斐叢書』一に掲った。

「甲陽隨筆」

岩殿權現、同古城之事

一、都留郡々内領岩殿山大權現は、人皇五十一代平城天皇の御時、大同元年建立也、御朱印社領並権起等追て承可記之、又巖殿の城は、駿州久能山・上州吾妻、甲州岩殿とて山本勘介晴幸入道道鬼が見立の三つの名城の内にて、甚奇観の岩石、四方共に要害且しき城にて、又山の頂上には清水涌出、此水の流にて煮の村田池を作るよし、先年の城築の石擡門櫓捕石等今以て有之、

*加賀美遠清の著。天明年間（一七八一・一八九）の成立。全一〇卷。『甲斐叢書』一、

に使った。

第二節 紀行・日記に見る岩殿山

「山梨県地誌稿」

〔暖岡村誌〕

山岳

岩殿山 本村ノ南方ニアリ、北ハ畠倉組二、東ハ岩殿組二、西ハ強瀬組二属セリ、山本ハ南面絶壁ニシテ龜ニ桂川ヲ帶ヒ、頂ニ平坦ナル處アリ、又小池アリ、小山田氏、城跡ナリ、古跡部ニ詳カニス、兜山岩石突起シ遠望スレバ、兜ノ形ニ似ル、山名之ヨリ称セルナラン。

子ノ神社 村社、々地東西六間、南北七間、面積四拾武坪、本村北方岩殿組字子ノ神森ニアリ、祭日九月廿四日。

寺院

岩殿山真蔵院 真言宗東八代郡一桜村慈願寺末派、寺域東西拾間五尺、南北武拾武間、面積武百三拾八坪、本村中央岩殿組字子ノ神森ニアリ。

古跡

岩殿城跡 岩殿山ノ西七町ニアリ、北ハ峻険ニシテ攀登スペカラズ、本城、馬場・大門口・藏屋敷等ノ地名存セリ、二池アリ、常ニ水ヲ湛ヘ早天ト雖モ涸レズ、此城ハ小山田氏ノ要害ニ備ル所ニシテ、駿河ノ久能、甲斐ノ岩殿、上野ノ吾妻三所ノ名城ヲ以テ称セラレシ所ナリ。

*明治十七年（一八八四）成立。全五二冊。山梨県が各村に書き上げさせ成績した地誌稿本。

「廻国雑記」
かくて甲州にいたりぬ、岩殿の明神と申て靈社ましくけり、参詣して歌よみて奉りける。
あひかたき此岩との、神やしる 世々に朽せぬ契ありとは

猿橋として川の底千尋にをよび侍るうへに、三十余丈の橋をわたして侍りけり、此橋に種々の説有、昔猿のわたしけるなど、里人の中侍りき、さることありけるにや、信用しがたし、此橋の朽損の時は、いづれに國中の猿橋どもあつまりて勧進などして渡し侍るとなん、しかあらばその由緒も侍ることあり、所がら奇妙なる境地なり。

名のみしてさけふもきかぬ猿橋の したにこたふる山川の声
おなじ心をあまた詠じ侍りけるに、

谷深きそはの岩ほのさる橋は 人も梢をわたるとそみる
水の月猶手にうときさるはしや 谷は千ひろのかけの川せに

此所の風景、さらに凡景にあらず、すこぶる神仙逍遙の地とおぼえ侍る、

雲霞漠々渡長梯、四顧山川眼易迷、

吟歩誤令疑入峡、溪隈殘月断猿啼、

今はとて讀を分てかへるさに おほつかなしやはつかりの里

（群書類従『紀行部』）

「橘屋勘右衛門日記」

一日照り、岩殿へ参詣、円通寺入口、観音堂、塔三重、同札、一朝日さす夕日か、やく其下に □□□うきねの□□なるらん——峯腹、七社壇壇、中ハ白山・熊野・藏王・山王、左ハ伊豆・箱根・日光、以上七社、堂七間、十四

間、北口岩にかけ作り、葛野川音無川似たり、頂上古城跡、用水池にて、南

富、花崎・大根、東ハ駒橋・小あせ、猿橋、北ハかつての川・烟くら・山、
新宮三社造り、七間、三間、天井皆岩にて上水流なり、逸^二なり、

(富士吉田市歴史民俗博物館蔵)

「峠中紀行」上

(承元年正月) 九日晏發、過駒橋・大月二駅、大月亦有橋、長二十四丈、從橋上東北望、長嶺
通亘數里、一巖突起、如駒背乘、号曰巖殿、有七所權現及大士龕、皆羽流所奉
祠^五、更半里、將近花崎駅、路側民家墙上、見如白鶴蓋者、問是何也、芙蓉峰
也、

(甲斐志料集成) 一

「並山日記」卷一

(承元年正月) 〔前略〕

十五日(中略) こまほしといふすくを過るあひたハ、右にそへる川のむかひに
かの小山田の何かしか要害のあと、いふなるいはとの山なかくそひえて見えた
り、このをやまたハやむらの城主と聞えたりしを、天正十年のやよひはかり、
うをあさむきて、かたきにくたり、やかておのれさへころされにしたるもの

にて、いみしきほんきやくのしれものなれハ、名をきくににく、うとましき
を、やまたハすまひハ、見すくしかなし、みとりふかき松のはやし、おほき
なるいはほと、ものたちなミたるなど、えもいはずおもしろし、かくておほつき
にいたれハ、すくのしりにちまたありて、左のミチハやむらをへて富士のふも

とよした、かはくちにいたるかたとそ、われハミきにそれで、やかて長きはし
をわたり、はなさき、はつかりなどいへるすぐともを過ゆく、むかし聖護院の
すこうのひしりのおはつかなしやはつかりのさと、なかめさせ給へりしハ、こ
のさとにやとらせ給へりしほと、そ、

(東京大学総合図書館蔵)

「みどものかす」卷一

(承元年正月) 十八日(中略) こより少し西のきしをつたひておりゆけは、桂川と葛野川と
出あひて、其水、つき出たるいはほの間を、右左にまかりて、数町のほど流れ
くたりて、猿橋の岩のはさまにうちそ、くあり、けしきいといみ、

葛野川のしらのみ岩こて、かつらに落るおとのさやけさ

川をへたて、むかひのかたは、青き山とも千重にかさなりて、それより上に岩
殿山よこおもてをあらはし、ふもとはるかに、腰か家とものほのかに見えわた
りたる、似るものなし、高嶺のしらぎ、見るかうちにしき立かはりゆくなと、
其おもふきつくしかなし、岩殿山はこより二十丁ばかりにして、むかし武田
の士、小山田信茂の居たる名高き城となれば、ゆきみんことを嚴大にそ、の
かせと、けさのほと雨ふりたれは、小草の露も深くや侍らん、ことに雲たま
よひて、又も降出つべき空のさまと見ゆるに、たやすくはほるへくもあらす
とと、むるに、ひとりさかしたちたらんも、かたへにくきものなればとてやみ
ぬ、うへは旅橋をわたらせたまひて、御くるまにめさせ給へり、これより大橋
駅までは、路たひらかなればなりとそ、大橋駅まで十四五丁の間、岩殿山も右
にみてゆく、近くなるまゝ、つゝ見るに、此山大なる巖、そのいたきに聳え
たるはとりに、松の「もど、もど、くねりかちにてたてるかいとをかし、
朝あらし岩との山をおろしきて、吹こそかへせたひの衣子

大原村を過て人橋駅なり、千三百間はかりのくたり坂ありて、いと危し、車を
おりてゆく、おりてはたる所に川あり、桂川の源にて、大月橋といふあり、こ
もいとけしきよき所なり、ことし五月に此橋をかけたりといへり、

(甲斐志料集成) 一

第三節 「甲陽軍鑑」など文献資料の記す岩殿城

〔東京都・大野家文書〕

○武田家朱印状

恭定
新左衛門
小笠原の
源次郎
寺通
孫右衛門
助右衛門
新五左衛門
新七郎
新左衛門
土屋右衛門尉
大輔の
鎌殿右衛門
吉の
四郎右衛門
金の
音義の
黒羽の
新七郎
新左衛門
右拾人岩殿令在城、御番御普請等無理難相勧之出候矣、都次之御普請役被成御
赦免候間、自分之用所可被申付之由、所被仰出也、仍如件、
天正九年春

三月廿日

奉之

萩原豊前

(參印)

○須藤茂衡「武田氏と都内領に関する一史料」（甲斐鑑）四六号、一九八二年）に
〔廿二〕勝頼公甲州新府中御取立之事、付諸寺諸山甲州中御朱印之事）
其年七月、穴山殿御異見に、「信長・家康にふとり、遠州きとうぐんも、は
や当三月、家康にとられ給ふ、その上、小田原北条氏政、敵にて候へば、以来
ハ、信長・家康・氏政ひとつになり、はたらき申され候ハ、諸方の御敵鋒起
いたし候ハん事、うたがひなし、左様に候ハ、いづれの敵にむかひ給ふ事も
なるまじく候、越後と御いつく候ても、謙信の時ならば、信長・家康・氏政
三人にも、からなさるべく候へども、今、景勝ハわたく候間、なきも同意に候、
当方によき御城を乞つ、御かまへあるべく候、信玄公御武ゆう、私ならざる故、

御居敷かまへ迄にて御座なされ、甲州四郡のうちに御城これなく候儀は、信玄
公御武ゆうと申す内に、かいりきを以、如此、さりながら、信玄公御おくに
も、ひととせ、てるとらと信長・家康・氏政御存生の時、小田原より使をまわ
し給ひ、四人申あわせたるときこしめし、駿河に久野、甲州郡内にゆわどの、信
濃にあがつま、三所の名城を信玄公御覽じたてられ候は、御らうぢやうあるべ
きとの事なり、其時、謙信たけきどりゆ、四人くみて信玄公を仕りた
おしても、信玄ハ四人がけと、末代までゆわれてハとて、謙信ぶちをやぶり候
ニ付而、何事なく候、次とし、氏康たかひなり、今ハてるとらの様なる弓どり、
諸方の大将にもこれなく候」と六山殿仰らるゝに付、勝頼公、尤と恩召、同年
七月より、甲州にらざきに新府中をとりたて給ふハ、武田の家めつきやくの本
なりとハ、のちこそしられたれ、仍如件、

〔廿六、甲州くづれの事〕

然ば、御ぞうし大郎信勝、其御とし十六歳なれ共、かしこくましくて仰らる、
ハ、「勝頼様此新府中を取たて給ふ事、甲州・国内によき城のなき事、信玄様
御無分別にて、堀、重の屢敷がまへに御座候つるるにて、日本にはかり、から
こくまでも御おほへゆ、しき名大将の、法性院信玄公をひに御らんぜられ、勝
頼様をはじめ奉り、長坂長閑・跡部大炊助・秋山浜津守・てんきう、各、信玄
公の是計御あやまりなり、など、御そりなされ候で、此城をとりたて、半造
作とありて爰をすて給ひ、古府中へ御帰りある事、三矢をとつての要名なり、其
上、古府中の御たてをばことくひきやぶり、武田廿七代信玄公をのせんすい
のうへ木共に、ひとかへ・二かへある、名をつけたる松の木などを、きりすて
給ふハ、あとへ御心のこされずして、此城へはやく御こしあるべき、とありて
の事なれば、古府中にても、何方にこもりなさるべき所あるまじく候、山二
やなどへ入たまはんより、はん造作の新府にて御切腹なされ候へかし、此段に
なり、いづくへゆきて、いくよのさかいをなされべく候哉、御はたたてなし
をやき、そこてちんぢやうに御切腹、御尤に候、但かやうのひききり口ハ、た

つて我等申にくき儀にて候、しきひは、此信勝は、に付、信長にもまたおひ、悉之助にもまたとこなれば、いさめ申す事ながたし」と信陽様即られ候へ共、勝頼公をはじめ申、いづれもあいさつも仕らず候所へ、真田阿波守、「あがつまへ御らうぢやうなさる、やうに」と申こし候、長閑分別に、「真田八一徳重より三代めしつかわる、侍大将なり、只御普代の小山田兵衛尉申こす、甲州郡内の岩どのの御籠城しかるべき」と、長坂長閑いさめ申すにまかせ、勝頼公新府を御たちあり、古府中へひき入候ふ、路次にて長坂長閑を、御小人衆、「鎧を以テた、き候へん」と申候、しさいは、「ひころおのれに、きりふをおさへられたる」とて如此し、

〔廿七、勝頼公御最後之事〕

小山田兵衛尉、「郡内、岩どののへいれたてまつらん」と申すに付、鶴瀬まで御座なされ、鶴瀬に七日御逗留なり、かしおうのちやうばくの寺なり、とあれども、山伏ども、「左様仕るまじき」と申す、此林に、御あしもとより、たきたいの様に御座候、小山田兵衛尉、鶴瀬より郡内のかたに、きどをさいげんなく仕る、「是ハいかん」と人々尋候へば、小山田ひくわんども申すハ、「岩どの」へ御うつ候、即時に小口もつべく候」と申す、

又、小山田八左衛門と申す、其比中老のはまれ有武士參候へば、此侍ハ勝頼公御ひそゝの武士なる故、よろこび給ひ、すはだにてまいられ候に付て、勝頼公めしがへの御具足をくだされ、御次にて八左衛門、其御具足をき申候、「初鹿伝右衛門はまいらす候や」と御尋ある、伝右衛門、かわうらと申あり仁寺のおく山へ、入候に、「鶴瀬へ参るべき」と申候へば、郷人共、「伝右衛門内方を是非其人じちにとり候て、こし申まじく候、もしむりに御越候ハマ、一度此方へよせ申すまじく候」とことわり候て、それでもゆかば、ころすべきもやうなる故、伝右衛門鶴瀬へまいらす候、いづれの山ござても、ミな如此、

去程二、三月九日の夜、右の小山田八左衛門と、勝頼公御いと武田左衛門佐

殿とくみ候て、小山田兵衛尉人じちをうばひとり、早々郡内へのくとてこしらへたる小口より、鉄炮をうち出す、左衛門佐殿ハ、小山田兵衛尉のもむこなり、八左衛門ハ兵衛尉いととなり、是を見て、ことくちり、御とも衆四十三人ならでなし、鶴瀬のむかひ、たのとゆふ在家七つ八つある所へ、勝頼公一日の朝御つまみあるに、御馬のくらおく人なくて、侍大将のうち、上屋宗義と秋山きのかみおきてひき出す、かめのかうの御持續など、阿部加賀守と信勝公御もりの、ぬくいひたちのかみとしてかつぐ、

もとより「日」の刻に、たのおく、天日山の郷人共六千人余り別心して、其中に侍は、辻彌兵衛大将になり、勝頼公へ矢・鉄炮をうちかけ奉る、信長よりのうつてハ、川尻弓兵・戸瀬川伊与、都合五千にてせめかゝる、郷人案内を仕り、うらへまわす、三度つきちらし給へども、かなわずして、つるにほろびうせ給ふ、

〔甲陽軍鑑末書〕上巻

第二、甲州流儀城取之事、

(中略)

御分国二て名地ハ、

一、駿河に久野、是ハ駿河先方庵原弥兵衛、駿河御打人ノ刻、信玄公エ申上ル、甲州郡内に岩どの、信州にあがつま、

〔甲陽軍鑑末書〕下巻五

御旗本座備之事、是は馬より下りての備なり、

付、一、御前參衆は御前罷在事、二、同心馬衆は我馬の置所に罷在事、三、右ハ馬衆の様子、如此事、以上、

人数千分、手組、編定外ならし、九ヶ条之事、

第一、小田原より、助五郎殿・右衛門佐殿兩人之質に越船、甲州郡内ゆわ殿に

指置被成候、又、大藤・笠原・清水三頭、何時も進上可申と有て、右の二人甲府へ参、北条家の隙を兩參と、被申付候とて、馬場美濃、与の契約仕り、罷帰候故、深沢・上の原に留居守宛被置、是ハ小山田彌三郎、与衆・被官衆、少宛指置候故、深沢城代駒井石京も、御旗本へ参也、依其此曹にハ、小山原北条家の境に、人數多く不入事。

（甲陽軍鑑大成）本文編

「理廢尼記」

ときうつり、うんめいつきはてたもふにや、きそとのむほんのおこし、おわりのくにをだのかづさのかみのぶながへちうし、さるあいだ、ミヤこのせひを引くし、きそとのをさきとして、うつてくだり、天正十年三月二十一日、たの、山辺のかつせんに、うもまたまみぞわれなり、御いたわしやな、むげなくも、御うちの人のかわらずハ、たとゑ天下せいきたるとも、五とせ十年のそのうちハ、かゝるほどにハましまさざりしに、彼かつよりともふせしはは心だけだのいゑなれば、人にはすぐれてましませど、御内のさふらい、ことく心かわりを、もふされければ、ちらにをよばせたまわざ、されども、たでを御まくらと、さだめさせたまへて、いづかたへも、おちさせたまふべき御心は、ゆめほどもしまさざりしに、こ、にくにうどおやまだともふせし人、ははのにかうを、人ち、にとられまいらせ、それかへさんがはかりことにおふせは、さこそみらへども、御身をまたくもりたりまへ、みづからがあり所、つるのこぶり、ゆわどのさむと申は、およそ天下がむき候とも、ひともちもふべき山にてあり、それへ御こししかるべきと申されければ、かつよりきしめされ、こはくおしきといつことや、かつよりせつななる間も、こんじやうにあらんほど、かたきにうしろを見すべきか、これにてまちあわんど、大きに御はらた、せたまふに、小山田かさねてもふされるべ、おそれながらもふすなり、いのちをまとうもつかめは、かならずほふらひにおふとつたへき、彼山にこもりまはゞ、御よに出させたもふ事ほどハあらじと、もふされけれども、御へむじの

なかりければ、小山田なみだをながしもふされけるは、御たいしやは、さこそしますとも、みだいどころ、いまだつぱみてはるまちたまふ、こずゑの花のわか君さま、かれと申これという、あまりに御心つよくも、おりによりしものをとかきくきつけければ、かつよりけにもとおぼしめし、御たてにらざきを出させたまふ、いたわしやな、御たびどころのたてあうつらせたもふ、御うつりのときハ、こんごん・しゆぎよくをちりはめたるこしくるま、あたりもかゝやくばかりにて、御供の衆かずしらす、こぶよりしんふのその間、三百よてうともふせしを、よひつるさしつるうつらせたもふ、比は十二月廿四日なりしに、あくるやよひ三日には、かくならせたもふとて、御なごりおしくや、おぼしめす、（中略）やよひ四日には、こまこふよハみがやどあつきたまふ、小山田心がわりに、おもひけるやうは、よきらぐくもなし、は、もろともに、つるのこほりへゆかばやとおもひし所に、できみへけると申きたりければ、六日のくれがたに、つちやをさうしやといたし、これに御人候こと、かくこのほかにて候なり、かのつるのこぶりゆわどのさんを、御こししかるべきなりと、御申たのみたてまりつり候、又ついては、ミツからは、の御いとまの事よきよふにたのみ人なり、もつとものおふせならば、御さきへまかりこし、御だい所の御さのまをもつしらい、御むかひにまいるべしと申ければ、そのよしつちや申あげられけりにきしめし、いや／＼とおぼしめしけれども、かのもの、心をそこねじとおぼしめし、ともかくもと仰ければ、母もろともに七日のよわにまぎれゆきて、御むかいにまゐるかと、まらさせたまへど、其ま、見あざりければ、こなたより御むかひをこされたもふ所に、さ、このとうげにあまたの物のふちんどつてふせぎ、つるのこぶりへいれざりければ、御つかい罷があり、此よしもふしあとがり、ちにしづみ、御はらた、せたまへどかなわず、おやまだが心がわりのよしをつたへき、御ちんにハはかにさわぎたち、あたりのいふに火をかくれバ、あるにあられぬ御ありさま、めもあてられぬけしきなり、げにりやうけん

のなきあまりに、天日山へ御こしなされ、ひともちもたばやとおほしめし、す
でにこまこふを出させたもふ。

(天保八年(一八三七)版本)

六月十一日 義信(花押)
勝泉院

「朝野旧聞叢書」

(東照宮御事蹟 第一六八)

島居彦右衛門元忠・平岩七之助親吉に甲斐國の守禦を命ぜられ、元忠をして岩
殿城に—甲斐國都留郡にあり—居らしめ給ひ、郡内を—同國同郡—賜りて、軍
功を賞せらる。

御年譜曰、「十一日、命島居元忠・平岩親吉、護甲州、

同附尾曰、「十一日、鷹郡内一二万石、於島居彦右衛門、令居若殿城、

松平物語曰、家康公、甲州を治させたまひて、則郡内をハ、島居彦右衛門に
下したまふ、是より彦右衛門ハ岩殿の城へ移居る、其時の命に宣ハ、是汝鉄
錘の力に依と云々、

(内閣文庫所蔵史籍叢刊)

第四節 文書資料による山内・山麓の宗教施設

(大月市若殿・北条明直家^ハ旧常楽院文書)

①武田義信書状

〔墨引〕 武田太郎
勝泉院 義信

〔墨引〕

就修院中之儀、尊翰悉存知候、向後相應之御用被仰下候者、不可存疎略之趣、
宜被浅申入候、恐々謹言、

大同元年行基菩薩建立
一、七社権現宮 五間
一、高抬三石三斗六升二合
内三石七斗四升七合
元陰地
常樂院
屋敷
勝泉院

義上権現
熊野権現
白山権現
日光権現
山王権現
但木

○「甲斐國志」卷九一(修驗)は、「郡留置白坂山修驗常樂院所置」として本文書を

古事記、「按ニ澄存大僧正此安本州某ルコト草紙ニモ見タリ」と考証している。

②島居成次判物

以上、

為台殿山社領、拾石之所令進納者也、仍如件、

慶長六年 島居久五郎

八月廿八日 成次(花押)

常樂坊

③若殿山山緒書上

(表紙)
「甲斐國都留郡若殿山山緒書上帳

常樂院

一、同社地	東西七間 南北十一間	但板塗
一、同山林	五町 横十二町	但杉檜松立木
東麓		
一、十一面觀音堂	五間 四面	內仏木像
一、同堂地	七百五拾坪	但草屋根
北麓		
一、三重宝塔	三間 四面	内仏 <small>文珠菩薩 普賢菩薩</small>
是者、若狹國唐阿禪尼、承平二年建立、		但見捨地
一、同敷地	右觀音七百五十坪之内建立	但柿屋根
一、鐘樓	九尺四面	但草屋根
一、同敷地	右七百五十坪之内建立	但草屋根
北麓		
一、千手觀音堂	五間 四面	內仏木像前立三寶荒
一、同堂地	東西九間 南北拾一間	但岩舖
一、同山林	五町 横二町	但杉柏之立木
一、常樂院立家	十一間半 五間半	但草屋根
一、同		
一、同表門	三間半 二間	但柿屋根
一、同裡門	六尺 一間半 二間半	但板葺
一、同土藏	九尺 一間半 二間半	但板葺
一、同關	二間半 二間半	但
一、大般若經開板之名	施主 惣奉行人別三百内大檀那	
一、大般若經開板之名	兵部大輔正五位下平朝臣氏重 貞治五年 <small>内</small> 下月日	
一、十六善神掛物	大般若經一部六百卷 為捨願開板舉	
一、同	水德二年八月廿五日 左兵衛督氏潤	
一、同開板施主名	江州佐々木新八幡宮宇 為上願四恩下資三有無 邊法界廣大流通者 <small>(卷)</small> 願主當國大守苦薩戒弟子岸水	
	吉良兵部人輔賴治 永德元酉六月日、有之	
参河守平朝臣氏宗、有之 町野近江守法名源城、有之		

一、金禰戸張七鉤

是者、小山田出羽守信茂公奉納
永祿十三年

一、金灯籠 二ツ

頼主從四位下谷村侍従但馬守
藤原朝臣秋元喬朝
寛永^廿年十一月十七日、有之候

一、金地額 二面

戸田氏忠貞寄附

一、郡中触下之修驗三十ヶ院有之候、
一、七社人権現 大同元年建立ヨリ、到明治五年^{五十五年}、凡十六拾八年、
一、三重宝塔 承平三年五月建立ヨリ、到明治五年迄、凡九百四十年、
右者、御尋付、山緒奉書上候、已上、

一、馬具

秋元但馬守様ヨリ拝領

一、薙刀

小山山信茂公ヨリ拝領

一、梵鐘

小山山信茂岩殿山在城頃
陳鋪前而無銘シテ擅疣有之候、

一、武田不動尊

武田不動尊ト号、
晴信公奉納

一、棟札之写

小山山信茂

御書附之写

小山山信茂

武田大郎義信公御書翰之写

小山山信茂

德川秀忠公書翰

垣例祈持之札并棟十筋被相送之候、欣悦之至候、著酒井右兵衛大夫可申候、謹

言、

十月十八日

秀忠御判

奉加帳

一、護摩具

寛永^廿年十一月五日、銘有之候、

一、曲榾

戸田氏忠貞寄附

一、長柄傘

元禄十年正月五日、銘有之候、

一、金燈籠

戸田氏忠貞寄附

一、金地額

戸田氏忠貞寄附

一、馬具

戸田氏忠貞寄附

一、薙刀

戸田氏忠貞寄附

一、梵鐘

戸田氏忠貞寄附

一、武田不動尊

戸田氏忠貞寄附

一、棟札之写

戸田氏忠貞寄附

一、御書附之写

戸田氏忠貞寄附

一、護摩具

戸田氏忠貞寄附

一、曲榾

戸田氏忠貞寄附

一、長柄傘

戸田氏忠貞寄附

一、金燈籠

戸田氏忠貞寄附

一、金地額

戸田氏忠貞寄附

一、馬具

戸田氏忠貞寄附

一、薙刀

戸田氏忠貞寄附

一、梵鐘

戸田氏忠貞寄附

一、武田不動尊

戸田氏忠貞寄附

一、棟札之写

戸田氏忠貞寄附

一、御書附之写

戸田氏忠貞寄附

御序

山本

明治五年四月日

岩殿山常樂院

(付)

不動尊

一幅

武田不動尊ト号、

晴信公奉納

(付)

不動尊西像

一幅

武田不動尊ト号、

晴信公奉納

(付)

般若十六善持面像

一幅

武田太郎義信公

御奉納

(付)

神変大菩薩木像

一幅

京都勝仙院様ヨリ

七社権現^廿奉納

一

一、水帳　　宅札　　但元除地帳

一、大小刀

四腰

右者、御尋二付、什物取調書上候、已上、

明治六年十一月

岩殿村
大曾木

常樂院
同村

明雄印
同宗大坊

高頼印

一、駕籠

一挺

一、柳沢甲斐守書翰　宅通

一、十二天画像　十二幅　^善柳沢甲斐守

一、三十六童子画像　七幅

一、御水帳

一枚

一、舟橋三位節賀脚真筆色紙　^善一枚

一、桶洲灯籠　一鉢　^善下谷川口善兵衛

一、三条忠太后宮様大夫実万卿直筆色紙　宅枚

右者、御尋二付、什物取調書上候、已上、

明治六年十一月

天白印
常樂院

明雄
同宗大坊

高順
同宗大坊

森代造
仲丸萬兵衛

〔大月市善源・北条熟実家へ旧大坊▽文書〕

④佐久間三休刊物

〔大月市善源・北条熟実家へ旧大坊▽文書〕

（1）第一節「甲斐国志」卷九〇の「岩殿山円通寺」の項に収められているため、本文は省略した。

（2）（1）と同じ。

（3）前項に収めたので、本文は省略した。

（4）（3）と同じ。

（5）（1）と同じ。

註

（1）第一節「甲斐国志」卷九〇の「岩殿山円通寺」の項に収められているため、本文は省略した。

（2）前項に収めたので、本文は省略した。

（3）前項に収めたので、本文は省略した。

（4）前項に収めたので、本文は省略した。

（5）（1）と同じ。

権令藤村恭明殿代理

山梨県參事官岡敬明殿

慶長十二年　島居土佐守

⑤爲居成次判物
從當郡熊野參詣之者共、如前代先達へ相属可致參詣候、京都より御理候間、常楽

坊へ申付候者也、

郡中
熊野參詣者

第五節 文獻に見る「岩殿市」

〔甲斐國志草稿〕へ森鶴本V

一、連雀商人ノ由来書—抱腹二葉タル書ナカラ、年曆ノ久キ物ナレハ載ル—

葛野村忠右衛門所持

一、伴林諸伴林間ヨリして、此方ハしかのなれの子孫と申ハ、あき人の事な
り、

一、彼しかのなれのあき人、廣河田國^{エ渡}、王院^{エ御}日に、熊野櫻現^ヲ日本
ニもち申、日本の王院櫻御目に申、かのしかのなれのあき人、大みねをふミわ
け申て、かのれんしやくあまり^ニたんと^ニおほしめし、大みね^ニ納申、七日七
夜こもり申候、同年こもり^ニいたし度存候^ヘ共、大あくの身に候^ヘハ、山あれ申
候、まかりド候、

一、日本はしまり候て、四ツやく所の事ハ、
一、大坂のせき、一、つくしのあかみかせき、一、東かい道するかきよみヶ
せき、

一、大しうにてハニシよのせきなり、いつれもみやけをつかひ申候はうなり、
此間不既^ノ本ノマ、二三みや、
むまに一人一二三みや、

一、左の御むすひハ、金剛かいの御すかたなり、

一、右御むすひハ、たいそうかいの御すかたなり、
一、中のむすひハ、日月の御すかた也、
一、ほそひきハ、ふとうのはくのなわ、同道なりとも申なり、

一、はかりと申候ハ、天下をひやうする也、
一、日月七ややう、九やう、廿八宿なり、

一、北との七星ハ、一、日月曜、本地ふどう、
ひんろうノ星、一、月曜ハ、本地祝通、

こもんノ星、一、火曜ハ、本地土手、
ゑいほんノ星、一、水曜ハ、本地馬とう、
もんこく星、一、土曜ハ、本地みろく、

ふくろ星、一、金曜ハ、本地こくうそうほくんしやうなり、
一、南との七しやう、一、大にんしやう、一、小にんしやう、

一、大ちくしやう、一、小ちくしやう、一、いしやう、

一、神しやう、一、かくしやうなり、

一、九曜^ヲ次第、羅曜星、上羅星、水曜星、日曜星、火曜星、計都星、月曜星、
木曜星也、

一、廿八宿ノ次第、しつ・へき・けい・ろう・い・はう・ひつ・しつ・さん・
せいい・きい・りう・しやう・ちやう・よく・ちん・かつ・かう・てい・ほう・
しん・ぎ・斗・女・こ・き・しつ・へきい星也、

一、はかりのぎ、はじめてハたかはかりをもつかひ申候、

一、はかりのらむしハ、日月の御すかた也、

一、このはかりの儀ハ、天下のほしのことく也、

一、さうはかりハ、日月の御すかたなり、

一、はかりの大事大方也、

一、あきんとハ、あきないはしまりにハ、たかをも馬をも充可申候、

一、ふつとかた十二人あき人也、

一、のとどう十六人あき人也、

一、あさほかた廿四人あき人也、

一、森「卅六人あき人也、

本ノマ、
よほ也、

一、あき人のこんほんは、八十八人、以上よほ也、

一、日本のにしひかしノ道のかす、二せん八百七十三行、

一、北南ノ道の数、五百廿里、これは大かた也、

一、日本の人數ハ四拾三ヲク三千五百百五拾武人、是ハ大方也、

文安元年甲子正月吉日

加津野主清右衛門尉

清右衛門ハ、即忠右衛門カ先祖ナリ、古ヘハ此家達雀商人ノ頭ニシテ、毎歲三月十八日、岩殿祭礼ノ市町ヨリ役銭ヲ取シト也、後世廢シテ唯市見世ヘ神酒トテ酒ヲ配分スレハ、商人ヨリモ初穂ト称シテ少分ノ錢ヲ贈ル、此モ亦近世止リ、此書無用ノ長物ナカラ、年歴ノ古キニメデ、此ニ出ス、

(都留市教育委員会蔵)

○「甲斐国志草稿」(柏木本)では、※を付した条の次に、次の二条を記す。

一、ゆだんと申も、熊野権現の御すかたなり、

〔甲州年中行事〕

岩殿の市 維新以前、大月・初狩・猿橋地方へかけての只一つの市として岩殿の市なるものあり、旧三月十八日に之を行ひ、當日は岩殿三院の祭日に当り、遠近より群を為して集り来り、各一年中入用なる日用品・道具等を買ひ求めたり、南北都留は凡て此市に出かかるが例なりき、商人は各国より集り、越前・鎌屋・九州の櫛屋・江州の鍼まんが、武州の竹屋等なり、倉庫二ヶあり、一つは淨樂院の前、一つは今の大良好太郎氏の前にあり、市日以外平日は、品物を此の二倉庫に貯め、商人各國に引取りて後、両家にて費用をとりて之を管理し、平日は更に此を開かず、商人の初めは櫛屋権十郎が櫛を充り始めたるよりなリこそ、又市の當日は賭博あり、山の曲り角に芝道を張り、参詣人は一文にて四文とれると称し、盛に賑ひたり、

(『甲斐志料集成』一二)

第二章 旧円通寺藏大般若經刊記・墨書一覽

凡例

・この一覧には現存する全巻の他、「甲斐国志」に載る銘文も記録して備考欄にその旨を注記した。

・「刊記」欄は、(首題下)と注記したもの以外は尾題下若しくはその周辺に記録されているものである。なお、一行内の一字明けは改行を意味している。

・「墨書」欄には、首題より前の、いわゆる袖書相当分に記されたものについては(袖)、經典の行間に記されたものについては(行間)と注記した。したがって、注記を伴わないそれ以外のものは、尾題周辺のいわゆる奥書相当部分に記されたものである。なお、一行内の一字明けが改行を意味しているのは、「刊記」の場合と同様である。なお、巻一・五九五には後筆があるが、内容から明らかに区分できるので、あえて表示しなかった。

・「行間人名」欄は、經典の途中の柱部分若しくは空白部分に記録される刊記である。「・」で区分し、別行に記されたものであることを示した。なお、この欄での一字明けは、同行に記されているが、文字間に空白があることを示す。

・「施人」欄には、記載文言をA～Gの符号を用いて表示したが、その内容は次のとおりである。なお、奥書相当部分にある場合は「奥」、袖書・奥書相当部分両方に見える場合は「袖・奥」と注記し、注記を伴わないものが袖書相当部分である。

A 奉施入岩殿山圓通寺

B 奉施入七所大権現御寶前

C 奉施入七所権現御寶前

D 奉施入岩殿山七所大権現御寶前

E 奉施入岩殿山七所権現御寶前

F 奉施入岩殿七所大権現御寶前

G 奉施入岩殿七所権現御寶前

H 奉施入七所権現圓通寺

・これ以外に、首題下に「岩殿山圓通寺」の墨書きがあり、その部分を欠く巻・書写巻(巻一六二～二七〇)を除けば、巻一五七以外の全巻に記録されるので、注記は削除した。なお、同文言を行間に「～十数箇所にわたりて記録するが、全巻にわたるので、これも注記を省略した。
表紙の外題下にある「岩殿山」の墨書きは全巻にわたるため、個別には特に注記しなかった。

卷数	刊 記	墨 書	古 書	行 間	人 名	施人 備考
一 勸進沙門智感	文和五年甲 五月口 勸進沙門智感敬誌 收役僧真榮(花押) 立花氏(秀重・花押)	甲斐國鶴郡岩殿山圓通寺 勤進沙門智感有通知客 應永六年卯六月日	住高安比丘慶芳、俗馬守宗野參家、左衛門尉光 兼・橋氏女、新羅成子印、參原盛因、浪野氏女、下野守貞幹、 善藏戒成心、蘿門			
二 勸進沙門智感	勸進沙門智感敬誌 延文二年丙正月一日	甲斐國鶴郡岩殿山圓通寺 勤進沙門智感有通知客 應永六年卯六月日	右衛門尉橘知等、御人源時阿淨、沙汰道範、善藏戒尚河 守泰觀、參原氏女、沙汰道範、善藏戒尚河			
三 勸進沙門智感	勸進沙門智感 延文二年丙正月一日	甲斐國鶴郡岩殿山圓通寺勤進沙門智感有通知客 應永六年卯六月日	妙義、妙宣、沙汰道範、祐慶、沙汰道尼、清原高泰、左衛門尉 小野道榮、前膳防守源良輔、參原氏女、左衛門尉氏顯			
四 勸進沙門智感	「行問」 「乞發山圓通寺勤進沙門智感有通知客 應永六年卯六月日」	甲斐國鶴郡岩殿山圓通寺勤進沙門智感有通知客 應永六年卯六月日	此板元采書、而防推平曲致、鏡之西之楨者希法、左衛門尉止 貞・沙汰道範、此板元采書、欲使參原朝臣基尾、出羽守小 野重經、沙汰道行等、下野守真時、善藏戒尚河、小保宮内大輔源 義弘、富士與法守・和尚行覺、源惟十九、參原氏女、清原氏女			
五 勸進沙門智感	延文二年丙正月一日	甲斐國鶴郡岩殿山圓通寺勤進沙門智感有通知客 應永六年卯六月日	沙汰道行等、此板元采書、善藏戒尚河、小保宮内大輔源 義弘、富士與法守・和尚行覺、源惟十九、參原氏女、清原氏女 此卷凡集書			
六 勸進沙門智感	「行問」 「乞發山圓通寺勤進沙門智感有通知客 應永六年卯六月日」	甲斐國鶴郡岩殿山圓通寺勤進沙門智感有通知客 應永六年卯六月日	載河守能行春、安就守忠恭勇、岡部次郎左衛門尉小野好景 上總介平宗益、上總介平宗信、左衛門尉平宗信、善藏戒 沙汰道行、沙汰道益金、上總介平宗益、左衛門尉平宗信、善藏戒			
七 勸進沙門智感	「行問」 「乞發山圓通寺勤進沙門智感有通知客 應永六年卯六月日」	甲斐國鶴郡岩殿山圓通寺勤進沙門智感有通知客 應永六年卯六月日	尼妙智、善藏戒尚河、十住心院上人圓海、源幸鶴女 平鶴壽丸、采山新左衛門入雲門鑑、左衛門尉善藏戒			
八 勸進沙門智感	延文二年丙正月一日	甲斐國鶴郡岩殿山圓通寺勤進沙門智感有通知客 應永六年卯六月日	上總介平宗益、右衛門尉源益、平宗信、右衛門尉平宗信、善 藏戒尚河、季源妙傳、善藏戒尼如本、應尊・善阿理阿、 兵部大夫天常高、參原宗風			
九 勸進沙門智感	「行問」 「乞發山圓通寺勤進沙門智感有通知客 應永六年卯六月日」	甲斐國鶴郡岩殿山圓通寺勤進沙門智感有通知客 應永六年卯六月日	B 善守部分 源七志			
一 勸進沙門智感	延文三年戊正月十六日	甲斐國鶴郡岩殿山圓通寺勤進沙門智感有通知客 應永六年卯六月日	善藏戒尼喜法、東廣江源次第平風氏			
甲斐國鶴郡岩殿山圓通寺勤進沙門智感有通知客 應永六年卯六月日	上總介平宗益、右衛門尉源益、平宗信、右衛門尉平宗信、善 藏戒尚河、季源妙傳、善藏戒尼如本、應尊・善阿理阿、 兵部大夫天常高、參原宗風					

二九	化經比丘智感	延文六年正四月日	甲州鶴澤若鹿山圓通寺勸進聖願有通知客 應水六年己卯六月日	葛九 葛九左新門房總主，力圖河垂露，沙汰行阿·源承王女·品山
三〇	勸進沙門智感	延文五庚子 九月日	甲州鶴澤若鹿山圓通寺 勸進聖願有通知客 應水六年己卯六月日	
三一	勸進沙門智感	延文五年丁未五月	甲州鶴澤若鹿山圓通寺 勸進聖願有通知客 應水六年己卯六月日	
三二	延文六年辛未二月日	化經比丘智感	甲州鶴澤若鹿山圓通寺 勸進聖願有通知客 應水六年己卯六月日	
三三	延文六年辛未二月日	勸進沙門智感	甲州鶴澤若鹿山圓通寺 勸進聖願有通知客 應水六年己卯六月日	
三四	化經比丘智感		甲州鶴澤若鹿山圓通寺勸進聖願有通知客 應水六年己卯六月日	裕生左衛門尉宗情，為 葉漢氏女紅拂
三五	勸進沙門智感	延文六年辛未六月日	甲州鶴澤若鹿山圓通寺 勸進聖願有通知客 應水六年己卯六月日	
三六	康安元年辛亥九月日	勸進智感	甲州鶴澤若鹿山圓通寺 勸進聖願有通知客 應水六年己卯六月日	高山左近將靈運行進，妙法·沙門淨林·權伊那·通盛·極小 僧都實賢·音義院尼真阿·白江入道妙昌
三七			甲州鶴澤若鹿山圓通寺 勸進聖願有通知客 應水六年己卯六月日	神保火部惟宗夫人，神保二郎惟清久，法印有實，苦蘿或尼宗 國，知性已大淨空也松，苦蘿或尼明德，阿麻口慈祥
三八			甲州鶴澤若鹿山圓通寺 勸進聖願有通知客 應水六年己卯六月日	苦蘿或尼白信，苦蘿或尼妙禪，比丘尼永嘉，比丘尼修心·沙汰 道西·妙惠比日客，沙汰達西，共樂或尼見良
三九	比丘智感		甲州鶴澤若鹿山圓通寺 勸進聖願有通知客 應水六年己卯六月日	乙流左衛門尉金增·沙汰道光
四〇				
四一	真治一庚二月日		甲州鶴澤若鹿山圓通寺 勸進聖願有通知客 應水六年己卯六月日	比丘智感，為淨林也圓，為沙汰性阿淨心·平德丸·隱田次郎 左衛門尉道光·四慶
四二	真治一庚二月日		甲州鶴澤若鹿山圓通寺 勸進聖願有通知客 應水六年己卯六月日	
四三	真治一庚二月日		甲州鶴澤若鹿山圓通寺 勸進聖願有通知客 應水六年己卯六月日	(行園)「鶴澤若鹿山圓通寺」×5
四五	真治一庚二月日			善勝或尼性光

六二	廣寔	小月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤進僧願翁有通知客 (行閱) 「奉施主岩巖山圓通寺」	善藏高尼室
六三	康寔	壬智感 丁十月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤進僧願翁有通知客 應永六年己卯六月日	
六四			甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤進僧願翁有通知客 應永六年己卯六月日	左衛門尉安、善藏或尼兩阿・小代彈正左衛門尉政
六五	康寔	壬十月日智感	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤進僧願翁有通知客 應永六年己卯六月日	左衛門尉安、善藏或尼兩阿・小代彈正左衛門尉政
六六			甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤進僧願翁有通知客 應永六年己卯六月日	
六七	康寔	丁五月十一日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤進僧願翁有通知客 (行閱) 「奉施主岩巖山圓通寺」×3	善藏或尼沙藏
六八	康寔	壬寅十一月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤進僧願翁有通知客 (行閱) 「奉施主岩巖山圓通寺」×2	
六九	貞治	二卯正月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤進僧願翁有通知客 (行閱) 「奉施主岩巖山圓通寺」×2	
七〇	貞治	二卯七月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤進僧願翁有通知客 應永六年己卯六月日	
七一	貞治	二卯七月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤進僧願翁有通知客 (行閱) 「奉施主岩巖山圓通寺」×2	
七二	貞治	二卯七月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤進僧願翁有通知客 應永六年己卯六月日	
七三	貞治	二卯九月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤進僧願翁有通知客 應永六年己卯六月日	
七四	貞治	二卯八月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤進僧願翁有通知客 應永六年己卯六月日	
七五	貞治	二卯八月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤進僧願翁有通知客 (行閱) 「奉施主岩巖山圓通寺」	
七六	貞治	二卯十月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤進僧願翁有通知客 (行閱) 「奉施主岩巖山圓通寺」	
七七	貞治	二卯九月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤進僧願翁有通知客 應永六年己卯六月日	
七八	貞治	二卯十月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤進僧願翁有通知客 應永六年己卯六月日	

九六	貞治三 正月日	甲斐州鶴郡岩殿山西面寺勤遠信願翁有通知客 應永六年正月六日	A 美
九七	貞治三 正月日	甲斐州鶴郡岩殿山西面寺勤遠信願翁有通知客 應永六年正月六日	
九八	貞治二 正月日	甲斐州鶴郡岩殿山西面寺勤遠信願翁有通知客 應永六年正月六日	
九九	貞治三 正月日	甲斐州鶴郡岩殿山西面寺勤遠信願翁有通知客 應永六年正月六日	
一〇〇	貞治甲 正月日	甲斐州鶴郡岩殿山西面寺勤遠信願翁有通知客 應永六年正月六日	
一〇一	貞治三 正月日	甲斐州鶴郡岩殿山西面寺勤遠信願翁有通知客 應永六年正月六日	
一〇二	貞治三 正月日	甲斐州鶴郡岩殿山西面寺勤遠信願翁有通知客 應永六年正月六日	
一〇三	貞治三 正月日	甲斐州鶴郡岩殿山西面寺勤遠信願翁有通知客 應永六年正月六日	
一〇四	貞治二 正月日	甲斐州鶴郡岩殿山西面寺勤遠信願翁有通知客 應永六年正月六日	
一〇五	貞治三 正月日	甲斐州鶴郡岩殿山西面寺勤遠信願翁有通知客 應永六年正月六日	
一〇六	貞治四 正月日	甲斐州鶴郡岩殿山西面寺勤遠信願翁有通知客 應永六年正月六日	
一〇八	貞治三 正月日	甲斐州鶴郡岩殿山西面寺勤遠信願翁有通知客 應永六年正月六日	
一〇九	貞治四 正月日	甲斐州鶴郡岩殿山西面寺勤遠信願翁有通知客 應永六年正月六日	
一一〇	勤遠沙門智感 延文五年六月日	苔薩戎尼法師，善薩戎尼如來，善薩戎尼契尊，善薩戎尼明光， 沙詠道吉，相國守志芳氏，沙詠心苦，武藏守頭義深，教位清義。 菩薩戎尼良方，教位萬國照，菩薩戎尼希芳，沙詠聖法，菩薩 戒圓觀，菩薩戎尼朝里。	
一一一	貞治四 正月日	甲斐州鶴郡岩殿山西面寺勤遠信願翁有通知客 應永六年正月六日	表紙欠
一一二	貞治四 正月日	甲斐州鶴郡岩殿山西面寺勤遠信願翁有通知客 應永六年正月六日	

一三	貞治己四五月日	甲斐州鶴郡岩瀬山西寺勤進僧職翁有通知客	慶永六年己六月日				
一四	貞治乙巳七月日	甲斐州鶴郡岩瀬山西寺勤進僧職翁有通知客	慶永六年己六月日				
一五	貞治年乙九月日	甲斐州鶴郡岩瀬山西寺勤進僧職翁有通知客	慶永六年己六月日				
一六	貞治第四乙一月日	甲斐州鶴郡岩瀬山西寺勤進僧職翁有通知客	慶永六年己六月日				
一七	貞治丙巳七月日	甲斐州鶴郡岩瀬山西寺勤進僧職翁有通知客	慶永六年己六月日				
一八	貞治丙巳十月一日	甲斐州鶴郡岩瀬山西寺勤進僧職翁有通知客	慶永六年己六月日				
一九	貞治乙巳九月日	甲斐州鶴郡岩瀬山西寺勤進僧職翁有通知客	慶永六年己六月日				
二一	貞治丙午八月日	甲斐州鶴郡岩瀬山西寺勤進僧職翁有通知客	慶永六年己六月日				
二二	貞治丙午五月日	甲斐州鶴郡岩瀬山西寺勤進僧職翁有通知客	慶永六年己六月日				
二三	貞治丙午五月日	甲斐州鶴郡岩瀬山西寺勤進僧職翁有通知客	慶永六年己六月日				
二四	貞治丙午八月日	甲斐州鶴郡岩瀬山西寺勤進僧職翁有通知客	慶永六年己六月日				
二五	貞治丙午十二月日	甲斐州鶴郡岩瀬山西寺勤進僧職翁有通知客	慶永六年己六月日				
二六	貞治丙午十一月日	甲斐州鶴郡岩瀬山西寺勤進僧職翁有通知客	慶永六年己六月日				
二七	貞治六年丙午五月日	甲斐州鶴郡岩瀬山西寺勤進僧職翁有通知客	慶永六年己六月日				
二八	貞治五年丙午十一月日	甲斐州鶴郡岩瀬山西寺勤進僧職翁有通知客	慶永六年己六月日				
二九	貞治六年丙正月日	甲斐州鶴郡岩瀬山西寺勤進僧職翁有通知客	慶永六年己六月日				

一四六	化縁比丘智感	永德元年五月日	甲斐州鶴部石巖山圓通寺勤遠僧願翁通知客	應永六年卯六月日	佐々木冠證守入道薦草
一四七	貞治七年申三月日		甲斐州鶴部石巖山圓通寺勤遠僧願翁通知客	應永六年巳六月日	
一四八	貞治七年二月日		甲斐州鶴部石巖山圓通寺勤遠僧願翁通知客	應永六年卯六月日	
一四九	貞治七年申三月日		甲斐州鶴部石巖山圓通寺勤遠僧願翁通知客 （總）「甲斐郡寶澤石巖山圓通寺勤遠僧願翁有通知客」	應永六年巳六月日	上相國工少弼朝房
一五〇	應安元年卯五月日		甲斐州鶴部石巖山圓通寺勤遠僧願翁通知客	應永六年巳六月日	
一五一	應安元年卯十一月日	比丘智感	甲斐州鶴部石巖山圓通寺勤遠僧願翁通知客	應永六年巳六月日	
一五二	比丘智感	應安元年卯八月日	甲斐州鶴部石巖山圓通寺勤遠僧願翁通知客	應永六年巳六月日	
一五三	比丘智感	應安元年卯八月日	甲斐州鶴部石巖山圓通寺勤遠僧願翁通知客	應永六年巳六月日	
一五四			甲斐州鶴部石巖山圓通寺勤遠僧願翁通知客	應永六年巳六月日	
一五五	應安元年八月日化主比丘智感		甲斐州鶴部石巖山圓通寺勤遠僧願翁通知客	應永六年巳六月日	
一五六	智感	應安元年卯七月日	甲斐州鶴部石巖山圓通寺勤遠僧願翁通知客	應永六年巳六月日	
一五七	應安元年卯十月日	勤遠智感	甲斐州鶴部石巖山圓通寺勤遠僧願翁通知客	應永六年巳六月日	
一五八	應安元年卯十月日	化主比丘智感	甲斐州鶴部石巖山圓通寺勤遠僧願翁通知客	應永六年巳六月日	
一五九	化主比丘智感		甲斐州鶴部石巖山圓通寺勤遠僧願翁通知客	應永六年巳六月日	
一六〇	化縁比丘智感		甲斐州鶴部石巖山圓通寺勤遠僧願翁通知客	應永六年巳六月日	
一六一	比丘智感	應安元年卯	甲斐州鶴部石巖山圓通寺勤遠僧願翁通知客	應永六年巳六月日	
一六二	應安元年卯十二月日	比丘智感	甲斐州鶴部石巖山圓通寺勤遠僧願翁通知客	應永六年巳六月日	

一六三	應安二年正月日	比丘智感	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤遠守願請有道知客 應永六年正月日
一六四	應安二年二月日	比丘智感	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤遠守願請有道知客 應永六年正月日
一六五	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤遠守願請有道知客 應永六年正月日	
一六六	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤遠守願請有道知客 應永六年正月日	
一六七	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤遠守願請有道知客 應永六年正月日	
一六八	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤遠守願請有道知客 應永六年正月日	
一六九	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤遠守願請有道知客 應永六年正月日	
一七〇	化緣比丘智感 應安二年四月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤遠守願請有道知客 應永六年正月日	
一七一		甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤遠守願請有道知客 應永七年正月日	
一七二		甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤遠守願請有道知客 應永七年正月日	
一七三	貞治四年九月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤遠守願請有道知客 應永七年正月日	
一七四	貞治四年九月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤遠守願請有道知客 應永七年正月日	
一七五	貞治四年九月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤遠守願請有道知客 應永七年正月日	
一七六	貞治四年十月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤遠守願請有道知客 應永七年正月日	
一七七	貞治四年十一月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤遠守願請有道知客 應永七年正月日	
一七八	貞治四年十二月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤遠守願請有道知客 應永七年正月日	
一七八	貞治四年正月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤遠守願請有道知客 應永七年正月日	
一八〇	貞治四年正月日	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤遠守願請有道知客 應永七年正月日	
一八一	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤遠守願請有道知客 應永七年正月日	
一八二	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡石巖山圓通寺勤遠守願請有道知客 應永七年正月日	

一八二	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢 應永七年丙午九月日
一八四	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢 應永七年丙午九月日
一八五	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢 應永七年丙午九月日
一八六	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢 應永七年丙午九月日
一八七	比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢 應永七年丙午九月日
一八八	比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢 應永七年丙午九月日
一八九	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢 應永七年丙午九月日
一九一	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢 應永七年丙午九月日
一九二	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢 應永七年丙午九月日
一九三	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢 應永七年丙午九月日
一九四	應安二年十二月日 化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢 應永七年丙午九月日
一九五	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢 應永七年丙午九月日
一九六	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢 應永七年丙午九月日
一九七	比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢 應永七年丙午九月日
一九八	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢 應永七年丙午九月日
一九九	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢 應永七年丙午九月日
二〇〇	化主比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢 應永七年丙午九月日

一一〇	化王比丘智感	命工板行												
一一一	應安三年四月日	化緣比丘智感												
一一二	應安三年八月日	比丘智感												
一一三	應安三年九月日	比丘智感												
一一四	應安三年歲九月日	比丘智感												
一一五	應安三年歲十一月日	比丘智感												
一一六	應安三年歲十二月日	化緣比丘智感												
一一七	應安三年十一月日	勸善比丘智感												
一一八	化緣比丘智感													
一一九	普若比丘智感													
一二〇	普若比丘智感													
一二一	應安四年二月日	化緣比丘智感												
一二二	應安四年二月日	勸進比丘智感												
一二三	應安四年二月日	化緣比丘智感												
一二四	應安第四年四月日	化緣比丘智感												
一二五	應安第四年四月日	化緣比丘智感												
一二六	應安第四年五月日	化緣比丘智感												
一二七	甲斐州鷲勝郡石巖山圓通寺金剛佛子明賢	應水七年丙九月日												
一二八	甲斐州鷲勝郡石巖山圓通寺金剛佛子明賢	應水七年丙九月日												
一二九	甲斐州鷲勝郡石巖山圓通寺金剛佛子明賢	應水七年丙九月日												
一三〇	甲斐州鷲勝郡石巖山圓通寺金剛佛子明賢	應水七年丙九月日												
一三一	甲斐州鷲勝郡石巖山圓通寺金剛佛子明賢	應水七年丙九月日												
一三二	甲斐州鷲勝郡石巖山圓通寺金剛佛子明賢	應水七年丙九月日												
一三三	甲斐州鷲勝郡石巖山圓通寺金剛佛子明賢	應水七年丙九月日												
一三四	甲斐州鷲勝郡石巖山圓通寺金剛佛子明賢	應水七年丙九月日												
一三五	甲斐州鷲勝郡石巖山圓通寺金剛佛子明賢	應水七年丙九月日												
一三六	甲斐州鷲勝郡石巖山圓通寺金剛佛子明賢	應水七年丙九月日												
A	A	A	· 奥	A袖	· 奥	A袖	· 奥	A袖	A	A	A	A	A	A
			源基清	· 長賢										

一三七	慶安第四六月日	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明實應水七歲丙九月日
一三八	慶安第四九月日	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明實應水七歲丙九月日
一三九	慶安五年丁二月日	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明實應水七歲丙九年丙九月日
一四〇	慶安第五丁正月日	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明實應水七歲丙九年丙九月日
一四一	慶安第五丁二月日	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明實應水七歲丙九年丙九月日
一四二	慶安第五丁壬卯月日	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明實應水七歲丙九年丙九月日
一四三	慶安第五丁壬午月日	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明實應水七歲丙九年丙九月日
一四四	慶安第五子壬止月日	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明實應水七歲丙九年丙九月日
一四五	慶安第五子壬上月日	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明實應水七歲丙九年丙九月日
一四六	慶安第五子五月一日	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明實應水七歲丙九年丙九月日
一四七	慶安第五子八月日	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明實應水七歲丙九年丙九月日
一四八	慶安第五子十一月日	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明實應水七歲丙九年丙九月日
一四九	慶安第六癸一月日	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明實應水七歲丙九年丙九月日
一五〇	沙門智感	慶安六年六月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明實應水七歲丙九年丙九月日
一五一	慶安六年癸正月日	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明實應水七歲丙九年丙九月日
一五二	慶安第六癸三月日	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明實應水七歲丙九年丙九月日
A	A	A	A

二五二	慶安第六 正月日	化緣比丘智感	甲斐州越後郡設山田通寺 金剛院子明賀	爲父母幽冥友心
二五四	慶安第六 正月日	化緣比丘智感	甲斐州越後郡設山西通寺 金剛院子明賀	爲父母幽冥友心
二五五	慶安第六 正月日	化緣比丘智感	甲斐州越後郡設山西通寺 金剛院子明賀	爲父母幽冥友心
二五六	慶安第六 正月日	化緣比丘智感	甲斐州越後郡設山西通寺 金剛院子明賀	爲父母幽冥友心
二五七	慶安第六 正月日	化緣比丘智感	甲斐州越後郡設山西通寺 金剛院子明賀	爲父母幽冥友心
二五八	慶安第六 正月日	化緣比丘智感	甲斐州越後郡設山西通寺 金剛院子明賀	爲父母幽冥友心
二五九			甲斐州越後郡設山西通寺 金剛院子明賀	爲父母幽冥友心
二六〇	永和四年 十一月日	化緣比丘智感	甲斐州越後郡設山西通寺 金剛院子明賀	爲父母幽冥友心
二六一	(墨書)		甲斐州越後郡設山西通寺 金剛院子明賀	爲父母幽冥友心
二六二	(墨書)		甲斐州越後郡設山西通寺 金剛院子明賀	爲父母幽冥友心
二六三	(墨書)		甲斐州越後郡設山西通寺 金剛院子明賀	爲父母幽冥友心
二六四	(墨書)		甲斐州越後郡設山西通寺 金剛院子明賀	爲父母幽冥友心
二六五	(墨書)		甲斐州越後郡設山西通寺 金剛院子明賀	爲父母幽冥友心
二六六	(墨書)	文明九年 八月日 (付文) 者と云ひ 傳ふ	甲斐州越後郡設山西通寺 金剛院子明賀	爲父母幽冥友心
二六七	(墨書)	文明九年 八月日 (付文) 者と云ひ 傳ふ	甲斐州越後郡設山西通寺 金剛院子明賀	爲父母幽冥友心
二六八	(墨書)	文明九年 八月日	A	A
二六九	(墨書)	文明九年 八月日 (行間) 「岩殿山常住也」(経文と同一筆跡)	A	A
二七〇	(墨書)	文明九年 八月日 「寶山聖母堂六十九歲會之」	A	A
			A	A
			A	A
首尾欠	首尾欠	首尾欠	前半部 欠	表紙・ 折分 表紙 表紙欠

一七一	幹縗比丘智感	太康 惠安六九月八日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢 應水七歲丙九月口
一七二	幹縗比丘智感	惠安七 寅十一月日	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺金剛佛子明賢 應水七歲丙九月口
一七三	惠安七 寅十一月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺金剛佛子明賢 應水七歲丙九月口
一七四	惠安七 寅十一月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺金剛佛子明賢 應水七歲丙九月口
一七五	惠安八 卯二月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺金剛佛子明賢 應水七歲丙九月口
一七六	惠安八 卯二月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺金剛佛子明賢 應水七歲丙九月口
一七七	惠安八 卯二月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺金剛佛子明賢 應水七歲丙九月口
一七八	惠安八 卯二月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺金剛佛子明賢 應水七歲丙九月口
一七九	惠安八 卯二月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺金剛佛子明賢 應水七歲丙九月口
一八〇	惠安八 卯二月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺金剛佛子明賢 應水七歲丙九月口
一八一	惠安八 卯二月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺金剛佛子明賢 應水七歲丙九月口
一八二	惠安八 卯二月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺金剛佛子明賢 應水七歲丙九月口
一八三	永和元 卯六月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺金剛佛子明賢 應水七歲丙九月口
一八四	永和元 卯六月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺金剛佛子明賢 應水七歲丙九月口
一八五	永和元 卯六月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺金剛佛子明賢 應水七歲丙九月口
一八六	永和元 卯六月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺金剛佛子明賢 應水七歲丙九月口
一八七	永和元 卯六月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺金剛佛子明賢 應水七歲丙九月口
一八八	永和元 卯六月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺金剛佛子明賢 應水七歲丙九月口
A	A	A	表紙破

三〇八	化縗比丘智感	永和二年十一月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺作師明質 座水七歲內九月日
三〇九	化縗比丘智感	永和二年十二月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺作師明質 座水七歲內九月日
三一〇	化縗比丘智感	永和二年正月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺作師明質 座水七歲內九月日
三一一	化縗比丘智感	永和二年八月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明質 座水七歲內九月日
三一二	水和二口二月日	化縗比丘智感	中斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明質 座水七歲內九月日
三一二	水和二口二月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明質 座水七歲內九月日
三一三	永和二丁三月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明質 座水七歲內九月日
三一四	化縗比丘智感	永和二丁卯月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明質 座水七歲內九月日
三一五	永和二丁巳五月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明質 座水七歲內九月日
三一六	化縗比丘智感	永和二丁巳七月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明質 座水七歲內九月日
三一七	化縗比丘智感	永和二丁巳七月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明質 座水七歲內九月日
三一八	化縗比丘智感	永和二丁八月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明質 座水七歲內九月日
三一九	化縗比丘智感	永和二丁八月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明質 座水七歲內九月日
三二〇	永和二丁十月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明質 座水七歲內九月日
三二一	永和二丁十月日	化縗比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明質 座水七歲內九月日
三二二	勤菴沙門智感	永和四年二月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺律師明質 座水七歲內九月日
三二三	勤菴沙門智感	永和四年二月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺律師明質 座水七歲內九月日
三二四	化縗比丘智感	永和四年正月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺律師明質 座水七歲內九月日
三二五	化縗比丘智感	永和四年八月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺律師明質 座水七歲內九月日
A	A	A	淨圓・法明

三四五	化縁比丘智感	永和五年五月日													
三四六	化縁比丘智感	永和五年五月日													
三四七	化縁比丘智感	康慶元年八月日													
三四八	化縁比丘智感	康慶元年九月日													
三四九	化縁比丘智感	康慶元年十一月日													
三四〇	化縁比丘智感	康慶元年十二月日													
三四一	化縁比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢	康慶七年九月日												
三四二	化縁比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢	康慶七年九月日												
三四三	化縁比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢	康慶七年九月日												
三四四	化縁比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢	永七歲丙午九月日												
三四五	化縁比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢	永七歲丙午九月日												
三四六	化縁比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢	永七歲丙午九月日												
三四七	化縁比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢	永七歲丙午九月日												
三四八	化縁比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢	永七歲丙午九月日												
三四九	化縁比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢	永七歲丙午九月日												
三四〇	化縁比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢	永七歲丙午九月日												
三四一	化縊比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢	永七歲丙午九月日												
三四二	化縊比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢	永七歲丙午九月日												
三四三	化縊比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢	永七歲丙午九月日												
三四四	化縊比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢	永七歲丙午九月日												
三四五	化縊比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢	永七歲丙午九月日												
三四六	化縊比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢	永七歲丙午九月日												
三四七	化縊比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢	永七歲丙午九月日												
三四八	化縊比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢	永七歲丙午九月日												
三四九	化縊比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢	永七歲丙午九月日												
三四〇	化縊比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺金剛佛子明賢	永七歲丙午九月日												
C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	A	A	A	A
												表紙欠			

三八一	水德二壬正月日	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺律師明賢應水七歲丙午月	左氏衛音清音臣氏演
三八二	化緣比丘智感	永德二年二月日	甲斐州鶴郡岩殿山西浦上律師明賢應水七歲丙午月	
三八三	水德二年三月日	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺律師明賢應水七歲丙午月	
三八四	水德二年三月日	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺律師明賢應水七歲丙午月	沙勿得悅·數位三善連
三八五	化緣比丘智感	永德二年五月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺律師明賢應水七歲丙午月	子町左衛門大夫大江公忠法名乾光
三八六	化緣比丘智感	永德二年五月日	律師明賢 甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺律師明賢應水七歲丙午月	
三八七	化緣比丘智感	永德二年六月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺律師明賢應水七歲丙午月	
三八八	水德二年六月日	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺律師明賢應水七歲丙午月	
三八九	化緣比丘智感	永德二年九月日	甲斐州鶴郡岩殿山西浦上律師明賢應水七歲丙午月	
三九〇	化緣比丘智感	永德二年六月日	甲斐州鶴郡岩殿山西浦上律師明賢應水七歲丙午月	
三九一	化緣比丘智感	永德二年六月日	甲斐州鶴郡岩殿山西浦上律師明賢應水七歲丙午月	
三九二	化緣比丘智感	永德二年七月日	甲斐州鶴郡岩殿山西浦上律師明賢應水七歲丙午月	
三九三	化緣比丘智感	永德二年七月日	甲斐州鶴郡岩殿山西浦上律師明賢應水七歲丙午月	左氏衛音清音臣氏演·酒善工九·爲空光禪門·淨央·上祖鷗聲
三九四	化緣比丘智感	永德二年七月日	甲斐州鶴郡岩殿山西浦上律師明賢應水七歲丙午月	
三九五	化緣比丘智感	永德二年十月日	甲斐州鶴郡岩殿山西浦上律師明賢應水七歲丙午月	
三九六	水德三年三月日	化緣比丘智感	甲斐州鶴郡岩殿山西浦上律師明賢應水七歲丙午月	

三九七	化緣比丘智感	永德二年正月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺住持明賢庵水七歲丙戌九月日	沙弥希道俗名上山深藏人源義忠·源氏女法名昌林
三九八	化緣比丘智感	永德三年正月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺住持明賢庵水七歲丙戌九月日	
四〇〇	化緣比丘智感	永德二年十二月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺住持明賢庵水七歲丙戌九月日	
四〇一	化緣比丘智感	永德二年四月日	律師明賢 甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺住持明賢庵水七歲丙戌九月日	
四〇二	化緣比丘智感	永德四年正月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺住持明賢庵水七歲丙戌九月日	
四〇三	化緣比丘智感	至德二年二月日	律師明賢 甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺住持明賢庵水七歲丙戌九月日	
四〇四	化緣比丘智感	至德二年二月日	律師明賢 甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺住持明賢庵水七歲丙戌九月日	
四〇五	化緣比丘智感	至德二年二月日	律師明賢 甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺住持明賢庵水七歲丙戌九月日	
四〇六	化緣比丘智感	至德二年二月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺住持明賢庵水七歲丙戌九月日	
四〇七	化緣比丘智感	至德二年二月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺住持明賢庵水七歲丙戌九月日	
四〇八	化緣比丘智感	至德二年二月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺住持明賢庵水七歲丙戌九月日	
四〇九	化緣比丘智感	至德二年二月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺住持明賢庵水七歲丙戌九月日	
四一〇	化緣比丘智感	至德二年四月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺住持明賢庵水七歲丙戌九月日	
四一一	化緣比丘智感	永德三年八月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺住持明賢庵水七歲丙戌九月日	
四一二	化緣比丘智感	永德三年八月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺住持明賢庵水七歲丙戌九月日	
四一三	化緣比丘智感	永德三年八月日	律師明賢 甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺住持明賢庵水七歲丙戌九月日	
四一四	化緣比丘智感	永德三年十一月日	律師明賢 甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺住持明賢庵水七歲丙戌九月日	
四五五	化緣比丘智感	永德三年十一月日	律師明賢 甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺住持明賢庵水七歲丙戌九月日	
B	B	B	B	B
			卷水久	

四一六	化縕比丘智感	水德第四月日	律師明賢	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺广水七歲庚九月日									
四一七	化縕比丘智感	水德第四月日	律師明賢	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺廣水七歲庚九月日									
四一八	化縕比丘智感	永慶二年四月日	律師明賢	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺廣水七歲庚九月日									
四一九	化縕比丘智感	明德元年四月日	律師明賢	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺廣水七歲庚九月日									
四二〇	至德改元七月日	化縕比丘智感	律師明賢	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺廣水七歲庚九月日									
四二一	化縕比丘智感	嘉慶二年戊辰八月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺廣水七歲庚九月日										
四二二	化縕比丘智感	嘉慶二年戊辰八月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺廣水七歲庚九月日										
四二三	化縕比丘智感	嘉慶二年戊辰八月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺廣水七歲庚九月日										
四二四	綠比丘智感	嘉慶二年戊辰八月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺廣水七歲庚九月日										
四二五	綠比丘智感	嘉慶二年戊辰八月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺廣水七歲庚九月日										
四二六	化縕比丘智感	嘉慶二年己巳三月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺廣水七歲庚九月日										
四二七	化縕比丘智感	嘉慶二年己巳五月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺廣水七歲庚九月日										
四二八	化縕比丘智感	嘉慶二年庚午二月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺廣水七歲庚九月日										
四二九	化縕比丘智感	明德元年庚八月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺廣水七歲庚九月日										
四三〇	化縕比丘智感	明德二年辛未正月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺廣水七歲庚九月日										
四三一			三善寺廣	明德元冬沙弥淨善	三善寺廣	明德二年春沙弥淨善	三善寺廣	明德二年夏沙弥淨善	三善寺廣	明德二年秋沙弥淨善	三善寺廣	明德二年冬沙弥淨善	三善寺廣
四三二	應永四年二月日	化縕比丘法龜	書	青良上人鶴郡人稱治家	明德一年末夏沙弥淨善	秋沙弥淨善	青良上人鶴郡人稱治家	明德一年末夏沙弥淨善	秋沙弥淨善	青良上人鶴郡人稱治家	明德一年末夏沙弥淨善	秋沙弥淨善	青良上人鶴郡人稱治家

西三四	化縁比丘智感 明德三二月日	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺律師明賢广 水七度庚辰九月日	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺律師明賢广 水七度庚辰九月日	夏沙淨淨善
西三五				吉良上授兵部大輔頼治
西三六				
西三七				
西三八				
西三九				
西四〇				
西四一	化縁比丘法龜	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺律師明賢广 水七度庚辰九月日	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺律師明賢广 水七度庚辰九月日	吉良上授兵部大輔頼治
西四二	化縁比丘法龜	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺律師明賢广 水七度庚辰九月日	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺律師明賢广 水七度庚辰九月日	吉良上授兵部大輔頼治
西四五	化縁比丘法龜	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺律師明賢广 水七度庚辰九月日	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺律師明賢广 水七度庚辰九月日	吉良上授兵部大輔頼治
西四六				
西四七	化縁比丘法龜	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺律師明賢广 水七度庚辰九月日	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺律師明賢广 水七度庚辰九月日	吉良上授兵部大輔頼治
西四八	化縁比丘法龜	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺律師明賢广 水七度庚辰九月日	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺律師明賢广 水七度庚辰九月日	吉良上授兵部大輔頼治
西四九	化縁比丘法龜	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺律師明賢广 水七度庚辰九月日	甲斐州鶴郡岩殿山西通寺律師明賢广 水七度庚辰九月日	吉良上授兵部大輔頼治
C	C	C	C	C

四八五	四八四	四八三	四八二	四八一	四八〇	四八一	四八二	四八三	四八四	四八五	四七一	四七〇	四七一	四七〇
											應水六月廿九日化緣比丘法事	應水六年六月日化緣比丘法事	應水五年十一月日化緣比丘法事	應水六年六月日化緣比丘法事
											甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺律師明賢廣水七歲庚九月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺律師明賢廣水七歲庚九月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺律師明賢廣水七歲庚九月日	甲斐州鶴郡岩殿山圓通寺律師明賢廣水七歲庚九月日
B	C	C	C	C	B	B	B	B	B	C	B	B	B	B

五一〇	五一九	五·八	五·七	五·六	五·五	五·四	五·三	五·二	五·一	五〇九	五〇八	五〇六	五〇五	五〇四	五〇三	
		開板用光	開板妙方	開板水鑑	開板源珠	開板崇詳	開板源念	律師明賢								
								甲斐州鶴都台殿山圓通寺」永八歲辛巳極月十三日下者了								
								律師明賢 甲斐州鶴都台殿山圓通寺」永八歲辛巳極月十三日下者了								
B	B	B	B					B	B	B	B	B	B	B	B	

五五五	五五四	五五一	五五二	五五〇	五四五	五四四	五四三	五四二	五四一	五四〇	五四一	五四二	五四三	五四四	五四五	五四六	五四七	五四八	五四九	五四〇	五五五	
	關板淨用																					
律師明質	甲斐州鶴部吉殿山圓通寺」水八歲〔下著																					
律師明質	甲斐州鶴部吉殿山圓通寺」水八歲〔下著																					
律師明質	甲斐州鶴部吉殿山圓通寺」水八歲〔下著																					
律師明質	甲斐州鶴部吉殿山圓通寺」水八歲〔下著																					
律師明質	甲斐州鶴部吉殿山圓通寺」水八歲〔下著																					
B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	
					損 下部破																	

五五六													
五五七													
五五八	問板淨用												
五五九													
五六〇													
五六一													
五六二													
五六三													
五六四													
五六五													
五六六													
五六七													
五六八													
五六九													
五七〇													
五七一	圓板 圓洞												
五七二													
B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
									損 下部破				卷尾欠

五八六	五八五	五八四	五八三	五八二	五八一	五八〇	五七九	五七八	五七七	五七四	五七三
甲斐州鶴部岩殿山圓通寺明賢 十六日善神書下印單 〔行問〕「甲斐國鶴部岩殿」 〔金剛佛子明賢〕「圓通寺」	甲斐國都留郡岩殿山圓通寺住佐明賢 近江國下若 〔行問〕「甲斐國鶴部岩殿」 〔金剛佛子明賢〕「圓通寺」	金剛佛子明賢 甲斐國鶴部岩殿山圓通寺別當明賢 一月十三日下若 〔行問〕「甲斐國鶴部岩殿」 〔金剛佛子明賢〕「圓通寺」	甲斐國都留郡岩殿山圓通寺住佐明賢 應永八年辛巳十二月十三日白近 江佐今木下着 〔行問〕「金剛佛子明賢」 〔圓通寺〕 〔甲斐國鶴部岩殿山圓通寺別當明賢 一月十三日下若 〔行問〕「甲斐國鶴部岩殿」 〔金剛佛子明賢〕「圓通寺」	甲斐國都留郡岩殿山圓通寺住佐明賢 應永八年辛巳十二月十三日白近 江佐今木下着 〔行問〕「金剛佛子明賢」 〔圓通寺〕 〔甲斐國鶴部岩殿山圓通寺別當明賢 一月十三日下若 〔行問〕「甲斐國鶴部岩殿」 〔金剛佛子明賢〕「圓通寺」	律師明賢 甲斐州鶴部岩殿山圓通寺「水八歲」 〔行問〕「岩殿山」 〔金剛佛子明賢〕「圓通寺」						
G	C	E	E	C	C	B	B	H	B	B	B

經籍並												
五八七												
五八八												
五八九												
五九一												
五九二												
五九三												
五九四												
五九五												
五九六												
五九七												
五九八												
五九九												
六〇〇	唐醫元吉未八月七日											
(秋山 敬)	永正六年己巳卯月店櫛新作畢											

図 版

図版 1



第1調査区全景（調査前）



第1調査区清確認状況



第1調査区完測状況

图版 2



第2調査区全景



第2調査区池内部現況



第2調査区池北壁断面



第3調査区全景

図版 3



第3調査区トレンチ設定状況

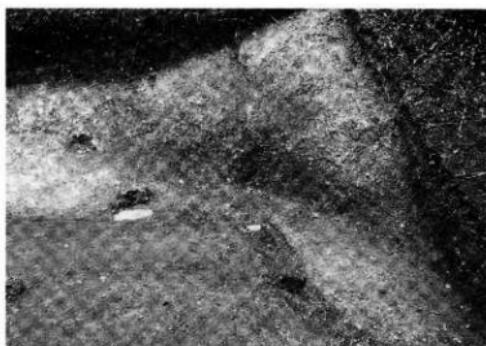


第4調査区トレンチ設定状況



第4調査区発掘調査風景

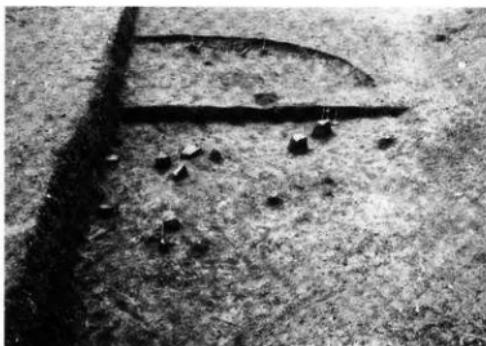
図版 4



第4調査区北東コーナーテラス確認状況



第4調査区豎穴状遺構確認状況



第4調査区豎穴状遺構断面



第4調査区完掘状況



御所平調査区全景



御所平櫻出土状況



御所平遺物出土状況

图版 6



新宫洞窟調查区全景



新宮洞窟作業風景



新宮洞窟調查区光觀狀況

図版 7



丸山完掘状況

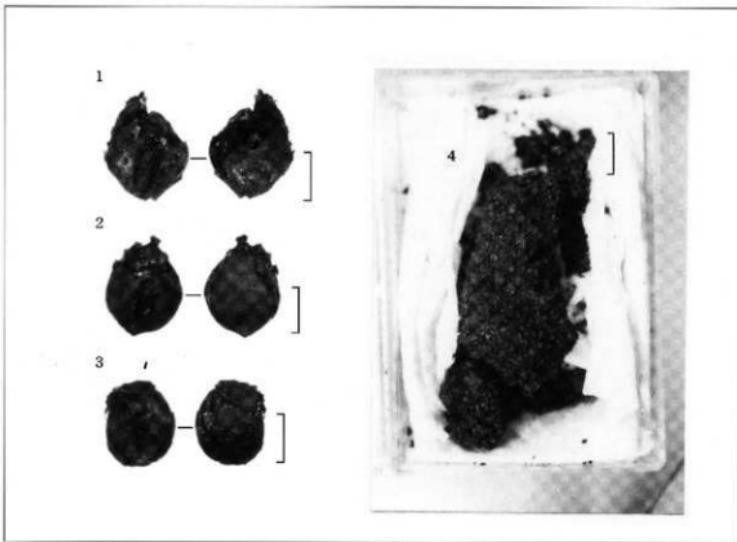


山顶・防災無線中継局舎改良予定地（調査前）



山顶・防災無線中継局舎改良予定地柱穴完掘状況

図版 8

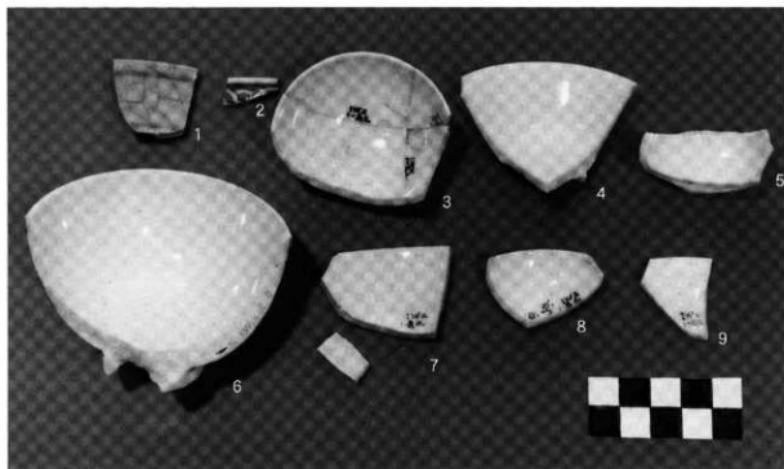


出土した炭化種実 (スケールは 1~3 が 1 mm、4 が 1 cm)
1~3. アワ、炭化胚乳、試料A 4. アワ、炭化胚乳 (塊状)、試料B

图版 9



岩殿城跡出土近世、近・現代陶磁器（外面）

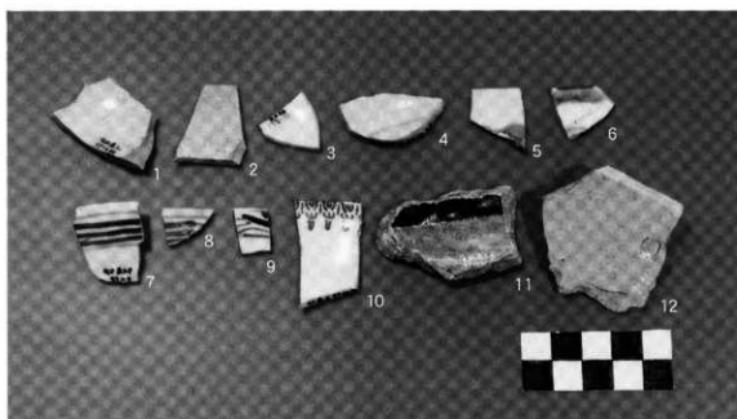


岩殿城跡出土近世、近・現代陶磁器（内面）

圖版10

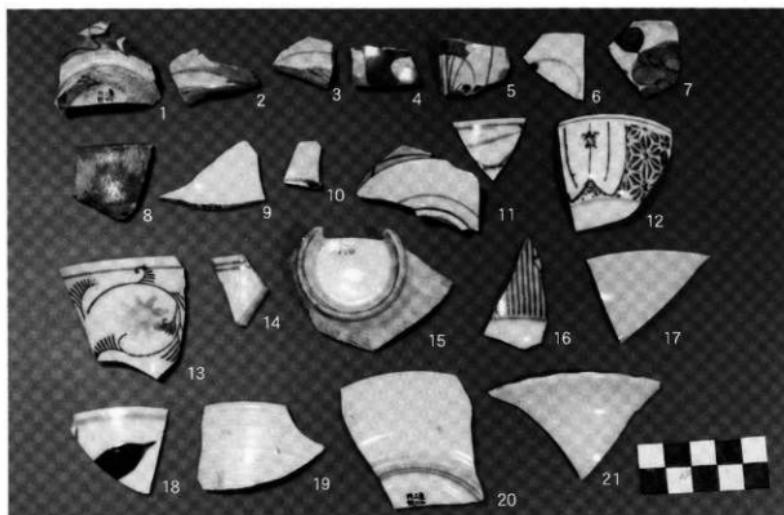


御所平出土近世、近・現代陶磁器（外面）

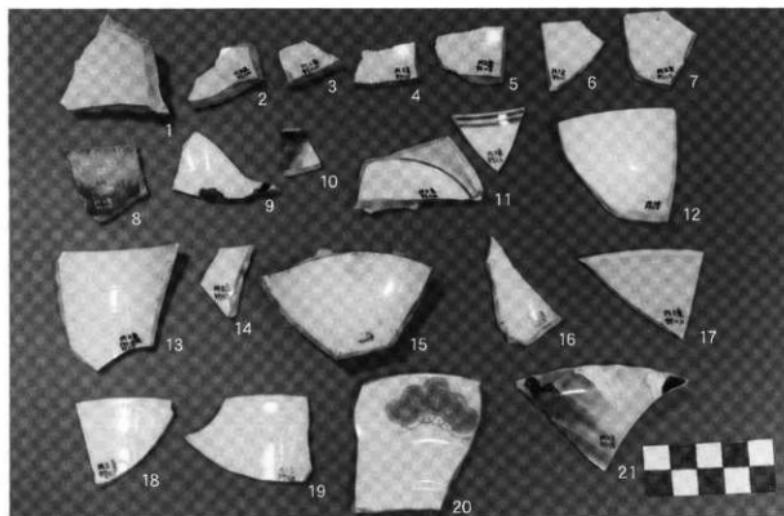


御所平出土近世、近・現代陶磁器（内面）

図版11



旧円通寺三重塔跡出土近世、近・現代陶磁器（外面）

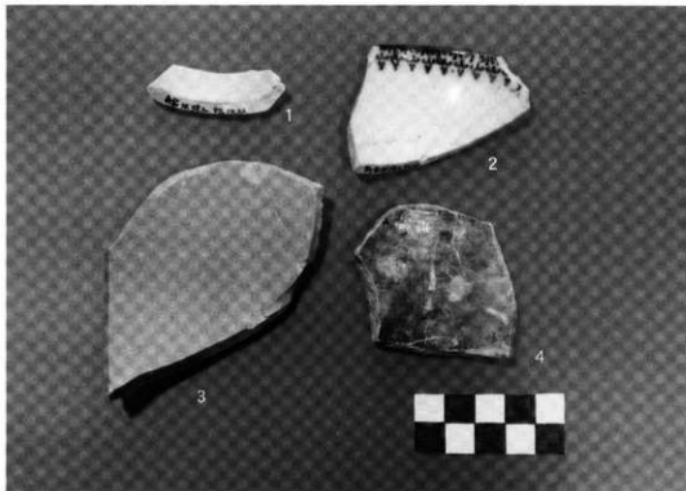


旧円通寺三重塔跡出土近世、近・現代陶磁器（内面）

図版12



新宮洞窟出土近世、近・現代陶磁器（外面）



新宮洞窟出土近世、近・現代陶磁器（内面）

図版13



木造十一面観音像(Ⅰ)

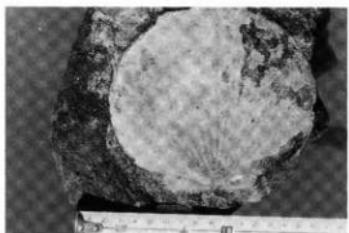


木造十一面観音像(Ⅱ)

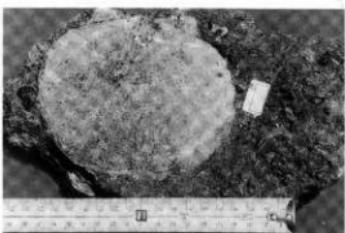


木造七社権現立像

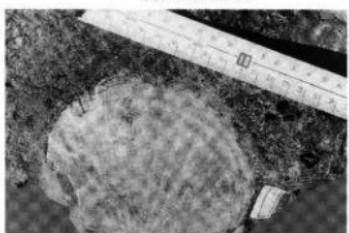
図版14



1-1 月日貝化石（'97.11.7黒指定天然記念物、以下15まで同じ）



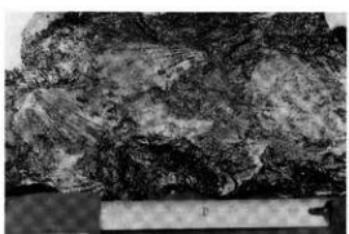
1-2 月日貝化石



1-3 月日貝化石



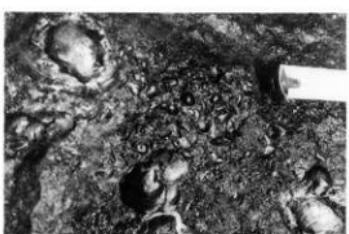
1-5 月日貝化石



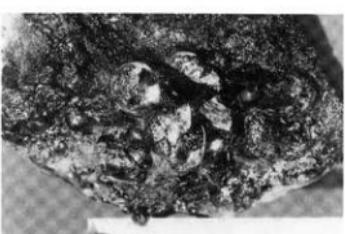
1-6 月日貝化石



2-1 ビノスガイ化石



2-2 ビノスガイ化石



2-3 ビノスガイ化石

図版15



2-4 ピノスガイ化石



2-5 ピノスガイ化石



2-6 ピノスガイ化石



2-7 ピノスガイ化石



2-8 ピノスガイ化石



2-9 ピノスガイ化石



3-1 ムカシカシパンウニ化石

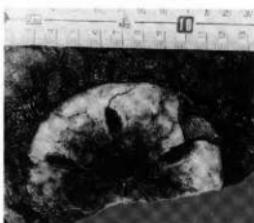


3-2 ムカシカシパンウニ化石

図版16



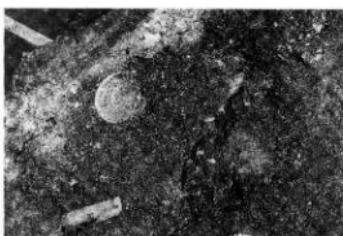
3-3 ムカシカシパンウニ化石



3-4 ムカシカシパンウニ化石



3-5 ムカシカシパンウニ化石



4-1 マテガイ化石



4-2 マテガイ化石



4-3 マテガイ化石



4-4 マテガイ化石



5 バイ化石

図版17



6 チヂワバイ化石



7 ムラサキガイ化石



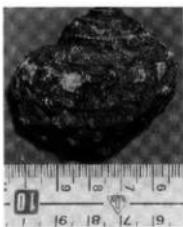
8 カキ化石



9 オウムガイ化石



10 タケノコガイ化石



11 サザエ化石



12 アワビ化石



13-1 ツメタガイ
化石



13-2 ツメタガイ
化石



13-3 ツメタガイ
化石



14 ブナ化石



15 生痕化石

岩殿山総合学術調査報告書

岩殿山の総合研究

—県史跡岩殿城跡、旧円通寺跡及び岩殿山の自然—

編 集 岩殿山総合学術調査会

〒406-0032 山梨県東八代郡石和町四日市場1566

帝京大学山梨文化財研究所内

TEL 055-263-6441

発 行 山梨県大月市教育委員会

〒401-0013 山梨県大月市大月2-6-20

TEL 0554-22-2111

発行日 1998年3月30日

印 刷 フジエンドレス

山梨県大月市

岩殿城跡現況図

岩殿城跡現況図



